

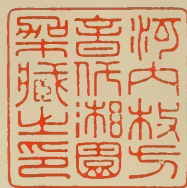
PL Shin gunsho ruiju
755
.35
S5
v.10

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

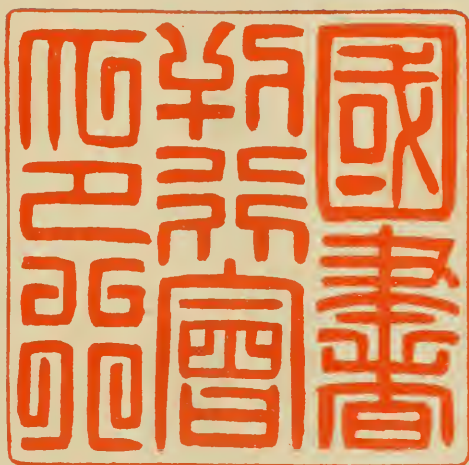
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY





新
群
書
類
從
第
十

PL
755
.35
S5
v.10



狂歌は我邦文學の一大分科にして、古くは和歌の一體なりしが、足利氏末葉の頃よりして漸く別立せんとするの勢を示し、徳川氏の時に至りては、終に和歌俳諧と共に詞壇を三分して其の一を有つの狀をなせり。卜養未得の徒、信海貞柳の輩の起るに及んで、枝葉漸く茂盛し、蜀山菅江橘洲飯盛金埒岡持等の出づるに至つて、琪花瑤葩一時に煥發するの觀あり。眞顔菅根等以下、風體また變じ、懸泉の下流、竟に波恬瀾靜に歸し、而して後狂歌復振はず。然りと雖も、曉月坊雄長老等より、降つて明治に至るまで、其間數百年滔々として流れて盡きざる狂歌の一派、また長遠なりと云ふ可し。本卷収むるところ部を分つ三。曰く總集、曰く別集、曰く雜。總集先づ古今夷曲集を採る。古今夷曲集は生白堂行風の撰するところにかゝり、寛文五年に成る。狂歌の撰、蓋し此を以て嚆矢とす。次に後撰夷曲集を採る。此

亦行風の撰するところ、古今夷曲集と共に、當時狂歌の馬群を空しうするものなり。次に天明三年四方赤良等撰するところの萬載狂歌集、天明四年朱樂菅江四方赤良等撰するところの狂言鶯蛙集、即ち故湊馬鹿集、天明五年四方赤良等撰するところの徳和歌後萬載集、天明七年四方赤良等撰するところの才藏集、及びやゝ降りて文化七年完成するところの宿屋飯盛が撰にかゝる萬代狂歌集を収めんと欲す。たゞ萬載集及び才藏集は近者名著文庫の収録する所となり、萬代集は卷帙過豊なるを以て之を省く。此等皆京阪の狂歌と系統を異にせる江戸狂歌の高潮たる所謂天明調の代表たるべきものなり。別集は慶安年中石田未得が著すところの吾吟我集、寛文中半井卜養著はすところの卜養狂歌集、元祿元年を以て死したる寶藏坊信海詠ずるところの鳩杖集、信海の弟子永田貞柳の貞柳家土産、享和二年に成れる小島橘洲の醉竹集、石川雅望即ち宿屋飯

盛が六樹園家集、山崎景貫即ち朱樂菅江が朱樂館家集、大坂屋甚兵衛即ち馬場金埒が滄洲樓家集を収む。此等の中、六樹園、朱樂館、滄洲樓三家の集は世に成書有るにあらず、實に友人野崎左文子が手録にかゝり、猶未だ人に示すに足らずとして子の固辭するを強ひて公にせるなり。天明各家の集を収むるに當りて太田覃即ち蜀山人の集を収めざるは、其の愚なること唐詩を錄して李杜を遺るゝに同じけれども、千紫萬紅及び萬紅千紫は、流布周洽、家藏戶壽に近きを以て特に之を省けり。文化十一年に成れる平澤平角即ち手柄岡持が家集我おもしろも亦流布甚だ廣きを以て取らず。北川嘉兵衛即ち狂歌堂眞顔の蘆荻集は之を収むるを欲せざるにあらざるも卷數多きに過ぐるを以て収むる能はずして省けり。雜部収むるところ曉月坊詠ずるところとして傳ふる酒百首、蜀山人のめでた百首、金埒の仙臺百首、蔦唐丸が催せる百鬼夜狂、飯盛が判せる飲食狂

歌合等六種を併せて三部通計十七種、未だ必らずしも狂歌の鱗羽を網羅し盡さずと雖も、蓋し既に龍鳳を逸せざるに近し。此卷希觀の書を刊せずして、敢て鳴世の著を輯むるものは明治以降古籍の新刻甚だ多しと雖も、未だ嘗て狂歌の書を輯刊せるものあるを聞かざれば、先づ其の殘山剩水を顧みずして五嶽四瀆を談ぜん欲するが爲のみ。

戊申暮春

幸田露伴識

新群書類從第十目次

狂歌

古今夷曲集	一
後撰夷曲集	七七
狂言鶯蛙集	一八九
德和歌後萬載集	二六一
吾吟我集	三一九
卜養狂歌集	三五八
狂歌鳩杖集	三八四
家土產	三九六
狂歌醉竹集	四一一

六樹園家集

四四四

朱樂館家集

四六一

滄洲樓家集

四七三

狂歌酒百首

四八一

めでた百首夷歌

四八六

仙臺百首

四九三

夷歌百鬼夜狂

五〇一

飲食狂歌合

五一四

新群書類從第十

狂歌

古今夷曲集序

四角柱やかざらしや角のないこそ
そゝひよけれむかしゝいふに
いへぬ物の中より丸きものゝ一つ
おいて二つになり三つになりし時
より夷曲歌は始れりけりひまわりうた 今狂歌といふなるべし
歌は人の心を種としてこの葉し
げりそふものなれば只情の丸いが
よいとなり先天照太神の御宮居あきつてらすおほなりみ
は丸木をもて造れり諸々の御社に
も鏡をかけらるゝは丸うて空うて
よろづ直に移るを見せしめたまふ

なるべし我國は國津神の御國なれ
ば春の神をむかふるにも鏡餅とて
第一丸きをぞ用ふなる草のもち粽
なごいふは有爲の色相を顯はすな
らん任地花の香に馴し衣を返し
單も拾のうら盆になればおのこ童
は山寺の御兒縮折から攝待の茶筌
髪にゆひなしともごちこよとて小
手招くしかも明衣の廣袖を着未通
女らは鬢の髪ちひみの短ぬの嶋田わけ夕
風の吹返しにゆひていざおごろと
いふより手拍子とり足どりする十
五夜の月の輪の如くにこそはをぞ
れ小夜風に行かふ袖の移り香は浮
たる戀のしるべにてしのゝ小篠の
しのびゝにひよりいつしか
睦しき中となり末の松山さゝら波
はこすとも誓ひ戯るゝあまりに
あ一本方一本めの御のさへ女がゆくゝおめ
もとの入しほはしやうやうれをそちが

報いふふてなにせうぞなご左禮されが實に
なりあは緒も今は片糸の此方彼方
に引別るゝを妹背山の中に芳野の
川のよしやといへど印南野のいな
といふ諫むるに猶口舌たらゝなり
りければそちも斷りこちも然なり
と蠟虎ろうこの皮のやうにもてなすを諸
共にそこほゝるめはさればこそ思
ふ中の小園諍詞の花をちらすのみ
根葉はあらじ先盃をさすが石木に
あられ酒心よはくもの跡をばえ申
まいしやんどさゝせられよと女か
たへ戻させこれより五百八十年と
祝ふを丸うなつたといひ一國一家
のわれて齋ふるも又々かくいふべ
しまいて佛の道には丸の中に心と
いふ文字を書て身の一大事を觀し
知るとなれどこちやしらぬ生死山
の蛭か知た生死抑心を丸うするに
は和歌にしくはなしとさきげぞその

様優ならんとすれば心たらずゑん
なるは頼のたはれおのたはれ過つ
よきは片田舎の者の物いふに似て
なつかしげなく鑢きんば石より堅く頭
をふりあふぎみれば須彌すみの山より
高しとなればくれだる後等の學ば
んには水の月を望める獸にことな
らざるべしさらば鉋かんをもてやまは
さん小刀にてや削りなさんあらす
形なき心なればさは徒なるべしい
なかにも狂歌をもてあそびね此歌
久堅の天にしては下照姫に始れり
しを荒鐵の地にしてはすさのおの
尊三十文字あまり一もじによみた
まひてぞ和歌となれりけるしかは
あれども人の代となりても聖徳太
子此様を給給はざりけらしいはく
釋氏に西方の教をのべ聖の道に不
屑のいさめあるがごとくなるべし
それより後は文字の數和歌を移す

物から猶しれたることのみもてつ
づくるとはいへど折にふれ事に望
てまれ／＼よめりしをきぶき數寄
者ら出來て近き代よりぞ百首二百
首百首に及びてはよみけるそれが
中其外こゝらの人のよめるにもあ
またの病を除かず上下かけあはざ
るおほかり狂歌とて詞こそまけて
もいはめ心は正しう身を修め國を
治め爰を得彼所をしる業なればい
かで妄がはしきをよしとせん思ふ
に心正しからぬは他を損ひ身を亡
なふ佞人にひとしく病あり上下か
けあはざるは旨ひ虵ひ腰曲み足た
たずなどやうの片輪者に同じかる
べけれと和歌の例をもて四病八病
を禁る中に一際いひかなへたらん
歌に輕き病はゆるす方もぞ有ける
又昔し今に落書といふには勝れた
る作もあれどかれは世を諷し人を

誇りあるまじを物なれば是に載る
事なし古くき／＼今みる歌にも事の
情齋り笑種ならんを撰びあつむと
はすれど末の卷にいたりては尺八
竹の一よのみならず三世の佛の理
もあれば巫のすゝろごとならね
ど詞こはく和歌にはいかにぞき
こゆるをまじうる事になりぬ是お
となびたる人の爲にはあつす童
べの殿のお尻からぎよの口遊くまひを狂
歌にいひかふるたよりにもとて
千歌十卷なづけて古今夷曲集とい
ふ物みな其本に還るわざなればむ
かしをたてる名なりけらしかく
てよい春や若うならせられたと詞
に花を飾りいふより本尊かけた
かの鳥の聲をまち紅葉を折て簪に
もし酒の爛をもし雪女ふらいふら
いふる妻いとしなど戯れ春夏秋冬
にいらぬ草木のえもえしらぬたは

こといひてあそぶもかしこき君の御恵み八嶋の外までの家々の諺或は頤臍の下にさがり肩は頂の上のほりたるやうの唐の大和の異様なる詞おさあいをあひや手打川水の阿頼いな舟の棹頭々々土佐の手甲大和の元興寺に隠期なごやうの事をもてつらねかいちらするを見る人聞人割ぐるよりも可笑がり咄と笑ふに罪をうしなへば自づから情の丸うなるべきよすがなるべし莊周がいへる菓三つ四つの跡先を諍ひ狼のをろしき頬をなし羊のあゆみの近づくをもしらぬたぐひの人は己が迷ひに情を奪はれ求むとも笑ふによしなかるべしあめにます大黒の能をきくに一に俵をふまへ二につこと笑ひ三に三界の福珠を袋いづばいにいれお顔の色のくろうなるまでもてありき笑

ふ家には必ず來りて福をあたへ給ふ是にも三郎惠美須殿お前の海の鹽のめをし常にめでたいを抱ひて信ある者には給んとなり是を見彼をきくに機嫌よう笑ふが即ち福德なり菩提なる事をしれど寛文五年十月一日にしるし終りぬる行風が身のをろかなるをもわすれ後の嘲りを顧みずといへどもこれを好まんとものゝ爲にはいさゝかのたつきともなるべければなにはのよしあしのふしゝ眞薦草のかりにも翫び猶形にそへる影法師の如く身をはなたすなれゆかばをかしき色の情にぞみつゝ夷歌どきくに笑ふなかたちともなれどなり梅どいへば口に酢たまり若參の咄しには顔をしかむるなれば十王の口澄だ貌天狗のはなたかう慢するものも此歌をきゝもしよみもせば阿々々どこ

そあらずとも屈々とは云べし現在の果にてきしかたゆくすゑをしるといへば此わざを忘れず今より終の夕べまでも腹たてずの正直坊笑ふのみならば情の角菱の病ひひしひしと癒え眞丸になりなん後仁仁といふこゝろを持樂に用ゐば彼笑ひ佛とやらんにならざらめかも

古今夷曲集卷第一

春歌

ふる年に春立ける日詠る

源重秀朝臣

本歌アリ
年の内の春の小袖は一しほの

浅黄とやせんこ染とやせん

春たちける日よみ侍りし

行風

山眉にかすみをひきて腰すそも

優なる春の立ちすがたかな

義綱

立そむる霞の衣のはつれ雪

春のきにける紋所かも

正長

たばこのむ内より春は來にけらし

烟もかすむはなのさきかな

本歌
春のはしめの歌 哥慶

春たつといふばかりにや大ぶくの

うづ
水氣も霞て今朝は見ゆらん

満永

ちはやふる茶筌もけさは改まり

たつ大ぶくの神のはるかな

入安

春くれば色も花香も別儀にて

宿の大ぶくたつかすみかな

春房

釣棹のたけ高からん一節を

こゝろにねがふ和歌夷振なみずり

一休和尚

餅つかすしめかざりせず松たてず

かゝる家にも正月はきつ

行安

きのふ迄以の外にさぶ六の

十八公の門のはるけさ

由貞

去年までの貧報かみこぬき捨て

春きにけりなふくの上下

宜齋

目出度といへばめでたいと言こそ

口眞似こまね正月のれい

次良

臈太に雑糞をくらふ人はたゞ

腹のはるにや春をしるらん

燕石

もろ人もけふ赤子にやなりぬらん

むつきをしきの始と祝へば

保友

本歌
年こえて花のかゝみとなる餅は

微かゝるをや曇るといふらん

頼智

本歌
誰をかも仕手脇にせん高砂の

松囃子する友あまたなり

元日の霞をよめる 如風尼

九重もはるの霞のあみの目に

風たまりてやけふ長閑なり

酉年の元日によめる

行景

水は本へ返辨申し酒の字の

作りをさりの年ぞきにける

百首歌の中に子日 玄 康

女松をば子日の友にひかれなば

陰囊なしとて笑はれやせん

霞 貞 徳

賦むきそうで奇麗なものは歌人の

口にかゝれる山のは霞

題しらす 法心上人

足なくて雲のはしるもあやしきに

何をふまへてかすみ立らん

百首歌の中に鶯 玄 康

法華經ぞ小鳥の中でうぐひすは

最第一のはつ音なりけり

貞 徳

錢かねでねをさすならば鶯の

ほう法華經も一ふ八くわん

行 安

はそとと鳴鶯の初音には

朝どうまるも及ばざりけり

宗 俊

梅かえはそなたのえてむ樂そうに

口笛なるかやよやうくひす

若菜のうた 來 焉

籠を手に提つかゝへつ名にめてゝ

鶯菜をやつみて入らん

百首歌の中に 入 安

よもすから叩くは唐土の鳥ならで

日本の人のくひななりけり

懸想文をよめる 貞 徳

いふ事をきけば腹いたむくくど

臍の下までけさう文かな

万歳をよめる 不 白

万歳の祝ひとならば錢の數

八百八十四文やれかし

百首歌の中に殘雪 貞 徳

年男あふて日數もたゝざるに

はやくもとける雪女かな

宣 相

いたいきに尾にまた雪のむら消は

絞ぎり毛のやうな生駒山かな

來 焉

ちよこくと澤邊に残る雪はたゝ

まつしら鶯がすくんだと見る

春日野はけふもなやきそ嫁がはぎ

本歌

まだ雪しるの妻にこもれる

題しらす 忠 精

春の日にかしらの雪げ落はてゝ

只はげ山となるうたてさよ

梅花をよみ侍りし 行 風

色に出て見ゆる女の智恵のみか

梅も諸木のはなのさきなり

百首歌の中に梅をよめる

雄長老

しう殿の秘藏の梅をかいたらば

氣條きじょうの先ではなやつくべき

宗 恒

秘藏せし花を一枝こうばいの

色にあか手の皮もするなり

柳のもとに梅の咲けるを見て

行風

春の日のたきものらしい梅か香を

柳の髪にとむる風の手

百首歌の中に柳 雄長老

^{本歌}櫻にはあらぬはるべをこきませて

枝をたれたるはこ柳かな

満永

俄にもあち東風と吹く風の手に

ひきとつらるゝ柳髪かな

題しらす 久清

春の日に蔓る木々の枝ごとに

めはなはあれど耳なしの山

百首歌の中に早蕨

淡路守宗増

山際に左義長をせし跡とめて

わらびそろゝもえ出にけり

春月 一圃

臙なは猶もあぢよきもち月と

おもひつかするうす霞かな

久清

照影も臙ばろゝふるあめに

笠をめしぬる春のつきかな

百首歌の中に春雨 入安

なになりとこのめ春雨つれゝと

振舞はたゞとにもかくにも

雄長老

春雨の風にしたがふかいだうの

しるくなれ共早かはきけり

足にあかりといふ物ありて

春もいへざりければよめる

あかがりも春は越路へかへれかし

冬こそ足のうらにありとも

或人のいはく猿丸太夫が歌なり

春草 行順

たむぼゝの花のちゝつと咲頃の

野山はやしはおもしろいなふ

小米花 未得

それは杵是は木の根にこぼれけり

小米の花の風にくだけて

沉丁花

竹垣を霞のきぬのふせごにて

匂ひをとむる沉丁花かな

花見の袖のつとふを見て

保友

^{本歌}見渡せば柳櫻にみやこ衆

だてこきませて行く東やま

題しらす 教二

立よらば大木のかけの花見せん

咲ちるほごに余計ありやと

見花 春清

兒櫻や立て見居てみねて見ても

猶変らしきはなのかほばせ

一圃

をだ巻のくるりゝとくりかへし

みめぐりめぐる花車かな

本願寺二所の庭の花を見てよ

める 宗恒

六條の染物ならぬさくらにも

おもてうらある花のいろゝ

芳野の花見に出たつ道にてよ

める

教二

晝食はくはすとゆかんみ吉野の

花のしたにてうえ死ぬることも

名所花

保友

櫻はな見るめについてはなれぬは

芳野うるしのあれば也けり

行風

こつきよし色は猶よし匂ひよし

己上みよしのゝ花の勘定

道明

葛城や天狗のはなのそれならで

によつと高間の嶺に見えたり

行安

いつとてもよう來たごだに仰ぬは

をしほのはなで人やあしらふ

糸櫻

一圃

わけもなく只わくゝと結ぼれし

氣も打とくるいとさくら哉

姥櫻

見はれてはたちもえさらす花故に

腰ぬけとなる姥さくらかな

貞徳

白壁をつけたる宿庭にさく

花は豆腐のうば櫻かな

揚貴妃の名ある櫻を見て

貞清親王

揚貴妃の花のかほよしさそなく

天のなしたるさくら色なり

満永

一面に咲つゝきは春の日の

長屋つくりの家さくらなり

せわしくも小枝かさなる軒口は

めとはなつきな家さくら哉

花下の酒宴によめる

三哲

鹽竈の花見の酒のさかなには

櫻鯛をや濱やきにせん

ちいさき花の木の枝を折れる

を見てよめる

古生

兒櫻のよろひはあれど頗當を

もたでやはなのさを切るゝ

依花恨風

行風

どもすれば花の顔さへ打ちらす

風の手くせをなほしてし哉

題しらす

宗恒

さかな舞の扇子の風もいやで候

今をさかりの花見酒には

落花をよめる

忠精

櫻はな散しく庭をはきありく

雪踏の皮に波そかゝれる

題しらす

よみ人しらす

櫃川のはたに生ひたるかば櫻

ちるもそ花のとぢめ也ける

岡部氏内膳正館にて鯛の料理

ありけるに

重頼

本歌 雁の汁きくの酒のむ秋はあれど

春の海邊に濱やきの鯛

櫻鯛

藤原言總卿

上下にもてはやしつゝあちはふや

花も實もあるさくら鯛とて

近江鮒 正 繼

さゝ波やしがからし酢でくふ時は
たれが口にもあふみ鮒かな

本歌 題しらす 淨 久

丹波山毬栗にじる秋はあれど

住吉うらの春のはまくり

歸雁 宗 明

たはけども中／＼いはじ明る夜の

花を見捨てかへるがんかり

行 安

名残をしく思ひまひらせ候可くを

かなに書ても歸るかりがね

教 二

歸るまに古郷の花のちりたらは

あちらこちらですつかりぞせん

百首歌の中に春駒 玄 康

乗どめてすもしてまし春駒の

へうたんからや井手の玉川

苗代 貞 徳

みな口をよく／＼まつれ秋くれば

人の命をつなく苗代

蛙 滿 永

水にすむ蛙かうたをよくきけば

とかく卑下なり愚意／＼と言

未 得

くちなはの追手からめて取まけば

かはつ軍のにげ道もなし

遠江守源經行

苗代をおとせる水に落ゆくは

軍に下手のかはつなるへし

百首歌の中に杜若 雄長老

水でとくにかはのあやめ杜若

にたりや似たりにためきにけり

躑躅 未 得

咲く花の顔は上戸の色なから

名は下戸のすくもちつゝじ哉

欸冬 藤原秀直朝臣

咲出し八重山吹のまつ黄なる

色も甲州一步なりけり

題しらす 重 安

やかすとも草の餅ぞは春日野の

春なくさみにもたせたらなん

三月三日 行 榮

白に粉も蓬も入て杵をとり

つく音も先がたひしの餅

行 風

御祝ひによりき家の子あつまりて

つくやくふ也ござくさの餅

一 圃

酌人のこぼるゝはかりもるにこそ

はや置たまへもゝ桃の酒

宗 恒

鮎の子のわきてなかるゝ泉川

いづみ酢にての料理床しき

百首歌の中に藤花 入 安

大臣のゆかりの色かむらさきの

藤浪ななき花のふさいき

雄長老

まごひつゝ藤にしたゝか締られて

難儀そうなる松ふぐりかな

貞徳

紫のふごしに似たりふちのはな

松のふくりを咲てつゝめは

淨久

見るに日は西へねぢれど藤の花

じきになるやらひたるさもなし

池邊の藤を月出るまでなかも

をりて 友以

池水にひかめく月はしら藤の

棚から落てぬれ鼠かな

暮春 重故

春は猶ゆるりくわんすの煎じ茶の

にへ花をのみあそび暮らせり

百首歌の中に三月盡

玄康

三春の約束よとて來りしも

けふつきてこそ歸る也けれ

雄長老

春の日は長鏈なからさゝのはの

一よばかりになれる石築

淡路守宗増

くどくどするまに春はつき弓の

矢をいるやうに日は立にけり

古今夷曲集卷第二

夏歌

百首歌の中に更衣 入安

ぬぎて今日かへすゝも耻かしや

花みるほどの借衣のそで

雄長老

めをこ中に只二つもつころもをは

かへあひて今日筈やあはせん

卯花

月出るその方角も卯の花の

東しらみに夜は明にけり

貞徳

卯の花はごこからふれる白雪と

空に不審の雲や立つらん

葵

ふかゝと葵の上に置く露や

御息所のなみだなるらん

待郭公

こなたより御本尊かけて申へし
うそにはまたぬやよ時鳥

淡路守宗増

明暮やあらをそしとてまつの戸に
ほとゝきすにてすねてこぬかも

保友

郭公えきかでやあらうの花の

しらりと夜をそ待あかしぬる

休和

時鳥口なしはらの名におひて

なかぬやじやうのこわた山邊

聞子規 淨久

ひとり居によつほとゝきす音信の

聲聞くときぞ氣は散じける

宗鋪

狂言詞
やるまいそやるまいものを時鳥

きいたかゝか今のひと聲

淨治

時鳥宮根うつぎになく聲を

聞てわすれぬ地獄耳かな

愛宕の坂にて馬の沓を見れば
福なるよし人の語る折しも時

鳥の鳴ければ 一幸

耳のびくよきはあたごのひと聲を

きゝぬる馬の沓手鳥かな

梢に蟬の鳴折しも時鳥を聞て

満永

蜀魂空に本尊をかけたれば

蟬の經をもなほたかうよめ

百首歌の中に盧橘 雄長老

禁庭の花さへ木さへみえねども

風薫り來るたちはなの圖司

貞徳

陳皮にはならぬさきより立花の

にはひをきくそ氣の藥なる

早苗 宗増

早乙久の骨を折つゝうへゝの

地頭へ米はこるさなへかな

五月五日珍客來れるに粽を出

して挨拶に 行安

今日ことに聞食れよ御壽命の
數もやちたひもゝちまきをば

久清

印地にし深入しつゝ深手をは

負ふはふかくな深草の者

五月五日雨降ければ

左衛門督藤原義景

風の手の礫のやうにうち散らす

雨こそ今日のそら印地なれ

笋をよめる 久清

竹の子や庖瘡するところからん

絶えず雀の羽風あつれば

五月雨 満永

五月雨に降こめられてきがくさり

かしらいたやの煩ひとなる

照射 貞徳

的よりもこもしの影にどんで行く

鹿の子の星やゐにくかるらん

百首の歌の中に螢 玄康

童口遊詞
猿の尻はまつかいなれば螢火も

昔よりかう有ぞしつらん

入 安

若衆を思ひのたまかほたる火の
むねはこかれて尻ぞこかるゝ

宗 増

白露の玉藻の前が亡魂か

螢も身よりひかりはなてり

法橋由巳

やぎをかといはぬばかりそ飛螢

よるにしなければ是も火尻は

高野にてよめる 成 安

火て候かいや火にあらず高野山

谷三つこえて螢さぶなり

蟬 春 房

帆柱にこれも見よとや船岡の

山の梢にせみがとりつく

鮎 永 満 永

つくりしも河の瀬ごしの鮎なれば

生酢をもまたあさらにぞもる

鮎料理の座にてかゝる鮎もか

なごいふ人のあるを聞いて

是 急

^{本歌}鮎くての後の心にくらふれば

むかしは鮎もおもはざりけり

題しらす 教 二

効人もはこびし人もつく人も

ふとしのみなるはたか麥かな

夏草花

結句そちに人くさいとや嗅ぬらん

香をかぎよりし鬼百合の花

淨 治

^{本歌}名にめてゝ折ぬはかりそ鬼あざみ

我おちにきと人にかたるな

行 風

野にたてり夜風ひきてや撫子の

はなたれたりと見ゆる朝露

正 信

枯さうな富士なてし子を育てんと

水汲かくるたごのうらが身

下野國奈須野にてよめる

知 度

風の手もさえなおそろし處がら

あたをなすのゝ石の竹にや

題しらす 西行上人

撫子のませにぞはへるあこだふり

同じつらなる名をしたひつゝ

瓜作れる人の挨拶に

高 壽

名をしたひこむせつぶりの雨露か

梵大瓜ぞようそたつなる

題しらす 未 得

ねちつけていざや契らん己れとは

またおちそうもなき小姫瓜

題しらす 宗 鋪

あさ瓜をはやしてくへば喉笛も

ひやりくゝとなりにける哉

題しらす みとく

をのつから茄子の色を紫の

ふくさにつゝむ茶人ぞぞ見る

讀人しらす

本歌

なとて角はや年よりになりになにけん
水なすびぞどむしりしものを

玖也

長らへて何をなすびの畑に生ふる

若きをこそは人もちきらめ

津國今宮わたりに干瓢といへ

るものを老若わかたすこしら

へけるを見て

利忠

本歌
春植て夏むきけらし白妙の

かんへう干なり尼もかゝらも

蚤

道明

身の皮もほりぬくやうに痛むるは

是や大苦ののみの虫なる

本歌

題しらす

宗恒

蚤よりも蚊こそうたてく思ほゆれ

たれか破りし此紙帳ども

蚊

宗朋

罪あるもあらぬ人をもいきなから

鬼はかほごによもや喰べき

題しらす

一根

本歌

我きても久しく破れぬ惟子は
姫がよみをやおほくいれけん

久清

本歌

こい捨う我惟子の水いろは

ひとしほごこそ思ひそめしに

津國福島に雀鰯といふ其處の

名物なりけるをよめる

親之

數おほふ江鰯のうろこ福しまの

人は仕馴ていすゝめ鰯

宗鋪

青たてもそへてはなさん羽なくて

飛はごうまき雀すしとは

未得

精舎には諸行無常となるかねの

しやがりしきりに替る祇園會

行風

ひいてくるとみれば過行く山鉾よ

是や祇園の會者定離なる

炎天

是急

寒よりも百倍あつき炎天は

身にきるものゝわたくしで無

泉

みとく

夏の日の暑氣をはらふいづみこそ

手にむすぶてふ水の印なれ

貞徳

賣ためて錢口おほく結ぶべし

是はと酒がいつみなりせば

題しらす

淡路守宗増

座頭衆すゝみとなれば酒盛の

てうしを請て平家かたれり

百首の歌の中に

前大僧正慈圓

しつの女も大路井筒に夕涼み

ふるかたびらの汗洗ひして

蓮

むねます

花瓶にもさすてふ花ぞ聞しより

はちすを見れば嘘ぞふかるゝ

種好

雨かへる蓮華にひよつと乗たれは

生佛こや是もいはまし

荒和稜

未得

貧報の神もなこむや借錢は

今日みな月の晦日ばらへに

淡路守宗増

来る秋と夏は過ぎ行きさかひめの

まん中臣のはらひするなり

古今夷曲集卷第三

秋歌

百首歌の中に秋たつ心を

貞徳

涼しさを巻籠て来る文づきは

一葉の風のちらし書なり

入安

本歌
秋きぬとめには見へねどひく風の

しはぶく聲におそろかれぬる

七夕

雄長老

盆またて聖靈まつるたなはたに

むくる時宗の尼の川水

初秋月

行風

御簾こしになかめまゐらせ候は

只文月の透うつしなり

猫のため盃蘭盆會まうけゝる

人を見てよめる 休甫

猫脚のぼんたてにする功德茶の

哀れになぐるくび玉まつり

踊

久清

雨の手をふりつゝ拍子打つ時は

あふきを腰にさしをとり哉

行風

出たちはどれもあさ衣あさくこ

淺黄にそめてきを踊りかな

源雅純朝臣

見るに聞くに程拍子よや振のよや

うたも上手や小町をどりの

未得

かけられてあふむ返しに来るこそ

小町をどりの歌のさまなれ

近吉

はやしぬる踊の庭に燈籠を

ごもして持もこきり子ぞかし

をどりの拍子揃はずして見る

人わろ口いふによめる

ていぞく

わる口を悪きをどりにいふことは

先笛吹におひやひつこめ

津國福嶋といふ處にて踊にを

のこも女も群集する 見て

行 安

秋風のふく島人のをぐるさて

すいめ鯨ほごあつまりにけり

相撲 器 音

本歌

笑種ことはにかゝるまけ相撲

たま／＼出ては手をもえ取らず

相撲にまけぬる方いなひける

を見てよめる みつなか

かつにのり手ざるに足を取れつゝ

肩けぬる方ややすまふといふ

百首歌の中に女郎花

入 安

秋の野に露おもくさの女郎花

色はにきびか栗のむせるか

休 甫

色をみなへしてとはねど飯にむす

粟つぶはごも替らざりけり

百首歌のなかに薄 雄長老

招きよせて化さんどてや秋の野に

ふれる狐の尾花なるらん

ていこく

落武者のをつるも道理薄の穂

いり目を招く鈴に似たれば

薄を吃詞にてよめる

よみ人しらす

秋の野にかゝ風ふけるたゝたびに

たゝたれまねくはゝ初尾花

百首歌の中に蘭 貞 徳

くさきほど匂へば是や申らん

しまにんにくの蘭とも

雄長老

藤袴もゝたち活さごりもせで

裾野をくたり露にぬれつゝ

權

花の露も日影うつれは蛭に鹽

ひるはしほ／＼となれる朝貌

玄 康

朝酒をおほく吞 ばくるゝまで

只是權花一日の酔

色鳥 少將藤原秀宗

渡り来る數も限らず一つれに

二十三四十からかな

題しらす 保 友

よりあひて山から日から四十から

から／＼／＼と笑ふみ／＼づく

夜更て鶉の鳴けをきゝてよめ

る 權大僧都心敏

秋の夜のくわいと更つゝ更りしは

夢かうつゝかうつらにて候

鳴 未 得

羽かきの數を所作にやむば鳴の

看經をするあかつきの聲

百首歌の中に松虫

法橋山已

本歌

墓原に人まつ虫のこゑすなり

我がと行てとふこともいや

ていこく

たぎらす茶の湯のろちの下草に

りんくくと鳴く松むしの聲

淨 治

草むらにむさとな鳴そくつわ虫

野飼の馬のはむこともあり

やすども

鷹犬の鈴虫馬のくつわむし

鳴野や殿の狩場なるらん

月 行 風

月にあそべ五尺にあまる身也ども

一寸先はやみのうき世ぞ

よみ人しらす

腰もとへ似たり金鏑さし出して

山のはすはに見ゆる月かな

友 知

大空を夜ありきしつゝあかせるは

月のかつらの男さかりか

未 得

まばらなる軒の穴より詠むれば

月の鼠も桁はしるなり

長 尊

三味線 音をおもへごとや風の手に

くもはちりてれてれる月影

月のもとの酒宴 三 政

世捨人かいや夜は捨す月の本の

酒にこゝろがうき藏司なり

對月明莫往事思といふ詩のこ

ころをよめる 藤原氏成卿

なかむれば顔のゑくほぞ皴となる

月の鼠がしほを引くかよ

月の夜目醫師のもとにてよめ

る 元 安

ねふたけも道にさめてよしみねや

只目くすりはあきのよの月

月を奴子詞にてよめる

よみ人しらす

片脇へつとそびけろうみたく無に

邪魔入り申す月のむらくも

名所芋 貞清親王

山城の美豆野の里の芋をほりて

いくたひ淀に賣りありくらん

あまたどもなひて或寺にまか

りけるに手作なりとて山芋料

理せられけるによめる

本歌 宗順法師

くてのみや人にかたらん山のいも

手毎にほりて家土産にせん

駒迎 未 得

信濃より本曾踊して引く駒の

まきぬる髪も茶筌やこのさ

本歌 參議大江秀元

相坂の關の清水をかいすぎは

風をやひかむ望月の駒

題しらす

そひあきし妹とはかはり見る度に

ものくさからぬこもち月かな

淨 久

望月を汝か箸にかけんとや

ほつかり口をあきの夜の空

八月十五夜 元 安

村雲のたちまちきれてさやかなる

秋の中ごのめいよなる月

行 安

詠めやる三五の月の光りには

二千里欲も忘れ果たり

名月の夜畑なる芋ぬすめるを

とらへければ盗人のよめる

月見よといもか子供のねいりたを

起しにきたは何かくるしき

河内國壺井といふ處にて月を

詠めをりてよめる 元 安

唐臼や壺井の中へかきいれて

たれ水さりの望月の影

八月十七夜八宮御所にて當座

に月の和歌よまさせ給ひみき

たまふ折から今霄の月を題に

えひすうたをとおほせければ

よみて奉り侍りし 行 風

望月の鼠がわれどかぶるやら

よべからちゝとはたのへり行

廿日月

未 得

詠むれば廿日鼠のをのづから

今宵の月のなりぞちいさき

百首歌の中に霧 雄長老

朝霧のきりの籬のかきのもを

とをり行人まるぬれにして

秋田

利 忠

本歌

秋の田をかるこにてもつ稻を重み

我きるものは汗にぬれつゝ

久 清

苧稻を菩薩といへばそれを負ふ

牛も大日如來なるべし

一 幸

本歌

百姓の稻こなすどてする臼の

音聞く時そ秋はかしまし

百首歌の中に擣衣 入 安

露木の葉きぬたの音もはらゝと

誰秋風におびえうつらん

貞 徳

槌の柄をしとゝ握りてふるさどに

うつは男をこひころもかな

玄 康

寺のうちにきぬたの音の聞ゆるは

彼の大黒のうつ槌やらん

百首歌の中に菊

淡路守宗増

壁に耳岩の物いふ事あれば

なにをかきかん我もはつかし

入 安

翁草花咲ころは露はらひ

たえずとふたり常にとふたり

菊を愛する人のもとにて

元 安

家主のよはひの程はちとせとの

菊の籬をゆいて見まらせよ

九月九日に 種 好

君か代にすんでとくりの菊の酒

くめば珍重陽てうれしき

正 定

本歌

いにしへのならのみやけの菊の酒

けふ九日のいはひにぞのむ

二 笑

ひらかざる菊のこゝろも節供ぞと

いはんしたばのつばみ口かな

十三夜

白晝上人

めのさやも大豆の莢をも外しつゝ

見くふぞ月を賞翫のかげ

同じ夜曇りければ 玄 貞

揃大豆のさやけき月のかげをとて

人の口べにかゝるむら雲

紅葉

三 政

立田山横すちかへもおしなべて

只一しきにもみちしてけり

東福寺にて

保 友

通天のもみちの色を兆殿司

書移しぬる繪の具とやみん

みどく

本歌
やよ時雨猶うはぬりをたのむぞや

また色薄きうるしもみちに

百首歌の中に

雄長老

朱をませて漆ぬるての紅葉ばも

先あき風にまけて散るらん

菓

未 得

けあけたる鞠の如くにぶらめきて

庭の梢にありやありのみ

梢の柿人のとり喰を見て

元 安

ほのくどあかみのついた筆柿を

もつ人丸でかふりこそすれ

九月盡

未 得

長月もつまりくゝて一寸の

光陰おしき今日の晦日

百首歌中に潤九月盡

淡路守宗増

花をみて他念なければ積善の

餘慶な秋もつくる菊月

古今夷曲集卷第四

冬歌

百首歌の中に初冬

淡路守宗増

昨日今日あら寒むやとて重ね着る

小袖そ冬の始めなりける

貞 徳

冬籠る垣ゆいつけん高塀の

蛛手かくなは十月になる

題しらす

雄長老

貧報の神も出雲へ行ならば

十月ごとに我は福人

常 林

本歌

村雨も時雨もいたくもるやねは

したや残らす水つきにけり

口切の茶の湯をよめる

久 清

霰釜しかくる爐にはをのつから

置ぬる炭も冬のいろかな

題しらす

名において數寄する人は無地ならぬ

かたつきの茶の小袖きにけり

亥の子餅に砂糖かけたるを見

て詠る 勝可

るのこにし鹿子またらのあかの餅

白きをみれば砂糖也けり

冬柳 淨治

朽葉さへちつとも見へぬ姥柳

楊枝にせずと杖にきれかし

寒蘆 未得

人ならば脚氣といはん霜枯に

おれふすあしの節もかなはず

題しらす 入安

身をつくし浪花の事もはたらけは

足もごさむくひにあれば行

寒夜によめる 宗也

寒き夜はいかなる歌もよみかへし

あまりかゝめは丸になる

氷

忠昌

今朝最早とつ坂本のあつこほり

山のひえたる夜風ゆるかも

河水 久清

わすれては白き氷を砂糖かと

思ひて口になめり川かな

百首歌の中に 入安

水うみの上こゝく張りにつけり

是や近江の二十四こほり

千鳥 ていごく

風次第あなたこなたに立さはぎ

波の音さへちどりかけかな

雄長老

餌さしめがちやくごさすへき棹河の

不用心にもなくちどりかな

むねます

ちりくやちりくにもや飛て行

はんま千鳥の友をよぶ聲

鷹狩 雄長老

攝家まで供奉する君か御狩場に

すへて出たる鷹司殿

一頼

鷹の鈴からりともいふ音きかは

驚のみの毛もよたつなるらん

みごく

名のみして膳にはするゑ箸鷹の

どりえぬるよりはや摺ひ喰ひ

或館にて鷹の鳥の料理給ひけ

るによめる 正信

鷹にぞられ殿の御汁になる時は

たうべる人の身もぬくめ鳥

百首歌の中に夜霞 入安

さらくあられん物か霞ふる

さゝのひとよもさゝを吞ずば

山雪 淡路守宗増

雪になる雲をほうしに打かふり

かしらもさぞな大ひえの山

尊純法親王

北山のかしらにかぶる雪綿や

寒もて寒をふせくなるべし

藤原親綱卿

草木も成佛せんごふすまゆき

かぶる座禪の床の山かな

奈良にて雪の降ける日よめる

行風

舍利ならぬ雪佛もぞはくしきに

むからかすがの御作なるべし

法印玄以

春日野の惟子雪はどこから

ならざりしとも言へかりけり

松雪を見て 智仁親王

松かえのかたひら雪のましろさは

十八かうのさらしなりけり

百首歌の中に 玄康

天神の御自愛なれば松にふる

雪のしら太夫と是も言へし

題しらす 來焉

三密の月くらきよは十丈も

つもれ九識の窓の白雪

百首歌の中に炭竈 入安

小野の奥雪ふみわけてかまもとの

すみをねぎれは結句これたか

百姓の身におはざるおこりを

なし公納米不足してけるを見

てよめる 中納言大江輝元

秋の田のかり米をなし奢りなし

年貢にわらや出す百姓

圍爐裏ぬりを見てよめる

貞徳

田樂をあふらん爲のいろりごと

先なまかべを附にけるかな

火桶 未得

抱て寐て寒さをふせく火桶こそ

かさねぬ夜着の妻とそふらめ

光知

あたるまの久しき程に炭の火も

どうとなりてや足のひゆらん

冬梅 みどく

雪の中にまつぬけ出て咲くはなは

梅のこたちや鞘はしるらん

西京八宮御所にて年のうちに

春立て又の日大雪降ければ當

座の和歌詠て奉りしに四方を

詞に雪の狂歌をもごおほせけ

れはかく申上侍し 行風

東より春はきたのに西の京

奥ある今日のゆきぞみなみよ

元行

東より春きたのちも西の京

狂歌に今日の雪の色をふ

百首歌の中に歳暮 入安

借ちらす木葉にあはぬ錢米の

味進も今日はくるゝ年かな

歳暮 恒貞

臆病と人はいふとも求めたし

おいくる年に送げん脇道

讀人しらす

酒のます餅をもつかぬみともには

年の一つも御免あれかし

長嘯子

いにさまに置みやけて眉の霜
かしらの雪をくるゝ年かな

尊朝法親王

年の矢のかぶらもたけて春はたゝ

障子一重のへたてなりけり

南歌

今日毎に嘉例はづさで一つ宛

老をもてきてくるゝ年かな

一本節分

坂東の俗除夜にいり大豆こし

らへる時やらくさやふんとい

へる言葉をもてよめる

ト養

鬼は外福は内へどうつ大豆の

當りてひるかやらくさやふん

百首歌の中に除夜 雄長老

鬼は内へ福をば外へいたすども

年のひとつもよらせずもかな

古今夷曲集卷第五

賀付神祇

元日祝

行風

二本つゝ日本の門のまつたけは

千年を千代の證據にやたつ

應其上人

書初をすゝりの水に鳩のうみは

つかひほすとも君か代の春

正月三日祝の心をよめる

貞徳

三日月の影ますやうに明日よりは

猶よからふといはふ春かな

祝ひのうた 利清

幾秋もかさね土器手にとりて

汲ともつきし菊の酒壺

節分によめる 道僖

君か代に上下万民もてはやす

大豆や千年の數に節分

祝歌

來焉

須彌ほごに積おく芥子を君か代の

千代に一つの數取にせん

器音

本歌
君か代はいく千代鶴の羽はゝきて

なつともつきぬ茶臼なるらん

雲居和尚

道にいる未繁昌のかゝみには

藤氏源氏の家を見てしれ

神祇

此集あみ侍るなかはにいつく

よりともしらす白衣のおのこ

のきて此歌も集にくはへたま

ひねといふいつかたよりと問

ひ侍るに我は鹿嶋のものなり

この御歌は明神の頃の御神託

也といひすてゝさり侍りぬ

一本に

霜柱氷のはりの雪のさす

雨のたる木の露の草ぶき

夢想の發句をひらくへき心侍

りける折柄によめる 宗 恒

本歌 願くは花のもとにて連歌せん

其二月の天神の日に

一本八幡の 神子化粧して神樂にたちまふ

を見て 久 清

山崎やせんけんたりし兩鬢を

油にひたす八幡の神子

月次の會にて 來 焉

祈る也苦衆にはあらず和歌の道に

冥加のからせ玉津島姫

題しらす 一 圃

めでたいに酒くむ人のにこゝと

笑ふ家には利をゑひす講

丹波杵の宮にて 元 理

つく事を守らせたまへきねの宮

米はもたすと連歌なりとも

ひちう吉備津宮にてよめる

法印玄旨

神はきねがならはしなれば先搗て

團子にしたききびつ宮哉

本歌 題しらす 器 音

あふみなるつくま祭の夜宮には

物うりさへやかづく鍋錢

筑紫安樂寺にてよめる

友 知

おほしめす處へひよつと飛梅は

まことに自由自在天神

題しらす 路 春

善光寺それにはあらずめくる日の

牛にひかれてまゐる天神

百首歌の中に 入 安

烏帽子きて神の御前にひだりをり

右をりしつゝ見ゆるはふりこ

題しらす 德 元

千早振神につかへてあらよねの

こぼれを拾ふつゝをねき哉

心あきらかならん事を神に祈

りて詠る 正 定

正直の神のちかひのかの字にし

濁をさいた身をいのるなり

氏神の祭りの日みきいたゝく

とてよめる 満 永

信あれば徳利にいるゝこのみきを

いたゝく度に手もあらひよね

題しらす

なまくさき戀をもいのる神なれば

御前でとるもみくじらぞかし

百首歌の中に 平時頼朝臣

神まゐりするとも心あくならば

利生はなくて罰やあたらん

古今夷曲集卷第六

離別付羈旅

本けこなりし者今は宮の御方
につかへ侍るか御所の御供し
て江戸へまるかごいふむまの
はなむけに 信海

さる間下らせたまふお江戸にて

仕合もよくのぼれ助四郎

小濱氏^{一本時}なにかし江戸へまから

れけるに足袋五足おくるにそ

へて 言當

東路へくたらせらるゝ此たびは

こそくさいにはやがて御上り

うとからぬ人の他國にまかる

に詠る 休甫

鐵炮の玉きはるまで悲しきは

はなしゝ人をはなしやる旅

出雲と讃岐へ使僧つかはす門

出に 信海

機嫌よく旅にいづもの門出に

さすがに祝ふ酒のさんしう

芳野の者今年え方なればとて

安藝の宮島へ賣買にまかりけ

る饞別 恒貞

出たらばさぞな仕合よしのより

今年は方もあきの宮じま

羈旅

題しらす 西行上人

七瀬川やせたる馬に水かへば

くせになるどてとをせとぞ言

未得

山城の本^{本歌}幡の里に馬はあれど

駄賃なき身はかちにてぞゆく

題しらす 行重

家もなき山路もてこしやき飯に

きるゝ命をむすびどめずや

近吉

相坂の關の清水で茶屋のかゝ^{本歌}

今やかすらん餅につく米

松本にてよめる 徳元

旅人の足手かけをしまつもとの

茶屋も千年とちぎる餅かな

石邊にてよめる 友以

里の名の石べをひるはくさつなる

姥がもちゐの過し人かも

熱田にて 正成

舟の上ゑはぬほごしものむ酒の

かんもあつたの浦に着ぬる

尾張のさかゐはしにて

藤原光廣卿

打わたす尾張の國のさかる橋

是やにかはのつぎめなるらん

赤坂にて 保友

出女か紅まへだれの赤坂の

あかぬ姿にとまる旅人

故郷の者文使に通るに途中に

て行きあひてよめる 正成

東より文箱もちて通る身に

逢ふて嬉しきふた河の宿

荒井舞坂にて

波のあらゐ船路なんなくこす上は

只何ことも思ふまひざか

袋井の宿にて大雨降ければ

信海

とゆ合羽ひつはるさめの籠なれば

番袋店のこゝちこそすれ

保友

行末も遠江路の旅がたな

^{一本}袋井をやかけ川の宿

佐夜の中山にて

読人しらす

旅衣たちぬる寺に茶はなうて

のみてこそ行けさゆの中山

宇津の山にて 未得

乗かけのつゝらをりして疲れたる

馬には沓をうつの山越え

飛鳥井殿鞠子の宿通たまひ

ける跡よりゆく折しも馬の沓

もごむるにねの高きなど不部

ごものいふを聞て

法印玄旨

鞠子川くつ音たかく聞ゆるに

あすかいたまへ先にありく

同じ河に大水出しを越るこて

よめる 歌慶

大水に渡るかゝりはのべあしや

ゑもんながしの鞠子河かな

みごく

^{一本}此歌ナシ 馬のあし四本かゝりによるなみの

沓音たかく越す鞠子川

百首歌の中に 玄康

^{一本}暮かゝり鞠子のやごのありければ

早く留りてくつろぎやせん

^{一本}江尻にて 題しらす 読人しらす

あなきたな江尻を出て行く人の

足からくだりかゝるはこねぢ

宗易

親しらず子知すなれどこゝにても

留守する妹が事をのみこそ

由井蒲原にてよめる

正成

のる駒ののがみをゆひて行々も

なつきてぞよきかん原の道

^{本歌}山中にてよめる 徳元

ごちこちのたつ木もしらぬ山中に

おぼつかなくも呼茶屋が^{一本}かゝ

かたびらの宿にて雨の降る日

よめる 読人しらす

しるき道ゆきゝの人のすそみれば

みなごろぞめの肩衡の宿

江戸に着てよめる 徳元

京と江戸兩道かくる武藏あぶみ

さすが駄賃はのるもうるさし

熊谷宿にて彼旅籠くふこてよ

める 読人しらす

たきたつるはたごの飯のあつ盛を

手にかけてくふ熊谷の宿

片瀬こしこへ懷島といふ處を
通るとてよめる

かたせより腰越とをる旅虱

ふどころ島やとまりなるらん

一本京へのぼるさて

或座頭關東より上りに上戸が

原といふ所にとまりしをいた

はれる大名より酒にそへ給へ

る歌

行暮て上戸が原を宿とせは

酒やこよひのあるじならまし

木曾路はつは坂といふ所にて

客僧にあひ暫くかたりて年は

いくつと尋ねけるに六十四と

いへりければ

宗也

客僧の年はと問へば六十四

はつは坂とは九々にあひたり

一本の

伊勢路のつゝら町といふ所に

て

ちかよし

しんこ馬に附たる荷さへ名におふや

ねちたる藤のつゝら町とは

へそ村といふ所にて

賤の女がつむげる糸によりて問は

所の名さへへそ村といふ

一本村

久保田といふ所にて雨のふる

りければ

によめる

雨ふりの夜道をゆかば旅人の

ふみかぶるへきくぼたまり水

沓掛にて

茂りたる庭の柳もかゝりよしと

立とまりける沓掛の茶屋

伊勢桑名の邊はし川あさけ日

なかといふ三ヶ村をよめる

西行上人

桑名よりくはで來たればはし川の

朝げはすぎて日ながにぞ思ふ

旅の歌

宣相

足引の山こへかぬるひるとばに

しんこ馬こそ床しかりけれ

百首の歌の中に

一本雄長老

草枕飯をはもたで椎の葉を

すくひ物にぞしたる麥の粉

世のことはざにより思はすひ

なに年をへけるに故郷を思ひ

て

行安

赤子もぞ今はかぶりをふるさどに

あはれあはいや手打するらん

百首歌の中に

入安

今はたゞ腿もこぶらもはりまがた

しかまのかちの旅の苦勞さ

西國へ罷り立日難波堀江をこ

ぎ出るよりまほにてとも船の

ならび行折により侍りし

行風

帆をかけてひいふうみつの浦風に

走りこくらや足はやく舟

海路旅のこゝろを

淡路守宗増

雲霧もはれものなればうみわたる

時分をみてぞをし出す船

舟中にて雨にあひて

宗也

宗也

あめざやの刀の小尻ぬらさんと

筥をくぐりて舟よばひする

西國にまかり下りけるによこ

波しきりにて人々舟にゑゝり

しによめる

皆人の舟にゑひたといふ事は

さかしほ風のふけば也けり

室の湊につきてよめる

宗因

一々にをしならへたる友舟の

十艘室のごまりにぞつく

但馬と因幡との境わくみとい

ふ所に雨ごまりしけりいと狭

き家なりければよめる

主従者たびにしあれば里の名の

居くみにしたるかりの宿哉

香椎の浦よりかへるさに舟を

遙なる干潟のさきをまはさせ

て多々良濱をあゆみ行とてよ

める

いにしへは爰にいもしの跡とめて

今も踏みるたゝらはま哉

題しらす

貞徳

思ふ子に旅をさせよといふことは

我かしてしらぬ親のことばか

古今夷曲集卷第七

戀歌

題しらす

民部少輔嘉隆

思ふ人の心つよきは重簾の

弓や八幡ひくにひかれす

百首歌の中に初戀 貞徳

戀に人腎虚するこそ道理なれ

見そめしにだに腰がぬくれは

職人歌合の中に韃師によせて

忍戀を 民部少輔嘉隆

忍ぶ夜の太刀やかたなの柄の間は

さやの中にも身をかくしてむ

百首歌の中に聞戀 入安

垣ごしにしゝする音のきこゆるは

彼十六になる人一本はる人やらん

玄康

音にさく耳の比丘尼にえあはぬは

熊野に祈る甲斐やなぎの葉

見戀

元 安

菩薩よりたうとき君の姿見る

目には佛もなかりける哉

百首歌の中に戀歌 入 安

古への貴妃かあらぬか我目には

そよや霓裳羽衣の小姫子

玄 康

海で水あぶる若衆の鹽尻を

見るに思ひはふじの山ほご

不見戀

貞 德

若衆もたゞ我しりの如くにて

みんどすれども見られざりけり

見不逢戀

元 安

見る度にいざ心氣の花むしろ

しくくゝなきて獨ねぞうき

百首歌の中に戀歌 入 安

若衆の面影にたつ空見れば

折あはれなるすばり星かな

戀の歌合の中に馬士の戀

民部少輔嘉隆

我思ふ君をのらせて東路の

果しなきまでおふて行かばや

尾張國笠寺によき兒ありと聞

てすきもの見むとて行けるに

かくれてければよめる

讀人しらす

兒みむささしてきたれば笠寺の

眠藏の隅にひつすへて置

題しらす

本歌

思ひより身うちの皺のいやましに

君に年をもよらせけるかな

三年戀ても難面かりければ

宗 朋

桃栗のみにやならへる戀の道

三年してもならぬつらさよ

立名戀

見さく

布ならぬ我名を白くいひさらす

あくたれものゝ口のさがなさ

戀の歌合の中に立名戀

久 清

鋸のめよりも名をばたてらるゝ

櫛のはもじな戀や君ゆる

同し中に船頭の戀

君とわれ情をかけつ帆をかけつ

波も名さかもたつ舟の上

大坂に助三といふもの虎助と

いへる少女を戀煩へる見て

保 友

祐成も助三も虎を思ふ人

それは大礮これは大坂

戀病をいやしてよと藥師に祈

る人を見て

本歌

こぬ人を松原通いなば堂

やくし參りに身もこがれつゝ

百首歌の中に不逢戀

雄長老

我戀は拍子もきかぬ下手鼓

あふことなしに味のわるさよ

不逢還戀

宗 朋

わか戀はまだ初心なる下手連歌

さしあひ有てもざるのみ哉

題しらす

貞因

夢になりと見るかゝと思ひねの

目さへまじくりあはぬ戀かな

橘諸光

たらしつゝこいひ角いひ云なびけ

君にちごのま逢よしもかな

職人歌合の中に

民部少輔嘉隆

わが戀はひとつもあはぬ足拍子

木履かたゝ草履かたゝ

双六よせて不逢戀 未得

一本此歌ナシ

よきめをどこひねがへども双六の

さいはひなくてあはぬ獨りね

職人戀歌合に桶工によせて

よしたか

君が顔うつしてほしや水桶の

わがおもふその心いつぱい

馬士戀をよめる

久清

心にはおもひますれど馬士の身で

君をちよとは得まをさず候

腕によせて戀の歌

よしたか

一本此歌ナシ

つれなくもさこそ思はんと思召

めしよせらるゝ夕ぐれもがな

博奕によせて行末を頼戀を

ひさきよ

同上

さいごにもふりぬる君が靡きなば

かるた結びの帶どきてねん

若衆によせて戀の歌

みどく

同上

若衆にかひなをひくもあづさ弓

はずちかへじの約束の爲め

題しらす

浄久

同上

かたべにのこいと仰の文みれば

ぞくゝしてぞ嬉しかりける

待夜蠟燭

空存

蠟燭のしんきりゝと來ぬ人の

あひづ待間に夜は更にけり

未得

一本此ヨリ以下九首ナシ

來ぬ人を待夜にこもす蠟そくの

おもひこがるゝしんの苦しさ

寄松待戀を

住吉のきしませぶりにねばふして

やにこき人はまつに氣の毒

難波わたりに尻無川といふに

よせて不來戀を 保友

尻なしの川とぞつゐにながれ出る

若衆こぬ夜の人のなみだは

來て不逢戀

みどく

鐵砲のたまゝきてもはなさぬは

結句おもひのたねか島かな

逢不解戀

よしたか

みす越におめにかゝるはゆがけして

かゆき所をかくこゝちかな

百首歌の中と初逢戀 雄長老

暫くはむなさわざしてじはゝと

ふるひ聲なる新まくら哉

入安

おそれてはじりゝ汗ぞ流れける

逢ふ夜はひえのお兒なれども
逢戀 正信

思ふ人をうるしの名にしあふ時は
満足せしめふたりぬるなり

行安

あふた夜に鳥よないたら元興寺の
鬼にかませよなれもひよこも

稀逢戀 正信

たまさかの君の御出をうれしかり

先いねころびさしまくらかな

烏帽子折の戀を 久清

折々にきてあふ君がおなさけは

一しはおんにきんの烏帽子や

題しらす 宗朋

終夜ないつ笑ひつかたるをぞ

うかれ鳥と人のいふべき

別戀 弘重

本歌
合せものはなれ物とはしりながら

猶うらいやな今朝のきぬく

片みにとあはせをときて一重にし

あちらこちらにどり別れぬる
題戀

つゝむかひ涙にくれて目がくさり
藥で終にあらはれをする

來焉

おもひ内にあれば色にや出なると
ふてこゝろより忍ぶともせず

未得

つゝめども外にもるゝは饅頭の

あんに相違の我ちぎりかな

懇切戀 伊貞

下女と下部味噌をすゝする痴話を

いはれん木の語らいならん

寄草紙戀 玄康

おもひきや日向の人にあひなれて

伊勢もの語りいねてせんとは

寄文戀 満永

世の中はかくこそよけれ痴話を

よみえぬ人もしんきなりけり

久清

墨色のうすきなさは曲なしと
讀む度ごとに腹をたて文

かきおくり君をなびけし玉章も
縁をむすぶのかみてこそあれ

職人歌合の中に鍛冶の戀のこ

ころを よしたか

おゆかしとさつと一筆我職の

ふいごの風のたよりもとめて

題しらす 正定

難面しとかきくときたる腰張の

うらみこと葉の花もじが部屋

君か方へゆかん門出にのむたばこ

煙よりなほたつはそいがみ

寄貝戀 みどく

あふ中も今ははなれてはまくりの

むきみより猶うき身なりけり

本歌
積戀 安明

つくはねの空より落る數よりも

戀をつもりておもふ小姫子

行風

今は只心もほれつ身もなへつ
中風に似たり戀のやまひは

重頼

本歌
今は只おもゆもたべぬとばかりを
おめにかゝりていふよしもがな

職人歌合の中に矢師戀

よしたか

かりそめに思ひそめはの矢の竹の

よゝにし君をためつすかめつ

同し歌合に秤師戀 久清

我よりもうはめな君にそふことの

慮外はさてもはかりかたしな

片思

休甫

君とわか中をあかさば挑灯に

釣鐘になふおもひ也けり

弘聖

何の因果めぐり車のわがかゝる

かたおもひめをするは物うし

變戀

玄康

手のうらをかへすことくな約束は

爪糞はともたのむかひなき

みどく

契り置くこと葉質をやながすらん

あふうけこひの日切のばすは

題しらす

思ひしみて思切るにもきられぬは

身より出せるさびかたなかも

百首歌の中に恨戀 入安

たのめ置く他力にだにも叶はぬは

南むあみたぶりと身をや投なん

題しらす

義綱

思ひ佗うちぬるうでのたるきまで

戀の重荷におこる瘡癬

依戀恨貧

菅原盛長卿

忍ふ夜の松風のみか颯々

やぶれ紙子のうらめしの身や

題しらす

休甫

きぬゝの束しらみにかく耻は

我ふる夜着のうらみ也けり

隔戀

未得

ねやのうちにひきてなくして只獨

ふすま障子ぞうき隔なる

彦七といふ田夫か留守をうか

かひて女のもごへ忍ひ行ける

に其人しはふきければ女のよ

本歌
める

彦七か顔をするこも痰氣故

かくれぬせきを今はやめてよ

障戀

淡路守宗増

更る夜に忍ひてかよふ部屋の戸は

痰氣のせきも障りとそなる

題しらす

貞徳

居所をまくりあけても何かせん

穴のはたのみのぞく身なれば

職人歌合の中に作花師の戀

よしたか

本歌

一枝も御意にいれかし君ならて

誰にかみせんわか造りはな

同し中に珠數曳の戀

戀や^{本歌}是百八煩惱そくいべら

のりのをしへを背く珠數曳

寄若僧戀 入 安

うつくしき地藏のごとき若僧に

死ぬるからだは千ばかり也

寄勸戀 みどく

情しらぬ人をたくへばみぞいたち

只みめよしといふばかりなり

寄龜戀 夏虫妻

萬年もはなれはせじな石龜の

かうごやくそくかたき契りは

江尻にいたりし時本なれし若

衆そこにつて戀しかれど人め

をはかりえあはてやみぬこ

かたる人にかはりて

信 海

余所にのみ見はの松原はらたちや

戀にするがの江尻なれども

屏風によひご夜物思ひたる女

のつらつえつきたる所を

伊 勢

^{本歌}夜もすからもの思ふ時のつら杖は

かひなだるさを知れざりける

題しらす 行 安

ふらい／＼ふる妻いとし我かたへ

ほごりによせてきそん十七

安 明

^{本歌}笠さきへもたせる人のよめりとて

白きを見ればねりぞかつける

職人歌合の中に鞍師の戀を

久 清

さやしには似合たりごや鮫肌な

人をきもいる媒を憂き

題しらす 忠 精

敷銀のおほきにわろき女房を

もつや非欲の契りなるらん

職人歌合の中に佛師戀

民部少輔嘉隆

戀をして片手に造る御ほこけを

おかむ衆生や皆まよひけん

題しらす

三 哲

まだうゐの左官がよめの化粧には

唐の土をや壁塗にぬる

百首歌の中に 入 安

廿三夜の月にむかへは六四九四の

ゑくばにみゆるいもか俤

題しらす 直 之

夫妻のみ入ぬる風呂はあかなくの

せなにむかひて猶もいもふき

女の顔にくさかさの出来て見

くるしかりければ男のよめる

^{本歌}つら赤みくさげに見ゆる我くさを

人の笑はんことをしぞ思ふ

^{本歌}返し

耻敷やなとあてここの言の葉ぞ

面目なくも思ひけるかな

題しらす 未 得

忍びつゝ初めさゝやくむつごとは

はらみて後のごよみこそなる

世の中の男女のわざはひも

しもから起るものにぞ有ける

入 安

はは落てをごろの髪もまつしろに

霜ふる姥にあきやはつらん

夫婦いさかひを見てよめる

成 安

竹笛のなかの節くりいさかひは

りやらひやらをきゝぞ兼ぬる

女の悵氣して夫妻いさかへる

を見て 正 景

めかけにはめがくれ心くれ竹の

節々になる夫婦いさかひ

題しらす 未 得

堂宮にのろひことしてうつ釘は

かなつち論の夫婦いさかひ

かたわなる女をむかへてさる

とて女のごかくいひければよ

める 讀人しらす

本歌
よびし上は科なき時やさらざらん

鼻さへそけめ目さへたゝれめ

題しらす

久 清

浮石に似たりし妹か顔はせは

うしとて縁を切草屋かな

未 得

たかなほす中ごはなしに夫婦する

いさかひ果てよるのちきりき

古今夷曲集卷第八

雜上付物名 廻文歌

人のもごより鯛と飯鮓を得て

返事に 遠江守一政

あら玉の年のはじめにめてたいと

いひだこ送りたぶそ嬉しき

本歌
節振舞のうた 保 友

浅みごり糸より小鯛やきものゝ

申にもぬける春の振舞

同
けふのみごはなを思へる節小袖 宗 恒

たつも苦にせず花染の衣

鰯の料理を見て 貞 徳

料理者の毬打腕でさる魚の

名も正月のぶりゝぞかし

題しらす 權大僧都光宥

人間の八九七十二の年も

心はもごのてうちせゝがこ

戊年道の邊の捨子を見て

夏虫

む月乍らあちきしき無く捨られし

こはそも何のむく犬の年

題しらす

入安

薄泥に霞をさつと引まはす

屏風に松をかけるすみの江

繕に初藤を汁の料理にせしか

もとにて

淨治

汁にして魚の名にあふさわらびの

こは山海の珍物そかし

短冊一本をにてや花の枝にえしれぬ

事一本けるんとも書てかけならべたるを

みて

長嘯子

人毎に腰折れ歌をよみ置て

あたら櫻を杖にこそつけ

清水にて

保友

花見にやきよ水坂の焼餅の

かたはらいたき歌をよむらん

題しらす

貞徳

物くはで地主の櫻をみる人の

目ぼしの花はちるか散ぬか

大原野長嘯子の歌會の日とみ

の眼病にて席につらならず兼

題歌書てまゐらすつゐてに

お花見にめをわつらひて參らねは

大はらたちや口をしほ山

藏王堂の前にて小者の花を折

ければ主なるものゝ神木なる

をこてうちたゝきけるを見て

淨治

三芳野の花ををりはのでつちめを

主をうちぬる丈六の堂

久しくまからさりける人のも

とにて鯛の骨ひれなど肴にて

酒たうべつと人の語りければ

よめる

一圃

本歌
あらなりと名にこそたてれ櫻鯛

年に稀なる人の振舞

難波江のみをつくしに波のよ

せかくるを見て

侍從源光尚

觀音のちかひかこれも枯てたつ

みを木に波の花咲きぬなり

八丈棚にて紫の絹盜まんとせ

しを見つけて取かへしつと人

の語るをきゝてよめる

正信

盜まん人めをまきらかすか野の

若むらさきのすり小袖かな

題しらす

一圃

本歌
花見風うつりにけりないたつらに

我身よにない古き小袖に

或處にて酒宴なかはにくわゐ

さしいたけを肴に出し今ひと

つとすゝめけるをいなびけれ

は亭主のよめる

肴には是をくわゐとたてまつり

今一つと酒をしいたけ

人のもとへ鼓草にそへて

讀人しらす

たむほゝをどたんくさばやりもせて

ちゝつひとこそ送るなりけれ

返し

此程はうち絶にけるたむほゝを

たまはりて喰ふ舌つゝみ哉

鼓草賣を見て

満永

拍子あひよくいひながしねも高く

ちゝどうりぬる鼓くさかな

緑といふ菓子の出ける座にて

よめる

正繼

本歌

常盤なる松のみどりも春くへば

今一しほの菓子の味はひ

杜若を坂東にて筆花といふを

きゝて

信海

筆花といふことはりをきくからに

一首はかうそかきつはた哉

三月三日に相坂邊にて鶏合け

るを見てよめる

淡路守宗増

鶏も相撲に似たり相坂の

關のかち聲あぐる勢ひ

題しらす

昌治

花よりも團子を歌い題ならば

喰すと腹にあちはひつべし

前大僧正尊應

本歌

山寺の春の夕食はやければ

入相の鐘に腹ぞへりける

親しき人のもとへまかりける

に精進の庵相なる料理にてや

みぬと人の語るをきゝてよめ

る

讀人しらす

本歌

袖ぬれてあまのかりはす青海苔や

みるをさいにて止んとやする

海士

久清

手まめにし和布をも刈ぬは浦名の

かたものなりとみゆる海士人

卯月朔日魚の棚通りけるに魚

ともあまたあらふを見て

貞徳

衣更の今日しもわたをぬかるゝは

魚の腹もやう月なるらん

茗荷の子を西坂より賣に出た

るを見て

本歌

あのくたら三百三文やもうくらん

我立柚でみやうがうりつゝ

狂歌點取の奥に書つけて貞徳

が許へつかはしける

唯正

はじかみのくひもあはせぬ歌の口

たいからくごわらひ草哉

はやりかさ多く出ければ

讀人しらす

我がかさのみかはに多く出ぬれば

蛛手ひまなくかきつはたかな

惡敷酒をつよくしゐければ打

笑ひて

この酒は夏のかりねの床なれや

かはうるさくてのみ憎きなり

前關白信尋公へ鱒鮓を奉るに

本歌
そへて申上ける 言 當
魚扁に春くはゝれる鰯だにも

すきなお口にあかれやはする

人のもとより鰯の鰯をえて返

事に 右衛門尉藤原武員

近江鮒宇治丸鮎の鮎もあれど

をされぬ味は鰯なりけり

一夏の中俳諧發句して判をこ

ふ奥に 貞 因

夏虫にをさる心のはいかいを

あつきひけんに入るゝおかしさ

返し 貞 室

殊勝にもよくしあんこの俳諧に

かくるをたうりてんぞども見よ

俳諧連歌の批判の奥に

保 友

空蟬のうつゝをぬかすはいかいの

作意の程は生てはたらく

川道遙にまかりてよめる

久 清

賀茂川の魚の料理はところから

たゝすてあへて鱸にやする

河豚汁に茄子を入れは毒をな

さぬと人のいひければよめる

保 友

死ぬといへど食てもしなす年寄は

ふくと汁にはなすびゆゑなり

雨乞成就しけるごとて踊もよは

せし所にて囃子物によせてよ

める 道 明

雨ふるは不思議か笛はおひやおひ

てれくくとならす太鼓に

合羽 常 林

白雨のふりかゝるども早速に

うけなかつへき袖合羽かな

よべばんの鳥えさせける人の

もとへ朝に申つかはしける

藤原光廣卿

やうくご今朝こそ申せ趣なほる

昨日のばんの御禮なれども

ある僧のもとへ竹子を送ると

て 保 友

新發意とおほしめされて齋非時に

おつかひあれや竹の子どもを

京の町屋に鶉のなくをきゝて

代をとほせけるに高直にいひ

ければ

法印玄旨

立よりてきけは鶉のねぞ高き

人もよくにはふけるもの哉

山雀の籠へこま鳥を入かへた

るを見て ていどく

山雀の籠へ入かへかひにけり

へうたんからや出しこま鳥

題しらす 自 曲

本歌
夕されば門の破れ戸をおどつれて

あたゝまるねにあき風をひく

八朔に俳諧連歌の百韻を書て

えさせよと望める人に書て遣

しける奥に

器 音

八朔のさくいもあらぬはいかいを

も、書あつめまゐらするなり

仲秋廿日の頃友なふ人の宵の
程語りて歸らるゝに路次もぞ
くらき提灯をと言ふにいなや
月の出たりと申されければさ
ればよこてよめる

藤原定家卿

客人の歸るさ送るてうちむは

申つけねと出し月かけ

題しらす 讀人しらす

引かつくかたびらごしに月見れば

雲井をはしるやせ風かな

八月十五夜月のもとの酒宴に
盃の数も重なりければ九獻と
こそいへさまではいかにと人

のいふに詠める 源重通卿

月を今宵賞翫なれはくむさけの

さん五の十五はさんご思ふ

紅葉狩の山邊にて人々酔りと

いふをきゝて

春房

まつかいに酔ぬる顔は紅葉見に

林間をして酒すごすゆゑ

但馬にて有る人の庭にあひと
もに繼木せしか今年なり侍れ
はとて得させける返事に

澤菴和尚

あいうへて梢になりしかきくけこ

御ゐんしんこそ通したりけれ

題しらす 宗朋

あまたある中で取わけしぶかきを

むくはめきゝの下手のかは哉

言總卿のもとにて櫟の菓三寶
にもりて出けるに狂歌とおほ
せければよみはべりし

行風

百敷のお座にいちゐの菓こそ

公卿のうへのくらゐ物なれ

春日山にていかにかしたりけ
ん梢より猿の落けるを見てよ
める 器音

山猿もともに梢をおち椎の

車に似たるかたわとそなる

吉田二位卿よりあるかたへ松
茸送りたまふせうそこにうへ
うへへもいまだ奉らず隠密あ
るべしとある返しに

讀人しらす

松茸のおゆるをかくす吉田どの

わたくしものど人のいはまし

題しらす 一圃

只たのめいめじひとつの取さかな

座しきに酒のあらん限りは

江戸にてはしとあしと赤き雁
を送られける人の許へ返事に

光廣卿

是もまた都鳥とぞ申べき

はしとあしとの赤く見ゆれば

近江國に小堀氏なる人の許へ

茶湯にまかりて 信海

感じいるさいの数々みな口に

あふみかぶらの名ある御茶湯

法眼紹巴に途中にて行あひい

つこへと間に茶湯にまかると

いへりければよめる

法印玄旨

花香ある人は御茶にも呼なれど

こちやまた跡に残る壺底

返し

法眼紹巴

残るこそ猶も別儀に花があれ

うちある人はちやくと呼れず

青

器音

庭の苔すき屋のたゝみそりたての

あたかも青き茶の湯なりけり

身の貧しく老けるにある人の

きようなる小袖たまひし返事

本歌に

福安

年たけて又きようともおもひきや

命なりけりさやのお小袖

貧しきに親しく語る人のふる

き布子を染直しきていたたの

しといへりければうち笑ひて

南歌

つきやあらぬ色や自慢の色ならん

布子ひとつをむくのみにして

題しらす

久清

きく度にめづらしければさる物に

いつも初音の香をはごめけり

入江殿より青き綿帽子を送り

たまひける返事に

法印玄旨

えてかつくばうしの色の青のりは

入江のあまのしわざ也けり

ある人のくろき帽子をえさせ

ける返事に

行風

かづけ給ふ帽子をみればまぐろ也

色もきにあふ冬の音信

和歌學ふ人の許より俗にひと

もしといふ蒜を送れりける返

事に

牡丹花

一もしに三十文字はなご添ざるぞ

さすか其身も歌をよむとて

師走になれば町屋に焼亡強盜

の守りに自身番といふ事ひと

りのみならず二人三人より居

てするをよめる

保友

諸本詞

あひ番の宿をならべて門の前

井筒によるの火ようじはよき

題しらす

貞徳

冬の夜はなめしをいつもたび給へ

足のかはまであたゝまりけり

あぶりくふ顔もいろりの田樂に

くしくおもふ事そわするゝ

北野邊しはす通れは借錢を

おい松もありこうばいもあり

春丸

節分の鬼よりこはき借錢を

打はらふへき大豆板もかな

瑞南和尚へ炭三俵送けるに

言當

いろりにはをきたらじぞ思はるゝ

四すみの物にみすみ送れば

鱈を得し返事に 長嘯子

さいまつといひてくれける雪の魚

くひたら味のきえくどせん

貧しくて春もうくべき糧な

かりけるによしありければ定家

卿の許へ申遣し侍りける

曉月がしはすのはての空印地

年うちこさん石ひとつたべ

返し

定家がちからの程をみせんとて

石をふたつに割てこそやれ

物名

保友のぬしいにし年の暮より

音信たえて睦月望日もとほて

過にければそれか名をかくし

てよみて遣しける 行風

春の禮にこざりやすとも待程に

まつの内さへ打ち過て候

かへし

保友

松の内にまつかひなしや曲なしと

述懐中のもつともものうた

行風か字懷中といへばなる

べし

北村氏季吟か息休太郎といへ

る十一歳なるがいにし歳旦の

歌よめりと睦月末に季吟方よ

り書つけてこしければ返事に

休太郎といふ名をよみて遣し

侍りし

行風

愛らしき歌らうたしな是やこの

親の名までもあげまきよなふ

返し

季吟

情ふかう風体もよきことの葉は

懷中させて秘藏させてん

ひらかた

久清

所から天の川なる水いろに

ひらかたびらを染んどぞ思ふ

ある人のもとへ柿と梨と送る

消息に

自曲

何事もなしと申さんとはかりを

只一ふでにかきおくるなり

神尾氏若狭守冬更て八幡へ登

山有て只今の有様を狂歌によ

めと有ければよめる

信海

頃の寒をいたすわか山に

のほりたまふはわかさ也けり

伯耆國かゝと言所にて釣人の

家にとまりてよめる

法印玄旨

哀れにもいまた乳をのむ蟹の子の

かゝのあたりや離れさるらん

長門國たらひと言ふ所にてか

れ飯くひ侍らんどかり宿りに

あるとき下部どもの足にまめ

といふものゝ出来てあらふに

いたきなどいふを聞てよみ侍

りける

さしいれてあらへる足のまめ多く

馬たらひとや人の見るらん

雨の降る日馬三疋の毛色よめ
といふによめる

読人しらす

雨ふれは道はあしけに見ゆれども

日かけのさくは臆てかはらげ

大和國不動院頼智狂歌草こし

ける次手に此後々も歌の道ひ

きたのむなどこま／＼と申さ

れける返事にらいちの名を

行風

此いらいちゐんなれは足引の

やまど歌もて申し通せん

歌舞妓若衆小金といふもの小

歌の音頭上手なりしを

以春

音頭の歌にて人をよふこ鳥

古今一部の大事とそきく

町童鶴や清兵衛といふぞ歌賢

に出座せんと約して其日にな

りてとみの事ありとて來らざ

りければよみてつかはしける

長嘯子

はり弓にかくるつるやの精兵も

筈をちかへて星にあたらす

雅純朝臣のもとにまかりける

に折からの和歌二首よみたま

ひいづれぞさだめとよあるを

いかでさることはと辭し申け

れぞしゐて仰ければ一かたに

申けりさよとありながら猶あ

んじたまへれば庭田雅純の名

をかくして

行風

此方にはだます見つゝよしと言へこ

なにはかはどの歌のうたがひ

かへし

雅純朝臣

修行よくいつしき島の言の葉に

かう風体を得たる人をも

美濃國にありし衣下僧國守に

そむきて所をのくどて

読人しらす

天か下ひろくはるかのゑげ笠を

さしてみのに執心もなし

いつれの時にか有けん町童の

飛鳥井殿をせうしたく侍れは

かねて申上侍る也十日廿日の

うち御心に任させたまへと申

ければ幸ひいとまありあすま

かるへしとおはせける時によ

める

読人しらす

今日言てあすかいこうと御意あるは

あまりはづみて曲がござらぬ

廻文

題しらす

みどく

ねぶりつるかゝりたき捨なみ暗く

皆出すぎたりかゝるつりふね

無常

又とびぬめとを哀れぬししらし

死ぬれは跡をこめぬひと魂

釋教

淨治

しらるなりいま清水の名ばかりか
花のつみよきまいるなるらし

古今夷曲集卷第九

雜下付哀傷

天

行景

空色がそらのあるじの幕ならば

月やうら紋日やおもてもん

來焉

万物のそたてらるれば月と日を

あまのはらなる乳房とや見ん

寛文癸卯年春三月より夏さつ

きまで入日のまつかいなるこ

と有けるによめる

瑞南和尚

空腹をたつるかそれは何ことぞ

かほをあかめていらぬ夕陽

月

満永

空の海に月の御舟の名をつけば

三界丸とまをすべきなり

風

久清

味ひをたがなめしりてから風や

又あま風と名つけそめけん

大和國尼か嶽といふを見てよ

める 正信

尼か嶽のかしらにおほふ白雲は

綿ぼうしとぞいふべかりける

有馬山にてよめる 正直

有馬山ゆに入相のかねの音は

諸病無病とさくそたふとさき

讀人しらす

有馬山高きは湯女のころのみか

二階住居におさかなの代

茶臼山をよめる やすども

天王寺石の鳥居を切たてし

あまりのありて茶臼山かな

駿河國宇都山にて

よみ人しらす

鐵炮にうつるの山邊の十團子

ひだるき時の口藥かな

同じ處に團子うるものゝ酌子

もてかならず十つゝすくひあ
くるを見てよめる

藤原雅章卿

すくひやう其名たがはぬ十園子

酌子定木もかたは有けり

中納言藤原政宗

^{本歌}とをだんご十づゝ十は喰ぬとも

をさなき口にあかん物かは

富士山を見て 読人しらす

月と日を地に落さじと半天の

つゝはりにかふ富士の大だけ

澤庵和尚

風はこぶ半の雲をひき繩に

ふじの高根の墨ぞしらるゝ

道明

^{本歌}風になびく富士のけふりは西行の

口より出しいきかあやしき

讀人しらす

雲の帯かのこの小袖ゆき長に

だてをするがのふじの山かな

法橋由己

富士の根を自然枕にせん人の

足をのばさばむさしのゝ原

行風

臺の物に山をするがの富士ならば

むさし野をこそ盃にせめ

ト養

尾も白し頭も白しにはどりの

ひよこかふじは時しらぬ雪

みどく

のびあがる足高山もふじのねの

腰たけにさへ及ばざりけり

久清

酒のみてふじの高根の雪みれば

心もうきに浮島がはら

弘誓法師

足からに灸をするがの富士ならば

ひねるもぐさやたごに一はい

石見の國銀山へこえて見るに

やまぶきといふ城の在處の上

あにるを見て 法印玄旨

城の名も斷りなれやまぶきよりも

ほる銀を山ぶきにして

正成

味ひも色もそれかと三芳野の

葛につさかのわらび餅かな

不破關にて是かれ友とち曉が

たまで酒宴する折しも玉子の

肴出しければよめる

久清

鳥と共にうとふ酒宴の肴にと

料る玉子のふはゝの關

關 雄長老

ぬいめづけに雲井の雁を染たるは

たが肩衣のもじのせきもり

淡路守宗増

ことはるを今日は幾たり通せりと

書つけてをくもじの關守

玄康

さりともと引とめつゝ一筆を

所望せられてかくもしの關

橋 むねます

眞中は皆朽はてゝあともなし

昔ながらの兩の橋ぐる

瀧 白言

寄浪のねがはにせじと津の國の

鼓の瀧をしたゝむどうつ

ひさきよ

謠ひまふ袖はかへさもしら波の

うてる鼓の瀧呑の酒

小濱氏嘉隆伏見へまかるごと

狐川のわたりに舟とめめ消息

こされけるにやがて出あひて

かく申侍りける 信海

御懇書にばかされ出てきつね川

さいはいくやあふて語るは

吉野川の水高かりしを渡ると

て人のころびなかれけるを見

て 永明

つまづきてうきぬ沉ぬよしの川

よしやよしなき水心だて

相摸國酒匂にてよめる

徳元

氷をもつきぬくばかり流れ来る

鏝のさかはの水の一筋

河 満永

どうくとなるも響くも打よする

波の鼓はかはのはりあひ

海邊眺望 むねます

渺々と限りもなみの海つらを

打あふのひて遠見をぞする

題しらす 雄長老

橋立の松のふぐりも入海の

波もてぬらす文殊支利かな

讃州小豆島をよめる

宗也

四國にはあはばかりぞと誰かいふ

小豆も島に有ける物を

播磨國に鍋の烏酌子といふ所

あればそこにてよめる

法印玄旨

鹽ははやき程なれやなべの嶋

酌子の中へいれてみつれば

明石の人丸の舊跡はいつの代

にか城をとりたてらるゝとて

二の丸の外へ移され今あるは

昔の處にはあらずと人のいへ

れはよめる 讀人しらす

あかしなる人丸は今二の丸の

石かきの本となりにけるかな

いかなる事にかありけん高砂

の鐘樓より落ければよめる

宗也

^{本歌}高砂の尾上のかねをおとすなり

たれをぞらへてしる人にせん

浦 久清

鹽竈の茶釜なりせば風爐先の

屏風かうらと見るべかりけり

題しらす 利清

姫松は神樂神子にて住の江の

岸うつ波は宜禰がつゝみか

或人姪の濱より脇指ををこせて
目利してよ銘なとも能侍ら
は主になるべきと消息ありし
返事に

法印玄旨

脇指のしろをしごへは安吉の

なかごたゝしきめいの濱かな

或修行者つかれて醒井の邊に
休らひ鼻紙より麥の粉を取り
て水にうけて呑むとしけるか
山風に吹ちらされけるによめ
る

讀人しらす

頼みつる麥粉は風にさそはれて

興さめか井の水をこそめ

禁中

むねます

入口に一牧にてやたらざらん

ちいさき板を脇にはぎの戸

江口のわたりさらしの里にて

よめる

宗也

此里は江口の君のめされたる

きやふのあまりの洒しなる覽

木搖磯梅澤里をよめる

徳元

はらみぬる女の腹か子ゆるきの

いそぎひもききむめ澤の里

石畠といふ處にてよめる

近吉

作り物ぬすまれじとて番をする

行義もかたき石ばたけ哉

伊勢のあめ名物なりと人々の

買ひけるを見て

弘重

をしなべてあまてる神のまいり衆

つをばひきぬる伊勢飴のあぢ

瀬戸にて

光廣卿

つくゞと見ても喰れぬ物なれや

口なし色のせごの染飯

身延のわたりうつふさといふ

處にて

日蓮上人

或貧しき僧のもたる寺を金銀

をもてもらふべきとしれもの

のいへれどうけこはざりきと

語る人にかはりてよめる

伊貞

師匠より譲られにける一寺をば

千金とてもいかでかゆへき

百首歌の中に閑居 入安

世間をひつきり竹のかくれ家に

心ゆるりの茶湯をぞする

玄康

錢かねもあるはご人にくれ竹の

世を遁れては樂なおきふし

雄長老

世を遁れかゝる淋しきめにあふを

やまいつたとや人のいふらん

題しらす

中務丞基佐

壁一重となりだにもごはれねば

貧はごふかき隠れがはなし

井につき際目の論有けるを扱

ひ濟しける座にて 雅 珍

中汲で扱ひぬればこの井戸の

際目の論も水も澄けり

赤土をもごめ壁の上塗せし時

よめる

重 頼

昨日まで余所に思ひし赤土を

今日我宿のかべと見るかな

錢湯の風呂に楊梅瘡わづらへ

るものゝさなきふりにてまぎ

れ入事たびたびなればよめる

重 故

あかなくに又來て風呂に隠るゝか

かさかきのけて入すも有なん

兼て見くるしかりし宿に新し

き壘もどめて敷ける折に

光 知

壘こそ今はしくなれ是ならば

たが御座ゝとも苦しかるまじ

紀伊國にまかりけるにあひし

れる僧の是に足もどめよか

しとなれど心留らざりけるを

是非さてわらぶきのせはき菴

をえさせけるに何の役もなく

しばらくあるとてよめる

道 明

わらぶきの室にあげ暮寐させつゝ

あるじは我を麴にやする

駿河御普請の時八木高直のこ

り沙汰をきゝて

參議源忠興

富士よりも米大豆のねの高ければ

普請まかなひ何とするがや

法印玄旨公方の御普請の料に

國本よりおほくの米をごりの

ほせられければ御普請終りて

も猶米のこりけりよしありし

人なれば米百石えさすべしと

りにこし侍れど申ける返事に

宮川尼

御普請の用にもたゝぬ此尼か

百の石をばいかで引べき

普請する時親しき人の許へ申

遣しける 讀人しらす

柴柱繩なごちこくれ竹の

ふしんにことをかきも社すれ

俵十もらひに遣すこて

御無心は百足と手はご申せこも

又此たびは俵とをたべ

名所松 宗 朋

いつの代にたが彩色で住の江の

松をあをきが原にしなひた

題しらす 太閤秀吉公

筥崎の松は奉行にさも似たり

直なごみれごゆかまぬはなし

縮輪 宗 珀

落葉かく親子のものゝいさかひは

ちゝりなりとぞ住吉の松

主のあふせにて木の枝おろし

にのぼるこて

よみ人しらす

本歌

あふなく登りはすべし枝もなく

高き木のそらくるしかりけり

獸

四々ならば十六つれて行べきを

くゝにもるゝか一ツはしるは

牛を盗まれて里のおのことも

尋ね出ける野を通りあひにけ

れば此僧のぬすみにがしける

にやとあやしみけるをさるも

のにはあらず西行といふす行

者なりといへばさらば十二支

をいれて牛ぬすまぬよしの歌

よみたまへゆるしなんはやは

やとせつかれてよめる

午未さるどりいぬよそちもいね

うしとらぬさへうきなたつみに

未得

腹鼓うてる狸のをのづから

身にたしなみてもつや胴皮

孫よりもゑの子かへとはむば玉の

よるゝ思ふ用心のため

道寛

よく化て嫁人をする女きつねよ

夜るの殿子にさらればしすな

道明

母にいつおくればしけん小鼠の

あけくれちゝとなく聲のする

前關白信尋公へ淀鯉奉るにそ

へて

昌俊

折よくは申させたまへふたつ文字

牛の角もしたてまつる也

返し

魚の名のそれにはあらずひまの折

ちと二文字牛のつのもし

鯉をえさせける人の書札に扁

を誤りて獸扁に書こしける返

事に

宗吟

山の芋うなぎに化する證據もて

鯉をたぬきになす扁もあり

題しらす

教二

本歌

朝夕に吸へばこそしれ佳吉の

蛤汁のしほのあんばい

雄長老

虱ほご世をへつらはぬものはなし

むさき人にはこに近づく

本語

燈

正信

戸はそより落ねど是は常住の

ごもしかゝくる油つき哉

久清

火袋も匂ひふくろのたぐひかや

丁子かしらの中に見ゆれば

蠟燭ごもしけるにいたうなか

れけるを見て

宗恒

本歌

ながるれば又會津もや忍ばれん

牛と見し夜の今の蠟そく

筏士

重故

芳野川瀧とびくちをあまたもて

手わうざわうにくだす筏士

海賊

久清

白波や海賊ごものる舟は

人のたからを奪ふて取楫

鼠色頭巾かつげるを道明

しやつきりと糊けの有を被^{かぶ}れるは

ほんのねずみの頭巾なるべし

或僧に足袋を給るとて

前關白左大臣

^{本歌}此たびは我もどりあへず人くれつ

はかうはかじはそちのまに〜

御かへし

^{本歌}たびたびでかたじけなしと頂けば

頭上まん〜脚下まん〜

子を手習にのぼせてをきし人

の革足袋えさせてはごなく又

五足を贈りこされし返しに

昭乗

たび〜に送りくださる忝けな

是も御息のござるゆゑかは

京の人大坂に足皮誂へおき便

りにのぼせてよといぬめり出

來たりし時足皮師にかはりて

行安

^{本歌}便宜あらはいかで都へ告やらん

今日しら皮のたびが出来ぬと

或人よき笙をもちたるを年月

所望しければえさせける時せ

うその奥に 方救

調子よき所望なればとくれ竹の

あな〜嬉し秘藏せうよの

尺八稽古する人のもとへよみ

てつかはしける 行風

尺八の音色は習ふ初手よりも

いきごみぞたゞ安田いしなる

少隣といふものゝ方へ鼓筒目^{一本}

利してよといひ遣しける消息

の奥に 徳元

ちゝとちとちと見てたもれ此鼓

ねはいかほぞかせうりんの坊

返し

とたん〜たんとで無用此鼓

ちゝつちとならかうてとくげん

源氏外題の歌の中に桐壺卷

淡路守宗増

若宮をもうけの君のもてなしに

よき茶たてんと口を桐壺

末摘花

たはぶれに人のかほにし紅をぬり

末摘花のさきを見よとや

紅葉賀

今日の賀の酒は五十も呑つべし

もみぢの色に顔もなるほど

花宴

南殿の花の宴にしさしうけて

呑ぬる酒のかんたちめなり

あふひ

なやみぬる葵の上のものゝけは

さぐりてもしる人の生靈

繪合

繪の中にもあかく色ざるは

朱雀院より出しなるべし

篝火

一本ちかやかに
ちるやうにおそばへよるも爪琴を

ならはせたまふ篝火のもと

若菜

年はつむ^{本め}と白がも皺もなかれとて

いはふわかなの上下万民

横笛

寐てゐての夢につたふる告あらば

名をよこ笛といふはもつとも

竹川

たはふれに争ふかけの悲なれども

たがいにからむこゝの竹かは

宇治のうち總角

かうばしき薫りを内へ入れんとて

ねやの戸口のみすをあげまき

寄生

姫君はあかしのお子であらずとや

さてはいづれの腹にやどりき

浮舟

人からもかほるに似せて匂ふにぞ

うからかされて心うきふね

手習

雄長老

奈良油^{一本}初瀬出さまにおとしつゝ

小野すみにてや手習の君

夢浮橋

貞徳

道照がいだせるよりもあたらしや

うち十帖のゆめのうき橋

いづれの御時にか有けん公方

の御前にて連歌のありしに天

神の名號・風の吹をとしけれ

ばとりてかけよとおほせられ

しにとりあげかくるごてよめ

る

順阿

梶原と今それがしが二度のかけ

それは高名これは名號

いづれの御時にかありけん床

に烏丸殿の手跡かけたる處に

て

讀人しらす

飛かける文字の黒く見えけるは

烏丸殿の御手かは^{一本手跡}く

鈴木氏の人額所望しに來りけ

る翌日書てつかはすとて消息

の奥に

信海

なにぬねの馳走せぬ間 立つてと

嘶しも申しさしすせそかな

返し

慇懃に望の額をかきくけこ

ごおん生々世々忘れめや

題しらす

ひさきよ

礫文字うちつけ書する時は

薄き屏風の紙や破れん

讃歌の題所にし集るは

鍋とり公家に限るべきかな

湯島の天神別當喜見院が許へ

まかりけるに兼て狂歌 頓作

聞及び侍り所望といへば

信海

我歌に作意の自由しまするを

さらば申してきけんゐんかな

かくよみければ狂歌とても自

慢はいかにぞやちと卑下あり

てもよかるべしと傍なる人の
いへば又

狂歌には自慢天満大自在

天神ひばをしてもよけれど

八幡山寶藏坊より表具細工た

ぐひなき上手なりと狂歌もて

褒美せられける返しに

泉 齋

表具師はちく軸してぞ嬉しがる

のりの道しる人のお歌を

返し

信 海

御返歌の字くはりは天下一文字

上下万民感じこそせめ

あるやんことなき御方にて御

遊のあまりに狂歌よめど仰け

ればよめる

可 悦

御意なれば三十一もじ二もじに

あまり申せばおそれなりけり

歌書て之させよと度々申ける

人の許へ遣しける

^{本歌} 遠江守一政
之ぬ歌をまつほのうらみいふ人に

かくやもじさへ筆ふるひつゝ

勝尾寺に義空とて狂歌の上手

あり彼には及ばしと人のいへ

りければ

信 海

我歌になどてあなたがち尾寺

のごきくぎくうさせてみせまそ

鷹筑波集の奥に

貞 徳

犬よりも物しらぬ身のあつむれば

ゐたかつくばと人ぞいふべき

此集編んこと兼て重頼に聞へ

けるに狂歌よみてこそすへきと

ありしがおそなはりければか

く申つかはし侍りし

行 風

^{本歌} 名にしおはいざこれとはん都衆

わが撰ぶ狂歌ありやなしやと

狂歌點取の奥に書附て貞徳が

許へ遣はしける 爲 盛

はいまはる腰折れ歌を筆にのせて

書ておくるははかりて候

あるものゝ歌をよみて點をこ

ひけるにそ 歌やあしかりけ

ん批判はなくて奥に

曉 月

てむまでは及もなきぞみぞいたち

和歌の道にはまかげさすとも

誹諧連歌百韻點取の奥に

日能法師

書附る此はいかいはやれすのこ

たけのなければつゝられもせず

返し

貞 徳

たけのあるこのはいかいは書附て

やぶれすのこといふは盗人

同じ點取の奥に

玄 札

^{本語} はいかいの功なり名とげ給ひなば

我にもてんの道を教へよ

返し

ていさく

あつばれやかほど功ある誹諧の

てんの道には身退くなり

諸外題を百韻の誹諧連歌にし
點を望みける章の奥に書附け
る

喃是は如何なる仕手ぞつればたぞ

わきにあるまい謠はいかい

同じ誹諧の點望みける發句に
東北をしてければ ト 養

てんたうにかなふ詠吟すくなくて

東ト養を恨みたまふな

此集編侍る半に河内國定林寺
の邊りにある僧狂歌草の上つ
つみに筆結の二藏と書附てこ
し侍り其歌なべての人の口か
らにはこえて覺へければ草の
奥に作者の名は筆結の二藏と
やそれが結し筆をとりて物の
理りを書述し三藏をもはつま
しき作意ならし殊更歌の數十
七首は定林のわたり近くすめ

るとなれば彼憲章をもへるに
やとてかく申遣し七首をぞと
め侍りける 行 風

憲法にあふ歌數の十七の

七首よきこそ七不思議なれ

誹諧連歌の判をこふとて貞徳

が許へ申遣しける 唯 正

はいかいのまきのあら駒口こはく

はめるくつはのゆがむ躰かな

いづれの御時にや五首の勅題

下されけるをかしこまりて先

よみて奉し歌

勅として歌のおだいを下さるゝ

辱じけなしや殊にごしゆまで

題しらす ていこく

連歌師はをんな子なりと覺へたり

さしあひもあり妊み句もあり

硯箱の蓋に漁父舟の蒔繪書た

るに狂歌よめといひければよ

める 信 海

れうし舟硯の海にこぎだすは

魚のまきゑをするにこそあれ

筆 宗 訓

鹿の毛は筆に成てもやすからず

とかくれうしのうへで果れば

徳 元

むかしくよみ置く歌の今の世に

のこるも筆のながき命毛

紙 未 得

鳥の子に小鷹おほたかひきあはせ

つかひあかぬは料紙也けり

人の弓をかりけるに射る毎に

かへりのみしかければ主のか

たへ弓へそへて申つかはしけ

る 讀人不知

此弓はかへりたがればかへすなり

しばしこなたに射るを給はれ

僧の還俗せしに魚くはせ大小

なごえさせければよめる

本歌 今日や此僧の衣をぬぎすてゝ

君が大小さしたてまつる

碁

ていどく

印地するわらべの智恵と互角なり

石のうへにて勝まけをいふ

雙六

行風

川舟をのぼすに似たり雙六は

さいつひいつに手のひまがない

本歌
題しらす

讀人しらす

堅い砥をこなた彼方にどぎかけて

あはすは何を剃刀にせん

あるやんことなき方より名あ

る壺に茶を詰てたひけるを御

禮に遅くまかりければ壺はい

かにとおほせけるによめる

御禮をちやくと申さん壺なれど

つまりにけりな口をはられて

題しらす

淨久

茄子なりの茶入の蓋の細工をば

へたにすること上手なりけれ

秀吉公御秘藏の井戸茶碗をめ

しつかはるゝ者のとり落して

わりければ御氣色あしかりし

本歌

を御前なる人のよめる歌

筒井つゝ五つゝにわれし井戸茶碗

とがをば我におひにけらしな

土佐焼の茶碗えさせける人の

返事に

貞室

國の名のさんの茶碗手にふれて

朝鮮よりも我は寵せん

題しらす

雄長老

吳竹のふしみにもなくはるゝと

京まできりにのぼり竿かな

同

みどく

手のきかぬ女子の親の折檻は

針を棒にや取なほすらん

後陽成院の御時めさるゝ事あ

りて内へ参りけるに殿上なる

人々只上に御小刀細工あそば

さるれば暫く待ちねと申され

ければそのほごによみ侍りけ

る

法印玄旨

墨壺のいともかしこき勅作は

これぞ千秋万乗の君

題しらす

平時頼朝臣

から傘のさしたる咎はなれれども

人にはられて雨にうたるゝ

本歌
鞠

久清

昨日すぎ今日暮よくて飛鳥井の

なかしの曲もはじまりの場

蓮花寺にて中酌の酒の出ける

に詠る

信海

濁り酒の濁にしまぬお心は

中汲てこそしるき蓮花寺

奈良の酒家にて酒すゝめける

に兎角時宜しけれと後には大

酒盛になりたりと人の語るを

聞て

源有純卿

本歌

なら酒やその手作りを時宜せしは

とにも角にもねち上戸かな

題しらす

行 安

^{本歌}汲かはすさゝのおなかに満ぬれば

身をじゆくしとぞ我は酔たる

親しき方にて酒すゝめられけ

るに是は味なし彼はよしなご

いひければさかくいひて盃の

數重なる事よと笑はれけるに

よめる

わたくしも難波にすめばすゝの酒

よしやあしとてたべませいで

これはく大酒のまるゝ事よ

と亭主の笑へりければ

讀人しらす

あがり子の椀をおりべに擬へて

八たびのまばや酔時のあらん

返し

あがり子の椀をおりべになせり共

てうしのこりて酒や残らん

題しらす

^{本歌}道すがらしとろもじすり足もどは

亂れ初にしわれなら酒に

酒宴半にめしつかふものゝ樽

なる酒を有やなしやとふりて

見ければ咄と笑ふかうちに客

にてよめる

安 繼

^{本歌}樽のはらふる酒きけばかすがなる

みかさのまで懸てつきかも

或酒家より一瓶をえて返事に

貞 直

涌出る庭の泉の壺本は

人のなさけを請てこそしれ

奈良のわたり木津といふ處に

知人あり立よりけるにもとよ

り酒好むをしれりければ盃も

て出ながら折ふし美酒侍らす

水くさき酒なりといへればは

やうけもちてよめる

宗 丹

木津川の水くさ酒と人はいへど

宇治梅尾の茶にはまじたり

題しらす

滿 永

^{本歌}世間にたえて酒もりなかりせば

下戸のこゝろは嬉しからまし

正 定

^{本歌}我こひ湯鹽けも見えぬをきくは

人こそしらね酒の酔ひぎめ

大峯の圖司のわたりにて人々

誹諸連歌せしにいとせばき家

なりければゆふけもる器物こ

しらへる酒席に聞えければよ

める

李 吟

大峯の圖司のあたりの近さにや

なりわたるらんごきもせんきも

返し

貞 室

五鬼前鬼なりわたれるを咎むるは

山伏山の町衆なるらん

季吟の住處山伏山の町なれば

成べし

松井氏のぬしあるじまうけし

けるに相客の遅かりければよ

める

法印玄旨

本歌
この人を松井かもとの振舞に

やく鹽鯛のみもこがしつゝ

つかれたる折しも人のほしな

めし喰ひけるを見て

宗 鋪

本歌
こゝにしも何匂ふらんほしなめし

人の物くひこゝろにくきに

狸汁

貞 徳

腹までもまだ人たらずうましとて

舌鼓うつたぬき汁かな

七條前大僧正宣如より折に餅

みづから煎樞を入れて折からに

めでたい事をもちゐけりみづ

からきをもいりがやにしてと

よみて給ひける返りことに

貞 徳

自らかえ持ませねばたべたいと

存するをりにおきもいりかや

大佛餅

未 得

上もなき大佛餅の本來を

さざれば米の菩薩なりけり

大佛まうでせし人の留守にを

りて

近 吉

後世のみかまいりし人の土産には

大佛餅もねがひものなり

良恕法親王の御所にて蕨餅出

けるに重のふたあけざるさき

に狂歌よめと仰せ下されけれ

ばかく申あげ侍し 行 風

本歌
飢のやむは何でもかでも同じこと

宮もわらびの餅まいれたい

家貧しくて朝夕にみそうづを

たくによめる 理 西

手とり鍋をのれは口がさしでたぞ

みそうづたくと人にかたるな

蕎麥搔餅出ける座にてよめる

法印玄旨

薄墨につくれる眉のそばがほを

よくく見ればみかど也けり

茶と酒との論有ける座にて

みどく

たてゝ猶宇治茶の色も青によし

なら諸白にいかでおとらん

梅尾の僧より手作なりとて茶

を給ひける返事に

よみ人不知

給はりし梅尾の茶はすぐれたり

是や宇治よりそだちならん

たのみける人茶をたてゝたま

ひ是を題にてはやゝ狂歌を

とあれば

旨 治

ちやくくゝとたてつけられて我心

そゝりし故か歌にうちつく

浅草海苔に歌そへてえさせた

る返事によめる 信 海

武藏なる浅草海苔は名のみなり

お心ざしのふか川のもの

唐納豆送りこされし人の許へ

返しに

貞 徳

手も足もまげ物にしてひさまづき

是からなつとうお禮申さう

石川氏なにがしのもどへいは

しづけをおくるにそへて

本歌

世中の人は何ともいはしづけ

清酔にぐりすかけてくふらん

或方より米三石賜ひたる返事

に 読人しらす

日本さへ及びなき身に三ごくを

まゝにせよとの御意ぞうれ敷

親しくかたる人の好にて眞瓜

をのみくひければ兼ていさめ

けれども聞もいれずたゞくひ

にくひぬある時瓜たたりて赤

き腹煩ひければ申つかはしけ

る ト 養

論本語

腹中は赤地のにしきひたゝれに

くだしたまふは瓜のさねもり
腹のいたみに温石もておさへ

けるを見て 政之

海原のそれにはあらでひへ腹に

おきの石とや是を申さん

同 題しらす 一 幸

病ぬれば今ばたゞとなにはなる

醫を盡してもあはんとぞ思ふ

老人の身にありしなますてふ

病のいゑけるを見て

路 春

老ぬれば水もかれぬる身のかはに

ありしなまづはいづちいぬらん

足の灸のあと違ひたるをたが

おろしたるご問ふに有馬山に

てご答ければ 貞 徳

頗當にあらぬ物から有馬にて

おろすやいとの三里さがつた

題しらす 正 長

本歌

目の前を通るちんばや難波瀧

宗 恒

本歌

津國の難波わたりの腰引は

足がなへかもえこそ見わかぬ

久 清

うろくづの生れかはりか海老腰や

かます顔にて鰐足の人

何はにつきあしき心もたる人

をいさめけるに露そのかたも

なかりければよめる

邦房親王

いさめても犬よりおごる人ならば

見ざるきかざる言ざるがよい

傀儡 源雅純朝臣

つら白くけはへる茶屋の出女は

いなり狐の子とやいはまし

保 友

大井川ながれをたてゝ住宿の

島田縮にし髪も遊君

みごく

うれめの人をたらすはおほ磯の

虎の威をかる狐なりけり

三 哲

うかれめのきるやちぎるや新しく
小袖もつまもかはるゝに

宗貳といふもの浅香といふ遊

女に思ひ入て二世ともに打忘

れたる氣色なればいさめむこ

てよみて遣し侍ける

可 正

足拔がならぬそうにぞ見えらるゝ

浅香の沼にはまりたまひて

非人

智 短

本歌
わけあればくるゝ物とは知ながら

猶うらめしをもらふ身の果

伊勢會山にて美目形きよらな

る非人等三味線ひきをるを見

て 近 吉

三味線のかはゆらしげな非人らに

あいの山程錢とらせたや

放下師

満 永

本歌
あるはなくなきは數そふ品玉を

とれる手本は上手なりけり

八桴うつを見て 二 笑

橋ならぬ蜘蛛手の曲の八ばちや

大鼓うつゝに世を渡るかな

刀を品玉にとりけるかいがゝ

したりけん取落しければ囃子

たる太鼓も拍子をうしなひ見

る人ぞゝ笑ふが中によめる

一 幸

ふり上るたちつてこんど落すにぞ

耻かきくけこ太鼓うちまで

四條河原にてよめる

宗 恒

よせ太鼓日はてれつくど打いづる

波の音まで河原ものかな

女のまねして狂言舞しける源

左衛門といふものを見てよめ

る ト 養

又たぐひあるものでない過去未來

源ざるもんが舞のなりふり

孔雀といふ太夫が勸進能をよ

める 保 友

よせ太鼓音もたうから唐からや

わたる孔雀が能の鼠戸

未 得

囃子をばうかべ顔にてするけがは

木から落たる猿樂のげい

正 定

ほご拍子あふむ小町のうたひやう

これも師匠の口まねぞかし

小歌の上手なるを聞て

定 行

本歌
一聲に自由をこめし節なれば

きくともあかじ君が小歌は

巫 藤原光廣卿

弦音にとふ口うらをこたへけり

梓の弓のはづはあはねど

本歌
陰陽師 路 春

心あてにいはいはん失物を

おきまごひつゝ白波の算

源重保卿

本火土金すいりやうゆかぬ考へに

たびくおのが首もなげさん

春日祭に田樂法師しそこなへ

るをみて

牡丹花

鷺足にのりはづしたる面目は

灰にまぶせる田樂の曲

座當の茶ひくこて強言のすねことみい

ふを聞て

雅珍

座當めがむづかしさうにお茶臼を

引のこくのご強まはるすねかな

座當の袴をき杖つきてありて

かたかくる繪を見て

如貞

座當の坊あたまは丸の杖つきの

たすきのなりの袴腰かな

番太郎をよめる

みこく

居ねぶるも奉公顔にあづき弓

いびきの音のする夜番哉

博奕師

満永

本歌 まげぬればくれぬ物とは知ながら

猶うかくこうつばくち哉

本歌 市 獨友

杉たてる門をしるしに上戸ごも

よりたかりのむ三輪の市酒

本歌 米問屋 初知

我宿の米の立直やよかるらん

思ひの外に客が來ませる

商人 菅原在通卿

賣買の利欲にまぎれ禮義まで

破れ袴の町人の躰

正成

獸のみかはをはいで見せ棚の

爰やかしこに岡崎の町

紺掻 常胤法親王

紋のみかあつらへやうの色いろに

染なす絹のいと利こんかき

光廣卿

るやうしてひらりと散すたびら雪

是や地白のかつぎ帷子

題しらす 前大僧正慈圓

それもいざ爪に藍しむ張物の

しいし取置く手繩姿よ

本歌 桶工 正愚法師

手をきかせ云ばそさうな桶かはの

われてもそこがあはんどぞ思ふ

本歌 鞠師

色見えてうつらふ物はうりすその

ふるき粧の花にぞありける

塗師 光廣卿

色にうく人の心の花うるし

跡はげやすき物こそしれ

珠數曳

珠數曳の弟子がぶせうをする時は

だつま程にやめをみだすらん

徳元

水晶の玉さへみがく珠數曳が

心のうちやなごよくいにん

表具師

表具師がしやうふの糊は紙よりも

おのが命をつぐ爲ぞかし

大工

みどく

やすらかに軒をつたふて家つくる

木工をいはば蛛のいとなみ

夫妻石の繪を見て 信海

書ならばかうこそ有めかたゝと

契りも朽ぬめをど石かな

醫師の灸點違へし事よと恨み

言ける人の許にて 保友

そでないとえやは伊吹のさしも草

さしもの醫者も違ふ灸穴

題しらす 一幸

きくところ醫者は伊吹のさしも草

さしも知らじなあつひ思ひを

宗恒

わびぬれば今肌ぬぎて難波なる

身をつくしつゝかせぐ職人

ていこく

名人のながれをくめど末の代は

萬の道が下手のかはかな

わるさいふ子をよめる

久清

夜もあけば強く^{きう}抓らんわるさ子の

まだきに起てせなにおはるゝ

頼智

ぬきちらし着物ふみわけなく孫の

聲きく時ぞ婆々はかなしき

親の慈悲に前後なしといふこ

とを 未得

負子よりだく子に乳をば吞すれど

親の慈悲には前うしろなし

いとほしき子に旅させよとい

ふ事を 正長

庭訓の往來よりも道遠き

旅ならはせよいとほしき子に

貧しき人の子おほくもたるを

みて 讀人しらす

子どもをば鮭にする程持たれど

いひがなければひ干にぞする

題しらす 行安

小姫子の隠れごにさへまじらぬは

もはや桂のはもじなるかよ

ある人の子を養子に遣しける

にいつしか下部につかひなつ

み水くませなごしければ本の

本歌 親のよめる

なごてかく拐^{おどこ}がたけとなしぬらん

水もたせんとは契らぬものを

題しらす 方救

美目のよきあしきはいかに母親の

おなじはらから生れたれども

常に作病をせし人を見て

久清

かたなりと名にこそたゝめ作病を

年経ておこす人の身上

題しらす 重宣

焼亡よふごしといへば女房の

またぐらのひも御用心あれ

雄長老

剃おとしかしら虱はなきとても

臍より下はいかに比丘尼

疎からぬ人のいさゝかの事に
遠ざかりけるによりて遣しけ
る

頼智

挨拶のかはらでともにかたれかし
たとひ腹たつ事はありとも

双六すきなる人のさわる事あ
りて久しくまからぬなど消息
しける返事

信海

雙六のさいくござれでつくりと
ゐすはる床ををりはしつゝも

かたらふ事あればあすごひた
まへと申遣しける人のまかる
べしといひて後のあしたごみ
にさはる事はべりてえまから
すと消息しける返事に

行風

いかにねて起る朝のへんがへぞ
昨日はこふと今日はこまひと

出雲國すさの里の百姓ら訴の

事ありて京へのぼり評定所に

ては是非ともに事の斷りたい
しからずかれがわざよこれが
わざよと味方のうちみだれあ
ひにけるをみて

信海

壁土のすさはら出す百姓の

とがをたがひに塗合ぞする

増上寺万部の塙にて所化ども
いさかひし出て沙汰に及ぶべ
きなど取さた有ける時よめる

讀人しらす

公事にせば若もかたうか詞ろん

喧嘩の門一本たか僧のたゝくは

ざれたる漸にて人の機嫌なほ
りければ

みどく

そらさずに人の機嫌をとりけるぞ

是逸物のたかばなしかな

宇多院よりおはれてひとかた
きになりける人のもとに

伊勢

のけざまに君におはれし我なれや

せなか合せに人のなるらん

題しらす 讀人しらす

父母が引木のごとくゆがみなば

茶臼となりて子よまはれかし

友知

借錢の淵ほごあるをたいらかに

なせるは金の砂子也けり

堂上と地下の人と相論の事あ

りしに織田氏右馬助といふも

の堂上の人によしありけるに

や非分なるをよくだりなしい

ひける事たびくなりければ

よめる 平信長

錢轡はめられたるか右馬助

人畜生と是をいふらん

女院御所の御庭狭きとて曉月

の屋敷をとりて御前の庭ひろ

び給ふ時に

曉月

女院の御前のひろくなる事は

曉月坊が私地のいるゆゑ

曉月を近江國蒲生氏なる人い

たはりて寺地に田地なごそへ

おかれけるにとかく我まゝの

たび重りければ處をたちのき

給へとこすきける時によめる

曉月

費長鶴張博浮木達磨芦

曉月坊はこすきにぞのる

述懷 未得

物毎にあらばありのみなしとても

もとめはせじな世はなり次第

休甫

世にくへぬ氣は鈍栗のくりくど

ぐりめき渡るこのみなりけり

行風

何もいらぬ身形乍らに今日の世を

へちまの皮の團ぶくろかな

入安

世間は拍子ちがひになり果て

舌鼓のみうつゝなの身や

題しらす 玄室

はめ謗る人事きかじと手をあげて

耳をふたげば結句かしまし

玄康

中折や奉書楳原賣りきれど

貧報がみはかふ人ぞなき

世にうき事のみ重りける折か

ら同じ心なる人の許へ申遣し

ける 正定

そちとなら油煙とも身をなし果む

思ひすゝりのすみあひた世に

題しらす 賴智

塵はこり積るはうたて煩腦の

病にとしをふる疊かな

清生といふ人に米をかしける

をこひにやるどて

讀人しらす

貸米のくべき躰なりせいしやうの

お氣のふるまひ兼てしるしも

返し

侘ぬれば身にかり米の根をたえて

こふ人あらばいなんぞ思ふ

ある人の取次にて鳥目かりけ

るをやがてもたせ遣はしかへ

したべといひやりければおそ

くてもくるしからずとてどり

つぎの人うちすてゝおかれけ

ればよみて遣しける

行安

おあしをば返してたべと申やる

かひもなにはのうらみ存する

宗恒

今こそはげ我もむかしは男よく

さかやき際もありこしものを

寄弓述懷 淡路守宗増

武官とてせなかにしこを老の身の

腰に梓のゆみを張りけり

夢想國師

老ぬれば腰にあづさの弓をはり

しばのいる矢にしゝぞ失ける

題しらす

満永

本歌 歩みての後くたびるゝ老が身も

昔は道を苦にせざりけり

智元

本語 長命をのぞむは耻をまつがねの

ふしさへともす徳は有けり

氣の毒なる折からかしらを撫

てよめる

信海

百八のぼんのくぼまではげにけり

一本た

なごすりきりし哀れ珠數の身

題しらす

讀人しらす

明暮の勤めにすれど珠數の緒の

まだきれがたき煩腦の道

元安

我心牛のふぐりもさだまらず

世をいとはふと言てぶらゝ

從四位源忠次

着る物はとても角てもよごれぬる

こゝろのあかの洗濯もがな

宗祇法師

物毎にたらぬゝと思ふこそ

まよふ心のつくり病ひよ

百首歌の中に懷舊 入安

力もち荷もち歩もちつよかりし

その腰肩になすよしもかな

貞徳

雀ほごちいさく老の身はなれど

うひたる人は踊わすれぬ

長老

祖父祖母非うば非祖父こゝろく

死なずに居ては何をくはせん

蓮生法師

いにしへのよろひに替る紙子さへ

風のいる矢は通さざりけり

未得

茶をのめばねられぬ老の初むかし

大むかしまで思ふ夜すから

満永

本歌 色も香も同じむかしの茶ならめど

たてふる人ぞ改りける

大礪の虎石を見て

讀人しらす

大礪の虎がかたちを残すなる

石を見るにもおもひ物かな

和田酒盛をよめる 正成

盃を和田へどさゝば大いそに

名をとらごせの鼻やそがどの

寐耳に水の入といふ世話を

正舍

藤川をやがて平家の落武者は

ね耳に入りし水どりの音

元暦の始八嶋の軍に沖の舟よ

り扇をたてけるを見て義經奈

須與一に仰せて射落させける

時に 讀人しらす

扇をば海の水くづとなすのどの

弓の上手はいちどぞきく

頼朝卿陸奥退治の時津久毛橋

といふ所にて戦ひに利をえた

まひ降人あまたありける時に
よめる 景高

陸奥の勢は味方に津久毛橋

渡してかけむ泰衡か首

軍に利をえたまひ武田四郎勝

頼父子の首實檢の時

平信長

勝頼と名乗武田のかひもなし

軍にまけてしなのなければ

敦盛熊谷をよめる 宗也

敦盛とかの直實かふるまひは

日本一の谷どこそきけ

屈原 久清

濁る水であらはぬ足のくつげんに

まさるべきらの漁父の智恵哉

貨狄

一葉のあふなき舟にのりそめし

貨狄はさても不敵なりけり

巢父

世をうしどひつこみ思案する人は

ト 養

さうふのわるき生れつきかな

孔子 雄長老

顔淵にへうたんをこそかりつらめ

海にうかばんと思ふ孔子は

俊成 行安

なんばうの沙彌を経てかは和歌の道の

尺あみだとは成たまひけん

蟬丸 久清

琵琶ともにひき籠ります蟬丸は

不自由なめにあふ坂の山

紀貫之が雨により田簀の鳥と

よめるを思ひ出て

本歌 藤原兼定卿

雨により田簀の鳥の見物に

笠をめさいでぬれしふらゆき

庚申 智元

色相を見てみぬ人は悪心を

さる眼とぞいふべかりける

題しらす 雲居和尚

さいはひは願ふに來り禍は

慎む門にいらぬとぞきく

哀傷

昨日身まかりし人を壺に入て

埋みける時 信海

きのふ死で壺に入たる亡者こそ

今日は實のはつ昔しなれ

百首歌の中に 長雄老

死るとていこそぬ事をしだいたは

そもたれ人の所行無常ぞ

あひしれる僧の遷化の葬にま

かりけれぞおそくてえあはざ

りければ 行安

本歌 くわら衣きつゝなれにし僧なれば

はるゝきぬるだびをしぞ思ふ

猫のいたみの中に 休甫

舟ならで棹のうたてやはりてひく

なぐさみせん駒のかはゆき

大坂に又太夫といふ舞太夫あ

りしが臨終によみ侍るうた

來世にて又太夫ごやなりぬべき

死ぬる時にもめこそまひく

臨終に碁打なりければ

算砂

碁なりせばこうを立ても生べきに

死ぬる道には手もなかりけり

誹諧師なれば臨終に

宗朋

ほつくりと死なば脇より火を付て

跡はいかいになしてたまはれ

背に癩瘡の出來て身まかる時

よめる 宗鑑

宗鑑はごちへと人のごふならば

ちごようありてあの世へと言へ

七十二歳にて終るとて

良忠

今日よりは算用いらす人間の

八く七十二にて皆済

桶工身まかりとてよめる

よみ人不知

月日くれ身はふる桶の底ぬけぬ

わがあらばこそゆひも直さめ

題しらす 治貞

我死なば酒屋の瓶のしたにをけ

われて醗れて若しかゝるかに

五歳と當歳ごの子うしなひし

人の許によみて遣しける

頼智

本歌
世間は夢か現かいつゝ子も

うみおとす子も有てなければ

無常の心を 貞徳

生るゝも死ぬるも人はおなじこと

腹より出て野はらへぞ入る

未得

世中を思へばゆめかうつゝらが

八万歳もなのみなりけり

五輪を見てよめる

淡路守宗増

なくなるもまだ執心は少ばかり

残るみるめは五輪こそあれ

市原野小町か石塔をみてよめ

本歌
る 信海

色見えてうつらふ物は石塔の

人の名がきの墨にぞ有ける

題しらす 未得

彼岸にいたらん時の帆柱や

舟岡山にたてる卒都婆木

百首歌の中に無常を

入安

たれも皆諸行無常や極上を

むくる茶湯のあはれ世の中

古今夷曲集卷第十

釋教

題しらす

聖德太子御歌

照月のなかなる物の大弓は

あづちにたちて的にあたらず

荒鐵の土の始にと言二句此

上に有也

秀吉公の御時信濃國善光寺の

如來を東山に移さるべきとて

本田氏善光といふものの如來を

守護し上りける時に

讀人しらす

つみをきる彌陀の利劔は是なれや

栗田口より出るよしみつ

嵯峨の祇王が庵の尼留守なる

時まかりて

貞徳

妓王妓女とむたる柴のあみ戸には

佛ばかりぞおはしましたる

佛になればいかほどの長ぞと
不思議する人のあれば

せいたかやこがら童子と聞く時は

佛のたけはふごう明王

芳野の花供をよめる

定行

散錢をまゐらせたればやがて又

たばるよしの餅配りかな

初瀬詣に山たちにあひけるも

本歌
のよみけるうた

うかりける人は初瀬の山たちよ

はがしませとは參らぬものを

石山へまうづる道荒板の薬師

堂にやすらひてよめる

貞室

石山へ行かち人は此堂に

あらいたやとて足も休むる

播磨のくにのもの世を厭ひて

出るとて女の許へ申遣しける

讀人しらす

本歌

昨日まで袴のこしをはりまがた
今日はしかまのかちん十徳

八十にあまりても堅固なる人

の挨拶に 満永

よはみなくかたじないしな禪門は

まだ幾年かへんごつをきん

釋迦の木像京より田舎へ移從

の供養ありける座にて

雅珍

都よりくだらせ給ふ木像を

みれば教主の如來なりけり

或寺の内陣に繪かける折から

狂歌所望ありければ

成安

寫し繪をみてらの内の庄嚴は

こむじやう後生緑青のいろ

題しらす 未得

祐成の別れをなげきあまになる

日本の虎は毛をもをします

百首歌の中に 玄康

灯びをかゝげて夜半にする護摩の
油さゝんとつゝをふる寺

入 安

久米寺やうば塞いひのねばり有て

今も行ふ法のひとくれ

誓願寺の如來は日に一度づゝ

西方極樂へ通ひ給ふと世俗言

へば 読人しらす

西方へ日々に通ふと聞からに

今もあみだの留主にてやある

光明寺張籠の御影の前にて念

佛申せるをみて 器 音

くる珠數の弟子も師匠も念佛に

かねをはりこの御影堂かな

題しらす 正 好

法問を聞はご奥のふかければ

口からうかぶ念佛申さん

淨土宗日中のせめ念佛を

宗 恒

貴賤群集法の庭とて市なせる

午のときゝせめ念佛かな

蛸薬師に宿願かけゝるに利生

延引にて年久しく詣てよめる

近 吉

歩みはこび珠數する事の年をへば

手足もたこになさんお薬師

京のなだやといふ者發心して

大きな鐘たゝき大笠きて京

田舎ありくをみてよめる

道 仲

笠鐘もすてゝぼだいを悟れかし

生木に灘やきの毒な駄

小歌百八なごすきけるものゝ

俄に發心しけれども念佛も世

をぬめりぶしにて殊勝にもな

かりければ 正 定

尺八のあなうの世やといとひても

申す念佛はなほ小歌ぶし

題しらす 夏 虫

一本教こそ 皆人はしやかむにならめ西方の

みだれこゝろで申す念佛

實 久

身の塵を吸とらせんとだまし手に

琥珀の玉の珠數やつまくる

川渡の布袋の繪の賛に

澤庵和尚

にこゝと笑ふ袋のをがきれて

水にうきよはてんばちのかは

題しらす 行 好

皆人のもし成佛をするならば

地獄の鬼やかつへ死なまし

世の中はノ麻へちまの皮と思へど人

のいへる返事に 信 海

心にはへちまの皮をたやすなよ

浮世のあかをおとさんがため

題しらす 權大僧都頼慶

海に住むたこ入道もごは言ん

山のむかでが知つた生死と

淨 久

聖徳の後世を願へとおしやりしを

守屋はあべこめをひろげたり

江州長命寺にてよめる

近吉

何番の札所と問へば長命寺

順禮うたの文字と數とや

題しらす 器音

邪見なる人の心の鬼迄も

やわらぎにける歌念佛かな

彼岸團子をよめる 未得

佛にも彼岸櫻の花よりは

團子と思ふたむけなるべし

本歌 流灌頂をよめる 保友

行水に數かく經木はかなきか

あさは涙もながれ灌頂

太西坊兩界曼荼羅の開眼たの

まれけれど不屑なりとて辭退

せしをしゐて申されければ供

養して遣しける次でに信海

兩界のまんだらと辭議するは

なにのかひげんなき身なればぞ

難産の時大般若轉讀によて親

子ともに事故なかりければ導

師の許へあしにそへて

讀人しらす

大般若はらみ女の祈禱者に

六百くわんの布施をこそやれ

圓通寺といふ僧舊忌に三日つ

けて請しける人のもとにて

昌長

一昨日もきのふも今日も齋に布施

やるは三世のゑんつうじたり

題しらす 正好

煩腦のあかによごれし花のぼし

とぎあらへかしのりの次手に

讀人しらす

恐るべし用心もせでくゆるなよ

火事に盜人さては後の世

來焉

横に車押すとも人の法をえは

逆縁なからゆかん極らく

寸行者の許へ佛事にそへ遣し

ける 正之

本歌 君ならでたれかはなめむ法味をば

あまいもすいもしる人ぞしる

圓融院の御時慈惠僧正内にま

ゐり給ひ女に五の障の經文い

とたうとく談じたまふ折から

御簾の内より或女房の申出さ

れけるうた

有漏地方むろちに通ふ釋迦だにも

羅睺羅が母は有とこそきけ

返し 僧正慈惠

いなやいなむきても見べき毬栗の

えめば一度落もこそせめ

西をあさまになして小陽せ

られけるをある人の見て彌陀

を念ずる行者の西方をけがせ

るはいかにぞやといへればよ

める 安養尼

此尼が西方けがす科あらば

めし捕たまへ彌陀の御國へ

蜆子繪によめる 澤庵和尚

いかばかり蝦をどり喰ふ報あらば

終には老の腰やかゝまん

聖徳太子胎内より持出たまふ

御舍利を貳歳の春手の内より

出させたまふ折しもわざとな

らず鐘七ツつきぬ其音雙調な

りとなれば他國のむかしも思

ひ合されてよめる

和泉式部

南無佛の御舍利を出す七ツ鐘

むかしもさぞな今も雙調

父母の子を思ふに越えて佛は

衆生を哀れみたまへど其御教

にたがふ人のみなるをおもひ

てよめる 讀人しらす

父はうち母はいだきてにげぬるを

誠の杖と子やおもふらん

尼ヶ崎にて説法の時俄に雨降

出たり荒たる寺にて只漏りに

もりければ聴衆のものごもさ

わぐを見てよめる

權大僧都日與

とつとその昔も今もふる雨の

もりやは法のさまたげぞかし

末法になりて衆僧の信うすき

をおもひてよめる

澤庵和尚

我法の花のいろはのちりぬるを

なげくに袖のゑひもせず京

題しらす よみ人しらす

下手の鞠今の禪宗のなまざどり

ありこはいへどあたらざり覺

道元和尚

千佛の出世ありともすくはじな

我ご妄業このむ人の身

發心して程なく破戒なるを見

源爲仲卿

髪それぞ直ならぬ氣はなまなりな

道心邪どや人のいふらん

題しらす 僧正公助

あはれなり袈裟衣のみかゝやきて

まつくらやみの僧の心は

雲居和尚

今人の因果菩提を信せぬは

破戒の比丘の仕業なりけり

惡比丘の其身のどがはさて置ぬ

人の道心やぶるうらめし

焰王の神通天眼しらすして

檀那たらせる僧の愚かさ

十惡の歌の中に綺語

行風

輕薄の詞に花を咲せつゝ

とれる金は何まいすぞや

同し中に惡口

いきしちにひみ井リいどく理をも

非にいひなすや只口のしれもの

五戒の歌の中に殺生

戒は只貝がらになし破りつゝ

躬をとりくらふ僧よ僧かは

同じ中に邪淫

色好む僧は佛の戒法を

かへり法界悋氣とや見る

知度

本歌
寺すてふ我名ははつと立にけり

大黒はようかくし置しが

同じ中に酤酒 行風

酒盛し手がはちかみとなるならば

それをねぶりて飲んすきもの

大圓鏡智のこゝろを

むさし鑑さすがにかけて現世から

後世をもたのむ馬頭觀音

雪の降る日引導せられし時鍬

の先ぬけゝるによめる

一休和尚

三界のくはぬけはてゝ今こそは

淨土の道にゆきぞかゝれる

題しらす 法然上人

口にある南無阿みだぶの味ひを

自力の人は喰ひしらぬなり

佛道にたゞ投げ入れてをけ實

彌陀の淨土をかね倉にして

願信法師

名にしおはゞ救せたまへあみだ佛

生死の海にしづむ石龜

道明

たのもしな難喉妄想をもらさずも

すくふあみだの誓ひある世は

未得

押並て釋迦の鍵の手つかひなば

つるぎの山のせめや遁れん

六十三歳にて終りをさる時よ

める 休甫

我齡とはゞ七九の鐘木杖

かねに持たでもなむ阿彌陀佛

薦僧 みとく

祖師の名のふけといふより尺八の

竹のよをつぐ今の薦僧

題しらす 勝可

くうに有てくふて見られぬ望月の

その味ひを誰にとはまし

發心の日より行住座臥西向て

のみありけり或時東へ下ると

て道につかれうまにのるにう

しろざまにのりながら詠る

蓮生法師

淨土にも剛の者とや沙汰すらん

西にむかひて後ろ見せねば

題しらす 葦葉

西方を目當にすゝのたまゝも

念佛は樂のたねがしまなり

一圃

あひづかや佛を見るとらうそくの

たちまちはるゝ業障の闇

平等性智の心を 三哲

朝夕のお寺まゐりのはり小袖

のりのちからも有難くなる

智元

一心の水にかなけのある人は

あみだぶくどあくたれてとれ

平時頼朝臣

此世にて米のすこしも持たきは

うへたる人ど寸行者のため

佛法修行を疊によせて

読人しらす

慈悲おもく道の中籠智恵のへり

和歌のうらごも才覺の糸

疊師の後世いかにしてかたす

かり侍るべきと問ひける返し

に 權大僧都光宥

念佛をさしては申おかすとも

功たゝみなば西へ行くべき

紺搔に佛道修しえたるありと

聞て或人行て事の理を尋ねけ

れば返事に 読人しらす

板を鐘へらを鐘木にとりなして

かたのごとくにのり教へまし

釋教魚といふことを

長好

佛にはまだなまなりの魚の鮓

菩薩界までをしかりたや

百首の歌の中に釋教

入安

いもが子に限りしもせじ汁のみを

しやくしと成て救ひあげばや

題しらす 読人しらす

書像にも木像にもよく祈る身は

病難死苦の遁れやはある

伊呂波歌の中に 道元和尚

拈花をば八万人にしめせども

迦葉ひとりぞ破顔微笑す

佛祖師經律論をからずして

直に覺るを禪僧といふ

はげまして自己の佛を悟らずば

六道輪廻たれか遁れむ

努力して今わがぬしを覺らずは

奈落の苦をばたれか救はん

えり嫌ふ二心ある人の身の

なすことは皆地獄てんごう

虎頭虎尾収むる時の勢ひは

金剛力もおよばざりけり

手をあぐも足をのぶるも自由にて

見聞覺知するは是たぞ

二と一の間底に有物の

名字を何とつけて呼ぶべき

肉身をかへす佛になることは

只我家の座禪なりけり

十方の佛ばさつとわけ置くも

皆唯識の所用なりけり

不去不來有無善惡にとゞまらぬ

人を自在の佛とは言ふ

題しらす 貞清親王

寒そうななりしんぐむの行者かな

こぼれる水もあびらうんけん

寛永の頃聖護院道晃法親王入

本歌 峯の時よめる 源重秀朝臣

山中はとても籠にはのられじと

宮もわらじをはきて峯入

入峯をよみはべりし

行風

峰入や或は野に臥山臥の

難行苦行やせこけの行

源俊治

笈頭巾かけ出三十六度まで

峰に入るもぞ二世の願行

よみ人しらす

後の世の爲とおもはひ慈悲心に

なさをかけて他を利益せよ

雲居和尚

本來は無心無相の眞佛も

五欲にひかれ凡夫とぞなる

戒たもち座禪念佛つとめても

心あしきは遣地獄業

何事も前世の業といふ人の

菩提つとめぬ是ぞ猶愚痴

苦も樂も現世のことは一刹那

迷へば未來流轉永劫

貴賤智愚僧俗男女別なれば

菩提の修行分に應せよ

一念の慈悲眞實の種となりて

九品の蓮華ひらきこそせめ

夢窓國師

寺を建堂をたてたる功德より

たい常つねの慈悲や増しなん

藥草喻品の心を 淨久

自然降る雨を千百無量なる

きいにうくるやをのが分際

修行門の心を 行風

三毒に酔てふらめく病には

釋迦の金言妙藥のよし

七世父母 道元和尙

七世すぎ其父母をたづぬれば

あなたは若く我は老たり

題しらす 方救

世に人の南無阿彌陀佛の口眞似を

似せても似ぬは眞實の心

平時頼朝臣

角あれば物のかゝりてむづかしや

心よこゝろまろくこそせよ

隆覺禪師

をのづから角一ツあれ人ごゝろ

あまり丸きはころび安きに

生ひては必ず死ぬる習ひとし

つても知らぬや富るは色にふ

けり酒宴遊興にてあたらず月日

を暮し貧しきは朝夕むざとむ

さばるのみならば來世とやら

んにてたとひ兵庫のものとい

ふとも彼煩魔王殿が御免ある

まじきをおもへど童部の方へ

遣し侍りし 行風

後の世も知でうつかりへうたんと

なりさがるべき身を顧みよ

妙觀察智の心を 道元和尙

圓からず又方ならず長短も

五色にもなき我こゝろかな

題しらす 理西

極樂の金座敷は尻ひえん

只行くべきは地獄釜底

道 寛

戀路よりまつすぐに入涅槃こそ

實に煩惱は即菩提なれ

雲居和尚

儒釋道みつのをしへの別ならず

善に善報惡に惡はう

名利是非貧富生死を忘れなば

僧俗ともに即心即佛

妙にして神あるものは心かな

天地にわたり微塵にも入る

變化所執の理を 澤庵和尚

一心に念に起せばさまなくに

變化のすがたうくる也けり

題しらす 弘法大師

我胸にふる盜人を持たながら

菩提の種に心ゆるすな

胎臟界の心を 行 風

我胸に法の智水をたへなば

瞋恚の炎もえもあがらし

經 讀人しらす

經といふ其字に五時の糸はへて

おり出す布は四教八教

佛心宗の寺にて菓子を出して

是に狂歌ある時 智 元

出來たるこのみのもとを觀すれば

しやうじ離れし柘榴つぶ哉

煩惱即菩提生死即涅槃の心を

良恕法親王

煩なふの躰も菩提の證據には

澁柿を見よあまぼしとなる

有空不二の心を

平時頼朝臣

ありのみとなしといふ名は變れ共

くふに二ツの味ひはなし

題しらす よみ人しらす

山里の折かけ垣のからす瓜

うむとはすれごくふ人もなし

初發心時便成正覺といふ經文

の心を 讀人しらす

須彌山に腰打かけて一天を

笠にきれども耳は隠れず

白骨の名號を書て其賛に

曉阿上人

人間のをはりを見れば白骨の

肉をはなるゝ南無阿彌陀佛

婆子燒庵の意如何といふ句の

心を 夢窓國師

婆婆でこそ男女の差別あれ

骨となりては變らざりけり

即心即佛の心を 道元和尚

一心の門開くれば法界の

草木國土はとけなりけり

利劍にて皆截つくしみる時は

万象森羅古佛なりけり

自づから求めず捨すさし置かず

自由自在はをのが三昧

本來意をよめる 夢窓國師

山賤が白木の合子そのまゝに

うるし附ねばはげ色もなし

弘法大師入定の年經て後或僧

高野に詣て御廟のわたりにて
よめる歌

空海は虚空の定をいざしらで

心せまくも穴へいるかな

一本かくよみ

かゝりければ大師にや有けん
香衣の僧忽然と出きましての
返し

空海は虚空の定に入ものを

心せまくも穴と見るかな

水鑑の中に毒藥反して藥とな
れば罪の重きはかへりて佛と
やならんと書てよめる

一休和尚

作り置く罪の須彌程あるなれば

煩魔の帳につけ所なし

鎌倉追罰の勅を請て出たゝれ
ける時餞別に讀て遣しける

夢窓國師

餞別に何をがなとおもへども

本來空の一物もなし

返し

源尊氏

一物もなきをたまはる心こそ

本來くうの法味也けれ

題しらす

讀人しらす

我戀は障子のひきて嶺の松

火灯袋にうぐひすの聲

道元和尚

湊にはけさ鉢袋猫の皮

花のさかりに太太刀の鞘

達磨の繪に

一休和尚

悟りぬるきやつめが身とて何か有

へんてつもなき豁骨ちほねかな

水鏡の中に

うそをつき地獄へ落るものならば

なきこと作る釋迦いかせん

をのれさへあつけ拂はぬ不動めが

惡魔降伏無用なりけり

題しらす

讀人しらす

尺八の聲のあるじを尋ねれば

地水火風の四大なりけり

夢窓國師

西向にせなかをくふと觀すれば

東しらみに夜は明にけり

讀人しらす

あら樂や虚空を家と住なして

心にかゝる造作もなし

一休和尚

たそにたそをくにたそたそにたそ

たそにたそとて何も無き哉

眠れる布袋の畫の賛に

比丘一糸

手を伸てゆるりとぬるか布袋ごの

袋のうちに何もなければ

題しらす

弘法大師

今ははや後世の勤めもせざりけり

阿吽の二字のあるに任せて

水鑑の中に

一休和尚

万法をみる人ごこの喉かはき

思はで水を一口にのむ

なき跡のしるしに石がなるならば

五輪の代に茶臼されかし

いろは歌の中に 道元和尙

明々三五夜半の一月を

あまねくわかつ千江の水

本來意を問とてよみて遣し侍

りける 智蘊法師

直なるもゆかめる川も川は川

佛も堂も同じ木のきれ

返し 一休和尚

直なるもゆかめる川も川は川

佛も下駄も同じ木のきれ

題しらす 讀人しらす

座禪する衾の下のやせ虱

くふと思ふも障り也けり

雲居和尚

物毎に執着せざる心こそ

無相無念の無住也けれ

達磨の畫賛に 藤原光廣卿

西來意我だにしらぬ達磨殿

まして他人に問ふは僻こと

いろはの歌の中に

道元法師

十ぶんにといたりて見れば何もなし

佛といひて疵を附けり

題しらす

得道は有けるものを隣なる

祖父がさげた火打袋に

万法一心の心を 智元

一乗も二乗も同じのり汁の

齋と非時との替りばかりよ

有佛法有世法といふ謠の詞を

題にてよめる 澤庵和尚

佛法と世法は人の身と心

一ツかけてもたゝぬ物なり

借用の地水火風返辨申今月今

日といふ前書にてよめるうた

一休和尚

かりをきし五つの物を四つかへし

本來空に今ぞおもむく

成所作智の心を 空也上人

念佛は野にも山にも申しをけ

犬も鼠も喰はぬものなり

弘重

聞えてはにんにく慈悲の理りに

目に椽はごな涙こぼるゝ

隨喜功德品の心を 貞因

法華經と鳴鶯のこゑ迄も

耳の功德に聞ぞたふとき

題しらす 宣相

浮世ぞと思ひきつたる尺八を

吹ならすこそ生佛なれ

智元

極樂にくふほごあれば他の物を

むさばらぬこそ生佛なれ

法然上人

有がたや障りのおほき女人をば

彌陀ひとりこそ助けましませ

蓮如上人

南無といふ其ふた文字に花咲て

あみだ佛とみはなりにけり

布袋 畫の賛に 澤庵和尚

この袋あけて見たれば何もなし

何もなきこそ何もりけなれ

常不輕品の心をよめる

雲居和尚

比丘はたゞ万事はいらず常不輕

菩薩の行ぞ殊勝ならまし

題しらす

西方の本來空に往生し

無量壽佛とならん目出度き

無我の心をよめる 三 哲

我といふ其えせものを捨てこそ

釋迦と阿彌陀の跡もつぐなれ

題しらす

苦を樂に爲替なしかへよとて釋迦により

世に出たまふ事ぞうれしき

持戒 行 風

六慾のあかを拂へと釋迦無二の

五かいはうこそ忝なけれ

三寶

一心に二世を思はゞ三寶の

四種を受得て五慾忘れよ

法界勝性智の心を

讀人しらす

父母にかりてぞきたる皮衣

破れて後はもとの塊かたまり

空は貌月日はまなこ風は息

山野海川我身なりけり

作者之目錄

聖德太子一首

親王

伏見殿
中務卿邦房親王一首

八條殿

式部卿智仁親王一首

伏見殿
兵部卿貞清親王三首

奇連院殿
尊朝法親王一首

妙法院殿

常胤法親王一首

曼珠院殿

良恕法親王一首

青蓮院殿

尊純法親王一首

近衛殿

前關白左大臣信尋公二首

公卿

庭田殿

權大納言正二位源朝臣重保一首
中山殿
權大納言正二位藤原朝臣親綱一首

烏丸殿

權大納言正二位藤原朝臣光廣九首

飛鳥井殿

權大納言正二位藤原朝臣雅章一首

山科殿

大納言藤原朝臣言總一首

庭田殿

正二位權中納言源朝臣重通一首

京極

權中納言藤原朝臣定家二首

土佐一條殿

權中納言藤原朝臣兼定一首

東坊城殿

權中納言菅原朝臣盛長一首

水無瀬殿

中納言藤原朝臣氏成一首

六條殿

參議源朝臣有純一首

非參議

唐橋殿

正二位菅原在通一首

五辻殿

左兵衛佐正三位源爲仲一首

雲客

庭田殿

中將源重秀朝臣二首

同

中將源雅純朝臣三首

富小路殿

中務大丞從五位秀直一首

薄殿

左衛門佐從五位橘諸光一首

竹內殿

源俊治一首

武家

太閤秀吉公一首

贈太政大臣尊氏公一首

安土

內大臣信長公二首

安藝

中納言大江輝元一首

仙臺

中納言藤原政宗一首

長府

參議大江秀元一首

小倉

參議源忠興一首

宇和島

少將藤原秀宗一首

越前

左衛門督藤原義景一首

肥後

侍從從四位源光尙一首

姫路

從四位源忠次一首

鎌倉

正五位相模守平時賴五首

地下

猿丸大夫一首

淡路守宗增三十五首

南部氏

遠江守源經行一首

內藤氏

右衛門尉藤原武員一首

櫻井氏

中務丞基佐一首

小堀氏

遠江守一政二首

小浜氏

民部少輔嘉隆十二首

梶原氏

平次左衛門尉景高一首

女房

伊勢二首

和泉式部一首

安養尼一首

宮川尼一首

大坂

如風尼一首

夏虫妻一首

僧官

細河

二位法印玄旨十五首

德壽院

法印玄以一首

東山

長嘯子四首

法眼紹巴一首

朝倉

宗順法師一首

牡丹花二首

總川

智蘊法師一首

宗祇法師一首

天滿森

法橋由巳三首

僧天台宗

前大僧正慈圓二首前大僧正尊應一首

僧正慈惠一首

權大僧都心敬一首

定法寺

僧正公助一首

西行上人四首

曉月四首

眞言宗

弘法大師三首

高野山

權大僧都賴慶一首

高野山

權大僧都光宥二首應其上人一首

念佛行者

空也上人一首

遊行

曉阿上人一首

佛心宗

天龍開山

夢窓國師六首

建長開山

隆覺大禪師一首

永平開山

道元和尙二十一首

松島開山

法心上人一首

一休和尙十一首

澤菴和尙八首

雲居和尙十七首

寒山寺

雄長老三十二首

永原寺

比丘一糸一首

瑞南和尙一首

淨土宗

法然上人三首

天性寺

白譽上人一首

蓮生法師二首

法藏院

願信法師一首

深養寺

正愚法師一首

遠里小野

弘誓法師一首

本願寺

蓮如上人一首

當法華宗

日蓮上人一首

權大僧都日與一首

敦賀

日能上人一首

山城京井所々

順阿一首

本因坊

算砂一首

戴內氏

理西二首

元理一首

福安一首

長好一首

松永氏

貞德五十二首

安原氏

貞室四首

北村氏

季吟二首

松江氏

重頼三首

永明一首

泉齋一首

祇園住

春丸一首

賀茂住僧

伏見住栗田氏

庭住立川田氏

八幡山親本坊

同上賀茂坊

山崎

宗鑑一首

土川氏

元行一首

大和

法隆寺

歌慶二首

管尾住不動院

同所地藏院

同所井上氏

勝可二首

同所中川氏

片岡住松井氏

長樂住伊藤氏

夏虫二首

田原住西井氏

下山付住僧

河内

行好一首

葦葉一首

寄井住僧

元安八首

通去寺

白木住柴田氏

春一住日中氏

長尊一首

同岸野氏

同岸野氏

弘重七首

義綱二首

唯正二首

同吉村氏

柏原住三田氏

淨久八首

三政二首

種好二首

松永住小野氏

宜齋一首

同所同氏

同暮松氏

和泉堺

由貞一首

高壽一首

連歌師

宗訊一首

同上

宗珀一首

千氏
宗易一首

松井氏
宗吟一首

玉手氏
貞直一首

良忠一首

少隣一首

岩井氏
教一二六首

正法寺
成安三首

岩井氏
正長三首

大津住高橋氏
爲盛一首

攝州大坂井所々

御菓子所
山城掾貞因四首

宇野氏
淨治七首

黃栗會下
道明八首

大善寺
智短一首

淨久寺
一圃十首

桑川氏
道信一首

三宅氏
獨友一首

戶齋
休甫八首

道仲一首

夕庵
言當三首

赤池氏
三哲六首

自影庵
正繼二首

澤田氏
玄貞一首

平山氏
方救三首

松山氏
玖也一首

若林氏
昌長一首

樹木氏
宣相三首

杉本氏
玄室一首

加納氏
智元六首

玖也
道寬二首

白江氏
白言一首

二笑二首

伊勢村氏
次良一首

塚口
安明二首

梶山氏
保友廿四首

富永氏
燕石一首

如真一首

松江氏
近吉十一首

青藤氏
滿永廿首

伊勢村氏
重安一首

同上
正定七首

西川氏
重故三首

井上氏
宗恒十三首

平山氏
雅珍三首

同上
直之一首

松井氏
重宣一首

井上氏
宗鋪四首

深江氏
伊貞二首

中堀氏
初知一首

同上
器音八首

長瀬氏
常林二首

鳴
久清四十一首

友以二首

政之一首

長谷氏
昌治一首

富田氏
正信八首

角田氏
路春三首

吉田氏
恒貞二首

落氏
忠昌一首

利清二首

中嶋氏
正好二首

一根一首

氏家氏
忠精三首

立田氏
行景二首

同上
正景一首

生白庵
行風十三首

立田氏
行榮一首

朝倉氏
行順一首

高屋氏
春房四首

正木氏
可正一首

正直一首

野間氏
行安十七首

河內氏
利忠二首

八尾氏
宗俊一首

上下氏
知度二首

川副氏
親之一首

吉田氏
一賴一首

前村氏
休和一首

難波住
難波住

福嶋氏
春樹一首

又太夫一首

天宮住西山氏
宗因一首

同川崎坊
空存一首

同所
實久一首

天王寺住
以春一首

住吉住僧
可悅一首

尼崎住僧
自 equal 一首

池田庄松井氏
宗丹一首

參州

井上氏
旨治一首

相州

小田原岩手氏
宗也七首

武州江戶住

芳賀氏
治貞一首

德元十首

半井氏
卜養七首

高嶋氏
玄札一首

未得六十三首

下總

雅名氏
安繼一首

江州海津庄

小荒路住龍泉寺
來焉八首

播州姫路住

幸田氏
正舍一首

岡氏
一幸五首

防州

正成七首

鹽田氏
友知三首

山本氏
是急二首

紀州

宗朋八首

住所不知
讀人不知

入安寺二首
八十八首

鹿島御歌一首

右内出所古書目錄

舊事本紀一首

伊勢家集二首

山家集一首

盛衰記一首

山門百首二首

東鑑一首

砂石集一首

法華直談七首

撰擇直談二首

法然五十首教化歌二首

道元伊呂波歌十九首 夢窓法語歌九首

寔明寺百首五首

一休水鑑五首

信長記二首

餌指問答一首

雄長老百首廿六首

入安百首卅二首

由已百首三首

太閤記八首

澤庵謠詞題歌二首

竹齋雙紙三首

宗增兩度百首廿三首

同源氏卷題歌十二首

前狂歌集卅四首

仁勢物語十二首

雲居往生要歌十七首

貞徳百首二十首

鷹築汲集一首

玄康百首十七首

京童双紙一首

未得吾吟集 四十首

獨笑雙紙一首

黒谷上人傳一首

已上三十四部

惣歌數千五十餘首

作者數二百四十一人

此外鹿島明神御詠有

春秋の移り換るは世の常ながらは
からず大内山の花をよそに見なし
ふりぬる高津宮の月にむかひても
むかしをしのぶ心もなくいたづら
に幾年くをを送りむかへしか
るを里のわらはにもよほされて此
度夷曲の品をわかし侍るに猶和歌
をも書集めよとなれど難波津安積
山のふた歌をさへ心ひとつにさだ
めやらで人のさかしをろかなるを
いかがいはんといひはなつにもや
ますしゐて望めれば心ざしをむな
しうせじとてやつがれが綴りしを
これかれ書のべ侍りなかくいは
し商人のよきぬきたるたぐひと
も千鳥の鶴の毛衣かと我さへかた
はらいたき物からやんごとなきお
ほんかたことには道の長者なりし
前内府通村公など和歌なりと感じ
仰けるにぞまかせ侍る抑歌のさま

いひしれるこにはあらずこのみ
承應乙未元日

年月をかぞふるに冬の日春に

こえ春また冬にたてたる事いく

そとせなり今日たつ春のみさ

らぬにすべらぎの世をしらし

めしての春も今日ぞ始めなる

をおもひてよみはべりし

世に匂ふ日影もしるし天地の

さらにひらくる花の春かな

金龍寺にて花のちるをみてよ

み侍りし

入相の鐘よりさきもちりぬめり

花やあだなる世をいさむらん

瞿麥

かぞいろをさふ人あらば朝夕の

露と答へよなでしこの花

八月十五夜

星合のつらき別れを更におもふ

月の今夜の明方の空

大和に侍りし頃としの暮に雪

の降ければよみはべりし

榊葉に雪のしらゆふかく山の

神代おほゆる年の暮かな

旅行

朝なゆふな露になれ行く武藏野の

秋のはてしや霜の下くさ

戀歌のなかに

住吉のまつとはすれどあふ事の

遠里をのが身を恨みても

寄露無常

風渡る草葉にやどす露の身の

消すはありとも幾程の世ぞ

維摩經に須彌入芥子中といふ

文の心を

露のほる稻葉の末に色どめて

秋は田面の月のゆふ暮

高津汚道士 生白庵行風

寛文六丙午年仲夏吉旦

安田十兵衛開板

後撰夷曲集卷第一

春歌

春たつ日よめる

年徳の神のましやにて春きぬと

世にふれなすか鶯の聲 八宮御方

立春風

一番の風の手なみに霜氷

川下さして雑亂くくく 行風

かたくと結ぶ氷の瀧の糸を

春風の手やけふはとくらん 梵益

立春霞

青くたつ春も霞は黒色に

みる心根はおもしろき空 長廣

寛活な姿ならねどくる春は

人の目かごに立霞かな 貞富

明てけさ谷の戸口に引かくる

霞の衣をいはい暖簾 行重

春たてる霞の衣もゆつたりと

たけは廣く見ゆる武藏野 満永

立春日

はんのりとかすみ立田の庭鳥の

なき尾も永日のはじめ哉 夏蟲妻

霞をば先にたゝせてしづくと

きたりたまへる春の日足か 資之

立春水

嘉例をもひきつるべとて年男

桶のたがはずくめる若水 満永

立春梅

春たつといへの軒端のはなばしら

もぐるばかりに匂ふ梅が香 休甫

元日子の日なりければ

梅こよみ三百六十餘ヶ日も

子の日とひよりさく年の花 行風

元日

明ぬればござる物とはしりながら

猶めでたきはけふの年徳 行重

年徳の神のおまへの鰐口に

掛鯛をこそ見るべかりけれ 貞富

めでたしとむかふ年徳のかた衣や

はかまの紐もしめの内かな 政長

としとくを祝ふ御三木の肴には

數の子ともを居ならべつゝ 重次

年徳の棚をもちりにしつらへは

宿茶に似たるけふの大ふく 之時

年徳をどりくいはふ商人の

身に悦びやえ方なるらん 宗宣

書物にも繪に寫すにも年々に

若戎こそ不審かみなれ 永茂

むかへぬる心づからの若戎

繪空ごごは思はざりけり 似柳

めでたいをかけてぞおもふ戎棚 小舞謡

つつた所がおもしろいとは 元信

福の神たづねてござれ我宿は

春早々に松たてる門 淨久

毘沙門の前にしはるのしめ繩の

足は蛇にたふくさわら 本歌

足引の山草の葉のしだりほの

ながく／＼としたかざり繩哉 知度

きのふまで心の節季候なるも

けふは万歳らく／＼な春 宗範

古紙子しはすもくれて我宿に

春はたつよこ十文字かも 毎雄

或人へ挨拶に

硯箱のすみよかりける世の中は

とてもかくても筆始せよ

書初はあらたまつさかえ方なる

かみさままゐる年男より 良因

起もせずねもせて趣向案じては

春の物とて出すみつ物 清信

あたらしき小袖も今年みつ物の

連歌の折にきそ始せり 正信

春たつといはふばかりに蓬菜の

山も飾りてけさは出すらん 高故

くみかはす命ながえの屠蘇酒の

甘きやみつの春のこころわり 信安

三番之詞 さらち

さらば鈴を進せんかの屠蘇なれば

のむことの口あけにとて酒と茶と
たばここみつの春祝ふなり 満永
よべ迄のあはたゞしさを振り替て
今朝はゆらりと祝ふ大ふく 貞因
大ふくの茶の湯を好むしるしとて
門口にまでかざり炭かも
春のくる朝のはらはとしよりも
若きも餅や喰はじむらん 卜琴
出て見よ今は禮者も立ぬべし 本歌
春早々の門松の本 行豊
ものまうの聲とつれだちくる春は
これ／＼までも賑ひにけり 廣通
着しぬるかみしもの町門々を
折目たゞしく正月の禮 貞富
門松の下にかゝめる禮者多み 本歌
あしらひまさる人の數かも 高故
けふこそは正月なりと門へ出
こんつはね突遊ぶをさあい 良因

世話 寶引
人多き中にとりわけわらはへの

かつたばえ万果報引かも 友信
午年元日に
くる年の馬しるしかも春風の
霞の衣を吹ぬきにして 之時
虚空より霞をしめと見よかほに
年徳神へひく馬の年 行景
酉年元日に
果報までつきの始に大ふくの
茶の羽箒もどりのとしかな 満永
めでたしなめでたしと答ふ挨拶は
たれもあふむの鳥の正月 次木
謠初る聲も長閑にたつ春の
時の調子をどりのとし哉 顯興
戌年元日に
古びたるいろとはいへど鳴鳥の
跡追ふてきたいぬの年哉 義益
子年元日に
去年は稻荷今年はきつね祝ふてふ
盃さへもすこんこん／＼ 周光
丑年元日に

治りて民に病のなき御代は

太刀をもたぬ丑の年哉 顯興

ある人歳暮と年玉に納豆もて

來りけるを見しよめる

いかにねし春の朝の納豆ぞ

きのふは歳暮けふは年玉 貞四

題不知

さはひめのもし傾城をめさるなら

與太郎月や知音ならまし

新屋次郎兵衛といへるが年玉

に釣柿もてこしをみてよめる

初春のあたらしやなる年玉に

めしろ兵衛が柿をもてくる 信海

題不知

本歌
鏡餅いざ手にとりてかぶりみん

年へぬる身は齒もや弱ると 毎雄

五万歳樂

昔よりありきやうかりは一興や

京の町にて京の町うる 滿永

門にきてはねまひくるふ春駒の

まぐさなるらし手の内の米 行重

子日

としをへば牛引物にせん小松

けふも子日の御用木かな 本也

本ヤリ詞
年へては子日の松もえいやらや

あふやるぞへと袖もひかなん 貞富

よたれそつ子日の松をひかんとや

らむうゐのにし出る人々 一圃

水祝

諸詞
水祝ひかたをならべて門のまへ

井筒によるは丸はだかなり 太極

本歌
朝風にさくる氷のみづからも

かけに出るやはるの花聲 友定

春日

春立て日足すらりとながければ

のびあがつたとおもふ青陽 義文

霞

ゆたやかな霞の衣をそのまゝに

たちぬはできる山 神さま 行重

空はらをたつるか山のかしらをば

小歌詞
春霞こそ陽氣なりけれ 如木

面白やあの山見さい此山も

いたゞきつれてたつ霞かな 心笑

狂言詞
ゑいさらの聲も頼ます山にひくは

大物ならぬ霞なりけり 言千

小舞詞
横かすみ黒一文字に引ぬるは

定紋ならむ四方山の内 知秋

しやつはりさ春の霞の衣をも

けさきた山の腰つきぞよき みつ

河内女がてつから取ていひもりの なが

山のはがすみ棚引きにけり 入安

山の手にかゝりがま敷みえぬるは

やつこの比の春がすみかな 舍永

三輪にて

諸詞
末代といへど霞は杉の木の

枝にかゝれるおころもの色 元成

鶯

やこと
止事なき竹の園生の鶯は

笛ふく琴も歌も上手ぞ 一見
諸詞 法華經となく鶯を題にして

初陽毎日歌をよむなり 夏虫
めづらしき作意なけれど春毎に

たいきゝよきは鶯の歌 満永

鶯のあまたよりて鳴ければ

おなじ音に鳴うぐひすの歌もたい

あふむがへしと申べきなり

舟歌ときゝやなさまし鶯の

鳴ものほゝん法華經の聲 行廣

前栽にすがたは見えず鶯の

ごごどきけばこゝら鳴也 及之

おとなしく恥かはしくて鳴ぬかよ

年ひとつます去年の鶯 顯興

鶯はこゝにありとの宿札か

軒端の梅につけし短冊 行重

鶯の子にも具足羽あるなれば

親重代か軒の鍵梅 梵益

梅にきて鳴うぐひすの法華經や

非情成佛の縁とならまし 満永

梅松柳ならひぬる庭に鶯のな
くをきゝて

うぐひすの花の笠ぬふ糸針は

梅にどちつく松よ柳よ 弘重

題不知

鶯の歌の題ともなれかしと

繼木にするや難波津の梅 一見

梅

給はらんと句はせふりの言の葉も

恩にこそきめ梅の花笠 宣堅

北野にて

たれも見よ北野の花の兄木こそ

右近のばゝの孫の惣領 高盛

幾筋もたゝまつすぐにすいゝと

のびし氣條ナギスはすやり梅かよ 行重

百首歌の中に

ことわらてたをれば腹が立枝なり

くれよとならばやり梅の花 資之

題しらす

所望する一えをくれぬのみならず

このめむきつゝあべゝ紅梅 正友
見りどめよこゝやあそこの枝々に
ちよくゝ開く論旨梅をばみつ なが

繼分の梅をみて

一本の臺に小梅のさき分の

繼木は花の兄おとゝかな

白馬節會

いろかへてしろ馬の字をあを馬と

いふこそ春の道理なりけれ 源雅純 朝臣

若菜

式三番詞

けふは七日年徳神に何よりも

参らせたきは鈴菜なりけり 行豊

一文に三ばさうなる鈴菜こそ

何よりもつて安うさふらへ 満永

ぬすみどり見付られなばなゝ草を

叩きはせいて叩かれぞせん 貞富

鶯菜本歌こゑほこらすは雪消ぬ

山里いかに春の汁の葉 毎雄

奈良にて下部のくゝたちに柳

の枝そへもてありくを見て

なら者のはかで提ぬるくゝたちの
下緒となれる青柳の糸具敬法親王

親月八日立春に

尉殿の髭にも似たる節分や

八日にさらり春はきにけり 壬生 忠利

或方へ禮にまかりけるに數の
子肴にて酒たうべ日もくれが

たになりければよめる

數の子やにしんが鉢にあるなれば

思はず酒もつもりそろばん・方重

爆竹

空をとぶつばさにあらぬ左義長や

ほこらかすみの種となる覽 行風

東寺の前にて綱ひくをみて

東寺にて綱を引とる人はたゞ

鬼よりつよき力なりけり 一見

親月とて町々にする綱引は

ゑいや大勢の子ごもある故 其因

百首歌の中に残雪

うす霞挽茶のいろにたつ春も

てんもく山に残るあわ雪 貞富

残雪

本詩アリ窓の梅をほくそ頭巾で見るとい

雪對すればたるゝ水鼻 元信

雪佛さごりの花の春なりと

消て本來空におもむく 行重

年もまだ若しらがぞと人いはん

山の頭にのこる雪をば 舍永

しらくほご是や申さんはげ山の

いたゞきにちと消のこる雪 治佳

本歌なだれては山のいもせの中に落る

吉野の雪やとろゝとをみん 友信

同猫の妻戀をよみ侍りし

敷島や大和にそだつから猫の

ねころび打て妻をこひつゝ 行風

柳

観音の光をはなつ柳にも

出るさつたのちからこふ哉 貞成

百首歌の中に

本詩そのいろも氣力なうして青柳の

糸よりほそく枝ぞやせたる入安

同

同老木さへ春は緑にうごきけり

柳につよき氣力出來つゝ 資之

青柳にかゝる霞の綱はなふ

かの唐人のかみつゝみかも 知秋

瀬あたりの水垢おとす用意にや

あるはへちまの川柳哉 成行

柳に月の移れるをみて

柳髪すかしてみれば半月の

影さし櫛といふべかりけり 一圓

早蕨

とめ山はゆびもさゝぬを早蕨の

にぎり拳で人などがめそ 顯興

春雨

今迄はねいりてゐたる木の目をも

起て出よとふれる春雨 貞富

木の目をみて

魚の名の蛸にはあらぬ八手の葉

いはみ出たるつばの内哉 満永

春草

とりくみし陰と陽との力にて

二葉にわれの相撲草かな 長玄

よめがはぎつみつくしたる印には

つひに杓子に掬はれぞする一見

いとをしやまだ禿なるうなゐども

焼野に數多つばなぬく也 藤原信實朝臣

むかしみし妹が赤子の生立て 本歌

つばなをもぬく莖をもつむ 休昌

戎殿もし野に出てあそびやらば

たひ草摘て日を暮しやらん 教二

苔庭しくの文をし人とはい 義益

いかに岩間の鬼あざみそも 義益

百首歌の中に

冥途ならで是も地獄の鬼勘

つみためくゝて一口にくふ 玄康

路のたうをたてをはりての其跡に

九輪草こそ陰高くなれ 未得

小米花

作り木を利欲につきてうる人は

小米花にもさくどくぞとる 世話 満永

咲しよりちるに間もなき小米花

ぬかよろこびをしたるぬし哉

野遊のをりから下部ともに鼓

草つませけるによめる

春の野を打見わたしてたんばゝを

教へひかする供はやし哉

題しらす

鼓草春のはやしに咲出るは

うぐひす笛と藝くらべかも 尙芳

蝶の舞鶯笛の絶ぬ野に

打ましりたるたんばゝの花 貞徳

花見酒にうたへば蝶もかんたんの

夢の舞まふはやせたんばゝ 且保

蝶

あの花や又此花に飛つくは

やあらこゝろの蝶々なもの 幸昌

ふし柳楊枝にしつゝかねつけの

蝶よとまりて假粧するかも 満永

新能

跡あかりに見るや薪ののふこれは 世話

御萩の馬の鞍懸かそも 行風

くらかけにのぼりてみれば煙たつ 本歌

薪の能は賑ひにけり 保友

涅槃會

華嚴阿闍方等般若法華經を

説きたひれて遂ねはんかも 安勝

御佛は常住不滅ときく時は

けふの涅槃は空死ぞかし 貞因

御弟子五人の名をよめと所望

あるかたにて

釋迦に別なんたの雨のふるならば

眼もくれん阿難迦葉も 一見

絲遊

春のきて霞の網をすき捨し

あまりなればや空の糸遊 行風

霞隔山花

花か雲か了簡もなき山のはを

まぎら霞のかゝるめいわく

見花

假粧せず木なり乍らにいつみても

色つやのよき花のかほはせなみつ

百首歌の中に

色能はあまか紅粉をやさしつらん

口びるしるき花の貌はせ 入安

てんびんのはり口ならで櫻花

本歌一りんだにもめにかゝる哉 教二

けふのめと人のしひざる時だにも

ゑふことやすき花見酒哉 貞宮

くふ餅も又のむ酒も讀歌も

はなの下なる口すさみ哉 友知

題不知

踊壽詞花の木もちらりくご火ともすや

こゝは山崎こま所とて 宗鑑

名所花

万年の榮耀もこれ龜山の

のめば浮木の花見酒哉 高盛

酒にうたふ木遣聲してみよしのゝ

花にゑいさう酔の内かも 義益

よしの辰の尾といふところに
てよめる

花を雲とわけてのぼれと辰の尾に

くひ附てくるどう龜はなし 行安

奈良と伊駒の間ありのとわた

りといふ所にてよめる

からけぬる尻にも蟻のとわたりに

匂ふやおなら海道の花 高故

彼岸櫻

ひがんざくら咲ぬる花を目の佛

見て樂むも淨土なるべし 満永

きによつて佛の御法ときぬれば

悟やひらく彼岸櫻も 清之

參宮道の次に吉野の花見によ

り侍り一宿もせず通り侍ると

てよめる

三吉野の花見はのりしかごとにて

まことはまぬるいせ櫻哉 貞因

兒櫻

朝夕にちゝとふりくるあま物で

そたつはたれが兒櫻の花 行重

花の下にてあそ坊主とも 永茂

大坂東本願寺の鐘樓に立そへ

る虎の尾櫻の花さかり世にこ

えて見事なりければ

虎の尾の花の盛りはつりがねの

龍頭のおこす雲かごそみる 貞因

普賢像

普賢像の花の先にも火ともすを

燈明と見る寺の庭かな 満永

きりかやつ

咲花を穴のあくほご見物の

人にもまるゝきりがやつ哉

烏帽子櫻

此花はゑぼしざくらごきくなれば

きて見る人のをるをかまふな

姥櫻

是はよいはなしの種で候よ

若木なれども姥ざくらは 貞富

世話 那智にてよめる
なちりそよ名にしおひたる姥櫻

八十年も祖父やあくべき 宗定

花厭風

彦七が貌して風に動せざる 久清

花もあれかし大森の木に

吹風に花もやちると連歌師は

句に苦をそへて案じぬる哉 真因

落花

本歌 櫻ちる木の下陰で笠ぬけば

空にしられぬつら雪となる 是念

本詩 雪のやうにちるを悦び花をふんで

をしまぬや少年の人 友知

盛りなる花もさく日は散ぬれば

けふは昔の姥さくらかな 満永

よし野にて

ふむなゝ散ぬる花を三吉野の

藏王の足もあげてござれば 毎雄

清明か瀧にて

さつゝと流るゝ花を轉じかへて

梢にもぞせ清明かたき 方寸

野遊

取あへず霞をくみし野遊は

すい物草を肴にぞせん みつな

百首歌の中に春駒

春駒のいさむ心はどこゝを

駈てきたぞせめて問ばや 貞富

同し中に歸雁

つがひゝ放れもやらで歸る也

然と縁をし結びかりがね 淡路守 宗増

かすみそめ點つけてよむ書物にも

序正流通にかへるかりがね 頼智

長旅のくらうなゆゑかいくつらも

ごつかりやせて歸る也けり 貞富

半季居のをんごりなるか雁金も

違ずかへる出かはりのころ 本也

渡りしにたい一羽りも利はつかず

もどさへたらてかへる雁金 是難

めに懸て能よくみればれいてぐの

棹になりてやかへる雁金 毎雄

三文の矢をはげ弓を春の空に

雁は八百いざやいてまし 友和

天の戸の樞あくるにあらねども

かぎのてなりにかへる雁金 行順

春の月弓張にかへるかりまたは

北斗の星やめあてなるらん 満永

難波江やよるは綱引足もこの

あかい時にし歸れかりがね 定章

八瀬のあたりにて田をかへす

に牛つかふをみて

一反にならぬやせなる瘦田をば

瘦牛かけてすかせこそすれ 友和

蛙

鶯の外に歌よむ物はあらじ

と思へば水の底にもかへる 友知

軍して深手負つゝありきえぬ

かはづが歌やそれも腰をれ 宣就

やり水につきながされて苗代へ

にげてかへるのまけ軍哉 貞富

軍にはさぞなぶへんの蛙しも

くちなは代をいかで責べき 舎永

呼子鳥

傳授せぬ身は奥山のよぶこ鳥

見ざる聞ざる言ざるにこそ 義益

百首歌の中に

呼子鳥古今の中の大事ぞと

聞たるばかり聲はえしらず 政長

おなしく

ふみまよふしごろもごろの山道に

はぐれし親を呼子鳥かも 貞富

いかのほり

おのづから霞の網にかゝりつゝ

空にふらめくいかのぼり哉 満永

二月末つかたうぐひすのなく

をきゝて

面白く聲をも春のつゝけなきは

日も長歌をよむかうぐひす

梨花

人毎にさけさねかへる花なれば

下戸とばけ物なしの木にこそ

百首歌の中に 莖

花を見て庭出えぬは爐路口の

戸にかけがねの壺すみれ哉 一圃

おなし中に杜若

筆の先そめしごとくにつぼめるは

いかなる物を杜若ぞや 法橋由巳

躑躅

目には見てくはれぬ物は道ばたに

つきたてゝある餅つゝじ哉 行重

欸冬

山吹の花のこがねのまるかせを

すながねになしまくや春風 貞徳

こがね色にさく山吹をめにかけて

はしがるもげに欲の道哉 満永

題不知

欸冬にぬきかけし衣のぬしやたれ

問ご答へず口なはにして 俊廣卿

三月三日

春つくといふばかりにや草の餅

白も青みてけさはみゆらん 舎永

草の餅花の盃とりゝに

とり合てや節會なるらん 行風

桃の酒蓬の餅でいはふこそ

上戸と下戸のとり合なれ 昌恵

をりてみよ笑ひ上戸は花の名の

もゝのこひある目もご口元 貞富

詩の韻もふみ分かたくせかれけり

盃はとくすくる曲水 忠直

曲水の酒のみこふて酔たさは

流をくみてむなもとにしる 友颯

住吉よりのかへさ歩にて人々

草臥しをみてよめる

世話 住吉の鹽干遊びのかへるさの

かいたるひにもにしる蛤 宗方

三月三日或御方にてあさつき

繪の相伴申ける時はにつきて

本歌 一首とおほせければよめる

蒜のつれなく残る匂ひより

あさつきばかりよき物はなし 長齋

千本念佛

いろくの狂言綺語の法事こそ

讃佛乗の煩魔堂なれ

資之

戯歌とてよめる

高雄寺あはれなりける勤かな

やすらひ花と鼓うつなり

西行人

釋迦身拭

欲垢は絶す浮世のさかの釋迦

お身拭にもとれる散錢

行風

藤

長さをはくらべ申さんさがり藤

ながむる我からたれ八尺

元成

ねちかへり又ねちかへり

ねちかへり見るねち藤の花

毎雄

ねちふちなふりをもしはし紫の

ゆかりの花の顔にめんじて

行風

本歌

紫の藤の花見にのむ酒は

顔の赤きをうはへどぞ思ふ

友和

松上藤

花かざる藤のかつらもゆるぎつゝ

眞琴ににたる松風のこる

松にそひ千年をへんと藤こぶの

力出してよれつもつれつ

安勝

いとゝたに枝もいたまん老松の

重荷にかゝるつゝら藤哉

みつな

藤の花のもどへ藤の花とい

ふ物を重に入て出されし挨

拶に

喰てみつ見て又くひつ首をたに

こなたかなたへねち藤の花

友和

暮春

よけいありと思にし花も散はてゝ

今は十方にくれの春かな

行重

伽羅よりも是はごめたき物なれや

三月じんのたつを何とぞ

一見

後撰夷曲集卷第二

夏歌

百首歌の中に更衣

こまのきぬ一疋たちて殿様は

御身かろげにめす衣がへ

貞富

花の色に染し表のをしければ

裏かへてきる初あはせかな

友和

春過て夏きにけらしわたぬきの

衣ほすてふあせのかきそめ

喜雲

侘ぬれど今裸にもならねば

身をうら表かへて着る物

心笑

百首歌の中に

侘ぬれば着かへんやうも難波なる

身をつくしても拾一枚

一圃

卯月一日下部の魚あらふ折か

らよめる

古小袖持あはせしをわたぬきの

肴もけふのえり祝かな

由貞

題不知

世話 次第く暑くなりなばけふかへし

拾物もや肌はなれもの 元成

新樹

阮籍がよろこぶ眼是なれや

見るによねんも夏山の色 行真

新樹に蛛のすがくを見て

夏山の茂るを新じゆこんじゆにも

あちらこちらへひく蜘蛛の糸 満永

卯花

月雪にまがひて心なぐさむに

いかなる者か卯花といふ 淡路守 宗増

枝までもさし物なればちる花も

飽くづかよ箱根うつ木は 一圃

うしとらの風があたりて卯花を

ちらすに腹はたつみなり 梟 みた

豆腐にも似たる岡邊の卯花の

ちるやきらずの詠成らん 弘重

百首歌の中に葵

そのたけの三尺八寸候は

いかもの作りのたち葵かも 貞富

同

花を見捨立歸らんと思ひきれど

はなれがたなの葵なりけり 玄康

同

目の鞘をはつしてみれば花も葉も

きれいなけりける太刀葵かな 一圃

所々露のちらくちらつくは

汗をかいたるたち葵かも 行重

深見草のあたりに撫子のさけ

るを見て

花の王のおそばをさらぬ撫子は

うへわらはども申べきなり 満永

當麻練供養を

西方は十万億土なるものを

急ぎもやらでなごねり供養 草雪

古びしもくり返しつゝ蓮の糸の

ねり供養ぞと拜みぬるかな 定次

新茶をよめる

本歌 いせものゝ赤前垂でつめる茶も

宇治のほいろに掛りける哉 元信

待郭公

郭公つひに名のらぬ老武者も

坂東聲はありとこそきけ 宣就

世話 時鳥なくとてたれかがごうせに

かませうと云者もあらじを 顯興

きかぬとて人がねたらば子規

せめて鳴貌してみせよかし 惠立

待かねてながす泪を其方も

もらひなきせよ山郭公 一圃

時鳥しゝまねしつゝなかざるは

そちも一夏の行をやはする 立靜

夏の夜は時鳥にぞくらはるゝ

蚊屋へも入で待とせし間に 貞徳

めもあはずね夜口をし時鳥

おのが初音をまつげ讀れて 弘重

みゝづくをみせなばせめて鳴す共

ひよつと笑はんくつ沓手鳥 行廣

因幡堂にて

本尊をなれがやくしにかげもせで

いなばだうよくやよ時鳥 満永

卯月八日に時鳥を聞て

御佛の誕生日本ノミに時鳥

なれもほぞんの掛ぞめやす

三輪にて

嬉諺詞しやな是なる杉の二またより

ひよつと一聲聞はとゝぎす 元成

聞郭公

めづらしき冥途の鳥のなくかたに

われもむけんの地獄耳をば 一見

夏山といふ茶入を求し夜郭公

をきゝて

夏山の茶入も耳の垢までも

ほりいだしつゝきく時鳥 每雄

還相げんさうの廻向といはん冥途より

本尊ほんそんかけくる無常鳥かな 行重

沓手鳥音するかたを見あぐれば

たゞ鞠まりほどの月ぞのこれる 梵益

三味線半にはとゝぎすを聞て

三味線のちりてれてんを過すとも

地にさんさがりなけ時鳥 ト養

なませのわたりにて

ごつと空にかすかな聲は里の名の

なませにつうさます子規 友信

橘

吸口にいらぬ先より匂ふ哉

常袖も同じのきの橘 友和

百首歌の中に

章口遊しやうくゆう詞
橘はむかし辨慶鎌田殿

かうじなりとて今も申木 貞富

同

色よかよ味までそろふ橘は

目さへ鼻さへ齒さへ樂しむ 一圃

闇の夜も目利はいらじ橘の

さくはと云ば匂ふさぶらふ 一見

芥子

手向つゝ今勤行やはてぬらん

花の灯けし坊主かな 教二

賀茂足揃に

あしぞろへかくいちはやき宮人は

帳につきげのきほひ馬かな 忠直

五月五日

さし様に軒のおそひの石にあてゝ

菖蒲刀のははをれにけり 雄長老

菖蒲に蓬そへて軒毎にふける

を見てよみ侍りし

世話
軒の妻をみればふしぎや麻ならで

あやめにつるゝ蓬むらくゝ 行風

軒の菖蒲に栴檀の葉をそへて

ふかんどいへれど折からせん

だんの葉此わたりになきと聞

てよみ侍りし

我軒の菖蒲刀のさしぞへに

せんだんの葉もけふのきれもの

五月五日六條河原通りけるに

童のよりゐてあなたより石松

がうたるに五郎太郎礫うちか

へせといふをきゝて

礫をし打かけにける石松が

相手の名まで五郎太郎かな 満永

笋

我宿の竹の子共の行末は

杖柱ごまたのもしの世や 如雲

ぬすまふご藪のまほりを闇の夜に

迷ひありくも竹の子故よ 行重

百首歌の中に五月雨

もりわぶる亭主の心思ひやる

今五月雨のふる家の内 淡路守宗増

早苗

みつは四つは五つ六田に水口を

いはひうたふて植るわか苗 弘重

早苗ごる早乙女につく物はたい

脛の白きと脚布の白きと 友和

水鏡見つゝ植れば嫁御前の

けはひ田とは此事やらん 是誰

小ウタ 聲ならで取すましたる早苗には

三石一斗米ぞ出来なん 毎雄

螢

夕貌の軒にちらつく螢をば

賤が蚊やりの飛火ごぞ見る 行順

暮るより役目に火をばごもしぬる

はたるはよるの番太郎かも 満永

赤きいろ同じかれごも猿の尻を

下目になして飛ほたるかな

百首歌の中に

不思議やな風にまたゝく灯の

きえぬごおもへば螢にて候 貞富

蟬

帆柱の上にも蟬の聲すなり

世話 船頭かごやこれもきくべき 梵益

生れつきてならはぬ經をよむ蟬は

智者のはごりの童もろんべぞかし 満永

ぬぎ捨て又せんたくの爲ならし

雨のふるてに蟬のから衣 重靜

蚤

まつかひにおのれが色の成ぬるは

酒より外に何のみの虫 如風尼

痒けれど手の届かねば是非もなく

本歌 にくしと思ふのみなり 政長

山ならぬ腿ふしも風市の根いつとてか

鹿子斑にのみのくふらん 榮種

懷にはいりて人のちをすふを

本歌 よくゝみれば木實こみ也けり 道明

起もせずねもせで夜の身もだへは

夏の物ごと蚤蚊あるゆる 頼永

百首歌の中に蚊遣火

家々の軒にかやりをたてならべ

天くらふなる夕煙かな 雄長老

棒ふりもつひに稽古をしあげつゝ

今はかやりの相手にぞなる 友靜

蚊柱のたつ町なればよこ溝の

棒振虫はてこやつかはん 満永

夏の夜のかしやくの責を遁れぬる

紙帳ものりの力成べし 梅曲

百首歌の中に

姑にふすべられぬる夏の夜は

紙帳のすみではゆる嫁かも 貞富

吉野なるかやのおが屑ふすべれば

かもなうなりし山かけの庵 周可

瞿麥

撫子の花の口びるうぐくこそ

風の手あてゝあはゝ也けれ 且保

百合花

姫ゆりのあしたの花の口びるに

露をふくむやうがゆをみん

大わうは煩魔の廳がそのまへに

かずくみゆる鬼百合の花 知秋

鬼百合の花をも買て詠れば

地獄の沙汰も錢でこそあれ ない

手鞠花

人やさきかれやさきにと争ひて

つきのけみるは手鞠花哉

美人草

美人草りふじんに客がをりたれば

ふていしゆ顔のみゆるぬし哉

雁緋

人の手に渡る雁緋は鳥ならで

籠花生にいてこそみれ 宗定

白芷

咲花のかしらになくてさかさまや

ねにかぶごある鎧草哉

宇治にて

これや是彼頼政かぬぎ捨し

扇の芝のよろひ草かも

賀名目花

骨をりて作るかなめの花なれば

風にあふぎを案じこそすれ ない

子姜

子姜をかひ目でみてかはひとて

ざれうりにうる子共をかしも

瓜

鹿の毛をこやしにしたる謂れにや

瓜もちつくり筆をゆひけり 久清

眞瓜

大判や小判なりにしなりたれば

金まくはといふもこそわり 行風

白かねでこがねまくはを買ぬるを

兩替すともいふべかりけり 満永

作りおくこがね眞瓜が太刀ならば

銘は中ごのさねなかにこそ 支積

見事さと味とはいづれ金瓜の

かはをしむくの小刀のつか 貞因

過去によき種をまくはの蔓はやら

夏の中でのからひ物かな 信安

本歌

名にめでゝいらふ斗の姫瓜を

我ちぎるかど人ないひそ 元房

題しらす

もり山のいちごさかしく成まゝに

さ社うはらか嬉しからまじ 法心上人

風爐數奇

垢の拔し御手前なればたつ御茶も

ふく加減よき風爐のすき哉 貞富

熱ければふきて飲けり風爐の茶の

時宜知ずして垢をかきく 貞成

鰯

此魚は都に馴し鰯ながら

世にうぢ丸ど人はいふなり 榮治

なまぐさくありしうなぎの味も

日をへていといすしと云也 本茂

有馬へ見廻の返事に

本歌

有馬山いなの鮎をし湯見廻に

教二

くれたる人を忘れやはする

口のうちにはおごの高く聞ゆるは

喉を飛こす雀鮎かも

惠立

百首歌合に夕立

雨の足となりもあへず此里に

走り過ぬる夕立の雲 藤原信實朝臣

夕立のつよくふれゝば大地まで

ごろゝこそ鳴神の音 信澄

南北百番歌合

賤の男が更行闇の門涼み

好もしからぬ圓居也けり 前大僧正 慈圓

夏の土用にいる日俗に蒜をの

みまじなふを見てよめる

今よりは慎毒の虫をしづめんと

のむやにんにく腹三粒まで 宗精

祇園會

渡りぬる橋辨慶が長刀は

むべも祇園の文物なりけり 十也

本歌

尾州にて祭の日よめる

京といへばみこし迄よき祇園會を

津島にのみとおもひける哉 高故

夏月

おひかくる猫も鼯も夏の夜に

月の鼠の足はやきなぞ 淨久

夏の夜の月を鞠にはけすれども

ありといふ間に入し山のは 行重

諺 鵜河

川なみにはつとはなせば面白や

鵜はゝたかる魚を取けり 眞富

吉野川のほとりにて

吉野川見所おほしといふ事は

大きな鮎を料るゆゑかも 淨次

夏衣

青花はうつりにけりな帷子に

我身汗かきいまだひぬまに 周可

炎天

池水のかはき果ぬる日では

自然とほせる龜の甲かな 行風

汗水のながれもはやき身のかはの

せこらへならぬ暑さ也けり みつ

汗

汗水の胸をくだりにながるれば

腹のかはこそ淵となるらめ 成榮

汗瘡

身のがはの出来物なれば汗ばをも

猶うき草の類と申さん 満永

夏たけ田面に水車あるをみて

水車しかけざりせばやけぬべし

是も火宅の門田なるもの 成之

百首歌の中に荒和菰

ごろゝと御手洗川の濁りしは

夏はらへするけふの人ごみ 眞富

蚊も蠅も暑さまでみなつきねとて

團に木綿をかけてはらへり 友和

後撰夷曲集卷第三

秋歌

立秋風

本歌
秋きぬと目には鞘さへ見えぬども

たちぬる風にみはいりに見 一團
秋やたつ天子諸侯はいかならん

けふから風は身にぞ四民ぬ 宣就

殘暑

見一の聲もぞのこる暑さには

おくにおかれず扇ひらく 勝方

七夕

天なれば地がみに見ゆる七夕も

今夜あふぎの銀かなめかな 一團

天川渡り給はん七夕の

足のこひにぞかすさらし布 高盛

七夕の手水の折や手向まじ

米ふみ月のけふのなぬかを 及之

百首歌の中に

たがひちがひ天のかはらけ取々に

酌たる酒やほし合のそら 政長

同

煩惱の犬かひ星は今夜のみ

そばへよらんと思はゆる哉 貞富

織女をさゝかに姫と名付しは

糸ごしらへをめさる故かも 滿永

七夕は天の川にやはまるらん

その身もほしに出らるゝ也 正成

初秋月

一天にくもりもなくてすみいろの

見事なりける文月の貌 滿永

影たふと一字もしらぬ愚癡無智の

尼入道も見ゆる御文月 元成

上書ももどよりあらぬ文月は

見る人々をあてごころかな 元信

毎月の月にかはりて文月は

かへすゝもながめいり候 正流

くもりける夜に

かきくもりすみいろわろき文月は

ちひみ文字とも詠入候 滿永

文月の頃よりあしき蛇の出で

かみつくなれば野山ありくに

心せよと人のいへるをきゝて

よめる

文月の夜に出て人をかむ蛇は

こはく候べく候の字なりか 武重

世話 聖靈祭

うらぼんの月夜にぞぼす挑燈は

外聞のため聖靈のため 未得

なき人の今夜はこゝにくるゝと

くるとは珠數の玉祭かな 太極

人心たゞ丸盆のそこはかと

なきの泪のたまゝつりして 一見

聖靈をもてなすびには桃柿や

世にありのみを集め捧けよ 信安

孟蘭盆

六齋の念佛の太鼓かねの音に

うらぼんのふの夢は覺にき 蒲鉾

うらぼんに佛のいつもくるゝと

いふも思ふも虚空法界

相育

踊

踊子のきる帷子のうらばんは

しつぱり汗にならざらし哉 宗珎
世話
へうたんの川ながれする帷子を

きて踊る身も浮にうきつゝ 信安
同
尾にひれのそふる小歌の一ふしを

申さば鯖のさし踊かな

種好

見るに心ひかれて胸もをどり子は

うら煩惱のきづなどぞなる 一見

盆といへばもろこし迄もさし連て

都にのみををどりける哉 卜琴
本歌
踊歌詞

をどりもてきそん十七八人も

まじる役者は笛太鼓かね 保友

紋は巴山吹いろの帷子を

伊達にそめつゝ木曾踊かな 舍永

とりあへずのかけをごりに慇

懃なる挨拶ありしかたへの返

事に

立まはる身のふりのみが歌さへぞ
草紙詞

ひなびたりけるいせ踊かな 行風

叢露

草むらに露のちら／＼ちりぬるは

風の手玉をとるかともみゆ 行重

芋葉露

風ふけば芋の葉の露ふりしやりの

ふんする如く玉ぞちりける 友和

秋茄子嫁不喰といふ世話を

ちぎり置し秋茄子をば姑が
本歌

あはれ今年も嫁にくはせず 満永

相撲

いざけふは在郷祭にまじりなん

くれなはなげの勝相撲かは 忠直

思ふ手にどれど何ともとられぬは

水の中なるつきすまふかも 知秋

下／＼るそりに足こそよわからめ
本歌

結ぶ相撲の手はすぐれても 一見

手合して負たといふはなげにやる

賣物ならで相撲なりけり 之時

右よりも力おつれば今ははや

左すまふとなりてまけぬる 満永

をちこちの勝手もしれぬこけ相撲
本歌

覺束なしや行司次第は 正勝

力すまふ手品はなくてゑいやつと

何あひさうもなげのかち哉 行重

名乗ぬるは弓取なれやかちだちの

關の相撲をうつほつけにて 且保

百首歌の中に萩

難波人よしやともいへ我目には

神も照覽いせの濱萩 雄長老

萩

すね萩の花のあるじは風の手に

こまたとられん用心をせよ みつ

世俗に宮城野といふ萩あるを

見て爲仲のいにしへも思はれ

てよめる

さほ／＼のみちのくの程思ふなら

誰かはあだにみやげの／＼萩 友和

女郎花

世話 女郎花露へし分てをる人は

濡手で粟をつかむとぞみる 重香

百首歌の中に

一時をくねるも道理花をみな

へしをるはうき男山かな 貞富

同じ中に薄

かつて此月のさはりの物なくて

薄がはらむむさしの、原

下女詞にて

なふござせ薄がまねく又しやも

あの様の袖は露に濡つゝ、よみ人しらす

鷹羽薄

心なき草にも位たかの羽の

薄の下にかゝむ犬蓼 一見

水邊薄

世話 をらばやの心づからに手がいれば

足も入江の尾花なりけり 毎雄

荳萱

柴かりのからぬさきより荳萱は

たがかる萱のかり名成らん 友和

百首歌の中に蘭

風の手のはころばしてや蘭

一野くゝにわきて匂へる 貞富

紫蘭の紫を四文字にとりなし

てらんといふてにをは四つよ

み侍りける

秋の野に咲らんくわつと匂ふらん

見るらんむざと手折とる覽 友知

百首歌の中に槿

夜のうちに假粧やすらん花のまゆ

うつくしうして見ゆる朝貌むねます

世話 子に臥て卵にむにいつも起ぬれば

槿花一日見ぬこともなし 満永

槿をさながら瑠璃のつほくご

思ふわらべは朝はなだもの 安勝

百首歌の中に

槿の花のさきをばびつしやりと

蹈ひしやぎたる日足どう欲 貞富

葛

きてみれば山の腰より裾ばかり

はひまごへるは葛袴かも みつな

木芙蓉

秋風のきつくあたればちらふかと

花もふようにおもはるゝかな

鴈

山けこえふの字形なましてひらくと

渡る雁こそいろは見るらめ 且保

月前鴈

かんがりと見えて村々月の夜に

渡るは天のはらまだらかも 正盛

本歌 鶉

鶉がり雨はふりきぬしばらくは

ぬるとも栗の中にかくれん 宣就

題不知

同 鶉をばくれんどいひし山家より

番はきたり籠にいれおけ 高故

鴈

世話 はる網にかゝりし鴈のかんきんや

そも首くゝり念佛なるべし 久清

色鳥

色鳥のいろはにはあかと並びある

次はちりぬるりとみえたり 満永

木兔を笑ひによれる色鳥の

跡に残るはそしりひきかも

小鳥さすを見て

ひがらめをためつけよりて刺竹の

やぶにらみとは是も申さん 行豊

百首歌の中に鹿

けんそなる秋の山田をもる庵は

鹿を心にかけて作りなり 政長

同

小歌詞

上手なる播磨の書寫の紺かきも

古本ニハ妻さふトアリ

妻こふ鹿の聲はえそめじ 資之

遠目にて鹿見付しも逃ぬれは

すつかり人ぞ無念がりける 満永

狩人にけしかけられてくはれなば

いぬ死やせん妻こふる鹿 行廣

手をおへぞ猶こりもせで忘れぬは

血のたる中よ鹿の妻戀 行重

ひつくはへよつびき兵と射ばやとは

思ひしかども逃てごちやら 貞富

虫を奴子詞にてよめる

爰でなけごつこへそつこへるまじぞ

なんだ辨慶むさしの虫 しみん

稲子

蒔たてに作れる小田の稲子こそ

苗代そだちと申べきなれ 正明

本語 秋蝶

ひよろめきてよわる姿は秋風の

あたればこそあれ百柄の蝶 貞氏

機織虫

いといには糸ごしらへをさせ置て

なればはたおれ機織の虫 みつ

轡虫

傾城につらくあたるが報ひつゝ

生れきぬらんくつわ虫とは 道明

りんくゝ鳴音いかにと駒どめて

たちぎゝすれば轡虫かな 行重

蛩

どがりたる音をよくきけば耳の穴

もみぬく程なきりくゝす哉 一圃

わらんべの薄の中を尋ぬとて

手もしたゝかに蟪蛄哉 友和

百首歌の中に松虫

あほうけに長たらしげな髭口で

きしやに鳴出す松虫のこゑ 貞富

本歌 花火

見事く柳櫻をこめませて

みやこの花火二色なりけり 宗定

三日月

眞丸なる桂男のさかやきも

はんこにそりし三日の月哉 満永

月 踊歌詞

あくるまで脇目もふらじ照月の

桂男にまねがるゝとも 方寸

鳥の名の鷺のお山の阿羅漢も

うへみたまはん秋の夜の月 舍永

詠ればねふけもさゝすすむ月の

兎の耳の長夜なれど

資之

夜々見月

鼠の尾兎の耳をつきのべて

ながれく月の夜なく宣就

月の明がたによめる

見とれては雲の浪路を走りゆく

月の兎のあしたにぞなる一見

十四夜月

本語
木のもとに立て見居てみ透して見

あひやしてみる子持月哉貞富

八月十五夜

羽のごとはやくはもらでこきのと

月も今宵の空にすめく

是は法皇御製なりとぞ

しやこめなう三五夜中の月すめば

金銀るりの世界とぞなる貞徳

眞丸にきんかりとして大きなる

錫のはち月十五夜の月實秀公

公家も武家も今夜の月は町人も

あれ出て見さいこれ出て見さい

ト養

見事なることをあつた物でな

い世界の眞中といへる世話に

てよめる

あつた物でないとや人の譽そやす

月は世界の眞中のあき次良

世話
春ならで目の正月はこよひぞと同
向ふかきみのもち月の影貞因

あばらやに獨ねながらもち月を

見明す人やくはずひんらく守昌

謠詞
くふてみねば味はしらねと比なき

名をもち月の眞丸なりみつ

今宵芋の名月なればそゝろ子と

星をもさして申べきかも幸和

本歌
つゝあつのいつの月より丸い月の

出にけらしな芋にざるまに幸和

あるじの留主なる宿に月見を

りてよめる

代待と是も申さん留主居して

今夜ましくみつる月影定次

本歌
八月十五夜くもりければ

怨なりと人やそしらん黒雲は

年にまれなる名月の空乃心

同
百首歌の中に

月見にはちと酒こそのみたけれ

我身一つもなるにはあらねど貞富

山月

唐臼のさはの山邊をふむからに

しろ月を見るあきの夕暮教二

雲晴て青磁のやうな空に出る

月は白手のさらしなの山重静

野月

辨慶がはだへとぞみる武藏野に

出たる月の影法師をも定真

原月

雲の帯に月と星との大小は

さしこなしたる唐土が原喜雲

河月

所がらかはらけなりに出る月の

影をうつしてきた嵯峨の川 獨友

磯月

磯の波にうつる御月の貌ばせは

よせつのけつの情とやみん 行廣

縁輪月

あかい事あかず月見る縁がはに

毛氈ならでしく物もなし 每雄

雨後月

雲はらす桂男や雨の夜の

月の輪がへの竹じざいてん 政春

月前風

月の顔にかゝれる雲を打ちらし

みするは風の手柄なりけり 満永

題しらす

黒雲にちよろ／＼と隠れいる

月の風は白ねずみかよ 宗鑑

百首歌の中に月前露

露の玉はかつら男やみがくらん

月にとりわけ光りかいやく 貞富

月前貝

海中へさしいる月の舟にそひて

折からあぐるほたて貝かな みつ

題不知

下としてくもりくもらぬはからふは

空おそろしき月の影ごと 行重

秋晝夜をよめる

猿猴が月をさらゆる手のやうに

長し短し秋のよるひる 義文

秋夜をよめる

ねても／＼ね餘りてはうと秋の夜は

月のうさぎのうしろ足かも 良玄

霧

朝日にしそのまゝ山の頭より

いきりも立てみゆる也けり 満永

百首歌の中に秋田

獅子謡詞
けみもゆるせ神田の臺の百性の

與吉が女房植し早苗は 貞富

もみにもみわれ劣らじと賤の男が

鎌を手に／＼田蒔かゝれる 伯貞

門田さへ我物ならずともかくも

殿のおまゝに召されぬる哉 入安

本語 擣衣

聲あやをなして碓をうつばりの

塵もうごかす小歌なりけり 忠直

ほめそやしのすれば鼻も高々ど

天狗拍子にしころ打せり 宣就

のりこはき洗濯木綿それとても

うてば碓の音からごろも 泰英

朝倉の山椒よりもから衣

うつ聲きけばめを覺しけり 成之

碓をしとりおく品も柏子よく

手からころりとなげ捨る槌 一圓

かだものは碓おしやり横槌を

枕にしつゝねころびぞうつ 友和

ころもうつ事を業とせる人の

もごとにて

碓にて大分かねを打出せば

それも打出の小槌なりけり みつ

松茸

露時雨ふせぐ狐のからかさや

いなりの山にひらく松茸 行風

松茸やいつ人なれてみよしの、

山のおくせす出からかさ物 正盛

雨ふればはらりくご開きけり

傘ならぬ松だけのかさ 安親

奈良より松茸えての返事に申

遣し侍りし

松茸のかさは餘所より一かさや

二かさならず三笠山かな 行風

柿紅葉

今よりは雨やはちかん柿紅葉

しづ紙いろに深く染つゝ 未得

落鮎

みから出たさび鮎ながら川しにも

落てかゝるはあらかはゆ築 一見

淨華院にて

葉までよく咲みだれたる作りやう

金目貫の菊一文字

八宮御方

菊

垣にする竹やは刀鏢や菊

金目貫のかゝる見事さ 一圖

秋風 三卷三調のはこりかけてし翁草

花の先までちりやたらりら 重次

菊着錦

色々につくりなさせて上様の

お手づからごぞ菊のきせ綿 行風

重陽宴

千代までも一家一門くるま座に

くるりごまはせ菊の盃 相寄

不老不死の藥ごさくの酒なれば

かさねゝものみます哉 信安

或方へ九日に栗を送るにそへ

て

心ざし木の葉にあらぬ木の實をば

ちくり送るもけふの祝儀ぞ 満永

十三夜

風の手よ斟酌なしにむきちらせ

まめ名月のさやのうき雲 行風

紅葉

紅葉するひえのお山は王城の

守りぶくろの錦なりけり 成之

吉野晴明瀧にて

秋風になげざんかごもみつる哉

晴明か瀧に落る木の葉を 顯成

ごなりの庭前になりし梨もら

ひに遣しけるにたゞ一つえさ

せければ

眺むれば杖もたわゝにありのみを

なしと答へて一つたまふか 永明

栗

落てあるもしらで木蔭へ立よれば

足に立まちびつくりのいが 正香

家集五十首の中に

手にとれば人をさすてふいか栗の

ゑみの内なる刀おそろし 權僧正 公朝

柿

ならの京の時分からこそ出来つゝめ

今にやまどの御所柿といふ 相寄

比丘尼寺庭前の柿を所望した

うべての挨拶に

かいまみて戀つゝ寺のあま柿を

遂にはおとし手にぞ入ぬる 且保

能書のかたへ柿おくるにそへ

て

世にすぐれ手をあそばせばお好_みを

是もやありとおくる筆柿 満永

大風吹すさびぬる朝落たる柿

をおくるとて

大風に庭の籬もらりるれろ

されども残る此かきくけこ 空存

水菜と柿えたる返事に

たべたさの心通る五音信 本ノマ

水なにぬねの又かきくけこ 俊佐

肥後八代密柑名物なれば

ひろはゝやひとふたみかん四つ五つ

むづかしながら七ツ八代 一見

九月盡

草木もや皆具成佛いたすらん
秋こそけふを願以此功德 資之

後撰夷曲集卷第四

冬歌

百首歌の中に初冬

大社へけふついでてゆくといへば

跡にはどれも神無月かも 玄康

同

神無月月かしらよりさむければ

帽子ぞ冬の始なりける 貞富

題不知

本歌 秋過て冬きにけらしもみたてゝ

紙子うるてふ阿部川の宿 宗範

頭巾

あらさむやノゝとてけふからは

神なづきんをかつぐべき也一團

あふのきてみれども見えぬ頂は

かつぐ頭巾の山にぞありける

初冬時雨

神々の旅立たまふ道筋を

清めにふつてきたしぐれ哉 満永

時雨

^{世話}喧嘩にはあらざる時のふり物の

かゝるめいわく時雨なりけり

花の父母と言れし雨がふりをかへ

諸國修行をしぐれなるらん 貞徳

ぬれじとていそげ雲の足はやに

はしりこくらをする人時雨 一見

亥子

縁日といはひをなふる亥の子餅

^{是も}辨財てんやものかな 貞因

^{童世話}けふは旅あすはいんでもるのこ餅

おちつきつゝも祝ふべき也 ^{みつ}な

梅の紅葉せしをみて

冬がれの赤葉まじりの長枝をば

さびやり梅と申すべきかも

落葉

葉は落てすばる坊主の柳こそ

かみなし月の證據なりけれ 安勝

百首歌の中に

僧正が谷の嵐やつよからん

木葉天狗のきく ^{淡路守}にみゆ 宗増

冬されば葉なしになりし山口も

ほねたくみかは木々の梢よ 弘重

山だちこそ是もやいはん風の手は

木葉衣をはきてこそみれ 満永

くものいに繋ぎとめつゝ風の手の

引廻しぬる木葉猿かな 行重

赤き地の木葉衣におく露は

たゝ水玉の小紋なりけり 行風

はたゝと妻戸たゝくを誰様と

みれば木の葉の雨の足音 相宥

庭にわらはべのあつまりてま

さなごとするを見て ^{世話}

さむさをもいとはで庭にちり遊ぶ

わらべも風の木の葉なりけり

口切茶

^同口切の會を催す十月は

神の留主しつ茶をひいつ也 貞因

爐の内の雪の白炭ながるれば

又ふりかくるあられ灰哉 友和

霜

雲の手もてつだいやせし空よりも

おろしたてたる霜柱かな 満永

冬はたゞごこもそろゝ算盤に

おきそふ霜もつもり物かな 行重

^{本語}湯の盤の銘にはあらでめいわくは

日々にきれつゝ輝の痛さよ 如水

垢切

足のうらのきるゝといへる ^{あかぎりに}

霜のつるぎをふめば也けり 治住

雪やけにやけぬる足は冬川の

あつい氷もふみわたる故 宗方

冬日

まづしきがさむしといひて冬の日に

いくつきぬれどおひえ也 梶 太極

冬日牛の玉をみて

冬も猶あたらかにして牛の玉

これぞ大日如來肌なる 夏虫

百首歌の中に寒蘆

難波人かれたる芦のかるわざは

鎌寶藏院そもえなるまい 貞富

すぎなひはなるはの事の中々に

芦かる業やつめたかるらん 友和

氷

朝起の手水の水にはつたりと

事をかゝする氷なりけり 貞富

きつぱりと水ぎはたつてはり者の

よきは氷のころもなりけり みつ な

千年をへたる氷にあらねども

ふみわりぬればはりくとなる

宣就

川氷

はちならで舟の棹もてうつやこれ

川の氷の太鼓はりゆゑ 治住

氷にてはつたとしれぬ水底も

すかしてみつる紙屋川かな 満壽

さゝ浪のよせぬるしはの厚氷

はりてのばせる紙屋川かな 満永

氷はる上をわたらふわたらしの

疑心もふかき狐川かな 一圃

今宮御會氷礙舟

湊出るかこの友舟ゆすれども

ひわれもやらぬ朝氷かな 源仲正

寒夜月

さえきりて出ぬる月のけんなれば

山のはものと申べきかも 満永

世話 冬風

きるやうな寒風は物すごろくの

ごうもかひなもふるふ斗ぞ 高故

百首歌の中に千鳥

はつとおりはつと飛行ありさまは

そちが心も村千鳥かよ 貞富

浦千鳥

名にしおふ備後おもてに飛ゆくを

いはいたゝみのうら千鳥哉 行重

立むかふ屏風の浦のいそべりは

いき寫し繪の村ちごりかな 行風

海つらを打ながむれば惣なみに

ゆられてあそぶ友千鳥かな みつ な

本歌 題不知

淡路島かよふ千鳥を肴にて

いくよね酒をすまの關守 一圃

水鳥

生ながら鹽したやうに水鳥の

超も皆も霜ぞふりけり 貞徳

百首歌の中に

いつまでもそふに命やをし鳥の

契りはふかき中の思ひ羽 むれ ます

鴛鳥の衾にかくすつるぎ羽は

磯うつなみの枕がたなか 一見

百首歌の中に

泉水のたて石ころび鳥の名の

をしに打れて死ぬる哀 なき 雄長老

同じ中に網代

閉られて動きもえせぬひをのみは

宇治の網代にかゝる迷惑 貞富

本歌 初鯨

つきあげて千々に物こそ嬉しけれ

わが身ひとりの鯨ならねど 次重

鷹狩

なれよりも大さまさり鶴までも

とりおぼえしはかしこ鳥哉 満永

ひつくんでおつる所をつるゝと

走りよりてやされる鷹匠 貞富

題不知

花に酒月に芋くふ春秋も

冬にはいかで杉焼の鯛

行重

百首歌の中に霰

大空にはゝかる餅をきり置て

霰となして冬やまくらん 雄長老

雪佛をがまん珠敷のたつまにし 本ノマ、
いれたき物は玉あられかな 満永

雪

天人のかしらの花の雪花に

けふふりにきと御推量あれ 一見

ぼたゝゝと一こゝなりにこゝなりて

ふりくるゆきや打綿のごと 眞富

ふみつくる帷子雪の足がたを

もこの白地になす由もがな 宣秀

山雪

本歌
たちぬはぬ木葉衣をきたうへに

帷子ゆきもかつぐ山姫 満永

遠山のいたゞきにあれば面白く

ほんほりとみた雪のわた哉

脇指のさめぎやならしふる雪の

ばつばをみゆる山の腰本 如水

ふる事はちとづゝなれど山のはが

かまねばたまる小米雪哉 行重

うつきりと雪に白みの地の様子

上々吉とみるかゝみやま 信安

富士の根をぬり桶にして山姫の

つまるゝと見ゆる白ゆき 行風

雪をたて花と三穂の松原は

へながしに田子や前置 政次

さつとふる帷子雪をきてみれば

うすき地白の一重山哉 満永

浦雪

すまの浦やゆるゑ有原の松がえに

雪ひらゝと降りぞかゝる 入安

橋雪

破れ橋年ふりつもるゆきげたを

はいて渡るはあぶなかり鳧 太極

竹雪

小歌詞
いな竹やおさへた竹やねてをれて

花にましたる雪持ながら 因幡守
長治

重家卿家歌合

ますらをが埴生の小屋の棟よわみ

いくへに成ぬ雪のうは葺 前大納言
隆家

家集中に

本ノマ、
北東風にけるの床までとほりつる

小雪はみすのふるふ也鳧 源仲正

庭雪

白紙にちらし書すとみえつるは

煤はき捨るゆきの廣庭 遠江守
一政

炭竈

炭やくにひまもなくして働くは

身のくろうなる仕事なり 鳧 みた
な

山々にわれおどらじと賤の男が

すみかまんをも立る煙よ 宣就

本歌

浦島が箱ならなくにがまの口

あけてくやしや炭頭にて 行重

三百六十首の中に

くゆりつゝ世に炭竈のけふたきを

吹つけもやせ冬の山風 曾根好忠

埋火

たばこのむ友と頼で冬の夜は

灰をさせるの埋火のもと 友和

釜の下に住つたりし灰猫の

目がひかるかと思れば埋火 貞富

冬さればさむくつめたき老が身の

夜床の伽におこし炭かな 行重

火桶

さむき夜は我だいてぬる火桶こそ

老の命もいけだずみかな 清勝

おちぶれて紙衾をかぶり敷て

ぬるさて

本歌

恐ろしやおもふ中をもさけつべし

夜の衾のかみなりの音 讀人不知

ふとん

諺詞

大和にもをる唐綿のいとなみは

今しき島のもめんぶとんよ 忠直

火用心よぶをきゝて

冬なれば火の用心どこわたかに

よぶもことわり此夜番しき 廣通

佛名

なむあみだぶつゝ名の聲きけば

もはやこそしも願以此功德 元信

餅花

大黒の棚にかざれる餅花も

猶つきてくふ白ねづみかな 相寄

節季候

きのふより足はやなれや節季候が

笠にさしたるしだいゝに 資之

節季候とさしもあたまに顯はせと

とまらで年のこゆる山草 知義

歳暮

古桶のみづわくむまで老やせん

ひたもの年の暮を重ねば 是誰

質ならでけふを限にながれゆく

年はくれゝをしきもの哉 清盛

年浪のよるひるとなく油断なく

うちかけゝおいのくれ哉 舍永

えび腰は猶かゝみある身の皮や

額になみのよる年のくれ 義益

月と日は珠數くるがごと手前をも

すりきりたりし年のくれ哉 貞富

明る酉の年よりうけにいるを

おもひてよめる

あちらむけさるよ何せん冬一夜

明なば寶うけとりのとし 儀正

戌年歳暮に

いと早もいぬてふ年よくれゝに

お名殘惜くおもほゆる哉 昌憲

いぬ年のよるやうに只うかりゝ

くらいたゝ極月のけふ 貞富

歳暮

胸ぐるしけふや限に取つむる

しんしやくせんをおひの暮哉

鐵炮もそのけ程に一年を

大晦日まで打暮しけり

民部少輔
嘉隆

尺八が今年もけふにくれ竹の

一夜斗にきりつめにけり

八宮
御方

除夜

除夜なれや惜みし年もけふではや

果の能には鬼の沙汰かな

毎雄

除夜にさす軒の柵だけがせぬば

たゝ鬼の目に見おごしやなき

節分の鬼切丸は門口の

柵の木たち家の什物

高盛

鬼はそと鬼はそとへと口まめに

手まめにはやす年男かな

貞富

ねつ起つする間にもはや節分の

まめをうつゝか夢の世の中一團

年の數節分のまめを一口に

顯興

とつてくはふの鬼も十八

同

おそろしき名には相違や節分の

豆におそれてにぐる鬼みそ

弘誓上人

後撰夷曲集卷第五

賀付神祇

元日祝

大ふくをいはへる門にたてぬるは

千年もふらん茶筌松かな

知秋

君が代は久かたつきの御茶なれば

ふくまでもようたつ春の色

正之

一節に千代をこめたるひさくもて

本歌

くむごもつきじけさの大福

永貞

秋の田の稻の出来やうかゝれどて

はながを春にかざりわら哉行風

夏祝

君が代はながい菖蒲を軒口に

さして變らぬ嘉例めでたし

景則

水上にすんだる御代にわき出る

智恵の泉ぞめでたかりける

友和

秋祝

君が代はほにほがなりて年々に

愛^{めで}たからふよ久しからふよ 宣秀

百首歌の中に

長久に治る御代は佳吉の

市から十迄めでたかりけり 政長

冬祝

年の數はよむごもつきじ節分の

まめな我身を猶いはひ歌 夏虫

杉焼ある座にて

料理する魚のめでたい御代なれば

身もらくゝと杉焼ぞくふ 一見

祝

波風もたゝぬやうにしうき世をば

わたらせたまふ君が舟かも 貞富

たれもかういはふや君がため池の

水には龜のすまん疋よと 満永

うごきなき證據にたれも石倉^{いほくら}の

いはりの下の文字いはふなり

武士祝

一張のいきほひに敵をたひらぐる

弓は何よりたからものゝふ 宣就

賀入祝

本歌 賀殿は千代にや千代と祝うつ

礫の石に苔のむすまで

及之

君が代は何にたごへんまさかりを

ちひさき針にとぎたつる迄 本ノマ、行重

つてん天下めでたいことや申べき

打をさまるき世を祝ひては 舍永

君が代は松のちゝりの種生て

末も戸板にはたてなるまで 本ノマ、杉縁

まつすぐにはびこり増る君が代は

末までつよき竹の根がらみ 安勝

喜多院入道二品親王家五十首

祝の中

君か代は真如くちせぬ室の浦に

慈悲のあさ日の光さす迄 寂蓮法師

神祇

天照皇太神のあまねき御恵を

おもひてよみ侍りし

ぬかつきしきねの外なる身の塵も

箕にてひるめの神のみ心

行風

伊勢にて

神明の御恩を何とほうせんに

ひざまづきたる斗りなり梟 友信

宇治橋にて

欲垢や猶ないぐうの清めとて

手水つかへる人も宇治川

人々散錢まくをみて 本歌

散錢も所によりてかはりけり

難波はあしをいせは鳩の目

正月十六日伊勢へ詣りける時

よめる

けふごに神事催す獅子頭

十六日は尤もぞかし 正信

題しらす

社頭さていせの山田をもる人は

尤鹿をいむべかりけり みさく

御祭によめる

御旅とて神にも宿をかすがのゝ

馳走をしたてまつる氏人 露錢

八幡にて

魚鳥は嫌ひたまはじ石清水

鳩の峰なる神にまゐらば 資之

すまふの手四十八願かけてとるや

彌陀一鉢の神の夜宮に 友知

世話 賀茂

伊勢よりも雨風の神ござりたら

わけいかづちで庭ぞ掃べき 安勝

競馬

くらべ馬相手おとしていさめるは

かつにのつたる禰宜の貌付 みつない

稻荷初午

初午の轡の音やこれならん

いなりの宮にひやく鰐口 貞因

たび給へかくれみの笠そのこづち

たからあはせてみつの神垣 俊佐

松尾

三木たんと参ると神の御貌の

いろはかはらじ松の尾の宮 信安

三輪

まつすぐに杉のまさめの木心な

人こそまもれ三輪の明神 貞富

祭の日雨ふりすさびければ

雨はさつと清めにふりて雲は皆

さるの日吉の祭めでたき 満永

山王やさはらばひやせひやさんと

さる手祭のねり衣成らん 可正

住吉に繪馬かけし時

住の江に墨の繪馬をかけたれば

尤こそ神もみるらめ 満永

座摩大明神は雨を領したまふ

諺詞を思ひてよみ侍りし

諸ひなす千手の御手のそれならで

さまゝの神のちかひ雨山 行風

諸願とてかねの緒をかけ繪馬かけ

いのる心もさまゝの宮 政長

鹿島事觸を

事ぶれの禰宜はかしまの御使に

あるき神とや是も申さん 貞富

家集になゝのおやしるにてよ

める

いのる事なゝのお社ころゝと

ことなはせよく口走る也 源俊頼 朝臣

雨乞に

雨乞のいさめのための踊子は

袖をつらねてふるの明神 自噺

吉野勝手の宮にて

神軍かつての宮の鋒のえは

よしの漆の花ぬりにして 徳元

散錢をはまのごとくにまく人や 法眼

まもる勝手の御前ならん 綱巴

子守の宮にて 童愛詞

鈴の音もころろんゝころゝと

いふは子守の神々樂かな 貞富

金鳥居にて 本歌

みよしのゝかねの鳥居も春くれば

いまへしほの緑青のいろ 三省

多賀

正直のかうべにやぐる御こゝろ

あら杓子には多賀の明神 近吉

筑摩

祭には鍋いたゞくを女房の

縁につくまで許してし哉 満永

北野にて

拜殿にかけし繪馬の書付も

はねたる文字の天満天神 一圃

御影を拜てよめる

菅原やふしみあふぎみたふときは

御名も廣大自在天神 休圃

安樂寺にてよめる

鶯の羽をやとひて飛梅の

駕にはいかでのらできにけん 法印玄旨

同じ所にて

飛梅の花咲ころは天神の 世話

御ひげの塵を取てみましや 顯興

杓宮

太神にたてまつらんと餅つきし

うすめにそふる杓の宮かも 行風

唐曰によこがみあるをたぐひにて

日本にたつる杵のみやかも 延之
横槌のをれたやふなる我等まで

守らせたまふ杵のみやかも 貞富
おもひこめ願たてうすの印ありて

神の威光もつく杵のみや 信安

千早ふる神にはあらぬ宮紙を

きりて御幣ごあがめぬる哉 田也

石の鳥居に書付ける

歌の文字切付るならやはらがん

神の鳥居の石のかたくと 友知

千金にかへぬ氏子と神かたい

證據にたつる石の鳥井か 信安

夏神樂

すゝしむる心をもつて我家の

子孫に惡事夏神樂かな 長丸

題しらす

辻祭けふをはれどもみせさやの

さき折掛てねるやたが子ぞ知家卿

茅輪

神道を行ふねぎも御板に

輪をくいる也禪のまねして 高故

住吉御板に詣て

引よせて結ぶ祭のらちやらひ

とくれば本の竹丸太なり 永貞

題しらす

初尾とてぬか取あへず里人の

手向るもみも神のまに〜 顯興

或社にて禰宜と神子何事やら

んいさかひ神樂の具もおしや

りけるをみてよめる

すゝしめの鈴さへ投つはふりこは

神樂太鼓のぼちやあたらん 弘誓上人

福祿壽戎大黒の繪を題にてよ

める

おのづから大黒天より下さるゝ

福祿壽命戎三郎 宗定

題しらす

米をひる神子には縁のちかいれや

神にぬかづく杵のありさま 一見

参る人多きによつて手早振

神の火をます十二灯明 行重

正直な人のかうべの鉢卷や

やごらせたまふ神のしめ繩 宣秀

正直な人をばまもる印には

社〜につかふかんなぎ 貞富

はげしうへ蠅はすへると正直の

かうべなりせば神ぞ宿らん 顯興

後撰夷曲集卷第六

離別付羈旅

むまのはなむけに

吹風のたよりもあらばかきくれよ

筆をなげしのほこり斗も 休甫

餞別に扇遣すこて

はなむけに扇をやるはをりくくに

たよりをせよごあふぐ所か 資之

百首歌の中に

死ぬるほご悲しき物はおもふ人の

遠き旅路にいき別かな 貞富

同

別ても又よりあはんあはんどの

くりこご申いごまごひかな 一圃

本歌 題しらす

伽羅衣きつゝなれにし妻の助

はる芝居する旅をしぞ思ふ 俊佐

羈旅

大井の里にて夕立のしければ

やれいそぎ用意をせよ夕立や

刀のさやにおほ井しぬめり 友信

鳥羽の車道とはにしるきをお

もひてよめる

くれかゝり行やとばく鳥羽道の

しるきにはうご秋の山道

狐川にて

宿の名の八幡の穢多が舟賃を

はぎてごりぬる狐川かな 高故

はまりては浅き瀬をさへ恐ひはむ

なくくわたる狐川かな 長久

本歌 題しらす

大坂の土佐堀川にはのみえて

いまやのぼらん淀の過書船 信元

大物浦にて

旅人のむかふの景を引うけて

のむ盃のたい物のうら 政長

百首歌の中に旅

旅人の口なぐさみにすまの浦

せき吹こゆるたばこ一ぶく 一圃

舟坂にて

草臥て腰もふなく舟坂の

茶屋の縁にし休む旅人 友信

垂水にて

兵庫よりのりたる馬のはるびさへ

たるみの宿をきくは實か 政長

日岡峠にて

たつる茶の淡田口をもたきつゝ

休めばごつとたくる日の岡 珍軌

石邊にて

はたごやに入立みればくき桶に

おしをかけたる石邊なり梟 一正

本歌 水口にて

水口にわれやとむらん女子さへ

軒の下には諸聲によぶ しみ人 しらす

土山にて

馬かたの足跡たづね行道も

白土山の雪のゆふぐれ 信元

湖水の舟を見て

山の名のひらばりなりな櫓を立て

おすや腫物の水海の舟 一見

蟹坂

夏の日にあなくるしやと旅人の

よこばひにして登る蟹坂 光廣卿

かにが坂はふて上りし草臥は

かうこそ有んと思ひける哉 延之

鈴鹿にて

氣づかはし伊勢路を馬にのりかけの

つゝら折くすゝか山哉 智元

石薬師

所からおひゆく馬子の小歌さへ

上るりぶしの石薬師かな 信元

雲津川にて

雲津川あぶなきかりのほそ橋を

竿になりてぞわたる旅人 榮種

題しらす

本歌
参宮の道さまたげになる物は

みめよき茶屋の女なりけり 貞因

はじめて伊勢へ下りけるにか

ねて思ひしより遠くおぼえ身

もつかれければよめる

伊勢道もこまれよてとは遠からじ

草臥し身のゆけばこそあれ 友久

櫛田川にて

煩惱の垢すきおとす水ぞとの

神のおつげの櫛田川かも 榮種

山田より阿漕が浦に行道にて

よめる

本歌
いせ参あこぎが浦にひく足も

度重なればちがくぞする 廣通

鬢の澤といふ所にて

糸びんの澤とやいはんもどゆひの

はよりほそき里の道筋 友久

鳴海にて

精だしていそくなるみの暑さには

汗もかきつゝ行かごのもの 友信

芋川にて

足引の山のいも川ながれなば

自然生にや鰻ならん 玖也

ふた川にて

國は三河里はふた川あはすれば

いつかは登りつかん故郷 遠江守 一政

かきあげて洗ひや流すかちびこの

世をうみわたるかさのふた川

澤庵和尚

人々八橋見物するに

みな人の八橋見んと八方へ

かけ廻るもぞ蜘蛛なりける 恒貞

しらま弓しらぬ長さは山鳥の

尾にてやはぎのほしの一筋 保友

岡崎にて

鉢袋手をさし入てさがせども

何をかぎきの茶の錢もなし 澤庵和尚

鹽見坂にて

いざさらばこゝで料理の鹽見坂

荒井の海のさかな求めて 光廣卿

火打坂にて

鍋炭にちがはぬ茶屋のかゝが手は
火打坂てふ印とぞみる 友信

池田にて

音にきく池田の宿につきぬれば

湯屋を尋てせんそくぞする 一正

見付を出て空くもりければよ

める

雨雲を見つげに風もふくろゐと

駒にむちうちかけかはの宿 友信

みつげにて

白雲のこなたかなたに目ぞくばる

富士をみつげのかたのいらねば

法印玄旨

かなやにて

水の干て嬉しきかなやいざさらば

こさんとのぞむ人大井川 友信

宇津山にて

白玉の何ぞと不審うつこのやの

園子はこれぞめされ候へ

吾妻より上るとて鞠子宿にて

よめる

藤枝にかゝりこまらば鞠子宿

かへり足をものべ足にせん 雅章卿

府中にて

日高なにこまれと駒の口ひくは

忠のふちうの馳走なりけり 珍軌

江尻にて

忠節もふちうとぞなる持鎗の

えじりて主の馬を追つゝ 尊海

旅人はいつしか巴豆をのみつらん

とめてもくだる江尻なり是 玄札

興津にて

みても三穂の景にはあらぬ心をば

あとにおきつゝ旅はうい物 友信

春雨にあふて日高の留りには

欠をしつゝねつおきつなり 知度

由井にて

のりかけの馬の荷繩のゆるまゝを

しつかとしめてゆるの濱道 一正

由井蒲原をよめる

里の名のかんばらはらと亂るゝや

髪をしごろにゆるの馬かた 友信

蒲原にて

遊女には分別だての旅人も

さんかんはらりちがふ揚錢 信元

たれとしらぬ人と道づれせし

に算用の事なごかたられける

いとよしありければよみてつ

かはしける

算用もよきかんばらの人ならば

そろゝばんに語り逢べき 知友

かんばら吉原をよめる

蒲原や吉原原をかぞふれば

これぞ般若のはらみつのだ 尊海

富士の山を見て

それがしもきてこそはみれ菅笠の

なりをするがのふじの頂 友信

みやこへの宮箭にしたや富士の山

片荷に田子の浦がもたれば 利安

題しらす

双六のさいの川原を打過て

ゆけばほどなく番所さころかな 玄札

咳氣故風冷しと扇をも

いる、箱根のせきくぞ行源具起蟬

坂のほごしらく汗をかく馬の

駄賃もたかき箱根山かな 顯興

伊豆のあたみの湯にまかりけるに米かみといふ所をとほる

さて

賤の女のもみすり歌のごだゆるは

ほはばるほごや米かみの里 未得

肩衝宿にて

地白なる霜のあしたはいかならん

夏ぞきてみるかたひらの里 澤庵和尚

川崎にて

川崎もつのくにむさしかはりけり

かれは舟つき是は馬次 信元

江戸へ入べき日駕籠からせけるにあくまでもささかごなり

ければ

本歌

むさしかござすがに足の痛むには
乗ぬもつらし乗るもうるき正見

角田川にて

きてみれば武藏の國の江戸よりは

北と東の角田川かな 信輔公

東へ下りける頃深川の八幡に

詣けるにおもひがけざる人に

あひての挨拶に

めぐりきてあふや御縁も深川の

弓矢八幡ゆみやちまん 信安

東海道をへてむさしに下りつ

き上るべき道は木曾路をとお

もひたちてよめる

めづらしう上り下りのてをかへて

我は兩道かくるむさしの 友信

板橋蔵の宿にて

わらびにてのめる煙草の不自由な

たびはかたはらいたばしの宿

蔵の宿にて

本詩
むさしの、蔵を通る旅人は

まづ手をにぎる浮れめの袖 信元

蔵の宿にて馬子どもの喧嘩するをみてかれが心をすなはち

奴子やうこ詞にてよみ侍りし

手を出せる折てくれべいばか面つめ

ごこさ蔵のしゆく馬かた 行風

本庄倉削野里にて

本庄の道のりよき此馬は

さくのくらがの里なれば也 友信

沓懸追分にて

旅人の馬追わけて行道に

あるはむべなり沓かけの宿 行重

垂井の宿にて

世話
長半があてのみをせし昔より

たるゐの宿の名は立にけん 友久

碓氷の坂にて

すべりては尻餅をこそつきにけれ

うすひの坂をあめにこす人 未得

古本には越路トアリ
越後におもむきけるにめしつ

れし者手足いたみ椿坂こえか

ぬるをみて

足も手もいたみしこしの旅人は

登りかねつゝよつばいの坂友久

湯尾峠にて

ゑいやつと上れば茶屋に沸しぬる

くわんすの湯尾峠なりけり 珍軌

修行に出栴崎に宿を取りける

にあるじすげなうもてなしける

るを夜に入て法問の事なごか

たりきかせければ随喜しける

をおもひてよめる

栴崎にしぶゝ宿を取りつるを

あるじのこゝろ熟したり是 親鸞上人

播州逢坂にて

かちやいかに乗たる我も乗れたる

馬もうきめにあひ坂ぞかし 政長

高砂に舟がゝりして楫をあゆ

みにかけしをみて

諸詞 高砂や肥後の國よりつく舟の

楫をわたすは今も艦なり 宣就

しかまにて舟にのりおくれし
を見て

出舟にのりおくれぬる旅人は

何としかまの徒はだしにて 長行

こしほそありの浦にて

いたむともさいつさゝれよ盃を

こしほそよりもありの浦迄

ふみ人しらす

旅のやごりにて風鈴のあるを

みて

諸詞 短尺をつけられたるはふしぎやと

みれば旅宿の風鈴なりけり 成之

旅の歌

駕籠にのり貸出しつゝありかずに

本歌 自由にゆくもおあしなり是 満永

東風ふかば荷覆をせよ馬の上

乗手なしとて雨なゝしれぞ 高敏

遠道を馬にもので先たゝぬ

悔のやち旅百千鳥足 行重

牛にのり長旅せし時よめる

本歌 たらゝと又此道や遅からん

牛と見るにぞ馬は戀しき 賢隆

海路旅

同 かさゝぎへ渡せる舟のきつかりと

白きをみれば木綿帆にこそ 行風

本語 乗合の人皆ゑへり我ひとり

さめたりがほの沖の船頭 成之

そばからも身がひえまする四國舟

あはの鳴門のきびの悪さに 貞富

おもひがけぬやごりに本みし

をんなこれかれにあひてよめ

る

本歌 たのむかな亭主もしらぬ此宿に

知人えたりおまつお杉を 自噺

題しらす

旅人の氣はうかれめに腎精も

つかひへらせる腰のさげ錢 一圓

旅夕

ひたるさも哀もそふや是といひ

かれいひもなき宿の晩も毎雄

田舎より京にかへりつきてよ

める

度々の田舎くだりの苦勞さも

歸路しつれば氣樂なりけり満永

後撰夷曲集卷第七

戀歌

題しらす

いとをしや更に心のをさなびて

たまぎれらるゝ戀もする哉西行上人

忍戀

我戀は青み上戸ののみさかり

色にも出じどりもみださず貞徳

忍れば貌もやせけり我戀は本歌

物やくはぬと人のとふまで元信

見戀

一目見てふるひつきぬる俤が

はや煩惱のおこりどぞなる本也

百首歌の中に

取なりを見るごわしらが癖にして

つかみつく程君ぞ戀しき貞富

九十九夜かよひし人の足づよや

見初てわれは腰をぬかすに酒粕

百首歌の中に

田樂のこがれて君の戀しきは

する山椒のみそめたるゆゑ一團

君が姿みるからうすのそれならで

思ひかきいれふみやりに見方重

未見戀

見ぬ君の諸行むしやうに戀しきは

是生めつばうな我おもひ哉昌惠

見不逢戀

我戀をたどへていはゞみこのうら

あふやうなれどあはぬ君哉景則

蛤の玉のやうなるお姿を

見るは目藥氣の毒にこそ正盛

名立戀

釜の湯のわかかへる程名はたてど

賤がこひ茶の逢ぬつらさよ知秋

祈不逢戀

君が心いよゝ我にはどけぬは

結ぶの神をいのり過たるか資之

誓戀

童口遊詞

ゆびきりや地獄の釜へはつたりと

おちようといふ二世の契約 安勝

諺詞

世にうたふ殺生石のそれならで

約束かたき君と我中

一圓

世話

あはぬ夜は身をあへ物にはしるその

百首歌の中に不逢戀

床もなみだにうかし汁哉 入安

戀風をひきて煩くらすこそ

藥も君もあはぬゆゑなれ 貞林

憑媒戀

君にかく腰ぬけ者となりし身の

杖とたのむは中立にこそ 知秋

變戀

吹出す喉笛よりの御情も

終にはかはるうその世の中 正勝

世話

誓ひしもらつこの皮のかはりつゝ

あちらこちらへなびく君哉 政要

契りぬる君が情のうす假粧

跡からはげしおもて恨めし 行廣

馴戀

もつと

誓を結ぶの神のちかひころ

とけて嬉敷われとありさま 安勝

夜戀

短夜も獨はねらじ寅の時

うき立戀のみをしせがめば 次木

本歌

こぬ人を待におろしと世話をた

やくや勿論身もこがれつゝ 顯興

こぬ妹は手つかぬひし着る物の

恨みながらも幾夜まち針 行重

家集戀歌の中に

御園生のませの秋萩七くだり

たくるにつけて遅き君哉 源俊賴

朝臣

逢戀

いが栗のみとせ待侘あふ夜には

にじりよりつゝ新枕せり 每雄

百首歌の中に

蛤の貝のたまゝあふ時は

にじりよりての新枕かな 貞富

同

しんみりといとゞべたつく我心

味噌で豆腐に新枕かな 一圓

梓弓引手に笛をちかへじと

やにはに君をいて落しけり 貞富

君が今夜おちたればこそ戀死ぬる

命を我はひらひけるなれ

妹と背とたまにあふ夜は紅閨に

枕をならべ口やすいてう 元成

君と我二世を契りてねたる夜は

なむあみたばつ睦言ぞいふ 惠立

題しらす

山賤の埴生にかこふわれ竹の

よませになどて逢見初けん

藤原光俊朝臣

逢増戀

ふりつめし心こんばん打とけて

双六の々の戀を増れる 圓琢

百首歌の中に曉別戀

君と我肌をあはせのきぬくも

ときもけかたのうき別かな 貞富

別戀

別路に思ひを鹿の春筆の

しくりくごぬる袖哉 每雄妻

鳥が啼ばそなたにもなく我もなく

惣泣にする衣くの袖 友和

怨切戀

むつまじや君は白齒にみづからは

ひたひ髪より契りそめてき 重次

世話
思戀

我戀は啞の夢みた如くにて

いふに言れぬ思ひなりけり 可正

百首歌の中に

君こひしこひしのかたまりか

ばんしやくと成て我思ひ哉 貞富

同し中に片思

我戀はせいたかひきの駕籠かきの

跡先あはぬかたおもひかな 一圃

同

君に我えもん好みはいたさねど

こひめぎぬの片思ひ哉 貞富

逢不逢戀

起て詠ねてみる眼のたまさかに

逢まする夜はかのえさる方 每雄

被忘戀

上るり詞
上るりのふしゝとなる中々に

さてもその後あはぬ君かな 一幸

百首歌の中に

忘れじのごわうのうらをみ熊野の

うらみてかひもなちの權現 政長

恨戀

うき人を千万く恨みぬる

そではなみだのつゆも億兆 宣就

百首歌の中に

戀風のつよくふくりういふ君が

詞のくずも恨みなりけり 貞富

題しらす

すてまうさふうき名都にたつみ也

何うぢくご君をしのはん 正定

互思戀

情をばかたみにかけつかけるゝ

戀のおも荷は持もくにせず 幸昌

不逢歸戀

忍びゆく中立賣も徒に

たッすぐご戻り橋かな 貞林

しとめをしのびくに通はせど

君にえあはで歸りくりかた 清祇

世話
難面戀

なびかざる君を申さば楠の木の

石よりかたき彦七が貌 行豊

夢戀

あさきゆめみしお姿を忘れかね

ゑひもせずけふ袖ぬらし候 元房

題不知

おのづから手枕はづしねなほれば

我おもはずと妹むつけたり

よみ人しらす

五音にてそれと知らるゝ小夜更て

門にたちつて殿ごなるらし 政次

小夜更てそろりと忍ぶ部屋の戸に

夢になりと逢せてたべと君がぬる

枕かみにやきせいかけましみつな

寄笠戀

きもせて君はすげなや菅笠の

紐も結ばぬ縁ぞものうき 知秋

寄衣戀

戀衣みる茶のいろのあさくと

明ばんあはせ給はれよかし 殘月

寄布戀

いかなれば戀にむさるゝたゝ布の

猶さゆみなる人の心ぞ 源仲正

永久四年百首歌の中に

汗いらはうれたくせこは思はしや

人肌ふるなまだらを衾 藤原仲實朝臣

寄肩衣戀

世話 身にあはぬ君が心は鬼もじの

肩衣をよるの物おもひかな 貞富

寄袴戀

いかにせんうき年月をふる袴

君はきもせでまちよわり候 知秋

寄糸戀

よつほごて打とけたまへ片糸の

よるくくも心しんくや 行重

寄筵戀

宵々に人待床の寝むしろは

あふみ表にしく物ぞなき 未得

寄鎖戀

世話 金をもてするとは無にしつくりと

くさりあひだる君と我中 可正

寄盤戀

君もしれ我はさいづちあたま者

のみの先よりふかく打こむ 友松

寄毛拔戀

君とわが中はよくくふ物なれや

上手のしたる鑷かきにあらねど 延之

寄櫛戀

二十六度くどげどけす黒髪の

くしく物を思ふ身ぞうき 利房

家集に

杉扮を引袖人はあまたあれど

君より外によこめやはする

藤原清輔朝臣

寄車戀

きしまする人の心はやれ車

わが儘にしも引にひかれず 未得

寄乗物戀

跡先をおもひまはせば我思ひ

乗物の棒の中やたえなん 貞富

寄行燈戀

口舌してくらき心となる中も

丸行燈のあかしあふ夜は 正信

寄十露盤戀

幾度もあはで待そろばんことに

いつはりにくの十八のきみ 瑞生

そろばんのつぶさな文を送れども

引にひかれぬ君はさんく 正定

積る事そろくばんに語ろやれ

あふた時には心おかずと 貞富

寄破子戀

我をいどふ妹が心よこまくと

隔て勝なるわりなる覽 冥徑公

寄石磨戀

石臼のおもひをかけて廻らぬは

君を挽木のをれがきのとく 知秋

寄酒戀

情あらばとくりと閨にねもしなん 本歌

肴物とは千話をしつゝも 正盛

付ざしは藥酒とぞ申べき

戀の病のかろくなりつゝ 知義

寄餅戀

おもひつゝ心もちをば君にさて

何かとりこにいふて契らん 正重

ちぎりなば丸くなりなん此君の

角ひしもなき御心もち 惠立

寄蕒碧戀

恨みのみたばこの息もつきあへず

物思ふ身のしんきざみ哉 夏虫妻

人前をおもひの火入取よせて

たばことふかん胸の煙よ 友信

寄膏藥戀

はれ物のかうやくなれやよき中は
離れもやらす口をすふてふ 正盛

寄根太瘡戀

あひたやといふ程うむにこぬ君は

われが思ひのねぶと也けり 真富

寄瘡頭戀

たてらるゝ我れが心は瘡がしら 世話

君がよければ物も言れず 真久

或女を我おもふと人にしるる

までほめければ

我おもふ人のかたげてほめぬるや

戀の重荷とそもいはまし 満永

いさゝか恨むべき事もなきを

恨みてたびゝしなんといへ

るをんなを見て

淵へ身をなぐるといひて熱心の

ふかき女はきのとくじやぞや

ある男女あひおもひのあまり

さしちがへしぬときゝて

憎き物をいけても見よといふ事は 世話

いととき君としする故かも
或少人のふりごゝるなるを見
て

て

憎ていにふらせらるゝと退はせじ 退き

御身にそふた影ばふしぞや 空存

題不知

若衆の心はよそにありそ海の

はまの眞砂の數くごけ共源通勝卿

若衆の尻つきをみてはなれえぬ

念者や桂男なるらん 真富

寺よりもあがり子となる若衆の

かごいるゝこそ惜き貌ばせ 靜壽

うつくしきかぶき若衆の女がた

在家出家のおもひたね哉 貞因

南無妙法れんぼの道に成ぬれば

出家も俗もかはらざりけり 旅泊

尻めづかひ若衆にさへする人の

女をすくは理のまへぞかし 正昏

昔みし人の衆道はやみにけり 本歌

小家ばかりの妾のみして 俊佐

煩のふら／＼とふらつくは

ふらつく物のしわざ也 信尋公

禰宜戀

おもて白き神樂女のふり袖に

きぬが鼓もうつゝぬかせり 貞富

御影堂比丘尼かたへ申遣しけ

る

行すともわれにあふぎの縁あらば

折々こちへ御影堂衆 行重

題不知

生れつくみめはともあれ心中の

たしなみふかき女房もがな 貞因

妹に別て後友とする人ひとり

ふたりなに／＼の事侍るきも

いらんなごいひこしければよ

みて遣しける

本歌

年たけて又女房をよぶべきや

命ぞつれなさよの中人 貞富

題しらす

同 其方を忍ぶ二階のはしごより

我たちにきこ人にさたすな 行豊

或女房のふたの物風の吹きま

くりしをみて

斗帳かとおもほえけらしふたの物

ちらと見えしかみ様の前 蒲鉾

あるごたちのふるきふたの物

あなきたなといへるをきゝて

そばなるをんなにかはりてよ

み侍りし

あなむざと捨てなくれど女房の

身には秘藏のふたの物なり 行風

題しらす

嫁取の後の朝に起て又

まごろむ人を聲ねどやいふ 貞富

しもざまの若嫁は部屋住とて

三十日の内十五日里にあるを

思ひてよめる

部屋住の内より出て十五日

里に隠れし姫をしぞ思ふ 相宥

或家ごうしのくれかゝりて宿

にかへり戸たゝきけるを主み
づから戸あけるをみてよめ
る

妻戸をも妻がたゝけば内よりも

おつと答へて明ていれぬる 満永

芋酒は精の薬なりと人々いへ

る座にてよめる

芋酒をのめばいもせの中よくて

零餘子をうむといふは實か 澤庵
和尙

題しらす

風呂の湯女それもくどくか口説寄
垢はおごさで坊主おとせり 行重

寄傀儡戀

すひ付てくれし煙草はうかれめを

戀の煙のたちそめにこそ 休昌

すりきりを目利のみかは鼻もきく

しやらくさいとて勝ぬ浮女 正長

傾城は何にたごへん双六の

さい／＼變るふり心にて 政長

世話 うられたるその身の親の氏よりも

そだち柄にぞ人のうかれめ 正舎
うかれめのたつ門口を行々も 本歌

隠るゝ迄にかへりみし茶屋 俊佐
うかれめを物にたどへば剃刀砥

あふ度毎にかねをすはるゝ資之
たはれめにたはれて金を負ぬれば

戀の重荷とこれや申さん みつ
思へども質のながれの君なれや な

銀がなければ請出しもせず 貞林
かねはらふ跡より戀のせめくれば

傾城やこれ煩惱の犬 行風
出羽といふけいせいをよめる

稲舟のいなともいはず心よき
出羽と最上のかはゆらしやな不得

玉藻といへるけいせいをよみ
て

假粧して出るたまもが姿こそ
買手をばかす晝狐なれ 長行

橋本の傾城に馴て
戀こがれ胸やき鼠狐川の

流れをたつるをんなさけ故 惟次

大阪佐渡島町を此頃世に越後
町といひならはせばよめる

傾城にまよへる人は親しらす
子しらすにゆく越後町哉 宜爲

大津へ通ひそめて
たきつくる柴屋町なるうかれめに

うかゝ寄てみを焦すのみ 一忠
縣へ行女のかたみとて小袖送

りし折からよめる
身せばやな我には袖のゆきまでも

あはぬ形見の君がきるもの 満永
題しらす

我しなば火桶の土となしてたべ
冷たき君がほゝへいるかに 満永

腎水につれてなかるゝ足腰も
身もやせこけて骨とかは哉

剃刀のなまざれいなる後家の身も
殿ほしいとはいひやかぬ覽 延壽

子^{本歌}をすてふ我身は若き後家なれば

人しれずして姪みしものを 安勝

女夫して搗しかちんのそれならで
契りちぎれば小餅とぞなる 貞成

悪女をよめる 本歌
むかへ見る妹が貌こそうたてけれ

へなも交りのみつちやのみして
みつちやづらは夜の契も絶ぬべし 直好

明るわびしきかつぎ帷子 成之
密夫

うかゝどちぎりて捨ん命こそ
をじかのつのゝつかの間男 是誰

鼻の先はそがれにけりな徒に 本歌
わが間夫と長ねせしまに 貞林

乞食になりし小町の間夫は 世話
貧の歌よみ戀の盗人 正香

題不知 同

珠數曳の夫婦は常にふさゝと 同
ないも事わりすれゝの中 長九

つきそふてゐれど餅屋は臼にあて

杵にあてこといふめおと哉 貞富

何事にかありけん心腹たつる

女を見て

女房はひのあるゆるか殿にむかひ

やゝごもすれば身を燃す覽 幸昌

悵氣

賤の女の悵氣に男ふすぶるは

あくたもくたに何や蚊遣火 友和

ふしゝゝ成にし事はお齒黒の

かねゝゝ深くりんきいふ故 行重

うつくしき女のりんき深きこそ

八重の錦に糞つゝむなれ 平時頼朝臣

人の女のあまりりんきの終こそ

ふたりの恥を顯しにけれ

鍋釜のふた道かくる食たきと

火花をちらす悵氣いさかひ 是政

たゝきあふ棒ちぎりきは松山に

波こす頃の悵氣いさかひ 元信

女に心かよはせりとむづかり

し若衆への返事に

世話 女ぐるひに悵氣めされど若衆の

せなかに腹はかへられぬ物 正好

題しらす

若衆をすける男の本妻が

結句念蛇と成にけるかな 本也

後妻のゆだむめさるな有間なる

谷の町衆の山のかみさま 蒲鉾

男をねたみかなわに火ごもし

貴布禰の社へ丑の時詣せしな

ざいふむかし物語をおもひて

よめる

いのるにもかなはぬ事に男をば

にくふ思ひの火をこもす也 高故

姑の物すこてなげきける女に

かはりてよめる

本歌 出ていなば男にくみといひやせん

うき姑を人はしらねば 利房

題しらす

陰陽の神といひしはひいき口

たゞ業平は嬌欲の人

友知

在五中將東にてみよしのゝ歌
よみ給へるありさま書し屏風
に

有常が娘はいつのむかしゝ

今は東の人になれ平 夏虫

同高安の里へ通ひたまへる所

かきたる屏風に

大和より立たひはゝきあかなくに

何の糸瓜の河内通ひぞ 夏虫妻

後撰夷曲集卷第八

雜上付名物、短歌、

旋頭歌、廻文歌

題しらす

たつ春によむ歌どもを書寫す

草紙をとづる竹の鶯

淡路守
宗増

春立といふ斗めやさきらく

紛らかすみに老をしるらん 仍可

五十二歳の元日に

妙覺の位にあたる年ながら

けふも愚痴にて元の本阿彌 行風

花嫁の春の始のよろこびに

はやめ藥よ屠蘇よりも先 顯興

七種をよみ侍りし

朝市にうる七種の中にまづ

鶯菜より音をやたつらん 行風

野邊ちかき町屋にをれば鶯菜

うりくる聲も朝なきく 貞富
初春の七日毎にし鶯菜

うりてぞかへるもこの栖に かつ

家職の得業によてかけまくも なが

かしこき詔まし御菓子所

山城大掾藤原貞因になしたま

ふその悦の俳諧一卷の奥によ

める

春毎の縣のめしのうへにても

菓子及第にしくはあらじな 貞室

むめといふ乙女を愛のあま

りによめる

梅が貌櫻いろにてはつそりと

柳腰にもあらせてしがな 本也

梅と牛のかたかけの繪に

牛は是二月の雪か梅花をば

折て頭べにさせいひやうせいト養

鳥梅をよめる

花の兄はをんなこなれや墨染の

衣をまごひうばいとぞなる 且保

題しらす

春はたゞ花盗人の用心に

こしらへぬるか柳ぼくたう むれ

花の頃あるじまうけせし宿に ます

て

花見にと幕さへはれのありさまは

しき次第ある客やえむしろ 乃心

花に夷歌望れて

犬ざくらみてよむ歌はわれながら

然るびやうとも思ほへず候 毎雄

題不知

初瀬女の若き姿はよき山の

花のゑるはやうすけはひ坂 信重

人は武士柱は檜魚は鯛

きぬは紅梅花はみよしの 一休

吉野人丸塚にて 和尙

うろたへて花を雲かごみよしの、

吉野にのこる人丸の塚 方寸

題しらす

財寶をもしゆづりはの嶽ならば

われ花むこの山とならばや 宗也

姥への挨拶に

花筋もさし通りけり若き時は

さぞや櫻のははよからふ 冥久

鐘樓を見て

鐘をいたるたゝらの風の強ければ

湯の入相に花火ちるなり 定章

話半に物いひ出る人を思ひて

面白き詞のはなしのさきをるは

風よりもうき人の心根 満永

俳諧點取のおくに

うごんげの花の本にし参りあひ

浮木の龜かてんをうかゝふ 忠勝

かへし

うごんげな我にも點をうかゝふは

俳諧ていの龜のこうしやぞ 貞徳

夷歌點取の奥に

花落てつら見ぐるしき坊主めが

うすき衣に墨付てたべ 友方

返し

案に相違墨の衣をき坊主の

詞の花のいろつやのよさ 行風

東人俳諧點うかゝへるおくに

書付侍りし

開きみる句數も百の花のいろに

點者は酔て貌あかむのみ

酒盛の座にて

本歌 櫻鯛遠山鳥の御肴に

ながくしひもあかぬ酒哉 金門

兒若衆百首の中に

山寺の春の肴にさくらものり

はさめる兒の名さへ花若 満永

蕨料理の座にて

是や此蕨を芥子にあゆるこそ

用心ふかき料理なりけれ 友和

河内春宵が俳諧の巻のおくに

本詩 千金にます春宵の俳諧に

なつかしくなる河内一國 真室

俳諧點うかゝふおくに

耻を耻とおもはでしるす俳諧は

かへるのつらの水莖の跡 政長

世話 蛙を題の夷歌のぞまれて

大海をしらぬ我身の愚さに

淺きかはづの歌をよみけり 一圓

或國の守の手づから人々に野

老給へる座にてよめる

同 殿の直にくだされます野老こそ

御髭の塵を取てくへやれ 舍永

ある方へ草の餅送るとて

同 何かなとおもふにつきてちと斗

お笑ひ草の餅おくるなり 友信

金右衛門といへるか歟冬いろ

の衣きしあいさつに

いろ深くそめし小袖も山吹の

花にうつろふ金をもん哉 顯興

池輪針をよめる

水色に萍のあるきる物を

ぬひしたつるや池の輪針 満永

機おるをみて

はたくと帷子布をおりぬるは

いと見事なる手妻なりけり 古桶
色繪をみて

美人草眞にかけごもちども似す

王昭君が繪そらごとかも みつ

いぶりなる人を見てよめる な

池水のすまで心に角あるは

身のひしなりと人のしれかし

本歌
題しらす

かゆければ身にうき草のえだ迄も

沸湯のあらばたでんとや思ふ三省

飽食の後よめる

ちよこゝと踊れどへらぬ我腹は

飯の過たる雀鰯かも

梅曲

繪すける桑門の扇に繪かきた

うべける拶拶に

扇の繪手毎に人の用るは

よくかきたまふ墨染の袖 満永

かへし

寫し繪のたゞしきをよく云る

其よくの字はかの欲の字か 直雲

これかれ伴ひ扇あつらゆると
て地紙にそれゝに印せしを

本歌
取ちがへをりこしける返事に

地紙には印の墨もある物を

いかにまがへておれる扇ぞ 眞久

祭の供せし者ごもいさかひて

作り物なごそこなひしを見て

よめる

御萩のけいごの武士のふしゝと

いひてそほろをみだす口輪 貞富

ふらゝ煩へる人をみて

垣にはふ瓢箪ならで貌青く

ぶらり病となれるいとをし 重香

題しらす

攝待にたつるせんじ茶ほうじても

ほうじがたきは父母の恩 成之

山崎宗鑑か手向に

薄程もまだ目はあかでゑのころの

物にざれ句の手向草哉 ト琴

夷歌百首點取の奥に

言の葉の種と思へばまきちらす

此百色は皆わらひぐさ

友知

かへし

百色の詞の花のはめぐさを

わらひ草との卑下も一しは 行風

さて此窓は萩衆の言の葉と也

難波によしあることぐさむか

はゝ花の都人も貌をあかめ口

をとぢて出入息のたゆべき歌

のさまなりとて又

きく人の難波によしとほめそやす

詞の花の萩衆の歌

三夕といふ傾城たちすがたい

とよしといふをきゝて

本歌
心なき身にもあはれは白拍子

門立いそぐ秋のゆふぐれ 貞因

雁の代高直にいへれば

商人の手にわたりても初雁は

空直あるやら高きこゆる 貞富

石龜をよめる

世話
雁かどべばぢんだをふむ石龜の

こうはつむ共羽ははへじな 元信

雁瘡をよめる

秋風のふくに付てもとばぬかな

いくとせつらき足の雁瘡 管窺

題しらす

たばこのむ煙を霧にたぐへみん

時にきせるのがん首もあり 正信

煙草すふ煙管のらうはすぐなもじ

ゆがみ文字とぞみゆる雁首 忠直

しやうくの夜の飴うる片見せを

みれば平沙の落雁もあり 秀愚

最上多賀野氏次木詠草の奥に

最中の月の夕つかた認めたる

物のみゆるはかの鳥の翹にか

けこしにやたが玉章にかど開

きみるに心詞ようえびす歌な

りかく花やかなりしさまは

そもたがのを次木ぞやとて

なむ

實生より詞の花の見事さは

何と心をよせつき木ども 行風

鳴の焼鳥をよめる

はねがきを賞翫したる此鳴も

今はほねみとかはる焼物 友知

題不知

本歌
するの鶴本のしとゝもしめられて

おくれ先だつ料理とぞなる 宗珩

淋しさに友松虫のねざけこそ

ちんちろりにて爛るるなれ酒粕

世話
みから出たさび鮎なれば尾頭を

こふてたぶるも苦し芥子酢 其蛸

有馬山にてよめる

月清みありまでみゆる山中に

まして赤きは湯女の前垂 重次

秋風にたなびく雲のといへる

歌を思ひてよめる

秋風になびきて雲間あきすけの

詠し月の歌ぞけだかき 重香

題不知

浪の上の月弓をとる獸は

よしつねならぬ猿眼かな 一見

諺詞
宇治にて立花をみての挨拶に

しんの姿枝葉のながし水ぎはや

見どころ多き床のたて花 行重

題しらす

菊盆に檜のちよく桔梗皿

みな花やかな道具とも哉 満永

面草や又はにきびの出来ぬるは

貌にもはたけ有故ぞかし 政長

鎌倉の鍛冶正宗が屋敷今は鳥

となれるをみて

世話
正宗が棟門朽てさびぬるは

昔の劔今の榮ばたけ 友信

奈良にて冬瓜汁ふるまへる挨拶に

草紙詞

取あへすうひかも瓜をならの京

春日の里の汁の子にして 正盛

或方へ柿と松茸送るとて

奈良柿にさしそへ送る一折は

是ぞ三かさの山の松茸 貞直

松茸十二本えし返事に

松茸をよるひるくへごその數も

二六時中にあてたまふかや 行風

燒松茸をよめる

本歌
松茸の焼行程のかさかけは

あかぬ料理の鳥は物かは 一圃

ふと尋こし人をしめち一種に

てもてなし、挨拶に

さしも草きうの御出に世話やきて

しめぢがはらのいたき振舞 信海

或方にてしめぢたうべ過なば

たゝりて煩もやせんといひし

人への返事に

たいたもれしめぢか腹に祟りなば

さしもぐさにてやいとすゆへし

澤庵和尚

題しらす

月見ぞとちぎりてゆでし枝まめを

人にも今夜ふるまひてよし 満永

世話
百首歌の中に獵師

とればくふ取ねばくはぬ獵師をば

稼ぎすぎとぞいふべかり鳧 貞富

瓢箪出來なはえさすべきとか

ねて約束しもらふ折からはか

れ人よりきてうばひあふ時よ

み侍りし

約束は我がせんなりへうたんの

百の中をもえりてたまはれ 行風

人のうづくまれるかたしたる

酒瓢箪を心戒と名付てよめる

夕貌となりこそさがれ上人は

佛の種やまきそんじけん 長嘯子

秀吉公朝鮮國追討の軍卒首途

の折御前に侍りしに當座をこ

仰せくだされければよめる

門出によき大將はありのみの

向ふ敵はなしとこそきけ法印玄旨

題しらす

大酒に酔つふるゝも柿ならで

じゆくし臭しと人はいふ也 貞林

柿得たる返事に

かきくけこそをこそこのほも喜びは

過分にそんせらりるれろ哉 卜養

詠詞
柿六十五えし返事に

六十にあまれる柿のさねもりの

ひげこも墨に染ざるはなぞ 卜琴

夷歌點取の奥に

柿のものと跡をしたへる歌よみよ

しふくる口をあはせ給はれ 定眞

返し

柿よりも熟して味のよき歌に

合するや是てんがうのかは 行風

俳諧點取のおくに梅盛がもと

へ申遣しける

むてんなる事の憚りかきくけこ

はひふへほんに笑ひ草かな 一藏

吉野詣のみやげとてをさあい

の栢もてこし時よめる

童愛詞
しちに似た吉野がやは宮笥とて

愛らしげにも配るをさあい 淨次

題しらす

百姓のめんをこばんの心根は

からぬ先より揉手をぞする 宗句

落髪の時

正月と今は引かへ身のかざり

おろしていはふ小春也けり 貞因

十月始鮒繪出し座にてよめる

紅葉鮒も今は落葉と成ぬなり

こがらし酔にてあゆる鰯に 友和

題しらす

色もよう染し小袖や霜ふりに

朽葉鹿子をちらしぬる哉 重次

江州へ田の里にて

溝も時^{とき}もわかたぬ麥のまきやうは

名にしおひたるへたの里人 路春

鎌倉へまかりしに梶原が屋敷

に土民の麥まくを見て

其あそを尋てみればすきくわで

かぢはらが地に麥をまき 友信

安田の里且保夢想開きの連歌

詠へける折から十月末つかた

なりければ懷紙の上包に書付

て遣し侍りし

荒地開き御夢想開く徳ありて

はかる年具もかつ安田なり 行風

百首の中に

難波人身をつくしつゝうりぬれば

枯たる声がおあしにぞなる 貞徳

坂本の者霜腹いたむといふを

きゝて挨拶に

山の名のひえよりおこる霜腹は

麓にさつとくだりてぞしる 貞富

刀

世話 抜をみて身のひゆるこそ道理なれ

氷のやうにござしかたなは 治住

貧げなる者をみて

同 ひだるさに寒さにすくむ襟つきよ

錢もちくびは名のみ也けり 一圃

鴨の汁たうべし夜よめる

本語 さむうして水にいりぬる鴨の汁

くふて我身はあたゝまる哉 貞富

いはふことありて酒盛せし座

にて四天王寺に名だゝるはせ

といふ物をこよりにつけて梅

のはなに作なし是を肴に今ひ

とつとてよめる

本歌 冬の中に作れる枝は紙ながら

かくこそはせの花と成^なれ 胡蝶女

しはすに鯛與鰯えし返事に

心にしかけてたまはる鯛のみか

かずゝ是は御念ごろ鰯 元信

王餘魚と鯛とえし返事に

年毎のかれいといひてめでたいを

くるゝは過分至極目哉 満永

年暮に俳諧して點取の奥に

おしつめて物うきくれの俳諧は

たゞ續飯^{そくい}のへらず口かな 友久

題しらす

世話 節分のまめなやうにと名付子は

それこそ鬼に金ばふしなれ 是誰

物名

維舟が信濃小路殿の夷歌共か
きこしける返事に

しほらしきしなのこうじの言の葉を
いしうぞかいて送り給はる 行風

季吟が歌をみてそれが名をよ
み侍りし

かいたるを見るさへもあり和歌 やまどうた

よき吟聲にうたふきかばや

よき道にふけ行風は目にみね

とあかぬ和歌集えらぶゆかし

さと高故申こしける返しに

習ふたかもとよりしるかかく斗り

心言の葉ようえびす歌

永崎氏一見詠草のおくに

一卷をかつみるからにひく點の

ながさたちし歌よさてく

行風に點うかへる詠草のお

くに

夷うたまづかうふうにしならはん
教へてんたべ我等ていふに 貞富

かへし

世話のみか本歌もあちに取ていふ

かう風躰のいかでならふぞ 行風

夷歌點取のおくに

和歌の道かう風名とげ給ひぬと

きくより點に心がけけり 元信

かへし

讀歌のもとのふしんのはれたらば

てんの道をも合點あるべし 行風

詠草のおくに

釣針のまげ句くをなほしたべ

けうかう風を學び申さん 政長

かへし

それく心に心をよせて釣針の

いとまさながらなささうな歌

行風

詠草のおくに行風が字を懷中

といへば

懷の中をし頼むこの歌の

口ほごけねば譯も聞えじ 三麻女

かへし

うつくしきさまによみなす此歌を

愛さうらしと誰かみざらん 行風

移徙せし人のもとへ炭つかす

すこて

移徙はかねてのそめる家なれば

すみよからふと思ひこそやれ

湯谷

うらめしくしくなげど御暇を

もらひかねつる心かはゆや 友信

見付

袖にさへみつけれのかぬ薰物は

あらしたゝるや宿の出女

本庄

草紙詞
たはれめのしひるなさけに酔過は

本しやうみえん事の口をし 信元

大久手細久手

めづらかな景氣おほくて慰めど

心ぼそくて旅はういもの 友信

大和箸尾にて休二といふ人灸

せしがたえかぬるをみて

やいとをば挟む箸尾ですゆるより

あゝらあつやと急に拂へる 宗弁

鍛治近江操身まかりし時よみ

て遣し侍りし

あはれゝ行者が祈り加持しても

定業の死にあふみいとをし 行風

江戸未侍身まかりし時に

住なれし穢土をはなれて極樂へ

参る人こそそのみどくなれ 貞富

短歌

春歌

満永

大ふくの、先たつ春の、祝儀とて、

茶筌松にも、めで竹を、そへつゝ、か

ざる、しめ縄に、よろこぶところ、

だいゝと、しだいもよけに、おき

ならべ、はたはらもつみ、かさねぬ

る、門口にしも、よりきたる、禮者

は袴、かちぐりを、しみに、着なし

て、物まうの、聲きくからに、請取

し、年玉みれば、へぎにする、末ひ

ろく世を、せんす箱、をさめ置つ

つ、たがひにし、詞の花の、口々に、

いひ出したる、蓬萊の、かはらけ取

て、さしむかひ、いせえび程も、腰

かいめ、時宜をすまして、箸をこ

り、はさむ肴は、数々の、これを参

れと、もてなして、たべつをさめに

成ぬれば、春のはなしのはじまり

て、きく鶯の、歌の道、歳旦歌と

て、をか四季の、初ごとなれば、

人々の、笑ひ草とも、よしならば

なれ、

戀歌

おはる女郎、おたち姿を、みるより

も、むめよき花の、貌はせの、うぐ

ひす袖に、わをどて、ひらりしや

りと、さほひめや、白玉ひねを、引

つれて、おはしましたる、あしたよ

り、戀の詞を、きゝそむる、けしや

う文をも、うりわたる、人にもがも

な、柳ごし、手をにぎりつゝ、早蕨

の、いどうるはしき、よめがはぎ、

ふきのしうとめ、立ならび、花みに

ゆけば、やうきひの、そばもはなれ

ぬ、姥ざくら、そだてぬるかの、兒

ざくら、さがり過れば、執心を、ふ

つつおもひ、きりがやつ、春もい

つしか夏なれば、美人草とて、色よ

きを、見るに心は、卯の花の、白き

ふくさを、下着にし、上に地赤の、

芥子鹿子、こしやくやくにも、きな

しつゝ、たち葵ぞと、詠れば、ぼた

んどほれて、色々と、ぐどきぬるま

に、夏もはや、くれ果ければ、秋風

の、たより求て、文月の、度かさな

廻文歌

元日

妻戸壁かざりよそこもかしここゝ

しかも去年よりさかへ門松惟次

吉野高瀧のほとりにてひな人

への挨拶に

皆のきたかたをよきつゝ花のみの

名はつゝきよを高瀧の浪行風

草花

村草の名ははれん哉千たび

たち眺むれば花のさくらんト琴

人の本より權花に草金鈴とか

きておくれる返事に

草の名はくさのこがねの鈴のねの

すゝのねか此さく花のさく忠直

小鷹

足緒へをでうて雀ささ賊さくとると飛小猫

ふところさといざ杖てうてをへ

宜秀

旋頭歌

紙ふすましいてねる夜は千話なか

りそ忍びつゝ君がきたともごく

さぞせん

貞富

りし、果ぞものうき、

のしはすの、見ぐるしく、移りかは

な、つもりし年の、くれゆけば、貌

はてゝ、ふりにふりたる、雪をん

も、今ははや、みなく落葉と、成

何としぐれと、案ずるに、花の姿

はり、もはや冬にも、なりぬれば、

をしきまに、つたも紅葉も、いろか

たがひに、朝貌を、見るに名残の、

棟の外そこで地をみす猫なけな
小鼠おちてこそこのきなん 宜應

後撰夷曲集卷第九

雜下附無常

我宿の薨にうたふ聲はたそ

たしかに名のれ何の種とも

敏達天皇御製

かへし

天原南にめぐるひなつ星

何のくさともとよさごにとへ

此歌は敏達天皇九年夏六月有

人奏曰土師連八島といふ者

あり歌うたふ事世にすぐれた

り夜な／＼人ありて來りて相

和して争ひうたふ音色常にあ

らず八島これをあやしみてお

ひたつぬるに住吉の濱にいた

る天曉れば海に入ものご上

宮太子側に侍ひ給ひて奏して

曰くこれ等惑星ならん天皇大

におごろきて問給ふ太子答へ

て曰天に五星あり五行を主ご

り五色に象る歳星は色青し東

を主ごる木也惑は色赤し南

を主ごる火なり此星降り化て

人となり童子の間に遊びて好

みて謠歌を作り未然の事をう

たふ蓋此星ならんか天皇大に

悦給ひての御製なり返しは榮

惑星の歌なりとぞ

夜這星をよめる

雲の上をあだめきありく夜這星

光る源氏の亡魂やこれ

雨

友知

雨だれのだん／＼と落てくる

音もぞ軒の下つゝみなる

山

正舍

蓬萊の峰かごみゆる龜山に

仙人こそは住たまふらめ

尊海

男山むかふはきたのかたなれば

こやはらむとも云ん大原 みさく

その昔ぎやうに作りてなら酒を

搾りしかすが山となりたか 正久

吉野飯高山にて

雲に汁といふは吉野にかざるかよ

飯高山のあるにつけては 方寸

同姥懷にて

壺ならば吉野の葉茶をつめてまし

是に有合ふ姥がふどころ 胡蝶女

富士山

あをのけに轉ばぬ程に富士もみつ

それより上はすきと白雲 未得

草も木もすきと裾野をやき筆に

駿河のふじはえにせられまじ

友信

百首歌の中にて

雲の衣羽織にきたか富士の山

腰中よりもすそのみゆるは 真富

名にしおふ田子の輪がへを駿河 なり

使ひこそせめふじの大たけ 信安

百首歌の中に關

通るべしいやとほさじと争ひに

詞もすぢりもじのせきもり 政長

幾人か心をこめて案じつゝ

讀出す歌をかくもじのせき 幸昌

出雲國にまかりける時神代の

いにしへやまたのをろちの住

し所を尋ね侍りけれごまぢま

ちにいひければ

蛇が住は是じや彼じやあの池じや

淵じや山田じや噓じや實じや

定次

惡事千里といふ事を

ちつくりと蟻の穴より水もれて

惡事千里の堤くづるゝ 一十

瀧

山姫のおるかごみえて龍門の

さやにまがひの瀧の白糸 正盛

谷水を山の奥よりもみ出しの

鼓の瀧に打ちらし候 蒲劔

有馬山いなの小篠がさゝならは

たれも鼓の瀧のみにせん 弘延

有馬山にて

有馬山湯女のわめける聲きけば

いでそよ人をいれかゆるかは

貞林

法印玄旨とづ川の湯に入給し

を見廻に遣すこて

養生の湯入の心しづかなれや

とつかはとして上給ひそ 宮川尼

血氣つよげなる者瀧にうたれ

しが間もなく逃さりければよ

める

上氣もの山の湯殿にたゝかれて

とつかはとつひ逃てごちやら

尙信

熊野三重の瀧にて

三味線の名も三重の瀧つぼは

浪ちりてんの音のみぞする 以仙

百首歌の中に川

どつと昔塵がつもりて山となり

その滴りのあくた川かも 貞富

白川の咄きゝて

夢にだに見ざる名所のはなしこそ

げにも白川夜舟なりけれ 元親

暑日下部ともの水あぶるをみ

て

水あひて樂やとおもふ心しれ

えような袖の風呂は物かは 一國

播磨國阿古の浦によめる

小鼓の筒にしらべやあはすらん

うつ音たかしあこの浦なみ 法印玄旨

住吉にて

いにしへのふしか太鼓や残りけん

浪もごんどゝ住吉の濱 貞因

火打石をよめる

日の本の肥後の火川の火打石

ひたもの日々にひろふ人々 一見

桔槔

鳥ならで野中にたてるはねつるべ

こな田かな田へ水をこばせり

安親

本歌

世の中に日損水損なくも哉

千代もとひらく新田のため 定次

畿内に出来るを俗に地の舍利

〳〵米といへばよみ侍りし

大かたもぼさつといへば都地の

しやり〳〵米や佛なるらん 行風

禁中

公家衆とむかへば下々は犬のごと

四つ足の門にはひぞつくばふ

梵益

江戸藪小路より虎の門へしは

しが程にゆきかへれるを見て

日のうちに行てかへれる虎の門

千里ならねど藪小路より 管親

世話 題しらす

百姓の造作するをみてわらや

在所のこてが壁をぬるくる 貞富

閑居

獨居はひつそりとして灯の

影ぼふしのみ友とこそなれ 政長

名所松縮輪

唐崎の松のふぐりはいにしへの

あいごの若の物かあらぬか 正盛

本歌 題しらす

きりすてふ此木はうぎに成りに梟

人しれすこそくさり初しが 周可

百首歌の中に苦

蛭人の中休みにと岩の上に

登れば迂りこけむしろうや 政長

山鳥のなくをきゝて

山鳥のほろ〳〵となく音きけば

父かこそ思ひ母かこそ思ふ 行基 菩薩

曉鶏

はた〳〵と關の戸ならぬ羽を叩き

こゝあけうよと鳴か庭鳥 松緑

曉鐘

山寺のはへのしげみにねゝしたる

鳥や夜あけに追出しのかね 一長

寺に留り給ふ夜時の太鼓打そ

こなひしをきこしめして

此寺の時の太鼓は磯の浪

おき次第にぞ打といふなる 義輝 公

本魅

是も又あふむかへしの聲すなり

何ぞといへば何ぞとこたふ 成之

化生

青みどりかつぎて化し狐こそ

池の玉藻の前となりけめ 未得

牛

長門より上る間に牛の子の

親程になりつかんつの國 教二

駒

むさし笠上總尻がひはづしつゝ、

湯洗ひするは甲斐の里駒 重次

本歌 狐

ばけきぬと目には見えねど若狐

尻の出るにぞ驚かれぬる 行豊

頼朝卿見はらの、狩場にて狐

鳴をきゝたまひて夏野に狐鳴
事いぶかし誰かある歌つかう

まつれと仰せければよめる

夜ならばこうくところ鳴べきを

あさまにはしる晝狐かな 季隆

此歌にて當座に三百丁加増給ふとなん

狐

稻荷山晝狐とてみえざれば

よるの殿とはむべもいひ梟 信元

本歌
今こんと鳴しばかりに女狐の

穴にや夜の殿を待らん 元信

狸

腹鼓うてる狸が一曲を

うたはば臍の下がゝりこそ 惠立

むなしき鳥に虫のわきしを見

て

生物を好みしむくひ顯れて

虫くひ鳥が虫にくはるゝ 満永

蜘蛛

天井を行かふ蜘蛛の通ひ路は

いとも煤けし家とこそみれ 武重

虱

耳の根に扁なき風の通ふらし

何れの日より出来そめけん 惟次

六帖題の中に

こきまはる湊の舟の鯉はせに

ひれの騒ぎの波高くみゆ 藤原信實 朝臣

鰻

世話
山の芋はぬめりにけりな徒に

うなぎになりて又ぬらり哉 義辰

江鮠

朝夕におほくさればや町々を

ふるはごうれるあめの魚哉 みつ

若狭糸魚川糸魚を

いとい川の糸魚なれば網の糸に

寄合ひてこそかゝりたるらめ

題不知

本歌
魚の名も所によりてかはりけり

難波の江鮠伊勢でいせ鯉 成之

銚子口のいわし名物なれば

くむ酒もてうし口より出にける

生鰯こそよきさかななれ 高故

題不知

陸奥のちかやつへして鹽屋へも

歸らずにくふ濱焼の鯛 牡丹花

本歌
あの小鰯三百三文にかふたとや

我みる傍で料理あらせ給へ 行重

鮓

西の海の浪のひらりとひかめくは

朝日にむかふ太刀魚の色 行風

ある勇士の主人より鰐與鮓拜

領の時座にありてよめる

手柄には感状のみかこのしろに

そへてたまはる銘の太刀魚 重次

題しらす

魚ははれ成佛をせばその人の

胸の蓮花を座とや定ん 武重

腰かゝめさらくく上座から

下までひいてくるまえば哉 淨次

山をだにくづす力の落果て

たよりも浪にうけるほら貝

よみ人しらす

蛤

村雀彼海底に飛いれば

蛤貝にかいなりにけり

一團

是ぞ此住吉浦の蛤や

鹽の満干の玉のいれもの

行重

難波潟興おもしろや足のもと

にじらて人のにじる蛤

真久

子安貝

身もちなる女のみたら名にめで

くひよろこばん子安貝哉

菊永

蛸

地獄網にかゝるうきめにあふ事と

なご悟りえぬ蛸の入道

未得

あかしにて

海邊の御馳走嬉しゆで色も

赤石に名ある蛸の入道

正盛

題不知

酒ならで手なが蛸にも酔たるは

かまで何盃のみこみしぞや 延俊

魚鳥の歌の中に若狭尺八鳥賊

料理してくれ竹のあなめづらしき

尺八鳥賊ぞ口にあひたる 菊永

漁父

はそい意趣と思ながらも釣の糸の

若もされたら何とすぎはひ 行安

秀吉公より吳服拜領の時よめ

る

下さるゝ小袖のたけの長ければ

忝なきは身にぞ餘れる 法印玄旨

題しらす

敷島や大和にはあらぬ伽羅衣

返すゝも焚しめてめせ 行安

おはしたの下にかさねし着る物は

己が名におふいちやや紅梅 舍永

革足袋

東路の關へははかぬ白かはの

足袋も日數にそひてよごるゝ

元成

芋をうむをみて

女房のどりあげてまくへそのをも

うみおろしての後の事わづ 未得

或人の尺八を我もたるにかへ

てえさせよといひけれど度々

いなひければよみて遣し侍る

かへてたべ初手よりいひし尺八を

持たる人よぎり思へかし 高故

題しらす

關ならぬ鳥の空音は尺八の

あな面白の鶴の巢籠り 治住

鼓の音色おもふやうならねば

やめんどいふ人をいさめて

小鼓はあらむづかしやならぬぞと

捨る心も下手のかはかな 方重

百姓の子鼓うちしをきゝて

農人の大つゝみうつ音きけば

したんゝの植田流なり 宗珩

題しらす

此鼓筒のつきてのしれざれば

直段安げこいふもいつせつ 高故

隣に太鼓うつをきゝて

鍵ならでつくくくくといふ音を

きけば太鼓をうつきざみ也 行風

三味線

ばちはむち糸は手綱か三味線に

小歌をのせてひく駒もあり 行重

浦々の間の清水の歌のせて

今やひくらん三味線の駒 高故

題しらす

篠ためて雀弓はるをのわらは

額あぼしのほしげなる哉 西行上人

太刀

ぬくこても我目の鞘をはづさずば

何の用にかたちの切先 未得

脇指のはがねならせご敵を恐れ

身の毛たつるや兎兵法 宣堅

鍵

節々にかねをふせたる竹なれば

つくともめげじ鍵の長えは 顯興

神祭に六尺共の鍵もたるを見

て

一二三四五六尺にもたするは

なに七八九十文字鍵 友静

移徙せるかたへつくぼう遣す

とて

今年より福のつくぼうやりの間に

たて並べたる作事めでたし 貞知

返し

わが宿に福つくぼうを給はれば

こさちのなると人もこそみめ 安重

めしつかふ者の大ふぐりなる

が馬にのりしをみて

のり鞍のまへわにかゝる大へのこ

金ふくりんこそ是もいはまし 法印玄旨

杖

朝な夕な杖にも物をくはすべし

使ふとなれば子には増れり 光悦

草履

本歌

なら草履その手際みてかふならば

ごにも角にもねぢばなを哉 貞林

或方より雨夜にかへる折から

下部ごものねふり居ければみ

づから下踏たづぬとて縁の隈

隈見けるにたづぬるはなくて

ふたつ緒の杉のあしだを尋すは

古皮草履ありとみましや 言千

源氏外題の歌の中に若紫

ひいなゝごもて遊びぬる年もまた

若紫の花の御姿 淡路守宗増

須磨

さすらふはみやこにかへる佗言の

いつまですまぬ恨みなるらん

巻柱

髭黒のうはさを作り一冊に

かくも源氏のまきばしらなり

勾宮

おのづからほのくかほるしんだいを

學ばんとする御かたもあり

紅梅

奥床しめしたる衣のうらぶれて

軒の妻より見ゆる紅梅

宇治中浮舟

浮舟やくれり／＼の心根を

おもふも腹やたつ浪の上 唯正

仁勢物語といふ草紙をみてよ

める

をかし男知よしをして歌人の

詞のはじをにせ物がたり 顯興

犬筑波集かり禮おそなはるこ

てよめる

かりてみし犬つくばひに突はひて

禮といはざる我や畜生 春替

東道記かくとて

栗田口たゞきよみぬるたはことを

藤馬允がみんなもはづかし 徳元

題しらす

歌の折句沓冠といふなれば

ごかく御公家の弄びかも

釋教にそむく心をよむ人は みつ

歌のだいばこそ是も申さん 正定

尺八のふしくれ立し歌口も

我こゝろねのありたけの程 是端

盃のさらに書付侍りし

盃を題にするたる歌なれば

左をあげてかくばかりなり 行風

興ある夷歌をきゝて

狂言によみつらねたる一首こそ

只そのまゝの猿和歌のてい 行慶

黄檗會下道明が詠草十首の内

四點かけて

六道を捨てぞ四聖がてん／＼ しやう

十首の歌を十界にして 行風

或僧の詠草廿五首の内八點付

し奥に

廿五有の數をつらねし歌なれば

點に叶ふや八相成道

和州顯興が詠草二十首の内十

二點内長點四つの奥に書付侍

りし

歌のさまたとへを引に十二てん

なかに四てんぞたけ勝れたる

高田の庄よりの詠草の奥に書

付侍りし

なにはかはと批判申もをこがまし

姿高田の歌にむかひて

行重九十三首の詠草の奥書付

侍りし

ならびたる九十三首は和田殿の

一門中や寄合の歌

高故五十二首の詠草の奥に書

付侍りし

五十二の歌にも位たつるなら

てんに叶ふや等覺妙覺

百首の詠草の奥に

塵の身のあくた口よりはきだめを

搔寄見することのはもじさ 貞富

よしあしを見分てんたべ難波津の

みつ子におとる我が歌口

花の名におふもゝの言の葉姿
といひ心といひかたゝゝえび
す歌かなそふる二首猶玉をの
べ金をちりばめり興ありしち
ありから國の天年なるごかし
こきがみつ兒ご八十年の老の
おけつらひもふごおもひ出ら
れてかへし

塵の身のちりをきれいに吸ごらん

世話玉のやうなる言のはにこそ 行風

難波津のみつ子といへる言のはや

なち八十の人もいかでか

世話此集望ある詠草の奥に

お召には餓鬼も人数ごきくからに

腰をれながら集を望めり 治佳

かへし

卑下慢が餓鬼ご仰おしやれご力ありて

こゝろ言の葉ようえびす歌 行風

點取度かさなりし奥に

此度も身ごもか歌の病をば

直し給はれ御てんやくさま 友方

返し

てんやくも何たのまゝし達者にて

病氣のなき歌の姿は 行風

詠草のおくに

よまんとて案じわづらふ歌の病

直し給はれわかれかいこくち 本ノマ、 夏久

かへし

よき歌を猶もご案じ過せるや

欲の心の病なるらん 行風

寄合の詠草のおくに

難波津のつんどてよめる此歌の

よしあしをみて批判給はれ 梅曲

かへし

難波にし青き詞のなき歌は

いづれもよしご申すべき也 行風

詠草のおくに

引直したまはれかしな口おもき

石磨歌の作意なりども

かへし

引まはす手も力もぞ出ざりき

石磨歌のおもき修行は 行風

貞因、貞富、本也、舎永、月券、

か寄合の詠草の奥に

どれもゝ口つきをようえびす歌

類なしつばの五人ごやみん

かへし

冥加をば何ごかせんの五人衆に

かたじけなくもおとりなしつば

貞富

題しらす

あくた口ははきちらせごも歌連歌

する方へ等えもしらぬなり 卜琴

俳諧點取の奥に

俳諧の道にふかなやせずねに

灸をいたさん點付てたべ 政次

かへし

きうゝに點を望むは此道に

達者な人のすねござかし 貞徳

小袖を發句の俳諧のおくに

はり小袖したてのあしき俳諧の

古くはあり共こらへ召れよ 長廣妻

かへし

はいかいの表につくるうら衣の

新しくしてすそも長點 長廣

雉子發句はいかいの奥に

飛雉のはがゆかるべき俳諧に

てんをかけぬる人は鷹かも 高故

かへし

てんかける鷹も及ばじ此雉の

羽づよくごんだ俳諧のさく 宗因

虫藥發句はいかいのおくに

發句には藥ごあれご此卷は

御らんせらるゝおめの獨吟 盛成

かへし

御發句の虫の藥もごく吟も

好物なればたゝる事なし 立圃

獨吟せし時

有明のつれなくて氣のごくぎんに 本歌

赤下手ばかりうき物はなし 治佳

點取のおくに

付心無分別なるはいかいと

合點をなされ批判してたべ 貞富

安原氏貞室がもごへ點取のお

くに

安原のはいかいはよき灰汁なれや

みな人の句の垢をおこせる 友久

破魔弓のほく五十韻點取の奥

に

人まへへ出すはまやの五十句に

根もあらばこそ耳へ通らめ 高故

以一貫といふことを

万物をくゝれる繩のおもかるも

もたげてみればたゞ一貫め 正房

題しらす

友とする見ぬ世の人も書物には 草紙詞

生てはたらく文字の筆勢 行廣

無智の者ども午牛の文字の筆

書ごやかく争ふをきゝて

午によく牛といふ字は似たりとも

上へつき出す角をみてしれ 是意

一山繪讀の物をみて挨拶に

のり合もさそよかるらんかけ物の

馬の繪にかく一さんのさん 重靜

篠の繪の讀に

片かなのの、字のなりの似た物は

篠の葉の繪の墨の一筆 智仁親王

さつまよりたのまれしを表具

師の本へやるごとて

御無心を申さつまのかみ表具

たゝのりかけん頼み存る しみ人

圍碁

打向ふ人は碁盤の目醫師より

白い黒いのまけをみわけて 受少

長半ご名のりかけ碁の勝負には

盜をするも道理せんばん 未得

奈良に住ける僧もご見しより

まづしくなりて京へのぼりし

が或かたにて象碁つゞけまけ
にけるをみてよめる

世につれて將碁も下手になら法師

京しやに負て耻をかく行きょう源重秀朝臣

播磨にて双六をみて

双六のよき手しかまのかちたしど

め見たし肱をはりまがた哉貞因

さい／＼のこひめも出ぬ双六に

氣骨おりはをうつけもの哉重勝

本歌 鞠

老ぬればえもん流しも有といへば

いよ／＼はまくほしき鞠哉宣堅

依鞠恨風

くれかゝり鞠のにはかに吹出る

風をうらみの葛袴かな未得

曲しそこなひて

戀路では御ざらぬけれど我鞠の

落てうき名をながす曲なさ行廣

鞠塲

鞠の塲は七間まなか四方なり

木と木のへだて二丈六尺藤京 雅康卿

唐白

唐白に鳥井もたてばよこがみは

杵きねの宮ごや祝申さん行重

封の付し箱あづけられしかた

封本歌へのかへりごごに

封をつけ結ひし箱の紐なれば

預るうちはごかじごぞ思ふ貞林

新き鉢求めうらのそゝるすり

おとす人へのあいさつに

なりふりに迷ひ求しあら鉢の

尻をさぐりてそゝとする哉正慶

題しらす

ちい／＼といふ音きけば爐の内の

ふる姥口の釜の湯にこそ友信

人はいざ心もしらすふりてのめば

花香むかしの茶に匂ひけり孝女

七種の名園の茶たてられし挨

拶に

水色香ひきのみ手前ふくもよし

是や七種の名園の御茶行重

或人酒は佛の戒めなれど酔の

中の歡喜あるは佛性にもちか

く覺ゆかゝる御法もあるにや

ごきこえければ

御法にも上戸菩提ごきく時は

下戸衆生等も酒をのめ／＼恩直

或人に酒しひけるに公用ある

なごいひていなびければ

のみてよもあす迄去ばつらかりし

此夕暮に忍はゝゑへかし

題しらす

君ならで誰にすゝめんなら酒の

味をもかをも呑人ぞしる元成

大かたは酒をものまじ是ぞ此

つもれば人の酔となるもの行重

つれ／＼と寄合てする酒盛に

下戸ならでよきをのこごも哉

世話 満永

くみかはしたべかさぬれば盃の

朱にまじはれる貌のいろ哉 貞因

本歌 瀧のみを絶ず久しくつゞくれば

上戸の名こそ猶きこえけれ 真因

ほこりまで算用酒は借錢の

うれへをはらふ筈なりけり 本也

本歌 むさしのはけふはな出しぞ長酒に

人もこもれり我も困れり みつ

同 武藏野は酒にいるべきやうもなし

下戸より出て下戸の客人 古桶

同 明樽と目にはさやかに見えねども

底のたつにぞ驚かれぬる 長廣

大酒せし曉に

大酒に宵ねせし夜の曉は

目もはつちりと覺にける哉 貞富

二日酔

二日酔起もあがらずふしみ山

衣うつなりかしらうつ也 雄長老

酒酔

くむ酒に酔てはくだをまきにけり

布をへる程あるき上戸か 定章

酒に酔橋をわたらず臥ぬるは

惠遠に増る禁足ぞかし 武重

世話 徒に酔くるひをも下部から

わざはひおこる木幡山かな 溝鮑

大盃をほしかねてよめる

本歌 鳥の子を十づゝ十はたふることも

おもはぬ酒をうけふ物かは 一圓

鬼喰を

諺詞 鬼喰もたゞおのづから胴に入て

膳を見れども進まざりけり 是急

善哉餅

大納言の小豆ににたる物なれば

せんざい餅は公卿にてくへ 貞徳

餅

本歌 山城の木幡の里にむまさうな

しんこはあれど餅をぞかふ 圓乘

午の刻に饅頭九つえて

まんじうの九つなるをいかにぞと

案じてくへばむまの時かな 貞徳

水糲

此葛は味もよしのゝ名物と

くはぬ先より誰もするせん みつ

索麵

二本の杉箸にこそかゝりけめ

糸よりげなる三輪の索麵 是難

田樂

昔たれ名を田樂と付つらん

豆腐の姥によりてとはや 貞富

香物

大かうの物とはきけぞぬかみそに

打漬られてしほゝこなる 澤庵

大根の香の物をばかみくだく

齒ぶしはつよき力なりけり 拙也

草紙論 埋れし土大根まで時にあへば

口のはにのるかうの物かな 自是

同 濕饅

ならの京春日の里のしるあめは

いと甘めいた物にぞ有ける 行安

興米

つかみ散す龍の玉にしなりはにて

本ノマ、

その名も雲をおこし米かな 貞因

頭痛

此程のちゝとにあらぬ雨にわが

頭つゞみぞたんどうつなる 一忍

題しらす

世中をつとひて何か安室の

うち氣にならば病おこらん 安勝

鼻の穴はつまりにけりな痛みし

我身よるひる咳氣せしまに 弘誓

風ひけば起つころびつしはぶきの

夜はにやきつく成増るらん 宗旬

風ひかば病おこらん腹中の

はいの臓にておほへびの臓 及之

ある者の脇わづらふに是藥な

ればとつかはしける時

煩はたゝかくとこそきくゆゑに

藥になれとおもひやりけり 法印

便毒出ければよめる

本歌

思ひきやしゝのはしゝゝかき破り

腿の付根によこね出んどは 長久

なげゝとてわらべに物を思はする

がごせかほなる人よ何そは 友靜

迷ひ子尋ぬるをきゝて

遠近のたつよこ筋の町中に

覺束なくもよべる迷ひ子 友易

小式部内侍を御覽じて和泉式

部につかはしける

よめの子の小鼠いかゝ成ぬらん

あな美しとおもほゆる哉 忠通公

かへし

君にかくよめの事だにしらるれば

此小鼠のつみかるきかな 和泉式部

いときよらなる女のしまの衣

きしをみて人々はたちばかり

にや五六にやとさとりゝにい

ふをきゝて

着る物はしま黄金のはだへにて

年は三十二さうなよなふ

行安

悪女をよめる

根問してさがなき口をあく女とて

多き詞のはなのさき智恵 夏虫斐

題不知

この程は櫛も取あへずむさければ

虱わくらしかみのまにゝ 高壽

朋友

くらがりに問音しりて火をうつは

まことなりけり金石の友 尊海

そちとわれあひ口なれば四方山を

はなし目貫の脇指にせん 高故

そちとこち荷ひあふたる友なれば

棒組なりとひとやいふらむ 酒粕

題しらす

番ふ矢のかりまたよりも烈しきは

いふりにみゆる人の心ね 未得

堪忍のせきをば腹にすゑかねて

わがいきどほり口へ出けり 貞富

いつはいいふを世話に鐵炮は

なすこいへば

偽とおもひながらも鐵炮の

はなしにきもを潰しぬる哉 政長

臆病者

臆病で鬼をこはがる人はもし

地獄の釜の湯の子くふたか 正香

本歌 倭人

いろみえてへつらふ物は世中の

人の詞の箔にぞありける 長次

人欲

人の欲たとへんかたはなかりけり

富士の山にも頂きぞある 貞徳

題しらす

何事も見ざるきかざるいはざるが

よござるとさる人の申し 貞因

家の子を我子とおもひ慈悲ふかき

親かたは親にまさりぬる哉 満水

遠親類の財寶大分えしかたへ

よみて遣しける

世話 家屋敷財寶かけて大分の

跡をしるかのはしかたし迄 保友

題しらす

何事もけふの歡樂過ぬれば

必ずあすは苦患とぞなる

樂をしてをさなそだちをする人は

老て貧苦の種とさるべし 大燈 國師

借錢も病もちくどあるものを

物もたぬ身と誰かいふらん 貞徳

戀ならで人目しのぶの質おきは

我衣々にかねをさりのね 廣通

かねおやの心は闇にあらねども

子に迷ひつゝ損をするかな 正信

負事の絶てしなくばかねゆるに

人も我身もたをれざらまじ

おち／＼ぞとほるおひめの門々は

一文不通にやらぬ借錢 清水

貧乏は隣にあるもむづかしや

何かせかゝせ偕はもらかせ

よみ人しらす

朝ねをし又晝ねをし夜あそびし

貧乏神になき名おほせん 好春

参りつごふ借錢乞は我宿の

貧乏神の氏子ならまし 一見

世話 びんぼうの神の姿か借錢の

淵にはまりて蟠まる身は 貞富

貧乏神をらでさかゆる屋の内は

しはん棒にやおち恐れけん 舍永

盗人の用心によき道具には

かた木の棒に増るびんぼう 元清

貧乏は賢き人につれ多し

ごんな我身を誰にたごへん 貞因

世にあるをおもへば人の従者かな

上につかはれ下につかはる 無住

馴し草履取に隙出しければ別

うくやおもひけん泣を見て

年月を馴しはうらめしく／＼と

なくは浮世の會者草履取 俊佐

いはけなき時母におくれて又

の年後の母よびむかふべきや

いなやと父にとはれて返事に

繼母はしるかのはしも何かせん

父さへあれば我育つもの 長丸

本歌 題しらす

おもへども身をしわけねば繼母の

繼子に心おかるゝのよし みつ

ことありて東に下り又山陰へ な

さすらへける折よめる

狂言詞 西へちろり東へちろり曉の

明星やたい我身なるらん

澤庵和尚

述懐

世話 けふあつてあすない身とは知乍ら

あさても倍も長きたくはへ 貞富

百首歌の中に

くる年も又くる年もわくせきと

かせげどもいとならぬ口すぎ

題しらす

年ふればけかしき溝におちぶれて 本

ぬれしほとけぬいとほしの身や

源俊頼朝臣

六帖題の中に

水舟にうきてひれふるいけ鯉の

命待間もせはしなの世や 藤原光俊朝臣

我心くだけをちたる谷石を

ひきあぐる人のなきぞ悲しき

藤原信實朝臣

何かいとふ霜夜狐のかはころも

けむづかしとてぬぎも捨ぬに

權僧正公朝

題不知

本歌 もろこしも吉野の町におく質の

ながれんと思ふわれが什代 次重

肩いれぬ門こそなけれつかふるは

荷をもつよりも苦しかる覽 正徹法師

あばらやのあるゝをまゝの天井は

下にゐるさへねずみ也けり 友信

世話 たてかねし竈を見たら地獄なる

鬼の目にもや泪ながさん 一興

寄曆述懐

といつまいつ同じ事をばくり返し

いひても年をふるごよみ哉 舍永

世話 寄舟述懐

いどなみに楫の取やうあしければ

かいがまはらで世を渡る哉 之時

題しらす

同 うきふしを小歌にうたひくれ竹の

よをのがれえぬ喉笛や何 友和

寄尺八述懐

尺八のわれながら世にいき過て

あな浅ましきなりに成けり 如快

家うる人をもて

弓ならで手前のあしくなるゆるに

力及ばずやはなしけり 高故

寄竈述懐

さりてはさせる事なき破笠

骨ををりてぞ君に仕へし 藤原信實朝臣

寄簀述懐

かち人の野分にあへる古簀の

手をふく世こそ苦しかりけれ

藤原爲家朝臣

寄袴述懐

世話

まじらへば七重の膝を八重にをる
袴のひだのむづかしの世や 未得

寄酒述懷

世中は何にたとへん麻地酒

甘きやうにて辛きいごなみ 宣就

浪人の後大唐米といふ赤き米

に鹽汁のみて調菜もなきをお

もひてよめる

すさまじき物こそはくへ朝夕に

赤つら飯どうしおにの汁 宗機法師

閑居述懷

住徒て世にかくれこの身となれど

心の鬼はやはらぎもせず 正信

美女なりしが老さらはへるを

見て

ひたひにも浪のよるこそ道理なれ

目本に鹽のありし名残に 長次

老人

世話をさなかりし昔はごちへさるが尻

抹香くさく年ぞたけたる 一圓

よびもせぬに來れる老の土産とて

嬉しうもなきしらが頂く 季吟

年よれば何やすがたもなかりけり

目はうごうごふくごはぬけ鳥 本々、道甘

世話はや此大津馬にはあらねども

おひからしぬる姿うるさき 行重

同 雀はごちひさく老の身はなれど

ういたる人はをどり忘れぬ 貞徳

天王寺にて

うち死の人見本間が名を残す

石の鳥居は墓印かな 貞因

往事如夢

邯鄲の枕はせねど人間の

五十年たつほどは夢なり

銭金はくれよといへどくれざるに

ひた物くるゝ月日なりけり 安親

慶賀

千年のたくはへもする老の身は

子の子を思ひつるの孫まで 貞富

本語 長生は耻多けれど孫彦を

屈む脊中においのさいはひ 未得

題しらす

巾着をきりの印こそ結びけめ

手もごもみえずなりし盗人 是政

白浪の濁りてくろきごろばうや

すつばのかはの流成らん 良久

本歌 津の國の難波の事がのらならぬ

遊びたはくる迄どこそきけ 俊佐

白柏子

煩惱も菩提とさゝていにしへの

白柏子さへほどけとやいふ 喜雲

傀儡

本歌 傾城の煙いふせきたばこにも

すゝけぬ物は貌の白粉 成之

世話 大坂瓢箪町にて

名にしおふへうたん町は川たけの

ながれをたてゝうきに浮女 正忠

圖にて

旅人をとゞむる時の會釋には

地藏貌するせきの出女

春房

放下師

見物に北よ南よ西東

四つ辻放下品玉のきよく 一長

芝居にて枕返しの出をみて

本語 脇をまげ枕返しをする人の

樂みはその腕にありなん 成之

歌舞妓若衆に花きはひ出すを

みて

菩薩たち來迎とみる若衆の

かぶき芝居に花はふるなり 貞因

題しらす

四座の者集りてする能の時

出すしやうぎも猿の腰かけ 友知

かりそめもすまじきものは錢勝負

まくれば持しさいを失ふ 豊後守辰敬

商人

商人はかねの利錢の子をまうけ

嬉しがりつゝてうあひぞする

高故

賣物のきるゝといふは人たちの

ぬきん出てある商の棚 貞富

狐皮年々唐へ渡るを思ひて

八幡邊それではなしに日本より

からまでわたる狐がは哉

茶入ほり出しける人のあいさ

つに

借錢の淵をせになすほり出しは

天理にかなふ飛鳥川かな 是泊

唐物棚にてかねの塔を求んと

するに代銀三十日にすこしか

ろしまけまじきよしいへれば

よめる

かねの塔の三ちう目より上ぞとて

九りんの事を争ひにけり 高故

米屋

下帯のさがりし米を買人は

肌ゆるさずにまはしよくせよ

茶代急にこひける返事に

銘にかく昔といひし文字にめでゝ

茶代をまてよ二十一日

行重

八百屋

かけ聲にあらぬ八百屋の鼓草

うりかふ時も手は打にけり 行廣

黒木賣

黒木うるやせ女子の牛にだに

させいゝと云はをかしも 是政

傘を日覆にしあめうるを見て

笠さいて出せる箱におくあめの

白きをみれば粉ぞふりにける

行衆

饅頭にて富人へのあいさつ

世話に

饅頭のあちな仕様で錢をもつ

思案のあんは百貫にこそ 顯興

酒屋

本歌 よき酒をかひにもござれ我宿は

ならの町家に杉出せる門 久友

銀屋

同 ふいがうの吹上に見ゆる白かねは

錫か鉛からうのよするか 金門

木藥屋

^{本歌}磯の龜ふるきみやこの藥屋に

甲ばかりこそ昔よりあれ 元成

職人歌中に左官

田樂をあぶる左官の壁にこそ

山椒みそをも小手にぬるらめ

徳元

番匠

番匠はおこな事も石づらの

なみよく出来て水をもり梟 高敬

おもき目を宇治の醫師かろく

直しける挨拶に

^{諸詞}なふ上手みやこにちかき宇治の人

聞しに増る目いしやなり梟 友信

梶原氏なるが風眼治して又目

わづらへるをみて

梶原が氏そと口をきく人の

目にさへ二度のかけ藥かな 毎雄

醫師

^{世話}藥人をころさずとさく醫者ならば

聊爾をするな療治よくせよ 高敬

持病の寸白おこり堪がたき折

から醫師のもとへ申遣しける

^{本歌}痛みこしすばくの虫もかた過ぎぬ

醫者ならずして誰かさくべき

眞芳

竹といふめの子のわづらふに

よめる

竹につく病はとかくじねんこに

直したまはんやぶくすし殿 舍永

掠橋の里にて世におもき虚勞

病をいやせるを見てかく申遣

し侍りける

うらめしいごうごもならぬ煩か

なほれば繋ぐ馬のくらはし 友信

返し

いとほむる言の葉にさへのり馬の

くらはしわたりいで歸り足 行風

養性

膏梁の食をつゝしみ酒ひかへ

^{本歌}色遠ざかれ病あるまじ 贈法印道三

腹の中にうねくる虫もわきからと

音をこそなかつめ恨みぞ 行順

^同灸針をしめぢかはらにさしも草

おこりの虫のあらん限りは 玄札

或弓取のかたへ夜咄におしか

けんといひやりけるに此頃屋

なりがしてゐられぬとかねて

の筈ちがへ申こされければよ

みて遣し侍ける

屋鳴するはいれば社あれあらねと

おしやる筈ではないぞ弓取 眞富

士

侍の躰は日本ぞ増りける

身にし隨ふもろこしのもの 通寛

侍の猪武者といはるゝも

虎口に強き騎馬をもつ故 未得

軍法歌の中に

人はたゞさし出ぬこそよかりけれ

軍にだにも先をかくれば 左近將監 實澄

佃軍歌の中に

小敵よわ敵よとて油斷すな

悔る故におちをこそとれ 修理亮 勝家

人は城人は石垣人は堀

情は味方あだは敵なり 大僧正 信玄

吉日はみかたよければ敵もよし

たい肝要は方角をとれ 源義經

荊軻秦無陽

面曰きことよとさゝてうそねぶり

油斷をしたはあほうでん哉 友信

郭巨

親にたい孝行つくす徳みえて

堀出す釜は子がねなりけり 本也

屈原

我獨すました貌をなさるゝは

濁る浮世や御たいいくつげん 一見

許由

あやかれよかみ浦山ぬ心をば

許由かあらふ耳の垢ほご 祖澄

三笑

三笑の名はかくれぬやのむ酒に

酔てこけいのほしはづれ迄 清勝

題しらす

天下一のかさいられたる矢數たそ

知ずやそんじよ園右衛門殿 満永

姨捨の能をみて

捨られて姨が仕事は所がら

更科のそをうみやしつらん 正信

鈴木

能登鯖や丹後鰯より名をえしは

くまのそだちの鈴木殿なり 教二

梶原

追風のふく嶋の下知は義經の

御氣にさかの舟の梶原 高故

武田勝頼父子のくびを御覽じ

て

勝頼と名のる武田のかひやなに

軍に負てしなのなければ 信長公

辨慶

新關の戸尻にさがる強力を

さん／＼にうつ武藏ぼう哉 夏虫

義經

おひをおひひつゑを作り山伏の

しんらうくらう判官のてい

重衡

重衡の布ならぬ身も罪により

引わたされてならざらし哉 由真

田村丸

鬼うたん事のみ夜も思案して

帶ひもとかず田村丸ねか 正信

頼朝

しづかなる舞の姿に見されては

そろ／＼そばへ頼朝の君 友信

卜琴とめきて山崎宗鑑が影に

夷歌望みければ彼宗鑑がかん

づよき心づからかく重寶をし

は垣氏よと見ぬ世をさへやか

がみにけん俤をさて寫したり

な繪かいたりな文字よみたり

な歌さかきて

筆とらでたれ山崎のゑせものが

えせ歌といひ繪といひ手といひ

同繪に

殊勝なり此山崎のぼんさまの

腰にあづさの弓矢八幡 保友

和泉式部

今ぞおもふ涼しき歌の口よりも

涌ていづみの式部てふ名は法橋由巳

赤人

いつもたゞおかほのいろの赤人は

歌のどくりの酒や過けん 春房

無常

いつの日のいつの時に出来る房

巡りくゝて後はがつたり 一休 和尚

うらめしや明暮草の根をかふる

月日の鼠とる猫もがな 資之

人の身はまはり燈籠にさも似たり

火が消ぬれば息ぞとまれる 行順

初夜のかねをつくくときけば

我等迄諸行無常の心起れり 友久

借用の地水火風をそれゝに

かへす無常のせつき近きよ 一圓

本詩 百首歌の中に

こつつりとうてる火打の石の火の

ちらと斗の世にもすむ哉 貞富

人間のありさまみればくるりくゝ

廻りしばいのせいづくる如 相宿

童口遊詞 我心鬼のこぬ間にせんたくせう

欲垢ありて隠期はうし 友真

肉身のまだあるうちはきのどくろ

早く浮世をたちされかうへ 一見

ひざゝらも頭の皿もこどくく

われ離れてや我はなるらん

うつくしき花の姿をおしむとも

無常の風のやはか遁さん 鈴虫女

柴かりやよき身の果もあばらやの

かきほねとても終に残らず 元安

のりありく蘆の葉風に達磨坊

下蕉ひえてや冬にしにけん 雄長老

辞世

親もなし子もなし跡に錢もなし

からだ斗はからりちんなり 成安

空存追善に

名ばかりをこゝにのこして本國に

かへるや地水火風空存 重信

題しらす

世話 丸はだか百貫すてふをのこ子も

死ればたつた五輪にぞなる 淨次

千金のおもひをなしゝ人だにも

わづか五りにんに變る世の中 友信

人として人にのまるゝあはれさよ

みいらの昔おもへばくゝ 宣秀

なき人のはかにむかへば百八の

珠數玉ほごな涙こぼるゝ 行重

たむくるはしぶ茶なりとも明暮の

つもらば無上極樂のたね 未得

人の身はせこの畠の雪佛
消て残るはなばかりに候

宗鑑

後撰夷曲集卷第十

釋教

題不知

歌よまづ後生心のなき人は

嘸な寐覺のきたなかる覽前大僧正
慈圓

東寺にし參る出立とくふかゆに

下向道まで般若はらみつ 全見

興福寺三十講の座へまかりけ
り水がちなる粥たうべけると
て

我さへもまだくひたらぬ水がゆの
底にもみゆる影ぼうしかな上行上人

焰魔堂にてよめる

冥途にはいかにも地獄の主ぞとあるじ

證據にたてし焰魔堂かも 満永

眞言の僧隠居すこてみづから

垣ゆひなごせらるゝをみて

眞言の安室そこゝにお手づから

結ぶいんきよは殊勝也けり

或安室の軒に生柴つみおきし

をみて

桑門につみおく柴のいろをみて

青道心のかるかやとおもふ 友和

子孫おほくもたる老人への挨

世話 拶に

孫や子を鮓にする程もつ家の

おもしにはよきいしな禪門 満永

題しらす

來世なる人喰鬼の姫御前は

みめよきとても二九の十八 惟次

もしわれは地獄の釜に事かくと

いもじや斗たすけおくらん 教二

本願寺の御だうちかき住居な

がらふるまはるゝこどもなく

よその人はかりよへるをみて

世話 楊弓の

あたりはよばでよそへのみ

みだうからやる矢の使哉 高敏

本願寺の旦那よりゐて西東よ

しあしあらそふをきゝてよめ
る

此世では嫌ひたまふと終にゆく

道は西をよ東門徒衆 友知

蛸賢に遣しけるに使おそかり

ければ

此度はいそぐといふに長袖の

蛸の入道みちのおそきよ 一休和尚

本歌 題しらす

あのこたら三百三文に賣人も

菩提の種に五りん肩よや 顯興

同 我たのむ旦那のためにつく餅は

齋非時わかぬ茶の子なりけり

よみ人しらす

はれ物のうむをはなれぬ禪僧は

未だ身持のきたなかるらん 資之

彌陀佛の常にせつしゆに預れる

人は光明へん上戸かや 昌悪

御齋の食を手づからもりてくふ

僧はもとより釋氏なりけり 宗并

鼻聲にて經よみけるをきゝて
よむ聲のあやもしかゝ聞えぬは

鼻びしやもんの功德經哉 正信

草紙詞 題しらす

唐よりも渡りてよきは木樂と

藝のある犬物しりの僧 真因

經かたびらこしらへけるを見

て

極樂は涼しき道とさく物を

經かたびらの用意何ども 清永

本歌 題しらす

おりおろしにつきにけらし白木綿

衣をすてふ尼のこしらへ 行豊

落髪せざるいにしへ時ならず

おもひ出る事もあれば

同 ながらへば又新發意や忍ばれん

白髪あたまで今は悲しき 真因

佛師の箔つかへる折から本尊

は何にかと問侍るに阿彌陀と

こたへし口にはくのつきたる

を見て
阿彌陀ぞこ申佛師の口よりも

はや金色の光さしけり 顯興

謠詞 東本願寺

陸奥はひがし六條本願寺

こゝ鹽竈のおうらなりけり 成之

有馬にて

石像にきさみありまの湯壺より

わきぬる音も藥師ふつゝ 政長

朝熊金剛性寺にて釋尊の御齒

ををがみて

みがゝねば佛のはさへうるみけり

金剛性寺におはしませども 友久

摩利支天斗帳のはしよりほの

ぼのと拜みて

ありゝと拜みとめなでまりし天

なにの曲なくかへりける哉 親之

大黒の讃に

大黒の手にもつ槌は寶より

足にふまへし米うたんとや 行風

いろ黒くせいひきけれど大黒の
福力にかつ天童もなし

三面大黒の讃に

さても此御貌を見たてまつるより

ふくくくくとなる心地と宗因

布袋の繪に

數の子を入れて置ぬる布袋

是や生ぐさ坊主なるらん 太極

阿那律の繪に

衣をばぬひたてんどやお手づから

糸をとほせる針のあなりつ

六祖の繪に

米ふみてささる六祖の心には

菩薩もわれが下にみつらん 真成

おのづから白にて米を白むるは

是や即心食物の祖師 立園

達磨

九年まで壁にむかへる辛勞や

達磨そんじやと人のいはまし

元成

善導の讃に

くろかりし衣のいろの黄になるは

善導大師はこやたれけん 一休 和尚

題しらす

六道の辻がためをやめさるらん

錫杖ついてたてる御地蔵 少人 和尚

吉野夢違觀音

夢違ある觀音のちかひには

木枕までも花やさくらむ 每雄

藥師をよめる

是や此佛もおやくしたまふは

よるひる二六十二しんたち みた なか

一向宗阿彌陀の脇かげに九字

十字といふことあるをよめる

むづかしく彌陀の教の九字さたは

しうしにあひてとへ門徒宗 舍永

迷ひふかき人を見て

煩惱のはなれかたなき人はたい

うろくくくく迷ひめる哉 満永

井のはたに遊ぶるよりも危なきは 世話

後生ねがはぬ人の身のほど 袋巾 和尚

吉野發心門にて

花を亭主月をば友にみよしの

發心門にいつかいるべき 行安

題不知

家にありて不忠不孝の輩の

遁世修行あやしかりけり 雲居 和尚

心すなほならぬ僧の御前にて

珠數つまぐるを見たまひて 世話

上人はかすみの衣きりの珠數

あまりはれせぬ空念佛哉 秀吉公

末學の僧は名利のみにて佛の

御教にたがへるをみて

遁世の遁は時代に書かへん

昔はのがる今はむさぼる 少人 和尚

題しらす

花麗なる沙門をみては皆人の

冥加者也といふぞをかしき 雲居 和尚

何やらん惡事せりとて強力を

山伏の手づからしばりしをみ

て

螺貝のかひくしくもしばりしは

世話 あらなはふしのこはき山伏 毎雄世話 若後家の参る御寺の坊主をば井戸のはたなる童ごぞみる 貞因

十悪の中に貪欲

後生ねがひ無欲にみえて欲ふかし

世話 こがね佛と身をなさんとは 貞宮世話 見るからに欲のひつぱり蛸なればげにもなまぐさ坊主也けり 満永

同し中に愚癡

ならへども法の教に愚癡なれば

阿呆羅刹と師やおほすべき 行豊

三惡道をよめる

皆人の貪瞋愚癡の惡水は

三途の川のながれごぞなる 雲居和尚

惡僧おのが分限よりなにかに

つけてきよらを好み佛つくる

をかごとに度々旦那に奉加す

すめなげくをみてよめる

おごり僧手前をすきとすりければ

すゝのみも今なきことぞいふ

世話 芋堀坊主 満永世話 異風にも作る氣立かかたくはで

芋堀坊主之ぐりわろさよ

まことすくなき僧をみて

黒髪のゆひがひあらばそらじかし

木のはしたなく世を捨坊主 弘誓上人本歌 賣僧本歌 陀れば今はだかなる寒垢離の身を冷しても錢はしぞ思ふ 重至

まよへるはまた極樂のそとばかり

五躰五りんと出家ぶりても 正成世話 五戒歌の中に殺生世話 見るからに頬にくしきを好みけり是や生ぐさ坊主なるらん 行風

我法の味をばちごなめしらて

本歌 魚くふにのみ口をあく僧

名にめでくへるばかりぞ蛸坊主

本歌 賣僧我おちにきこ人にさたすな 友信世話 僧や此御すきの魚の名にたへばあかめんばくぞ失はるべき 満永同 同し中に偷盜

盗みまでしたるなまぐさ坊主をば

手長蛸ごぞ申べきなる

本歌 同し中に邪婦

かたちこそすばろ坊主の根木なれ

心は花をやらばやらなん 圓琢

をんなぐるひ過ておこせる發心は

あごより戀のせめ念佛かも 貞林世話 御僧のかくしおかるゝ大こくを申さば寺のびんばがみさま 利安

僧候かめした衣の玉ならで

玉のやうなる息子もたるは 行風

同し中に妄語

かりそめに思ひて嘘をいふならく

奈落に落ばくやしからまじ 梵益章口遊説 此世にてゆび切をせようそいは

名にめでくへるばかりぞ蛸坊主

地獄の釜へおちやらふもをし

長丸

同じ中に飲酒

後の世はごにもかくにもなら酒の

味口からややぶる戒め

元信

三衣かけ女犯肉食酒もりは

一切經に見えぬ事とぞ

行風

六道の歌の中に地獄道

くるしみを聞につけてもうし鬼が

引てめぐる火の車かな

昨替

罪あるは蛛舞ならで足はうへ

かうべは下に無間地獄ぞ

一圃

題しらす

いふならくならくの底に入ぬれば

刹利も首陀も變らざり兒

延喜帝御製

地獄の繪を見て

このみ見し劔の枝にのぼれとて

しもとの菱を身に立る哉

西行上人

畜生道

煩惱の犬のゑじきと成ぞせん

ぼだいそれたる罪作る身は

是政

修羅道

持太刀のつかの間もなき戦ひに

火花散して修羅もやすらじ

人道

智恵淺く罪ふかければ本分の

田地そこなふ人間の水

智恵ありと思へる智恵に障られて

あはれぼだいの種を失ふ

知度

此世界くるしき海といふなれば

身にうきしづみあるは尤

満永

彌陀の利劔なまがねなるか煩惱の

絆をさるに思ひきられず

顯興

不義にして集めたくはふ財寶の

積りて後は二世の身のあだ

雲居和尚

天道

天人の花をあぎむく貌ばせも

終の姿は五すいりやうあれ

政吉

大聖の佛がうそをつく物か

天上の苦も五衰りやうあれ

一圃

我慢

輪をおほくぬけたと自慢する人を

いはい山がら利根なるべし

満永

高慢

億々の佛達だに我身をば

物しり貌にせしここそすれ

親鸞上人

大圓鏡智

花ごみし御兒をいつの魔風にか

木坊主となす僧正が谷

顯興

十月に落髮して

よべそりしかななづきんや十徳は

身ごもが冬のきそはじめ哉

貞因

そるまではひれのあるなる俗舂の

頭ももはやたこの入道

狂言師の發心せしをみて

大小の狂言綺語をいろかへて

墨染になりひらゆたん哉

青葉

我も人も花見がてらにくる珠數は

なぐさみながら後の世の爲

満永

菩提もと植木にありとおもふにや

花見がてらの寺參衆

貞因

發心者の體と二聲いへるをき

きて

はちくくと二度迄聲の聞ゆるは

十六羅漢の御弟子なるかも 正之

題しらす

拂へどもうてごもさらず食の上の

蠅とやいはん煩惱の犬

行重

或僧阿彌陀堂といふ釜にて茶

たてられし挨拶に

此世から極樂とおもひたつる茶の

釜の名までもあみだ堂かな 貞因

平等性智

生死海に慈悲の釣舟出にけり

漕行音は弱畔鏝斛

明恵上人

峰入

童口遊調 是は二世のえんの行者と峰々に

入そろく山伏の道

行風

強力よまて事とはん峰入は

いかにふく螺の貝ども 見澤

峰入に我もく山伏の

かぶりつれたるときんかき哉

淨次

謠詞

かけ出や山々峰々里々を

めぐりくつてけさの齋料

貞富

月待

山伏の祈をかくる三月月も

春の夜なれば驢ぼろぼん

満永

富士垢離

本語

ふじまうで貴しとするありすまは

彼山たかき故かあらぬか

行風

鉢叩

鉢たゝきちまたに古きへうたんの

しばくむなし中の八木

忠勝

流灌頂

凡僧のおこなふも是水上是

釋迦遺法の流灌頂

大極

三觀

錢をもてかはぬ物故一心を

三くわんもんになど定けん 行風

題しらす

樂のみのほこる斗をよろこびて

後生ねがはぬ人ぞかなしき 上人

寄車尺教

因果はやうめぐり車のわれからと

しらでも惡を作る身はうし 行順

山城國彌陀次郎の堂にて

世に多き惡太郎等をたすけん

あらはれ出し彌陀二郎かも 貞富

有馬阿彌陀堂あればたるを

叡聞おましまして 後奈良院御製

堂あれて雨のもりやと成にけり

佛の仇をいざやかせがん

三十六反のすゝをよめる

法然は四苦を離れん願ひにや

三十六の珠數を定し

三哲

修行門のこゝろを

少々の事をば耳にきゝいれず

たゝ一向にみだをたのめよ 親鸞上人

質はちをおきて朝夕すぐすとも

みだを頼むを長者とはいふ
自分の田地の上に今も猶

さどりの道を開きにぞする 貞因

罪おもき我をばすくひ取給へ

あみだ佛の力だめしに 貞富

一心に教たふとみ頼むこそ

誠にみたのいれしやうねなれ 之時

唯心の淨土を常に建立し

己身の彌陀の安置とも哉 友和

百万反珠數くるをみて

あはれく百万反もくるすゝの

玉のやうなる汗をかきつゝ 行風

身のまづしきを八幡山の藥師

に祈て

なむ藥師あはれみたまへ世の中に

ありわづらふも病ならずや小大進

伊勢石藥師にて

病氣にふはつく人もたのむなら

かたくまもらん石藥師哉 信安

木なりともからしめまじき御佛を
猶おもんずる石藥師哉 尊海

題しらす

ごく生れさらすはしばし休らはで

二佛の中にあふぞ悲しき 性空上人

佛光寺にて

さしむかひ東山より西方を

ねがふもあみだ佛光寺哉 満永

本願寺にて

教をもうけたりきとて一向に

ねがふはみだの本願寺なり

宇治平等院にて

珠數をする廻向は願以此功德也

平等院とふしをがみけり 正重

三界にねがふところはみだぶつの

すぐれまします淨土也けり 親鸞上人

踊念佛

煩惱はふりすてられぬ物やらん

踊拍子で申す念佛 月參

懸念佛をよめる

後の世の爲にさたゝくかねてより
ふかくたのみをかけ念佛哉 一團

責念佛

地獄へは落しと鉦をたゝきたてゝ

こゝろの鬼を責ねぶつ哉 貞富

夜念佛

こせゝとすゝをも摺て餘念なく

夜念佛をも申す道心 みつなか

足引の山にこもりてすゝのをの

ながくし夜もひとり念佛 行廣

勝尾寺二階堂万日にこもりゐ

て

奥ふかき山取たてつ鉢もしつ

よろづよるひる申念佛 海雪

釋教歌の中に

あみだぶと申ばかりをつとめにて

淨土の莊嚴みるを嬉しき 法然上人

賀茂百首の中に

比叡の山堅儀や近くなりぬらん

夜半にさえたる問答の聲 前大僧正 慈圓

四天王寺にまうでたまふ時百

首歌の中に

我太子四方の八町の内をだに

猶化しかぬる心くるしき

吾背後の世の事かたらはれけ

るかへりごとに

麻糸の長しみじかしむつかしや

有無の二つにいつか離れん 智達

題しらす

後の世に彌陀の利生をかふらずば

あなあさましの月の鼠や 真經公

皆人のからねばならぬ四つの物

もごとにでもごす分別もがな 方寸

無量義經に船師大船師

ともづなは生死の岸にときすてゝ

解脱の風にふなよそひせよ俊成卿

修行門のこゝろを

さし出るほこさきをれよ物ごとに

おのが心かなづちにして 昌三

賤やしづ静にすゝをくり返し

百万反もとなふみたぶつ

榮治

佛よし人も又よしわれあしゝ

なにはもいらぬみだの名號 宗慶

配所にてなむあみだぶつ六首

折句の中に陀の行

誰もみな頼みをかけてたねんなき

他力の心ぞたゞ佛なる 爲兼卿

修行門のこゝろを當世詞にて

よめる

法の舟ありか他力よ身はすんご

南無阿彌陀佛に任せておけろ

宣應

淨土門のこゝろを

自力にてならぬ菩提の種なれば

みだに任する身の嬉しさよ 貞富

上盡は佛恩報謝の勤なり

下至一念もやかて往生 法然上人

大念佛宗龜鐘をよめる

水底の龜にうかべる念佛の

徳はふかえの法明のかね 夏虫

題不知

諸々の佛をこえし誓願は

わきて法藏びくのあづかる 祖澄

なむあみだ南無阿彌陀佛なむあみだ

なむあみだ佛なむあみだ也 靈巖和尚

世の中はへちまの皮もいらぬぞ

おもふ我身に垢はありけり 元信

假名法語の中に

野心のまだやはらがぬ牛をみて

打たゆむなよまきの藤むち 大燈國師

題しらす

事たらぬ身をな恨みそかもの足

短うてこそうかむせもあれ 夢想國師

釋迦の鎗たゝ一筋に念するは

法にいりみのめあて也けり 友知

配所にて南無阿彌陀佛六首折

句の中に佛の行

二つなく不捨の誓願ふしぎにて

深きねかひぞ不退とはいふ爲兼卿

修行門のこゝろを

煩惱の垢をおどさは曉の

あかの水にて洗ひたらなん 是意
せはく世話焼ず共あだしみを

唯念佛にまからせたなん 重利

浄土寺にて挨拶に

教たまふ法ねんしたる人は皆

後世も極樂浄土宗門 みつなか

優婆塞をよめる

煩惱の病をなほし心よく

うばそくさいて修行遊ばす

明觀察智

佛とて別の物にはよもあらじ

貪欲噴毒なき人をみよ 市海上人

あきらかに心のやみめはらさずは

いかで悟りの月見いださん 正香

隔ぬる地獄極樂よくきけば

たゞ一心のしわざなりけり 親鸞上人

始から經をよますと小新發意

先かきたまへ庭のいろはを 舍永

本願寺私官に御一家といふ事

あるをおもひてよめる

御一家のをしへにまかせ西方へ

罪もかるこにのせて行らん 友信

有馬の阿彌陀堂あれ果しに上

尊出來しを見て

今こそは極樂ならめ阿彌陀堂

雨のもりやを痛く防ぎて 藤原光廣卿

阿彌陀の願をよめる

六八四十八願成就するなれば

阿彌陀も九々の算用やよき 梅曲

或僧の引導の場にてよめる

世話 本分の田地をひらくばんさまの

をつとりくわもよしや佛法 昨夢

題しらす

後の世のきづなとなれる妻日程

せめて佛の恩をたふとめ 法然上人

ふらく煩ふ人へのあいさつ

に

たちやみにやむと後世をお願やれ

しなばころりと横にねん佛 舍永

題しらす

明暮く信心ひとつになぐさみぬ

佛の恩をふかくおもへば 蓮如上人

百首歌の中に釋教

三毒と三惡道と三界を

こえは九品の浄土にゆかん 一圓

菩提の心を

念佛を申す我身は極樂へ

参りはじめの参りをさめよ 真富

念佛が申さるゝにて極樂へ

参るわが身としるぞ尊き

題しらす

それ佛人もやとはぬ世に出て

ときおく法はのちの煩ひ 後鳥羽院御製

死するとは迷ひの上にみゆれども

悟て見れば不滅なりけり 親鸞上人

或人の一回忌の法事せし座に

て

むかはりの善をつくせる弔ひは

一ねんはつき菩提心かな 木也

普門品を

慈悲のちかひ邪見の心をねぬるを

しるや刀尋段々の文 尙芳

題しらす

煩惱のきづなをすきこいやしけり

是ぞめいよの法蓮花きやう 信重

阿彌陀佛淨土に入さすゝむれば

下品なりとも又たりぬべし

後奈良院御製

夢の世としりて後世を願ふみは

ねても覺てもなむあみだ佛 真富

往生とぐれば百味の飲食そな

はるといへる經文のこゝろを

往生の身には百味の飲食の

具はる儘にごくらくよなふ 宣聖

菩提心をよめる

一天下二親につかへ三寶を

四民守らば五體あんなん 宣應

毎日一首中に

觀音の慈悲大悲ぞむかふべき

八葉の蓮のむねにひらけて 爲家

彌陀の誓願をおもひて

藥ならで彌陀は五却の思惟して 祖澄

衆生を子とやあたふ一法

あはれみもふかき濕氣の煩惱の

病をなほすみだの丸藥 貞因

煩惱のこりをなほすまじなひは

天下一藥みだの名號 行重

情の強きこゝろの鬼もしたかへる

みだの利劔や天下一ふり 行風

身に六つの塵をすきりとばき捨る

箒をいはなむあみだぶつ

眞言のこゝろを

大日の種子より出てさまや形

さまや形又尊形となる 實朝公

朝朗弱叶鏤斛とこくふねの しやうらう

跡のしらなみ曳醯嘔蘇婆訶 あいかきと 實手

疎からず伴ひし人のいかにお

もひ取けるにか六時勤るとい

ふをきゝて申遣し侍ける

一聲のうちに六にはつこめすや

いかによるひる申念佛 貞因

佛の慈悲をおもひてよめる

身を捨て人をたすくる法の師の

慈悲の心ぞたふとかりけり 親鸞上人

慈悲

當來の三會の春の花も又

現世の慈悲を種となるべき 雲居和尚

題しらす

道はたゞ世間世外の事どもに

慈悲眞實の人に尋ねよ

八卷の經の中にもなかりけり

たゞありなしの妙の一字は 道元和尚

中道實相

万民にこえてさどれる心こそ

邪正の外境なりけれ 行風

聖一國師煩の後一眼盲し給へ

ると聞て申遣しける

本來をさとりえたらば海月殿

海老の眼は用ひざらまし 法心上人

釋教の歌の中に

極樂へつとめてとくと出たゝば

身法然上人の終にはまゐりつきなん

心世話をば水晶りんごみがきつゝ

珠數の玉にも念佛たえすな 幸昌

罪障の露霜ふかき身にはたゞ

座禪念佛恵日なりけり 雲居和尚

久安百首歌の中に

西方にあみだ佛のますなれば

道理ともなれやなもと唱ふる 藤原季通朝臣

題しらす

三毒のやまふの床のねがひものに

一口なりとなむあみだ佛 貞因

菩提もと植木のごとき人なれば

善は熟柿となりにける哉 滿永

饅頭たうべける折から如何哉

佛法ごはれて返事に

それとしもめにはみえねと頭上より

脚下にいたるまんぢうの味 元成

菩提のこゝろを

三界を火宅と見るはひがごとよ

こゝを離れていづこ極樂 行重

主人公

穢土にあらず淨土に非ず古からず

あたらしからぬ心にて候 義益

即心即佛

座禪とて外は求むな我胸に

無念無相の佛もちつゝ 權大僧部光宥

隨緣真如

舟ならで苦海をわたる人々の

浮沈みあるや楫のとりから 三哲

依他圓成

法の道尋てぞしる足もこの

くさり繩にもとり所哉 行風

阿字觀

生れずよおもへば本の阿字なるを

いつの程より不可得といふ 山海上人

性空

本の水はかりて見れば人間の

五性の物がへしやうもなし 行風

題しらす

苦をもみず樂をもしらぬ其時は

善惡ともに及ばざりけり 隆覺禪師

西東北よ南よそれはさう

天地のほかはもとの古里 弘法大師

人間に住し程こそ淨土なれ

さとりてみれば方角もなし 親鸞上人

佛より先にさされる他力をば

釋迦も説かずみだもしらぬ 法然上人

らくらくと思へばもとの物をたゞ

しばし佛にたぶらかされて 山海上人

佛法は鍋のさかやき石の毘

繪にかく竹のこもすれの聲 一休和尚

極樂はまみけの上のつるしもの

あまり近さに見付ざりけり 道元和尚

鳥の子も塵紙も同じ紙は紙

佛も鬼もかく筆はふで 義益

心ごは何をいふらんふしぎさよ

墨繪にかけるまつかせの音 夢想國師

親月とて都の町に松たてわた

ししめかさりしていはふをり
からされかうべいだきありき
給へるを或人の見てこはいか
にぞ申ければ返事によめる
憎げなき此されかうべあなかしこ
めでたくかしこ是よりはなし

一休和尚

大死底人

やけば灰うづめば土なる物を

何か残りて苦をばうくべき夢想 國師

婆娑即寂光土生死即涅槃とい

ふ文のこゝろを

不可得とがてんをすれば過去未來

現世にきらりあり明の月 元信

題しらす

さし出る心の角を折るならば

無の字をかけて物は思はじ夢想 國師

おのづから虚空ひとしくなる人は

みろく出世か今日の釋迦 道徹

たてぬ的いかぬ弓にて放つ矢の

古本にはぬ 古本にはれ 夢想 國師
あたらす鹿もはづさざり鳥
體ありて凡夫心だになかりせば

本來空の無相眞佛 雲居 和尚

罪作り地獄へおつる人もまた

鬼がためには慈悲心ぞかし 貞林

空に出て空なる物を釋迦むりに

妙とくこそ妙な事なれ 行風

振舞とこゝろと口ととゝのへて

彌陀の御のりをとく僧は僧親鸞上人

あなたからこなたを助け給はれば

釋迦彌陀はわが雨となり哉 眞富

墓原のはどりにて千日申僧へ

のあいさつに

打ならしかねし申念佛も

一さんまいの寺の僧たち 高哉

念佛往生のこゝろを

中々にほれて念佛申せかし

こざかし貌はみだに疎きぞ 兼好法師

上もなき功德とさし彌陀の名の

餘りの事に唱へやすさよ 僧都 源信

知人もしらぬ人をもわたさるゝ

弘誓の舟のかいせみだふつ 満永

題しらす

世をのがれ修行の道は別になし

智者愚者ともに座禪念佛 雲居 和尚

常所作智

世話 往生をさげし女や氏なくて

のれるは玉のこじふどう也 一圖

恵心僧都常にこのみて彌陀の

像を書たまふよしをきゝつた

へてよめる

筆の海ふかきくぐくのありさまの

御影をうつす恵心佛哉 夏虫

涅槃門のこゝろを

貧らすいからず愚痴になき人は

おもはずしらす出る三界 知友

嬉しやな尊とやどこそは言れけれ

なむあみだぶの口のひまには

蓮如上人

法界體性智

天はやね諸木は柱地はたゝみ

世界はわれが家居なりけり 貞富

題しらす

櫓もかひも我とはとらで法の道

たい舟主に任せてぞゆく 聖徳太子御歌

作者之目錄

敏達天皇御製一首 延喜帝御製一

後鳥羽院御製一 後奈良院御製二

寛文法皇御製一 智徳太子御歌一

親王

八條殿 式部卿智仁親王一 一乘院殿 具敬法親王一

知恩院御門跡開基八宮三

三公

法性寺入道殿 攝政前關白太政大臣忠通公一

後京極殿

攝政前太政大臣良經公二

近衛殿

左大臣信輔公一

近衛殿

關白前左大臣信尋公一

轉法輪三條殿

右大臣實秀公一

室町殿

贈左大臣義輝公一

公卿

大納言正二位藤原朝臣爲家二

大納言正二位藤原朝臣爲兼二

烏丸殿 權大納言正二位藤原朝臣光廣三

飛鳥井殿 權大納言正二位藤原朝臣雅章一

小川坊城殿

權大納言藤原朝臣俊廣一

前大納言隆家一

中院殿

權中納言正三位源朝臣通勝一

飛鳥井殿

前中納言藤原朝臣雅康一

岩倉殿

參議源朝臣具起一

非參議

皇太后宮大夫俊成一 正三位知家一

雲客

正四位下大皇太后宮前大進藤原清輔一

正四位下中宮權大進藤原仲實一

庭田殿

中將源重秀朝臣一

同 中將源雅純朝臣一

從四位上木工頭源俊賴朝臣三

藤原信實朝臣四

藤原光俊朝臣二 藤原秀通朝臣一

武家

太閤秀吉公一 鎌倉 右大臣實朝公一

安土 內大臣信長公一

正五位相模守平時賴二

從五位左衛門尉源義經一

地下

兵庫頭源仲正三

丹波掾曾禰好忠一

高倉氏古本ニハ小倉氏 左近將監源實澄一

淡路守宗增十四

豐後守辰敬一

壬生忠利一

小堀氏 遠江守一政二

愛甲氏 三郎季隆一

女房

和泉式部一 小大進一 鈴虫女一

越川氏 智蕙妻一

宮川尼一

大坂 如風尼一

京 三麻女一

和州 夏虫妻四

和州 每雄妻一

河州 長廣妻一

大坂 胡蝶女二

江州 孝女一

僧官

武田氏 大僧正信玄一

細川氏 二位法印玄旨七

牡丹花一

東山氏 長嘯子一

法眼紹巴一

翠竹庵 贈法印道三一

天滿森 法橋由巳三

大友氏 宗憐法師一

三論宗

行基菩薩一

天台宗

前大僧正慈圓四

權僧正公朝二

僧都源信一

性空上人一

西行上人五

寂蓮法師一

兼好法師一

真言宗

弘法大師一

櫻尾開山 明惠上人一

權大僧都光宥一

佛心宗

天龍開山 夢想國師五

大慈開山 大燈國師二

建長開山 隆覺大禪師一

永平開山 道元和尚二

松島開山 法心上人二

一休和尚六

平等寺 海上上人三

澤菴和尚七

雲居和尚十

建仁寺 雄長老七

東福寺 正徹法師一

淨土宗

法然上人五

知恩院 靈嚴和尚一

袋中和尙一

遠里小野西方寺 弘誓上人四

本願寺

親鸞上人十一

蓮如上人二

山城京井所

因幡堂僧 實手一

同上 高田氏 正齋 資之十四 瑞生一

本阿彌 光悅一

松永氏 貞德十五 立圃二 貞室二

北村氏 江崎氏 申川氏 無住一
 季吟二 幸和一 喜雲三
 齋藤氏 土山氏 後藤氏 井狩氏
 滿永十四 盛成一 重藤三 友靜三
 立谷氏 西村氏 村谷氏 河島氏
 小谷氏 宗範二 高盛大 安勝十
 忠勝二 忠直八 永明一 池田氏
 平田氏 今井氏 賀茂僧 伏見
 全兒一 月券一 露殘一 道甘一
 同所栗田氏 同所 八幡山 古木ニハ寶藏
 玄康三 拙也一 信海二 坊トツエアリ
 同所 宗鑑二 同所柴垣氏
 秀愚一 山崎 卜琴六
 宇治田原本原氏
 如快一

長谷寺 郡山 今井僧 同上
 恩真二 正式一 宗玗五 草雪一
 同所中澤氏 同所家長氏 同所今西氏 同上
 三省二 周光一 正盛九 每雄廿
 同所森岡氏 同上 同所上田氏 同所井澤氏
 元信十五 顯興二十 元成十一 義益七
 同所細井氏 同上 同所森氏 同所
 友和廿五 次重二 信重一 儀正一
 高田 同所宮崎氏 同上 同所小島氏
 不得二 自喻二 正流一 言千二
 同上 同所吉井氏 同所 牧村僧
 心笑二 似柳一 賢隆一 受夕一

長樂伊藤氏 菅尾不動院 下田村僧 片岡津川氏
 夏虫八 賴智一 葦葉一 重利一
 多武峰 同所 吉野藤井氏 色村善行等
 古桶二 乃心二 周可三 惠立五
 當麻 道徹一

河内
 錦郡僧 靈井僧 伏山僧 交野僧
 圓乘二 元安一 如雲一 蒲劔四
 恩知僧 靈井岸野氏 同所 國分
 良玄二 唯正一 正安一 行廣十
 同所北村氏 同所 同所
 一忠一 政吉一 貞氏二 正友一
 大ク塚 同所 春日田中氏 柏原三田氏
 可正三 正慶一 弘重五 淨久三
 同上 同所小山氏 同所高島氏 弓削吉村氏
 淨次五 利房二 久友一 種好一
 津堂前田氏 小川谷氏 植松梁山氏 同所吉村氏
 正香五 正明一 長廣三 延之三
 八尾森氏 永原宇多氏 松原小野氏 同所宜齋
 正之二 幸昌五 一敷一 定真二
 同所暮松氏 御厨屋 安田玖生氏 足代人見氏
 高壽一 春宵一 且保七 如水三
 和泉堺南

正法寺 岩井氏 池島氏 柏原氏
 成安一 教二八 成之十二 正勝二
 岩井氏 同氏 同氏 同氏
 定次四 重次六 正長一 眞芳一

堀野氏 多羅尾氏 橫山火烟氏
 正成一 宗句二 義辰一 頼永一
 攝州堺北庄 井所々々

入安六 眞直一 一正三 元清一
 林庵 坂井氏 安立町坂村氏
 顯成一 成榮一 及之四 利安二
 古妻山木氏 同上
 榮治二 正重二

大坂井所々
 御菓子所
 山城大掾藤原貞因三十五
 曹洞派僧 黃檗會下 應典院 蓮光寺
 昌三二 道明二 泰極七 祖澄三
 淨照坊 淨久寺 常元寺 柳念寺
 昨夢一 一圓三十 昨替一 昌惠五
 江齋 休甫四 是政五 三哲二 松山氏
 堀山氏 竹田氏 同氏 玖也一
 保友六 圓塚二 見澤一 一長二
 中西氏 高瀧氏 正見一 三宅氏
 宗慶一 以仙一 正英一 獨友一
 和多氏 藤世氏 島氏
 重信一 由貞二 泰英一 久清五
 山口氏 富田氏 森氏 上下氏
 清勝二 正信十 信安十二 知度六
 安田氏 治住七 長次二 正久一 伊勢村氏
 正定三

井上氏

赤伊氏

松江氏

友易一

中村氏

植田氏

山村氏

勝方一

旅泊一

鹽川氏

坂戶氏

宗定五

一忍一

橋本氏

延壽一

近吉一

富山氏

重次一

行豐九

清信二

管窺二

近江

龍泉寺

宜爲一

陸奥白川

益氏

高津氏

景則二

宗方二

廣通四

重至一

尙信一

智元一

龍泉寺

來焉一

休昌二

田也一

永貞二

現之一

珍軌三

直好一

仍可一

本茂二

永茂二

同氏

大田氏

出羽最上

井上氏

天平氏

中島氏

好春一

元親一

路春一

玄碩一

海雪一

田也一

出羽最上

伊丹氏

伯貞一

正好一

相氏

生白堂

天滿川

空存二

宗因二

政長廿一

多賀野氏

次木二

播州

一與一

柴田氏

良因八

花實庵

弘延一

同野橋本氏

同所小中氏

同所大町氏

同所

義文二

國符寺

政次三

寺田氏

花實庵息

島田氏

之時六

本也八

益谷氏

舍永六

同所鹿嶋氏

同所

貞林十

延俊一

養三二

重香三

酒粕三

大塚氏

同氏

清永一

方重三

岨山氏

高故廿

信澄一

川崎氏

靜壽一

長行二

野間氏

行安六

香瀧氏

清之一

清祇一

若林氏

良久八

松木氏

友松一

伊賀

尾州

長齋一

友久八

都筑氏

榮種三

信元七

自是一

下村氏

梅田氏

貞成四

武井氏

友定一

舟橋氏

安親三

伊勢村氏

次良一

武野氏

俊佐七

松絲二

立田氏

行順五

高屋氏

春房二

岩手氏

宗也一

相州

知秋十

萩野氏

長齋一

友久八

都筑氏

榮種三

行景二

吉田氏

川副氏

行真一

宇野氏

宗精一

知義三

友信三十

友貞一

友信三十

友貞一

友信三十

友貞一

平野氏

方寸五

行真一

宇野氏

宗精一

知義三

友信三十

友貞一

友信三十

友貞一

友信三十

友貞一

友信三十

行重九

友信三十

友貞一

友信三十

友貞一

友信三十

友貞一

友信三十

友貞一

友信三十

友貞一

友信三十

友貞一

齋藤氏

友信三十

友貞一

友信三十

友貞一

友信三十

友貞一

友信三十

友貞一

友信三十

友貞一

友信三十

友貞一

冷泉氏
友知十三
是急四
元房二

紀州

高野山隨心院
尊海五

阿波

山田氏
正忠一

土佐

深江氏
成行一

肥後熊本

永崎氏
一見廿七

村井氏
惟次四

寺田氏
守昌一

荒瀬氏
宣就十二

同氏
宣堅五

同氏
宣應三

同氏
宣秀六

同氏
金門二

住所不知

一ノ一

溝駒一

讀人不知十三

熒惑星歌一首

右内歌出所古書目錄

曾禰好忠三百六十首一首

俊頼家集三
仲實永久百首一

仲正家集三

西行家集五

同四天王寺百首一

季通久安百首一

法然五十首教化歌四

親鸞伊呂波歌十

實朝家集一

公朝家集二

同法語二

道元伊呂波歌二

平時頼百首一

爲兼卿折句六首二

藻鹽草三

蓮如教化歌二

黑谷上人傳一

多賀豐後家訓書一

太閤記五

雄長老百首六

入安百首六

宗増兩度百首九

清輔家集一

慈圓賀茂百首一

南北百番歌合一

義經軍歌一

信家百首一

夢想百首四

大燈法語一

山海百首三

夫木抄十六

砂石集二

小倉實澄軍歌一

草根集一

信玄全集一

信長記一

佃軍歌一

由已百首三

古狂歌集一

同源氏外題歌五

曾我物語一

照蒙記一

可笑記一

舉白集一

資之百首十四

玄康百首三

旨安杖一

東道中名所記一

老馬物語一

鼻笛草紙四

吉野獨案内七

已上六十五部

總歌數千六百七十餘首

作者數三百九十一人

此外熒惑星歌有

愚昧記五

葛藤集一

似世物語一

貞德百首六

往生要歌十

吾吟集二十五

鎌倉順禮記三

跡追草紙二

一休物語六

貝盡草紙二

浮世物語一

此ちうたむほなゝそあまりえらび
てたまきとせり名つけて後撰夷曲
集といふ梨壺のおほせごと承るこ
とにはあらねど狭きこゝろより題

號取出るにすべなく古今夷曲につ
づきぬるをさいはひと後撰の二文
字寛文十一年五月三日に借用申と
ころ明白實正也若彼五人の衆入用
とならば右後撰の二文字に拾遺後
拾遺金葉三部の利をくはへとみに
返し侍らんとかゝまほしけれごさ
え乏しく夷歌の本さへすましかね
侍る身なればたゞ永々借下されん
赦されを可蒙也と爾言

天明版本ニナシ
寛文十二壬子歲首春吉旦

寺町二條下町
西田勝兵衛板行之

此書寛文年中梓行のゝち其板いか
がして絶たるにや全本世に少し其
後寛延の頃書林田原氏百子堂潘山
翁に乞て拔書本を公布せりしかる
に此全集藏板の株といふ事を今秋
求め得て即再板をうながす原本紙
數多く却て搜索に便りよからずと
て類題本の如く書つゝめて梓氏に
命ずさしも行風師の撰びたまへる
も寫したかへかんなあやまりなき
にあらざれば清書のついでにこれ
を校正するのみにてすべて増刪す
る事なし但其假名つかひは世に所
謂定家卿のおきてを用ひられしを
今はことごとく契冲師の正し給へ
る古義にあらため侍りしなんいさ
さか其たがひめとやいはん
天明甲辰十一月

夷歌式目錄

- 一 夷歌名目事
- 一 六義事
- 一 六躰事 付折句 折句沓冠 沓冠
- 一 歌の躰の事
- 一 物名よみやうの事
- 一 上下かけあはざる歌の事
- 一 四病事
- 一 腰折歌の事
- 一 落題事
- 一 假名ちがひの歌の事
- 一 名所名物取違歌の事
- 一 本歌にかゝはり正理失歌の事
- 一 くびきれ歌の事
- 一 糟糠詞の事
- 一 ぬすみの事
- 一 不吉歌の事
- 一 凡俗歌を藝能又綺語と誤る事

夷歌名目事

一此歌の名目、いろ／＼にいひならはせり、舍人親王撰日本書紀には夷曲ひなぶきとあり、聖德太子傳曆平氏撰には、夷振ひなふりと下の字を書かへ、えびすふりとよませたり、古今和歌集の序には、夷歌えびすたと書り、今の世には狂歌きやうかといふ、いつの程いひ出けるとはさだかにわきまへず侍り、まづ日本書紀に、夷曲ひなぶきをかける意を察するに、夷の字は、ひなとも、えびすとも、たひらかなりとも訓す、曲きよくの字は、つまびらかなりとも、くはしとも、そるとも、まがるとも訓す、中に此名目のこゝろにとりては、えびすは一筋につよきこゝろ本意なれば、訓はとまれかくまれ、文字の意こゝろにつきては、つよき意、つまびらかなりといふ意歟、又ひなとは、田舎ゐなかをいへば、東夷とうい、南蠻なんばん、西戎せいじやう、北狄ほくてきの文字かはるといへども、

大旨をとり、畿内の外をさして、ひなといへるなるべし、曲きよくの字、歌といふにかよふにや、古今集に近江ふり、みづぐきふりなどあり、所詮和歌を都、夷曲を田舎にたとへていへるならん歟、古今に夷歌としかけるも、異なる義あるまじきやうにおもひ侍るはいかい、道は本一つなりといへども、人に仁義あり、尊卑あるが如く、歌にも尊卑をたて、正風しやうふう變風へんふうをわからたるなるべし、異朝に周詩を正し、理是にかなふ歟、今狂歌といふ事おしはかるに夷曲の曲の字を、まぐるといふ、訓あるによりて正躰の夷の字をわすれて、曲の字をとり用ひ、古本ニハ狂歌トアリ古本正シ狂歌と誤りたるなるべし、しかるを又枉わうと狂きやうと、草行さうぎやうにかく時、字

形かたち似たれば、世俗又あやまりて、狂歌といひならはせるにや、畢竟物ぐるひになせる、無念の事歟、但し俳諧はいかい躰八種はつしゆの内に、狂言といふことあるによりていへるにや、それは俳諧躰の内の一つの名なれば、變風歌の名目には心ゆかずや侍らん、猶枉歌といはんも誤りなれば、今よりは日本書紀、古今和歌集の言によりて、夷曲又夷歌といひてしかるべからん歟、前集の序にも、むかしをたてる名なりけらしと書侍る、猶秀才の達人たゞし給ふべきなり

六義事

一毛詩の序に曰、詩に六義あり、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌、此六義の中に、風雅頌を三經と名づけ、賦比興をば三律と名づく、風雅頌は、詩

三百篇の部分なり、賦比興は、制作の躰（みづか）の作りやうなり、先風（ふう）といふは、民庶（みんしよ）の作口（さくぐち）號（ごう）より出來たり、次に、雅は、朝廷の樂、公宴御遊（こうえんぎょいう）に用ひたる詩なり、是に大雅小雅あり、頌は、宗廟の樂、神明の祭禮にうたふ曲なり、これに三頌あり、此風雅頌、たとへばきぬ布などのたてのごとし、故に三經と名づく、さて賦の躰は直叙（ちきじょ）とて、思ふ事をすぐにときて、比興をからず、比は比三方（ひはうほう）於物（うへにもの）とて、たとへをかりていふ躰なり、たとへは花を雪にたとへ、紅葉を錦に比し、恩のあつきを、雨露（うろ）にならべ、徳の明かなるを日月（にちげつ）によそへたるかごとし、興は託事（たくじ）於物（うへにもの）とて、鳥獸草木に興を發して、その心ざしをのぶすがたなり、此三義は、たとへば絹布の貫（ぬき）のごとし、ぬきはかならずたて

をどほすによりて、三律とは名づけたり、六義の次第、風賦比興雅頌とついでたれど、風の中に賦比興を具（ぐ）せるごどく、下の雅にも、各賦比興あるべきよし、先達これかれしるせり、あらずや味ふべし、周詩の六義かくのごとし、文選の六義これにかはれり、賦を文章の名として二京賦（にきやうふ）、三都賦（さんとふ）、風賦（ふうふ）、月賦（げつふ）などいへり、その詞の中に、賦も比も興もあるべきなり、和歌の六義又これに異なり、風はそへうた、賦はかぞへうた、比はなぞらへ歌、興はたとへ歌、雅はたゞことうた、頌はいはひうたといへり、六種ともに制作にとれるなり、證歌（しやうか）は古今集の序に出て、殊に紀氏自注（じしちしゆ）ありとなり、公任卿（こうにんけい）をはじめて代々先達の抄物世（せうぶつよ）にこままり、その正理（しやうり）をよくくさとして、六義の旨

たゞしわきまへずば、歌の趣心得がたかるべし、猶夷歌も六義にもるまじければ、師説をうけ、其境をもわきまへたまふべき事歟、

六躰事

一長歌とは、三十一文字一首なり、又古今集に、短歌とかける部のことがきながうたとありて、かへしうた一首あるあり、反歌（かへうた）なきあり、是はいかほぞ長くいひつゝけるも、おくの一首にて其理をつづまやかにいふなり、たとへば經の偈同事歟、此躰もながうたなるにや、師説をうくべし、短歌とは、顯輔（けんぷ）清輔（せいぷ）俊賴（しゆんらい）などの義は、たとひいかほぞいひつゝけても、其ころざしを遠くのべ侍るを長歌といふ、短歌とはながくつゞくれども、三句ども、五句ども、ごほして、跡をひかず、詞のつゞきを、いひき

りいひきりすれば、みじかき故に、
短歌なりと申され侍りけるとか
や、久安きうあんのころ崇徳院の御代に、人
人に歌めしけるに、短歌を一首づ
つくはへて奉れと仰せければ、よ
みて奉りける、作者俊成卿以下十
餘人歟、是にも反歌かへた侍れば、未練みれんの
もの、心得にこころえき所なり、所詮短
歌とは、五七五七とつゞけ、五句め
七文字にて果つべきところを、五
文字にいひなし、それよりはいか
ほごも心にまかせて作り、結句は
七七にてはつと心得べき歟、病と
てたゞせる法も見え侍らねど、同
じ事どもあまたあるは、よろしか
らず、よく心得て作るべきなり、か
さね詞は、外の事なるべし、おくに
そへる三十一文字を、反歌かへしたといふ、
一首にかぎらず、二首も三首もあ
り、しかれども、中頃よりは大かた

一首なり、其短歌の趣をよめり、詞
はかはる事もあり、又反歌なきも
あり、旋頭歌とは、六句によめるな
り、混本歌とは四句にて、下の七文
字一句なし、誹詠歌八雲御抄に白、
公任卿なども不レ知レ之、通俊何と
て心得たるにかりけん、入ニ於後
拾遺、經信卿の曰、入ニ誹詠歌に
て、毎事のわろさも被レ知云々、誹
諧躰八種ありと歟、併レ或師より傳
へしは、誹はは甫尾切誹謗也、諧はこ胡
皆切和也、合也調也、偶也、非レ道
教レ道、非ニ正道ニ進ニ正道ニといふに
かなふとなれば、歌のしたて直に
あらず、あらぬ方に心をつけ、理に
叶ふやうによめりとなり、史記に
滑稽傳うけげんといふ是に似たりとは、い
ひ傳へたれど、さだかにわきまへ
がたき事にや、中頃より多くよめ
りとも見えす猶古今集の歌を見て

思惟し、師説をうくべき事歟、廻文
歌とは、上下よりよみて、同じとな
へなるをいふ前集此集にも書くは
へ侍り、是を見るべし、折句とは、
物の名を一文字づゝ、句のかみに
するてよむをいふなり、業平朝臣
かきつばたよめるを見てこゝろう
べし折句の沓冠くつかぶりとは、物の名にも
あれ、詞にもあれ、五句の上下に
するてよめるをいへり、たゞへば
此茶屋ちやゑ題な無な
このちややたぐひなしといふ文字
を句ごとの上下にするて

ことさらの

千代のはしめや

やまどうた

くり返しうたひ

猶あふくらし

是は寛文法皇御製なりとぞ、此外
いにしへの作、いろ／＼あれば、見
ならふべし、又沓冠くつかぶりといふは、始を

はりに、その文字を定ておくなり、
 文字は一も二も三も、心にまかせ
 てよむなり、右の内、混本歌は、中
 頃の歌仙もこのみたまはざるに
 や、歌あまたも見えず侍り、たゝ三
 十一文字の躰よくよみかなへんに
 はしかじここそ、思ひたまふれ、右
 のおもむき、代々の抄物にありふ
 るゝ事なれば、いさゝかも心ある
 人にとりあげたまへどにはあら
 ず、未練の童蒙のためにと書付侍
 るなり

歌の體の事

一歌の躰よくゝわきまへ、一首
 の首尾其躰にかなふやうによみな
 すべき事なり、躰といふは、幽玄
 體、長高體、有心體、麗體、事可然
 體、面白體、濃體、見樣體、有一
 節體、拉鬼體、已上十體なり、此
 外に猶くはしくわかし、行雲廻

雪、高山、遠白澄海、物哀、不明、至
 極、理世、撫民、存直、花麗、松、竹、
 秀逸、拔群、寫古、一興、景曲、強
 力などいひて、既に三十體におよ
 ぶといへども、そこゝに屬しぬ
 れば、大旨十體としるべし、首尾ど
 このはざる歌といふは、たどへば
 上幽玄體につけ、下強力體にい
 ひながし、或は始長高體をよみ出、
 末寫古體などに取まじへよむをい
 へり、餘はなぞらへてしるべし、前
 にもいへるごとく、夷歌とても此
 體をもるべきにあらず、猶誹諧體
 も是にそふべければ、よくしるど
 いふは、輒き事にあらず、作者よ
 りより修行のうへ、代々の先達の
 書しるせる抄物をみて、和歌の證
 歌を思惟し、夷歌をもわきまふべ
 し

物名よみやうの事

一物の名よむといふは、かくし題
 の事なり

五月雨をよめる 和泉式部

よの程にかりそめ人や來りけん
 淀のみこものけさ亂れたる

是にて心得べし、夷歌にも、前集此
 集にくはへしを見るべし、又よみ
 そこなへるといふは、こんにやく
 をよめる

膳の上で酔の菟弱のご小言いふ

兒とて親がしかりぬる哉

此歌一首はあるまじきにて侍らね
 ぞ、物毎に何かそこゝをいふを、
 酔のこんにやくのといふ事かな
 と、世話にいふを、外の事におもひ
 てよめれど、題の菟弱の字其まゝ
 に用ひたれば、かくし題のよみや
 うにあらず、又或人東海道戸塚と
 いふ所を題にて

此度はかくれ笠きて通るなり

とづかぬものとおもひたまふな
古き歌にかゝるもあれど、とつか、
とづかぬ、清濁ちがへり、させる
科にはあらずといへども、難な
らんにはしかし、餘はなぞらへて
しるべし

上下かけあはざる歌の事

一或夷歌百首の中、年内立春といふ題にて

年の内の春てふきけば老が身の
貌のしはすものびくゝとなる

此歌、上は和歌の詞にて、下貌のし
はすものびくゝとなるといへる
は、戲言なれば、上下かけあはざ
るなり、夷歌よむには戲言正體な
れば、かくのごとく上に戲言なき
は、上よわしといふべし、前集の序
にいへる、盲ひ聲ひのたぐひなり、
又時雨の題にて
朽葉にてそむる時雨のふり袖は

いまひとしほの色まさりけり

これは下に戲言なし、腰曲足たゝ
ずのたぐひなり、餘は准へてしる
べし

病の事 同心病、遊風病、
中飽後悔病

一同心病

七夕のへいふうといふことわざや

星に手向の屏風なるらむ

此歌、威陽宮にたてられし、七尺の
屏風を七夕ともたせて、下に星に
手向の屏風といひたてたれどへい
ふうといひても屏風なれば、同じ
こゝろのやまひ歟、又

口をしや餅の名にある萩の花

それさへあるにつくるみそはぎ

此歌餅とみそとを縁につけたり
とは見え侍れど、萩の花餅にみそ
つけんもこゝろゆかず、此餅の名
も小豆のつきて、萩の花のいろに
似たれば、さいふなるべし、餅とい

ひても萩本名なり、下鼠尾草も萩
なれば、同じ心のがれがたくや、餘
はなぞらへてしるべし

二遊風病 此病和歌式にいさゝか

違へりたゞ隔句たる同字と心得
べし

ふくといふ菖蒲は軒に名のみして

ふみやぶられしけさのやねふき

此歌、上の葺と、やねふきのふきと
同字なり、病なるべし又

百の物一つおもはゞ我にかく

も、夜もおなじ丸ねさせめや

此歌、上百と、下も、こ、音かはり
ても病のがれがたし、餘はなぞら
へてしるべし

三中飽病 和歌式には、三十五六

字にあまりて、旋頭歌にもあらざ

るをいへると出たり、餅よくいひ

かなへたるはゆるすにや、さる歌

代々の撰集の内にこれかれ見ゆ、

夷歌もよくいひくだしたらんには、たとひ一句に、一文字づゝありたりとも、夷歌なれば猶くるしかるまじき歟、所詮口にさゝこほり、ごなへにくきを、きらふとしるべし、或夷歌に

千早振神代もきかず立田合羽

傘からかさごおなじく水はちかんとは

此歌本歌をあらぬかたに取のけ、一節ひとしづなきにはあらねど、文字無理にあまりたれば病なりと申べき歟、又

神軍勝手の宮の銚はこのさや

よしの漆の花ぬりにして

是又一文字あまるといへども、銚のさやはごあしくあまりたれば難のがれがたし、又文字あまりてくるしからぬたぐひ

西へちろり東へちろり曉の

明星やたゞわか身なるらん

養生のゆいりの心しづかなれや

とつかはとしてあがりたまひそ此二首自然と文字あまらでかなはざる歌のくだりなり、いさゝか科ならず、未練の人は、此旨味ひしるべき事歟、猶兩首ともことがき此集に著し侍るなり

四後悔病 貴人の御まへ、其外に

ても、はれの座にて題さぐりつらねんに、たとひ夷歌にてもあれ、懷紙にても短尺にても書付、文臺に

おきて後、こゝのつゝきかくせば

や、かしこのてにをは、さ直してん

と思ひもし、いひ出もするをいふ

なり、是は座の不義といひまして

歌は神明の道なれば、よりくくに

修行をつとめ、物毎の理をわきま

へ、其席にても書付ざるさきに、い

くかへしも心にずし、首尾とゝのひぬとおもひきはめて後、しとや

かに歌出すべきなり、かゝれば失なきものなり、たとひよみそんじたりとも、直してんとおもひいふは、輪廻の業、愚痴の至りなり、失すなはち師となれば、後のいましめとすべし、猶古來和歌式に出し病、喜撰式の、四病、八病、濱成式の七病、其外代々の歌合、家々の抄にいましめたる病さまゝなりといへども、夷歌には、前にいへる四病を除くべき歟

腰折歌の事

一歌の五句は、木火土金水、人の形にかたざる、さるによて始の五文字を頭といひ、胸腰裾といふなれば、人には意心識ありといへども、天のあたふる性は一つなり、そのごとく歌の五句は姿にて、一物の心を正しくいひのぶるなるべし、しかるを或夷歌に

大礫打出の濱に印地して

菖蒲がたなでよするさゝなみ

雨ふれば三五夜中のしんのやみ

二千里わたるくら雁の聲

この二首さながら連歌二句いひならべたるなり連歌體は、上下に心二つあり、前集の序にいへる、他をそこなひ、身を亡ふ、佞人にひとしかるべし、腰をれの沙汰、未練の人、とりぐに申侍れど、所詮歌よむとおもひて、連歌二句いひ出ぬる、右の二首の歌のたぐひと心得べき歟、かへすぐ嫌ふ事に侍り、但し始より連歌ぞとおもひてするは、各別の事なるべし、猶こしをれ歌といふにふかきならひ侍りとなり、師説をうくべし

落題事

一或夷歌若菜の題にて
人毎にいふてつめられたゝかるゝ

これも若菜が口ゆゑぞかし
此歌題のおもむきいさゝかも見え侍らず、若菜といふ女のありつるが、こなたかなたと告口して人々にたゝかれつめらるゝこの歌の情にこそきこえ侍れ、又霞の題にて

あられ酒のむ盃の數つもあり

更に座敷にたまられもせず

此歌も又畢竟酒に酔て座にたまられぬといひはてたる歌なり、題の意趣いさゝかもみえず、あられ酒とつゞげたればとて、霞にはなりがたかるべし歌つらねん人は、かかる事よく思惟あるべき歟

假名ちがひの事

一或夷歌に歎冬の題にて
山吹の花がまことのかねならば
いかにぬすみに井手の里人
ぬすみに出るはいづるなり、井手

の里はかく書なれば、假名相違なり、又釋教のうたに

我しなば弘誓の舟にのらじたゞ

彌陀の六字をかちであゆまん

彌陀の六字はしなり、地はちなれば是又相違なり、餘はなぞらへてしるべし

名所名物取違歌の事

一或夷歌に嶋月の題にて

月にひく赤石の浦の網にもれて

島かくれゆく鮒をしぞおもふ

このうた柿本の尊詠嶋かくれゆくをおもへりと見え侍れど、彼浦に名たゝる、あかめ鮒など其外にも無量の鱗あるをさしおき、あるまじき鮒とり出らるゝ事、無念なるに、猶一首も鮒を詮によみたて、題の月をわきになせるかたぐ非なるべし、又歸雁の題にて
尻くらへ観音とてやかかへるらむ

清水山を過るかりかね

此尻くらへ觀音といふ事は、兎前足の短かければ、下り坂には、あやまちなきやうにと、觀音を頼みたてまつり、上り坂の時は、わがえてなるにまかせ、さいひてはしるよし、古來よりの世話なり、雁が身になりてさいふべき事、本説世話ともにきくなれず、鳥獸のみならず、情なき草木にも、あらぬ事をおもはせいはせするは、作者の規模ながら、理にかなはぬをおしていふは魔道なるべし、かゝればいにしへは歌をめして、人のさかしおろかなる哉御覽じけるなるべし、猶清水山には、櫻、紙子、焼餅などこそ所にそなはりたる名物ならめ、餘はなぞらへてしるべし

本歌にかゝはり正理失ふ歌の事

一或百首夷歌に述懷題

秋の田のかりほのいを食ねども

我衣手のなまぐさきかな

天智天皇の御製をこれりと見えたり、御製と申、秀逸比類なきを、かく正體なき物にしなせる事、もたいなしと申もさらなり魚はくはねども衣手のなまぐさきとは、いろひたるにや、意趣不正こそ、かりほの魚庵をいひかへたるをよしとならめど、秋の田のかりほの魚とつゞくこと葉、からやまとの歌にきくなれず、夷歌とても、本文俗語ともに古來よりいひなれぬ詞は非にてこそ侍らめ、又戀の題にて或夷歌

盃のおながれの座へいづみ川

わきてうれしき君の付ざし

彼みかのはらわきてながるゝ泉川の歌を思へりと見えたり、座へい

づと秀句にいひ、いづみ川わきて

と縁にすがりてよめりときこえ侍

り、併上一人の仰せとても、盃の座

へ泉川、出べきやうなし、猶御な

がれといふことは、大内此殿、彼殿

にある事なれば、付ざしなどいふ

こと、いと似合ず侍り、君といへる

もいづれをさして申されたるに

やおほけなき事なり、まことをし

ふとは、かゝるたぐひをいふべき

にこそ、愚痴の至れるなり、所詮本

歌をどらんには、代々の先達の書

給ひし、和歌の抄物を味ふべし、本

歌とりおほせたる夷歌、前集此集

にもあまたくはへ侍る、無下の未

練の人は、是を見ならふべし

くびきれうたの事

一題をさぐりて歌をよむには、始の五文字にて題をあらはさず、何をいふやらんときこゆるやうにい

ひて次の七文字にて題をしらす
やうの詞をついけ、下の五文字又
は下句の上の七文字にて題を顯は
し、結句をいひながすなり、たとへ
ば郭公のうたに

五月やみくらはし山のほとゝぎす

おぼつかなくも啼きわたるかな
是いにしへより手本にいへる歌な
り五月やみどいひてくらはし山と
うけつゝけり、くらはし山は、時鳥
のある山なれば、時鳥といふらん
としらせて、時鳥とあらはし、上の
五月間にたよりて、おぼつかなく
も鳴わたることよめり、是題をさぐ
りてよむ上品の體なりとかや、猶
邊序題曲流なごいふ習ひあり、師
説をうくべし、併題の歌さて、此趣
一筋にもかざるべからず、始の五
文字に題いひ出る歌もあるべし、
夷歌とても此旨わきまへずばある

べからず、未練の心におしてつゝ
くれば、くびきれ歌さて、不吉の事
などいひ出るものなり、たとへば
或夷歌に、火達いまだあけざりし
夜いささむかりければよめる

ふたぎつ、獨ぬる夜のおくる間は

いかにひさしきこたつとかしる
此歌、ふたぎつ、といひ出て、次の
句、獨ぬるといへる、上の五文字へ
いさゝかよりつかぬ、詞にこそ、明
る間はいかに久しきといふまで
も、何をふたぎたるともきこえず、
戸をふたぎしにや、窓をふたぎし
にや、目、耳、口をふたぎしにや、た
だしからず、末の句にてこそ、漸く
こたつとしられ侍れ、かゝる體を
くびきれ歌さて、大に嫌ひ侍る事
なるべし、又旅の戀の題に
我もせじ留主の間をたしなめど
いひて別し妻ぞ戀しき

この始の五文字我もせじとは何事
にか、四句目までも題の心いさゝ
かきこえず、我もせじとは、いさか
ひにや、又は實引にや、人の上にせ
じと制する事多かれは、不分明、
結句のつまぞ戀しきといふにて、
俗に枕ならぶるをさいへば、よそ
心の事にやとおしはかられ侍り、
是又前の歌のたぐひなり、作者よ
くく思惟あるべし、かゝる歌よ
み出ぬれば神明の御慮に背き奉る
ぞぞ

糟糠詞の事

一或夷歌に鹿の題にて
ふく音をうらあふのきてきく鹿や
いてとらるらん咽のふえたけ
此歌のこゝろは、鹿とらんさて、狩
人の鹿笛といふ物をふき、かれを
ちかよせ、射とる趣をよめり、かれ
がこふる妻の音のごとくふきなせ

ば打あふのきて、きかん事尤治定なるべし、さるところを、咽の吭射（い）とられんさよめり、ふく笛にもかよひ、いとよろしくきこえ侍るを、竹といふ文字ぞ、糟糠に侍る、かれが咽に竹あるべき理なし、文字たらざれば、すがりて笛竹とよめる、無念なるべし、其上鹿笛は竹にてつくる物にあらず、美女のはきならしたる、あしたの木をきざみ、鹿の腹ごもりの皮、又鹿の耳の内の皮など、取添作る物なりといへば、事もたがひたるにや、所詮歌の一首は、文字すくなき物なれば、心をこめ、三十一文字の外に、餘情あるやうによみたつること、作者の規模にて侍れ、わづかの文字の中に無用の字ある事、米のぬか、酒のかすにたとへて、いにしへより嫌ひ來る事歟、又或夷歌に

浮舟のゆくへをとへば手習のすりからしたる小野のすみがま此歌もかまといふ文字ぞ、彼糟糠にて侍らん、浮舟の君何がしの僧都の母のもとにこもり給ひ、明暮の手習に、墨すりからし給はん事、さもおほえ侍り、併炭と墨のかはり所につき、いさゝかおもはくも侍れど、夷歌なれば、小野といふにすがりて、炭を墨ともいひなすべき事ながら、すみがまごつきたるにて、無下の事になり侍るなるべし、歌よまん人は、かゝる境をより（い）思惟すべき事なり

ぬすみの事

一本歌とりて歌よむはつねの事なり、詠歌大概に、四季の歌をもて、戀雜をつらね、戀雜をもて、四季の歌つらねば、難なからんと書たまへるは、未練の人への教なれば、いさゝか修行せしは同事にて、同事をよめるたぐひ多し、其趣詞をこれば、心をかへ、或は外の事をこへよめるなり、猶井蛙抄、歌林良材集にくはしければ、是を味ひしるべし、同じ詞にて、おなじ心をあしくよみなせば、ぬすみになる物なりぞぞ、たとへば、或人東海道にてのえひすうたに

年よりてのほりかねたる箱根山
俳諧道は達者なれども
此作者、よはひかたぶきたる俳諧師にこそあるらめ、一首はあきらかにきこえ侍り、されどもむかし物語に、櫻井氏基佐と宗祇法師、いかなる故にか中あしかりければ、宗祇法師、新筑波集えらへるに、基佐が發句付句、世の人の口にあるも、またなりけれども、集に一句もくはへざれば基佐落書（らくしよ）に

足なくて登りかねたるつくば山

和歌の道には達者なれども

と書付て、彼門^{かのかど}にたてけりこにや、

世にいひつたへ、都鄙竹馬にむち

うつ身までもしらざるはなし、其

あしなくてを、年よりてになし、筑

波山を箱根山になし、和歌の道に

はを、俳諧道といひかへたればと

て、新き心いさゝかもなし、畢竟基

佐が作を二度いへるにこそ、猶案

じかゝる事よめるは無念なるべ

し、たとひ歌いひおほすとても、か

かるよからぬ本文は取用ひざる、

此道のならひなり

不吉歌の事

一或夷歌戀百首の中に

百敷やふるき衾をはらふにも

猶あまりあるほこりとなみだ

是は順徳院御製、猶あまりあるむ

かしなりけりこあそばされし歌の

姿をおもへりと見えたり、本歌は

末の世おとろへぬ王道の御述懐

のおもむき、餘情かぎりなき御歌

と申傳へ侍る、さて此夷歌は、先戀

とはきこえがたくさながら哀傷の

心詞なり、いづれぞ雲がくれあり

て後、御なげきのあまりの御製の

やうにこそ、町童^{まちわらんべ}の身として、か

くおほけなき意趣、たくみてはい

ひ出まじけれど、道の心わきまへ

ず、口に出るに任せてよむより出

来る失なり、法華經に、咒、咀、諸毒

藥、所^レ欲^レ害^レ身者、念^レ彼觀音力、

還^{キヤル}著^{キヤル}於本人^ニと、とければ、此作者

しらすよみによみ侍ることも、上を

のろひたてまつる詞より、その科

をおのが身にうけ、命もほろび、凶

事子孫につたふべき事明かなる

が、ふるき衾をはらふにも、猶あま

りあるほこりとなみだこよめる事

しかなり、後三條院御位おりさせ
たまひてのち、住吉に御幸ありし
とき

住吉の神もあはれとおもふらん

むなしき舟をさしてきたれば

こよませたまふ、おりぬの帝を^{おかしき}虚

舟にたごへたる本説あればなるべ

し、御歌がらもよろしく、この情

そなはりたれど、時の人むなしき

ふねをさしてきたればといふ御製

こそ、いましめけれど、申あひ

けるに、いく程なく、崩御ありし

となり、又東方朔が語に、用^ル之則

爲^ル虎、不^ル用^ル之則爲^ル鼠とあるを

思ひて、關東將軍宗尊親王のうた

に

虎とのみ用ひられしはむかしにて

いまはねずみのあなう世の中

と、あそばされしを、爲家卿の判

に、風躰あしく見え侍れば、御進退

もあやうくこそごかゝれけるに、果してあしかりしとかや、かゝれば身の上はさらなり、世の爲、人のためにもあしかるべくいまゝしかるべき事を、かへすゝよむまじき事なりと、いにしへよりいつたへ侍り、よく思惟すべき事歟

凡俗歌を藝能又綺語と誤る事

一歌に正風變風あり、夷歌は天津神の御代、下照姫より始めり、志の之どころを、ありのまゝにいひのべ、文字の數も定らざりしなり、其後二柱の神詠あり、地神の代となりて、すさのをのみこと、三十文字あまり一文字によみたまふより、和歌のよき規に定り侍るなるべし、前集の序にもいへるごとく、人の代となりても聖德太子夷曲のさ

ま、すて給はざるも、心あるべき歟、歌の五句即、木火土金水也句々情口傳、一首の中に、五行六義ありといへども、大旨司る心あるべし、和歌は仁を本とすなれば、君子の行跡の如くなるべし、歌の情詞、温良恭儉讓備はり、恩澤八隅の外まで至り、万民なつくごとく、何の才覺も見えず、打ぎゝやすらかに見所あり、餘情かぎりなく、しかも宮商角徵羽にかなふ、花實相對せし和歌といへり、猶公任卿九品の論義を見てさとすべし、又夷歌は五行の數は備る中に、義を司るご心得べき歟、名目の所にも書しごとく夷はつよきこゝろ本意なれば、かりにも媚諂ふ事なく、實を守り、道理至りぬれば、死をかるんずるに二念なき、是夷の業なり、そのごとく姿の凡卑、詞のこはきも不

レ制、あながち花にかゝはらず、呂律を宗ともせず、是非たんできに、直よかにいひたつるは夷歌なり、是變風なるべき歟、夷歌とて姿詞のやさしきを捨よこにはあらず、猶夷歌の中に、正風體なきにしも有まじけれど、大概をあげていふなり、毛詩にも、周南召南の二國を正風とし、自邶より下つかたの國の出作を變風といふ、是禮樂にかなふと、かなはざるごの故なるべし、我神國は、儒釋道不通のいにしへ、天神地神人代まで、此道をもて國を治め、民を撫たまひしころはひは、四の海波靜かに、吹風枝をならさず、世俗わかつたず、民淳かりしとなり、今末代とても、諸神領じたまふ國なれば、此二歌をよみねび、天地ひらけしより、三光明に、四時たがはず、千草万木、

花咲實はなさきみのる理ことわり、君臣父子夫婦兄弟朋友の交りをわきまへんがため、題をさぐり、物ごとの是非をあかしゆく講こう、年月かさならば、神明の御慮ごろをもさぐりしるべし、かゝる妙なる道を、愚かなるは藝能とおもひ、綺語きこなど、誤るかたおほかりとかや、綺語は佛家に禁る、十惡の一ツなり、ごをいゝるごよめれば、僧俗によらず、名聞利欲のために媚諂こびへつらひ、己が心にうけぬ事をも應じ、けいはくつくるをいふべし、歌を綺語と誤るは、中々いふにたらず、歌は是神道なり、天神地神の尊詠あり、代々の帝も此道を受得おはしましてこそ、御即位も侍れ、本朝佛法の棟梁、聖德太子は、中臣加多能子大連なかとのかたのねのおほむねじこ公より、唯一の道傳授まし、たえず歌つらね給へり、行基菩薩、傳教弘法の二大

師、其外の高僧、いづれが神道によらず、歌よまざるありし、佛家にても下愚かぐの僧は、格別なり、書經に、五子の歌あり、詩經に、思無邪とあるを、仲尼の歎美したまふをも辨へず、歌を綺語と誤るは、凡卑へんびの白衣黑衣かいふさたなるべし、我神國開闢以來、億劫万々歳の後、釋迦ニ彼土ニ況や佛法此國にわたる事甚だ末代なり、我人王三十代、欽明聖代に、佛法初而來朝すれど、世以不信用ニ第三十四代、推古天皇、御宇ニ上宮太子密奏言、吾日本ニ三種子ニ震旦ニ現ニ枝葉ニ天竺ニ開花實ニ故佛教爲ニ三方法之花實ニ儒教爲ニ三方法之枝葉ニ神道爲ニ三方法之根本ニ、彼二教皆是神道之分化也、以ニ枝葉花實ニ顯ニ其根源ニ花落歸ル根故、今此佛法東漸、吾國爲レ明三國之根本也と、叡感不レ斜これより佛法

ひろまれり、儒教、老、莊、列、百家、書皆神道に屬すなれば、上天より、山河、大地、森羅、万像、彼他國の經論書章の文句までも、歌枕とつらね、今日より未來永劫までの正理をえん事、誠に神明の加護ならずや、道の奥義口決を受けるまでこそなくとも、歌まなびざらんはいかゞぞや、大かた神道はおもひもよらず、他國の道によるごいへども修行半なまはにもみたず、白衣黑衣によらず、假の肉身にひかれ、名聞利欲を捨えぬ心から、苦界即佛界、生死即涅槃などいふ、經の要文、直指人身見性成佛などいへる、祖師の語を口に覺えしを是とし、大悟しつ、此身すなはち佛なりと、こゝに出来るもあり、又淨土專念の宗には、當得往生といふは、無知の凡

夫、多くの罪を作り、地獄へおつべきを、一度彌陀を信すれば衆罪消滅して極樂國に往生すなりといひ、或は即得往生とは、衆生往生せずは、彌陀も正覺をこらじとの大願あり、既十劫已前に成佛したまふ故、一念に助けたまへと頼奉れば五逆十惡の罪人も捨給はず、其身は娑婆にありながら光明の内に救ひとりたまひ、早往生すなれば、只今唱ふる念佛は、其佛恩を報ずといへり、さもこそあるらめ、併或智識の申されしは無量壽經に、唯除五逆誹謗正法とあり、西方は西方にかぎらず、清淨國土を云なり、念佛は清淨心なり、阿彌陀は清淨身なり、心身上、本より不二なれば、念、阿彌陀、極樂國土なり、是をさるるを往生となづく、心は虚空のごとく形なきものなれば、心の

悟りを、無量壽覺ともいふ、迷へるものは十萬億土、悟れるものは去^ル此不^レ遠^カ也、といへり、あらずや、韋提希夫人の外、月氏震旦に、念佛の行者多かれど、事ながれればさしおきぬ我朝には聖德太子より西方の教へあり、御父用明天皇、御母后間人穴穗部皇女ともに悟をひらき給ふ、次に妹子大臣、高麗恵慈法師、往生の本意とげられしとなり、明眼論曰理講^ニ說一乘妙典^ニ事談述^ハ西方教文^ヲと見えたり、今の代までも太子の御血脈は西方の大事なりと受得し人申されき、然れども中頃より、念佛一教は、法然上人を祖とす、元享釋書曰源空長承二年四月七日生、年十五從^ニ延曆寺功德院皇圓^ニ剃落受戒^ス、三期之間通受^ニ三台教^ヲ又從^ニ黑谷睿空^ニ稟^ス密乘及大乘律^ヲ風大藏經、律、論、他宗

章疏、靡^シ不^レ檢閱^セ、晚見^ニ源信^ノ往生要集^ヲ、乃棄^テ所業^ヲ、倡^テ淨土專念之宗^ヲ、下畧^カ、れば源空上人は、あまねく學に通じ、五智の修行圓滿して、しかも下至の一念を取給ふと見えたり、法に二法なければ、此心は諸宗通達なるべき歟、さるを祖師の厚き修行はしたはず、たゞ口に唱ふる念佛のみにて、外に法なきやうにおもひ、今日の行ひ非なれば教化する黒衣だに、科におこなはれ、或はおひうなる、たぐひ、まのあたりにおほかり、それにも猶こえて利欲偏執を事とする身の念佛は、妄語綺語惡口兩舌いふには似まじけれど、往生とげんはいかゞぞおぼゆ、或論文曰諸佛念^ニ衆生^ヲ衆生不^レ念^レ佛^ヲとあり、事理わかまへず、修心あしくば、佛とてもいかゞはせん、聖德太子、十種の不淨

を論じたまふ隨一にも、不_レ慣_レ上
品清淨佛性律儀、其身_三在_二生死泥
中_一、故身不淨也とあり、念佛は清淨
心なれば、蓮の泥に生じ、泥にそま
ざるごとき、身上の行ひこそ、娑婆
即蓮華國とも、安樂國土ともいは
め、普く佛法には、眼耳鼻舌身意
の六を、六賊とも、六天の魔王とも
思ひとり、かれをしたがふるに、戒
定惠のみつ、懈らず守ると歎、さる
行ひ一つとしてみたざる身には、
法報應の佛ごもに万里を隔てたま
ふべし、彼佛道に其修行のほごほ
ごをしらんがため、四十二位、或は
五十二位をたつ、其中に、十地の
前、四果の阿羅漢に至ぬれば、煩惱
つきぬるのみならず、六通自在な
りと歎、されば事として理にとい
こほる所なし、況や佛菩薩に於い
てをや、彼大悟せり、往生せり、と

おもふしれもの、此國に生れ、此國
の飯を費しながら、歌いひしらね
ば、まして歌仙の高作のこゝろを
もきゝえず、仁義の法にさへうと
きさる愚痴究りたる佛やはあるべ
き、但愚かなる心には、佛になる
を死して後の事なり、今世_{（こんよ）}と來世
とは別なり、罪作りても、佛の名號
となふれば即時消滅すと思ひあや
まりて、今日の上に非をつくすに
や、又は魔魁が黨なる心から、諸行
無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲
樂といふ文句、惡く心得、常見斷見
に陥りてにや、聖德太子は専ら刹
那生滅をぞをしへ給ふ<sub>（刹那は彈指
その一のその間も理に違ふは、佛道
間ないふ）</sub>ならずとなり、所詮三世は一なり
ごころ、佛説にも侍れ、抑六通など
いふ事は假の方便説なりと、おし
て疑ふは、人の情にあらず、狐の性

にこそ、甚非なるべし、神明の妙、
佛菩薩はさらなり、此國にも、聖德
太子弘法大師の通、不_レ可_二勝斗_一、歌
仙にも、佳言の御神現形したまひ、
業平に贈答の神詠ありしたぐひ多
し、能因法師、範國朝臣にぐして、
伊豫の國にまかりしに、正月より
四月までいさゝか雨ふらざりけれ
ば、苗代もえせで、雨いのるに名
たゝる高僧博士、内外の行ひ日を
かさぬるにも、靈驗なかりしを、能
因歌よみて、一宮に奉りいのりけ
るに、神感ありて、大雨三日三夜降
り、一國の大難遁れし、是通力な
らずや、歌は世に人のしれる事な
れば、書のするまでなし、近くは大
納言光廣卿、勅使にて東へ赴きた
まふに伊豆國三島宿にて大雨甚し
く、往還の數万人、彼宿に膝いるゝ
に所なし、いそぎの勅使なりけれ

ば、午の一ツばかりなるに、けふ箱根山こえずはとて、即當に詠歌あり、明神へ奉りたまふ、社家へあなひありて、隨身袍衣はうえのうへに簀笠きて、寶前に至り、ひざまづき、三返すし、短尺内陣に納るより、御空ひかりやはらぎ、即日箱根をこえ給ふ、御供にしたがひし隨身下部存命いのちながらふあり、其里へ参りあひてしれるものも世に多かるべし、其歌

祈るより水せきとめよ天川

これぞ三島の神のめぐみに

この卿の秀歌世の人の口にあるあまたなり、此歌にとりて風體上品の秀逸といふはあるまじけれど、天地の神の感應は、清淨心にあり、歌は枝葉なれば、時のよろしきにしたがふとしるべし、一に通して萬事をはる、無心にして得て鬼神

服すといへる理ことばりを、よく／＼おもひとるべし、聖廟觀發品の尊詠にも

心だにまことの道にかなひなば

いのらずとても神やまもらん

此歌古今清淨心の通要なるべき

歟、歌は神明の境に至るべき道なれば、詞に拘り、情を脇になして

はよしなし、南華外篇にも支離疏しりこがあくまで見にくき姿も、天年終

れば賢なりとす、貴妃がめで愛せし、祿山中國の美男なりといへど

も、所行惡逆なれば、君子とも大人

とも、今の世までもいはず、たゞ放埒無慚の罪人こそいふなれ、

或道心者の申されしは、唯識論に

も、我身常　主宰より、六煩惱、二

十の随煩惱、慢、過慢　我慢、増上

慢、卑慢、邪慢　七慢までおこると

なり、もとも六波羅密の行ひ、一ツ

かけては佛の内證に疎かるべし、

世には俊秀なるがえのみならねば

不立文字、教外別傳と斗にても、得

がたからんとにや、天龍夢想國師、

永平道元和尙、歌をかりて、我法の

理を百首、或は數十首につらね、事相のみならずとにや、法然上人、親鸞上人も、念佛の理體を數十首の内によめり、此集にもたれかれかき載侍り、猶みじかき智慧に高慢おこしおのれ大悟をゆるし、よしなき、五逆十惡をとりまじへ、いぶかしき往生ねがはんよりは、此國にそなはりたる歌まねび、本生れつきたる清淨心にかへらんにはしがじ、我天照皇太神勅曰、六根清淨なる時は、天地の魂と一體にして、願として無レ不ニ成就ト、又神書頌曰、入ニ元ニ元元初ニ任ニ本ニ本本心ニト、此身神の外にあらず、九万八千

五百七十二の大祖神五體に在して、如^レ影隨^レ形守^レりたまふをもしらず、我執をたつるより、喜怒哀樂の過不及をもて禍おこし、身をうしなひ、或は心君をいたましむる故、それより病出來て、忽天命にそむく身心清淨になさんがため、歌の道に心をよすれば、二六時中に他念なく惡妄相心君によりつかず、おのづから清淨心のよすがとならずや、されば梅を植れば梅二葉に生出で、芥子^{けし}をまけば芥子萌出づ、神國に生れたらん身は、歌の修行みちてこそ、神明の境をもわきまへめ、儒經老莊の要文いひきかせても、その道修行せぬものは、かつてきゝしらず、歌は一文不通の賤までも、きくに心こゝむるは、本此國の道なればなり、胡馬北風に嘶^ひふがごとし、佛教の釋物錄

物^{もの}にもきゝしりがたき段に、歌をそへて理をあかせば、聞得るにて思ふべし、只今希有の智識他國より來朝せり、是にあひて身の一大事因縁をとほんとおもふにも、言語通せざればかひなし、人ありて通ずといへども、いかにぞ我問答するやうならん、寄^{リテ}木求^{ニル}魚^ヲに似たり、抑此國に生れて、歌の道を餘所になすは、冢^{いづか}の山に入り、水鳥の陸にまごふたぐひならずや、かくいへばとて、釋氏の道あらずといふにはあらず、根元不一不異の正理わきまへんに、此等の人は歌にて得る事^{こと}迅^{すみ}かなるべければ、五句六義を事とし、元々を悟り得て、心を六合の外にあそばしめば、通力かぎりなかるべしといふなりしかるを我は歌よみえずといひ、よしなき事に心なやまし、學びてもい

かいといふ、是自暴自棄とて、三國の道に惡む氣質なるべし、學びてだに得がたきを、自らほろぼしする科^か、おのれのみならず外の心にも移りゆけば、天下の道滅亡の罪人なるべきなり、敷島に生て敷島の道しらぬは常をうしなふなれば仁義にも背き、道を崇るに似て、佛に背く事歴然たり、猶歌を學び又は連歌を事とし、たはふれ句を近き世より俳諧と名付てもて遊ぶ輩とても、歌道の外ならねば、專六根清淨に守べき事歟前にいへる利欲偏執七慢の内はいふにたらず、いさゝか名譽求る心ありとも、天照皇太神をはじめ奉り、住吉玉津島、諸の御神の御にくまれを厚く深く蒙り、即時波句が徒ならん事うたがひなかるべし、不淨心のすゝしむるは御神樂だに受たまは

す、万里をへだて給ひ、舞殿たちま
ち魔界となれりとかや、神は正直
のかうべにやごり給ひ、光を和げ
塵に同じうし給ふ、御慮を常にお
もひごりて慎むべき事なり、併神
明通達の歌仙は各別なるべし、歌
とて修すべきなし、棄べきなし、天
地、風雨、山野海川有情、非情、万物
一體と觀じ、しかも是非邪正の境
に心を任せず、自然にしたがふと
しるべし、老聃も道は法し自然にと
説き易は變易とてもはら時を行ふ
とかや、和歌は五行を體とし、詞を
相とし、事に應ずるを用とし、情に
寄よ力を
音を徳とすなれば宇宙の間にあり
とある物、歌にもるゝはなし、歌は
うたふとよめれば、人の言語勿論
歌なり、併清淨心にもとづかんだ
めの道なれば、實をうしなひ、口に
まかせ多くよめるを歌人とはいふ

まじ、宇治山の喜撰たゞ一首にて歌仙の名高き事、樹下石上、三衣一鉢にて、心朗かなれば、神道の外ならざる理りを思ひ得て、六根清淨ならんには、たとひ三十一文字よくせずとも、淨人なるべし、修行きびはなるは、忌穢を正し、五辛牛鹿やうの物をたち、日をかぞへ、非姦正姦犯さず、沐浴し、淨衣着して神社にむかふを、清淨なりと思へるもあたらず、裸形放埒なるには似ざれど、心清淨ならぬは、りやうごう蜚蠊を錦に包みたらんが如し、常に内清淨にして猶外の清淨正しかるべき事歟、任ス本ニ本本心ニといふを、よくくわきまへしるべき事なり、弘法大師も、宗源神道傳授ありて、和歌夷歌ともにつらねたまふのみならず、唯一の宗と、我密宗とならばたて給ふ、是を習合神道と

云、やつがれも其趣不思議に受傳ふるうへ、唯一の道は、神祇長上卜部何がしより、いさゝかゆるされ侍る事、天照皇太神、春日大明神、素盞烏尊、住吉玉津島御神、并聖德太子、弘法大師の御加護ならずやと悦びにたえざれば、正理にまよへるわらはべのため、猶くはしく書しらせまほしけれど、神の道はあらはに申さぬことなれば、筆をとめ侍りぬ、此あらましも、私の智にあらず、その道くの達人、殊には大方ならぬ歌仙より傳へしを、略書りやくのべ侍り、我ひが耳にて誤りがちにぞ侍らん、重代家の歌仙に近づきて、猶たづねあきらめたまふべきなり

右の條々夷歌の掟たるやうなるもをこがましく侍れど、心あらん人にとりあげ給へよごにはあ

らず、無智の童蒙のためにと書
のべ侍る故は、いにし寛文四年
十月望のさきの夜より、めづら
かなる星の出たりしを、聞傳へ
し帚星なり、いかなる世のさど
しならんと、都の外までもいひ
わたり侍り管見ながらさは覺え
侍らず、猶安國なるべきしるし
にこそといへる文をしるし、十
一月一日八宮御方へまうで侍り
けるに、みそなはし給ひ詞とい
ひ歌といひ、かくこそやうなる
姿をいつならひけるにやと、い
と興じたまひ、時にとりては、戯
言もすてがたき事にこそと、仰
下されしまことに此一筋、天津
神代より傳り侍れど、のぼれる
代には、まれくよめりと見え
侍るを、中頃佛心宗の名僧、我法
の旨、二三子に傳へんため、百

首、或は、いろはの文字を頭にす
ゑて數十首をつらね、源空、親鸞
も、かくのごとく念佛の正理を
よめり、又平時頼、百首をつらね
て男女の教訓とせり、其後天正
年中にすぎものども出来て、和
歌百首の古題に數人よみしよ
り、寛文の今に至る、其間に夷歌
にて世に鳴もの、道の記の歌、或
は諸職を題にし、又は百首よめ
るたぐひ、數十人に及べり、其歌
ども味ひ侍るに、秀句世話のみ
に力をいれ、興あらんとして、い
にしへより歌に嫌ひ來る事をも
わきまへず、猶實を失ふたぐひ、
數々見え侍り、古人の夷歌近き
代にも、法印玄旨、大納言光廣
卿、此さまかずくつらね給へ
れど、稀にも失なき事は、斷にも
及ばず侍り、其外高きにもあれ、

賤きにもあれ、和歌わきまへし
人の夷歌には、いさゝか見どが
むる科侍らず、しかれば、彼夷歌
を事とし、正理しらざるもの、
よめるを見て、未練の童蒙手本
とまねひ侍らば、忽神明の道を
失ひ侍らん事、不屑の身にさへ、
悲しびたへがたく侍れば、夷曲
のさまわかし見侍らばやと思ひ
たまふれど、代々のやむごとな
き御かたぐの尊詠に、凡俗の
名書まじへ侍らんもおふけな
く、又名字顯し侍らさらば、かれ
規模なしと思ひ侍らん、いかゞ
ご申上侍りければ、此旨 我心
ひとつ定めがたしこのたまひ、
内にまうのほり給ひ、やがてま
かで給ひ、望の趣 奏し奉りぬ
れば、夷曲のさまあるまじきに
あらず、夷歌なれば名乗の事も

おのが心にまかすべきこの 詔
ぞと仰下され侍り、かくかしこ
き 御うつくしみやつがれがめ
いぼくのみにあらず、夷歌好ま
ん者の、万代までの悦び、何事か
是にしかんや、されば明て五年
の冬、古今夷曲歌を撰びて 八
宮御方へたてまつり侍りしを備
覧覽させ給ひ、本即 大内に
納り侍りぬ、此一卷はその集の
序に書し制めのあらましなり、
夷歌よまんものは、今より後此
旨守るべきもの歟

高津汚道士 生白堂行風

狂言鶯蛙集

花になく鶯水にすむ蛙のこゑをき
 けばさいひしむかしを思ふに年は
 八もゝちあまり八十歳に越え御代
 は十といひつゝ六つきになん餘れ
 りけるしかるにこのごろ世中ゆす
 りてたはれごとをもてあそべるよ
 り鼠さるてふ猫飯をもるべき杓子
 にいたるまでいづれか歌をよまざ
 りけるすでにその言葉を見るに大
 あぐらたいらなりといへども八雲
 出雲の文字の數を出すうれしきを
 りふしにもかなしきついでにもや
 らずのがさすいひ出せるなるべし
 抑此たはれ歌はかしこくもいにし
 へ水無瀬和歌所に有心無心の座を
 わかちて柿本といひ栗のもとゝよ
 びけるよりぞひろまりけるされば
 船つゞふ大坂にしては貞柳木端か

たぐひその名世にきこえりことな
 まる江戸こしては未得卜養が徒か
 はるゝ此道に心をよせていひ出
 せる處のこと葉人の口にあること
 膾ごあぶりものゝごとし又近來大
 根大支といふものあり狂歌に地す
 いの好士にしておのがごちかたら
 ひつゝ手酌の銚子の口ずさびしよ
 り酒のみの家のとりもちごぞなれ
 りける嗚呼太支なくなりにたれご
 ますゝ此ことさかんにしていひ
 たきことをいひもてはやせばかの
 口からき曼倩もあきれつゝるぞわら
 はぬ褒似もはた笑ひつべしある日
 したしきかぎり朱樂館につごひて
 ひとゝゝれいのたはれ歌をよめり
 かたはらに古今和歌集なごどりち
 らしてありければやがてかの六歌
 仙の歌ざま評したること葉をもて
 題ごすそれよりして花になく蛙水

にすむ鶯といふ心をよめなごいひ
 もてさはげば馬場金埒といへるが
 すゝみ出て
 かげひたす花の錦も池のはた
 をられぬまゝに蛙啼くなり
 ごよめりければまた鹿都部眞顔れ
 いの口ごゝ
 啼ながら木傳ふ花はこゝにあり
 ご思へば水のそこにうぐひす
 なごいひつゝ酒いたうのみけるま
 まにこの馬場鹿都部の頭の文字に
 よりて古こん馬鹿しふと名つけば
 やなごいふを何がしら早うより物
 學びたりしせをうのきゝつけ給ひ
 て二十一代御集のはじめの古今集
 に擬してあらぬ題號かうぶらしむ
 ることごつみさりごころなくやごむ
 づかりければいたくおそりてやを
 らかの題號をけづりて狂言鶯蛙集
 とかいなをすにしばらく手たゝか

狂言鶯蛙集卷第一

ひて筆心にまかせてゆかずやうや
う六歌仙題詠を始に置いてそのほか
四季戀くさくのをもかきそへん
とてかういひのゝしるもかしがま
しけれごつひには耳のはた巻ごな
れりまたく歌は寶引繩えらべるご
にもあらずたい浮萍のあつまるに
まかせてなん天明四年甲辰十二月
廿日過尻より逐るゝばかりいそが
しき片手にかいあつめ終ればいに
しへを忍ぶ人定めて今をわらはざ
らめやもといまだ口へらす漢江等
があまりのことにたはるゝもいら
ざる事の

畫女動人情

山手白人

かくあらば筆の命毛かけてもご

心時めくはなのすがた繪

武士八十氏

見るにまづねたしや人の床の間に

かくる姿のうつしゑ顔は

便々館湖鯉鮒

つくり繪の繪具に膠の交るより

べたりこそばへ寄添て見ん

白川與布禰

おもざしの似るより心うつし繪は

そらごとながら墨を流しつ

出諏訪耳彦

色ごりをよくも繪絹のうす化粧

心うつして見ぬ人ぞなき

紺屋朝手

行水にかきもかいたる朝妻の

船に心にうごくうつし繪

屋はり棟梁

わきもこにいきうつし繪の立姿

抱きつくへの上にながめて

繪皮釘武

張置てひとりふすまのもろこし繪

李夫人ながらわか物にせん

大事三味

筆先て髪もかたちもつくり繪を

したふはあさき千枝常則

大石小石躬景

筆は今かくて心をうごかせば

口うつし繪に物も言へかし

轉起安

思ふことかなはねばこそ浮世繪に

かくも心をうつしそめけん

北川北川

かくばかり繪そらごとなる天人に

心うきたつ雲のいろざり

棹鹿卷筆

形のみあつて匂ひはあらずとも

筆や心をうごかすみいろ

坂上米人

西川の水の流れの身もうきて

浮世えならぬ顔はなづかし

谷水音

浅妻のふかき思ひをやまと繪に

うつし心もふでのいのち毛

茶屋町末廣

もえ杭に火のつきやすき焼筆の

跡まで心うつし繪すがた

松下風

姿繪の女のこゝろうつせども

筆はもとよりすんなしにして

加保茶元成

つれづれの身は浮草の浮きすぎて

とくにおもひの種を枕繪

眞悟坊

三度くふめしのさいとも思ふなり

あさゆふ肘を曲て枕繪

眞面面長

そらごゝ思へど美女の姿繪は

心うつせし筆の命毛

蚊大分夏倦

げにかみはかつらの如き役者繪に

情をうつせし月の丸顔

梓弓八中

氣のわるさ裾にちら／＼宮城野の

はぎもしろきを後の寫し繪

鹽屋辛人

かんばせも生寫し繪のわきも子や

わきてこゝろは仇にかけ物

平秩東作

簾よりまづ心こそうごきけれ

繪にかく宮の猫のひき綱

萎花有薫香 紀炭堅

風の手にとり残してや萎みたる

花のかすかに匂ふはる風

野老髭面

かくてさへ匂ひはのこる物かなど

花にもはなを寄せてこそきけ

待兼空音

折ごりて萎める花を坊主持

残るにはひに花の香ぞする

銀杏満門

萎みたる花をもをのが宿として

蝶は匂ひの有りたけぞすむ

赤土壽邊留

しばみたる後もさくらの匂ひ來て

人のはなにもかげは有けり

秋風女房

いつ迄も匂ひをこさばとばかりに

花はしばめとねには歸らず

身分唯飲

限りあれば萎まにやならの八重櫻

されども匂ふ花垣の店

望月満丸

残る香のなくは萎みしこのはなの

露のたまにも虻はとまらじ

京間内則

たゝみたるかみに匂ひはあり原と
みるや昔のなごりをし花

飲口波志留

心ざし花のかほごにつくせしは

しほみよし野の山の家土産

邊地間河也

萎みても匂ひをかくしをほせぬは

是や吉野のはなのさきぢる

福部枝炭

しほみたる色薄ばたにさしなから

匂ひをとめて置床の花

眞志良桃實

世の中にたえて櫻はしほむとも

のこる匂ひは今にあり原

東風良近道

今もつてをりく袖や匂ふらん

しほめる花の色はさめても

去万里太夫

いまにその匂ひはたかし山ざくら

萎みて花はよしきかずとも

愛多子子々
いつ迄も匂ひたかざり物がたり
しをりにいれし花は萎めど

赤松日出成

よしの山花の唇しほめても

藝古の袖や香に匂ふらん

石龜壽鈍人

一もじを先はごくひし口なれや

後まで花に香は残りけり

堂伴自主

咲しより日數ふる身の櫻花

さそふかたなに匂ひ残りて

賈人着鮮衣 無錢芳志

あき人の身は耕さずをらずして

けふよき衣も稀にきみが代

眞弓亢李

一腰もさすが都のあき人は

ものやわらかな衣も君が代

内匠はしら

算盤のたまさか通ふ色ごとに

勘定なしの伊達を盡して

河邊二國

算盤のたまくごとによき衣を

着れば外目にたつの市人

東菊磨

あき人のかたで風きる紋がらは

扇地紙のをりものにして

萬歳館十口

着かざりてあたらし世帯を崩しじま

ものあき人のうつり心に

大木戸黒牛

世を渡る是もあき人あぢきなく

花を着かざるうかれ女の袖

千代有員

さらばとて思ひたつ田の山紅葉

錦まごはんころもあき人

山蔭青則

あき人のよき衣着るも紅葉する

木々の錦ををりにこそきれ

白銀小波瀬

算用の外にきかざる羽二重は

あたへをまちて裏もはでなり

筵田脛長

よき衣とみしは口蝦夷みちのくを

金商人やゆききたるらん

獨寐つらき雪帶

着かざりてはかりの目立風俗に

自慢のすなも高きうり賣

手枕歌種

あや錦たちかさねては商人の

身にはよすぎの衣とぞみる

錦手小茶碗

金銀の上羽二重はそろばんの

塵はこりたる衣紋とぞしる

よるの殿守

算盤のたま／＼きれば八丈も

しまつとよそに見切る商人

鶺鴒仙高

商人のかざる衣服は身におはぬ

世渡りものゝ錦なるべし

相應内所

直を高くうれば蠶にくるまりて

おのが身幅も廣きあき人

秋月過曉雲

濱邊黒人

丸い月に襟立ころもきせんとて

ひらりとかゝる曉の雲

鍋垢磨

月は猶影さし櫛にあかつきの

みねより雲のびんつらぞうき

鳴瀧音人

曉の雲のかけはしあける夜は

わびしき月のかつらぎの神

簾内椿

曉の雲ゐる山のはにあてゝ

くふても見たきもち月の影

千筋黒髪

秋寒み月の夜ごろも着ふるして

曉ちかき雲のそらいろ

牛込遅道

月かげをおほふばかりの空色は

はや曉のくものそらいろ

梅堀露丸

夜もすがらあかずみちたる月影を

くもに包てしまふあかつき

帆南西太

月も今雲のころもをぬきすてよ

あかつきかけて扱も見苦し

花下長面

月影もはつか過たるかたはれを

何所にかくして曉のくも

左明

曉の空にも月はすみぞめの

雲の衣をきせんとやする

垢染衣紋

雲まよりもりくる月に蒲團きて

みのあかつきを厭ふ襟もと

遍亞方岳

山のはもあてずに雲のうはばみは

たゞあかつきの月を九のみ

朝霞榮婦

雲の帶きりゝとしめてきぬゝを

いそぐぞつらき月の桂男

清淨古藏

風の手にもすびてあそぶ曉の

雲のあなたに白つきの影

本所りんてう

月かげはもうやごさしてよく深く

たゝみこんだる雲の衣手

豆柿志部喜

更る夜の月に渡れどかさゝぎの

はしのかけたる雲の通ひ路

眞黒面

曉のかつら男のかへるさを

つけてとゝむる雲の通ひ路

病婦着化粧

夕霧籬

白粉のどけてまくらにふしかねつ

日頃こゝちの例ならずして

左候某

良薬のきゝめ見えぬはうつくしき

けはひ化粧の物のけぞかし

一帖程村

戀やみのべに白粉もよはゝと

おはぐろ筆の瘦がたちなる

婆阿證人

ものうしと人の笑はゝわらはやみ

まつ隔日の化粧けはひを

山中多都岐

向ふより病はなほり十寸鏡

紅白粧をつくゝと見て

月代青

白粉の色にや花をさかせみん

柳の髪のみだれごゝろに

和卦芳人

おもひつゝぬるか病の化粧水

結びし髪も素顔とは見す

芋堀仲間佐

ぬるや今人目のせきもこんゝと

なやむ女の顔のおしろい

紀伊國屋鋪

戀故になやむ女のこゝろ根は

いとおしろいの色に見えけり

夢吉鷹

手弱女の顔のけはひも櫻いろ

花にいとひし風をひき眉

無事館四交

楊貴妃が牡丹のはなの化粧より

風になやめるやなぎ腰かな

節松嫁々

朝寐髪みだり心に面やせて

床へべたりとつきし白粉

切口正目

白粉の顔も冬瓜の寐てばかり

二百十日の風のこゝろに

富士澄酒

十寸鏡向ふかげさへうす化粧

氣のかたべにの色にやつれて

待兼空音

こひゆるに煩ふ娘つねよりも

粧ひたてゝ猶あはれなり

鴨羽盛

白粉のときどりしたるわらは病

ぞつとするほど顔は美し

智恵内子

粧ひもあまりつくるを病ひとは

よし典藥のかみもしらじな

蛙面坊

岩田帶むすぶ小ばらは高けれど

いとをしういの顔もやせ人

田夫息花陰 尻焼猿人

山賤のおなかもはるの木下や

花の吹雪に腰はひえめし

山住猿雄

山賤がやすらふ春の夕めしに

まじるは花のちりがてにして

蘿保曾通

花もあかず薪もこらず木の下に

大事の斧の柄やくたつらん

はなもとの浅香

薪こるをのがかせぎに山賤の

命もつなぐはなのしたかげ

久留間長持

木の下をたつもたれず山賤は

花にをのれが腰をれの歌

田町ぬかる

はるく越るは薪おいの阪

やすらふは目とはなの下かげ

曾禮波叔興

辨當をつかへば花のしたかげに

はらも木の芽もはるの柚人

常山阿馬

山がつはまづ一ぱいのひさご酒

やすまば花のえに掛て見ん

強飯山盛

ゑいやつとせをふ薪にやすらへど

花のもとではかるき山賤

田原小槌秀民

山人も柴をまくらにかりかけて

晝簾はながき花の下かげ

唐衣橘洲

山水でうるほす花の下かげは

樵夫もはるにのらかはくらし

朱樂菅江

咲花の一樹のかげに山かづの

休むも斧のくされえなれや

狂言鶯蛙集卷第二

春歌上

春たちける日よめる

十二栗圖

たてこめし霞はやまの腰障子

あけて笑へる春は來にけり

四方赤良

元日のあさ上下のふるのしめ

さつと世間をはるは來にけり

元木網

又ひとつとしはよれども玉手箱

あけて嬉しき今朝の春かな

朱樂漢江

霞さへ春さへけさはたつものを

餅はすはりの尻のおもたさ

夕霧籬

若水をむすびあげたる手のうちに

ぬるみそめてや春の車井

檜皮釘武

岩戸あけし神代もかくや猿田彦

こだかきはなの春は來にけり

茶屋町末廣

目出たさは身幅も廣くたちそめて

霞む禮者のはるのころも手

蘿保曾通

けさ御禮申いれたるかごくちに

かざりの藁の袴かちぐり

身分唯飲

天の戸を明るかたよりとし玉の

青海苔もつて春は來にけり

曾禮波羽興

借錢のふちの水もけさははや

とけてすませし千金の春

遅蒔千種

春さぬとつくるに耳は遠けれど

また無事で聞く鶯の聲

赤土壽邊留

たからをも身をもをさめて巾着の

緒べのたまの春は來にけり

振出其次

あきは又けさ來る春のひづみても

つり合のよき年徳のたな

葛飾蟹子丸

蓬萊の龜戸よりまづ來るはるを

しるはだい／＼こころ柄かも

桐本鳳鳥

鳳凰も出べき御代にあふぎとて

けさしも玉の春はきり箱

大石小石躬景

春來れはふんど匂ひもさき拂ひ

跡の奴のやりうめの花

至極樂也

ひとかさね霞の衣たまはりて

格別めだつ春は來にけり

千筋黒髮

佐保姫の衣は春のくる日より

そらに霞のいそぐたちぬひ

手柄岡持

驚も梅もかすみもつゞけて

まつ立けりなあら玉の春

鳴瀧音人

齒固のもちゐはこゝにうまし國

年のあしたのはらも春の日

唐來參和

引かへて今朝しも春やたつか弓

あたりせわしき年の矢聲に

宿屋飯盛

懸乞の夜には重きかは財布

かつぎし肩も春は來にけり

便々館湖鯉鮒

さら〜と春の立にも明るにも

軋まぬ御代や今朝の天の戸

吹売咽人

天の戸を明れば光るたま手箱

津々うら嶋が太郎月かな

唐衣橘洲

山姫の山土産めきて袂から

出すは千代の初日なりけり

辰の年の春をむかへて

大門側成

天の戸を明ましてよいとばかりに

霞もたつのだし玉のはる

おなじこゝろを 無錢芳志

はるもけさ甲辰松八郎兵衛

世の操もけふぞはじまる

年玉倉相 萬歳館十口

箱のふた明ましてよい春にけさ

あらたまげたるやす扇かな

青樓初春 赤松日出成

五丁町氣をはるの日の初見世に

開きそめたる梅がかど〜

臥龍梅の實生の梅春立る日一

花開きければ 栗 圃

四輪車のあどはわすれず臥龍梅

今朝一輪は花のさきがけ

春風春水一時來 問屋酒船

風と水と一時に來るはるぞとは

谷の氷の土卦にぞしる

正月二日月の出けるを見て

むせん

いらぬうちいざ梅見んと夕まぐれ

二日の月の弓にひかれて

正月三日御かゝり火を見てよ

める おなじく

篝火に源氏のまきをつみかさね

御規式の夜の光る君かな

睦月の初め子の日はあすまで

の今夜五明樓に人々集ひてれ

いの狂歌よみけるに子にやあ

らんど思ひし頃亥日小松とい

ふことをよめといひければ

漢江

亥日からこゝにねよどの刻限を

きくは小松を引四ツのころ

鼠百首の中子日 こりふ

おのが名の子日の野邊の小松とて

けふはちとせの種物やひく

霞 海老船守

佐保姫のお入と見えて紫の

かすみの幕をはるのやまゝ

ひけつら

朝夕と二度まで四方に立なれば

まことに數も八重霞かな

山霞

足曳山町

春たてば霞のころもうらゝと

かゝるや富士の裾に白無垢

大海霞

濱邊黒人

大海を埋んと羽うつとほがすみ

ちりや千鳥のちりを撰ばず

吳竹節躬

まんゝと手でふせがれぬ大海に

もろこしまでも立霞かな

智恵内子

八重霞あをうな原のなるにこそ

見えねど船はくだる成べし

白川與布禰

海原をけふはあさぎにはる霞

釣する鰯も針しごととして

元船霞

きつしう

春日さすらゝ船の碇づな

ゑいやゝとひく霞かな

霞似下帶

をかもち

たちわけよ一布二布とみよし野の

いもせの山の腰の霞を

鶯

山手白人

鶯のなみだのあめのはれやらで

月日はしとぞ今朝は鳴ぬる

もくあみ

夜も明のはるになりてはさゝ鳴に

ひとふし告よ鰯のうぐひす

夜更朝寐

はる來ても月星日かず多ければ

をのが長閑けき鶯の聲

加倍仲塗

あさなゝそばにつけ籠の鶯は

音さへたかきに移るごぞ聞

燒酎何献栗盛

鶯のひとくと春をつぐれども

うち出て見れば本傳にこそ

臥猪菊藻

谷風のかたやはかすみ立合を

なのりあげたる鶯の聲

甲子日閏の中へ鶯とび入れ

ば

大事三昧

うぐひすの羽風もふくの神なれば

をりよく飛てきのへねごころ

鶯告春

みかけ

どこやみの夜もあけがたの鶯は

春をしらせの谷の戸がくし

葛飾にて

鶯のをのか菜ばたけひろゝと

目籠にあまる梅のかつしか

菜畑鶯

ちたね

菜畑に月日はしたるからかさの

油むしをも拾ふうぐひす

若菜

しろひと

雪間よりつみてその音も高ければ

鶯菜ごもひとやいふらん

黒部赤杉

誰つみてそのねもたかき初若菜

鶯の餌にいちほかひとり

門限面倒

誰つめる春の若菜ぞしめし野に

いたくも雪はふり袖の尻

しらみ百首のうちに

もくあみ

わか菜つむ雪にしらみの布子着て

みかきか原をかきさがすなり

あから

まな板の木口にはれる青紙の

色もわかなに及ぶものかは

七種の音いとおかしく聞えけ

れげ

むせん

打音の下手はおぼつか七くさの

妻もわらへり我も笑へり

をなじこゝろを 手枕歌種

寐忘れてあはでしめをも摺こ木の

拍子まぬけにたゝく七くさ

河原鬼守

かゝかゝと鳥が鳴けばとく起て

はやすなづなの音はとゝとん

我庵近く住家もとめし夫婦む

つまじくて有けるが今日なん

とく起て七種祝ひはやすをき

き侍りて 石のはらわた

からすより先七くさのかゝかゝと

起して打ばとゝやとゝとん

七種粥

管かけもまだきによねを計りつゝ

めでたくかしく七くさの粥

粥杖

むせん

粥づえに追れてかほは緋のはかま

さしぬき足やねらひ寄るらん

残雪

庭田脛長

どこまでも春の日足はふみ込めど

垣根がくれに雪ぞ残れる

やはり棟梁

雪とゝもに残りしこぞの借錢も

まだきえやらぬ懸乞の帳

平 段

元山はいたゝき寒きはるのゆき

はつかばかりにけ残てこそ

淡雪

こりふ

鬼の出し噂もかくやあわゆきの

ふれるばかりに跡かたもなし

餘寒

ひげつら

あづさ弓春の日和もわすらねば

さえかへりたる雪の内竹

もくあみ

草枕なにはのあしをふみ出せば

みじかき夜着に餘る寒けさ

梅

飯もり

佐保姫のちぶさに口をひらきつゝ

南枝の梅の庭にはらばふ

武士八十氏

香鋪にかすみをなして梅の花

さても匂ふやはるの日加減

脛 長

春の日のながめに花の枝さして

つぼめばひらく梅の傘

婆阿少人

ふりむきし南の枝のいち二輪

笑顔のうめの可愛らしさよ

きつしう

朝比奈が草すりならで梅が香を

やさしと留た袖の春かせ

賀交

春雨を凌ぐばかりにさすえだは

松のまつかさうめの花がさ

馬塙金罍

たち出てみれども梅の匂はぬは

鼻に障子のあればなるらん

廁梅

紺屋朝手

風さそふ梅のかはやの窓の内に

今をはるべに匂ふこの花

雪中梅

山陰青則

木の下に雪に奴のあとつけて

おもしろ妙にふれる鎗梅

四方赤良ぬし梅見に罷りたま

ふと聞て

よふね

車の輪四方に匂ひのたかければ

其名もうめの臥龍先生

柳

なかぬり

風吹ば枝もきれいにすきあげて

いひぶんのなき青柳の髪

嫁々

はなだにはあらぬさなだも春風に

なびく柳の腰おびのふさ

阿馬

青柳のいどをくれてやはる風に

縫ふてふはりもつよき袖風

引窓柳

梓弓八中

枝たれし柳のいどをよりて見よ

てうごこなたの引窓の紐

をなじこゝろを

銀杏みつかと

さればこそ竈のうへにうち煙る

柳のいどをししたへ引まご

陌頭楊柳 こまき牛歩

陌頭の柳のかみのむすべるを

けさやとくらん櫛のはる風

水邊柳

もくあみ

雪どけの水にまかるゝ糸やなぎ

かけてはかはのはたやへる蘭

柳隨風

飲口波志留

青柳のもつれしいとも氣を長く

春かせの手にけふや解くらん

春日柳原といふ所にて

酒盛入道上関

あを柳のいとも心も長き日に

ふらりくゝと行つもごりつ

狂言鶯蛙集卷第三

春歌下

今年閏正月朔日やつがれが家に人々集ひければ再ひ春立ちこちしてをの其こゝろばへを詠りければ詠る

武士八十氏

正月のふたつあるてふ春なればいよゝゝ君が代は閏ごし

濱邊黒人

花の春彌生くはゐるそれよりも

あかね陸月の又も來にけり

相應内所

のごかさはわきて今月あど月と

はるは來にけり春は來にけり

朝霞榮婦

ふたひろにあまる今年の懸想文

陸月も長く返すがきして

けふなん武士八十氏の家にて再ひ春の來れる心を人々の詠ければ序でに 朱樂漢江

武士の八十氏川にいざよへる

はるや田原の又太郎月
ことしむ月の閏なるを愛しつ
つ武士八十氏の家にて閏月歳
旦の心を人々によませたまひ
けるを左候某ときこえし人弔
にたうべけるを見るにげにや
あたらしき春の又いたれるこ
ちしてともにそのこゝろを
よめる 無事館四交

元日はついたちながら又春のことばの花の閏正月

又このかきごめしを見るに先陣はげにも田原の又太郎殿と
のぞを鳴して をなじく
上手かやち栗をよく喰積て
見よほだはらの又太郎月

年禮延引 山住猿男

年禮もそちちとしては雨雪にのびるを春の日のならひ哉
軒端に鳶風の掛りけるを見て

さゝがにの糸くる軒へ鳶風は 紺屋朝手

思ひがけなき風の振まひ

二月雪 空寐待兼

香をとめしきのふの梅の花笠も

けふは雪見にきさらぎの空

二月二日雪のふりければ

便々館湖鯉鮒

十露盤につもりて見れば春も今日

てうごつき日は二二がしら雪

若草 八十氏

春駒のはやくひつくすわか草を

もえしざりたる牧野とや見ん

唐衣橋洲

生酔はねよげに見ゆる若草に

夢を結ばんことをしぞ思ふ

海老船守

手を盡す野邊の緑りのきりたてを

まはしとせざる角力取草

鳴瀧音人

敷島の道のはたにも生るゆへ

こやか草と人のいふらん

春の野に草つむとてしごゝい

へる虫にさゝれぬれば

轉起安

春の日ののびるの玉も取えねば

しごにうらみははれぬ摘草

窓前若草

遅蒔千種

簀醫者のしたち窓よりながむれば

また春あさき庭のもゝ草

土筆如筆

左候某

下もゆる春の野もせのやき筆は

繪師も心をつくゝしかな

春野捨火繩

出諏訪耳彦

春もはやながき火繩を捨てしより

野邊はけぶりてもゆる若草

常産阿馬

とり捨てし野べに日かげもたけ火繩

もえてみじかき春の若草

ちゝのみの満門

けぶりだに一筋道のすて火繩

いさゝか春の野をやきて見ん

野遊

山手白人

鼓ぐさ三味せん草もひかれ來る

此野遊びは春の氣ばやし

西行櫻

節松嫁々

名に高き其ささらぎのもちずきは

しぬまではなの下を忘れず

知恵内子

ささらぎの其望月の西行を

さとう兵衛といふもここわり

蕨

をぞんと

佐保姫もしびれやきれて足引の

山のひたいにむらさきの雲

夕霧色

春風もまた寒しとや早蕨の

手をさしいるゝ山のふところ

それがし

千金のその春の夜も早蕨の

にぎりつめしはしはんぼう哉

白魚篝火

をなじく

漕舟もつくだの嶋のなみの花

しらゝ魚ぞよるの篝火

萬歳館十口

篝火もうつろふ水のそこゝに

さすや四ツ手の浪のしら魚

桂川若鮎

檜皮釘武

わか鮎は二日の月のかつら川

ちらりとかげを見ればかり也

春月

しろひと

春の夜の月の中なるしらげ米

糠たつ時やをぼる成らん

京間内則

花ちらす鳥をぞしかも咲く梅の

木の間に弓をはるの三日月

春夜酒宴

耳彦

春雨を寐て聞もよいかん徳利

ふりてをこそせぬ宿ぞさびしき

ちたね

千金のねは高くともはるの夜の

花のこのまに酒やかはまし

嫁々

買ばやな月はおぼろに春の夜の

花もさかやのかよひたづねて

春雨

竹杖爲輕

千金の花のうは端と見ゆるかな

小粒となりてふれる春さめ

みつかど

はれるまもあらかきの弓の藤ばなし

おさえて弦をはるさめの空

櫻

きつしう

麓まで雲のあしじろかけてけり

たかねへ花の咲のぼる頃

出來秋萬作

花の雲それをはれ着と咲そめて

ゑもん櫻やささらぎの空

遍亞方岳

春の日はさても長柄の鍵じるし

さきつゝきたる花の行列

白銀小波世

花のころ霞もそれとみよし野の

やま一ぱいに幕をはる風

婆阿證人

ねがはくは四ツの時々さくら花

つねにかざして老やかくさん

八十氏

墨染といふ名もあれば櫻ばな

どにかくちりの世はいとふなり

朝櫻

まがき

春の夜のねぶけもさめて朝はとく

おひになれこし花の下ふし

吉原櫻

松千とせ

きのふ今日うつし植たる山櫻

はや里なれし花の顔ばせ

久留間長持

見渡せば花とはなどの仲の町

なまめく袖にかよふ神風

大事三昧

咲花の仇ないろかにならひても

外のうはきは仲の町かな

あづまのひえにて紅梅にさく

らの咲まじりたるを見て

所詮法師

もえぎ地に梅やさくらを折ませて

上野ぞ花のにしきなりける

上野花

四方赤良

一面のはなは碁盤のうへの山

黒門まへにかゝるしら雲

無錢芳志

しのばすは花のかみの天下一

くもらぬかげや池の水かね

酒上事也

鳥が啼くあつまのひえのさくら花

ひと重のうへの八重も又見ん

蘿保曾通

幕の内は雲の上野のおく女中

雪にまがひの花のふり袖

大石小石躬景

あをむきて上野の櫻見る顔は

はなの下谷も長き日のあし

赤松日出成

吉野にもまさる詠めは山王の

花の上野の江戸ざくら哉

山王櫻 おきやす

山王の花も祇園の香煎は

素湯にさくらをうつしてし哉

上野山の花見にゆきけるに幕

のうちに女のすきかげあまた

見えければ まちかね

うつくしきお山櫻や見てゆかん

まくのそともを花道にして

彼岸櫻 あから

山寺の彼岸まゐりにくる珠数は

しだれざくらの花の長ぶさ

姥櫻 ちこそ

春さめに老をわすれし姥櫻

この下水をすがたみにして

飛鳥山櫻 千筋黒髪

吸筒もきのふとあけて飛鳥山

花も酔てか風にちら／＼

大木花多少 野老髭面

日を追ふて山も暖氣になりて候

ます／＼御安たい木の花

芦垣間近

立よりし花もたしやうの縁あれば

かをだにどめよ大木の風

花下客來 なかもち

立あとへ又來る客もひともの

さくらによれる花のゑんさき

花下客留 八十氏

花ゆゑにけふこのもどのお客なら

かへり風をば吹せずもがな

彌生のはじめ始めて山ふみし

侍りて 方岳

よし野山ものをゆふべの花ならば

わけし昔のあともとはや

花の枝に鞠の掛しを見て

朝手

花の枝にかゝる麁相のそれ鞠は

ちらすうらみの葛袴かな

鄙人見花 白川與布禰

せなおみやれなんちう山か白雲の

只あさくらはえら咲たげに

花盜人 三味

すりよつて見る目にあまる白浪は

花にその名をたつた一枝

座頭花見 嫁々

木の下に杖をつく／＼座頭の坊

花にながめはあかぬぞ見る

病人花見 牛込遅道

病人のあしもそろ／＼たつて見る

屏風に花の風やいどへる

庭の花の風に散かふを見て

かんこう

ちらうかど見る人案じわづらへば

花にも風は百病のちやう

一日十百首歌よみける中に手

折花

鹿都部眞顔

墨染にあらぬ梢のはなをなど

手毎にをりて坊主にはする

一日十百首歌よみける中に夢

花見

馬場金埒

思ひつゝぬればや夢にみよし野の

花はにしきの夜着であつたか

朱樂館に人々つとひて花見け

るを日くれて行けるにはやま

らうど歸れるよしきゝて

茶屋町末廣

今少しはやくは花もあるべきに

老のあゆみのをを櫻かな

上巳

をさんと

装束も十二ひとへに八重の桃

かさねゝの雛のよそほひ

雛

なかもち

はつ雛もたつや彌生の二日三日

のみつゝけては足もふらそこ

夜雛

盃長丸

大内と思ひぞ夜のひな棚を

あるく鼠や鶴にたどへん

下戸曲水 あこきのひく綱

下戸ならばあちらこちらへ盃を

やり水草や餅につきぬる

歸雁

加保茶元成

うす墨にかく證文と見ゆる哉

霞める空にかへる雁金

大屋裏住

羽衣の裳にとちてゆくかりを

たぐりもどせよ青柳のいと

ひけつら

白浪のはやたちかへる雁金は

とむれどいそぐあしのうら哉

雲雀

八十氏

春風のはどひやうしよく吹立て

舞ふやひばりの雲にいりあや

まかき

さは姫の染し霞のころもでに

ひばりは縫と見えつかくれつ

燕

多下手同前

つばくらは何大望のあるやらん

やたらにくいる橋のまたぐら

もくあみ

苗代の土をはこびてつばくらの

すにも子だねをおろしてぞ行

足元雉子

耳彦

春がすみたつ足もごにありかをば

をのがしらせて雉子なくなり

春駒

こりふ

三味線のけいこをかしき春駒は

かけ出すやら先へ飛やら

遊女象かた

さもあらばあれたつ野邊の春駒は

柳の髪やよりてつながん

苗代

婆阿證人

作徳をねてゐてしめの苗代は

水も人手にまかしてぞ見る

はぎなか

小山田にまくもぼさつの種なれば

今より秋のみのりをぞしる

蛙合戦

耳彦

かけ引も苗代時の聲あげて

水ぎは立し蛙がつせん

すみれ

婆阿

むらさきのゆかりありてや此春の

江戸にすみれの花や咲らん

かきつばた

みゝひこ

筆をぐ水にうつりて紫の

繪具をします杜若かな

浪花のこぼれくちどいふどこ

ろ松や何がしが池の杜若を見

てよめる

はぎなか

みてしより思ひの種やこぼれくち

心へだてぬかきつばたかな

ある遊君のもとにてやまぶき

を詠る

名萬壽盛方

床花に咲せし色のやまぶきは

たばこばんからいで玉川

木あみ

ひと時のあたへ千金春風の

吹たて見するやま吹の色

八十氏

つかはれぬ小金の色の山吹は

みすくことをかきほにぞ咲

をこんど

目にかゝる小金のいろの山吹を

折らんとばかり花のりんだめ

婆阿證人

山吹の花は咲けども實はならず

實はならぬども花は咲けり

藤花

しろひと

ふらくともとより長き春の日を

咲のばしたる花の藤なみ

をこんど

咲かゝる藤はゆかりの名にたれて

またちらほらと花もむらさき

春日詣江嶋

三味

江の嶋の道者は桃のはなをすれ

いたくいそぐも上巳の日哉

彌生のはじめよりかごのうち

に小飼のほとゝぎすをきゝて

をきやす

ほとゝぎすひなの頃より飼たてゝ

彌生のてへんかけて鳴らん

春初鯉

十口

かくべつに直段もはるの初鯉

けさめづらしく聞どしかな

暮春初鯉

ちたね

代金は一兩日のちがひにて

直段もはるの初鯉かな

春の歌とて

あから

酒のみつ花をながめついたづらに

すぐる月日は一日もなし

三月盡

手柄岡持

いやよひも卅日の夜食済ぬれば

みそのかもなし花のかもなし

つむりのひかる

花散てしまひし吉野のかはつら

かたげて春のいとまごひ哉

みかけ

けふのみと春もつきしま山の端に

入日をまねきかへしてや見ん

三月晦日灸すゆる人のもとに

て 漢江

春もけふねきりはきりの灸上戸

をしめごいつかひとひとぞ成

狂言鶯蛙集巻第四

夏歌

更衣

蓮田脛長

古びたる霞の衣ぬぎすてゝ

けふより夏ときかへぬる哉

便々館湖鯉鮒

衣がへこれも春屋の米なれや

俵をどけばみうすとぞなる

數寄原呑吉

夏ぞとてまた袷にはならねども

鯉のはらのわたはとらばや

馬士更衣

茶屋町末廣

花色の布子にけさはひきかへて

馬士も袷をきその山道

遠村新樹

手杵兼勝

いく村のさらしの布を夏たちて

仕立もしげるならの幅廣

鎌倉舟守

遠目には梅かさくらか青柳か

ねからわか葉に茂る一むら

卯花

四方赤良

春夏のちかしき中は猶さらに

垣をせよとやさける卯の花

京間内則

卯の花は黒き上着の袖なれや

綻びしより白く目だちて

時鳥

石部かねよし

卯の花のちりぬる先に一聲を

待ばいろはにほとゝぎす哉

眞乳山人

時鳥なきつる方をながむれば

只あり明の月ものこらす

無錢芳志

時鳥待つ夜の友の火入には

只あり明の炭團残して

はぎなか

をきてゐるうちはとびこぬ時鳥

忍びねながら聞もめづらし

千代有員

九合目へてつぺんかけて登りしは

三國一のやまほとゝぎす

平左段

ほとゝぎす金づくならば何雨も

耳を揃へて今日やきかまし

唐衣橘洲

どちらとも日和さだめよ時鳥

雨と月との中空のころ

夕霧まがき

ほとゝぎすちとは翅を休めよと

いへどかぶりをふり出てなく

待時鳥

山手白人

辛子酢のそれ程にこそあらずとも

初音きかせよ山ほとゝぎす

馬士聞時鳥

武士八十氏

聞はれて我も馬からすでのこと

をちかへりなく山時鳥

山家時鳥

十二栗圖

名乗れ今賤がねぎめの所から

夏もきそちの山時鳥

橋上時鳥

唐來參和

そのながさ此ほとゝぎす兩國の

はしからはしを鳴渡るころ

三十日時鳥

うちのり

借金のおほとゝぎすいづかたに

三十日の雲を鳴て行くらん

關時鳥

朝霞榮婦

關の戸を追にはぞんかけごさへ

鳴や箱根のやまほとゝぎす

初鰹くひける日時鳥をきゝて

富士澄酒

をりもをり初時鳥はつがつを

味噌にからしのきくは珍らし

初かつを

白川與布禰

むかしたれ鉛刀魚とは名づけゝん

今朝百貫の折紙もがな

橘薰枕

鍋垢丸

たち花の花こそ見えね敷妙の

まくらやみにも香やは隠るゝ

千里亭白駒

かきつけし花橘の時まくら

かをれるかたへね返りをして

芥子

しろひと

うつくしき花の姿もときまに

風の刺たるけし坊主かな

紫陽花

檜皮釘武

來てはなめくたる花の蛇

あかねや何の紫陽花のはな

本所茄子早

こりふ

本處とて土地も夜鷹の畠中

さてこそはやいはな落の茄子

早苗

青口齋燕河

此ごろは芋畑をも打すてゝ

田子や早苗を取て居るなり

關杉村

小山田はしげる新樹のかげ迄も

さるや鮑の貝の玉苗

苟たるあやめうる商人よび入

れけるにあたへいたう高かり

ければ

八十氏

やすしとは人もみぬまの菖蒲草

すこしその直を引て賣かし

雨山菖蒲

こりふ

からかさを御無心申五月雨は

てうごあやめもかりてさす頃

小梅既熟

ちすし

五月雨のふりわけ髪の小梅だに

はや色つけばかたすぎもせず

朱樂漢江

黄金の色と見る迄熟したる

梅はもとより小粒なりけり

五月雨

唐衣橋洲

三ツ五ツ星のやごりは見ゆれども

五月の雨のあしはとまらず

五月雨晴

石龜壽鈍人

さみだれのふり通したる上なれば

空もかびてや星の出るらん

一丈帶武

五月雨はふるほごふりて双六の

むし／＼あつく雲はるゝなり

五月雨ふりつゝ頃したしき

友とひ來りて酒のみけるに軒

の板まより雨もりければ

自分齋子璉

五月雨のふる家なれば酒もりの

もるをおさへてさし板にせん

水鶏

加茂鞭陰

さりては氣の短夜の水鶏にて

ふすまをたゝき明るしのゝめ

うちのり

又きゝに來まし田畑を打こえて

水鶏にたゝく夜半の柴の戸

隣家水鶏

松下風

うまそような隣の夜食ねてきけば

何をくひなの口はしの音

寢覺水鶏

野老髭面

夏の夜のぬるまもなくて覺ぬるは

のみやくひなの驚かしけん

照射

八十氏

矢を追ふて逃る鹿より射し人の

むねにや草はわけんとすらん

鶺鴒川

こりふ

鶺鴒つかひのわざは手鞠にあらね共

いともさかしくかゝり散せる

筍

大石小石射景

筍は生れながらの皮具足

やぶにも功のものゝふのたね

下女盜筍

衆拙庵白壁

人の目もぬく音たかき竹の子を

それとは誰かしるのみにせん

蚊遣火

間屋酒船

抜け路地の裏めづらしく吹返す

風の蚊やりのかなくすの葉

はきなか

そらだきにあらぬ者から杉の葉の

くゆるけぶりに蚊は立にけり

下女逐蚊

みつかど

蚊やり火のあふぐ扇の骨さへも

てうご揃はぬおはしたのへや

蚊帳破多

ひげつら

ぬふとても所詮つゝかぬ破れがや

きのみじか夜やおきて明さん

蚊屋中螢

加保茶元成

帳のうちにあそぶ螢はせめて蚊を

やくにもたゝぬ燈火のかげ

夏の歌とてよめる

をなじく

うかされて只うちくゝと寐附ぬは

茶をのみと蚊にこまる夏の夜

蚤

うちのり

雨後に見し富士にも似たる蚤の跡

鹿子まだらにはれ上りたり

螢

婆阿

夏虫の身より出たるひもしらで

書物は棚へをこたりの窓

膝元佐久留

川上へなほもえあがる螢こそ

腐草けしても水にきえぬか

みそこしのうちに螢を入たる

秋風女房

草のはむしやの螢合戦

を見て

宇治なうて素性いやしき味噌漉に

玉の光の螢をぞみる

をなじこゝろを きの高根

手づかみに取て其まゝみそこしに

いれし螢もやはりむしなり

をなじ心を

うちのり

學ぶにはたらぬ光りの螢ぞこ

儒者も覗てみそこしの中

月前螢

八十氏

てる月に光りかはせる螢こそ

鳴虫よりも取にくきかな

青樓螢

河原鬼守

揚屋入ゑりもご光る大盡と

肩をならべてごぶ螢かな

みちのく雪もり

河竹の流にかけをみす紙や

つゝむ螢はやみもよしはら

螢合戦

小袖行丈

朝露をなが根城とやたのむらん

蟬

こりふ

立もせで梢にときをうつ蟬は

しびるゝやうに聲ぞ時雨るゝ

みゝひこ

やゝしげる木のうら店の住るとて

其ひぐらしの聲ぞ淋しき

蛭蟬

秋風ねうはう

木隠れに棲とは見れごみんとだに

なく口なしのやまの蛭せみ

夏草

うちのり

鎌すてゝ寐て居るとこは童の

罪もむくひもなつ草の中

ひげつら

名にも似ずやさしき露を含めるは

鬼百合のめの泪なるらん

加倍仲ぬり

秣には今もすそのの夏草や

鎌くらごのゝ御狩場の跡

古戦場夏草

望月満丸

さればこそ茂れる草の葉武者まで
ならひし露や星兜着て

或人の家にて夏草の心よく咲
る鉢植になして見せけるをり
から蚊のうるさくすだくを

かくばかり手の行さうく夏菊は
いかに花のかこそ多けれ

水無月の萩咲初ける庭にてよ
める

早咲の光陰の矢をはぎのはな
秋を三ッ羽の垣のもご密

蓮 大木戸黒牛
むくおきの顔も可愛ら周茂叔

みどれる蓮の花の前髪
きつしう

佛でもまた君子でも蓮花
いざ船さしていけごりにせん

忍岡より不忍池のはちすを見
て

勘定外成

から人の眞似を忍ぶが岡に來て
うたふもしやらく採蓮の曲

蓮葉含露 山陰青則
蓮葉に誰がおきすてゝ小玉銀

その露はごも慾心はなし
圓聞雷 鈍奈法師

かけこみてまくりもあへぬ直垂に
雨のかわやのはらはなる神

市中夕立 もごなり
さわぎつゝあきれてたつの市人は

うるまもなつの夕立の空
船夕立 あから

船の帆のはらめる風に夕立の
雲のはやめやふり出しけん

關夕立 をとんど
雷にさけぬる蚊やのもじが關

せきにせわしき夕立の音
泉 うちのり

どくくゝとすくふてのみし泉川
三日のはらまでしみ渡る也

氷室 かんこう

水無月の日にはしつけて松が崎
かたき岩根に冬のかたまり

納涼 きつしう
涼しさはあたらし疊あを靡

妻子の留守にひごりみか月
夕納涼 さん和

夏もはやたけの葉そよぐ門口に
みな立出てすいめいろ時

山家納涼 旅人
山住はこれがましばををり敷て

谷そこゝの夕すゝみかな
男女納涼 八十氏

涼しやと男女もろとも夕暮は
蚊のさし合もちとゆるせかし

乞食納涼 みかけ
氣のはらぬ乞食は橋の下すゝみ

川風までも貰ひ物なり
家根船納涼 宿屋飯盛

橋のそりは弓をひくやとみつ股に

ひようご射て来る家根船の風

しろひと

千早振神田川より漕きいでゝ

すいむは天津兒家根船かな

隅田川納涼 節松嫁々

涼しさはすいのとくりのすみだ川

まだきに秋の音をきゝ酒

水無月のころ舟道遙すこて

あをのり

水無月の船にや棹をさしもぐさ

このかはぎりのあつき忘れて

澁團扇 和良布

柿ならばえり出しても捨べきを

手のはなされぬ泣うちはかな

うちは賣 眞間川成

いつともうちは留守なる團扇賣

外のたつきに骨やをるらん

暑中水賣 内匠はしら

夏の日にしばらく息をするが臺

ふじの高ねの砂糖水うり

水無月の空に荷ひの冷水は

嫁々

うりてや汗をくみ流すらん

垢丸

夏の日ば汗になるみのゆかた染

さてはくみ込水賣の桶

酔後飲水 足曳山町

酔醒にひやりと飲し氷みづ

夏の夜ながらあたへ千金

大暑難凌 ひけつら

はだぬぎて見れどあつきは強弓の

いられざりけり寐ても起ても

質屋の虫干に見て

太刀かたなさすがしちやの虫干は

げにものゝふもうけつ流しつ

裏店に虫干するを見て

余旦坊

とりわけてむしあつき日に虫干の

小袖のかびも通るうら店

垣夕顔 釘武

垣にはふその夕がほのはなれ家は

五疊ばかりの住居とぞしる

朝夕顔 嫁々

元結をよりてこそ見め朝まだき

ねくたれ髪や夕顔の花

水無月鶯 北川北川

鶯も老にけらしな梅ぼしの

鹽から聲もみな月の空

瞿麥 遍亞方岳

白露のおきく膳にむかひても

くへぬ朝寐の床夏の花

荒和秋 石龜壽鈍人

水無月の板鍔のありたけに

ふるふちの輪や抜つくやりつ

はきなか

板するぬさにきるべき麻の葉は

まづ蜘蛛の糸を拂へこそ思ふ

しろひと

時は今夏とあきとの中臣に

はらひきよむる川社かな

餘入道狹主

けふは身のあくたもくたの萩して
あすよりかけんうその河波

八十氏

今宵よりはや文月やかよふらん

夏毛の筆のつかひじまひに

六月萩

白川與布禰

盆前の拂ひは何と夕ぐれの

水無月萩するぞをかしき

狂言鶯蛙集卷第五

秋歌上

立秋

山手白人

萩の葉に案内乞はせてあみの戸の

めに見ぬ秋もけさや立らん

秋風女房

秋來ぬと風がしらすやふみ月の

封じをきりの一葉ちらして

立秋甲子

河原鬼守

三伏の夏もする葉の野大根

けふ二股にあきはきのへ子

秋たつ日さる方へまかりてか

へらんとするをりしも扇を出

して歌かきてよといひければ

唐來參和

秋もはや立ながらかく扇とて

けふからこれはすたり物なり

風鈴告秋

婆阿

三伏 夏たけ椽に音づれて

せわしく秋をつくる風鈴

七夕

しろひと

織姫へけふの手向どくりかへす

三輪ぞうめんのいとながき哉

天狗奴和助

七夕にひかるゝ牛も心あらば

今宵ばかりは足はやに行け

紫一もと

誰もみな露のねがひをかけ棹に

かけて小袖やはし合の空

常山阿馬

天の川空にをだまきかけてこそ

跡にいど引くよばひ星かな

問屋酒船

短冊の竹のひと夜のあけがたは

星の名残やのこるいろがみ

山陰青則

とる筆のそのかさゝぎの走りがき

星に手向のふみ月の空

庚申七夕

望月満丸

天の川さてあやにくのかのへ申

ねぬ夜は星のさし合の空

七夕箏

野老髭面

秋風の手さへこよひはつくしごと

七夕づめにかきならせかし

七夕草

久留間長持

秋風のふきこいふのも七夕の

逢ふことのねの深き草の名

七夕鳥

唐衣橋洲

蝙蝠と人はいふとも曉の

鳥なき里やほし合のそら

しばらく酒のまざりけるに文

月七日ある人天の川といふ酒

を送りければ

十二栗圃

天の川酒は露はご飲身にも

いまひと徳利はし合のそら

武士の八十氏としごろ手なれ

給ひしきんのことあたへんと

やくしたまひければふん月七

日とりにつかはすこてせうそ

このはしにかいつけ侍る

白川與布禰

われもまた七夕づめと諸ともに

七の緒琴ぞほし合の空

かへし

武士八十氏

さほまで星なら今宵かすべきを

おくるはせひもなゝの緒琴や

吉原草市

浮草蝶々夢成

ひと朝は露の千くさの仲の町

見よ朝顔のはなれ市人

角力

鍋垢丸

花の色わくる秋野の草角力

團扇の紐も露の小むすび

算木有政

おどらじと出るや月の土俵ぎは

ちつと入日も西の大せき

節松嫁々

秋角力數の手とりもいかでかく

不慮なるまけを鳴の羽返し

文月なかば過る頃初雁空をす

ぐる聲しけるをいまだ雁は來

らじと爭ふ人ありければ

戀和氣里

秋になりまゐらせ候の玉章を

龍田姫よりこごづかりかね

西瓜裁賣

京間内則

赤き色を都の町の夜あきなひ

下たちうりの西瓜行燈

文月末によめる

赤松日出成

初秋もめてたくかしく筆ごめよ

けふ文月のまき納めなら

露

しろひご

清輔がものうかる時の白露を

こごばじちとや言べかりける

めしもり

露ごちる涙の玉のきざはしや

長信宮の身にもあきくさ

桔梗

加倍仲塗

秋草の花の顔見世評判の

中に上々きちかうの色

秋日三人四人して野邊秋草見
にゆきはべりて

出諏訪耳彦

秋萩の花すり火打うちつれて

たばこ野道にあかぬ友ごち

野草花 なかもち

敷つめし春の錦の花よりも

こゝろ廣野の秋の花ごぞ

萩 便々館湖鯉鮒

いたづらもさかりに露や汚すらん

これぞ小萩の花すりのそで

大石小石躬景

賤家をのぞきて見ればつき萩の

花もつゝれの錦きにけり

女郎花 疎人

栗飯をたくかたはらの女郎花

似たとや言ん煮たとや言ん

梓弓八中

名を聞けばかあひらしげな女郎花

曲りくねりしこゝろとは見す

片袖足成

女郎花粟粒ほごもかはらねば

むせるめしごも人や言らん

薄 うちのり

ひら／＼と草の袂に見えつるは

のころしつけの尾花也けり

大屋裏住

糸すゝき野邊の錦にはた織の

さをなぐるまのやるせなく虫

犬百首の中に薄 檜皮釘武

可愛さも十寸ほのすゝき打しきて

なやめる犬を捨てくるす野

苺萱 秩父絹平

行暮て野中に宿をかる萱の

亂れふしごや草まくら闇

槿 めしもり

此こゝろ聖にませし朝顔の

花にをしめる今朝の寸陰

晝朝貌

朱樂菅江

はなのさきばかりあらひし手拭の

ひるまおきたる朝顔の花

八朔梅 ひけつら

白妙に咲はこささら八朔の

てうごをりよき梅がかたびら

雁 銀杏満門

鳴ならぬ羽をばかゝしかけてくる

その玉章はかり筆にして

赤土壽邊留

みつ口の三をよせてやかぞへなん

はや何時のかりかねの聲

市中雁 袋筒長

そろばんの玉の二進か市中は

みせに空ねのかりかねの聲

日本堤にて雁の聲をき侍り

て 邊地間川成

雁の聲北へ／＼こいき杖を

とばせて行やひけ四ツ手かご

鶉

うちのり

蛸が子にござやら似たる飼鶉

砂の上にてなくと思へば

月前雁

青のり

たつた姫月に衣やほしぬらん

山のたもとを通すさは鹿

別莊鹿

紀儘成

踊子の下駄をや笛にしたやしき

三味線の音によるの棹鹿

酒家聞虫

石龜壽鈍人

盃をはやさしたまへ松虫の

はかなき酒のちんちろりぎり

虫賣

仲ぬり

虫賣のねてくらされぬ世の中は

おのれも露のまうけにやなく

秋鯉脂多

棟上高見

傘ならぬ鯉も秋はあぶらく

雨のふるせのさし身にぞする

夕顔如枕

八十氏

涼にし夏なら棚のゆふ顔を
てうご枕にしづがたのしみ

狂言鶯蛙集卷第六

秋歌下

月

つむり光

月見てもさらに悲しくなかりけり

我身ひとつの秋にもあらねば

山手白人

秋風に雲の衣を脱すて、

丸はだかなる月のさやけさ

里中道

わきざしのさやけき月のはれ出立

ちるやかつらの花のかいらぎ

三日月

檜皮釘武

光陰の八島にむかしひき切し

しころや三日の月のかげ清

四方赤良

網の目をもれ出る影はおのづから

つりばりほごに見ゆる三日月

十四夜月

所詮法師

惜いかなすこしいびつに見ゆる故

丸もち月のあすをまつ宵

銀杏満門

十分なその顔つきの桂男も

すこしかけめはあらんぞ思

秋の最中はあすとの宵月ま

つをりしも初て雁の音つるゝ

聲をきくにいとめづらしくて

紀炭堅

天津空あとのが先を待宵の

月にあらはれ渡るはつ雁

八月十五夜 元元網

すきとほる琥珀の玉の盃を

手にもち月のかげに塵なし

婆阿

もろふたる芋も團子も武藏野の

はら一ぱいにみてるよの月

牛込遅道

光りそふ玉のうさぎのうすど杵

今夜三五のつきべりもなし

大事三昧

名に高き秋の空色くまもなく

わけてこんやの染つきもよし

野老髭面

てる月のみかけの石の水手鉢

みがきあげたる秋のなか庭

赤土壽邊留

そろばんの玉のやうなる此團子

かぞふる月も三五十五夜

石龜壽鈍人

あすまゝを焚べき釜はとられても

今宵名におふ月にをしまじ

連城の玉の句にすがりて

竹杖爲輕

十五夜の月しろたかき詠めには

かのあら玉の春も及ばじ

八月十五夜よひのほご曇りが

ちなれば月さへ出やらぬを人

人月をもてあそぶこと葉に光

そふ心するに前栽の薄砌の

松もげに月待風情に見えけれ

ば すみかた

名にしおはば月も出よこや松影に

まねぎますほの薄一むら

八月十五夜雨降ければ

日本柿見事

川竹のつとめに似たる一夜とて

ふるもてらすも月の空ごと

十五夜に糸瓜の水とりて

智恵内子

垣根はふつるに葉月の半とて

糸瓜の水もすみ渡りけり

停午月

鹿都部眞顔

誰人か千兩箱とほめざらん

秋は中村なかぞらの月

月前兎

玉兎はねてなぐさめ十五夜は

おのが毛ほども月に疵なし

月前芋

常阿馬

里芋をくはんと口をあきの夜は

ちよご杉箸に月さして見よ

十六夜に蕎麥をたうべて

鳴羽盛

秋の夜の月は雲間をもちあげし

蕎麥のあたへも二八いざよひ

浦月

唐衣橋洲

左は須磨右はあかしへふみまたぐ

月のあしこそなみを越けれ

野月

手枕歌種

武藏野はもごより廣きはらなれば

くもなくうみし桂をのこ子

鳴瀧音人

むさし野にあふるゝ月のにげ水は

逃かくれ家もなき今夜かな

兩國橋月

うた種

今宵しも心にかゝるくもなくて

月はれわたる兩國の橋

三又月

光

さし出てけに千斤のおもしろや

鼎の足の三ツまたの月

品川月

赤良漢江

すむ月の光はこゝの品川の

臺にのぼる大佛のまへ

芋畑月

大木戸黒牛

芋の葉の露にやごれる月影は

風にころゝをちのひと村

供部屋月

於保曾禮長良

供部屋は主の御たちをたち待の

月にさしたる天もくの酒

雪隠月

京間内則

化物を見しごはうそのかはやにて

おのれゝが影のもる月

終夜望月

節松嫁々

うかゝご長き夜すがら懂れて

月に鼻毛の數やよまれん

武士八十氏

いごはすに入きたれかし秋の夜の

月も住家のかゝる手せばを

商人見月

奈良花丸

最中にて御座をろばんの分厘を

かけぬ三五の十五夜の月

順禮見月

くろうし

順禮のうつふだらくやらくゝご

寐ながら月をみくま野の宿

縹素望月

朱樂漢江

すみわたる月に虎溪のはしたなく

わらへばごもに口をあきの夜

替者對月

きつしう

すむ影を見る目歎くもせんなしと

ひごりまさぐる琵琶の半月

夕霧笹

月見にはちいに物こそ悲しけれ

我目一ツのあくにもあらねば

ある人あそびものつごひて酒

飲けるにはやうふけりにとて

おのがすみ家へ歸るを見て

腹可良秋人

美しく粧ふ今日のつきの顔

詠めあかさでぬるはをしるひ

明月如鹵鹼

釘武

海手からしやぼんのやうな月影を

誰がくだもてや吹上の濱

十三夜月 赤良

清書もあがる二度めの月かげは

又一段と見事なりけり

眞顔

やまごのみ木のみをもるや重箱の

からにはあらぬ月を見るこて

千代有眞

野の末に今夜もはねる影見えて

はしる兎の耳の長つき

大石小石躬景

盃にみつればかくる酌よりも

今宵の月の八ぶんめよし

赤松日出成

月見れば雁の琴柱に雲のいこ

しらべてあそぶ十三夜哉

平左段

長月の十日あまりのみかの原

わきて今宵の影はさやけき

此月見衣はかつげと露寒み

芋のその葉に玉だれのひま

生薑一片岐

飲あかす夜は長月の酒もりに

又も名におふ菊のかつらを

白人

十三夜月もさしでの磯きはに

ばつかり口をあきのはまぐり

九月十日あまり四日黒髪山に

まだきに雪のふりつもりたる

を見るに既によはひもつもれ

る物からおのが白髪をつくづ

くなでよめる 所詮法師

時しらぬ今しばし待て黒髪の

峯にかゝれる秋のしら雪

秋の夜物縫しける女を見てよ

める まかき

世の中をはりの手ぎはの營みは

秋の夜を日につきもののぞうき

烏瓜藏霧 有員

鳳凰とおもひの外のからす瓜

朝夕霧の中に見れども

擣衣 秋風女房

夜もすがら聞けばからころから衣

きぬたの音にうちもねられず

勘定疎人

そろ／＼と睡氣きぬたの音づれに

人のはなしもうつら／＼きく

一家擣衣 河原鬼守

二夜とはきぬたの音もせざりけり

澤邊の鳴のたつた一ツ家

鹿 春夏秋冬

狩人の目にやかゝるとさは鹿は

聲をばかりのねをのみぞなく

菊 卷拙菴白壁

つぼのうちに猩々菊をうつし植て

さけ／＼このみ詠めてぞ居る

金野鳴木

咲をむる菊は山路の裾もやう

見に行く道もつまあがりにて

大菊満笹

遍亞方岳

月の輪にまがへるませの大菊を

露をあたりの星かごぞ見る

山住猿雄

しら雪と見ゆる笹の大菊を

つもれば尺にあまり珍らし

十日菊 きつしう

節すきて見るや十日の雨障子

五日の風もしら菊の花

菊花放酒

節松嫁々

ひたすらに薬と菊のかげ見えて

下戸もちとせやふらそこの酒

人に酒すゝむるこて笹に咲け

る菊を折取侍りて すへる

かねてより薬とさくくの酒なれば

たえず千とせもあがりませ垣

ある人のもとへ消息し侍る序

に菊の花をつかはすこて

愛多子子々

御やうすをいかゞと菊の一もとは

小蝶も花をたづねてぞやる

簑虫

まかき

ちりのこるはゝその枝にさり附て

ちゝよゝゝとねだるみの虫

虫聲弱

うちのり

此ごろは又めづらしと菊ぞのに

鳴虫の音もをよりはつもの

秋山越

磯嵐

秋いたく更る山路をふみわけて

はけるわらじも紅葉しにけり

山紅葉

さたむ

手向山神の紅葉のちりぬるを

はゝかりおほくふみてこそ行

山東京傳

初霜のけはひやすらん龍田姫

紅葉袋にあらふ山の端

名所紅葉

田夫野人

盃はなくてもまゝののみち見は

茶碗にさけをこゝにつき橋

夜紅葉

八十氏

秋の夜のみはあやにく紅葉ばの

色さへ見えず香さへなくして

紅葉浅深

邊地間河成

紅葉ばのふかい浅いを瀬にもして

渡らば錦なかやたえなん

眞間紅葉見にまかりて

小牧牛歩

いつ迄も詠に秋はなかりけり

やはり青葉のまゝの紅葉は

海晏寺の楓見にまかりて

童子嶋臺松蔭

海晏寺紅葉も酒や飲すぎて

色に出るほゞ見ごとなりけり

同 月影澄遊

海晏寺むかふの海によせかへる

なみゝならず染る紅葉ば

同 竹馬節蔭

海晏寺山にもみちのにしきなる

紅えふすれば見ごこ色かな

海晏寺にまかりけるに雅名世
にひろく聞及びたる人々の我
より先たちて紅葉見侍るにや
枝毎に短冊の附てありければ

眞弓元季

短冊のつきし紅葉をみな人の

あとから錦きて見るぞよき

正燈寺の紅葉見にまかりける
にはや日のくれかゝりて茶み
せの床几などごりかたづくる
を見侍て

無錢芳志

入相を鐘四ツにして夕ちみぢ

はや水茶屋の見せも引まへ

御所柿のいと澁きをくひてよ

める
こりふ

御所柿をしういといひし罰かして

さてこそ口もまがるほごなる

暮秋
しろひご

花薄はうけし袖をふりあげて

さらばくご秋はくれけり

ひけつら
ごうぞしてごめたき秋の別路を

いかに尾花のあはくやする

秋の夕鹿たちといふめる狛に

菓子さらすこて
眞顔妹

小倉山染るもみぢの干菓子にも

鳴や時雨のちんの鹿たち

九月盡
田分耻萬里

憎からぬ我子に添ひし三九日の

茄子は嫁にくれて行秋

尻焼猿人

長月の夜も長文の封じめを

あければ通ふ神無月なり

所詮法師

貧乏の秋もはてぬる神おくり

出雲の國の福やまねかん

冬歌

初冬
無錢芳志

射るごごく今日より冬はたつか弓

しぐれそめ羽の矢より早き日

渭明法師

木枯にちりぬるいろはふみちらし

やまけふ越て秋は來にけり

狐百首のうち初冬

京間内則

今朝ははや神無月ごぞなりにける

昨夜狐にあたまそられて

時雨
手柄岡持

春雨の眞似をもしぐれ夕立の

まねをもしぐれきの定なき

寐覺時雨
唐衣橘洲

小夜時雨ふるわんぼうご成にけり

夢はやぶれてちぎれくに

市中時雨

眞弓元季

傘をさして買ふべき人も來す

けふも時雨のふる着店かな

野老髭面

簑笠を少しもまけぬ市人は

しぐれの雨のあしもとを見て

問屋場時雨

加倍仲塗

先ぶれの過ぎ行く跡の問屋場に

しぐれの雲を次て出すなり

冬のはじめ桑名の驛より酒の

口どりをおくりし時よめる

山手白人

桑名から時雨蛤もらふごき

どくりの酒もふりみふらすみ

落葉

久留間長持

落葉かと思ひの外にふるあめは

いつかひさしをもりの風

落葉混雨

常産阿馬

時雨ふり落葉もりくる篠の家は

虎狼もすみやわたらん

冬のはしめ高雄にて落葉をよ

める

十二栗圃

風にちる木の葉天狗や谷川の

梢見おろす鼻高雄山

かなな月のはしめ或人のもと

へ鯉をおくるこて

愛多子子子

初しぐれふるせの鯉ふるくこも

便にあげる味噌はこがらし

月照殘菊

鍋垢鷹

おく露のたまさか残る一もこに

一りんてらす月のしら菊

冬の歌とて

檜皮釘武

難波江の芦は氷の足袋の紐

こくれば岸のなみごもん半

垣塞草

朱樂漢江

葉もつるもかれし垣根のはち瓢

重みにつれてかしぐ寒けさ

池寒芦

梓弓八中

寒そうなすがたの池にたつあしは

くろぶしかけて氷居にけり

銀杏満門

水にさへゑひてやよほご亂れあし

たをれふしばのおき立もせず

遅蒔千種

池水にかれたつあしも此ごろは

氷居しよりかしこまりぬる

節松嫁々

風さゆる汀のかれ葉しもやけに

かしけてたてる池の村あし

かなな月の頃すがたみの橋と

なん言ふ所に翁の立よりて休

らひ居けるを見て翁にかはり

てよめる

空寐待兼

我が眉におごろかれ野の霜おきて

しばし立よる姿見のはし

霜

宿屋飯盛

化粧せぬせう女の朝戸出に

ちと見ならへといふておく霜

一丈帶武

うち見るに下手や四五目おく霜の
白は基ばんの目にも寒けし

庭霜

鹿都部眞顔

木々の葉をおとし話もそろくど

霜がゝりたる庭の面かな

盤銅氷

釘武

盤銅に氷れる水の手にしみて

あかぎれほどのひゃ新なり

大河半凍

鵜柄仙口

眞半分水と氷を吹きわけて

むかふの岸やきゆる川風

諏訪氷渡

大事三味

諏訪のうみや雪はこんくふる狐

わたる氷ははるかちかみち

神田川氷

赤松日出成

舟つごふ岸へこ汐のさす棹も

けさは氷てかん神田川

瀧氷

夕霧まかき

瀧の糸のしりを結びてこちつけし

氷もはりの手わざとや見ん

冬月

大屋裏住

研あけて影もするどに見ゆるかな

もろはの山をたちのぼる月

童子平次郎

行道も寒き霜夜に照るつきの

なんのくもなくうちへ歸らん

うちのり

杓子にはあらで軒端にもるかげは

飯よりこはき冬の夜の月

水鳥

まかき

池水ももらさぬをしの中なれば

いと氷にとちつきやせん

みつかど

鹽風にもまれていろの黒鴨は

そのうば玉の闇になくらん

池水鳥

秋風女房

あつさ弓をしも霜夜の池水に

ひらくともねの床ぞさびしき

霜月の頃神田川の邊をすぎけ

るにゆきかふ舟にのれてむれ

ゐる鴨のはたごたちけるがや
がて舟のすぎ行あごにたちか
へりて又もごのごとく水の上

にあつまるを見て 紀炭堅

舟の艫に追れてちりし水鳥の

あごからごにも立かへるかも

千鳥

きつしう

打て来る波のうけ太刀みつ汐の

さしこゝろえて飛千鳥かな

曉千鳥

嫁々

盃のかたぶくまゝにさゆる夜は

あしもちごりのなき上戸かな

網代

三ふ打網

網代木を夏の虫とは思はねど

ひをさるにのみかゝりてぞ居る

なかぬり

夏の夜のひをさる虫と人や見ん

かゝりたやさぬ瀬々の網代木

鷹狩

問屋酒舟

びん髭につもれる雪のふるおやち

別して手足のこゝへ鷹狩

みつかと

酒氣なきしらふの鷹をうつしても

見たき野守の鏡もらかな

冬至

婆阿證人

冬もけふ道一筋やそへてまし

本町二丁目の青柳の糸

鰯汁恐毒

まかき

鰯くらふ人の心ぞあさぢはら

露の命をてふにすはれて

左候某

おそるべしかほに師走の鰯汁は

煤をはくにもくだすにもせよ

雪中煮鰯

鳴羽盛

雪折の音に似たりし鐵炮の

たま〜ごとの河豚な當りそ

突

黒髪千筋

風のそこらこゝらを吹ちらし

居ながら空をみぞれふる屋根

霞

しろひと

冬來てははげしき風にまきちらす

寒さの種の玉あられかな

菅ころの三ふ

一しきりふると思へば玉霞

またまん丸に月も見えぬる

ひけつら

はら〜と音もあられのふる桐油

たまりもあへず遠の里人

關霞

きつしう

あれはてし不破の關守もる役も

もるに霞のたまればこそ

茶室霞

河原鬼守

さくら炭匂ふ園の寒からで

音はしきりにふる霞釜

吉原初雪

轉起安

駒下駄もおとなしやかに初雪は

ごうもたまらぬ中のてうちん

馬場雪

きつしう

鞭打てつなぬ駒に散花は

さくらの馬場の雪の夕暮

雪中犬

阿馬

時しらぬ山のかひ犬おのがをも

ふりつむ雪やかのかのこまだらげ

飛鳥山にて雪の降を見て

仙口

きのふけふ飛鳥も富士も山つゝき

みな白砂のゆきの肌いろ

雪見に出るこて 四方赤良

卒さらばまろめし雪と身をなして

浮世の中をころげありかん

雪ふりける日澤邊はたる吳竹

ふし躬とひきたりければ

をなしく

雪の日に螢の來るもことほりや

さるおやしきの儒者も見ゆれば

淺草並木町といへる所にて朝

より酒飲けるに晝つかたより

雪の降出しければ 眞黒面

初雪もはやふり出して袖の梅

並木に花はさけびたしかな

此日いさゝか堀出しをしければ
福部枝炭

客さるも今日初雪の見参に

竹のこの子はよほごほり出し

簀輪といへる處に住けるおの

こひとりの親をもたりけるが

きはめて貧しけれども至孝な

りその母酒をたしみければ

白川與布禰

竹の子にあらで簀輪の孝行は

笠着て酒を買にゆきの夜

酒のみける時雪ふりければよ

める 戀和氣里

ちらく／＼とちらつく目には盃を

おさへて雪のつもることも見す

人々のつごひて酒飲ける日時

雨に雪のまじりてふりければ

壽貝高割

盃のあいをしぐれにしら雪は

つもりかねたるけふの酒盛

人々鎗劔の術を試るをりしも

いと寒かりければ初雪はいつ

頃ふりなんなご口々にあらそ

ふとてをの／＼かけものし侍

りければ 自分齋子璉

いざさらば初雪がけをしあひ口

ちらりと來てもまけど定よ

となんよみけるにぼごなく雪

のふり來りければ例のかけも

のに酒肴など調してあるじし

侍るとて 青口齋燕河

鹿酒なればお口にあふかしら雪の

ふるは少々これは壹升

雪のかけ物を圍にふりてごり

けるに四十八字といへるくじ

に當りて 便々館潮鯉鮒

雪がけのだちは四十八文字

ふつてふり出す奴四五人

人々たはふれのあまりに又乙

雪のかけ物せんといへる折柄

曉差櫛
かさねては又かぢはらと笑ふべし

二度のかけにもさらに引ねば

寒夜冷酒 蕤田脛長

さゆる夜の此一盃のひや酒は

げにのみきれぬひゝ茶碗哉

炭竈 をかもち

内に居て見れば眞黒にたつ烟

ふじの嶺とは雪と炭がま

埋火 足曳山町

ふき立る風も小春のさくら炭

火桶は花をちらすばかりに

藝子炬燵によれるを見て

炭 堅

人に身をこんどまかせて置炬燵

藝子の隙もひにこそはよれ

老人炬燵によれるを見て

嘉珍多邊安

寒けさはうすき火のけの老の身に

かしらの霜の置こたつかな

煤掃

むせん

煤はきの上着に夏をみちのくの

けふのかたびら胸あはぬ哉

煤掃客來

武士八十氏

けふすゝを取込なれど御出なら

まづあけまをせ胴になりとも

年市

むせん

時しらぬうちにも賣れる君が代を

あふぐはおろか年の市人

餅春

橘みさへ

にえたつやこしきに米をはりま釜

しかまのかちんねるぞ愛たき

歳暮

馬塲金埒

行年の尾がしらかけて鹽引の

壹尺ほごに成にけるかな

つむりの光

此者は花の春べといそぎ候

お通しなされどしの關守

根辛傳講

ふんごんの目もあてられぬ年の暮

足をはかりにかけ廻れども

焼酎何献粟盛

残り日の數もひとふし二ふしと

なりてどうく年はくれ竹

古家雨盛

行年の腹をかへて笑ふ門

袋おもたき厄はらひかな

子璉

手をつくす將基のやうな年の暮

つまり切ては歩一ツもなし

燕河

十露盤の玉の春待つ一とせも

つもりくてべかざりかな

師走の末に雁のしめとりをか

へとてもて來ける人のありけ

ればひとつはこなたにどやめ

て一ツはしたしき人のもどへ

つかはしけるにかはでかへし

ければ
をき安

三文の矢よりもはやき年のうちに

春をもまたすかへる雁金

山中歳暮といへる心を

吹売咽人

年越に鳥のなく音は聞ゆれど

世にあふ坂の節季候はなし

故郷へかへる年の暮に

難波鴛鴦照

をしむより猶行やらじ鳥が啼

花のあづまの年の名残を

松前江指といふ湊にて村上氏

なる人の家に旅寐し侍りて歳

暮の心を詠る

平秩東作

村上をやごりにしてもよる年は

どりかへされぬ日月の簾

節分の夜色このめるをのこの

まめはやすをきゝて

原市

はひあるく身は節分のまめ男

そこらこゝらを摘み喰して

除夜

こりふ

桑の弓春待としのひとこぶし
鬼打まめやいるにまかせん

狂言鶯蛙集卷第八

羈旅并離別

春日旅行 加保茶元成

はるく道をきゝすの聲きけば
我も留守する妻ぞ戀しき

物へまかりけるとてなれぬむ
まやに旅ねし侍りければいた
うくたびれてことにはらのへ
りければ 武士八十氏

わらんじのひもじき人の腹ならで
足をくはるゝ旅ぞくるしき

歌合の中旅五月雨

河原鬼守

五月雨のふる借錢のふちならで

こは首だけの大井川かな

千の玄室ぬし五月雨の日古郷
にかへりたまふあした

馬場金埒

雲もはやにちり上りにあがるなり

お茶をたて場にしばし待合

師走旅行 紺屋朝手

難波がた冬の日あしもみじかくて

のびぬ師走の旅衣かな

大森といへる處にて

黒部赤杉

大森ときくや名代のなら茶飯

腹もはるはづ和中さんばい

馬入川の渡し水増りて川留り

ければ

をなしく

乗ることもならぬ馬入の川留に

はらのたづなやけたり匆たり

伊豆石橋といへる處はいにし

へいくさありける山と聞て

をなしく

七文のつかひなすともおとすまじ

此石橋のはした錢なら

小田原にてういらうもごめて

くれかしと人の約しけれどあ
たへなければその言譯とて

をなしく

約束はをだはらづこの片荷すり

ひとつゝみさへ旅はういらう

箱根山をこえて三嶋といへる

むまやにはた織女のありける

をよめる

峠から近くみしまのふともめん

たら／＼をりてとまる旅籠や

月の輪の池にて 庭田脛長

草枕ふしみの里の夢の間に

いつか石部へつきの輪の池

不二の高根いと雲のかゝりけ

れば

裾野から雲の衣をあしたかに

はしをればふじの邊り迄見ゆ

何某侯の城下をすぎて

平秩東作

御城下の月見て罷通るなり

せめて枝豆丹羽左京殿

大井河川留

元成

川留にあふて居ながら狂歌よみ

よんどころなく名處をぞしる

舞坂にて

葛細道

舞坂は三里にすゆる灸ならで

いま四五町になつてくるしき

梅澤の宿にごまりて

春夏秋冬

名にしをふ爰は繼穗の梅澤や

早くもつきてみはごまりぬる

卯月朔日ふるさとへ歸る人に

むまのはなむけすこて

内匠半四郎

古郷へ錦の駄荷を先に立

身もはる／＼と更衣かな

をなじこゝろを

万歳館十口

旅衣かへるも夏のはじめゆる

うのはなむけに一首しん上

したしき人の古郷へ歸る折か

らよめる

檜皮釘武

古さとへ歸れる人に糸つけて

いかのほりなら引やもごさん

黒邊赤杉このみてさし物細工

なんしけるに或時箱根のいで

ゆへ行けるをおくるこて

牛籠遲道

赤杉のゆもごをさして行先も

箱根ごきけば打つけた旅

ある人江嶋へ旅立を送りてよ

める

旅衣たつた十里かそこらにて

むさしさがみとしはし別れ路

物へ旅たちける時送りの人に

よみてつかはすこて

唐來參和

立かへり故郷の人にあいだしこ

ふみ出す足のまめをみやげに

片岡に旅寐せし頃つれなりけ

る人の按摩とらせければ

橘實副

心よくあんまをひねるかた岡に

あしも達磨とふせる旅人

神奈川むまやにて

身性不案人

何處迄も青いゝはに帆の數の

風にちりぬるかな川の沖

狂言鶯蛙集卷第九

賀歌

豊年貢

久留間なか持

ゆたかなる年の貢はつるかけの

升より民のみてやはからん

九十賀

節松嫁々

吳竹のよねの守はをこしと

かぞふる節に千代やこめつる

茶をこのめる人七十賀に

紺屋朝手

なゝそちをへても達者なあしや釜

猶かけめぐれ千家二千家

元服賀

無錢芳志

元服をするがの不二の根ぞろへは

雪のしら髪となる迄やゆふ

新宅祝

千代有員

ひろく建たる軒は高砂の

いく万年もこゝに住の江

寄月祝

白川與布禰

あきらけく戸ざゝぬ御代と我々が

申もおそれ有明のつき

寄山祝

大木戸黒牛

君が代は我背戸裏のはきだめも

あま雲かゝる山となるまで

寄扇祝

尻焼猿人

有がたき御代にあふぎの嬉しさは

骨も折らずに榮え行くなり

寄雪祝

山手白人

源の御代はふりせで草も木も

つもればなびく雪のしら簷

寄鶴龜祝

唐衣橘洲

かぎりなき君が齡やうらやまん

鶴は千年龜はまんねん

寄鯉祝

名万壽盛方

竹の葉をかいしきにして松の魚

ひとふしごとに千代は込たり

寄德利祝

山蔭青則

君が代は神のおまへにふる鈴の

徳利のみきのくめごつきせす

寄赤飯祝

嫁々

胡麻鹽もふれや千とせの色直し

衣桁にかけし赤のめし物

大事三味

君が代にすむ身はあかの色つけて

猶いつまでもたのしむし飯

四十の賀したまひける家にて

鹿都部眞顔

萬世をへんたらこととお賀の餅

つくともつきし君が齡は

寄鍋祝

紀定丸

老の腰かゝまるつるも千年と

いはふごきはの松の鍋ぶた

寄鏡祝

足曳山町

鏡臺にみがき立たる化粧水

影もくもらぬ千代のためぬり

寄烟草祝

遅蒔千種

小山田に稻蒔る賤が竈にも

朝夕たえぬけふり草かな

寄杖祝

まかほ

つきせじな千とせの後の鳩の杖

まめてひろはせ給ふめでたさ

鈍々案山鹿

限りなくすぐにあやかれかしの杖

ふし／＼にさへ千代を込れば

寄硯箱祝

田夫野人

公事沙汰もさらになし地の硯箱

かく納れる御代にすみ筆

寄瓢祝

まかほ

おめでたや君は千代の子瓢箪の

百なりなぞは数どりにして

寄文祝

白壁山人

いろ／＼にかきあつめたる松葉紙

猶いくちよをふる筆のあと

寄筆祝

いつもの早秋

かくばかりめてたき君が命毛は

千代ふる筆のたまるかす／＼

武士八十氏

君が代はたゞしき道のありま筆

つかへまつりに顔を出さばや

寄硯祝

古瀬勝雄

君が代のためしにするや硯石

江戸むらさきの色もこもりて

夕霧色

やはらぎし御代は瓦の硯いし

されば千とせをへるぞ愛たき

御儀式日御料理頂戴しけるに

鯛の三道具の有ければ鍬鎌す

きこいふことをたて入てよめ

る 酒大增長機嫌

かまはずに自然と福は来るぞすき

是れ頂戴の三道具なり

寄鳥祝

朱樂漢江

治れる御代は練めの鼓にも

こけかうごなく鳥ぞかしこき

狂言鶯蛙集卷第十

物名

ひたいはこ

梓弓八中

見わたせば姫も若衆も月びたい

はごの子ぶりはいづれ芬らじ

むめぼし

山中多都枕

御馳走にあつくわかせし居風呂を

むめぼしやとは言も出されず

みそこし

出諏訪耳彦

たつことはならで坐りし老のみぞ

こしもふたへにかゝみ餅なる

魚名十

山手白人

鯉

鰯 鰯 鰯

鯉 鰯 鰯

こいしさはいかにますかさく風の

なさけ聞たいいなさゝはら

たちのいほ

黒髪千筋

千早ふる雨を乞祈る神垣は

しらゆふだちのいほさきの森

うたかるた からすみ

田舎うたかるたのおもは賑ひて

隅からすみへつゝみかけ稻

かまぼこ

遅蒔千種

ちりの世を出しすみかも鍋や釜

ほこりだらけの世話ぞ遁れぬ

小角豆 茄子

初茸

四方赤良

年はまだ十六さゝげおはぐろを

つけなすこともけふの初茸

鳥名五

白川與布禰

學びつるふみの中にも四十から

まよはずとくををしへ有けり

五味五色

便々館湖鯉鮒

青ければ苦き鹽つけどうがらし

それをあまさずくろふ物すき

狂言鶯蛙集卷第十一

戀歌一

初戀

平左段

けふよりや人めの關をはかりても

まづふみそめんにはごりの跡

智恵内子

只ひごめ見しは初瀬の山おろし

まづふみそめんにはごりの跡

武士八十氏

此戀はなるかやぶるかゆくりなく

思ひたつ日よ唇だに見す

初逢戀

名万壽盛方

虎の尾をふみ見しよりも初に逢ふ

うき名やなんぞせん里走らん

鼠百首の中に初逢戀

便々館湖鯉鮒

抱しめて命を逢ふにかへんとは

こやくひつきののはつか鼠か

忍戀

野老髭面

わが戀はしのぶとすれどふる桶の

たがいふとなくもりや初けん

忍待戀

左候某

しのぶれば色にも出さず空寐入

いびきをかくと人はしらずや

待戀

山手白人

物思ふあたまでをさしてさがり蜘蛛

ふらりと人を待宵ぞうき

不逢戀

こりふ

どうともかうともねの出来ざるは

あはざる戀の重荷なるべし

鳴瀧音人

我こふる人はいすかのほしたなく

口もちがふてあはざるぞうき

つむりのひかる

いば結びにむすぶの神の結びてや

今に一度もとけぬ下紐

再賀

逢坂はつらき戀路の難處にて

こえずに歸るむだ足ぞうき

遇不逢戀

於保久旅人

うつり香の残りてとしをふる小袖

今は身幅もあはできれぬる

思

羽禽堂莊夢

我胸にもゆる思ひを消さんどて

口へつぎこむ酒もすさまじ

片戀

葛屋月守

一ぱいにはりたるかたのかた思ひ

かくもめる氣を人はしらずや

鹿都部眞顔

思ひきや十府の菅ごも七ふぐり

女にまけてまろねせんとは

師走ばかり淺草わたり市たち

ぬる日雨のふりけるにみめよ

き女のかなたこなたまよひ

ありくを見て

紺屋朝手

容色も第市人のぬれごとは

十七八の雨のふりそで

片眼なる人の戀に身をなやま

せるを見てよめる

をなしく

この戀はいつかあはびの片目貝

人をまつ毛ののびくにして

雨もふらざりけるにかさし

て行くむすめを見てよめる

田原杉成

濡るきで日和のよいに雨がさは

照されうかと顔かくすなり

別戀

畦道

又いつとちきる別の手枕に

髪もかたちもとどろ亂れ鳴

飲口はしる

名残なくすぐにかへるもうしろ髪

みだるゝ心あとにくしゝゝ

顯涙戀

八十氏

忍ぶれごもりてなみだやふる土瓶

かけし思ひのあまりつよさよ

被聞寢言顯戀

唐衣橘洲

今更に夢になれともかこたれず

もどねごとより洩し浮名は

變戀

春夏秋冬

あきやすき人の心ぞそら錠の

かけてたのみしかひもなき哉

久戀

さたん

逢ふことは今に叶はず錦木と

ともに日數のたつぞかなしき

無實戀

こりふ

忘れてもわすれても又慕はるゝ

戀の冥加ぞ身に叶ひぬる

不言戀

朱樂漢江

口外へ未だ出さねば三寸の

我舌にのみ思ふくるしき

ひけつら

おもふこといはで月日を杉の葉の

たきつけとなりて胸のもゆ蘭

歌合の中に不見戀

白川與布禰

我戀はすべるちりけの灸なれや

こがれながらも見るよしもなき

武士戀

出諏訪耳彦

戀ゆへに名は帶刀の先生も

思ひきられぬものゝふぞかし

大原さこね

かちたちて千里の外に通ふとも

帷幕のうちにふたりねよかし

虚無僧戀

しろひと

天蓋の下にや物をおもふらん

人にしられぬれんぼながし目

思幼戀

まかほ

いはけなき七ツ小女郎思ひそめ

戀のやつことなりにける哉

老人戀

夕霧笹

契るべきことの葉もなく老ぬれば

をとしめされて腰ぞ折ぬる

盲目戀

をなしく

らうたしと見る目もかれてあらざれば

せめて浮名やたてゝきかなん

下戸戀

加保茶元成

上戸なら鬼ころしともいふべきに

人ごろしなる情けなの君

農夫戀

諸見上純

朝夕にわりなき戀のかたいなか

こめん誓も二畝歩三畝歩

早乙女戀

ひかる

早乙女のさみだれ髪をとりあげて

せめてひと夜はなびき玉苗

大工戀

をこんど

みじかなるきを次の間に隙さるは

戀にひかるゝひやり番匠

疊刺戀

もとなり

たまさかに近江表のうらみをも

むねへたゝみのとこの別れ路

職人戀

於曾禮長良

忍び逢ふ夜鍋仕事に手つけうつ

かねを相圖に下細工人

替女好色

常産阿馬

何ごとのおはしますとも若ごせの

まさぐりよりて袖やひくらん

銀杏満門

色好むその目の玉のさかづきも

そこゐなまめくごせの取なり

みそかごとしける女をのが子

ごもごくねせつけてこれかれ

さかななど調じてかのこと

そこに酒すゝめんどいどけさ

うしてゐけるを見て忍びやら

ず口さがなうよめる

河原鬼守

忍びくる人をまつまへ數の子を

ねさせてあまの月をみるふさ

雪中戀

八十氏

戀風の吹まはしやらしら雪の

つもるも今は首だけにして

雷

宿屋飯盛

いな妻とゝもにそひねのうてう天

雲となりまた雨となる神

焼酎何献衆盛

雷のどうなるごともなかごより

忍びくに通ふいなづま

題しらす

阿古木引綱

水ききのあとかたまらぬ道普請

たゝふみ附て見るも甲斐なし

飯焚女の戀のこゝろを

邊地間河成

思ふ事まゝにもならずふつくと

釜のふたりがなかの口ぐせ

憎老戀

たぬき

したふともよししは面の髭しら髪

こや老ばれど人も憎まん

犬百首の中に 檜皮釘武

戀死なばそのまゝ狎に生れ來て

君がしとねのはしに伏なん

河邊二國

おもひそめ淺黄にあらぬふる小袖

あらはるゝごも色はかはらじ

乞食戀

耳彦

もらさじとかねて契りし袖乞の

うきなも人のめかごにぞたつ

阿馬

しのべごもよしや乞食のもらひ物

つゝむにあまる戀もする哉

水茶屋に立よりけるにわかし

女のはらいとたかうして顔は

ごにうるはしくて有ければ

千里亭白駒

立よれば誰も横手をうつくしと

妹がおなかのやゝ見とれけり

名立戀

馬場金埒

ふり掛しいもりの灰にあやかりて

ばつと立たるうき名はづかし

わか戀は

かん江

我戀は下手のはりたるふすまがた

かたの如くにあふよしぞなき

わが思

きつしう

つれもなき人の心のあらくまに

せんかたつきのわが思ひ哉

狂言鶯蛙集卷第十二

戀歌二

寄羊戀

四方赤良

あかつきの鐘にちぬれる誓詞さへ

うしや羊にかへられし身は

寄牛戀

すねのけはへ

人心うしの涎のながふみに

うらみたらしく筆もはしらず

寄狐戀

唐來參和

玉の緒もたえるばかりにふる狐

こんどいひても幾夜つりわな

寄虎戀

榎雨露住

つれなさは風の便りにいひよれど

はりこの虎のかぶりのみして

寄泥龜戀

夕霧色

間違ひて逢夜もあらばどりよりも

猶すつぽんのときやつくらん

寄蛙戀

加保茶元成

水くさき人にせき込む此身ゆへ

蛙となりて飛つきやせん

平左段

蛙なく池の水ぐきあと見れば

飛たつばかり思ふわりなさ

寄鶏戀

堂伴白主

人しれず思ひをかけのたれをとて

落るなみだぞ玉子ほごなる

寄鶯戀

澤邊横行

わが戀は鶯の餌にあらねども

なはすり鉢の音に立けり

寄山雀戀

鍋垢丸

あさからぬえにしもあれば山雀の

かごとばかりも目でや知せん

寄水鳥戀

空寝待兼

あどさきも見ぬ水鳥のうき中は

ぬれてその名を流しもち哉

寄万歳戀

節松嫁々

逢ことのたまの冠緒引しめて

いつとくわかの君が下ひも

寄芝居戀

銀杏満門

よはらじな一夜ねすとも鼠木戸

むねの火繩の烟くらべて

寄猿引戀

物事明輔

忍ぶより戀はまさるの綱なれや

又引かざるゝ門立もうし

寄神祇戀

朱樂漢江

しるや人はなを神漏岐神漏美の

みこと夜ごごになき明すこは

寄梅戀

大石小石躬景

八重ひとへふみ玉章をやり梅の

けふ九重に匂ひさへ來ぬ

寄竹戀

藤満丸

戀風に起ふししげく思ふごも

すてゝよそへはなびくなよ竹

まつすぐに心の竹をうちわりて

人に見せたきわが思ひかな

寄土筆戀

貴賤遊之

さまゝの心づくしも筆にては

思ひを野邊ぞふみちらし書

寄牡丹戀 竹杖爲輕

かくばかりいつしかはまる深み草

花のはつかに契りそめかし

秋風女房

相思ふたりが中もこく牡丹

うしとはいはいじいろ深み草

無錢芳志

とにかくにつらき思ひの深みぐさ

蝶になりてやよりもつかなん

渭明法師

命をば逢にまかせしよろひ草

をぞしまじりに口説てや見ん

寄栗戀 見越入道化高

頬ゑむとみれどもつらきいが栗の

線言ながらとくおちよかし

寄柚戀といふことをある遊女

にかはりてよめる

加津鹿蟹子丸

契る夜のどこゆの數のかさなりて

つゐにはすいとなれるみの果

すいといへることばはいろこ

のみの心いたれるをいふにな

ん

寄洞簫戀

問屋酒船

れんぼから起つた胸のしやく八を

おさへつゝねもよみどうた口

寄階子戀

大事三味

よをこめて深き思ひのたけはしご

かけし板屋のむねぞくるしき

寄太刀戀

遅蔭千種

振りあぐる太刀の刃先に向ふとも

逢ふにかへたる身をば厭はじ

寄菖蒲刀戀

宿屋飯盛

こひ口のかたきをなんと菖蒲太刀

君ゆゑ胸もけづるばかりぞ

寄寶珠戀

元來貧候

及びなき姿をかいまみたからの

たまのあふ夜もあらば嬉しき

寄盃戀

田每月影

お銚子のかはる心とつゆしらば

たまさかづきにあいも頼まし

寄土器戀

無大盡茂手兼

土器のかはらぬよしをあしならで

ふみかきよごす細々しさよ

寄琴戀

いつもの早秋

及なき戀はくも井の調子にて

ひとり心をつくし琴かな

寄三弦戀

早染小紋

てうしよきあいの手くだも忍び駒

思ふほごにはかたりつくさじ

一帖程村

三味線のかはをへだてし戀なれば

あはぬてうしの身社つられ

松千とせ

三味せんのでうしかはらぬ海老尾

たゝ手にかけて祈るかみごま

狂言鶯蛙集卷第十三

戀歌三

寄鼓戀

尻焼猿人

音に立てなをも鼓のうつゝなや

三ツ地のふみの長地短地

寄双六戀

をなしく

双六の乞目といへど來ぬ人の

涙の雨とふし出し筒

竹屋町粘吉

一筋のおもひにたえぬ双六の

ふりつけられし夜は、恨めし

常産阿馬

ゑいやつと結ぶちぎりは双六の

ひとめくるしき戀もするかな

寄兜戀

白川與布禰

扱もふど我仇し名や龍がしら

しかと忍びの緒はしむれども

寄劔術戀

出諏訪耳彦

相打にさんとうち込木太刀では

きれぬ思ひのたけ具足かな

寄土圭戀

空寢待兼

待兼る心のたけの尺土圭

ひとりくるひてあはぬ夜ぞ憂

寄竈戀

節松嫁々

消ねたい戀のけふりにむせぶより

ごうで竈のまゝならぬ身は

寄茶碗戀

山手白人

すれゝの中と茶碗の名のたつも

誠はりんきりんなりの沙汰

寄屏風戀

をなしく

ひとり寢にあらぬ思ひをすゝめ形

枕屏風のうらみやりつゝ

寄筆戀

十二栗圃

かくばかり命毛かけて思へども

筆のなさけのしんなしぞうき

寄曲尺戀

北川北川

戀死なば鯨となりて物ざしに

つもる思ひのたけやしらせん

寄剃刀戀

大東冬名

實に深きえんを結ぶの剃刀は

としてかくしてあはぬ日は無

寄巨燵戀

手枕歌種

忍びては人にこゝろを置巨燵

あたりとなりへきを配りぬる

寄木枕戀

大石小石躬景

夜もいたくなるまで待し木枕の

又寢がへりのかたきやくそく

寄挑灯戀

龜扇法師

燈すともくらき思ひのてうちんは

うちにこがるゝえんの苦しさ

寄錐戀

大木戸黒牛

我戀はなまくらがねの錐なれや

きばかりもんで先へ通らす

寄家具戀

與布禰

忍ぶ身ははしなき戀の山折敷

ごうして人に會津腕家具

寄摺鉢戀

万歳館十口

忍べども戀すりばちの音たかく

誰水さしてうすきえにしぞ

寄洗濯戀

帚筒長

夏の夜ははなしたらいの戀衣

あかぬ別れにいかせんたく

寄毛氈戀

紀定丸

我こひは身より出せるさび毛氈

迎もしつくりあはぬつらさよ

寄居風呂戀

算木有政

風呂がまのひごりせなかに片思ひ

とゝかぬあかをよるぞ物うき

寄石なご戀

網破損針兼

今さらに我やはちかん石なごの

手のうらかへす人の心は

寄紙屑戀

歌種

いのりてし其かみ屑のかごなれや

人もねだんをふみのかすく

寄湯戀

みかけ

わきかへる湯玉にこがす胸のうち

思ひのたけをくみわけてたべ

寄紙戀

草原十陰

人心いはきより猶かたくとも

はりつめしみのかみ掛けてせん

寄鯛戀

門限面倒

いろ香には顯れぬとも鮮鯛の

ちごごつたと見える目のうち

寄栗餅戀

垢丸

露はごもいつはりいはぬ口なしの

色やふかまの中のあはもち

黄金音好

つゝむより餘る思ひのたけの皮

とけて一夜もあはもちぞうき

寄醃戀

酒上不埒

あま酒のなれそめしより此味の

かはるべしとはくみも知ずに

赤松日出成

忍べども人の言葉もあまざけの

ひごよくになれて通はん

余旦坊

馴れそむる炬燵の中のあまざけは

變るまいぞとつゝみてやいふ

うらむる戀と言ふことを

面倒

口のうちにふつくゝなれて醃は

只一ぱいのうらみいはや

寄麥粉戀

くろうし

とにかくに口もまはらぬ麥こがし

かくす涙にむせかへりぬる

寄海苔戀

秩夫絹平

生海苔のゆかりの色はかはらじな

淺草川に名をさらせども

寄眞桑瓜戀

しろひと

我ながらうしと鏡にむかはなん

瓜實顔のこひのやつれを

寄柿戀

名万壽盛万

青かりし頃より見そめつるし柿

澁氣もぬけて色つきにけり

寄鮑戀

唐衣橋洲

思ふかひなしとはいはじ辛けれど

たまにあはびも眼の藥なり

寄赤貝戀

久留間長持

わが戀は赤貝馬のかたあふみ

かた／＼かけて逢ふ事もなし

寄鉤屑戀

千代有員

あとかたもながらの橋の鉤くづ

焚つけられてもゆる思ひは

寄壁戀

無錢芳志

ぬりこめてうきを覗のかたし貝

あはでいつまで年をふる壁

寄墨壺戀

武士八十氏

つらかりし人と一處にすみつばは

いとたへがたき物にぞ有ける

寄棟上戀

むせん

棟上のもちゐをなげの情とて

ふみつけたれど取あげもせず

寄漆戀

河原鬼守

身はよしやよしの漆にかおれても

ふたり紙張にぬるよしもがな

寄煙草戀

酒盛入道常閑

一ふきの風にもなびけ烟草

口すいがらの残りをしまゝ

寄稻妻戀

京間内則

稻づまも忍ふ今宵のわが目には

門口あける鍵かとぞ見る

寄雲戀

まちなね

紅つけた口で眞赤なそらごとを

又夕やけの雲もうらめし

寄山戀

眞弓元季

蓋も身もはなれぬ中の箱根山

これぞ思ひの雲のいれもの

寄嶋戀

馬塙金埒

わが心あけて見せたきをり／＼は

腹に穴ある嶋もなつかし

寄橋戀

うちのり

わがこひは二ツ一ツのまるきばし

ふみかへすやら返事するやら

寄筏戀

向陽菴虎溪

我ばかりこがれいかだの日數へば

いたづらに名は朽もこそすれ

寄初霜戀

日出成

ここの葉もさすがに戀の初霜は

とけぬ思ひの胸にみち芝

寄月戀

銀杏満門

いつとても胸の思ひの月のうちの

うさぎのきねの休むまどなき

寄浪戀

うちのり

假初のこひ路にとしをふる沼の

やゝ水こもりて見ゆるなりけり

寄夕月戀

あかまる

だまされた其恨みさへはれぬまに

又そら言を夕月夜かな

寄謎戀

をにもり

いひかけた謎がとけぬか一筆の

へんじも今はなきり庖丁

寄狂歌戀といふことを

朱樂漢江

言やらんえんさへ遠きたはれ歌

どうぞ手にはの逢ふよしも哉

狂言鶯蛙集卷第十四

哀傷歌

荒川樂記が身まかりけるのち
草庵にのこせし筆簾を見て

婆阿證人

あはれさはふき物の音も絶はてぬ
今に樂器の名のみ残れど
永井何がし身まかりてまたの
としかの家にゆきて

牛込遅道

雪に舞ひ月にうたひし俤も
花もこの世に嵐ふくなり

日ごろしたしう來りし道心の
侍りしが身まかりけるよしそ
の子にて侍るが告こしければ

加津鹿蟹子丸

くやみいふ百万遍のくりごとに
涙は珠數のたまぞつらぬく

はつきの廿日あまり四日普栗
釣方か一周忌に 四方赤良

一めぐりめぐりて見れど今は世に
ふりちうふくり無ぞかなしき

七十九にて身まかれる母の三

七日に 空寢待兼

はからずもよねに間近き一生の
齡はつきてけふぞみなぬか

物事うときこのみてからやま
この文ども見けるが水無月ば
かりに身まかりければ

智恵内子

あつめつる窓の螢の影きへて

涙はふみのしみとならん

ある人の妻にをくれしを弔ふ
て 赤土壽邊留

ひゅゝに思ひ出せしつま琴は
ひげどもなんの音づれもなし

何がしの一周忌に

加保茶元成

一めぐりめぐりくるまの忘られず
けふやなげきを身に積はうし

某侯の墓に謁しけるをりふし
はらのいたうへりければ

武士八十氏

朝飯のまゝにいで羽のおくつきを
をがめば腹も空うすらし

題しらす 膝元さくる

しばみてはつる一筋のたのみにて
ひらゝみらいは翌の朝貌

大東冬名身まかりければ詠て
つかはす 朱樂漢江

蘭相如いまさでまたく此度も

よもつ國より玉かへせかし

朱樂漢江が家にかひをける犬
いたくわづらひてやがて死け

れば人々ふかうなげきたまひ
てひとのごとくさいのさほう

にざりをきものしたまふを見

て

銀杏満門

小便をしかけくゞてゆく道の

かぎりしられぬ死での山犬

おなじく犬のおくつきにむか

ひて

かんこう

來世にてならば佛果をえのころよ

なむあみだぶち南無阿彌陀班

辭世の歌とてかねてよみ置は

べる

白川與布ね

死ぬ迄は人に御世話をかけまくも

それから先は南無あみだ佛

狂言鶯蛙集卷第十五

雜歌一

朱樂漢江狂歌集えらべるさて

古今六歌仙の題詠をすゝめた

まふよしふん月十日ばかりし

たしき友の來りてみづからに

もごそゝのかしければふとい

でつる歌二三首ばかり遣すと

て

無事館四交

花もがな此文月の十日あまり

一葉二葉のわらひ草にも

攝津國難波屋半兵衛か許にて

かさ松を見て 十二栗圖

青紙を春や難波津さして來て

みればのどけき日傘松

庭田脛長

難波屋に千代をふるねの笠松は

あめが下枝のかざしとぞ見る

節松嫁々としごろかひおける

山雀の籠のやぶれより逃行け

るをよめる

銀杏満門

にぐるとも籠のどにかく山がらは

かへりくるみの之にし忘るな

返し

節松嫁々

今ははやをしむかひなき山雀の

籠にもごりはうたじとぞ思ふ

あけら館主人狂言鶯蛙集をえ

らべる頃白川よぶねともに書

肆薦から丸がもとへ行とて常

に通ひなれたる道なればこな

たなんちかしといひけるによ

ぶねあなたこそとすまひけれ

ば

便々館湖鯉鮒

近道といふにさらく聞いれず

さすればよほど遠き耳かな

返し

白川與布禰

近道を行くにさうとも見わけぬは

よほどならすのめくらなりけり

下戸貫酒

鍋垢丸

あんもなら餘さじ物をそれならで

下戸の貰ふはなさけなの樽

大津繪

波越芦葉

目にも見よ角はをれてもふせ鐘の
音にきこえし鬼の念ぶつ

一休和尚のゑがける烏扇のか
たをうつして歌よめといひけ

れは

四方赤良

扇面になかぬ烏の畫を見れば

生れぬ前の大徳寺なり

猫に蝶のかたかきたるに

をなしく

莊周も猫に追れてうなされん

胡蝶となりし春の日の夢

武藏野のかたかきたるに

尻焼猿人

月弓のよつ引ひようとはなすゝき

名もあたりたる武藏野の原

鍬の上に一もと菊の畫に

山手白人

誰がかたへ貰はるゝやら鍬の上に

ひともと置るつゆの白菊

仙人物あらふ女を見て落るか

たかきたるに 唐衣橘洲

仙人もこのむ處はひとつにて

落ればおなじ谷川の水

琴と枇杷をかきたる繪に

夕霧まかき

迎も繪にかきならしたる琴とびは

引くらへではくひ物ぞよき

虎を畫る扇に 帝筒長

是もまた扇の骨の竹に住む

虎の繪なれば風起すなり

白拍子の畫に こりふ

あちこちの風をそらさぬたを柳

めの出るほごに春もせわしき

鯨の汐吹かたかきたる繪に

武士八十氏

荒海のいかれる魚もふき出す

そのしほのめをみればやさ敷

夫婦いさかひの畫に

をなしく

振あげてたゝきまはしとすり鉢は

みそか男のあるとしるけき

仲の町の櫻のもとにうかれ女

の客送るかたかきたるに

宿屋飯盛

傾城と花とをあかでみる時は

入相もいやしのゝめもいや

うかれめの文もてたてる畫に

與布禰

遠近のふみのたつきにうかれ女も

むかふの人を呼子鳥かな

栗のかたかきたる繪に

赤土壽邊留

これも又あはれなる戸の船ならで

ほを一ぱいにあげてこそかけ

賤の女のはた織る畫に

久留間長持

箴とりてしたふかいこのはひ習ひ

めをはなしてはをられざり梟

雷の蜘蛛の巢にかゝりたるかた
かきたる大津繪に

福部枝炭

かみなりも落たらやいて桑原と

凧にして引さゝがにの糸

頼政の畫を見て 松下風

登るべきたつきばかりの足なくて

何をあてごにしるやひろはん

よし野山のかた書たる屏風を

見侍て 幾代餅春

立ながらみるもよしのゝ山なれど

今宵屏風の花の下ふし

隣家琴 紺屋朝手

かきならす垣のあなたの琴の音を

こちふきぐみと氣迄春の日

商人の琴をしらぶるを

臥猪荳藻

引しめてあはぬも道理をろばんの

たまゝことは調べても見ず

いはけなき女の琴しらべける

を見て すへる

十三のいともやさしきつま音は

やがて雲井に名をやあげまき

船中三味線 臚朝

三味線のいと面白き波のうへに

船もこゝろも浮てながれん

ある御方の御まへにてうたう

たひけるに三味線のいどのた

たびゝきれば

下手長宇多

きれすともよき三味線の糸きれて

痰のきれぬはなさけながうた

江戸太夫東雅にをくり侍ると

て 無大盡茂手兼

自からひらける花の江戸おしは

河東なりてぞきくべかりける

傾城夢 めしもり

傾城のねる間もばから周が夢

胡蝶と呼びし昔をぞ見る

新造居眠 みつかど

川竹のながれに船をこぎ出せば

げに新造といふもことほり

あるたはれめの五色の歌よめ

といひければ よふね

白無垢と黄むくの上に紅からの

青茶の小袖黒繻子の帯

醫師無藥箱 梓弓八中

藥箱なしもつぶてもうつたへの

あたりはづれば醫師の運つく

儒者逢雨 渭明法師

俄雨不慮に骨までくされ儒者

いがてかひたる君子とは見ん

獨身儒者 加保茶元成

たのしみもなきひとりねや我脰を

まけてまくらにしのたまはく

ある法師の博奕このめるよし

きゝて 京間内則

ばくち打ほどの智ならばこの法師

かならずさいも持やしぬらん

下手揚弓 腹可良秋人

揚弓の射手には下手も有馬山

矢どりの尻をいなさゝはら

伽羅盗人 眞志良桃實

蘭奢待袖にかくせど夏の夜は

かもねず人もあらはれにけり

盗人晝寝 大木戸黒牛

くるゝまを松の木かげにしら浪の

よるをあてにや晝寝するらし

ある田舎人の家に盗人の來り

て糸おほくとりたるときゝて

八十氏

きぬ糸をとりもていにし盗人は

もどよりおこの物にぞ有ける

盗人の入て其まゝ出ていにけ

るよしをきゝて 無錢芳志

ぬすまるゝものをば質にをきの石

よし白波のうちよするとも

下郎に善惡なしといふ

つねつね

百の内ぬけば中居やはした錢

みたしきゝたしきしも構はず

官女放屁 智恵内子

上臍も屁の玉だれをすかしては

はなのとばそを抑へてぞ見る

何がし疝氣をうれへて常に放

屁をするをある人いたくどが

めて芦邊鶴といふを題にてた

はれ歌よみてこそつみをあが

なへかしといひければ

橋本疊太郎

老を啼く鶴のせんぎの夜はなほ

ひるもあしべの處きはす

公家の算盤にむかひたるかた

かきたるに 鹿都部眞顔

そろばんの玉の冠をつらねしは

これ百寮の見一の人

網破損はり兼

そろばんの玉のうてなのみや人は

ひとけたのぼる位とぞしる

神主洞簫をふくをきゝて

五足齋

神主のさゝぐる神酒はひとよ切

其歌口をしめすばかりぞ

高麗のふき物のよしにてちや

るめらといふ物をこのみてふ

きける人によみてをくる

こりふ

其中にちやるめらの音の高ければ

からさはぎにもなるぞ笑しき

ある人名をとはれければ

ひきのつらき

面に水かゝるもまゝのかはづにて

井筒の外に音もやらさん

坊主遊山 濱虎坊鶏子

氣も野邊の氣色に傘のかさはるを

坊主持とて雨のけもなし

雨のあした人の小袖を着て行

ければ 若氣波屋留

すべるなよ雨もはれ着のかり小袖
ゆきさへ長く思ふ道なり

ある人に灸すえて貰ひしにま
はしやきにし侍りければたへ
がたく暑きを 一丈帶武

土器をほしてまはすや灸上戸
おさへられてもいたみ諸白

やつがれに灸すえよと人のい
さめければ 出諏訪耳ひこ

また灸をすえたのもしき御異見は
さてくあつい思めしかな

灸すえる人のもとに行て

野老髭面

すゆるより病のねをば錐もぐさ

もみ込やうによしいたむとも

ある人澁川流の柔術出精のよ

しきゝて 自分齋子璉

柔術にみのいる栗のしづ川は

手を出すさへもいたいお稽古

狂言鶯蛙集卷第十六

雑歌二

竹馬行列

平秩東作

乳母がもち五ッだちなる行列は

日も竹馬の伏見泊りか

橘

銀杏満門

あどかたもあらぬながらの橋柱

ながく朽せぬ名ばかりにして

竹

平左段

おきふしもむづかしけなる布袋竹

そのねからこのいかに殖けん

鶴

手柄岡持

芦の葉の片假名ならば眞名づるの

聲をもわかのうらみ成べし

龜

四方赤良

よろづ代もくむ酒がめの尾を曳ん

酔てはごろのごとくなるとも

富士山三十五首の中に

豐藏坊

しら雪のふるがね店の不二香爐

あまりたかねで買ふ人もなし

富士

河原鬼守

赤人の苗氏の山といふ字にも

またへの字にも見ゆる不二が根

瀧

左段

山手よりさつと白旗ひと流れ

落すて見しは瀧のみなもと

王昭君

武士八十氏

おもひきや都を遠く出ていま

胡地の人よと言つべしとは

越後のしらが海苔を囉て

平秩東作

とし波もよりくる濱のしらが海苔

磯菜とや言んおきとや言はん

秦黒つらが家に人々つごひけ

るにこれかれあるじし侍けれ

ば

朱樂漢江

梓弓彌左衛門町のまどゑとて

肌をぬいだるけふのもてなし

蘿保曾通か家にて朱樂漢江便
館潮鯉鮒などゝともに酒た
うべけるに蘭陵の酒もかくや
と人々いひけるをきいて

白川與布禰

この酒は千とせの松のもとなれや
琥珀に色の透通りぬる

返し 蘿保曾通

客人のこゝに琥珀もたまなれや

塵の藁屋の吸筒のさけ

まらう人のいたく酒に酔たる
に杖をつかすどて

牛籠遅道

足もどはよる万代もこの杖を

つき雪花にあかぬ酒もり

みな月廿日あまり九日の夜二
もしとかいへるたかどのに遊
びめして夜ひとよ酒のみける
にさりにし世にすみける人の

かたちにいどう似かよひて

見えければすゝろにむかしを

おもひ出て 婆阿證人

夢の中に夢をむすぶの神ますも

なつ拍手のうつゝなの世や

月花酒友 再賀

汲かはす酒の友とやみし野の

はなは手もとにあり明の月

深更飲酒 内匠半四良

さい波のよるも雙六打をかす

志賀から酒をふけてのまなん

手づから蕎麥を調じてあるじ

し侍るとて 大石小石躬景

細道にあらでつたなき手ぎはかな

ふどくもそばをうつ山のもり

かへし 京間内則

花よりも白き此そば手打なら

太くもよしやよしの山もり

川上といふ處の蕎麥を人々に

振廻ひ侍りしにみな人あまた

たうべけるを 山手白人

音にきくひの川上の新そばは

顔をならべてをろちほご喰ふ

信濃の新蕎麥をたうべて

銀杏満門

花よりもしろきしなの、新そばは

粉にさらしなの月も及ばず

ある人のもとにてそばをたう

べて 鹿都部眞顔

立こともなら坂やこの手打蕎麥

ふたもりかへを免せかしは木

新蕎麥振廻んど勝手のおさ

うさうしければ 北川北川

新そばをみちにせんと引拔て

すはや手打のこねかへしぬる

ゆくりなきあるじまふけにそ

ば調せんといなかな人のもて

來りけるふくろものをどうで

みるにひえの粉になんはべり

ければ

空音待兼

ひえならば三千坊とおもひしに
とちめんぼうをふる舞のそば

茶飯満腹

山住猿雄

茶めし喰ふ大師河原の戻り道

はらはりたやのうんと立足

左候某

大佛の腹もおよばぬなら茶飯

釋氏さる手もあく迄ぞ喰ふ

なら茶に淡雪豆腐たうべて

足曳山町

俣はなら茶にのこるあは雪の

豆腐も口に消やすくして

ある人のもとにて酒のみける

にうるはしき女のわらはのう

なぎのかば焼もて出ければ

漢江

かばやきのうなぎは妹が髪なれや

さすくし迄も油じみぬる

鯨てふものを人のもとへ送ら

んどやくして忘れけるをさい

つ頃ちぎりしことはとくわす
れにけるやといとむづかりて

いひおこせければやうくか

のかしらを遣すどて

やそうし

幾重にも御わび申てみくま野の

濱ゆふならぬ鯨こそやれ

ある人のもとへ生鱈を二切お

くるどて

こゝろざしばかりといへど大食の

人には鱈のたつた二切

木倉といふ溝にて釣得し鰯を

人のもとへ贈るどて

莚田脛長

はるくど釣てきくらの魚なれば

骨もまるたにあがれ此ふな

鰯昆布卷

十二栗圃

治れる世もはら巻によるこんぶ

われら如きものゝふなまで

とこぶし

算木有政

岩角の沖の海つらはりまがた
あら男浪どてこぶしとこぶし

蒸石餘魚

うちのり

是もまた火鉢の火にぞ入にける

されば其名もむしがれいとて

茶選水

千代有員

茶の水はあまたあれども武藏野に

わきて汲まくほりかねの井戸

婚儀支度どて木賊に兎の模様

の小袖の出来たるときゝて

膝元佐久留

下紐をどくさの中のよい首尾は

卯の毛で月のさはりだになき

ある人のもとに年ごろみやつ

かへしけるよしといへる女の

縁談を賀して 万歳館十口

縁談の出来てはこゝにいぬはりこ

ほうこうぶりもおよしとの故

人の風ひきたまふを訪て

問屋酒船

引風の邪氣おひはらふ正氣散

只一ふくてげんそうの夢

目をやめるにことよせて物お

こたる人に 便々館湖鯉鮓

何事もうつりやすさは五六日

見えぬは物のやみめなるべし

しはぶきやみやみて

鳴羽盛

五月雨の池のあやめにあらねども

引ぞわづらふ風のせつなさ

をさなき人のもがさやめるよ

し聞て親のもとへ詠て遣し侍

る ころふ

ひと夜にて山を上たる富士なれや

さいなみもよき志賀の水うみ

ある人をこりをやみけるによ

みてきりの葉にそへておくる

ほくせん

わらはやみふるい落せば桐の葉の

これからかげもさゝじぞ思ふ

鼠の大根をくひければ

十口

この家の大根くふたる鼠なら

處詮ちいとも危略にはせじ

土圭大狂 出諏訪耳彦

拍手さへ床のまぬけのかけ土圭

只てんびんのふる物にして

柳橋わたり四ツ手網をひきて

名万壽盛方

後の世も捨ておもしろやなぎ橋

引たびに魚の三ツ四ツ手網

袖か浦の茶店に休らひて

夕霧色

茶の花香にはへる袖が浦波は

みな立よりて腰打かけん

題しらす 坂上米人

太郎より次郎はこゝろたけ馬に

つかみつきげのはては嘶き

眞乳山人

とりぐにあゆのてしほのとり肴

まだよひながらあくる盃

大屋裏住

蟹のかる藻に住む虫の玉子やら

膳のみぎはにわれからもあり

塵取 奈良花丸

手筈ははきこむとても世の中の

人のおひげのちりはごらじな

このゐの留主としらでたづね

侍りければ 元木あみ

我も人に留守を使ふはたがいせん

ごばんとしらでたづねくろ石

返し 平生三里季安

かくときゝ何と將基のぼんの留守

みなふびやうしな後手に成金

ある人わすれ置し錢二百文を

こさはりなしにかりてつかひ

侍るまゝさげ札して置ける

をなしく

白浪の名にはたゝねど斷も

なくて二すぢあしのかりざり

蟹のすなごりするを見侍るに
網に掛れる魚の洩んとするを
たまといふ物にてやがて取得
るを見て

野老髭面

網の目にかゝる難儀の折ふしも

切ぬけられぬたちの魚かな

綾瀬川に釣するを見侍るに魚

一ツだにつり得ざりければ

山蔭青則

釣たるゝ糸のあやせの川つらに

たえずかゝるは船のみにして

吉原の堤しつらへ侍るを見て

手枕歌種

一筋の土手をにほんの堤とは

ふしんに掛る事もことはり

馬ひけるをのこの闘論し侍る

まゝにより來る人を足にてけ

たりけるを見てよめる

あをのり

來る人をあしげの馬の口つきは

あらそふ聲もひんのわるさよ
よしの山にわけ入てすゝのか
り庵にやすらふとて

遍亞方岳

よしの山すゝの庵にすゝかけを

かけてまゐらん露のかれいひ

南江觀漁

をなじく

名にしおふ江戸紫の袖がうら

ぬふてふ針ももつや釣人

四辻の茶店に立よりて

智恵内子

櫛のはをひくほごうれる煎じ茶屋

四辻のうらのかみさまもよし

晦日月十五夜の闇と言ふこゝ

ろを

全交法師

けいせいの誠晦日の月なれや

月のくらうも十五夜のやみ

人々菊の歌詠ければ序に

山蔭青則

愛相に出せし花のきくたばこ

烟もたかくあがりませがき
しせうはじめて長持といふ名
を給ひければ 久留間長持

下さるゝ其名も久留間長持の

ふたにもみにもあまる嬉しさ

唐詩のこゝろをよめる

よふね

月落る漁村に僧の旅寢して

かぞへる鐘は寒山寺かも

物秋といふ名つきたる人のも

とへ詠てつかはしける

露友と地

新米の狂歌もいつかみのりしは

げに豊年のたなつものあき

ある人の乳母なりける女のも

とにみそかに通ひけるをある

じいとはやうきゝつけてもど

より柏木に葉もりのかみもい

ますなればかくてはあるまじ

きふるまひかなどかの家童子

もせちにいきめければ

紙屋丸彦

今さらにごういひわけもあら磯の

波うちく御免あれかし

秋風女房

あらいそのなみくならぬ言譯は

よそのみるめもきの毒ぞかし

丸彦

うば玉のくらう重なるあやまちは

只いくへにも御免あれかし

秋風

鳥羽玉の夜の麻の苧あさはかに

いふもさがなきいご口ぞうき

丸彦

わび言を杉のむら立ちちし名も

ほご時すぎは御免あれかし

秋風

ほごぎす不如歸ふさぎ今更に

御免も口のすぎのむら立

丸彦

よしあしもうらより出し事なれば

なにはのこども御免あれかし

秋風

難波江のあしふみつけれし恨みをば

身をつくしても言んごぞ思ふ

丸彦

狂歌師にいらぬ狂歌のわび言は

あつかはなれご御免あれかし

秋風

陀言のここの葉草の露ほごも

しらぬ返しの三十字一もじ

男女の中に子まで有けれご日

ごろ中むつまじからず女の出

て行を見て 土師搔安

女房をさつた峠の親しらず

子しらずなる内はあらうみ

このころもはらたはれ歌を世

にもてあそびてごにたはれ

たるひやうごをいひのし

るにござはさしたるおかし

きふしもいひ出ざりければい

さゝかあざけりて子子孫彦が

もこへよみてつかはしける

よみひごしらす

糞船のはなもちならぬ狂歌師も

葛西みやげの名はかりぞよき

返し 子子孫彦

葛西菜の賣ごのはに買ごば

くそをくらへごさらば言なん

狂言鶯蛙集卷第十七

雜歌三

ある人のもごへ杉箸おくると
て詠る

網破損はり兼

ゆかしさに贈れる三輪の杉箸は
たづぬるといふしるし計りぞ

閑居夢

野老髭面

さくら炭枝折くべて置きたつ

あたり靜に夢もみよしの

替女夢

唐衣橘洲

漆桶箒木こばかり見る夢は

これ妄象といふべかりけり

加茂川の邊なる茶店に立より

て

夕霧まかき

かも川に出るみやすみ處なら

客のくるまもあらそひやせん

萬這壁

千代有員

つる先はよし京までもとゞくらん
萬はひあがるおほつ壁とて

刺鯖をよめる

山手白人

さし鯖のはなれぬ中の天にあらば

これもひよくのとり肴かも

下駄と焼味噌

祇洲

諺に下駄と焼みそとはいへど

いづれはくにはへるゑんも有

狂歌書とむる物の表紙に

愛多子子子

秋風に吹ちらされしことのはを

かきあつめては棚に置くしも

腰のものゝさぐりに蟹をつけ

れるを見て

垣覗人真似

あい口のさぐりに蟹をつけたるは

横にさし行く道理とぞ見る

題しらす

武士八十氏

かす人ご金かる人ご證人ご

よつてくだんの五徳也けり

角田川のはごり何がしが別業

にて人びと歌よみけるに夕つ
かたすだれのうち樂奏せられ

るこごに横笛の音すみ渡りて

沖のかもめもこれがために舞

ふにやと思ふ物からその名を

とひ侍るに夕霧まがきこなん

きこへ給ひければよみて遣す

とて

鳴鞭蔭

その人をたちかくしぬる夕霧の

まがきか嶋のまつや笛の音

かへし

夕霧笛

笛竹のあはせて響ることのはは

いどや不審もはれぬ夕ざり

甲子の夜ある人のもごへまか

りて

童子島臺松蔭

よいことをしろ風ならたからをば

残らすひいてこちへきのへ子

童子竹馬夕影

大黒にそなへますゝめでたさや

今宵ゆるりとねりま大根

童子月影澄遊

夜食をば立れぬばかりくひこみて

とかく果報は甲子てまで

したしき友の別莊の脩理し給

へる宅にて奴豆腐に酒のみけ

るに番椒を女のわらはのわす

れければ

十寸見蘭洲

豆腐から大根やつこのかけてくる

からき浮世にとうがらしも無

人々歌給りける返しに

齋馬雪

狂言を三十一筋のはめことば

ありがたひ友お嬉しい友

悪女向鏡

大木戸黒牛

まつすぐにうつる鏡をうらむるは

己がころのゆがみつるかな

ある船樂すこて やそうち

糸竹の音はすみだ川船人も

きけや曲さへ渡しものごは

あるやごとなき人のあらたに

高どの經營し給て高樓臨三弦

江といふことを人々に詠し給

ひければ

節松嫁々

この殿に千代もすまなん玉だれの

三筋のいこのえにしひかれて

はるかにをのれより勝れし人

ともしらで碁を圍みて手もな

くまけゝれば 橋本蠻太郎

調布も出來ず日くろむ碁をさらし

白い黒いのたがいせんたく

鳥指酒宴

羅知乃秋兼

鳥さしのもちにあらねど盃を

指つおさえつねちる酒もり

雨中酒宴

白川與布禰

淋しさにをぐる平家を語らせて

酒宴なかばのあめのもり久

述懷

板屋常恒

老ぬればこしはまがりて釣ばりの

うきにつながる我いのちかな

まかき

かくてさへ此世にすめばすみ俵

底たゝきても烟り立ばや

寄屏風述懷

きつしう

世にたつはくるしかりけり腰屏風

曲りなりには折かゝめども

寄鳥述懷

法橋吾山

山がらの餌にあらそひて落るより

老のくるみのせわしなの世や

仕立物屋述懷

畦道

とに角に人の身はゝをあはせんと

うき年月をつもるゆきたけ

寄柿述懷

はりかね

かく迄も老木となれば數ならぬ

身はしふ柿のあちきなの世や

大石小石躬景

御處柿になりはみえても地下に今

ほたりと落し澁柿ぞうき

掛取述懷

秦玖呂面

てうちんの延つちゝみつこしの弓

張合もなき老が古かけ

古傘述懷

畦道

開くべき時節もなくて古傘の

今はかみにも見離されにき

寄搔餅述懷

吾山

老の身の今さら耻をかき餅の

かゝみに向ふむかし戀しき

寄竹述懷

ひけつら

簾に身はまだ捨きらぬ男竹

ふし／＼有てむづかしの世や

寄山述懷

赤松日出成

借錢の山もつくばの高聲に

このもかのもの言譯ぞうき

寄壁述懷

一目關守

月と日のうつればかはる壁に影

ひたすら老のまがる腰張

寄薤述懷

まかき

我座をば人にゆづりてやれむしろ

へりくだりても世を渡らずや

寄玉述懷

朱樂漢江

はしりより夜も光りて老らくの

あたまは玉の數にこそいれ

遊女述懷

邊地間川成

傾城にうそつかぬ身もある物を

晦日に月の出ぬことぞうき

奴述懷

河原鬼守

老込て時にあはぬも目みえとて

ふるや土圭のやつこ奉公

寄月述懷

しろひと

ぬき上た月の額はむかしにて

きんかあたまの影ぞさやけき

貧者述懷

宿屋飯盛

金を手に握りこぶしで我あだの

貧乏神のつらをはりたや

寄魚述懷

よふね

立よりてつく／＼みればから鱈は

としへぬる身のかゝみ山かも

五兩とはいつ時代の相場なり

けん時にごりては千金の身を

も全くし侍るものを

きつしう

錦にも綾にもあらで堪忍の

ふくろはみても見事なりけり

狂言鶯蛙集卷第十八

雜躰

短歌

伊豆國熱海御湯に罷りて

加保茶元成

わきいづの、あたみの御湯に、きて
見れば、まへははるけき、沖津な
み、ごたりばたりと、うちよせて、
うしろはたかき、あしびきの、やま
ひとこまる、人ばかり、何とせん
きに、しやくつかへ、ひせんがん
瘡、しつふかき、おるごあたりを、
さしやなぎ、ねぶかくみゆる、ねぶ
川の、せきもこんこん、こんとな
く、狐の聲と、もろどもに、きくは
たぬきの、はらつゝみ、ちゝとさ
びしき、をりからは、たゞのみくひ
に日をおくり、あしたは門に、たち

いでつ、夕は庭に、たちいでつ、そ
こらしよなめく、むすめらが、ひよ
んなしやつらを、うちみれば、眞黒
鬼も、十八の、にくからざりし、す
がたぞと、人みないへど、まがご
や、人のいひつる、つぬさはふ、い
はに目鼻の、つきしこと、はたすさ
まじと、みえつるは、雲の八重た
つ、山の神、あれもたれぞが、内儀
かと、しばしまもれば、沖津藻を、
かしらにゆひて、かるいしを、きび
すになして、たちまふを、見るにな
ぐさむ、かたぞなき、こしにさいた
る、たびがたな、さびこをとりて、
をどりつゝ、うしほ煮にせし、ま
そみ鯛、あらかん舞を、見さいな
と、やうくひいふ、みめぐりの、
日數すぐれば、はしり湯の、神のし
るしと、うれしくも、飛たつばか
り、あしばやめ、荷もちつくらひ、

この宿を、うしろになして、さらば
おさらば、

しなたてる草さへいくとさき湯を、
水にしなして立かへるかな

借錢の山をのぞみて詠る

武士八十氏

千はやふる、神代もきかぬ、ひんく
うの、神の氏子と、なりしより、た
だふ自由を、するがなる、不時の物
いり、やよければ、筆とることも、
たびくゝに、ことをかきたる、しや
うもんは、くだんの如く、借金の、
やまひとなれる、身のうへを、おも
へばげにや、あしたには、おそく起
つゝ、ゆふべには、早くもいねず、
酒のみて、ひぢりのごと、目をく
らし、一升三百、六十の、びんぼう
樽を、まくらにて、まてご果報のき
たらねば、出入酒屋の、通ひ帳、ま
づとり出し、なかむれば、拂ひ残せ

し、分厘の、ちりよりなれる、山は
富士ほど、

是きりでかへし歌とはたのもしや
我が借金をやまとたましゐ

折句

ほどゝぎす

山手白人

はりへよくとも小舟に取のりて
岸漕ぎ行けば涼しかりこも

沓冠

むめ、やなぎ、もゝ、つばき

をなじく

むこと嫁やらめでたやな君よりも
ものたまはりてはなの名開

廻文

筑波根のふもと金津といへる
里の賤の男いにしへの人の色
紙あまた持たりと見せければ

をなく
みな河つたへつ流れつもしるし
積れかなつへたつわかのみ

唐來參和

櫻木のどびしかをりははなのその
縄張おかし人の氣らくさ

混本歌

白人

あさづけは夕めしまでに うせや
すき香物ぞかし

便々館湖鯉鮒

眼のちりをはらふ物からこれぞこ
のたまはゞきかも

旋頭歌

白人

きられたる髪の筋わけつけて後
行時に社知ぬ女郎に逢心地すれ
赤貝のからにいたりたる米いれ

て升毘かけけるにかの貝升に
はさまりて鼠のがれければ

牛籠遅道

此いごはさためて千代やふる鼠

此赤貝の辛き命をひろひ升毘

檜皮釘武

行燈の丁子頭は秋の夜長に詠居る

徒然草の花かごぞ思ふ

狂言鶯蛙集卷第十九

釋教歌

達摩贊

山手白人

ことの葉にささりの花も匂はねば

かく本來の面目もなし

山寺晝飲

鍋垢丸

ひだるさは猶やま寺の秋のはら

露をむすびの晝めしもなし

銀杏満門

諸勸進出さず候がまことなら

げに山口のくちやひるめし

佛生會

千代有員

丈六とならせたまはんみたけさへ

一しやく尊の御誕生かな

大寺灌佛

龜扇法師

年毎の産湯にそゝぐ新茶より

こちやしらぬ身の逆に立釋迦

鵜柄仙口

灌佛は先大寺へまゐりそめ

末寺はよそに新茶卯の花

節松嫁々

大寺のひろきみのりの道なれば

ぼんぶさかんにほとけ生るゝ

白川與布禰

棟高き寺にちいさな灌佛と

みなくちゝに唯我獨尊

于蘭盆會

遅蒔千種

とりあへず手向る蓮の撞木葉に

おくまなむあみたま棚の露

日蓮會

今混馬鹿壽

妙法ののりの手ぎはにさくら花

是や小春のよしの紙とて

御講霜

紺屋朝手

朝ち原きるはかた衣ばかりにて

けふも御講の霜はおくらし

飯焚の念佛するを聞て

宿屋飯盛

めしたきの向ふ火宅も退ればや

なむぶつゝこにへ上る釜

魚屋佛事

望月志良夫

肴屋のけふの佛事による人は

皆なまぐさき中とこそしれ

寄玉子釋教

四方赤良

わしの山いでにし人は世の中を

こごゝく我玉子と思ふ

寄花釋教

嫁々

よの常の花にはあらぬ花のいろを

そくいののりの教にぞ見る

寄食釋教

幾代餅春

ぼさつにてひだるい事を助かるは

是こそりのちからなりけり

かつしかのさゝえ堂にて

雀 叟

つのある心なもちそさゝえ堂

佛の道のかいをたもたば

或尼のあらたなる庵を結びけ

れば

尼の身のむかし束ねし髪ならで

草の庵をけふむすぶかな

としごろしたしき女の尼に成
ければ 長掛鴨路

豆柿の頃よりなれしこのもこへ

身をかへてくるあまぼうし哉

或寺に護摩修行するを見て

武士八十氏

修す人の衣は汗にひたしもの

こまとは言ごけしの香ぞする

古寺に年ふる猫をみて

飲口波志留

瘦猫とみけなされたるをのが身は

齋にもつかず年をふるねこ

金杉永福精舎の鐘の供養に詣

侍りて 素布子町

つきそめと聞てや生めつぼうに

歌よみあぐる黒拍子かな

題しらす 昨覽坊

貧賔のにかくしくはおこれども

一すち道のふみも迷はず

如是方 鹿都部眼顔

漕出す渡ししの船を引とむる

一文銭のちからづよさよ

如是因 をなじく

蓮葉におく九ツのしな玉も

露ばかりなる種はありけり

如是本末究竟等 朱樂漢江

雲間よりぶらりと下る鶴の尾は

尻かかしらいかでわくべき

狂言鶯蛙集卷第二十

神祇歌

社頭梅 茶屋町末廣

鬼板の瓦のはなへ吹ためて

くさめも匂ふ神の梅が香

赤松日出成

神がきはこれみてぐらのゆふ禪

まつさがけし鍵うめの宮

夕露色

此梅はぬさよりぞまつとりあへず

手向に咲ぬいづのまに

武士八十氏

神垣の梅なればさて咲からは

すこしもおそく塵に交はれ

初午祭 節松嫁々

はつ午や稻荷の杉の楊枝にて

くふこわめしはあけの玉垣

鍋垢丸

初午にたつやおまへの額うらは

拾羽織をきさらぎの空

葛城黒髪

初午やかたぶく宮居神さびて

いく代かけたる千早ふる繪馬

内匠半四郎

赤飯もあら初午の手ならひ子

けふふしよくにもたれてや書く

銀杏兩門

いなり坂のぼれはくだります鏡

神ものぞきてみつの玉垣

この頃生れごしの七ツ目なる

十二支の繪かきて身のさいは

いをいのるに大黒天のみかた

ち繪馬にかきて初午日稻荷の

御社にさゝげ奉るを見て

甲子のその七ツ目の初午に

荷ひし稻のたねも摩訶迦羅

するひろ

このしろのかはりに神に捧げなん

けふはこはだの里の初午

九郎助稻荷奉納豊年初午

四方赤良

豊年をうがのみたまの祭とて

田のくろ助もゆづる君が代

下戸初午 唐衣橘洲

初午のみきにや顔の色に出て

梅のき下戸も香に匂ふなり

石清水臨時祭 加倍仲塗

鈴の音のりんじ祭と成にけり

下部の口に何いはし水

社頭花 大木戸黒牛

吹く風に櫻はぬさとなるやしろ

神さへ花のちりにまじりて

春日社花 きつしう

宮守はもるごも花の春日山

人がかざゝは我もかざゝん

社頭葉櫻 鵜柄仙口

何となくしめのはりたる夏木立

色もあらたに神の葉櫻

住吉田植 野老髭面

お田植も最うおほかたは住吉の

そりはしとりてくふやひる飯

祇園會 遠山加壽美

打ならす太鼓の音もでんかくは

是祇ぞ園のよきはやしかた

ゑびす講 眞間川成

恵びす講柏手を打ときなれや

冬へうつればあきないの神

土師搔安

あきなひに千金の利をえびす講

春とあきとの二度のかけとり

耕書堂

賣かひの千々の黄金もよみつきぬ

三十一文字の和歌ゑびす講

寄插花神祇 問屋酒船

いけ花はしらにぎて葉は青にぎて

四瓶五へいも床の間にく

寄月神祇 きつしう

大小の神祇も見ると起請文

くだんの如くてる月のかけ
磐井八幡祭禮に

童子磐井眞清水

十五夜の月を祭りの氏子中

すゝきのだしをいは井八まん

神前に新穀をさゝげ奉るを見

て

簸河賀美

神領の稻かりわらはたばねても

なほ行末をいのる出来秋

こたびあつまれる歌どもやか

て甘巻となれりければ人々祝

ひの心をよみけるついでに神

祇の歌とてよめる

漢江

この葉はするすみ吉ノ神がきに

かきあつめてよ松のはた巻

狂言鶯蛙集卷第二十終

夫鳴_レ花鶯_レ笛發_ニ谷渡之音_一栖_レ水
蛙_レ囊入_ニ愚鳥之思_一茲自_ニ古_一金_ニ以
至_ニ文金_一歲過_ニ虛言_一百貫時餘_ニ小
判六十目_一茶飯月_ニ炊_レ狂歌日盛自_ニ
猶撫聲之婆様_一至_ニ杓子顔之飯_一焚_ニ
皆莫_レ不_レ即_ニ贅口_一而詠_ニ夷曲_一上者_中
共交_ニ於_ニ人丸赤人之歌_一膝中_ニ不
出_ニ於_ニ出雲闇雲之垣根外_一無_ニ喜無_一
悲不_レ遣不_レ逃嗟乎盛_ニ哉抑_ニ狂歌之_一
濫觴者起_ニ自_ニ水無瀬之御殿_一具_ニ
有心無_ニ心之休分_一梯本栗本之_ニ
連自_ニ是以_ニ來其流非_一浪華有_ニ
貞柳本端_一江戶有_ニ未得_ニ卜養_一大底
所_ニ詠胎_一灸人口_ニ又近有_ニ大根_一太木
者狂歌骨髓之好也身在_ニ市中_一心
慕_ニ雲上_一太木既沒_ニ狂歌_一益盛座上
滑_ニ稽欺_一西王母之息子株_ニ言下大_一
笑失_ニ周褰_一似之無_ニ人_一相_ニ一日狂_一
集朱樂館_ニ飲_ニ酒撰_一歌偶閱_ニ古今_一
之一集_ニ更吟_一歌仙之六評_ニ馬場子_一

有_ニ蛙鳴_一池端_ニ之什鹿都部傳_一鶯
在水底_ニ之篇_一主人摘_ニ二子之姓_一
字_ニ名曰_一古今馬鹿集_ニ或難_レ之曰抑
古今集者_ニ二十一代之開山和歌三神_一
之鎮座借踰_ニ之罪無_一所_ニ逃也_一於是主
人酒_ニ力醒_一茶談歇_ニ改曰_一狂言鶯蛙
集_ニ然則法々華經之聲洋洋_一盈耳_ニ一
寸二寸之足飄々離_ニ水始_ニ于_一六人歌
仙之題_ニ終_ニ于_一四季戀雜之歌_ニ勸爲_一
廿卷_ニ以傳_一四方_ニ固寶_一引之繩不_ニ
撰庶分銅之玉有_ニ光于_一時天明四
年次_ニ甲辰_一極月幾望因_ニ九乃字之_一
假字_ニ添_一眞名振之後序_ニ云爾_一

四方山人

こたみ朱樂館にあつまれる歌ども
をやがて櫻木にいのちなかうせん
とす何がしら三人よりてかうがへ
はかるといへども白川のながれあ

さく湖の底ふかからぬさえのほど
をはちてあまたたびいなみ侍れど
書肆のもごめすてかたくてすでに
此ことにあつかるにぞ

武士八十氏
校合 白川與布禰

便々館湖鯉鮒

徳和歌後萬載集序

さきにゑらべる万載狂歌集は古きを拾ひ新しきをくはへてかいつける也そのふみ世にひろこりてのち月にまし日にそひてすき人多く出きにけり鳥がなくあづま歌今やさかに行れなれりければむしろおる翁も夷曲のさまをさぐり犬うつわらべも此鄙ぶりをもとめて芻堯のものもよみ雉兔のものもまねぶいつちくたつちく太右衛門どの乙娘も濱のきさごのかずまへおかしくによう／＼鳥のなかぬ日はあれどもたはれうたの噂たゆることなしかく計時めくことはさき徒士のふりにし昔もきかずさればはこやの山は指物屋のわたし細工とおもひみごりの洞とは十九文見世の箱のうちかとおほへたる久かた

の糖賣あらがねの土こね千はやぶる紙屑買ぬば玉の夜蕎麥うり手枕の赤坂奴いそのかみふるがね買をいはす花のお江戸に生れどうまれ來りこきたる人こに言葉の花木ごとに咲て終にむだの山をなし心ざしの露は草葉よりつもりて笑ひの海をなすげにや狂したるさまながらいづもやみくも八重垣のへだてあるにしもあらずかしの木の角ものきれどもいよ／＼かたく仕出しの漣うちは見かけよりいよいよ高きたぐひならん張物をはる林のはな敷のしにあきの木のはの色／＼に品かはりて興あるふしおもひすてがたしといらざる肘をはりまがたしかまのかちはだしにてひろひあつめたる數は千うたにあまれりしかはあれども蜚の藻

鹽はくめども盡す切おとしの札は揚るにもれ秋のこの葉はひろへごもしげく大門の切手も燈籠の夜はあらたむるにいとまなきたぐひわきて空とぶ鳥のもくあみをもれ水にすむ魚の釣をのかれて四方にたよらず丸のゝのよすがなき歌はしらざる所也かれこれゑりもとめて難波江のあしかりしふしには筆を加へ山の井の淺き心にはひいたりをやとひ四方山人ふたゝび是をかいつけて徳和歌後萬載集と名づけ予にも序せよと乞ふいなむも興なしとはかりの咳拂ひにはかりを忘れて筆をふるふも此ふみの千世かけて住よしの松真木にふすばるこも玉津島の波よけ杭にかゝりといまれとおもふことしかり

あめあきらけきよつのごしむつ
き
山手白人誌

すはらやのたのみごとをうけあひ
ていかゐたはれ歌をゑらふことを
とゝしのくれのせはしき比よりは
じめて夏の日のながきことしにを
はれりいはゆる古今後撰夷曲の集
のみにあらず堀川百首になすらへ
てよみつらねたるためしをかしこ
いひ馬鹿といひその名おほきこ
ゆれごこの比のやうにはやりて髭
くひそらすともかうまでたはれた
る名をつき侍ることをなほまれな
り口あひのかしこきものさかもり
の席なごに望て地口交りのかたこ
とを御祝儀にのべたるなんひと通
りはありけるしかるにわかきみも
さかへてましんますまんざいしふ
をゑらびしよりこのかた二とせば
かりの春秋四方の赤のみかけ山の
むらがらすあけら館まるのゝ字
のごとくまごゐあへり落栗の落こ

ぼれをひらひはなたちばなの香を
かぎ出し侍りき濱邊の肴市さら
ににぎはひ都下の歌角力またさか
りなりたゞ遠慮會釋のむかし人す
くなく會しづかによりあひしを
もかげをしたふのみにあらずまた
杓子定規のいま世のはやり人ぞや
めきの志まつのはをしらめむため
ここさらにかきささすものなら
し赤良さかづきの數つもありあしも
ごのよゝごよろけななくせのなく
てやまずふたゝびのゑらびをはじ
めてしもの句をきゝてかみをこ
ひかみのくをうけてしもをたづぬ
るやうになりてふつか酔のあと
をひきすゞりぶたの残りをあらず
べきはしのひまゝ春つばき夏は
ゑのきに秋ひさぎ冬ひいらきに同
じき歌をはじめてはなむけたびた
ちくやみよろこびれんばれゝちの

徳和歌後萬載集第卷一

色くめつたやたらにくさく氣
のよひ佛のかほをなでせつない時
の神だゝきにいたるまで部をどり
まきをたばねて森の木のはの数々
に心のたけ箒はきあつむるよし
みろく十年辰のとしきのふとたつた
る春のはしめこれをひろむ名づけ
て徳和歌御萬載集とやらかす事し
かり

春歌

ふるごしに春たちける日よめ
る 紀春長

初はるご歳暮を祝ふ門かざり

わか松もありくれ竹もあり

立春

朱樂漢江

佐保姫のきたる霞のうちかけは

けさしも春のたちをろしなり

山手白人

につこりと山も笑ふてけさは又

きげんよし野の春は來にけり

元日

白鯉館卯雲

一夜あけて桃太郎月のごけしな

霞たなびく鬼が島山

手柄岡持

久方の空錠なれや天の戸を

あけたつ春のかざりなければ

酒上不埒

昨日こそ煤は取しがいつのまに

葉竹そよぎて門松ぞたつ

もこの木網

又ひとつ年はよるごも玉手箱

あけてうれしき今朝のはつ春

智恵内子

通り升と岩戸の關のこなたより

春へふみ出すけさの日の足

濱邊黑人

面箱のふたあけばのゝ鳥とび

三番叟から春はゑひく

竹杖爲輕

昨日まで年は忙しく走りしが

明日日あしものごかなる春

大屋裏住

あけそむる年の宴の扇うり

よぶ一こゑに春は來にけり

腹から秋人

春來ては野も青土佐の初霞

ひとほけひくや山の腰はり

宿屋飯盛

かけこひの夜明に重き革財布

かつぎし肩もはるは來にけり

名満壽盛方

鳥がなくあづま男の先ふれは

春たちかへる花の江戸入

北川はくせん

寄波に別人しごのあまならで

とりえてうれしあら玉の年

内匠はしら

もゝとせになりても人は松の下

くぐるときはのみごり心ぞ

から衣橋州

ふる年は拂ひ清めて手拍子を

うちとに目だつ春の神風

卯のとしのはしめに

峯松風

うの毛にて突たる程も疵なきは

君が八千代の玉のはる哉

花道列禰

をそろしき虎の年の尾踏こえて

光のどけき玉の卯の春

はるのはじめうつし繪の書き

ぞめすこて

糟句齋金丹坊

新玉のとしく弟子を取集め

寶をゑしが家のかきそめ

町屋早春 圖南女

元日はまた春霞たちこめて

ふつかに見せをあげぼのゝ空

寶引 屋立綿純

寶引にだいゝ所にぎはしく

手をしめ繩は親へゆづりは

櫻飴 山道高彦

雪さちり雲と眺むる花なれば

櫻あめごともなりぬべらなり

霞 石部金吉

一越の調子を春のうらゝかに

山のかみむもかすむ鸞鏡

加陪仲塗

み吉野の山の葛のこのりにして

霞の衣あらひはりせり

小川町霞 智恵内子

さは姫の霞の衣ぬひたてに

かゝるしつけのをがはまち哉

鶯 手から岡持

しら雪はきゑさうなるが鶯の

聲をはるべにならふ法花經

佐倉はね炭

笹の戸をおこしに來なく鶯に

しのゝめさませ數の一聲

山家鶯 山手白人

そりや春か北山里の隠れ家に

御慶とつぐる鶯の聲

菜畠鶯 梓弓八中

鶯の聲もたか菜ををろぬきて

畠をあつちこちにさびなく

鳥屋鶯 ちる内子

まづ徳をとり屋のみせの鶯は

高いかひてにありつき日星

子日雪 銀杏満門

老が身も頭の雪をふりたてゝ

孫やこまつにひかれぞ出る

子日琴 四方赤良

この子日いづれに心引れまし

松は十八ことは十三

朝寐晝起

峯の松琴のねのひにひく歌も

聲をはるべや風のふき組

油杜氏ねり方

冥加あらせ玉の緒琴を千代迄と

ひくやはつねの松のみどり子

相應内所

緑なる松をねの目にひく琴は

千代よろづ代も天下太平

むつきなぬかのよ四方赤良あ

けらかん江加保茶もとなり鶯

から丸なごどぶらひ來ませし

に雪さへふり出ければ

棟上高見

蝶とどび千鳥となれる淡雪の

こよひはとまれ七くさのほに

をなし夜あすは子日なればと

て亥日小松といふ題にて

朱樂漢江

亥日からもはやねよとの刻限を

きけば小松をひけよつの比

五明樓にあそべるあしたつと

めてかへらんとするにあるじ

のけふは子日なり小松ひきて

あそばんとてとゞむるに

よみ人しらず

昨日からよそにねの日の松なれば

けふはひと先うちへひかまし

七種 於保曾禮長良

七くさをはやす庖丁かな火箸

にはんの鳥のわたるまな板

若菜 手柄岡持

鏡汁のつまごもなさめ山鳥の

おろぬきそむるけふの若菜は

酒上不埒

野べに又葉ものびかねし鶯菜

つめとかすかなねにこそ有けれ

門松とりたる跡を見侍りて

馬場金埒

七草もはやすぎ立てる門ならで

しるしばかりの松のふたもと

初春大食の人をみて

加茂季鷹

初春にあがつた飯の多ければ

一座は除目をごろかしけり

はるの日麥飯をたうべて

銀杏満門

麥飯の鉢の中さへかすむはご

くひつくしてや腹もはるの日

残雪 やはり棟梁

雪と共に残りし去年の借錢も

またきえやらぬかけ乞の帳

餘寒埋火 遅蒔千種

春乍らさむさに花のかじけ咲

をりて火桶にいけ田炭かな

春巨櫓

山手白人

一度はたゝみし蒲團又かけて

わかれの霜の置きたつ哉

梅

横道黒塗師

尾後永崎一見

山人のぬの子のかたに附けてさへ

匂ひにけらし梅ばちの紋

青山六道の辻といへる所にて

梅のはなのさけるを見侍りて

四方赤良

六道のやみに迷はぬ梅の花

色をも見るめかをもかぐはな

竹簀梅

峯松風

青々としげりし中にこの梅の

はなはくれなる簀はくれ竹

あけらかん江

ひら／＼と簀からほづえ突出すは

竹やり梅の花にやあるらん

銀杏みつかと

藪深くおされし梅がかせ枝も

げに竹のねのはるはわすれず

辻番梅

大原久知位

辻番の梅のつぼみもつく棒は

先みんなみへさすまたの枝

はるのうたさて

能登路

青柳は／＼にしだれつゝ

／＼と梅のすばえ出てゐる

柳

山手白人

しら露は柳の糸のむすひ玉

風より外にこく人もなし

加陪仲塗

青柳はきりかぶるより生立て

若木の枝を長くさげ髪

檜皮釘武

青柳の緑の髪をすきををらす

櫛は銀むね三日月のかけ

はるの日内匠ばしらのもとに

て刀わきざしのもとによそへ

て春のうたよみける中に柄糸

を

あけら漢江

雨降て地迄かたなの片手まき

はつれぬ春の柳屋の糸

軒に鳶風のかゝりたるを見て

垢染衣紋

さゝがにの糸のよるべの風を痛み

思はぬ軒にやぶる鳶風

若草

常産阿馬

取棄し野べに日影もたけ火繩

もえてみじかき春の若草

早蕨

柿下手丸

寒からぬ野邊の春風そよ／＼と

吹たてられてもゆる早蕨

猫戀

常産阿馬

鳥羽玉のよる／＼己が妻ごひに

いつしか聲をからす猫戯

銀杏満門

野ら猫の己が妻こふ聲たかく

軒端の草のしのばでやなく

初午

問屋酒船

破太鼓春きさらぎの午の日の

みやは子どもがうけもちの神

初午生酔

節松嫁々

初午やしるしの杉を神垣に

まがへてをれるさかきげん哉

屋鋪初午

もとの木あみ

梓弓やしきの隅のいなりを

まつるや初のむまや別當

橘みさえ

千早振かみやしきから初午の

口をひかせてよるのこのさま

西行忌

酒上ふらち

弔ふも他生のゑんゐ上人に

ふじの煙のそらなきはせじ

腹から秋人

道のべの柳ひと枝もちづきの

手向にせんと折てきさらぎ

菜花

もとの木網

きさらぎも杉菜混りに菜花の

さきてはくはぬ口なしの色

五十首歌よみける中に春雨

山手白人

春雨の日數重ねてふるがるた

うちつけにこそ淋しかりけれ

新宅春雨

忍岡きよろり

新宅の壁もまだひぬ長の日に

だらり／＼とふすまはるさめ

出茂吉成

やうつりの痒い所へ手紙ども

かき集めつゝかべをはるさめ

經師屋春雨

糟句齋よたん坊

約束の日よりも紙を春雨に

へらをつかひてのばす經師屋

春雨鼓

秦久呂面

とり上てうち濕りたる春雨に

今宵つゝみのねごゝろもよし

歸雁

酒上不埒

うちすてゝ年をこしちの雁は

やよひ限りにかへすべらなり

加保茶元成

年毎に來ては穢いで歸れるは

越路にたんどかり金やある

於保久旅人

越路にはいつきさらぎと待文の

返事を今ぞもてかへる雁

雲雀

紀野暮輔

足引の山鳥の尾のながき日に

せいくらべしてたつ雲雀哉

虻

栗成笑

山蜂の姿に似たれどぶん／＼と

なのあるにつけて危なげもなし

花

から衣橘洲

山姫のねまき姿か花の香を

しめしあしたの雲の腰帶

朱樂かん江

ちらふかど皆人案じわづらへば

花にも風は百病の長

逸咀英

さく花を何にたどへん飛鳥山

きのふの雲はけふ雪とふる

飛鳥山のふもととなる人の家に

櫻のさかりなるを見侍りて

さかつき米人

七重八重こゝの家にも櫻花

かしこの山のあまり物かも

東叡山花 朝もよひ紀迪

中堂のこなたに立るひごもとは

慈眼大師の御さくら花

飛鳥御殿山上野の花を一首に

よめる から衣橋洲

花盛り飛鳥とせん手ごてん山

中に忍ぶが岡目八もく

吉原花 遊女玉つる

九重を一重さらせし八重櫻

けふこの里に匂ひぬるかな

濱邊黒人

西行のおめにかけたき普賢象

はなの中よりはてな道中

内匠はしら

身あがりの客の廊に待かねて

遅櫻なる花のねすがた

もこの木あみ

客は皆さいた櫻につながれて

ひかれくるわの春の駒下駄

鐘樓櫻 竹杖爲輕

つけばちるつかねばすまの山寺の

さくらこめでゝをそき入相

裏店花 山道高彦

わび住は物ほしげなる鉢の木を

下からのぞく花のうら店

二階見花 節松嫁々

二階からをりてかざらん櫻花

めのしたにのみ見るは口をし

盲人見花

木の下に杖をつくく座頭の坊

花のながめはあかぬとぞみる

啞子見花 紀躬屈

花の香を惜みて口を動かせど

つんぼうはごもきかぬ春風

聾者見花 紀定麿

つんぼうは己れが耳の遠山に

かすめる花の香はきこへまじ

乞食見花 加保茶元成

紅と乞食も花をみるけふは

つくなくよ入相のかね

相應内所

乞食のつゞれさすてふ袖も又

はなの錦をけふはきてみる

後家愛花 峯松風

櫻木をめづるばかりの後室の

身も花よめといはれたりしが

花下忘歸 ふしまつのかゝ

よしや又うちは野となれ山櫻

ちらすはねにも歸らざらん

ひとり草庵の花を見侍りて

業寂僧都

罪なくて配所の月やいかならん

みやこの花を錢なくてみる

花盗人 澤遊帆足

咎むれば七重の膝を八重にをり
手をつき山の花の盗人

節藁仲貫

怪しさに花をる事や咎めなん

そのぬす人のおさをとらへて

惜花 　　こはうも内子

友達もいまちと待てくれあひの

かねのなるまでみよし野の花

寄花出替 　　文屋安雄

お屋形の盛りみすてゝ急ぐらん

よめいるさきの髻のはな見に

遊絲 　　加陪仲塗

春の日は須磨も明石も蝦夷錦

うら一めんにあそぶ糸かな

曲水宴 　　馬屋廐輔

曲水の宴にひかれて三日月も

ともになかるゝ盃のかげ

下戸曲水 　　膝元さぐる

盃をながしてはくむ山川の

をもしろ酒や下戸の曲水

雛祭 　　涅槃千種

花がめに桃や椿を挿ませて

都のにせのひな祭かな

桃 　　志月庵素庭

算盤の位違ふて三千年に

なるてふ桃の三年にさく

汐干 　　四方赤良

かりがねを返しもあへず櫻狩

汐干がりごとかりつくしけり

出かはりの男女の汐干がりす

るを見侍りて 　　浦邊千綱

出代りの代りををきつ汐干瀉

貝ふむ跡もにごさずにゆく

桂川若鮎 　　内匠はしら

美しさ手にもごられず若鮎の

すきごをり行びんかつら川

白魚 　　山手白人

春は又たれもたづぬる隅田川

しら魚に子はありやなしやと

尾久白魚 　　逸咀英

いつか日の長くなるとは白魚の

せたけものびてゆく春の尾久

井蛙 　　へつゝ東作

身を守る隠れ所はこゝこそこ

ちゑを古井に蛙なくなり

苗代 　　柿下手丸

苗代を田毎の畔にかきあげて

作大將の水のかけひき

杜若 　　紀定麿

うつくしきかはやが沼の杜若

あやめの花をひしきこそすれ

款冬 　　白鯉館卯雲

俊成の乗上られし身ぶるひに

馬の露そふ井出の山吹

　　子孫彦

相性は金生水と思はるゝ

水にうつりし山吹のいろ

雨後藤 　　橘貞風

春雨にぬれて夜風や引つらん

はなより落る藤の玉水

杉の木末、藤の花のかゝれる

を見侍りて 澁 栗人

天狗でもすみなん杉の梢とて

まどひし藤のはな高くみゆ

小手鞠といへる花をいけし見

せにてあきものゝ帳くりかへ

し算用し侍るとて

腹から秋人

算盤と玉にもかへぬ帳面に

又百かした小手まりの花

暮春 鶯摺江

暮行といへばごふやらよけれども

なんにもくれずにげて行春

三月盡 柿下手丸

玉章に思ひのたけの長き日も

けふばかりとやつかひきり紙

坂上竹藪

振もざり逃行春のこれよりは

すがらん袖もなつ衣かな

徳和歌後萬載集卷二

夏歌

更衣

橘鈴成

下帯をみるにつけてもをたふくの

衣がへうき尻にぞ有ける

京間内則

世中にたへて青葉のなかりせば

衣がへをや何とせんにな

馬夫更衣

佐倉はね炭

ふる布子綿はぬけども馬方の

袖にのこれる春のはな歌

青樓新樹

子子孫彦

青樓の君のかぶろの名にしおふ

若葉やみどりしげりこそすれ

卯花

坂上竹藪

夏も又若武者とこそ見へにけれ

卯花威よろふ袖がき

菊賀三味

世の人のひく袖垣に咲ながら

ちると思へばみるもうのはな

子子孫彦

月雪の見立もあまりしらゝし

しらけていはゝあれはうの花

旅路卯花

四方赤良

旅人も笠ぬぎて見よ花の名の

卯のとき雨にぬるゝ垣根を

郭公

加保茶元成

一聲の初音も高きほどゝぎす

是ぞてつへんかけねなしなる

つむりの光

一日に八千八聲うけあふて

山ほどゝぎすあはぬとぞなく

星屋光次

木鐸をほどゝぎすまし夏木立

かりすかしても聴んどぞ思ふ

菊賀三味

三さがりあひの手ひいて郭公

いま一聲の二上りをまつ

郭公多 もこの木あみ

郭公山田のはらにあきるほど

あまりたくさんすぎのむら立

智恵内子

郭公晝ともいはず夜なきする

みどりこやまのかしましき聲

馬場金埒

郭公なくねもてうご八せん

はじめ終の空にふるほど

船間郭公 小川町住

二聲ときかてぞ沖をはしり船

なごりをしさの山郭公

佐倉はね炭

船出せしみなどを後に郭公

帆を十分に掛けてなく聲

兩國橋郭公 濱邊黒人

郭公富士とつくばの天秤に

兩國はしをかけたかどなく

紀躬鹿

兩國の橋とはしどの郭公

今ひと聲をむさしにてなけ

みつまたの四季菴にて郭公を

きゝて 四方赤良

郭公なくやひとふたみつまたと

きくたびごとにめづらしき庵

旅宿郭公 つむりの光

夏の夜の短かき夜着に足引の

山ほとゝぎすきく旅の宿

初鯉 よみ人志禮多

われ一と眞先かけて食ぬるは

人にかつほのさしみなりけり

馬屋廐輔

初鯉かふ氣はやみにあらねども

これも子ゆへに迷ふ雉子焼

鯉走地 よしのゝ葛子

地をはしる聲をからしの初鯉

うりものこらぬ足のはやさよ

夏の夜かつほを調理するを見

侍りて むせん法師

まな箸に傳ふ雫のすゝしさや

月もさしみの夏の夜がつほ

箱出隣 銀杏満門

よばすども垣根をこして這出る

隣やたけの子ぼんなうなる

早苗 海老船守

日寄よく嬉し早苗をさりへに

うたふ田植のおほんたからか

罌粟花 便々館湖鯉鰯

むしけなく育ち次第のけし坊主

花のちりけに灸もすへねど

清水立登麿

ちる花に憂世の名をばけし坊主

からして叩くあたまでんく

五月五日 書出田丸

けふよりは紐のあやめを解初て

きたる丹後の薄袴かな

五月五日ある菴をさひ侍しに

あるじのひるねしてゐたりけ

れば 腹から秋人

蒲團きて晝寝にころり山椒味噌

たれも節度にはあらず

端午の日昔栗釣を四方赤良
のわこのもこへばらかけこい
ふものむくるを見侍りて

宿屋飯盛

み薬にこれをしめじが腹番ご

よもぎのせくをあつく祝ふ歎

入梅の日雨ふりければ

河原鬼守

けふからはさみた連歌の發句にて

まつ何山も雲にふし物

五月雨は比西方赤良のこぶら

ひ給ひし折から朝しかたりけ

れば

梅旭あけ
水屋

訪来ます四方は晝間もなき比の

さみだれ髪で筆をこりけり

返し

四方赤良

入梅に旭もいまだいづみやを

雨ふりはへてたづねこそすれ

梅干に驚きいふ事をよめご人

のいひければ 宿屋飯盛

日はすくなりても鴨の梅干に

眼のよるまど老の鶯

水鶏

澁川栗人

うら／＼とねに掛りて身を水鶏

た／＼戸口はわきはひのかご

曾我祭雨

山手白人

曾我まつる五月の空は今も又

かり場かりばの露や雨さふるらん

夏月

志月庵素庭

夕立の際なくはれし月の輪に

のどもご過しあつさわするゝ

京間内則

猿猴のしらんこ水に延したる

かた／＼の手は短夜の月

きし女美濃
神戶

欄寝の蚊帳の中さへさよふけて

桂男のいるは無遠慮

窓下無才

蓮壽千種

育てたる恩に甘へていたづらの

した地窓よりのぞくまでしこ

鍾題 露をかけをける床の上

に百合の花をいけるをみはべ

りて

津無坊早耳

掛巻も鍾題の姿をそれてや

首うちたれし鬼百合の花

味噌こしこいふものにはたる

をいれたるを見侍りて

宿屋めし盛

焚さる数もひとふたみそこしに

よつのもいつかむすびける哉

夕顔

檜皮釘武

垣一重ちよこ夕顔の離れ家は

五疊ばかりの住居なりけり

帆南西太

山賤が紫の編戸のあけくれに

所かへする夕がほのはな

關蚊遣火

朱樂かん江

稀にくる蚊は叩いても防ぐべし

いふせあたかの關の杉のは

夕立 さくらはね炭

夕立の晴ゆく空のひとふりは

くも切丸といふべかりける

關夕立 川井物梁

夕立の雨に追れてにげ水の

雲を霞が關のたび人

船夕立 四方赤良

船の帆のはらめる風に夕立の

雲のはやめやふり出しけん

大屋裏住

夕立の雲のうき浪たつと巳の

ふり日を三保のあまの釣舟

門限面倒

吉野凡てるに高尾は夕立の

駒形のせをわけてふり行

平生三里季保

夕立の雲もつき地は先はれて

しのをつく田にかゝる親船

蓮池夕立 山手白人

夕立の濁りにしむはいやくと

蓮はかぶりをふる池の中

蟬 百足こかね

ひつたりと抱きしめつゝ鳴蟬は

日々に通へるきむすめのもと

別莊納涼 四方赤良

時ならず降來りたる涼しさは

これ水無月のしも屋敷かも

吉原納涼 山上猿成

青簾かけてあつさも仲の町

客と風とを待合の辻

屋根船納涼 山手白人

千早振神田がはより漕出て

すゝむは天津兒屋根并かな

三またの中洲四季庵を

圖南女

蚊も鳴ず暑さも夏の住よさは

すゝしき庵といふべかりける

澁團扇にかきたる市川團十郎

といへるわざおぎのゑに

橘八衛

大汗をかきの素袍の袂にも

しばらく風をやごしぬるかな

樹陰心太 峯松風

水鉢にすゝしくもりの下陰は

人の目につくところてん見せ

土用干 紀定磨

夏の日の暑さぞまさる土用干

地赤の色ももゆるばかりに

眞桑瓜 山道高彦

よい種をたんと眞桑の瓜蔓に

こがね花さき實のなる子村

まくは瓜と西瓜とひとつさら

にもりたるを見侍りて

四方赤良

砂村のゑにしの瓜となるこ瓜

ともにもらさぬ水菓子の中

姫瓜 峯松風

夏くさの中にちぎれる姫瓜は

いかなる人のをさしだねかも

御萩 臍穴主

あたらしき染帷子の麻のはも

けふのみそぎと人やもるらん

山川夏萩

唐衣橘洲

山川に風のかげ乞それならで

はらへば夏のしからみもなし

隅田川御萩

もとの木網

中とみの萩をすだの夕こへて

まつちのわをやくいる川風

質屋御萩 網破損はりかね

みな月もきるゝけふとて御萩川

しちのかたしる流れこそすれ

徳和歌後萬載集卷第三

秋歌

立秋

大屋裏住

今朝ひとは散くる庭のかんな屑

柳の枝をけづる秋かせ

龍宮立秋

紀おさ丸

さす汐に木葉がれいの散くるは

秋風たつの都にやふく

秋風女房

秋きぬと風かしらすや文月の

ふうじをきりの一葉ちらして

初秋

石部金吉

ひやゝかな風をまいらせ候と

秋のふうじめほごく文つき

腹から秋人

文月のけさや一筆しめし野に

まいらせそよど秋の初風

文月ついたち赤坂なる桐屋と

いへる家のあるじをはしめて
とひ侍りて 朱樂かん江

秋もけふ小判のきりや一葉より

まづ落そめて藏にみつ次

風鈴告秋

から衣橘洲

風鈴の音はりんきの告ぐちか

わがのきの妻に秋のかよふを

へつゝ東作

先秋をしりふる軒の短冊も

すこしは友となる風鈴かな

四方赤良

風鈴のりんと響きし秋風は

萩の上はの一文の銭

米春知秋

眞竹源藪

米つきはひの出入より取杵の

臼の數にや秋をしるらん

七夕

楚泉尾張

一夜をば百夜と契るおり姫に

なせお子達が出来はなされぬ

絲瓜皮也

七夕にねがひの糸の有たけを

くりかへしつゝかけて祈らん

潮鯉鮒

鵲の橋は雲井の調子よく

かけわたしたる琴のかよひ路

澤邊横行

今宵しも手向にせんと短冊を

かくや娘も孫もひこばし

銀杏満門

星もさぞ今宵一夜のあひびきを

そこはかまごや待わぶるらん

臍穴主

おり姫の年は十六さゝけはだ

たれも女房にはし合の空

青樓七夕 今出赤帶

まれ人を今宵はどこそ星合の

空だのめなる天の川たけ

七夕絲 一升夢輔

七夕のいと口きらぬむつ言に

くだかけ鳥のくりかへしなく

七夕別 遅蒔千種

舟おさに問ばや星の別れには

楫も機嫌もどりにくきかと

七夕後朝 あけら漢江

よべかりし硯をしばし留置て

ほしやけさかく文月の空

婆 阿

七夕のひこよねまきの暁を

うらみてかへすかし小袖かな

多田人成

鵲の暁かけてわたれるは

宵にひきかへにくき口ばし

小川町住

七夕のけさの別れの留られば

天のかはせにはらもかへなん

天河洗濯 根香來無器用

天のかは空色衣あらひあげ

おり姫のりをつけてほしけり

吉原草市 やはり棟梁

けふこそはあんど思ひし女郎花

人にかはれて水くさの市

峯松風

櫻からはや草市と雪の間に

うつりし秋も花の色里

蓬萊歸橘

くつわやが暗きに買し殘荷を

近所の人へうりの馬道

婆 阿

數珠のたま祭るしたくの草市に

百八もんじけふやふみ月

孟蘭盆 腮垣金

うら盆にかなな掛取攻くれば

身はみそはぎの露さきへたし

山手白人

中々になき魂ならばとはかりに

かけはたらるゝ盆のくりごと

橘貞風

有やうになしても物の淋しうて

何やらたらぬ玉まつり哉

内匠半四郎

蓮のはに置にし露の玉まつり

世々の佛に水手向ばや

靈棚露滋 あけら漢江

蓮葉に手向る水は濁らねど

野もせあざむく露の玉だな

盆踊 出すは耳彦

手を出して立たり居たり忙かしく

するは給仕の盆踊かも

蓮飯 瓢から酒酒上執寐改

めしは皆食つくしたる蓮葉に

のこれる粒や露とあざむく

神田川にて靈棚を舟につみお

くるを見侍りて

山道高彦

牛馬をやめて佛も西方の

十萬坪へのりあひの舟

角力 おそ蒔ちたね

春ならで秋の千草の花すまふ

さそはぬ風に羽織ちりめん

萩 加陪仲塗

秋風が音頭あげたる伊勢踊

濱萩の葉はさゝらにぞなる

萩

吹卷るすそのゝ風に仙人も

おつるばかりの白はぎの花

五疊多他見

百草の中なる萩にみどれつゝ

いくせんにんも道をうしなふ

窓下萩 もゝのふ八十氏

やがてもう彼岸も明る引窓の

下のを萩そあかぬ色なる

ト者見萩 秦久呂面

うらなひをおくの細道押分て

めこぎの萩の花をみやぎ野

薄 權宗匠梅堂

御らうじろ糸薄とて教えねど

いろはにはまで出かしおるのを

吉原女郎花 臍穴ぬし

此里にこがねの色と咲ぬるを

をみなへしおりて床花にせん

葛 二歩只取

武士のくずのはとはと合せても

臆病風やうらがへりぬる

荳荳 堂伴白主

秋の野に風吹出せは何事を

おかしかるかやねたり起たり

槿 裏堀蟹子丸

朝顔は誠に日々にしほるれど

又ひゞゝにあらたにぞさく

さんやの里のはとりにてかき

ねに朝顔の花さけるをみて

四方赤良

たつた今別れてきたの里近く

目にちらつける朝顔の花

露 手柄岡持

ぬれぬ先こそ厭ひしがをきゝて

末は流るゝ質草の露

柿下手丸

百草の葉毎の上にをく露は

丸薬ほどの玉とこそ見れ

芋葉露 書出田丸

錢金は持れぬものか芋の葉に

たまれは落る露の玉銀

虫 白鯉館卵雲

夜なくは珍らしからず晝の野へ

虫のねごとをきゝにこそゆけ

四方赤良

秋の野の千草はやんも白露の

ふつて出たる鈴虫のこえ

鹿 加陪仲ぬり

秋の野になく棹鹿の角なれば

さいになりてもめや戀ぬらん

千枝有竹

なく聲の細うて長く聞ゆれば

棹鹿こそ人のいふらめ

さがみのくにの山中にしかの

聲きかんと一夜とまりて

根岸法師

瀧の音に紛れて鹿と聞へねど

もしやあれでもあらふかの聲

雁 柿下手丸

雁のかた田にこそは落つらめ

いたく鳴ぬる夜半の聲哉

花街鴈 浦邊千綱

玉づさをかけてくるわに鴈も

おつるや多き人あしの中

陣中鴈 海老船盛

つはものゝ氣は張弓の陣中に

しのびのつらをみだすかりがね

腹から秋人

一つらに雁は野陣をはりま瀉

しかまのかちを告にきたより

霧 忍岡きよろり

風寒く破れ障子をはりかへて

きり吹かくる秋の夕暮

月 つむりの光

月みても更に悲しくなかりけり

世界の人の秋と思へば

蓬萊歸橋

今宵この月は世界の美人にて

素顔か雲の化粧だにせず

十五夜月 朱樂漢江

天の原月すむ秋をまふたつに

ふりわけみればてうど仲磨

無錢法師

白露の玉を今宵の十露盤に

三五十五の月とこそおけ

其 風尾張

何千里照渡るこもけふの月

ながめ盡さん目のとゞくだけ

十五夜くもりければ

銀杏満門

大空に名高き月はありながら

ひとつ星さへみせぬ雨雲

望月の夜の空さためなければ

四方赤良

千金の名高き月の雲間より

せめて一二分もれ出よかし

をなじ夜雨はれければ

鶴のかこ女

此比のこぼれかゝりし空も又

くもなくこよひうまれ月影

十六夜月 節松嫁々

かたぶけし昨日の酒の二日酔

そらにいざよふ盃のかげ

立待月 秋風女房

望月とあひだ一夜の忽ちに

すこしかけても影のさやけさ

はつき廿一日の夜月をみ侍り

て 大半三味

算盤のそろ／＼かけし月影を

みやさん七の二十一日

元山月 智恵内子

てら／＼と月の桂をさす影も

はづかしげなる老のはげ山

三股月 天地玄黄

けんをうつ上手の手から水の月

すむゆさんなの指のみつまた

芳野葛子

盃のさす手ひく手に三味線の

かはにうつれる影をみつまた

大工見月 飛塵馬蹄

手細工に窓を開るはくもなくて

月のすみうちすみよかるべし

経師見月 川井物梁

一刷毛に掛地の裏を打見れば

のりのかげんもよくつきの影

瞽者見月 から衣橋洲

澄影を見る目なげくも詮なしと

ひとりまさぐる琵琶の半月

月前雁 大石小石みかけ

雁かねの鰐もと迄も鳴つれて

落るは月のさやかとぞみる

月前琴 から衣橋洲

松の風ふき自在なる月見かな

はらふて雲はみなつくし琴

月前鼓 紀定麿

小鼓のねながらかしらうち擡げ

影もみつ地の月や詠ん

月前酒 から衣橋洲

さす影のあかきは酒の咎乍ら

月にゆるしの色とこそ見れ

月前枝豆

枝豆の唐もやまとも見る月に

雲はいづくへはじきやりけん

月前芋 ふし松嫁々

照月の山ばかりかは里芋の

ますのすみからすみ昇るかげ

圖南女

今宵ぞとみがく光の桂男に

いもがすがたは衣だにもきず

月前兔 常産阿馬

玉兎はねて慰め十五夜は

おのが毛ほごも月にきずなし

月前駒迎 望月あきよし

逢坂や月に名高き關角力

けふの勝負は引わけの駒

九月九日 八張棟梁

此酒をのむは息災延命か

そのふる事ときくの盃

菊

横道黒塗師

我宿の菊の酒手のけふごこに

いく代つもりて借錢の淵

山手白人

たが方へ貰はるゝやら鍬の上に

ひともをける霜の白菊

前栽の菊見んとて人の來りけ

れば

酒上不埒

おかしげに狂へる菊の花見んと

立よれる人のほらやかゝるん

巢鴨菊 味噌こしきぶ

盛なるうはきを菊や祖父婆々も

杖にすがもの花の見物

多田人成

水鳥のすがもに植し一構

菊のさしこと見ゆるませ垣

巢鴨のさに菊をもとめ侍り

て 馬屋厩輔

すがゝきのすがもに育つ禿菊

けふつき出しのけいせいが窪

飾師愛菊 島野あせ道

かざりしの世話焼付の菊の花

今朝はめつきと色まさりける

菊花泛酒 銀杏満門

一輪に千歳を契る花ぶさは

よはひのぶると菊の盃

真間の紅葉をたづねて

檜皮釘武

暮なんと氣を紅葉ばの友もあらば

ひとり残らんあゝまゝのかは

十三夜月 あけら漢江

きく月の月見は望の月ならず

籬に花のさけや盃

檜皮釘武

ごこぞへかちと置てきて影さへも

たらぬははなの下の長月

吉原十三夜 堂伴白主

くる客は月の舟やぞ引つれて

足も空ゆく十三やぼり

駒迎 しらぬひのつくく法師

望月の駒は月毛もひくべきを

關の清水にかけみゆるなり

擣衣 澤邊横行

洗濯のひるならで夜もいとまなみ

居ねぶりながら衣うつゝか

妾宅擣衣 峯松風

君ならで誰かきぬたの衣うつ

槌にてかけの宿の淋しさ

隣家砧 紀定磨

隣なる砧も近き壁一重

かたつち落てうちや破れたり

鮎 横道黒塗師

身より出さび鮎乍ら川下に

落てかゝるはあなあはれやな

新蕎麥 大飯食人

新そばの時分はよしと引抜て

かたきうつこをほまれとぞ聞

秋鯉 雀 酒盛

折もよき秋のたゝきの烏帽子魚

かま倉風にこしらへてみん

乞食見紅葉 何多良方士

乞食小屋かごに立田の紅葉見て

昨日もけふもあきたらぬはら

紅葉盗人といふ事を

馬屋厩輔

叱られて後白浪のたつたがは

顔も紅葉にかざす折枝

日陰紅葉 奈良花丸

あきはてし埒の日影の紅葉ばを

いつ染るぞとこへばあさつて

落栗 渡海里花成

拾ふ數不同のあるもことほりや

毬はすなはちくりからとなる

暮秋 山手白人

花薄はうけし袖をふりはへて

さらばくと秋ぞくれ行

唐來參和

よもさらばくと別れゆく秋を

まねく薄やいとま乞する

質屋九月盡 古瀬勝雄

秋更て露のたまくとをく質も

この月ぎりとなりになるかな

徳和歌後萬載集卷第四

冬歌

初冬

手柄岡もち

けふ神のおたちなればや風を荒み

空さやけくも木葉みだるゝ

花街時雨

唐來參和

冬がれてくるわに通ふ神無月

しぐれも客もふりみふらずみ

問屋場時雨

子子孫彦

先ふれの時雨晴間の問屋場に

うき雲助や後にたゞよふ

落葉

置石村路

木枯に散ぬるいらは踏ちらし

やまけふこえて冬は來にけり

水茶屋落葉

よしのゝ葛子

夕暮に客も落葉と散ゆけば

木末さびしく水茶屋の床

あたりちかき人のもごよりゐ
のこの餅をさめぬうちとおこ

せたりければ 津無坊早耳

重箱のをはぎのもとに伏ゐの子

さめぬうちとて起しけるかも

夷講 書出田丸

夷講けふ商人の馳走とて

客もまうけの席につくなり

大根地をいづるといふことを

其筈琴成

たが種を茲へこぼして大根の

ちをはなれてもかくそだちけん

河豚汁 山手白人

我れ勝に争ふてくふふくと汁

もりかへのある命ならねど

雪中河豚 帆南西太

魚の名をむざと話すなけふの雪に

身をあたゝむる種が島ぞや

醫師食鰻 から衣橘洲

雪の日に千里も走るとら鰻は

竹のやぶ醫もくすりどやくふ

武士食鰻 山道高彦

元よりもいかものゝふの腹なれば

鐵炮汁の玉はあたらす

芝居顔見世 山手白人

評判は烈しかれとて顔みせに

みな手をうつ山おろしかな

濱邊黑人

顔みせの其人よりもそばゝて

どちめん棒の手うち連中

顔見世の朝の雑煮を

もとの木網

三番叟鈴菜をいれて顔見せの

雑煮の汁もたらりらゝりら

朝霜 平秩東作

日の影は小春もまじる朝の霜

どちらが冬とふみわけてみん

橋上霜 鹽屋辛人

雪ならでしろきは霜のはし柱

歸るもすごしゆくもうしみつ

普請小屋霜

堪忍成丈

寒き夜は屏風を假の普請小屋

明れば門にたつ霜ばしら

氷 臍穴主

かはつらの厚き氷と名に立て

身うごきならぬ借錢の淵

硯水 紀定磨

筆をもてうちかゝまほし墨水の

こほりて寒きはだか硯は

枝川氷 へつゝ東作

さくら川枝も氷のはるまでは

どちてひらかぬ波のはつ花

澤水氷厚 節松嫁々

澤水にかれたつ葦のあかりりも

なくほごいたく氷るにけり

寒夜月 馬屋まや輔

しんゝと寒き月下の門徒寺

僧のたゝくは鳥のほねなり

千鳥 臍穴ぬし

行返り友呼かはし泣上戸

顔もあかしの浦千鳥足

冬の洲夜崎なる望汰欄にあそ

びけるに庭におりたちて月を

ながめ侍るこて 四方赤良

棒立になりて海邊を眺むれば

月影さむし霜の口鹽

空と海ひつたり月の中川の

ばら／＼松にたつ千鳥かな

水鳥 手柄おか持

つるぎ羽の劔お板を振立し

五十鈴の川のおしのふるまい

奈良朝起

朝日さす人もなければ鵜の

さはのかはらにねふる水鳥

勘定疎人

音すれば人もみつよいつこなく

池のふるひをつげにくる鴨

蓬萊歸橋

枝川に餌ひらふ鴨のあしの色は

なかれもあへぬ紅葉とやみん

冬の歌とて 膝本左懸留

冬籠る寒のうちとて霜柱

たてゝ氷のいたもはるなり

霞 勘定疎人

吹散す風も霞の音せしは

屋根をこけらのそのはづみ也

雪 馬屋まや輔

雪見とはいつの世よりの戯けぞと

嘲るはいつのよのたはけぞや

四方赤良

ひとむれの奥女中とも見ゆる哉

つもる木ごとの綿帽子ゆき

土藏雪 紀定磨

白雪の古つゝらさへなき藏は

何でもかでもつめたかりけり

猪牙舟雪 子子孫彦

苦かけて水のおもかぢどり梶と

こぎゆく猪牙の後のしら雪

堺町雪 あけらかん江

今朝みれば木毎に花の堺町

あら面白の雪のふり付

雪中鷺 銀杏満門

ほそみぞは降つむ雪に埋れて

鷺も泥鰌やふみなやむらん

雪中酒宴 もこの木網

盃の手もとへよるの雪の酒

つもる／＼といひながらのむ

雪をくふ人によみてつかはし

ける 平秩東作

ふみなんはおしきにもりて開食せ

あしだの齒になかけそ初雪

鷹狩 銀杏満かど

降雪にここからごがはし鷹の

目にみかり野の廣さしられず

炭竈 加陪仲塗

眞黒な熊野の山に炭焼の

手足もあらく生れつきの輪

五疊多他見

眞白に積るそばから黒煙

是こそほんの雪の炭がま

神樂

加陪仲塗

ね宜共は寒さしのぎに燗酒の

匂ひかぐらの舌つみうつ

煤掃

鈍奈法師

すゝはきは落葉の後に偕も又

ちりみだしたる庭の面かな

淺草市

津良河厚

勝栗をまけたと呼もことはりや

淺草市のうらは六郷

紀定磨

ふたつなき淺草市の賑ひは

まことに江戸のかざり物なり

無錢法師

はり強く直段はひかぬ觀音の

千の矢先や市のはま弓

隣家餅搗

四方赤良

垣一重こし粉をつけて賜はるは

居ながら自由自在餅かな

歳暮

手柄岡持

年波のよする額のしはみより

くるゝはいたく惜まれにけり

つむりの光

此ものは花の春へといそぎ候

お通しなされ年の關守

白鯉館卯雲

取組でまけじと思ふ角力さへ

年の關にはかなはざりけり

竹杖爲輕

光陰のあだ矢に歳はたつか弓

月日をとむるせき弦もがな

無錢法師

年の矢はさうぶ刀の束の間に

はや破魔弓と引かはりぬる

子子孫彦

たつた今年も越べきよし垣を

こそくりてまつ春のまぢかき

四方赤良

煤掃ははや杉の戸の開たてに

はしり加減もどしのくれ椽

多田人成

限ある年さへくれて行ものを

なごふるかけのどりに來れる

としはくれにき 朱樂漢江

立て見し柱曆もねころんで

よめるばかりに年はくれにき

五十三になりける年のくれに

河原鬼守

年の關越や驛路の鈴ならで

我身ふりゆく五十三次

武家歳暮

唐衣橘洲

煤とりて弓は袋におさめたり

せめくる老を何でふせがん

四方赤良

武士も臆病風やたちぬらん

大つごもりのかけどりの聲

峯松風

掛乞のたゆみもあらぬ武士は

勇氣をはるにのぶる返金

花街歳暮

鶯も必らず早く來なんしと

年のくれぐれ梅がかね言

疊屋歳暮 一舛夢輔

疊屋が差つまりたる年の暮

ふまねばならぬ床のかけぬひ

節分 もとの木網

あさくらや木の丸のみの山椒も

福茶に年を名のる節分

除夜 加陪仲塗

借錢は首たけ積る大晦日

門の雪さへはらひかねたり

紀躬鹿

門毎に明日の春を松かざり

たつた一夜のことしなりけり

いかなりけるとしのくれにか

四方赤良

金はあり掛も拂ふて置炬燵

とろくねいりつかん年の夜

此うたある人のいはくよみ人しらすこ

徳和歌後萬載集卷第五

離別歌

別 臍穴主

洗濯の後は拾となる迄も

先ひきどきの引わかれぬる

小川ほくせん浪花にまかりけ

る時 へつゝ東作

浪花濁あしかろくといてもどれ

友よぶ鶴のおりからもよし

竹下氏の餞に 濱邊黒人

立てゆく足がらとむる關もかな

はこぶ思ひのたけの下道

もとの木あみ上つけの國にま

かりける道すがら思ひやり侍

りて 置石村路

行先も熊谷ざくらさきぬらし

春のながめはふかやと思へば

千玄室さみだれの比ふるさと

にかへるあしたむまのはなむ
けすこて 馬場金埒

雨もはやにじり上りに上る也

お茶をたて場にしばし待合

いづの國あたみにゆく人を送

るこて 門限面倒

紀行の狂歌に詠てきてたもれ

伊豆のお山のうたのはぐさを

かんつけの國いかほの湯あみ

にゆく人を送るとてはる名の

山の名もあれば

秩父根努類雄上毛

人中でしはい顔すな氣を張な

きんせんどうは留湯にしなさい

友とする人わづらひて遠き旅

路におもむきけるをおくりて

普栗釣方

花曇りかゝる病もはるの旅

さなわづらひを後は快晴

なにはの旅のやごりをいづる

とてそのいろの名によそへて

世入道へまうし

うつしゑの駒に姿のにたる哉

瓢簞屋よりいづる此身は

とみにたびたち侍りし時友ど

ちのもどへ 酒上不埒

夢に也と知食したかけふぶじに

旅をするがへかごでなすのを

羈旅歌

旅のうたさて 古家雨漏

古郷へ急げは廻る道のべに

いくたびとなくとくる笠紐

狂歌師旅行 於保久旅人

旅寢して起せば夢かうつば猿

いそげど道は八里くりやき

盲人旅行 峯松風

座頭の坊頼むは手引足任せ

旅の空へと思ひつく杖

奴旅行 置石村路

鍵持のふるごもよしや草枕

髭にやごかす花の下陰

紺屋旅行 望月まん丸

旅衣そめて幾日になるみがた

何とこんやのどまり定めん

海路 手柄岡持

帆柱のしの字もねせて泊り船

かくてはおきにかゝる事なし

題しらず 唐來參和

日の足の高なはへもうつきに鳧

ならはぬ旅のうしのあゆみも

馬屋厩輔

足引のやまどめぐりの旅疲れ

笈もおもげに瀬田ら大橋

木曾路にて 加倍仲ぬり

憂事をするの匂ひも草枕

くはずにをくや露の玉味憎

川留退屈 四方赤良

大井川鴨川よりも川越の

ちんが心にまかせざる雨

春の末さやの中山を通るとて

星屋光次

花ぬりのさやの中山さして行ば

鐙にさはる岩つゝじ哉

傾城思故郷 澁川栗人

八朔に白むくをきる暑さには

夕がほだなの下思ひ出す

夏の末輕井澤を過侍りしにい

と寒かりければ 二歩只取

夏衣うす井崎にきてみれば

さむさながらも身は輕井澤

百餘里のふるさをへだてゝ

江戸の月を見侍りて

庭桃丸

諸共に憐れと思へお月様

國のなじみはおまへばかりじや

一里塚秋風 内匠半志郎

はだかげんよい程がやの一里塚

秋風すゝしかたひらの宿

長月の末あけかたに箱根山を

こゆるとて

渡海里花也

山のはの錦をつゝむ月の玉

いづるや箱根のふたのあけ方

旅宿爐

五足齋灌園

さすが又遠州路とてはたごやに

爐をさき釜をかけ川のやど

旅宿巨燧

橘實副

足柄や曇れば富士の裾寒く

旅のこたつにあたら夜の月

油とうじねり方

くたびれて炬燵へふじの腰つきり

足高山をさし出したり

つのくにあつもりそばの店に

てかたへの人にさゝやき侍り

驪山人東阿^{播州}三日月

義経は食れぬそばのあつ盛を

くまかへ給へひらに平山

江のしまにまふづると袖の

うらにて白髪貝をもとめて

圖南女

旅衣袖のうらかたまさしかれ

きたるかひあるもろ白髪貝

みのゝ國にまかりし時笠松と

いふ所にたびねして

栗成笑

古郷を遙々玆にきてみれば

かくれみのちや笠松のやど

寄餅羈旅

檜皮釘武

むしやめはついて其まゝ破蒲團

柏にねたるあんなかの宿

箱根にて 世人道へまうし

仙人になつたかしらぬ雲にのり

はこね八里を歌でこすとは

大名旅行

見付内住

關の戸も明る横雲たな引て

一時早の馬やこすらん

徳和歌後萬載集卷第六

哀傷歌

ある人をいたみて

横道黒塗師

花の根に散し姿の惜ければ

衣かへうき御經かたびら

竹杖すがるが父の思ひにて侍

りけるときよみてつかはしけ

る あけら漢江

申すべき言の葉もなしあしすだれ

あのよこのよのふしの別に

父の身まかりにける時

竹杖爲輕

繰返し繰返しつゝ嘆くなり

涙のたまの珠数の親粒

はゝの七めぐりの忌日になむ

あみだぶつのもじをかしらに

をきてよめる歌の中にあ文字

濱邊黑人

あごまでも袖の涙の乾かぬは

ぬらせし膝のむくひなるらん

物ごとうときがこのみてから

やまごの文ごもよみけるがみ

な月ばかりに身まかりければ

智恵内子

集めつる窓の螢の影きえて

涙や文のしみとなるらん

普栗釣方歌角力の勸進して東

西にはしりめぐりしがそのこ

となかばにして身まかりけれ

ば 四方赤良

歌すまふ夢の團扇をあぐる間に

西の方やへ入にける哉

間屋酒船

死る迄狂歌をしての旅角力

あとに言葉の花はふりけり

わかきやもめのはどけに茶を

供するを見侍りて

柳直成上毛

後家たつるはながも薄き茶せん髪

あはれはよそにくみて社しれ

寄松無常 道具屋長持

年ふべき松も樞ぎに使はるゝ

身は四分板のはてぞはかなき

寄十露盤無常 坂上數

とりべのゝ烟たてし算用は

涙の玉のをきやまごへる

寄酒無常 續松ひで近

のまほしと思へど酒もなき後は

しるしの杉の樽ばかりなり

寄禮無常 濱邊黑人

昨日見し人は一夜に甘酒の

餘りはかなとすゝりあげつゝ

寄鰻無常 七轉八興

立昇るつゐの烟の香に匂ふ

此身は死出の旅うなぎかも

寄屁無常 紀定曆

すかしべの消易きこそ憐れなれ

みはなき物と思ひながらも

祖父素翁のはかにまうで侍り

て 平秩東作

孫をかふよりのたどえも耻かしく

みはかにしげるゑのこ草かな

雲樂齋いもうと身まかりける

ときゝて 四方赤良

はかなしやあのよ十萬おくさまに

ならんとてしもおこし入とは

辭世 白鯉館卯雲

食へばへる眠れば覺る世中に

ちと珍らしく死ぬもなぐさみ

徳和歌後萬載集卷第七

賀歌

寄都祝

算木有政

君が代は都のまちを十返りの

松原どほりつゝく千本

寄橋祝

堂伴白主

懸渡すなりも幾代をへのじにて

やはり昔のまゝの繼橋

子子孫彦のもとにて新宅によ

する祝といふことを

朱樂かん江

水繩もひづまぬ小石瓦ぶき

いはほとなりて動なき宿

紀定鷹

万代とことぶく龜のをがは町

鶴のはしらをたてし新宅

四方赤良

かなな屑盡きぬ言葉も新しく

たてし柱のかぞいろはづけ

子子孫彦

木の匠墨さしに筆たて具より

けふは壘を敷島の道

内匠はしらがもとにて柱によ

する祝といふ事を

四方赤良

飛彈たくみ立し柱の数々は

よむともつきぬ三河萬歲

寄筭祝

望月章甫

筭の變らぬ御代はめでたやと

むき出して社いふべかりけれ

寄祝祝

夕霧籬

やはらぎし御代はかはらの硯石

されば千年をへるぞめでたき

寄刀祝

節松嫁々

古の亂れやきばも白鞘に

うちをさまれる御代ぞやす國

寄琴祝

名万壽盛方

調ぶればふきじざいとぞ謠ふなる

めでたきことの組の数々

寄三線祝

門限面倒

四海波賤が伏屋も三味線の

調子くるはぬ御代にぞ有ける

寄袋祝

酒上不埒

しめくゝりよく治れる大君の

御代は千秋ばん袋かな

寄手毬祝

垢しみ衣紋

君が代の數とりぐにたはれ子も

袖かなぐりて手まりつくなり

寄松魚祝

名万壽盛方

竹のはをかいしきにせし松の魚

ひと節ごとに千代やこむらん

野見新ごん墨かね馬馬

一節をうたふかつほの祝歌

はやしててうさよい皿にもれ

寄謠祝

紀定鷹

謠ふ聲つれて此屋にみちゆきは

さてもめでたき次第なりけり

寄生醉祝

腹唐秋人

足元はよろ／＼つよも限りなく
のぼりてゆくや老のさかゝるひ

髪置祝

四方赤良

今年よりつむりにけしを置初て

千代萬代の數どりにせん

袴着祝

千里亭白駒

刀をも流石に武士の種ぞこて

かみしもつきをいはふ袴着

元服祝

無錢法師

元服を駿河の富士の根揃へに

雪のしらがの末いはふなり

婆阿五十の賀に酒によする祝

といふことを 四方赤良

又もみん榮花の夢の五十年

粟餅くはず酒をのみ／＼

家居を二間たてつけたる人を

賀して

節藝中貫

高砂のうらを一けんせばやどて

二けんましたる家のはりまち

吉奈の温泉にて岩淵三度屋と

いへる家のおきなにあふて

へつゝ東作

あやかれや東方朔が九千歳

手折し桃の數も三度屋

神田祭みんとてよべより河岸

高積がもとに酒のみしにある

じあすのまらうごのまふけに

強飯をあつらへをきしがいか

がしたりけん二所よりもて來

りければ

四方赤良

蒸籠を重ね／＼のめでたさは

いくらありてもあかの強飯

渡海里花成海の上にてはやて

にあひ舟すでにくつがへりな

んとしければ

夢のうき世今ぞいのちは月の

舟真帆にぞ西へのりの道かな

とよみ侍りしがふしぎに風な

をりてつゝがなくなかへりける

よろこびに 紀定鷹

災難にかゝる辭世の歌までも

よみがへりたる君といはゝん

牛込所繁昌といふことを

遅蒔千種

牛込をうしとないひをほにほさく

早稲田おくての道しある世に

龜井戸柳島に山里もどめし人

をことぶきて 一富士二鷹

龜井戸に鶴のまふべき山里は

所からなる柳しま臺

やごとなき君のひとの家より

やしない君よびむかへ給へり

ける時松の島臺の足おれけれ

は人々いみ給ふをいはひなを

して 風來山人

あしといふ事は残らず取すてゝ

よきことはかりのこる若松

池田氏にてむすめの子うまれ

給ふを賀して 佐倉はね炭

三番叟何より以てやす〜と

喜びありやことにじやうさま

劔術によする祝

もとの木網

汗水を流して習ふ劔術の

役にもたぬ御代ぞめでたき

徳和歌後萬載集卷第八

戀歌上

初戀

銀杏満門

こはくも人のみる目を拔足に

ふみそめてけり戀の道芝

寄山初戀

唐衣橘衣

苦しごもいはで心に納太刀

これやわけ入る戀のはつ山

忍戀

加陪仲塗

うき涙しのぶに心ありの穴

つゝみがきれて袖をもるやと

顯戀

加保茶元成

わくらはに身幅はあへど戀衣

二度ごきもせであらはれに梟

隔壁聞戀

鶴羽重

垣のめも忍びて君が言の葉を

へだてし壁の耳にのみきく

祈戀

濱邊黒人

ひきごきのうらなく思ふ心より

あはせてたべと神せがむなり

四方赤良

拍手のなるかならぬか一向に

口をむすぶの神ぞつれなき

不逢戀

佐倉はね炭

待詫て鼻をあかせる寒き夜は

はのねもあはぬ君ぞつれなき

千枝有竹

待よりも別るゝよりも悲しきは

あはでぞかへる九十くよ〜

寄挑灯不逢戀

網破損はりかね

君にあふ手蔓も切てうき年を

ふる挑灯のはりあひもなし

待戀

棹鹿卷筆

此程に待と云たやかんざしの

しやんと疊へたつたひと言

待不來戀

加陪仲ぬり

ごぎにして待伎は側に置炬燵

ひとこねこの丸寝せよとや
寄貳待戀 丹青齋

思ひつめてかくばかりなる玉章に
夜はしらみても猶またれける
逢戀 千枝有竹

稀にあふ戀としりなば曉の

鳥もからすもねわすれてくれ

深更逢戀 ちゝのみ満門

宵の間はあたり隣も強飯の

ふけてと契る夜半の嬉しさ

茶屋逢戀 鎌倉遠則

藪入の度々茶屋とあふ戀に

のぼりつめたる箱ばしご哉

腮長馬つら

めぐり來てあふ日の首尾も葦簾張

よそからさゝぬ水茶屋の中

穴藏逢戀 手柄岡持

穴藏を縁のはしごの折々は

まゑはだふれて水ももらさず

峯松風

忍びあふ中は互にあか土の

ふかくほれたる穴ぐらのすみ

遇不逢戀 於保久旅人

移香の残りて年をふる小袖

今は身はゝもあはできれぬる

別戀 四方赤良

おさらばと反けし顔をむき玉子

きぬゝ糸のきるにきられず

夜發別戀 吳竹よほけ

又こんといひし暇の別れ霜

君が顔にもまだら置けり

後朝戀 手柄岡もち

けさは猶君がどめきの移香に

百双ほどのわが思ひかな

片思

契られぬ物とは今ぞしるこ餅

一本箸のかた思ひにて

荏土方澄

九十九夜通ひしれんほれゝつこそ

れつきとしたるかた思なれ

恨戀 手柄岡もち

情ありゝと思ひてはまりしは

葛のはかまのうらみなりけり

旅戀 白鯉館卯雲

不自由な旅にしあれば椎のはに

めしもりあげて樂しみぞする

鄙野中道

三味線もひかず調子も合ねども

ひとよ旅寝の岡崎の君

新妨仲人戀 四方赤良

相性もよし野の川の水をさす

いもせの山のなかうごぞうき

唐衣橘洲

相思ふ中を隔つる仲人は

なかだちと社いふべかりけれ

子子孫彦

結び置その仲人のさまたげを

きくに心のなきねいり聲

稚子戀 鷹羽番

いとけなき心に思ふまゝごとの

末は人目をかくれん坊かな

紀定磨

稚子の思ひ詰たる一つ身に

なごつけ紐をさかぬ君かな

早乙女戀

大屋裏住

早乙女の思ひ懸樋の水もれて

今は歌にもうたはるゝ戀

平生三里季保

早乙女の笠の下紐打さけて

あひみん秋をたのみかけ水

袋筒長

折々に歌もごぎれて早乙女の

さゝやきあふは戀のうへつけ

秋風女房

賤のめが思ひ山田にぬれ初て

穂にあらはるゝ戀の若苗

圍者戀

から衣きつ洲

いかにせん象戲のこまご捨られて

かこはるゝ身の末もつまらず

藤満丸

戀人のつげの小櫓も利休形

さすが千家のかこひ物好

蓬萊山人歸橋

世中を渡りに舟のかこはれは

なみゝならぬ戀の深き瀬

武士戀

武士八十氏

武士も人をこい口東のまも

忘れがたなの身ぞすかれぬる

ふし松嫁々

武士の矢竹心のひかるゝは

いもがやなぎのまゆみ也けり

後家戀

から衣橘洲

こご人を思ひにつくるつみ髪や

なきつまぐしもさすが忘れて

奴僕戀

雲樂齋

いつこなくよい中ぬきも惡さまに

ふみつけられてうき草履取

卜者戀

智恵内子

待人に會ぬよ辛きうらなひ者

かん良こんこふけわたる鐘

萬歲戀

吳竹世暮氣

さくわかさこまんさいしよの妻しあれば

はるゝきぬる三河戀しき

川越戀

小川町住

約束を違へず九十五もんまで

かたひつめたる川越の戀

座頭戀

夕霧籬

らうたしと見る目も兼て非ざれば

せめて浮名をたてゝきかなん

互聾戀

鳥空音

忍びあふ中は互の耳と口

さこへませぬと恨をやいふ

戀病服藥

望月章甫

さくやいかに上の空なる風藥

まつつつもりし戀の病に

宵口舌

書出田丸

続れたる宵の口説もみす帯を

へいでとりたる閨のむつ言

みな月廿日あまり九日のよ何

がしごかやいへる家にあそび

徳和歌後萬載集卷第九

めしてよひとよ酒のみけるに
さりにし世すみける人の俤に
いどうかよひてみへければ
すいろにむかしを思ひいでゝ

婆阿

夢の中に夢を結ぶの神ぞとも

みよ拍手のうつゝなのよや

あざみをゑかきし扇のうらに

かきつけて人のもとにつかは

しける 清水立登麿

情なき人の心は鬼あざみ

言のは末にもつやとげ針

浅草寺の庭にみめもあしから

ぬよしす張のなには屋てふ茶

屋の女をみて歌よめと人のい

ひければ から衣橘洲

なにはやの女はよしと夕時雨

ふるともぬれてみたき笠松

戀歌下

寄雪戀

童部友竹

とけくく積る思を今宵しも

いはまの雪のふるへ聲なり

寄稻妻戀

朱樂かん江

暫くも夜床に尻をすへざるは

わか妻ならぬいな妻ぞかし

寄雷戀

吳竹世艶

稻妻のちらとみそめし君ゆへに

心もうはの空になる神

大石小石躬陰

なりさうで我妻ならぬ稻妻の

光かややくよそのかみなり

寄初午戀

普栗釣方

一筋に稻荷ともいへ戀の山

のぼりそめしはけふが初午

寄文月戀

子子孫彦

はや秋もきたかと思ふ戀風に
くりかへしみる君の文月

七轉八興

わが縁の暑き夏毛の筆きれて

心ばかりは通ふふみづき

寄路戀

袋町入隅

ぬかるまいと思乍らも踏込めば

足のぬけぬが戀路なるらん

寄橘戀

峯松風

其とのみ言葉の橘は懸つれど

いつかわたしが思ひはれなん

寄榎竹戀

山手白人

思ひあふ中は節なき榎竹の

ながくも軒の妻と見るべき

寄階子戀

大事三味

ふみ見れば今宵こいどの嬉しさに

しのびて足をはこばし子哉

寄簾戀

山手白人

簾ごし見かちる猫に柏木の

ゑもんつくらふ前わたり哉

寄屏風戀 糟句齋余丹坊

うき涙古き屏風の蝶つがひ

はなれくになるぞ悲しき

寄禪戀 もとの木あみ

人心あさき敷居に堰れては

われから昏もあけていはれず

山手白人

打解てたれと襖かしらねども

いもがたもとのひきて多さよ

寄寶戀 四方赤良

箱入の娘の年はいくつぞと

隣の寶かぞへてや見む

鶴籠女

いつ人の手に入聲を取やらと

たれも思ひをかくる子寶

寄玉戀 峯松風

思ひあふ中は角なくまろくど

小さいかひさへたまの事なり

寄錢戀 紀定磨

一筋に思ひ重ねしみとせんと

つきつけいふはさしも耻かし

寄琴戀 鰐かきかね

戀人にけふは添寢の枕糸

みをひきしむる事ぞわりなき

寄基戀 加保茶元成

君とわが心はいづれたがひせん

はねかへされて手もなかり鳧

書出田丸

繋りし中を今更きられては

二世ごかけ目もだめと社なれ

寄筆戀 望月まん丸

うき人をみそめて年をふる筆の

命毛かけてかきくどかばや

寄硯戀 銀杏満門

いは硯海より深く思ふぞよ

かはは赤間のせきのへだてに

寄硯箱戀 吹壳咽人

浮名のみ高島石のあひ難き

ねがひを神にかけ硯箱

寄弓戀

見龍

手ぐすねをひけど人目の重藤は

はなすまゆみもなきぞ苦しき

寄鐵炮戀 吳竹節躬

たまさかの音づれとても打絶て

うらみのたねが島とこそなれ

如水上毛

玉のをもたゆる思ひのたねが島

さかなき口に火ぶたなければ

紀躬鹿

塞りし胸の火蓋もきれやらで

涙の玉はうちにこもれり

寄刀戀 紀定磨

やつれては心細みの亂れ焼

獨りねたばのあはぬ夜ぞうき

書出田丸

君故に心もうはのそら鞘は

さすが人目のしのぎがたなや

寄鞘戀 吾足齋灌園

身をいれてくどげど固い後家鞘は

たいいつまでもあふ事ぞなき

寄鎗印戀

吳竹よつや

ちらくこみしは思もますら男の

もたせぶりなる鎗じるしかも

寄具足戀

婆阿

いつまでもいはで忍ぶの草摺に

もゆる思ひは胸のひこもじ

腮かき金

やうやうと今宵の手管具足して

いまやと君をまちうけの筒

寄車戀

いつも早秋

くごいても人の心やうし車

戀の重荷をつけたまはしつ

秋風女房

うき命しばしは淀の水車

思ひをくみてめぐりきよかし

やはり棟梁

小車の引手あまたの君故に

戀の重荷をはこぶ身もうし

寄傘戀

山手白人

ろくくいらへだにせず傘の

さしもつれなき人心かな

四方赤良

傘のゑにしはあれな年月を

ふるぼねかひの手に渡るこも

寄笠戀

澤邊帆足

笠の紐結ぶの神をあてなれば

さけぬ契の末かけてまつ

寄扇戀

百足こかね

變らじと契をこめし要とて

今宵あふぎの折もたがはず

寄團扇戀

大原さこね

疑ひし胸の團扇のはれてより

はなれはせじと思ふ姫のり

寄小鼓戀

高山笑翁

裏ばりの離れぬ戀の中なれど

あはねば心をきつゝみかな

山手白人

色深き思のしらべかけそめて

つゝみもつ手もしめつゆるめつ

寄三線戀

四方赤良

色糸のねをに結ぶのかみごまを

かけてもうきは何のばちかは

寄薰物戀

ちゝのみ満門

たき物の獨り焦るゝ戀やせに

たふれふせこそ骨ばかりなる

寄枕戀

柿下手丸

末のかさかけて契れる中がさこ

親枕たちもかねてゐる枕

寄鍋戀

忍岡虛路里

よし君がうきをつくまの鍋ならば

われとち蓋となりてあはなん

寄水桶戀

山手白人

水桶の洩さぬ中も穢されて

そこらうき名を流しもとかな

寄茶碗戀

柿下手丸

打わりて言れぬ竹の筒茶碗

あけくれ物を思ひそめつけ

寄油皿戀

腮長馬貫

重りて暗き思ひを下皿に

とかく油の君がまはり氣

寄灯心戀

雲樂齋

筆にさへ書立られぬ燈心の

戀にこがれて身もやせ男

寄雪踏戀

濱邊黑人

厚草に雪踏の裏のかねごと

踏たがへてはひざるばかりに

寄下駄戀

眞竹深藪

下駄のほも立ぬ程なり別れ路の

涙の雨のふりかゝるには

寄十露盤戀

醫者小路七影

よしさらば命にかけて算盤の

玉きはるゝもあはざらめやは

紀定磨

君をのみ思ひ参らせ算盤の

たまさかにあふ中ぞわりなき

狸々變生

十露盤のたまゝよれば弾かれて

あはぬほど猶思ひかけ算

寄赤木戀

唐衣橘洲

四天王ならねば戀の山入に

忍ぶ心の鬼はおそろし

寄羽織紐戀

野見秋足

結び置契りは細く打過て

あはぬ羽織のひもたちにつけり

寄俵戀

紀みしか

君にわれ思を米のきれしより

面やせにける化粧ごもかな

寄米戀

大飯食人

諸共に米つむまでと契りてし

思ひますめのいねもやられず

寄酒戀

柳直成上毛

とつくりと談る間も夏のよに

はやさんずいのとりぞ鳴なる

寄醴戀

多田人成

醴のすくなる程になれそめし

二人が中はかたづくりかも

寄中汲酒戀

問屋酒船

薄からず思ひ合たる中汲は

菰かぶるゝも心からくち

寄茶戀

大屋畏住

憂事を談らは今はつむかし

のちむかしまで別義あらしな

寄麴飯戀

垢染衣紋

憐れども云人はなしあぶりこの

身はやきいひに胸ぞこがるゝ

寄冷食戀

大根古木

朝夕に契るとすれど似菩薩の

一夜へだてばすえかはるらし

寄牡丹餅戀

裏堀蟹子丸

牡丹餅の味も心も變らじと

ちぎれどへだつ堺重箱

寄田樂豆腐戀

ト柳

やる文の返しもせねば田樂の

くしゝむねをこがす我みぞ

寄梅干戀

大原久知爲

梅干のすいはみをくふ習とて

たへぬ思ひのたねばかりなり

寄牡丹戀

秋風女房

相思ふ二人が中もこく牡丹

うしとはいはいじいろ深見草

寄蓮戀

人世話成

其どなく戀の糸ひく心ねを

ほりて聞のものはすはなりけり

寄百合戀

丹青齋

搖起し搖起してもうつぶきて

花の顔ばせみせぬ床の間

寄暮積戀

手柄岡持

足曳の山に生てふ長芋の

長くもいもにあはでやまめや

寄眞桑瓜戀

四方赤良

あはまくは瓜の畠にねもしなん

とりつる履のうき名たつとも

寄藤戀

糟句齋よたん坊

戀中もうす紫の藤の花

咲といふさへきにかゝりつる

寄栗戀

はし鷹身寄

澁々ないらへ乍らにうつぶくは

まだうたぐりのき娘ぞかし

寄竹戀

大井底郷

此君とひとよねふしのさゝめ言

思ひのたけもわりていはや

寄筍戀

よし野の葛子

人目をも幾重か包む竹のこの

ふしのまにゝ心こめつゝ

柳すくなり

思ふたけ残る話の短夜に

ねほりはほりは深い戀中

寄武士戀

常産阿馬

弓取のゐるやくそくを引つるは

はなれてのちにあはじと思ふ

寄鍛冶戀

皆人和良布

おさふねの並々ならぬかちどりて

人目の關をうちもこへなん

寄大工戀

絲瓜皮也

くるゝと巻おさめたる墨壺の

いともうれしき君が玉章

澤邊横行

墨壺のいと一筋に思へども

うらむぞ君がまがりかねなる

寄仕立屋戀

猿万里太夫

きぬゝも立別れぬふ目の針に

いとしき身をはさしつもれかし

寄商人戀

便々館湖鯉鮒

思ひねに會ぬ恨を書出しの

ふみつけられて猶もこふらし

寄乞食戀

普栗釣方

日に千度門にも立んわが戀路

ごうぞ叶へて下さいやしやう

寄手習戀

常産阿馬

けふよりや思ひ參らせろゝと

うきみの紙に戀の手習

咲そめし花のいろはも戀風に

ちりけもとからぞつとす墨

いろはより手を取初めて教れば

紅葉ちりぬるお若衆の顔

寄蹴鞠戀

朝起つらき

あふ事もありやゝと待けるに

さらゝとんと君のそれまり

寄踊戀

海老船守

盆々と契るに胸も踊子の

あひみん事はけふあすばかり

寄花火戀

山道高彦

結ぶべき縁のつな火の折をえて

あふは雨夜の星くだりかも

寄馬戀

鎌倉遠則

馬にのる身にも戀路はかち跣足

とりもつ人を力草かな

寄猿戀

つれなさに思ひは猶もまさる也

ひつかきおくる言のはもがな

寄象戀

内匠半四郎

包めども女の髪に繋れて

心のたけをみんなはく象

寄鯛戀

門限面倒

色香には顯はれねどもなま鯛の

ちと御座つたと見ゆる目の中

寄子戀

和歌も少々讀安

椀箱に鼠のいりし心地して

くるしき戀はねつかれもせず

寄丑戀

藤葉奈丸

わか戀はかの老人の牛ならで

りんきの角をひけらかさるゝ

寄寅戀

板雨露任

つれなさよ風の便に言よれど

はりこの寅のかぶりのみして

寄卯戀

三方長巖斗

つらさうさ鬼の耳の長文を

かきちらしてやきるゝ命毛

寄辰戀

藤葉奈丸

今ははや浮名も辰の天上に

のぼりつめたるわが戀路かな

寄巳戀

扇折風

くちなはの二筋どなき心にて

もつれあひたる戀こそなれ

寄午戀

三方長のし

夢にさへ君が心ははなれ馬

うしを見し夜ぞ今は戀しき

寄未戀

藤葉奈丸

未にはあらねど君が玉章の

くひさき紙はくひたくもあり

寄申戀

ひまのないし

まごゝこ虚ばかりを云なさる

しりもむすばぬ君がことの

寄酉戀

和歌茂小々讀安

待詔て早速はづすかけがねは

とりのそらねもいらぬ閨の戸

寄戌戀

棒ならで今宵は君にあふ夜也

ねせはしやせぬさあおきな丸

寄亥戀

園蝴蝶

ゐのしゝのふり向難き戀路哉

たとへ命を牙にかけても

寄猫戀

すは子

垣はより姿をちらとみけ猫の

またたびゝに思ひみだるゝ

徳和歌後萬載集卷第十

雜歌上

いどう空はれわたれる夕ふ
じのねをみやりて白扇倒懸東
海天といへるからうたを思ひ
出て

朱樂漢江

白扇をさかさに懸し山は今

つまこがしたる煙たつなり

日くらしの里本行寺に物見塚
さてこだかき所あり筑波山人
のかきたるいしぶみたてりこ
の寺の庭よりつくば山もよく
はれわたたりてみへければ

婆阿

物見塚昔尋ねてふみ見れば

右と左につくば山人

隅田川

紀定磨

一ぱいに硯の海をひき出して

すりながしたるすみ田川かな

きさらぎ十日あまり二日四方

赤良あけら漢江にいざなはれ

てすみた川に舟道遙しけるに

折しも月おほろに空のけしき

もたゝならねば人々歌よみ興

しけるついでに 銀杏満門

船頭はなくとも舟は波の上を

どうかこうかといざり火の影

樓臨三絃江といふことを

平秩東作

玉琴におさめし國のためしをも

ひくさみせんのはりの高殿

下總のくに小金原を過るごと

今村寄樂齋

名にしおはゞ貸て吳かし小金原

末になすのゝはてはみへねど

八代にいたるさて火川といふ

所にてひうち石ひらふて

横道黒塗師

ひの本の肥後の火川のひうち石

ひにひとふた拾ふひとく

一谷

肥長馬貫

一しきりたゆみて又も敦盛の

末は露けき月のくまがへ

狐渡諏訪湖といふ事を

内匠はしら

氷てはゆきつ狐のおのづから

すはうちつれてわたる湖水ぞ

常産阿馬

みな人は神の教をすはこそと

氷はるかにわたる水うみ

名所博奕

智恵内子

かつ事は遠つ近江の負ばくち

もごでもないさ細江なるべし

名所生酔

堂伴白主

白波の立もよろゝ生酔の

顔はあかしのうら千鳥足

庭苔

夕霧離

人とはぬ庭も我身も垢つきて

苦むしけりなもののぐさの庵

苔埋古墳 七常持

年ふれば石の肌も寒きにや

苔の衣をくるみてぞ居る

辻番栽松 へつゝ東作

辻番が下座のかた手の作り松

日に十かへりもはひつははせつ

題しらす 傘染守尾張

投てしる此かはらけの音なきに

麥のはたけの地にみつるとは

山家 石郡金吉

鐵炮の隠れずみななる山里に

たまゝ人もねらひくるなり

放屁百首歌の中に

四方赤良

山里に尻ごみしつゝ入しより

うき世の事は屁とも思はず

山家獸 いつも早秋

音づるゝものは狸の腹鼓

ちつとも人のとはぬ山里

閑居燈 銀杏満門

世を捨る心と細き燈火に

物おもはする吉丁子かな

しのばすの池のほとりなる山

田景富のやごりをとひ侍りし

に風景いはんかたなければ

四方赤良

垣越にむかふが岡の景色をも

わが物がほとしのばすの池

述懷

手柄岡持

金なきと隙のなきとに代へてまし

病ある身と苦勞ある身を

加陪仲塗

年々に目も弱りゆきはもかくる

清水立登麿

われが身も三十にしてたつか弓

やたけ心にまごふたい中

嘯月齋鴉山美濃神戶

塞翁かむまい事ならいつとても

後からうしが來ると思へや

四方赤良

世中の人には時の狂歌師と

呼るゝ名こそおかしかりけれ

老述懷

老のみとなるこの瓜の今ははや

婆々でなければ齒にあはぬなり

鐘撞述懷

一づづゝつくまにつくや溜息の

身はすてがねとかねて思へど

鎗持述懷

此まゝにいつまで年をふる鎗と

わづかとり毛の身をかこつなり

寄菊述懷

行秋とあす白菊の露の身の

うきは涙にひたし物なり

寄屏風述懷

から衣橘洲

世にたつは苦しかりけり腰屏風

まがりなりには折かゝめども
寄浴衣述懷 糟句齋余丹坊

雜巾となるみざらしの古ゆかた

又しぼられてくちやはてなん

はるのはじめ何がしのもとを

あるじこし侍りて

さくらはね炭

茲に一夜彼處に一夜さゝ鳴の

身はうぐひすと飛ありくなり

題しらす 引わり御膳

ふき自在ならぬ女子の身の上に

男みやうがのあらせ給へや

四十にちかきとし前齒のひと

つ落はべりければ

馬屋まや輔

青かりし頭もいつか村紅葉

ひとはちりゆく身の秋ぞうき

世のいとなみのしげきにより

てこのめるあそびも遠ざかり

けるに 加保茶元成

並ならぬ用事のたんと寄くれば

釣にゆくまもあらそがしや

むかしよりわかすむどころは

水難の沙汰なかりしに天明三

年文月の比大水出て家居もな

がれ侍りければ

嘯月齋鴉山

話にもきかぬ寢耳に水入て

戸口に舟のかゝるためしは

不破の月見んどやくそくせし

もことしの水難にて無下にな

りけるがその日になりて友の

さそひ來にければ

水難に沈む心もつる月に

浮れてふはと出かけこそすれ

武士貧乏 山手白人

貧すれば質に置のて太刀かたな

さすがは武士のうけつながしつ

炭團うるものゝまづしきを見

て 大原久ちる

借錢をまろめかねてや炭團やが

身をけしすみの粉にはたくらん

老女懷舊 宿屋めし盛

いつのまに緑の髪も雪つみて

柳ごしさへかくかゝみぬる

紀定磨

思ひ出るよめりの時の丸綿も

今はしらがの雪とふる婆々

遣手婆々懷舊 小川町住

俣のかはりて年も積る身は

名のみやりてのはなをさる婆々

紀定磨

駒下駄に勇みし我も今ははや

遣手の婆々のらちくちもなし

まらうごのまうけにさかな調

じけるとき

水すまば先赤るひを洗ふべし

にぐらば鰯の足をあらはん

盃の蒔繪を見侍りて

人世話成

盃のうらは蒔繪の鳥なれば

おさへるひとさす人もあり

菊印の酒を人のもとにおくる
とて 猿万里大夫

あくる度ぐくぐくと音あれど
薬ごきくの酒印かな

やごとなきかたより月をゑが
きし船のかたちしたる盃をた
まはりければ 仲吉子よし
君は舟しんもろはくを引受て
のまばや水にうかぶさかづき

題しらす 風前雲助 縣升見
一歳は酒にひたりて過してき

この世はさめて夢にぞありける
雀酒盛 置石村路

もとよりも雀はさゝがすきなれば
ゑさしの竿にさいつさゝれつ

久しくあはざりける山田氏に
いなだといへる肴にて酒すゝ
むるとて 武士八十氏

今もつて酒は山田のおろちなら
出す肴もいなだ姫ぞや

ぐそくびらきの日紀定磨来り
ければ 酒上不埒

五十歩も百歩も同じ足もとの
よろりよろひと酔給へかし

返し 紀定磨

むだ口は何の役にもたゝかひを

もつてたゝれぬほごに酔けり
人のもとへ酒さかなをおくる
とて 可笑

初秋の風もふくらにおね酒の

口にあはびのかひあらまほし

伊豫守何がしのもとにてはた
しろといへる魚を味噌吸物に
していだしければ

山手白人

これも又いよのゆげたの馳走とて

とをはたしろのみそになりけり

生酔音楽 もとの木あみ

ひちりきの舌も廻らず大酒に

うごのゝあしもたゝぬ生酔

何がしのこのる所にかつほの
さしみをとおくるとて

平生三里季保

ごばん所へ打て變つた進物を

かうでかつほのさしみとも見よ

醬滓 栗成笑

山にもる醬油のみこそ悲しけれ

秋はてぬればくふ人もなし

鮎の鮓をたうべて

養父坂押躬

千金にかへじと思ふ鮎のすし

これもかはせにのぼり下れば

奈良漬 鶺鴒仙口

奈良漬はならに限らず何處でも

かすがあるからなら漬といふ

米のあたえたうとき比

瓢から酒

花よりは團子ちいさく見へに梟

小米ざくらもあたへ千金

なりはひあしきとし粥の攝待

するをみ侍て

菫菴退二美瀧

貧民の飢たる腹へはごこしの

かゆい所へ手のとゞく慈悲

棚上牡丹餅 雀酒盛

牡丹餅を棚にあげはの蝶もこん

かけしきなこは菜の花の色

むさしのくに一の宮の池より

ぬなはをとりておくられける

人に かすく齋余丹坊

たべつけぬ生蓴菜をみたらしや

これぞむさしの一のおみやげ

詩人嗜餅 竹杖爲輕

酒一斗のみにし人も物かはと

かみこなしたる餅は太白

隣より黍團子をもらひて

丹青齋

下さるは日本一の黍團子

ひとつついたる音もいたした

智恵内子のもとへ大和柿にそ

徳和歌後萬載集卷十

へてよみてつかはしける

吉野葛子

讀習らふ歌の種にとへたながら

心ばかりをかきおくるなり

返し 智恵ないし

賜るは御所にも似たり言のはの

花もみもある枝がきのもと

澁柿をとりてあまばしにしけ

るが天氣あしくて不出來なる

を人にすゝむるごと

古屋雨漏

あまばしにすれば天氣も搔蟬る

しぶくながらあがり給へや

すみだ川のはどり牛島といふ

所に中川屋といへる酒家あり

みな人これを葛西太郎とよぶ

いけすの鯉に名あり

平秩東作

庖丁がどく牛島のあらひ鯉

かいしく芦のはさへこぼれず

歌舞妓工中村重助

川風に髪そゝけたる人ばかり

あらふてくふは鯉のひやもの

四方赤良

ふたつもし牛の御前の向島

太郎か鯉はいけの中川屋

浅草の酒家うかむ瀬といへる

たかどのにて鮑の貝の大なる

盃にて酒すゝめければ

生酔と笑はゞ笑へ味酒の

みをすてゝこそうかむ瀬の貝

うかむ瀬のたかごのにて酒の

みけるに人々庭におりたちて

蹴鞠せしにまりのそれて川の

中に落ければ 多田人成

浮む瀬に沈める鞠も隅田川

ありやなしやと船頭にこふ

友ごちひどりふたり目黒に詣

けるにそのごもひどりは上戸

ひどりは下戸になんありける

折から雨ふりければ

泥道すべる

村雨のさめるもあれば酔もあり

これやめぐろの不動なるらん

鳶の油揚げ豆腐をさらひ行くを

み侍りて

鳶飛で天にいたりし油揚げは

ときにとつての僧のめいわく

ほしなをみ侍りて 生儘成

徒らに我身は干葉の年をへて

むかしの若菜今はこひしき

徳和歌後萬載集卷第十一

雑歌中

九十六になりける人によみて

つかはしける 吾足齋灌園

おあしさへ達者てしかも錢百の

としにすこしも不足ござらぬ

浮腫をやめる時消息してこは

れし人にこたへ侍る

手柄岡持

わか病問給はればすら〜と

水もなかるゝ心地こそすれ

目をやめる人をみ侍りて

便々館湖鯉鮒

うは玉のやみ目は空にしられねど

かた〜はほしかた〜はくも

女子の疱瘡を見侍りて

節蕪中貫

はら〜と四乳の様な疱瘡は

かせかけるはござてもよくなる

孫の疱瘡を見侍りて

車屋義人

疱瘡を駿河のふじの山高く

けふみづうみの初めなりけり

連歌をこのめる人痼病をやみ

けるに

紀定麿

連歌師のさり嫌なく食し物

うちこしてより痼病とやなる

人のはやり風ひけるごきゝて

開屋酒船

引風の邪鬼追拂ふしやうきさん

たゝ一服でげん宗の夢

風を引て咳のいでければ

堂伴白主

水涕のちるごもよしやよしの川

しがらみかけてせき留めなん

やまひのちしばらく酒をや

め侍りければ

峯松風

下戸となる我身一つを嘆くなり
ふたつみつよいつか呑たや

盲人針治

勘定疎人

世の闇をさぐりくゝて針立の

心ほそくもうちくらすかな

癪をやめる人に針うちてやる

につれなくもなをらねば

から衣橘洲

打わびて今はせんかた筑波山

にゐばりいしのまねはすれども

灸をすゆる人をみ侍りて

澤邊帆足

捨やうと漸く思ひきりもくさ

これがきかいで何としやうもん

積病をうれへ侍りける時

四方赤良

思ひきや我借錢のしやくならで

わき證文にこはるべしとは

夕立嫁入

阿久垂粕

夕立にあふよめ入の行列は

つきくゝまでもぬれの相伴

喜三二のなかだちにて妻をむ

かへければ

酒上不埒戀川春町

婚禮も作者の世話で出来ぬるは

これ草本のゑにしなるらん

ある人の嫁にはしめてあひ侍

りて

山手白人

花嫁御とくみ吉野と思ひしに

お目にかゝるはけふがを初瀬

狐嫁入

八十氏人

夜のどの嫁御はいつかこんくゝと

まてば甘露のひでり雨哉

京間内則

かつぐ藻の花嫁の顔眺めんと

舅もそばへよるの殿さま

女房なき家はとりしまりなき

と人のいひければ

吾足齋灌園

小ざれいな住るはならず女房が

なければむさいくらしなりけり

生みたまのいはひの日暮をう

つ人を見侍りて 仲吉子好

はぬる魚をさへて切てふた親を

いはふがこうのいき身たまかも

圍碁すきける人のもごにて黒

くぬりてかけごある枕を出し

てねぶりをすゝめけるに

津無坊早耳

うば玉の夜を黒石になすらへて

かけごの枕うちもこそぬれ

双陸にまけぬれば

加保茶元成

双六をうつの山べのうつゝにも

夢にもひとつかたぬなりけり

みやこに侍りし比鳥石山人の

もごにて阿野郷の御書あそば

さるゝを見奉りて

世入道へまうし

水莖の御後に恐れ夏ながら

ぞつとするほごかんじ入けり

夜業

勘定疎人

よなべかごごへご答もないぎかや

口にたまりしうむのあいさつ

川向喧嘩

一升夢輔

はてしなき水掛論の川向ひ

わたりもつかではらをたつ波

圍碁によせて喧嘩の中なをり

の心をよめる

唐衣橘洲

生死の論はむやくと打かへて

なをる中手の圍碁はむつまじ

邪許歌をきゝて

武士八十氏

力をもいれずしてまつ手近くの

つちを動すきやり歌かな

居ねふりする人をみて

野見秋足

居眠りの船漕出す海づらは

いく朝はやくをきつしら波

咄上手聞下手といふ諺を

山手白人

お上手の話すゝめもかひぞなき

身は聞下手のしかも聲

傾城無筆

銀杏滿門

思はずよ世に浮れめの八文字

その駒下駄もふみかゝぬごは

傾城博奕

竹杖すかる

伏るのはよきめと思ふ壺さらを

ふりてあはざるはりの強さよ

ある人主人の命にて能の太刀

をつくりてあげしごきゝて

平秩東作

御細工のしてがよければ脇にさす

太刀も一ふりある男舞

兵法者ぬす人にあふといふ事

を

兵法者己がやじりは斬れたり

とるにかひなき連のつき弓

ふどゐと河骨を生花にせんと

て轡ごめにいけかぬる人を見

侍りて

寢小辨垂高

口ごはきふどゐは綱の轡ごめ

かう骨折て居るもいけずき

米のあたへ貴き比市のほとり

を過侍りて

一本鎗主

帆をあげし米の價は高砂の

このうら店によくもすみの江

菊畑にませ垣したるかたはら

に下部のしゝするを見侍りて

紫山加理

牡丹なら名にめでし共見ゆるさめ

菊のまがきにしゝはいかにぞ

文月六日人のもごより竹をお

くらんとありしに

手柄岡持

吳竹と聞ば此方は星合の

空時宜なしにもらひ申さん

神無月の比ある人のもごへ美

濃紙をこひにつかはすこて

ふる筆の笠はあれども神無月

時雨をふせぐみのを賜はれ

何がしの大守下着にもろ人の
狂歌をかゝしめて狂歌衣と名
つけ給ひしにその衣のそびら
に花信齋が草して猿をかきた
るをみて 四方赤良

誹諧の猿の小簀もこの比は

狂歌衣をほしげなりけり

雨のあしたすて子を見侍りて
子を捨る藪しも分ぬ暗き夜に

涙の雨やしのごつき弓

雨夜百物語 出諏訪耳彦

化物の話はたつた一筋の

燈心さへもけしからぬ雨

やんごとなき方に久しうてま

見へ侍りしにわが老さらばへ

るさまをあはれみ給ひてまこ

とにきりんも老ぬればこの給

ひし時 白鯉館卯雲

私に麒麟の事はあらざりき

驚馬にをさるはわかいうちから

大屋うら住のやごりちかけれ
ば日ごとにさひ侍りて

腹から秋人

たはれたる和歌の裏住近ければ

あし間を見ては尋ねこそすれ

やはらの師にわぶることあり

てひたすらいひものすれご心

とけ侍らねばいつかやはらぐ

べきわびうたをど人のもごめ

に から衣橋洲

武士の心やはらもしろぬ身は

手もなくかいむ腰折の歌

放蕩なる男子のもごへ

拙堂法師

福徳の實と思へのらむすこ

いつも親父にもらふ目の玉

わが持たる簀龜を見る人多け

れば 風來山人

天か下名をふる事の印には

多くの人の來てはみの龜

ひとのすぎはひといいへること
を 檜皮釘武

細くともかりのうき世をすぎ楊枝

おく齒に物のかゝる苦はなし

雨の夜峯松風のもごにて

讀人志禮多

源氏にはあらぬ雨夜の物語

六十帖もこの四疊半

ある人淺草海苔をほそくたち

てやき酒のさかなにとていだ

しければ 久壽根兼滿

たいのりを短冊なりにやかれしは

むかしながらの山ざくら炭

東牛齋にて布留糸道のさみせ

んにあはせて誌仲といへる翁

源平つはもの揃蓮生道行の段

をかたりけるに橋大夫の舞け

れば 四方赤良

蓮生の道行がゝり取敢す

うたふもまふもつはもの揃

返し 橘大夫元家上代目市村羽左衛門

初めての連中様に蓮生の

道行がゝりさても迷惑

きさらぎの比山道高彦とぶら

ひきませしかば

澤邊あや子芳澤葛蒲

され歌に聞傳ふ名は高彦の

君もはじめてきさらぎの比

返し

山道高彦

諸人のひくや地藝とよし澤の

あやめにはつのげんざん位なり

題しらす

三方長のし

針ほごな事に棒つく足輕は

おもきやしきの武士の金鐵

四方赤良とゝもに日ぐらしの

里にあそび侍りてかはらけを

谷へなげて興じ侍りけるとき

一本鎗主

かはらけの落る所もかすかなる

その日ぐらしの茶屋のあきなひ

花道つらねが木場のやごりを

訪ひ侍りしに門に二もこの松

のたてるを見て 四方赤良

遙々と尋ねてき場の隠れ家は

杉にはあらぬ松たてる門

日ぐらしの里にて

日影土龍

今日はけふあすは飛鳥の山近き

その日ぐらしに遊ぶこそよき

題しらす

長々浪人

士のかゝみと人のいふなれば

我もうらやにがゝみてぞすむ

花道つらね

おほけなく柿の素袍におほふ哉

わがたつ芝居冥加あらせ給へや

徳和歌後萬載集卷第十二

雑歌下

老子

四方赤良

桃栗は三年柿は八年の

中にすももは八十とせの春

莊子

莊周も猫に追れてうなされん

蝴蝶となりし春の日の夢

列子

追風に乘ゆく時の道中の

くものあしよりはやき駕昇

唐堯

おふたりの娘にひさし聲養子

土階三尺こぬか三合

伯牙

賈夕美濃神戶

もうきゝて非じと思ひきりの木は

ことほりぞかし

四方赤良

鍾子期に別れし時のおみくしは

琴をかついて山やすぎけん

陶淵明

世の憂を柳にやらでませかきの

聞とひとしくかへんなんいざ

褒姒

おめかけの館で風をきる比は

船のはゑむ花火見物

揚貴妃

空だきの沈香亭の全盛も

あはれ馬嵬が原のひとつ屁

赤壁

文月の文もや通ふ神無月

うらをかへして遊ぶ赤壁

函谷關

鶏の宵鳴とほご過し此

棒ちぎり木でせきに關守

范蠡遊五湖

河那可師古

功名を遂しもぬけの唐衣

きまゝにあそぶ五湖のつり舟

米搗

臍穴主

晝間より夜を米つきや歸らん

隴のかけを庭にのこして

車引

紀定磨

身代はまはり兼ねたる車引

つらきうき世をおし渡れども

猿引

峰松風

三本のたらぬ獸も愚かなる

われにましろの藝はもちけり

臼目切

大石小石躬陰

何してもひき白藝のまに合は

めきりゝゝとはかざらぬなり

布袋の湯あみするゑに

友垣古文

布ぶくろ垢落さんと湯浴して

豆のから子もつかふなるべし

壽老人笛をふくかたかきたる

に

唐衣橘洲

たをやめのあしだならねど壽老人

ふくによりくる鹿笛の聲

韃靼人のかたかきたるに

四方赤良

中華とはいへ共花は夏の夜の

ひと夜にかはる罌粟坊主かな

大刀うばひとかいへる能狂言

のさまを福王何かしかるがき

しかたはらに

あけらかん江

束のまに太刀や奪はれ太郎冠者

さしづめをのが目釘ぬかれて

万象亭のあるじ竹杖爲輕のも

ごめによりて藤花かつぎたる

女をかきたる大津繪の扇に

一河齋鈍通典
三兵衛

誰人のゆかりの花の姿ぞや

今も大津に年をふりそで

雨やごりの繪に

白鯉館卯雲

村雨のやがて晴るゝと知り乍ら

やどる心やひさしかるらん

よしのゝ山のゑに

驪山人東河

よしのわん雲のはしゝ懸れるは

自然と咲し花漆かも

四方赤良

昔たれかゝる狂歌の種まきて

よしのゝ花もちりになしけん

金魚をかける扇に

宗匠梅堂

きら／＼と天地に金魚きらめくは

みてもすゝしきおせんすい哉

虎をかきたる扇に 袋筒長

これも又扇の骨の竹にすむ

さらのゑなれば風やおこらん

何がし大守のもゝにて江戸大

夫河東が扇にかきてつかはし

けるその扇のゑ竹に雀になん

ありける 四方赤良

汲交す銚子のさらにからまりて

酔をすゝめの時を江戸節

杜若のゑのつたなきを見侍り
て 大屋裏住

盗人にゆかりの色かこんな繪を

かきつばたとはふどいやつ橋

巖にうみほうづきつけたるか

たかきたるに 朱樂漢江

冲津風海はうづきをふくからに

自然とあはのなるここそきけ

阿那可師古わがすかたをゑが

かしめて歌をこひければ

四方赤良

鏡にて見知ごしなるわが姿

お目にかゝるも久しぶりなり

四方 東菊麿

煩惱は皆みのあだど北面を

すてゝあづまの富士見西行

曉 田畑持麿_{下毛}

夢にのみ拾ひしうその革財布

うき世にかへす曉のかね

夜明鳥 大尻股吳

押柄に人の妻戸をあけ鳥

かゝあ／＼と呼わたるかな

雨ふりの日傘といふ事を

山手白人

ことほりや長柄持なら振もせめ

さりどては又ひがらかさとは

座鋪八景の中に時計晩鐘

白鯉館卯雲

黄昏れて夜食もちやんと食しまふ

腹の時計や菜はせんまい

時計大狂 銀杏みつかと

時計をば當にはせねどあんまりな

ことにもよるとひるの間違ひ

關放馬 島あせ道

板廂もれて月毛の放れ馬

不破の關屋のあれにあれゆく

万載集にたゝ一首いりたる事

をなげきて 加保茶元成

とく和歌をよまば集にも洩まじを

後万載とはなりにけるかな

徳和歌後萬載集卷第十三

万載集世にひろまりて後万載
のもどめせちなればよろこび
のあまりに 板元伊八

まんさいは我等が家の大夫殿
はらつみうつとく和歌の集

雑駄

短歌

ひと、せ江府の狂言芝居市村
竹之丞座に上方より秋田彦四
郎といへる道外がたの下りて
狂言をあてけると聞て

笹 曆

兩芝居、つむ蒸籠の、山たかき、木
戸番の聲、やかましく、貴賤群集
の、こり沙汰は、いづれと心、さだ
めなき、時雨ふりをく、あづまち
や、江戸風はいさ、しらぬひの、つ
くすたはけの、かほみせに、よき
評判と、えてに帆を、あげてあて
たる、ふきや町、市村竹の、上手と
も、よりあつまれる、見物に、はめ
をはづして、こみ馬の、あとあしに

なる、やくしやまで、尻尾をふつ
て、はねきれば、鼻毛をのばし、こ
んぼうに、つられてぞゆく、いくた
びか、秋田ときげど、見あかざり
けり

此うた古今我集にみへたり

兩國橋のほごりにてよめる

津むり光

鎗たへぬ、兩國ばしを、いくめぐ
り、めぐりてみれば、ふしの根も、
おもしろたへに、あは雪の、ふり
に呼こむ、前だれは、たれとちぎら
ん、いくよ餅、いまやつくばの、山
うりは、うそさへつきの、くまの
膏、あぶら出てふ、子もり子の、あ
まのみるめの、かるわざえ、鶴のえ
ひろひ、竹わたり、いく千代としを
ふるでくの、あやつり糸の、よるべ
なき、かたは車を、みせものに、す
る墨流し、いろ／＼の、似顔にしき

の、川いちに、たがこはいろや、う
たかたの、きえてはともす、うば
玉火、しだり櫻の、よし野丸、うら
やましけし、人しげき、茶屋の床机
に、こしかたを、はなしうなぎや、
はりがねの、みがけばひかる、玉
くしげ、箱人にして、温石の、石川
島も、ちかくみゆらん

反歌

見渡せば淡雪花火橋の月

あたへ千万兩國の景

冬の長うた

問屋酒船

ちはやふる、神も出雲へ、ゆく秋
は、きのふとすぎの、むらしぐれ、
僧や法師の、けさよりは、ころも奉
加を、せん念の、心ねじやか、十
夜まへ、うしろあはせに、ゐの子
どて、くばれる重の、うちは同士、
うなひごどもが、もちくばり、ねの
こは三か、いちのさま、さまたく

ひさぐ、魚の名の、ゑびす講には、
直や高き、いやしきわざも、すみう
りの、その日くを、くれはざり、
面しろからすも、うりありき、雪に
はいどい、黒き指、十し天一、ひと
とせの、めぐり暦を、かうがへて、
みかどへさへ、げ、たまみその、ひな
もみやこも、一陽の、ふくすふぐと
の、あつものは、あたゝかみこの、
きれくも、出あひがしらの、はち
たゝき、世を瓢箪に、ぬらくらと、
なますましなる、茶せん髪、撫ず
やありけん、たらの魚、雪は文子
の、つくりざり、驚かぬよの、すゝ
はらひ、あけがたかけて、をく霜
の、しろきはもちの、ことしろの、
神田まではや、正月の、きぬくば
りしつ、まつ竹も、いとなみたて
て、岡見するかも

反歌

光陰のやたら早くもくる春に

心そはくとしのせき候

述懐

鈍奈法師

思ふこと、かなはねばこそ、うき
世とは、かねて存じて、居りぬれ
ど、やゝそろばんの、けたちがひ、
二六時中に、かねほしど、まなくひ
まなく、ふじのねの、もへつくとは
に、思へども、もつての外に、さぶ
ろくの、ゆきや氷に、とぢられて、
はたらくことも、かたをなみ、あし
ずりしつゝ、なにもかも、人をう
らみん、さりながら、ふづまりなり
し、年のくれ、たゞかけこひの、か
ほをみて、なきぬべらなり、後悔
の、かへらぬながら、くりことを、
たゆる時なく、かくなはに、思ひみ
だれて、勘定の、たらぬがちなる、
足引の、山した水の、にげかくれ、
戸棚の中に、ひとり居て、あはれあ

はれど、なげきあまり、せんすべな
みに、よこにねにけり

反歌

八重葎多かる宿の冬枯も
なごかけこひにさはらざりけん

旋頭歌

人の來たりてあないこひけれ
ども従者のきゝつけざりけれ
ば 琴流

打つけに表で人の物もうといふ
我そこに聞で居たるは何の耳ぞも
すゝはらひを見侍りて

鈍奈法師

彼家に煤はくおのこしかな掃そ
借つゝも君がきまさん煤の上張
出立の異なるりの煤掃ぞ
見時に社知らぬ翁にあふ心地すれ

混本歌

ある人に酒をふるまひけるに
あたゝむるおもまたでひやに
てのみければ 穿砂
いれ上戸かんをもまたす ひやで
のむくせのわるさよ

折句歌

かきつばたといふ五文字を句
の上にきて 鵜柄仙口
唐までも聞へしものはつの國の
はしばの官のたかい關白

物名

はなをすり はし鷹身寄
垣ごしに梅が香かほる春風は
はなをすりてや咲かよふらん
新吉原火ゑん玉屋の浮れ女し
づはたが月見にしごねのしき
ぞめせしときしきぞめしづは
たくはえんだまど云る文字を

たていれ侍りて 手柄岡持
折をえて錦染なすしづはたの
山にくはえん玉の光も

草名十

利茂

ひともじをあらに妹さかゝげたて
せりあふひまにふきけしなしそ
葉葉名十 山手白人

けうごくもせり立てなす歌のくは
ゆどりのないもおほね口豆
木名十 渡海里花成

過しひの君とぬるでをかぎりかや
めぐりあふちとまつかはかなし
鳥名十 笹鷹

かりの時山からつごひいづるみは
ごぎしやさきのあやうからずや
鳥の名を十かくして戀の歌よ
めど人のいひければ籠の鳥に
なすらへてうかれめの心を

浮鴈

仇戀をしつるのもましこざる日は

無筆誦經

堂伴白主

つの文字もかく事ならで般若經

よむのはうはのそらおぼえなり

隣家誦經

天保川成

やねとやね谷の隣に聲はるは

うぐひすならではほけ經

山寺連歌

腹から秋人

連歌して此山寺におりはしや

見わたす景のうら表よき

紫野のほとり酒うる家にやす

らひて一休和尚の事など思ひ

出侍りて 世入道へまうし

又六が門ごくらくと聞からに

さかむに佛のいやたうとけれ

芝青松寺にて

星屋光次

青松寺万年山の額みれば

ちとせの松や十たびうへけん

本庄押上村普賢にまうでゝ

舟も象となりて川より此寺へ

おし上村のふげんなるかも

寄早稻釋教

内匠はしら

一掴み早稻のみいれを手の内へ

佛のくごくするす引なり

寄蟲釋教

良村安世

世を厭ふ身にも蟲は墨染の

衣のたまご珠數つなぎなり

如是本末究竟等

朱樂漢江

鳴聲を鶴とはきけご尾をみては

尻かかしらかいかでわくべき

徳和歌後萬載集卷第十五

神祇歌

賀茂

星屋光次

下上の賀茂はいづれがみ親ぞこ

禰宜にたづねて紉べらなり

祇園會

藤満丸

祇園會のみこしも光る玉鐙の

道しある代の祭するごき

祇園會のあくる日に

星屋光次

けふは又はきため山に蒲鉾の

わけをすてたる祇園會の後

江戸芝蒲に鹿島の社海をむか

ひてたてゐるあり海上をまもら

んどの事ゆへなりごきゝて

濱邊黒人

海を守る神をいさめのひと踊

かしま浦にはなんなかりける

人丸社法樂に春のうた一日百

首よみて奉りけるはしめに

權宗匠梅堂

此神のぬさにもごらん筆つはな

ほうけぬ先にいざかきのもと

みそかに思ふ事の侍りければ

ある神のみまへに鈴をふりて

せちにいのり侍るこて

身輕折輔北尾政演

千早振神のみすゞにすがりても

なるこならぬは音にきかまし

江戸高田寶泉寺の庭にあらた

にふじのかたちをつくりて淺

間の宮をあがめ侍りければ

紀有安

出來立のふじのおほこは水無月の

すばしり口にまいりてぞしる

むさしの國桶川の宿にいごふ

りたる社ありこの比たれいふ

こなく人まうでくる事のおほ

しごきゝて 二歩只取

此神に心のたけの誓をば

たがかけそめし桶川の里

小兒の宮まいりの日に

くれ竹世艶

元よりも塵に交はる神じやこて

あくたれものこなさせ給ふな

笠森稻荷團子 なます盛方

澤山につむかはらけの團子をば

かさもりと社いふべかりけれ

津のくにすみよしの社にまふ

で侍りて松をみ侍りて

梅下武士

その昔きねがみうへの神の松

たち白ほごになりにける哉

加茂のあふひのはを地帯の中

にすきいれたる扇に

四方赤良

此神のわけいかづちぞ難有き

あふひでも猶あふぎてもなを

社頭踊 津良河厚

ひとおごりうたの音頭を鳥居前

手をしめ繩のよれつもつれつ

寄花神祇 奴ら藏人

朝な夕な櫻のちりに交はりて

掃除しながら花をみやつこ

寄玉瓜神祇 古瀬勝雄

瑞籬にはふや熊野の鳥瓜

神のみまへの鈴なりにして

寄僧神祇 小昔千万里

巔にかうごゝまらせ給へこや

しばらくそらぬ僧の月代

寄飯焚神祇 高羽子雄鳥

ゆふ櫛かけて働く飯焚が

あしたの米をきよめ給へや

寄傾城神祇 竹杖爲輕

浮れ女が誠をみすのかみ心

とけてあふみの客人のみや

寄夜發神祇 奈間川野等人

常闇のよし簀の岩戸ひき明て

面しろくもいづる辻君

寄生醉神祇 一節千杖

かくかゝんのんでは暮す生醉の

つみてふつまもなかごみの友

寄鯖神祇 濱邊黑人

やつ藤の御紋に似ても瑞籬の

内へはいれぬ蛸の入道

寄刀神祇 加保茶元成

やはらぐる光も年をふる刀

ごげみやさびし赤いはし水

寄幟神祇 紀躬鹿

新しく染しのぼりの棹鹿を

神のみまへにふりたてゝみる

寄鍋神祇 雲樂齋

常はうそをつくまの人も正直の

かうべにかぶる鍋の数々

寄摺小木神祇 扨米人

摺鉢の目に諸々のよごれをも

このすり小木にはらひ玉みそ

寄唇屑神祇 久壽根兼満

拂ひ給ひ清めて給ふ幸に

あまくだりますかみ屑のかご

用ありごもはやく起る事なか

れひまありごもみだりにうご

くことなかれ金は戀の山にす

て玉は酒のふちになぐべし

己れやれ富貴になさで置べき歟

貧乏神の勅をそむかば

これは貧くうの神人にかゝりてつけ給

ひしこばならびに歌さん

石清水の放生會の事を人のか

たるをきゝ侍りて 梁仲墨

岩清水みてきた様に放し鳥

数はしらねど八まんもある

世中百首歌の中に

荒木田守氏

天照す神の教を反かずば

人の世中富貴繁昌

千金のかはぎぬは一狐腋にあらす

万載のことは一編の集につくさ

すこゝに四方赤良花鳥になれて月

雪にあかずされば雅筵としてむか

へざるはなくはた酒樓として酔ざ

るもなし赤良さいつ比はじめて万

載狂歌集を選ぶたまゝ選者のこ

とにあづかりしより江戸四里四方

のすさびと赤良がえらひに應せん

ごてもてあつまれる草稿五くるま

にあまりかつ千箱にみてり赤良ふ

たいひ一帙のしふをえらぶ醉中往

往狂詠にふけりて老のまさになら

らんことをしらす赤良はたしてご

こわか後万ざいしふとなづく赤良

がえらひをけみするに後のえらび

はほとんどささきの選よりもくは

しあゝ千金のかはぎぬは一狐腋に

あらず萬載のことは一編の集に

つくさず赤良がえらび萬載よりし

てなを百載にいたれば作者はいよ
いよたくみなるべく選者はますま
すくはしからんごきに天明四年う
づきのはじめあけら漢江しるす

天明五年乙巳孟春吉日

吾吟我集

吾吟我集は慶安年中江都の石田未得か著す所也近體の狂歌諸題をそなへよくよみなへしかも句々面白きは此集に過るはなし昔時京師に板行ありけるが今絶てなしいよいよ久しきを経て亡失せんことを惜みて翻刻するものならし

寶曆七年丁丑冬日綠竹園主人題

やま田歌は人のとるさなへをたねとして。あまたの稻のここの葉とぞなれりける。里々にある人。こどわざしげき物なれば。心におもふことを。麥つきもみするうすにつけていひ出せるなり。花に琴ひく鶯。水にあやをる蛙の聲をきけば。いきとし池のはたのみゝすいづれか歌をうたはざりける。ちからをもいれずしてあひ槌をうごかし。目の見えぬごせ座頭をもあはれとおもはせ。おとこなれぬをんなをもやはらげ。たけきものゝふの心をもうからかすは小歌なり。此うた雨ふりのさびしき時よりやいできにけん。しかありて世にはやる事は。久方のあめがしたてる日に。まりつく姫にはじまり。あらかねのつちをこねては。壁ぬるすさのをのこの口すさむよりぞ。

をこりける。ちはやふる神おどろには氏子の數さだまらずこゝろこゝろにして。ほごひやうしわきがたかりけらし。人の世をわたるこて酔酒つくるしごとよりぞ。味噌つく人もきねうたはうたひける。かくてぞ花見をして鳥をれうり霜をくみ。露をかなしむ野がけなごに。まひかなづるこゝろことばおほくさまゝになりける。とをき所もかごするあしもこのろびやうしよりうたひそめて海河をわたり。たかき山路もふもとのちりまじりなる家より。あま雲たなびく峯までも。をひのぼれる馬かたうたも旅のなぐさみなるべし。なにはのうたひはみかごのおほんはじめなり。あさか山のこどばをうねめのくせまひにつくりて。このふたうたひはちゝはゝの

いさめにて。鼓の手ならふ子ども
のはじめにぞしける。そもくう
たのさまくむつかし。から磨の
歌もかくぞあるべき。そのむさく
さのひとつにはざれ歌。大榮螺の
かざらしき詞をそへたるうた
なにはめの孕育子だねの冬籠り

今は春べとつはるこのはら
ふたつには初心のかぞへうた
ます花に思ひつく身の味氣なさ
身の徒らになるもえしらで
このうたいかにはへるにかあらん
その心えがたし

みつにはなもないうた
君にけさ深し寝巻ををきていなは
戀風に身のひえやわたらん

このうたよくかなへりども見え
ず。たらちめのおやのかふ子のま
ゆつきはいぶせくもあるかいもが
ほにしてかやうなるはわろ口とや

いふべからん

よつにはだうけうた

わがこうは詠ども盡じありそ海の

濱のまさごはうちつくすども

碁のうたかくれたる所なんなきは

じめのあひてはかはれ共おなじぬ

しはかはらぬ碁ずきなるべし。す

まぬやいとしほやくけかやうなる

はやまひにやかなふべからん

いつくにはたはことうた

偽のなきやうなれどいかはこ

中人口はうれしがなしき

このうたさらにおもしろからずと

めあはぬ歌とやいふべからんおる

人をあくまどわれは見つるかな花

ちらすべき風はふかぬに

むつにはいくさのいはひうた

このどのはぶへんと見けり魁けて

みつ羽よつばのそやをはなせり
此うたいはひ歌と見えすいのち

あやふき事になん。春日野にわか

なつむ下女よろつよをいはふ心は

かみさまの汁これらやすこしめで

たからんおほよそむさくさな心を

たしくわけてはえよむましきこ

とになん

今の世中色につき。人のこゝろ鼻

のさき思案になりにけるより。あ

だなるはやりうたはかなきことの

み出くれば。だて小袖の色このみ

の家に。くち木の伽羅の中しれぬ

ことくなりて。まめなるどころに

は鼻すゝり。をくびに出すべきこ

とにもあらずなりになり。その恥

かく事をおもへばかゝるべくなん

あらぬいにしへの世にある人。春

の花見のあした。秋の月見の夜ご

とにさふらひたちをめて。酒宴

につけつゝ歌をうたはしめ給ふ。
あるは花をそしとてたよりなき所

にまごひ。よし野はつせの花よりもみちよりも。こひしき人は見たい物じや。あるは月をおもふて。しるべなきやみの夜ありきたがり。しんのやみにもまよはぬわれを。あたゝそさまのまよはしやるなごうたふを聞てさはがしをろかなりとしづめ給ひけん。しかあるのみにあらず。さゝれ石のいはほどなりて。苔のむすめ子どもりうたつを吟じ。つくば山の七ツ石にかけてひやうしをこり。よろこびは未得が十徳身にすぎ。たのしみは心のはたばりなきうたふくろにあまり。むねの煙に富士はものかはとよせて人をこひ。松むしのねのちんちろりともみえぬ人かげに野遊びの友をしのび。高砂すみの江の松の葉にさへふたり寝ばあひおもひのやうにおぼへおそこ

山のむかしを思ひ出て。をみなへのひと時をくねるも花のりん氣ぶりがこぞうたがひける。又春の朝食の比にちるを花鯉と見。秋の夕暮に落る木のみを菓子ならんかとき。あるは年のくれごとに鏡の餅のかげに見ゆる。しろ粉のごとくつもれるかしらの雪。ひたいのしはすもこほらぬ浪をなけきあへ物草の露せんじ茶のあはを見ておほぢむばの身をおごろき。あるはきのふ酒屋へよばれし僧の齋をうしなひ。世にわびしたしかりし旦那もうごくなり。あるは末の松山さ々なみはこすとも御身とわれとは千世ふるまでとうたひ。野中の水をくみてつるべは九ツ身はひとつ。つるべをまくらにおけをこかげにとたはふれ。秋萩の花をながめて下戸は餅に心をよせ。上戸

はあかつきに數かく鳴の羽もりをおもひ。あるはくれぬ竹の子のうきふしを人にいひ。よし野の河をひきてさほのうたうたひし筏士。ひえのやまひをうらみきつるに。いまはふじの灸のけふりもたゝすなり。ながらの橋もつくるなりときく人は。もとのだいもちひきし木やりの歌にぞ心をなぐさめける。いにしへよりつたはるうちにもならの千部のきやうありし時の歌ぞひろまりにける。かのおほん齋どきの日。大さかつきにみつくらひ。かきのもとのじゆくしくさくして人丸ねしたるなん。うたひし歌のひじりなるべし。秋のゆふべ立田河にちりてなかるゝをば。皆人のめにはもみぢ鮎かど見たまひ。春のあしたよし野山の花の浪さはぐは。魚の名にあるさくら鯛木にの

ぼるかどなん。人まねの心にもお
 ぼえける。又やまのての若人にな
 にがしといふありけり。小歌にあ
 やしくだてなりけり。人もまろも
 わか人がさきにたゝん事かたくわ
 か人は人の跡にたゝん事かたく。
 ひちをはりてなん行過ける。なら
 の千部の經のうた御門できやしや
 なきやふをおどいたどうたふ。も
 みち鮎なますこぼれてなかるめり
 錦手の皿中やたへなん。梅づけは
 それども見えす久くの雨氣にか
 びのなへてはえれば。ほのくど
 あかねの浦のあさぎなる嶋のきね
 めす人をしぞおもふわか人。春の
 野にすみれつみにごこし若衆なふ
 なつかしやひと夜ねよかし。わか
 のうらにしほもちくればかたもな
 へあしべをさしてたごなげすつ
 る

この人々をおきて又すきたる人
 も。尺八竹の世々にきこえ。さみ
 せんのいどのよりくになえずぞ
 ありける。これよりさきのうたを
 あつめてなん。りうきうど名つけ
 たりける。こゝにつくし琴をもう
 たをもしれる人。わづかに一人ふ
 たりなりき。師はあれども。これ
 かれ弟子のえたるどころえぬ所た
 がひになんある。かの琴ひきそめ
 し時より。年はいくとせあまり。世
 は遠くなんなりにけむ。いにしへ
 の琴をもしやうがをも。しれる人
 きく人おほからず。今この事をひ
 くに。つかさくらゐたかき人をば。
 たやすきやうなればいはず。その
 ほかにちかきあたり。その名き
 こえたるはすなはちそんじやうそ
 の人。うたのまねはすれどもまこ
 とすくなし。たとへば繪にかける

おうなの琴ひくを見て。いたづら
 にこゝろをうごかすは。水の月を
 のぞめる猿のごとし
 青柳の糸よりかけてしらぶればま
 ことに似たる鶯のこゑ。はすばも
 のれんばにしまぬ心もて何かは露
 の世ぞどあだめく。坂のほごりに
 て馬よりおちてよめり。あをりき
 れてをれるばかりどもみなめし馬
 べたなりと人にかたるな。ありは
 らのなりひらは。大小の狂言のう
 たあまり多くて。まぬるに詞たら
 ず。しほれる花そめきぬのいろな
 ふて。舞臺にほひのこれるがご
 とし。きぬやあらぬいろやむかし
 のいろならぬ身は。もたけももど
 の身にして。おほかたはかぶきも
 めてしこれぞこのつもれば人のこ
 ひとなるもの。ねぬる夜の夢をは
 かなみまたかへばいやばかものと

なりまさるかな 文者のやす筆は
歌の言葉たくみにして。その墨つ
き紙にあはず。あき人のよききぬ
きてうき世くるひの小歌ずきをい
は。雪佛の水あそびしたらんが
ごとし。ふくからに草木のごとく
たをるれば遊女の心あらしといふ
らん 深草のかはらけつくりを。
ふか草にほすかはらけをとりかく
せてる日のくもるけふは雨氣ぞ
宇治山の貴賤くんじゆすれば。茶
つみのうたかすかにして。はじめ
をはりたしかならず。いは秋の
月にありく歌念佛の。あかつき雨
にあへるがごとし わが庵はみや
まの茶つみしかぞすむ世をうち
うちごくらすいとなみ うたおほ
くきこゑねば。これかれをかよは
してよくもしらず。をのゝこまち
おごりは。外面に姫のあつまりな

りあはれなるふりにてつよから
ず。いはよきおうなよりも。腰な
よくとして聲つよからぬは。若
衆のおんごうなればなるべし。お
もひつゝぬればや若衆見えつらん
夢としりせばさめざらましを。い
ろ見えてうつろふものはおごり子
のこのみくの花ぞめの袖。あつ
き日は身をうきあせのながれ川さ
そふ水あらばあびんどぞおもふ。
そどものひめのうた。わかせこが
くべきよひなりさゝちまきあもの
ふるまひかねてしをかん 大原の
黒木うりはそのさまいやし。いは
ばたきおへる山路の花のかげに
やすめる木こりのうたのごとし。
おもひ出てほしき時にははつかり
のなきてわたるを人の汁のみ。か
がみもちいざ立わりて煮てくはん
としへぬる身の老のいはひに こ

のほかの人々。その名きこふるく
ま野びくに。西國順禮のありく野
邊のかつらのはひひろごり。林に
しげき木の葉猿まはしのことわざ
おほかれど。うたごのみおもひて
そのわけしらぬなるべしかゝるに
いま。ぬめり歌あめのしたにはや
る事四ツ時九ツの眞晝になん有け
る。あまたにかざりうつくしき船
歌なみの音をひてやしまの外まで
ながれ遊山してしげれ松山。つく
ばやまのふもとよりもしげく。よ
ろづまつりのはやし物もろくの
ことぶきする千壽萬歳。かまはら
へするみこの神樂の鈴。ふりにし
ことをもおこし出て。われが吟じ
われどあつむる詞のねざしは。若
竹のまだふしさだまらぬ小歌にひ
ごしく。小歌はもとよりやまごう
たなればとおほけなく心をかけま

くもかしこき古今の序をげがしつ
たなき詞にまねぬる事。そのをそ
れおもはぬにしもあらねど。いに
しへのほめ草を。身のみやうがの
あへ物にして。口すさびぬる今の
わらひ草のたね。わか後の世のか
たみにも残れどて。慶安二年四月
中旬に。題なきに筆をくはへて。此
書のあてどころは。むさし野の草
のゆかりあるものひとりふたりの
ためばかりに。あづまのえびす歌
みづからのをかきごゝめてなん。
それが中にも。やり梅をかつくよ
りはじめて花軍をもよをし。卯の
花をどしの袖垣に郭公の名のるを
き。紅葉をおりては。立田姫を
べにやのむすめかとおもひ峯につ
む雪をば。山姥がわたばうしかと
うたがひ。鶴の庖丁かめのみきに。
君をおもひ人をもいはひ。秋はぎ

夏草のかけに。つまこふし、笛を
ならし狩をくはだて。あふ坂山に
いたりてしみづに手をあらひ。せ
きの明神をいのり。あるは春夏秋
冬にもいらぬむだこと草をも。こ
りあつむるえせうたかずくまき
まき。名つけて吾吟わがしふとい
ふ。かく此たびかきながして硯の
うみの水たえず。濱のまさごにた
つ鳥のあと残りぬれば。いまはあ
すか河の瀬にてひろへるさゝれい
しの礫。千人びきとなるよろこび
のみぞあるべき。それひちをまげ
たる枕ことばは。春の花にほひな
くして。むなしき寝ごとの鼻いび
きのみ。秋の夜のながきにまごろ
までしはぶきすれば。かつはごな
りの人の耳にをそり。かつには
鳥のうたふにはちおもへど。みど
り子の立居。おきあがりこぼうし

のおきふしのごとく心なきわれ
ら。この世におなじくむまれてめ
でたき時にあひ。かゝるたはこと
つくをなんよろこびぬる。りうた
つなくなりたれど歌の事どま
れるかな。たとひ齋非時どさり賀
よめごりの座敷かはり。たのしみ
かなしみゆきかふとも。小歌のふ
しあるをや。柳樽の酒たえず。松
の葉のつくりえだちりうせずし
て。まさ木の臺の物ながくつたは
り。とりざかなひさしくどまされ
れば。歌の吟をもしり。ざれことの
心をえたらん人は。おほそらをめ
ぐるさかづきのひかりを見るがご
とくいにしへをあふぎていまやう
をこのまざらめかも

吾吟我集卷第一

春

ふるとしに春たちける日人の
子をまうけたるによみ侍る
年の内の春にむまるゝみどりこを
ひとつとや云んふたつとや云ん
ふるとしに春立ける日よめる
冬にたつ霞のきぬはさは姫の
むまれぬさきのむ月さだめか
春のはじめのうた
わが門を一間ひらくあしたより
天下の春をしるかざり松
年ひとつこす計にや目よしのゝ
山も霞て見ゆる老らく
うしの年の春よめる
月と日を兩輪にかけてめぐり来る
ことしはうしの車よせ哉
大ふくのいはひに

大黒の袋たなをやかざるらん

今朝大ふくをいはふ茶の湯に

氷様

春に立る君民までの耳のびく

あつさうすさのひのためし哉

弓はじめの心を

春といひもとすゑ十二つき弓を

いる年の矢のはじめなりけり

毬打を見て

をのこ共春たち出てぎつちやうを

うちまたに玉もぶりゝゝ

子日

老ゆかん年にひかれて是も又

ねの日のまつげながく成べし

霞

立そむる霞の衣一かさね

山のした着や雪のしろむく

夜嵐に霞の衣もまれてや

うらゝに今朝の日のしかけゝん

鶯

難波津の梅に住ぬる鶯の

はつ音のはごや歌の手ならひ

鶯も高間の寺の兒なれば

弘法僧や知音なるらん

歌の徳よたつとからねぞ鶯も

高位にまじる竹の園生は

若菜

春寒み雪の下なる鶯菜

ねはほそくして葉をもひろげず

残雪

春のくる道筋ならし庭の雪に

日あしふみこむ跡ぞ見えたる

餘寒氷

いさかひにとけぬ心よさえ歸り

又河つらを春の水は

梅

鶯とひよく連理の中ぞかし

ちれば葉と羽をかはす飛梅

初春のひのえつちのえ木のえより

とづもひらくや梅の唇は

木体よき梅の木立はほそすくに

句ひもふかくさくを見る哉

春一季宮つかへして紅梅は

ちるや北野のかみさまのまへ

柳

さみせんのさほの河邊の糸柳

ねをあらはして浪ぞよせひく

若草

から衣すそ野の雪は地しろにて

あいにもえぎをちらす若草

早蕨

春風にあびせられてやさわらべの

てうちくをするはいくたび

もえ出しわらびに雨のふる跡の

しめるやけ野やあくのたれかす

木目

春雨は父のおろせる種ならし

この目つはりになるはゝそ山

春月

雲のうへに入口はひかる君かども

朧月夜に對してぞ見る

春雨

草木にあたを時雨のふりかへて

恩をぞ見する春雨の空

空にはる霞のきぬはふるひかや

こまかになりて落る春雨

遊絲

たつとても霞の衣ぬひえぬや

尻もむすばで亂るいとゆふ

春駒

いさみぬる將基のごとし春駒は

とらんどするに手もさゝれざる

雉子

春日野はけふはなやきそ不便げに

子を思ふきじの妻もこもれる

春鳥

鶯の歌にあはせてさへづるは

こやさみせんの駒どりの聲

歸鴈

義朝へ文のつかひにあらねども

ときはの里の歸る厂かね

去年々の子は添もせでいかなれば

もどをへらして歸厂かね

花

もらさじと花をたづぬる山々の

いたゞきもなきよくの道かな

嵐こそあひさうなけれ散花の

跡にぎやかす峯の白雲

一もこの花打ちらす雨風は

大勢にぶせい何にふせがん

かしらより山嵐してちる花を

いはゞげはうのくゝり坂也

櫻

佛にも彼岸櫻の花よりは

團子とおもふたむけなるべし

おく山の櫻よしなや見る人の

目と鼻にこそ色も香もあれ

熊谷の花にならふも道心の

袖の色なる墨ぞめ櫻

家櫻

よき日にや花もさくじの家櫻

庭に一本の柱だてして

ひらかせてちる迄ふれる花の雨は

かふぱりつよき家櫻かな

むはさくら

峯にかけり谷にくだりて足曳の

山姥櫻たつねめぐれり

木のもとを立もえさうで姥さくら

詠る人も腰ぬけとなる

しらがともいふべき花の散跡は

びくになれる姥櫻かも

犬櫻

あてられてよはりがほなる犬櫻

はなねぢりこそ山嵐のかせ

おしみ綱心にあれといぬさくら

散ゆく花はつなぎごめえぬ

伊勢さくら

いせさくら花さく迄は雨の宮

風の神にはちるをいのらん

鷺の尾さくら

余の花の木をば上見ぬわしのをの

櫻にまさる色のなければ

鹽竈さくら

移しうへてみきりにちかの鹽竈の

櫻は誰も見てをるなり

普賢像櫻

名のみしてさかりのはその短きは

はなそらごとのふげんぞう哉

春草

白妙の雪とけそむる頃もきて

野は色なをしするよめがはぎ

ふきのたう立をはりてのその跡に

九輪草こそ陰たかくなれ

あまくだる太鼓のあれば打かへて

地からはやせるつゝみ草哉

春雨のうちぬるたびにうつふきて

おきあがりこぼしたんぼゝの露

咲かゝるけまんの花の色はへて

佛の座こそにぎはゝしけれ

つばな

ぬひて見てみのすくなきは春雨の

空さやかけし太刀のつばなよ

苗代

苗代の土こね返しくりかへし

むかしを今に賤が小田まさ

蛙

くちなはの大手からめて取まけば

かはづ軍のにげ道もなし

櫻鯛

雁の汁菊の酒のむ秋はあれど

春の海邊にかす櫻鯛

海棠

繪にかくと筆にはつきし面白の

海棠くだり花のちる色

小梅花

折をえて小梅の花のひもとけば

後の物とはみをやいふべき

小米花

それはきね是は木のねに零れけり

小米の花の風にくだけて

沈丁花

竹垣を霞のきぬのふせごにて

匂ひをとむる沈丁花かな

すゝかけの花

今朝見れば露を結べるすゝかけの

花房かゝる庭の袖がき

もくれんげ

葉はおつる地獄をうかぶ心哉

冬へて春にあふもくれんげ

杜若

澤邊ふく風をいとひてむらさきの

ふくめんすると見るかほよ花

躑躅

さく花のかほは上戸の色ながら

名は下戸のすく餅つゝじ哉

山吹

空しくもほらで歸らばこがね色に

さける寶の山吹のかぶ

藤

うり物か花をかざれる棚のうへの

藤をながめて入市をたす

歌人のこと葉の花にたぐへみむ

さく藤原の忠房のたけ

松の若みごりを

いちに先^{まづ}今わかみごり立初て

松のときはの木すゑひろぐる

遅日

なかき日の晝寝の枕夢さめて

今朝は昨日の心ちこそすれ

暮春

すがりてもひきとゝめまし行春の

霞の袖の手にしさはらば

名残ある暮春の雨やきぬぐに

霞と雲の袖ぬらすらん

吾吟我集卷第二

夏

首夏

春過て夏の日影にわたぬきの

衣干すけふあせのかきぞめ

新樹

毛をかゆる鶯の尾なれや櫻花

ちりし跡よりはゆる若葉は

木すゑの葉さき揃ひてはひろに

すんののびたる夏木立かな

卯花

つくと見し挿木の花のちりぬるは

箱根うつ木の釘ばなれかも

時鳥

母かたは梅の木氏よ橘は

てゝかた名のる山ほとゝぎす

鶯のうむてふ腹はかり物よ

父にぞ聲も似るほとゝぎす

郭公なれもや彌陀を念ずらん

ほぞんかけたる一聲の内

早苗

うふるさて土を動かすなへにもや

小田やすかれといのる世なをし

葵

種をおろし待つる花のひもどくは

是ぞあふひのうへのよろこび

盧橘

ふく風に匂ひをとめてかぐ時は

はな橘のさきぞひこめく

菖蒲

頼政にあらぬもけふはひきとりて

あやめを軒の妻に見る哉

五月雨

ほそかりし瀧の糸筋よりあはせ

大綱になす五月雨の頃

水鶏

しほらしき水鶏のたゝく音すなり

をのが身ほねやなし物にする

夜もすがら月下の門をたゝきつゝ

水鶏の鳥はしゆくすともなし

鵜川

くはせつゝ魚を吐する鵜つかひは

わたにてくびをしむる心よ

照射

あゆみよる鹿は四足のものとてや

ともしをさして人のとるらん

蚊遣火

是は又袖にどめじと蚊遣火の

煙をたつる賤がたきもの

螢

水に入るひえやつもりて螢火は

をのが虫氣のやいとするらん

蟬

蟬ころもたゞ一重にてなく聲や

布施ない經にけさ落すらん

瞿麥

雨はもり露はおちきてやしなへば

上葉下葉もはゆるなでしこ

夏草

いと見事もえぎ匂ひのよろひ草

くさすりながに茂りそひつゝ

夏草のしげりて蔭のたかければ

まへきりさせて見るおどり花

夏草の色なき中にさく花は

悪女のねたむ美人草哉

ゆり

つぼめるや帽子きせたる鹿子ゆり

ひらいた花はいふにをよばす

けしのはな

つぼみぬる花の白きはさながらに

紙もてぬへるけし袋哉

紫陽草

名のみして口に食ねどあぢさいの

花を見るめに活計そある

あをむめ

みもちにてつはり頃なる青梅は

あにどはいはじ是はなのあね

瓜

ねぢつけて卒やちぎらん己れとは

まだ落さうもなき小姫瓜

なすび

をのづからなすびの色を紫の

ふくさにつゝむ茶入とぞ見る

夕顔

夕がほの花に扇をあてぬるは

たそがれ時の垣のぞきかな

蓮

妙法の蓮花ちりうく池見れば

心の水のながれだいまく

白雨

風かをり夕だつ空の涼しきは

雲に水をやあぐるりうなう

夏月

尻すゆる平砂の月に夏の夜の

霜はらをこるほごぞひえぬる

夏夜

宵なきをするかと誰もゆふつげの

鳥にとがなき短夜の空

扇

この夏も又手にふれつ命あれば

くらげのはねよあふぎなりけり

祇園會

精舎には諸行無常となる鐘の

しやぎりしきりにかはる祇園會

泉

夏の日のあつ氣をはらふ泉こそ

手に結ぶてふ水のゐんなれ

氷室

けふにあふ氷もちいのしろ粉をば

ひむろにうづむ雪とこそ見れ

納涼

天目に水一ぱいは夏の日の

あつ氣をさます氣のくすり哉

笠松の木の下風は涼しくて

空にはふらぬむら雨の音

六月稔

夏中をふるかたびらの麻の葉に

身のあかなでゝはらへ捨ぬる

びんぼうの神もなごむや借銭は
けふみな月のみをかばらへに

吾吟我集卷第三

秋

秋立ける日よめる

立あへずはや吹そむる秋風は

こらへ袋のをやさけぬらん

なぬかの目よめる

彥星のなごうしひきてかよふらん

道をねるまに夜は更ぬべし

さもこそは契ふかけれ天河

水と水とのほしのあひしやう

七夕の雲のかよひち雨ふらば

さしてわたさんかさゝぎのはし

玉まつりに

いろ／＼に手向をかゆる天目は

是やしな玉まつりなるらん

うら盆の月夜にともす提灯は

外聞のため又後世のため

おどりを見て

かけられてあふむ返しに来るこそ

小町をどりの歌のさまなれ

相撲

けふにあふこどりつかひは百敷の

しぎの羽返しをこそ取始むらめ

露

見事にて手にはとられず白露の

きえやすきこそ玉に疵なれ

きる物のすそ野分ればをく露の

玉むすびする下がひのつま

秋風

よはき物を歩にとるならひ秋風の

分て柳の一葉をぞふく

萩

二ほんながらいづれも風のをり所

あふぎとおぎの名はかはれ共

萩

露を厭ひもすそ繰上げ野をゆけば

すねをしがまし萩の花すり

皆人は團すまさるといふなれど

ふたつぐりにははぎのはなかな

女郎花

もとのめに中人なしや男山

又この秋もさくをみなへし

薄

をのが袖のやぶれをしらで秋風の

悪事をまねくはつ尾花哉

薄かる人を見て

野べにたつ尾花の袖のふりあはせ

これも草かる百性のえん

蘭

秋の風山のこしより吹おろし

すそ野をまくるふちばかま哉

あさがほ

あだなりと人のそしれば朝がほの

花やひるまの色はくつまめ

秋草

かれ木さへ花さく誓ひあるなれば

観音草の秋は尤

秋風に葉たゝきをしてうなづくは

ごさかぐひする鶏頭花哉

木槿

うつくしきむくげの花に較べては

下々どや見まし色もなき草

なたまめ

からまるを見れば是こそ氣の毒よ

庭のなま木になたまめのつる

茸

何をかも汁のみにせん高砂の

松だけがりの友さへなくて

菓

けあげたる鞠の如くにふらめきて

庭の梢にありやありの實

秋田

山田もる僧都は秋の露霜に

ぬれてぼさつの行やつとむる

稻妻

よひくしに出あひ遅しと月の内の

かつら男をまねく稻つま

野分

野分して屏風草をも吹まくり

花むらさきのうへあらはなり

霧

山里のあひのへきりのふりへだて

となりしらずの秋の夕暮

虫

古筆の化してなりたかきりくす

硯させてふ箱のなければ

くび玉よゑのころ草にしら露の

ふりてむすべば鈴むしのころゑ

はたをりのあしにからまる絲薄

まねきつくるやのべつかゝめつ

鴈

御狩にもあはぬさきより一さほに

つらなりてくる天津鴈がね

秋風に先かりがねの聲するは

誰借狀をかけてきつらん

鶉

しめばやとる野の鶉聲よくて

なれさへ藝は身をたすけぬる

鳴

羽ねがきの數を所作にやむば鳴の

かんきんをする曉の聲

秋鳥

おとされて料理にあふな四十から

身をやくまへの秋とつしめ

秋風のふくにわたれる火たき鳥

をのがけやきの用心をせよ

山ぶしの袈裟の名におふましこ鳥

秋やかけ出の峯わたるらん

秋かけて鳴渡りぬるれんじやくの

羽がひの露やおも荷なるらん

月

行さきも雲のかまひに笠をきる

月や天竺浪人のはて

曇りなき月の鏡にむかひては

とぎほしきとおもほえぬ哉

是ぞこのほうろく千につちひとつ

月にをさるゝほしのひかりは

まばらなる軒のあなより影見れば

月の鼠も桁はしるなり

見る人にあひをせらるゝ久かたの

月のうさは果報耳哉

雪水をはらひのけぬる風の手は

月のみふねのあかやかゆらん

出る月の船に心を打のせて

秋は虚空にこがれこそゆけ

美しとほめあげられて山のはに

木がくれするや月のわにかほ

八月十五夜

常よりもまろくて白く見ゆればや

今宵の月をもちといふらん

飲くひてながめにあかぬ今宵こそ

大食上戸もち月の空

照月のかつら男にむかれじと

こよひや芋がきぬかつぐらん

九月十三夜

伯母すての月は十五夜十三夜

いとこほど顔の似たるめい月

廿日月

眺むれば廿日ねずみのをのづから

今夜の月のなりぞちいさき

鹿

かいらうとなきて妻こふ小男鹿の

よりあふ山のほらや同穴

つまごひにかよへる山の下もみち

鹿のたてたる錦木やこれ

駒迎

しなのより木曾踊りしてひく駒の

まさぬる髪もちやせんやこのさ

擣衣

うつちやをもきかうべのさ夜衣

着れうの外をつまなかさねそ

菊を根びきにしてもて行を見

て

ほりて行こがねめぬきの菊の花

いづくの家のたが根なるらん

菊に蝶のごまりたるを見て

庭にごぶ蝶花がたに口よせて

菊のながえの酒やすふらん

鶯

姫松の腰にまごふはさげ帯の

べに染と見るつたかつらかな・

紅葉

六位より五位にやのぼるくらゐ山

木々のみごりのあかくなる秋

山口に先一木ある紅葉ばや

おく山ひめのべにそめの見世

霜のたて露のぬきもておりく

もみ色ふかし木々のはぶたへ

杜紅葉

秋かけて錦のけさと見るまでに

もみちしてけり衣手の森

林紅葉

林間に酒あたゝめてのむからに

もみちはかほの色にいでけり

柿紅葉

いまよりの雨をやはちく柿もみち

しふ紙いろにふかくそめつゝ

漆紅葉

やよ時雨猶うはぬりをたのむぞや

また色うすきうるし紅葉に

暮秋

くれて行秋のかたみの心ざしや

木の葉につゝむ露のしら玉

九月盡

長月もつまりくゝて一寸の

光陰おしきけふのつもごり

吾吟我集卷第四

冬

初冬

小春ごと今朝あらたまる山口に

ちりぬる跡や木々の葉がため

時雨

空ぐもりはやをもくなるかみな月

なづきはりしる初時雨哉

夢覺す板屋の時雨もらね共

寢耳に水の入心ちする

落葉

木ずるをやすりこぎにして木枯の

あへ物となる森の落葉は

吹風の手にはやはきをつかふらん

山を木の葉のちり塚にして

をのづから木の葉吹たて塵にのみ

まじはる風の神無月哉

霜

降かゝる霜のつるぎにあてられて

しのぐ木立の葉はこぼれけり

殘菊

つぼのうちに一もと残る菊の露

冬はみぞれの酒になるかも

寒草

山人は冬ぞひもじさまさりける

あへ物草もかれぬとおもへば

寒蘆

人ならば脚氣といはん霜がれに

をれふすあしのふしもかなはず

氷

河つらのしは氷にのびぬれど

冬ごとによるわが老のなみ

かけわたす氷の橋に谷あひの

ひろさのほごやつもる雪げた

千鳥

立浪のあやは小袖にぬはねども

浦づたひして行ちごりかけ

さすはごにかゝらぬもあり善悪は

友によるてふ磯千鳥哉

水鳥

打かゝる浪うけながし拂ふにぞ
水もたまらぬをしをつるぎ羽
うつなみの鼓にのりて舞立は
こや鈴鴨の神樂なるらん

網代

河の名のうちある人の風情にて
網代にのれる氷魚のゆゝしさ

冬月

さゆる夜の月の鏡のかたわれは
ふる霜おれと見えもこそすれ
霞

うき雲の衣をかけて丸しぬる

あられや人をひやす寒藥

雪

おほかたは雪をもめでし是も又
つもれば人のひえさなるもの
ふる雪に大日のひかりくもれども
かれたる木にも花は咲けり

名にしおはゞ夏の空にし降せたや

かたびら雪にあつさしのがん

板間よりしぶく雲のさかもりの

後段やつぎてふれる餅雪

寒き夜にふるは小麥の粉雪かや

ふるひくもふすまもとむる

ふらずんば空だのめどや恨むべき

雪こんく人と人にまたせて

鷹狩

一目見て思ひかけたるよめ鳥に

木居する鷹をあはせてし哉

名のみして膳にはすへぬ箸鷹の

どりえぬるよりはやつかみぐひ

炭竈

都人茶の湯を出せば小野山の

すみやくかまも下火つくろふ

火桶

抱て寝て寒さをふせぐ火をけこそ

かさねぬ夜着の妻こそふらめ

会

寒き夜はふすまの下にめもあはで

座禪の床の心ちこそすれ

神樂

夜神樂に眠けはさゝじ名におひて

くふ山樺の朝倉の聲

佛名

來迎をおがむもおなじかずくの

佛を名のる雲の上人

冬梅

雪のうち先ぬけ出て咲花は

梅の木立やさやばしるらん

歳暮

年暮ていなばの山の峯におふる

松かざりせば春歸りこん

大海を手でせくごしながれ行

年月なみをおしむ心は

老後歳暮

人質を置てながれぬ年ならば

老ぬるものゝ身をおしまめや

老の身にすゑの月日をかぞふるや

春をどなりのたからなるらん

節分に

節分の夜半にまきぬるいりまめも

花咲春の種どこをなれ

除夜

行年の矢だねつくればけふよりも

いゑ事あらぬ古ごよみ哉

吾吟我集卷第五

賀

寄日祝

人心ゆるりごをりて日のもとの

君のひかりにあたらぬはなし

寄月祝

代を久にたもつは天下一ちやうの

弓はり月よ君の御いせい

寄海祝

よつの海八島をめぐむ君は舟

臣はみづから浪をしづむる

寄巖祝

くみてしる玉のみぎりのさゝれ石

いはほとなりておん手水鉢

寄松祝

いまよりの代の數ごりに千年の

種を實うへの松の若ばへ

寄竹祝

ふしくもおさまる代とて國々の

大名竹の枝をならさぬ

寄鶴祝

千年のよはひをたもつ身所を

君にゆつるのれうりならまし

寄龜祝

龜のこゑすばんとはやす小鼓に

万歳樂といはふ君が代

寄民祝

活計に腹のふくるゝ世にあへば

天下たいへを國土萬民

吾吟我集卷第六

戀

初戀

おもひそめていつかたつかん戀衣
ほす日よりなき袖の時雨に

忍戀

思ひあまり外の人めもつゝむこそ
戀のおも荷にこづけ成けれ

聞戀

音にのみ聞ばかりにてつてもなし
えんのうすさやわが耳のびく

見戀

小座頭のはれぬ思ひやましならん
見るに目の欲をこるぼんなう

契戀

ちぎりをく詞質をや流すらん
あふうけごひの日きりのばすは

待戀

まつよひの更行からす聲きけば

鳥は物かはかはくそなく

逢戀

だきつきて今宵は我をしめころせ

あふにかへんといひし命ぞ

別戀

今なるは七ツの鐘ぞむつごとも

まだつきせぬにわかれいそぐな

後朝戀

わかれこし跡にひかるうしろ髪

今朝くしゝとおもひみだるゝ

馴戀

かはるべき後はしらねぞすし桶の

なるゝ心にあかぬわが中

恨戀

かた口に恨はいはじわが中へ

水さす人のよるもしらねば

片思

君がふくほうづきなりの提灯に

身をつりがねのかた思ひ哉

近戀

わが中は離れもやらずあひもせで

いすかのはしのねをのみぞなく

遠戀

思ひやる中ははるけき道ながら

かよふ心ぞはや飛脚なる

寄月戀

忍ぶとてさはぬ夜すがら照月の

かつらをそこは君のよこ目か

寄星戀

場はれたるほしのよばひは羨まし

我はしのべごあはぬよひくゝ

寄風戀

えりうすき身には殊更戀風の

ひきやすくして胸ぞせかるゝ

寄雲戀

たのめしは雲につけたる目印の

たへて跡なきうはのそらごぞ

寄煙戀

我を人あくたくわらの煙にて

ふすべがほこそいぶせかりけれ

寄雨戀

から笠の文もりならねど厭はるゝ
身をしる雨に袖はぬれけり

寄氷戀

底ごゝろとけすつめたき人はたゞ
あつかはつらの氷なりけり

寄山戀

いつまでかせんなき戀を信濃なる
あさま夕さまもゆる思ひぞ

寄野戀

繁きことごちかまさらん武藏野に
わが戀草をかりてくらべは

寄井戀

車井戸のつるべの繩の一すぢに
かけておもへばめぐりあはなん

寄瀧戀

うきことを聞ては耳をあらひけり
枕にながすたきつ泪に

寄川戀

いつかさてあひそめ川の渡りして

心づくしの念をはるけん

寄淵戀

うき戀の淵にはまりてたえばやな
いきたればさてあふせなき身は

寄巖戀

こなたには戀しゝと思へども
人やうごかぬいはほなるらん

寄橋戀

思ひ川へだてゝこねばしきなみに
人はしかけて戀わたりぬる

寄里戀

みちのくのあひづの程も過ぬるは
人目しのぶの里や出がたき

寄戸戀

あはゝやと今宵頼みをかけがねも
をるゝ妻戸のさしあひやある

寄障子戀

閨の内にひきてなくしてたゞ一人
ふすま障子ぞうきへだてなる

寄床戀

よひゝに人まつ床の寢むしうは
あふみおもてにしく物ぞなき

寄垣戀

かたゝといふかひもなき頼み哉
かきやぶりなる人の心に

寄松戀

住吉のきしませぶりにねばふして
やにこき人はまつに氣のごく

寄竹戀

逢とてもまだしつくりとせぬ中や
木につぎたりし竹のそひふし

寄花戀

うき人のみめかたちこそ花ならめ
なんぞ心のあだにうつろふ

寄菓戀

人心じゆんじゆくせねばしふ柿の
なるにつけても氣味のわろさよ

寄鶯戀

かたえにもます花ありて鶯の

飛のくごさうつり氣の人

寄鷹戀

うき戀に身はとりもえぬつかれ鷹
飛たつばかり思ひやるのみ

寄鳥戀

そひはてぬわかれをなげく曉に
やもめがらすのなくもいまはし

寄鶏戀

曉のわかれなつげそ鶏の
をのれもつがひとやにねながら

寄鶴戀

老鶴の羽がひの下に年をかさね
君しらすなるおもひくるしき

寄獸戀

一かたに靡きもはてすあだなるは
らつこの皮のなでつけにして

寄馬戀

口こはくひくにひかれぬうき人の
心の駒の手繩しらばや

寄牛戀

いそげども人の心はすねうしの

くるまをもそく待そわびぬる

寄鼠戀

忍ぶ夜はねすなきをして穴がちに
人の心をひいてこそみれ

寄鼬戀

情しらぬ人をたぐへばみぞいたち
たゞみめよしといふ計なり

寄猿戀

愛事は見ざるきかざるいはざるよ
かはあかめ合ふ恨せんなし

寄狐戀

君こむごいひし夜ごとに過ぬるは
たのまぬ狐身をやばかせる

寄狸戀

うはなりはたぬきの鼓おもふさま
うつて後にや腹のいるらん

寄蛙戀

つれなきは蛙のつらにかくるてふ
水ぐき一度あひさつもなし

寄蠅戀

ひる寝する君かあたりの蠅ならば
はひかゝりてや我もせゝらん

寄虱戀

そふごても肌ゆるされぬき虱
うつりやすげな人の心に

寄蜘蛛戀

待よひの吉凶あしきさゝがにの
くもでにあがき物をこそおもへ

寄蟻戀

ゆがみゆく君の心をくゞり見て
たえず恨はありごをし哉

寄蜂戀

口くせにうそつく人ごみつ蜂の
さしてたのめる我ぞはかなき

寄蚯蚓戀

目をもたぬ虫の如くに音をぞなく
見えずしらざる人をこふごて

寄龜戀

どう龜のよはひもがもな長らへば

君のうき氣にあふ事もあり

寄貝戀

あふ中も今ははなれてはまぐりの

むきみより猶うき身成けり

寄鯉戀

我戀のさしみならねごからし酢の

目はなごをりて涙こぼるゝ

寄玉戀

一度二度いふてならずとすて置し

十和が玉もあればあふ世に

寄錢戀

よみをくる歌に靡かでつれなくは

おあしの文字の數をつらねよ

寄箱戀

人の氣やひづむなま木の箱のふた

身にはあはずも成にける哉

寄葛籠戀

是にあひかれにあひぬる人はたい

一荷つゝらのふた心かな

寄枕戀

おもふこと寐言にいへば敷妙の

枕やかくす戀をしるらん

寄文戀

文ならで逢ていはややおゆかしく

おもひまいらせそろと計を

寄玉章戀

契りおく今の玉章とりおきて

かはらば後の證文にせん

寄繪戀

うつし繪に向ふが如くつれなきは

我に物をもいはすわらはす

寄硯戀

しゆびん石の硯ならねご筆そめて

かくや泪の露の玉つさ

寄筆戀

秋山に妻こひかぬる鹿の毛の

筆はいまはんくごきやる文

寄剃刀戀

人こゝろ荒砥にあつるかみそりの

あふ事かたくぬるゝ袖哉

寄衣戀

から衣うらみて袖をひきさくや

おもふが中のでくりいさかひ

寄袴戀

君きての後のあひだも長袴

まちごをなりと思ひしらすや

寄帶戀

あふ時の袖のなみだはかはらぎて

とく下帯にぬれぞかはれる

寄袋戀

うき思ひ内にふくるゝ小袋の

つゝみかねては口に出けり

寄布戀

布ならぬわが名を白くいひさらす

あくたれものゝ口のさがなさ

寄紙戀

鳥の子を十重つゝとへは重ぬども

おもふことは文につきめや

寄屏風戀

餘所めをし忍ぶ心のをくのまに

勝手屏風をひくよしもかな

寄扇戀

秋きてはそよこの風のつてもなし

人にあふぎのわかれせしより

寄笛戀

わがいきの通へるほごはふく笛の

なるをかざりに君をしたはん

寄琴戀

しのび／＼胸にしらぶるうき事の

しやうがをいつか共にうたはん

寄鼓戀

いつまでかかく打すてゝおき鼓

なるとならずと音づれよ君

寄太鼓戀

音にきく人を太鼓のうちつけに

かはよくなるは何のばちぞや

寄碁戀

案じはれて死るばかりよ我よりも

つよきあひてを戀のみだれ碁

寄双六戀

よきめをとこひねがへども双六の

さいはひなくてあはぬひとりね

寄相撲戀

下帯にまだどりつかぬわが中は

ちからをよばぬあらずまふ哉

寄鞠戀

下手の鞠よあてごもしれず庭中に

おとし文する戀のはかなさ

寄矢戀

番ふ矢のかりまたよりも烈しきは

いぶりに見ゆる人の心ね

寄鐵炮戀

鐵炮のたま／＼きてもはなさぬは

結句おもひのたねが嶋哉

寄脇差戀

君どわれあひ口ならばわきざしの

つかのまもたいはなれざらまし

寄刀戀

思ひ泌しみて思ひきるにもきられぬは

身より出せるさび刀かも

寄長刀戀

ある時はやりごめにしつある時は

つらきなぎなたあひしらひ哉

寄甲戀

うちかぶといまは忍の緒をききて

降参しつゝ思ひはらさん

寄香戀

むねにたく思ひの煙きやらならば

香をしるべにもとはれん物を

寄藥戀

ともすればいけつ殺しつ氣の毒も

きの藥もや君のはいざい

寄膏藥戀

物の氣につく程ならばうちまたの

かうやくのごとく我もはなれじ

寄酒戀

思ひみだれ色に出にけり我戀は

酒にえふかど人のとふまで

寄餅戀

あふて後猶おもひつくさたう餅

ちぎるにつけてあぢのよければ

寄饅頭戀

包めども外にもるゝはまんぢうの

あんに相違のわが契り哉

寄米戀

うすなさけ契をこめのつきはてゝ

こぬかゝゝ待ほごぞうき

寄味噌戀

一夜ねし納豆みそのなまなかに

なれてくやしき物思ひする

寄鹽戀

こぼれぬる目もこの鹽はなめぬ共

からくも人に思ひしみつゝ

寄薪戀

明暮のもゆる思ひにくべてだに

たきもつくさぬわがなげき哉

寄釜戀

人をわれすき心にてかまの湯の

わかかへりつゝ物をこそ思へ

寄鍋戀

あだ人のつくま祭にかつぐてふ

なべての數に入われぞうき

寄茶筌戀

うきふしよ茶筌の竹のほいなくも

あはでふられて心きえゝゝ

寄柄杓戀

し水よりつめたき人の心中は

ひさくなければぐくみてしらるゝ

寄桶戀

中ごとはたがゆひさくるやぶれ桶

水もらさじとおもふそこいを

寄壺戀

いはぬ間は口をこぢをく葉茶壺の

思ひつめたるほごもしらじな

寄盃戀

戀衣つまむかへにし盃に

えふてはかほも色なをしする

寄皿戀

色ふかく人をば思ひそめつけの

さらに忘れぬわがこゝろ哉

寄折敷戀

いひ出す人にかいしゆの色見えて

もれんわが名のおしき成けり

寄火戀

うき戀のやまひを治する灸ならで

むねをやく火ぞくるしかりけり

寄灯戀

今こんどゆふべにともす油つぎの

ありあけまでにかゝげそへつゝ

寄蠟燭戀

こぬ人をまつ夜にともす蠟燭の

おもひこがるゝしんのくるしさ

寄提灯戀

戀闇に骨かはさなるちやうちんの

内のおもひの外にはのめく

寄簀笠戀

忍びあまる涙の雨にかくれみの

かくれ笠こそきまくほしけれ

寄履戀

君がかたへかよふ心の道をふまば

かねのあしだのはもたまるまじ

寄梶戀

堂宮にのろひ事してうつ釘は

かなづち論のりんきいさかひ

寄棒戀

引くらべにはは棒もをれぬへし

なびかぬ人の戀のおも荷こ

寄車戀

きしまする人の心はやれ車

わがまゝにしもひくにひかれず

寄船戀

おもひにしこがれて沈むわが戀は

小舟に過た荷物なりけり

寄綱戀

だいちのひく手あまたの人心

誰によるごもしれぬさきづな

寄網戀

つゝめごもをなたに心ひくあみの

めもごに戀のあらはれやせん

寄神戀

願かけてむすぶみしめをきぶね川

よるべさだむるごもづなごせん

寄佛戀

極樂もいまの心によもまさじ

如來はだなる君ごねるほど

寄珠數戀

道心もをころおもひの玉をくりて

こぬ夜の數を身のしよさにする

寄聖戀

所からひじりの中の契とて

老をいごはぬ高野六十

寄山伏戀

待かねて獨りねにふしごらにおき

我こそ戀の山伏の行

寄若衆戀

若衆にかいなをひくもあづさ弓

はずちかへじのやくそくのため

寄遊女戀

船遊びうかれをんなのさほの歌

きけばよふしもなべておもしろ

寄醫師戀

人しれぬ戀のやまひに我しなば

いづれの醫者になき名おはせん

寄武士戀

敵を待武者の心もわが戀も

あふに命はおしまじごこそ

寄占士戀

君ごわが中こそへたのうらやさん

たのみおけどもあふ事もなし

寄番匠戀

かざらしき人の堅氣のうきふしを

まろくけづらん番匠もがな

寄鍛冶戀

くろがねも人の鍛へばやはらぐに

なごねれあはぬ君のいつてつ

寄紺搔戀

つれもなき人は紺屋のあすあきて

あひそめん日をのびくにいふ

寄蜚戀

よくつゝめ蜚の刈はす見るめもや
しほじむ中はしたゝるきもの

寄樵夫戀

おもひものに氣を盡しても懲果ぬ
身はおごろへてやせの山人

寄柚人戀

心なき柚のなげきの音にさへ

あの山彦のあごうつをきけ

寄商人戀

あき人のそらせいもんのたぐひ哉

まだねもせざる君がかねごと

寄唐人戀

君はなご聞分ざらん唐人も

なかだちあれば通す言葉を

寄盜人戀

盜人の名にやたゝまし夜もすがら

忍びありきし後のひるねは

戀雜

誰なをす中とはなしにめをとする
いさかひはてゝ夜ののちぎりき

吾吟我集卷第七

世話

老のさいはひといふことをよ
める

ながいきは恥おほけれど孫彦を

かゝむせなかにおひの幸

氏よりそだちといふことをよ
める

油斷なくこやし掛ればよきえんの

茶もや宇治よりそだちならん

はじめのさゝやき後のごよみ

といふ事を

忍びつゝはじめさゝやくむつ事は

はらみて後のごよみごぞなる

人しれすころびてつきしむかふ疵

いへぬる跡やけがの高名

孫よりもゑの子かへとはむば玉の

よるゝ思ふ用心のため

前かたをそさうにゆひし垣ねもや

はやくやぶれて後しやうぐいとなる
支證なき手がらをばなす音をこそ

から鐵砲と人のきくらめ

げすの知恵跡に附ぬるはかなさよ

身こそは主の供をするとも

代かへてめいをつぎぬる腰刀

けにも實は身のさしあはせ

料理してふるまはるれば追従に

鹿をむまやと今もいひけり

軒にふく瓦をどめてさす釘や

手づよく見ゆる鬼にかなばう

ゐねぶりも奉公がほに梓弓

いびきの音のする夜番哉

痒きかたへ手の届かざる事よりも

物をえかゝぬ人の不自由さ

よろひつれて同じさねなる剛の者

瓜を二ツにわるたぐひかな

侍の猪武者といはるゝも

虎口につよき騎馬をもつゆへ

手かいれば足も入りおさなひの

親のゆがけをたびになをして

にくまれ子世に出るてふたぐひ哉

藪よりそにそだつ若竹

立よらば大木のかげををち椎の

數をひろへる猿のかしこさ

人の物をちゝと引ざるかし金や

子に子かさなる鼠算用

猫のはにかみのこされてとぶ蚤も

虎の尾をふむ心なるらし

世間こそはり物なれと月の夜に

ちやうちんどもす人もありけり

家なれぬほごはあひらし今まいり

廿一鼠ものちはあれぬる

囃子をもうかべ顔にてするけがは

木から落たる猿樂の藝

おふ子よりだく子に乳を舐すれど

親の慈悲には前うしろなし

手のきかぬ女子の親のせつかんは

針を棒にや取なをすらん

観音や天神まいりする日こそ

牛はうしづれ馬はむまづれ

すけなりの別れをなげき尼になる

日本の虎は毛をもおします

身をつみて人の痛さを尻のあたり

さはる男や手くせなるらん

化粧にて人をまよはすたはれ女は

狐ならねど是もつらじろ

やき鳥にへをとはいへど我はた

猫につなでをつけんぞぞ思ふ

かまはじな是もさはるに煩惱の

犬ははげしく人にかみつく

強きかたに助言いひぬる將禁こそ

かける馬にもむちごしらるれ

手こうより目こう成けり亂れ碁の

あやまりは猶そばで見えぬる

双六のならひはじめはさいの目の

いちをもつてぞしるばんのうへ

上を學ぶ下とやいはんそめなすも

をなじ色なる袴かたぎぬ

落武者やうしろに負るはろみその

夕立にあふ風情なるらん

鶯のごぶみ山鳥の聲するを

にがわらひとや是をいはまし

暮ごごに鶯も鳥らごまれるは

一樹のかけのあひやごり哉

みづくで多くごりぬ小鳥こて

わらふ所へ福きたるなれ

墨がれに見ゆる熊野の牛王こそ

鳥のかしらしら紙としれ

中々にやめようさぎのなま兵法

いぬにかまるゝきずのもごひぞ

さく人もなしとてきりし琴のをや

かくるもひくも折によるらん

口の中に唱ふる阿彌陀ぶつめかし

手にもつ珠數も老のくりこそ

酒にゑひくだまく人は何事も

いざしらいごのみだれごゝろよ

わが影の一河の水にうつろひて

おなじながれをくむ風情なる

つき山の石燈籠の夜目遠目

笠の内こそおくふかく見れ

見る事の目にはごまらず聞事も

籠耳にしてみな忘れ水

口ぶりをいかにごごへど唐物を

えしらぬ人や故樹まるのみ

出るより入事はやき光陰の

矢さきや人のいのちせめけん

死する身の骨も光らじやれはつる

金の扇を見るにつけても

酒やにも命をまたふもつかめは

正月ごごの蓬萊にあふ

山人の聲にこたふる谷あひの

こだまをきけば岩も物いふ

世中の男をんなのわざはひも

しもからおこる物にこそあれ

吾吟我集卷第八

旅

大磯の宿にありける猫を見て

なれも又ひく人あればおほいその

虎げをなでゝかはけはふらん

おなしごころにて

うかれ女の人をたらすは大磯の

ごらのいをはる狐なりけり

まりこ川をわたるごて

馬のあし四本がゝりによる浪の

くつ音たかくこすまりこ川

箱根ふたご山のあひより雲の

たつを見て

明はなれ見るに箱根のふたご山

うちぐもりにて中をはりけり

富士山をながめて

ふもごをば雲の包みてちうぶらり

天からつった富士の山哉

富士山の腰よりうへはしろたへに

雲の衣をぬきさげと見る

あふのけに轉ばぬ程は富士もみつ

それよりうへはいざやしら雲

あしたか山に畑やく煙のたつ

をみて

煙たつふじのすそへもをしさげて

三里をやくやあしたかの山

のびあがる足高山も富士のねの

腰たけにさへをよばざりけり

吹上の六本松といふを遠目に

見る折しも風はげしくてほこ

りのたちければ

むかふ風に濱のまさごを吹あげの

六本まつげめをふさぎけり

田子のうらにて

をよびなき煙くらべをするがなる

ふじのたかねと田子の鹽屋と

清見がたより三保の松原を見

やりて

興ありと見ほの松こそ人さむる

清見が關の木戸柱なれ

まりこのしゆくをいでゝ

まりこより野邊にかゝりて行人の

けつまづきてやひざをするらん

宇津の山をこゆるとて

乗かけのつゝらをりして疲れたる

馬には脊をうつ山の山ごえ

さやの中山にて

旅人の命なりけりたのもしく

させる刀のさやの中山

はしもとにて

入しほに濱名ばかりはくちもせで

年ふるくいも見えぬ橋もと

三河よりをはり路にかゝりて

春の花ちりふを過て夏の日の

あつ田のまへに梅はなるみか

なるみかた喚續の濱なぞを見

て行に

聲たてゝ鳴海を出るはや飛脚

行さきくによびつぎの濱

笠寺のくわんをんにまゐりて

天井も法のちからにはりぬれば

から笠寺とさしていはなん

伊勢の國に舊友の住つきてあ

りけるをたづねあひて夜ひと

よ酒のみ物がたりして

此國のいせ物がたりはじめけり

むかしをこの友をあひ見て

伊豆のあたみへ湯治するどて

米かみといふ所ををりける

に

賤の女のみすり歌のさだめるは

ほうばるほどや米かみの里

むさしの國熊谷寺にて蓮生法

師の本像を見て

先陣の苦をまぬがれて内陣の

はたがしらこそゆかしくまがへ

筑波の山水落ゆくすゑにみの

わだといひて鯉のおほくある

淵をみて

つくばねの水も落くるみのわたの

鯉ぞつもりて淵と成ぬる

名所山

男山むかふは北の方なれば

是やはらむといはんおほはら

大江山いく野の道のこはければ

鬼が城とてまだふみも見ず

峰の巢をおほくかけぬる故にこそ

熊野をみつの山といふらめ

名所坂

すべりては尻餅をこそつきにけれ

うすひの坂を雨にこそす人

野

詠やるすゑの草葉に雲とちて

天地和合やむさし野の原

むさし野より富士をながめて

盃の名に流れたる武藏野に

富士をたぐへば蓬菜の花

をみなへしさける野がみの草枕

ありし花子とぬる心ちする

瀧

山のこしに風一聲のきこえて

鼓の瀧のおつにかんあり

清水の舞臺のうへにひゞきけり

ながす音羽の瀧の鼓は

山姫のをごけ成らし谷底に

たぐりためたる瀧のしら糸

關

やぶれすと文字にかけとも板廂

いたづらにすむ不破の關守

とまれとて人を導くたはれめの

ゑみこそ關の地藏がほなれ

關寺の門前みれば今とても

わら屋を立て小町ありけり

川

けだ物の名にながれたる熊野川

水にも影のうつる月の輪

江

朝霧の隙より見ればろくしやうの

うすざいしきの墨の江の松

浦

名にたてる屏風の浦のむら千鳥

とぶを繪やうに見る雀形

船出して松浦の沖につる魚も

ひれふりにけり浪のわかれに

濱

あだ浪もたかしの濱の千鳥わな

かけしや袖のぬれもこそすれ

崎

から崎の松は一ぼんだちながら

名をば日本にいひぞひろむる

嶋

景よしと見る人ごとにゆひ立て

まがきが島の名はくちもせず

橋

心かけし佐野の舟橋とりはなし

いたゞ敷ぞ思ひやらるゝ

扇の芝を

頼政のはねははかなくくつれども

扇の芝に名は残りぬる

里

山城のこはたの里に馬はかせど

駄らんなき身はかちにてぞゆく

河内女のをれるもめんの好あしに

ねをやわかてる高安の里

市

たづねきて誰もしるしの杉の門

三輪の市屋の酒ばやしとは

吾吟我集卷第九

雑

天

あきらけき月日ふたつは天のめの

まもる下界の人見なりけり

雲

横雲は天のそばそのくはんの木よ

ひくごみしより月明にけり

風

めに見えぬ物とはいはじ草木の

うごくは風のかたちならずや

虹

棚曳くを虹とはいかでいふやらん

たゞ一筆のへの字とも見る

松

木をんなと是や岩ねの姫小松

すねくしくも見ゆるそだちは

竹

不孝なる人に見せばや若竹の

すぐな心のふしのあひだを

苔

びろうごの蒲團とみえて萌黄なる

苔を薙と誰かいひけん

鳥

この音に峯のうそ鳥かよふらし

をのが尾よりやしらべそめけん

仕合のあしのはつきてなく賜や

沓てをなさぬむくいなるらん

有無のこことへどこたへぬ都鳥

口はづかしき田舎や思ふ

くび筋に珠數かけて行く堂鳩の

年よりこひと友やよぶらん

村鳥のわらひよりつゝなく聲を

かしがましとやきけるみづく

梟の聲よりほはんほんのりと

月の桂の木すゑ明ゆく

木々の葉の落ては陰や寒からん

びんぼうゆるぎの森の白鷺

釋迦のたけ阿彌陀が峯を飛行して
佛法僧と名をさりの聲

をく山の苔むす木陰しづかにて

身をおどろかすなくかんこ鳥

石がれい石もちなごをかさねつゝ

みさごのすしのをもしにやする

るびじやうの羽ねたゝきして鶏の

聲より關の戸は明にけり

たつ時に長くのべぬるおほくびは

身に應じたる鶴の毛衣

獸

武藏鎧さすがにかけてのる馬は

とばぬもつらし飛もうるさし

名のみして口にねぶらぬあめ牛の

いかでかたえぬよだれ成らん

青みどりかつぎてばけし狐こそ

池の玉藻のまへごなるらめ

はらつゝみうてる狸のをのづから

身にたしなみてもつや胴皮

糸つけし手飼の猫はしやみせん

かはにかけても人にひかるゝ
獅子ふじん虎亂入をやまねぬらん

おなじたぐひのうさぎ兵法

猿猴の手まつさへぎる山水に

ながるゝ空のさかづきのかげ

毛をいたむ虎のためには是ぞこの

惡事千里を行野べの風

虫

ひと問ゝ糸を配りてさゝかにの

蜘蛛の家にやこまいかくらん

地かたぶきて廻れぬ舞や是ならん

岸ねにこけて行かたつぶり

しげれるはむづかしとてや草村を

かりのけがほに分るかまざり

くちなはの己が針めのはころびを

誰にぬへとてぬけるきぬども

濱見れば眞砂に蟹のかうたてゝ

はさみきる手をあんじがほなる

貝

津の國の難波のみつのはまぐりを

ふむにもあしのうらにしらるゝ
さししほの海のそこひになる時ぞ

めぐすり貝をひろひ取ぬる

蛸少女ともなひきつゝ海ぎはに

とりあげ見れば子安貝哉

魚

たち魚のこじり咎めにかひらぎの

鮫もやひれをひからかすらん

地ごく網にかゝる憂目をみる事と

なごささりえぬたこの入道

鬼

めに見えぬ鬼はくひつく事もなし

無理いふ人の一口ぞうき

金

いかばかりこがねはをもき寶にて

ちからわざにももたれざるらん

錢

津の國のなにはの事もかなへばや

つかふ錢をもあしといふらん

秤

人の科をもきかろきは目にかゝり
我身のはごのはかりしらぬ

鏡

人を見て人は人をもたしなめば
人こそ人の人のかゝみよ

硯

筆の毛のうさぎも水をはしりつゝ
硯の海に入窓の月

紙

鳥の子に大鷹こたかひきあはせ
つかひあかぬは料紙なりけり

弓懸

鹿の皮はゆがけになるも安からず
又狩人の手にぞあひぬる

香

名をつけて牡丹と云るくゝりこそ
げにもなりけりしゝのかはぐつ

箒

塵をよく取ぬる徳をいふならば
是もこはくの玉はゝきかな

酒

住わぶる世のうきふしも忘れけり
のみし寢さゝのよひのまぎれに

餅

うへもなき大佛餅の本來を
さざれば米の菩薩なりけり

饅頭

あまからであぢのよきこそ武者心
砂糟のいらぬたゞのまんぢう

笛

くりあへる竹のあながち其ならで
ふきぬる人ののどぶえの音

尺八

祖師の名のふけといふより尺八の
竹の世をつぐ今のこも僧

琴

きゝ分る四季の調子は聲々に
伯牙がしらべことも高上

鞠

暮かゝり鞠のにはかに吹出る

風をうらみのくすばかま哉

太刀

ぬくとても我目の鞘をはづさずば
何の用にか太刀のきつさき

鐵炮

氣の藥思ひこめたる鐵炮は
的にはづれぬわがこゝろ玉

職人

鎌鍛冶もあなづりにくし草なぎの
つるぎにおなじわざをなせれば

やすらかに軒をつたふて家つくる
大工をいはゝ蜘蛛のいとなみ

あつらへの數を疊のごことはに
さすが上手はいとまなげなり

檜物師のまぐるをもみよ人心

しなへてこそは中まろくなれ
一まいを万枚になすはくやこそ

金を打出のこづちなりけれ

世のわざを心にしめてうつ徙に
身のあせをさへしほるあぶらや

棚ばたををれる糸屋の職女こそ

天乙女にもをさるまじけれ

山から籠をぬけていにけるに

かしこくも籠をぬけつゝ足曳の

山から山へもごりうちけり

人の鷹をそらしけるに

せうくゝの罪には非じひざうせし

鷹の見えぬは大それたこと

をかしき咄にて人の機嫌のな

をりければ

そらさずに人の機嫌をとりとるは

是逸物のたかばなし哉

おさなひのえにしむすぶこと

ぶきに

尉となりむばとなる迄しら雪も

ふり分髪のゆひなづけ哉

碁うつ人先手のあらそひにぞ

れ事しけるを見て

丁半と名のりかけ碁の勝負には

ぬすみをするも道理せんばん

ある人鮓のほねをたてたりし
といふをきゝて

咽すぢに骨のかけたるしがらみは

のみこみあへぬ紅葉鮓哉

くるみをわる人を見て

おにぐるみ割損ひて手のかはを

むくりこくりと身はなりにけり

かはらやのあれたるを見て

葎おひて荒たるやねのうるさきは

風にもくたく鬼がはら哉

しらかべをあか土にてぬりか

へたるを見て

田樂のみそにはあらでしらかべの

うへをぬりたる色もしほらし

伊勢衆の鹿をいむといふ物が

たりのついでに

社領とていせの山田を守る人は

尤しかをいむべかりけり

子とり姥のつでにて乳もちを

よびけるに

お乳こちのたつきも知ぬ山家より

おぼつかなくもよぶ子とりむば

ある人いさゝか成事につきて

子ある中をわかれけるに

数々の子にはなるゝもやすおけの

ゆひぶんわろきわが心から

をうむを見て

女房のとりあげてまくへそのをも

うみおろしての後のことわざ

ちいみのかたびらをきて

ちいみつゝ胸あひ難きかたびらや

きのふにかはるけふのせば布

手むさく茶たつるを見て

ふきもせでたつる茶入の大海は

塵をえらばぬことほりにこそ

茶と酒との論をしけるに

たてゝ猶宇治茶の色も青によし

なら諸白にいかでをさらん

路地の飛石をつたふとて

水うてばすべらん事もえぞしらぬ

道の苦なれや坪の石ぶみ

鯛に鹽するを見て

櫻鯛けふだにもかく匂へるを

あなたのみがたあすの料理は

魚やくを見て

芦の屋のなだの鹽魚火にくべて

竹のをぐしもさゝすやきけり

をこる人のうへを思ひやりて

をこりぬる人の榮花はあだ花の

おちぶれて後身のならめやは

いたづら者とがにをこなはれ

けるに

きりはたり丁々とうつがんだうの

音あらはれてはた物となる

ぬすみより外の事をばしら浪の

あはれあぶなく渡る世中

藥事きかでわづらふ人をみる

にかなしくて

病をもなをさぬ竹の藪醫者は

人の命のじねん期や待つ

はうかするをみて

しな玉か何ぞと人のとひし時

露とこたへんきへてなければ

子のむまれてみとせばかり腰

のたゞざりければ

足たゝで三とせの間しとはこを

ひる子は神のまもらざらめや

やいとするとて

藻にすまぬ腹の虫氣も我からと

音をこそなかめ灸はうらみじ

腰をいたむ人ふしに度々灸す

るを見て

時しらぬ病ふじのねいつゝむつ

鹿子まだらに灸をする跡

世をのがれて鎌倉にすむ人の

もごへよみてやりける

世のうさに汗かくわれを招けかし

扇がやつ風のたよりに

老人を

せをかいめ腰をもげなる人はたゞ

高野ひじりのおひやしぬらん

年寄はおほちにつれてむばたまの

くろきもかはるもろしらが哉

年よりは見ぐるしなごいひて

笠きたる人と道を行つて

笠きてもこびんのはしにをく霜の

しろきは人の世ぞ更にける

老たる人のわづらひよくなり

ての又のとしに

春よりも行歩自由になりたりし

老は將暮のこまがへり哉

比丘尼を

年わかきびくには髪をすり衣

墨にそめても心みだれん

順禮を

くばりつゝ札をうちきる順禮や

かぞへがるたの遊び成らん

鐘

つくかねの龍頭の角をうごかして

じやもまふとなる聲のすごさよ

山家

山居せば奥より奥にかくれんぼう

跡をも人のたづねこぬほど

雲こも幽寂ものどてあなづらめ

ぬの樂はなに都人

人の野をくりして歸るあかつ

きに

ながき世の別となりてなきわめく

人も八聲の鳥べ野の道

葬禮の墓を見るにも布引の

瀧はご落るわがなみだ哉

あだし野は塵のうき世の掃だめの

おさめ所よ灰になす跡

楠の木のならにがしといふ人の

墓所にて

名を残す跡の五輪はくすの木

石となりたるしるしなりけり

寺の庭に水出て卒都婆ながれ

けるに

爰も又それといわうが嶋なれや

數のそとばを波にながせば

宇治にすみぬる僧のもとへ文

つかはす人にかはりて

庵しめて世を宇治山に墨染の

衣をやりてきせん法師に

たうとき僧にあひて

姿こそあらくましけれ老僧の

むねのあひだはきよき月の輪

述懷

まじらへば七重の膝をやへにをる

袴のひだのむづかしの世や

物毎にあらばありのみなしとても

もごめはせじな世はなり次第

懷舊

茶をのめばねられぬ老の初むかし

大むかしまで思ふ夜すがら

無常

世中をおもへば夢ぞうつゝらが

八万歳も名のみのこれり

山もゝのえりくびなれや年ををし

誰が身ひこつ世に残るべき

亭主とて跡にとゝまる人は誰ぞ

この世をかりの宿といへるに

神祇

お萩の箱をはりぬる神わざに

そくいをおしのひまもなげなり

野の宮の森の鳥の羽いろまで

おなじ黒木の鳥井なりけり

歸るさもいざしら山や神主の

馳走ぶりよき客人の宮

世々をへて額にたゝむさゝ浪や

志賀の浦半の白髭の神

人の世のからきをくみて紀の海の

鹽屋の神や慈悲をたれけん

あふぎよる鹿嶋の神のかなめ石

かたきはぬけぬしるしなりけり

千早ふる社頭を見るにゆふしでの

紙より外の神ぞなかりき

三熱ののどのかはきやこまらまし

御湯まいらする神のまにゝ

釋教

教へおく釋迦のやりの手使ひなば
つるぎの山のせめやのがれん
御手の數おほき千手のちかひにも
蛸やくしこそをどらざるらめ
たいたのめ罪おもくとも石山に
觀音力のあらんかぎりは
清水にまいりの人は觀音の
堂といふより馬どめめかな
彼岸にいたらん時の帆柱や
舟岡山にたてる卒都婆木
後世しらで罪をもき身は三途川の
石をいだきて淵にしづまん
人の追善に
たむくるはしぶ茶なりとも明暮の
つもらば無上極樂のたね
まふてぬる寺にかぎらず人ごとの
胴に佛はそなはるぞかし
極樂は涼しき道ときくからに

經かたびらをきてや行らん

吾吟我集卷第十

廻文歌

春

身の留守にきてはおりとる此花は
のこる鳥をば敵にするのみ
しら雪は今朝野の草の葉にもつも
庭のさくらのさけはきゆらし

夏

田植歌てうしはやみつつてんてん
手鼓はやしうて田うへうた

秋

草くきの葉にふる霜に見やるなる
間にもしるふ庭の菊さく

冬

月のもごきよしといへば冬の夜の
夕ばへいとしよき友のきつ

戀

情なきを門にまつまひかつてこて

使まつ間にとがをきなれつ

君のためとひよりたあく門の戸の

とかくあたりよ人めたのみき

へがたしと年月事を望むらん

その男きつしとゝしたがへ

雑

ねぶりつる篝たきすて浪くらく

皆出過たりかゝる釣舟

港川とまのぞきつゝまはりけり

濱つゝきその窓は門なみ

廻文百句俳諧をつかふまつり

て貞徳といふおきなに見せに

やるとて噂申せばそなたに鼻

ひさせたまはん時にはこなた

をもおもひ給へなごことばを

かきて

むせうつり高鼻ひかん貞徳と

出むかひなばかたりつうせむ

述懐

しろ髪は毎日見るぞうかるなる

かうそる道に今は身かろし

哀傷

又飛ぬ女とおどあはれぬししらじ

死ぬれば跡をどめぬ人玉

神祇

冬らしき氣しきおもしろ岩の木

葉いろ霜をきしげきしらゆふ

賀

ながき代は君民の躰たうとしと

うたいてのみたみきはよきかな

安永五丙申年八月從東都表板

浪華 柏原屋佐兵衛

鳥がなくあづま人の石田未得か家の集の吾吟我集と名つけたるをあしがちるなにはのふみあき人泉本翁が家につたへてあら玉の百とせあまりになりたるを朝もよひ木にえりてうつせみの世にひろうせんとてしりへにひとことをそへよと聞ふるまに／＼かたはしよりみもてゆけばいにしへ後鳥羽院のおほんとき無心座にさだめられし狂歌といふものを彼ちうたはたまきのおほけなきふみになすらへてみづからのよめるかぎりをあつめたるになんありけるさればやつがれがもどよりこのめるすちにて今の世にめでのゝしるつたなきすがたをはなれいひしらぬみやびをつくしてしかもくすしからずたかきもいやしきもありとある人のこゝろの種をうへし苗代の水のひくかたに

まかせてにござる水莖の跡をとい
むになん

寛政八年初夏

棚元見行

花押

浪華書坊 河内屋八兵衛梓

ト養狂歌集

春の部

一元日にある人のもとへ行ける
にくいつみを出してしうぎの
べてのちこれを題にしてめで
たかうたよめと侍りければ

大だいにほん俵をはおこし米

かきさるかやに我ぞよろこぶ

といひければぬしかんじてい

まだくいつみとゑびとところ

とかちぐりののこりければこ

ものごものうらみ侍らん今

一首うたよめとありければ

くいつみてとところと蝦の髭くらべ

まけかちぐりとあらそひやせん

一ある人のもとへ正月七日に行

けるに七草のうたよめとあり

ければ主をいわひて

うさいわう喜びありや悦びあれ

あとの太夫にすいなまいらしよ

一ある人初春に景物香してその

のちめでたかうたよめと有け

れば

ひさしかれ久し嘉例とこぎり置

これ改年の御慶ふつかう

といふてさけなごのみて今一

首よめと所望ありければ

さけのみて目出度いはふ十炷香の

客もてい主もきやらゝ笑ひ

一ある人花入に鍵梅をさがしに

生てはもとぬきくつろげて

木立ふりよき椿をひかへにい

けて此花にうたよめと侍け

れば

やり梅をこだちの椿うけとめて

花のいのちは生てこそ見れ

一梅のさかりの折ふし山の手へ

行けるにある人の庭に千重の

むめのはなさきけるを家づと

にせんと手折てければかたは

らにありし少人むりに手をね

ちてとらんといいいなどいへ

ば歌よみたらばやり侍らんと

いふいなびかたくて

家づとにせんよといひて枝おれば

山の手のべてむりにうばい花

一ある人うしのかしらに梅花を

さしたる所をゑにかきてこれ

にうた書付よとありければ

うしも又二月の雪かばい花をば

折てかうべにさせいひやうせい

一ある人の下やしきへ梅花を見

に行けるにあるじのたまひけ

るは此梅三十三本うゑけるが

二本かれたりといふ折ふしう

ぐひすなきければこれによそ

へてうたよめとありければ

法花經の鳥のやどれる梅の木は

廿八ほんさくぞめうなる

一ある人椿の花を垣につくりい
ろいろつばきをあつめうへそ
の中のつばきの名を題にして
うたよめとありければ十種の
なを入て

千よ萬よ待し玄もくになりひらが
すげなさゝらんにくの開山

一ある人馬場にさくらをうゑて
花のころうたよめといふて所
望ありければ

白妙に綿ぼうし着る花のかほ

年もふるきのばゝざくらかな

一はなの比興をもよほし花を見
にまかりけるが花もいまだひ
らかざるその木のもどにてさ
けのみなごして

花ざかり下戸も上戸ものみたべて
ひらかぬさきにさけゝといふ
一ある人目黒の下屋敷に四方に

さくらをうへて花のときまね
きうけられて行けるにさまざ
まちそうせられてのちうたよ
めとありければ

西ひがしきたみなみさい花ざかり
あれよ是よと目ぐるうぞする

一よしのへまかりしときこもり
かつての花を折侍る人を見て
うたをよみ侍る

よしやよしの右往ざわうに折花を
かつてこもりのもらぬこのもと

一ある人の元へつゝ見に行け
るに皆人さけのみしてその比
世にはやりしこうたさてひり
んりんずのくゝり枕のいろか
はる初心なぼんさまといふ事
をうたふ我は本より下戸なれ
はさけのむしべもしらずして
もとより小うたはしらぬ身の
何をかいわでのいわつゝじと

いへば色には出しさけをのま
せよといふさもなくはうたよ
めと侍ければ

花の色はひりんりんずといわ躑躅

初心なぼんに狂歌よめとは

一ぼたんの花の下にねこのねむ
りて居るどころこてうのさま
りて侍れる所繪にかきてこれ
にうたよめといふ

目さますなこてうの夢のふかみ草

なれそならいそねゝ子ね子の子

ある人のもとへしたしき少人
をさもなひ行侍るにぬし□□
□手づからきじを料理しける
に少人のたまわくきじのかた
もゝたかのじきといへばくわ
いぶんになるといふそのこと
ばなにぞやらんやさしく聞え
ければぬしわれにくわいぶん
うたよめとせめられて

きしれうる今やきみのみ其ともど

のぞみのみきやまいるうれしき

一ある大名歸國の時分國にもど

らせ給ふときくすりを約束し

侍りけるに忘もなくたまはり

折ふし鷹野にて取どてがなか

もきじうづらをそへてこの五

いろにうたよみておこせどあ

りければ

かりぎぬの色かもふかくすり衣

にほひうづらはきしものどせん

一春のころ鷹のがんをおほくさ

ほにかけどをるを見てこれに

うたよめどありければ

がんかりやうつかりがねと鶴はしたかに

どられて後もさほになれく

一ある人へいさらばさらをもら

いけるにもてこし給ふ次でに

どうらいしけるどて雁をそへ

て給はりけるがうたよみてお

こせど侍りければ

關東の雁や越路にかへるべい

さらばくゝのいとまごひして

一ある人のもどへ行けるにぬし

ひそうせしかげのこまありみ

な人見んと所望しければ我に

歌よみ引出せよど皆の給ひけ

れば

雨にけふ道もあしげにあらばこそ

とく引出せ月かげのこま

一ある人のもどへ行けるにくわ

して長きあめを出しねつ起つ

してみな人たべければこれを

だいにしてうたよめど云けれ

ば

起もせずねもせで菓子を荒しては

春のものどてながあめくらいいつ

夏の部

一ある人の許へ行けるに少人ま

じりに三味線など引人ありそ

の折ふしほとゝぎすまちかく

なきければ少人なご所望にて

こゝろあるほとゝぎすなれば

その心を前書してうたよめど

せめられてうきにうきたる人

のやどにはへうたんからこ

まをかけ出るさみせんのいと

おもしろき手くだり妙なる音

をきくも心そらにうちやう

てんとなるものをまして折も

おり時もどきの鳥のこゑめづ

らかになきわたればいと

耳にもみづのおと二つともな

きこよひのごもあそびかなど

興をもよほし侍るに聞ほども

はや夏の夜の雲井のよそにな

きすてゝのきのたちばなにも

やぐらす侍りければすだれつ

り心には思ひけるにその座に

有し少人のこの心をうたによ
めとたわふれければ

三味線のちりてれてんを過すとも
地にさんさがりなけはとゝぎす

一ある人はつねといふきやは
僧正そうじょうのうたにて付たる名なり
此きやらたゝはやらじうたよ
みたらは少くれ侍らんとあり
ければよみける

聞たびに珍らしければほとゝぎす
たゝとる山のはつねならまし
一ゆりによるこひといふ事を當
世のはやり言葉にてうたよめ
とあれば

難面さの君がこゝろは鬼ゆりの
一口にかみころせんく
一いづみのさかいにありし時南なん
宗寺しゅうじといふたくあんおしやう
の寺ありそのてらのしゆつけ
新寺を立ててらびらきによび

けるにていせんにてうしゆん
のさきけるをぬしこの花につ

けて新寺の目出度うたよみく
れよと有ければまづしうげん
に高砂をよみ侍らんとて

てうしゆんのとくを具へて南宗花なんしゅう

はじめてひらく寺もはんじやう
一なつのころ人のもとへきくを

見にまいりけるにまがきすい
がきませがきいろくゆひて

きくのはなのみゝはおごろか
さでめをおごろかす花のみこ

そといふ中にも大はんにやと
いふきくの花誠に大なれば

みな人目口けるに其中なる人
我にうたよめさだめてひさし

きやくそくの花見なればはら
み句や侍らんそれはおもし

ろからずなににてもたうぎの
うたよめとたわふれければそ

の言葉をかりてよめる

大盤若はらみ句ありときしの花

そのすいがきはおかしませがき
一ある人池水に白蓮のさきける

につねのうたはおもしろから
ずはすのこんだるうたよめと

所望ありければ

かやうには見事な者は又もあらし

弓八あたご白蓮のはな

一ある人はすをゑにかきてだて
なるまへ書してうたよみてく

れといふもとよりだては白は
すのまことにかたき古文眞寶こぶんしんぼう

を蓮は淤泥の中より出て泥に
そまらず花の君子なりと茂叔

がひとゐなきかたると心をさ
りたるもにくやくつらにく

やわれはそのいきすかぬ枝も
なくすらりくともぎあげて

水のたるやうなるよそほひた

とへていはゝわかき衆のよき
さりなりを作りたてたるに
たりこひ侍ければそのきをよ
みて書付る

枝もなくすらりくごもぎ上て

なりもはすはに花をやり候

一ある人川のほとりに涼み居け
るに鶉のうををとりてしらす
なのうへにおきてまたとりに
行ければだいにしてこれにた
うぎの興にうたよめとありけ
れば

己が名のゑばみもやらで嶋つとり
うき世のらくをしらすなのうへ
ある人白地のあふぎにだてな
るうたをよめとありければ
御所望にあひに扇をかきよこす

元のしらぢがやあましぢやもの
一かきつばたを極釋色にかきた
るあふぎに

みかはにはあらぬ膠をにたくご
ゑのぐにねりてかきつばたかな
一ある人のもごへちんきやくご
なりて行けるにおりふし大あ
めたうくたらしごふりには
のはなもちりやたらりと成け
るに座に三番さるがくごもも
來てめでたくうたひなんどす
るぬしのいひけるはわれに一
首にわのはなにつけてよめと
いふせんざいを見れば葵緋白
合翁ぐさつみ草なごさき
て有ければよめる
せんざいに翁草こそ立あふひ
はやせとつばいひゆりたつば
ば

秋の部

こよひ引牛のまなこのたまの
ぎんがり二つほしあひの空
一七夕にげんそうとやうきひと
さめことし給ひける所を繪
にかきてうたよめとありけれ
ば
玄宗ときひと今宵のさめごと
ほしくごはしあひの空
一盆にある人ごともなひてし
のたかなわてをこほりけるに
ほんごもいはであみを引せつ
しやうする人ありある人それ
を見て今日せつしやうをする
はのちの世の罪をしらぬかと
いひければ我あみ引にかわり
てうたよめとたわむれて
じやうごえどの習と芝のうら盆に
後世を大事と引はなむあみ
一てつばうすにて月を見てける
に世のはやりことはにて歌よ
ば

めと云そのころなにててもほ
むることばをせかいのてつば
うすといひ侍れば其ことはに
よそへてうたよみける

うち出る月は世界のてつぼうす
たまのやうにて雲をつんぬく
一八月十五夜月しよくし給へば
よめる

しらふなる月の鼠のしよくたゝり
ひそうひにそう天どきのごく
一月の夜月くまなくはれければ
人みなさけのみなどして興の
あまりにやかゝみどぎといふ
はやし事をしてまひけるに月
のはれけるによそへうたよめ
とあれば

酒のみて舞ふつ謠ひつほめはやせ
かゝみといふを見さいなの月
一名月の夜ある人の云けるはむ
さしのゝ月とおぼすての月と

はいつれをかがおとりまさらん
その心をうたによめといひ侍
りければ

更科やおぼすてのおぼと武藏野の
はらひとつより出し名月

一三五といふ人のやどにて月見
し侍りけるに新五兵衛といふ
人たはふれに月の繪をかきて
これにこひのうたかきつけよ
といひければ

月の歌かくもあるじの名にめでゝ

三五夜中の新五兵衛に

一名月の夜その比世にはやりし
小歌にさせさせよござんしよ
てんどよござんしよといふ
たをうたひてあそびけるにう
たよめとしよ望ありしかば
金つばに似たるこよひの月のかげ
させゝよござんしよ

てんどよござんしよ

一われかみがたよりくだりしと
きみちのいそぎければ田子の
うらにて月を見てよみける

月の輪のたごの丸きのゆふかげに
くみてこそ知れしほがこぼるゝ
一八月十五夜月くもりて出ざり
ければ

久方のあまのじやくではなけれ共
さしてよゝ秋のよの月

一夜ふけてのち月はれければ又
よみ侍る

空おはれ今よひはたまをくれの月
はつきりはれて目にものみせん
一むさしのゝ月くもりければう
たよめといふ

色くろき今よひの月やすます坊

べい景もなきむさしのゝ月
一八月十五夜の月をみつまたの
なみにふねをうかべてさけの
みうたひあぞぶその比世には

やる唐人うたごてのんせんふ
らんらんつゆのなさけなやと
いふ事をうたひけるにおりふ
し月くもりければ

謠ひなは雨やのんせんふらんらせ
くもれば露のなさけなの月

また世の人も酒もりをすだれ
舟などにて小倉おごりといふ
事をうたうその比うたにさす
やうでさんくさゝぬはしの
ぶよの一まごおたまこがれて
あきこがれつゝといふを聞て
これにてうたよめとありけれ
ば

さすやうでさんくさゝぬ月の影
あきこがれつ にくのあまよや
このうたをその座にありしわ
やくもの今一つよみなをせに
くのあまよといへば十八夜に
て侍るといふわれこたへてぞ

れほどのさんようじやがさや
うのあやまりをのたまふさん
さんさんはんは十五にてはなき
かといへばなもつともくど
わらひぬ

一むさしの、月を繪にかきて月
の中より一本すゝき出たる所
をうたによめといひければ

月の舟一本すゝきはにあげて
尾ばながなみをはしるむさしの
一弓に名をゑし人のもとにて九
月十三夜の月を見てうたよめ
とあれば

かつら男よつびきはりし月弓の
うちとの竹のふしのよの秋
その夜世にはやりし秋田ふし
といふ小うたうたふそのうた
に今に秋田はてんどおとし水
さへこゑしえいどうたふ又う
たよめとありければ

こよひ後の秋田節をば天どうたへ
十三こゑしゑい月のかけ
一ある人ぶだうをりすがくふ所
をゑにかきてこれに書付よと
云

己が名をひつくり返しすりと云ば
人のぶだうをぬすみくらははし
一ある人のもとへきくの花を見
にまかりけるにさけのみして
そのころはやりし小うたごて
君がねあせにしほとぬれたや
といふそれをみな人うたひて
我にはきくのなによそへうた
よめといひければよめる

^{みろこ}宮古わすれ玄宗や酒をすいやうひ
君かねあせに ^{しほとぬれたやトアルベキカ}
一もみぢ見にまかりてうたよめ
とありければ
さねもりが着たる錦かもみちばゝ
見る人ごとに長いせられて

一ある人のもどより柿を給はる
とて

澁口にをくりかよへる五ゐんしん
ことばのはぢをかきくけこかな
とてうたかきおこせ給へば返
事に

かきくけこおこそこのほも喜びは
過分至極におしやらりるれろ

一ある人のあふぎに鹿の六つと
を山に居る所を繪にかきてう
たよめとありければ

しゝと云ど數へて見れば六ぞある
いづくの山へどをのきぬらん
一秋のころあるてらへ行けるに
すいものにはすのねどのりと
こんにやくとむめぼしとを入
て出しけるがこれにうたよめ
とありければ

梅ぼうしのりにいり菟蓐がじやう
佛道なれやはすのうてなに

といひける後さかなにたうふ
しいたけこんにやくふにしめ
て出これにてとても事のう
たよめとしよもうしければ
こんやくふ肴にさけをしいたけや
なにぞ人のたうふ成らん

冬の部

一ある人のもどよりゆきの日は
つこくより到來とて一しほの
鱈を給はりてゆきのうたよめ
ておこせとありければ

我やどへけふきた國のおさかなは
ひとしほ雪のうをそながむる
すいせん花を□□□てこれに
うたよめとありければ

うつくしき花の下葉を見るからに
くちすいせんど人やいふらん
一へうのふりて内にもふり入け
ればこれに一しゆよめといふ

人あり

雨霞せんのやさきの如くなれば

よつびきへうとふりつるぞかし

一ある人のもどよりかもをたま
はりてうたよみておこせるう
たに

料理してまいり給はうれしけん

あしがもと云ばあじはよからじ

といひておこされければ返し
に

此ごりはもどより水に在るま川

あしがもと云ばあじやよからん

一冬のころ金地院へ行けるにく

わしにみつかんどかんどかき

とすあまどあめを出しこれに

うたよめとありおりふしあめ

もふり庭の池水もこほりけれ

ば

すあまにもほりぬる池の水かんし

かんずる空にかきくらすあめ

一ある人てんごりのはいかいし
て我かたへおこせけるが水鳥
のほつくなれば奥にうたよみ
てやる

水鳥のひえこほりてやはたらかぬ
ふさくにてんのあらんものかは
ごありその巻を見ればことば
には似ざりけりあまりさく過
てとびたる句ばかりなればあ
へてんもなし後學のために
と返しに

水ごりのこのの羽づかひとび過て
てんのあみにももるゝ成けり
一ある人紫雪^{しやうせつ}を給はりてうたよ
みておこせごありければ
嬉しさに見るより早くふたゝと

あせをばうばふ雪のみくすり
一ゆきふりける日かちばしの土
手やしきへ雪見に侍りけるに
はしの上にはだかの行人雪に

ふられて居けるを見てあれが
身はかねにてあらんなごゝい
ふ此ものを題にして雪のうた
よめごありければかの身のか
ねをきたいてよみけるとたは
ふれて

立ぎやうや打眺めいとほだか身に
ゆきひらゝとふれるかちばし
一冬の比たびたちける人さむく
やあらんどかなしみ給ふよく
聞ば興茂^{きうも}八三木の助久米の助
數間^{かずま}といふ少人さもにつれ侍
るといふ事を人のかたればよ
みてつかはしける

さむき世も八まんしらじ旅のやど
みきをくめとてかすまいりなば
一ゆきのうちにある人のもとへ
行けるに庭の梅さかりにて少
人あまりおほくながめて侍り
けるその名をたて入て雪の梅

をよめご侍りければいなご
もいひがたくて万作かもんも
ごめたみやといふ名をよみ
ける

雪のうちに八まんさくや色もかも
むめのはつはなもごめたみやれ
一ある人かみがたよりくだり侍
るがみちゆく心にて狂歌ごも
よみたりとて見せけるにみな
ふるき句のみなればほめられ
もせずまた流石しかられもせ
ず大かたにはめけるをある人
きゝてなにとほめたるぞごた
づねければうたにて申侍る
道行のかきつもりぬる古句をば
こゝろゝにかんじこそすれ
一ある人あふぎの繪にいわのう
へにゆきの松を書みさごのゆ
きを詠居る所ありうたかきつ
けごあれば

岩かねによりくるうを、松がもと

ゆきをみさごのあたりわすれて

一きんのあふぎにゆきのさぎを

かきてうたよめと有ければ

さら／＼と煌めく上にしら／＼と

しらけはてたるゆきのしらさぎ

一あふぎにゆきの柳にしらさぎ

書たるにうたよめとあれば

白むくど見るしのさぎの毛衣を

ぬふ青柳の雪のしらいと

一三十三さいのとしのくれによ

みける

としの矢のかずは三十三間の

堂してもはやく過る光陰

老が身のまづしきとしのうれ

なげきてよめるなり

借錢をせなかにせたら老が身は

年ぐれずともものくれよかし

一あるかたへ行けるに鬼が尻を

まくしふんする所を繪に書

これによそへうたよめと有
れば

ふくはうち鬼はそとへとうつ豆の

はらにあたりてあらくさやふん

一あるかたへふるまひに行ける

にぎしきになをりとこをみれ

ばかりす丸みつひろのたんざ

くを表具してかけられたり

ぬし是に狂歌よめと所望なれ

ば

床のうちに何やら黒く見えけるは

からす丸ごのゝ手跡しもぎかあ／＼

一はていの袋によりかゝる所を

かきうたよめと有ければ

おのが名にもたれかゝるは布袋ふくろ

くらいこへたは又ははらぶくろ

一四季の富士を一ふくに一つか

きて春の山には花をいろどり

秋の山にはもみちを色ざりて

うたよめとありければ

すみゑかど見れば誠に春秋の

花どもみちをさい四季のふじ

一ふじの山をなりひらのながむ

る所をかきてうたよめといふ

ときしらぬ雪とながめし人の名の

なりひらめけるふじの山かな

一ふじの山を唐人のながむる所

をかきてうたよめといふその

ころたう人うたどてせねんて

ふし／＼ふばいしよといふ事

はやりければうたよみける

から人も小謠ぶしでや眺むらん

せねむてふふじ／＼

ふじとあしたか山とをゑにか

きてこれにうたよめとあれば

ふじは／＼世に勝れたる大たけの

ねもどに生ふるあしたかな山

一あるまいすばうすくわんおん

のゑを愚人におがませてこれ

はせんたいより出たり秀平が

まばりぼとけごなんいふをみ
ればきのふけふ作りたるほど
けなりあまりの事にししゆ
大事だいで事をいふくわんせをん
これぞせんだいくせ事ぞかし
一ある人ほうさい念佛をゑにか
きてうたよめといふ

人はみなさいほうごころ願ひしに
さかさま事ぞほうさい念佛
一いせかぐらきよく大鼓うつ所
をゑにかきてうたよめといふ
いせ大鼓かしらをちはや古だいこ
つでんらんなるつらきぞかし
一たけににわどりを書ひよこの
いかにもちいさきをかきてう
たよめごありければ

おやは竹のはやしの庭鳥の
子は竹林じやちんちくりんじや
一にわどりをつがひかきてその
そばにひよこを三つ書て是に

うたよめといふ

にわどりとといふもことはり親二つ
此子の名をばお三ツとやいはん
一ある人のゑにかほは人にてま
へがみありそのほかは天人の
かたちにかきたりいかにとと
へば求馬もとめといふ小人のかたち
人にて天人になりたる所よと
いふこれにうたかきつけよと
あれば

天人の天は二人とかくからに

乙女ごやみむもとめごやみん
一ある人あふぎのゑに三人して
まりける所を書たりうたよめ
といふ

ける鞠の相手をよそへかしわざの

女三といへどおとこ三人

一ある人やつこしばがきをうつ
所を繪にかきてうたよめと有
は

奴衆の名もさな名もさしば垣と

ゆいたてられてうつゝなのみや
一ある人ひやうたんなりのすゝ
り箱のうへに駒をかきてうた
をまきゑにせんとのそみけれ
ば

ひやうたんの硯箱から駒が出た

げにするすみと人のいはまし
一さねもりがかみを染る所をゑ
にかきてけるがしらひげ半分
くろく書ければ

さねもりも碁にて髭をやうち染ぬ

半分はくろ半分はしろ

一ある人下手の繪師に所望しけ
ればだるまのあしのはにのり
たる所を書なるほごふできな

りければ紙をすてたるさては
ら立ければうたをかきける

あたら紙に書せてだるま損じや者
よしどはいはじあしきあしのは

一たけのはやしより虎の出る所
を糸にかきてうたよめといふ
よをこめて竹のふしごとや出つらん
我ど時しるごろの一天

一名を右衛門と云若人ふろふく
事上手なればこれにはなやか
成うたよめとありければよ
める

吹風呂のてんど其いきそれすいた
せかいの圖じやと名を右衛門殿
一ある人ふろをあたらしく立て
入ぞめしけるに目度うたよ
めとありければよめる

入ふろをいはふて三度長いきに
吹とくくふくとくどふく

一ある人日光へ御社参し侍りて
歸りけるがふろに入て無事に
歸りける祝儀のうたよめとあ
りければ

同じ名のかまどの日の光

めでたくく歸宅木をたく
一ある人のもどへさびたるもの

出入しけるがある時ふとたづ
ねられ侍りければ俄の事なれ
ば彼さびもの我さとの名物と
てならちやといふものをして
ふたちやわんに入出しけるが
さても手むさきものかなとて
せかせ侍りてたゞにはくわれ
す一しゆにわかによみたらば
それをきやうにしてやくいは
つらんと有ければかのさびも
のわれをたのむうたよみてく
れよといひければよめる

ならちやかやこの手塞げな蓋茶椀

とにもかくにもげびた人かな

一ある人と出家さかい町をどほ
りけるに門をくいるとて野郎
に行あたり詞からかひしてや
らうめなどいしかりてさらへ

てはつたるなど聞てよみて
つかはしける

僧はたにくけんくわの門の口論に
もしもかどうか言葉やらうめ
一ある人女をむかへてあまがさ
きだなといふ所へむこ入する
といふ事を聞てよみてつかは
しける

おいつへいつ御新造にも打乗て

むこ入するやあまがさきたな

一ある人どうしごみの御ほりの
あたりをどをりけるにくるま
にざいもくをつみ侍るとてこ
このほかにごみをたてければ
うたよめと云

材木をほりばたくと我まゝに

つみて車のうしごみぞうつ

一ある人のもどよりかうせん
のおこしけるに中にさちを入て
おこしそのうちさちを返して

たべといひければかへすとて
よみ侍りける

返さちを又二たびにどり返す

げにかうせんのほんごゐはまし
一あるひとのもどへ夜はなしに
人々ごもなひて行けるに夜も
ふけざるに八つの時計をうた
せければぬしはらを立てとけ
いぼうずをいましめむといふ
しばらくまち給へ一しゆよみ
侍らんそののちはぬしのはら
の居るほどはなし侍らんどい
へばみなくもつごもといひ
ければよめる

まだよひの更行かねのこゑするは

にくひやつめのとけい坊主よ

そののちぬし悦びてさけのみ
して隼人新五佐源次といふわ
かきものごも出して中のみな
ごしけるこれをだいにしう

たよめといふ三人の名をたて
入てのみしさけむしんなりご
もつけさしのもはやとるをは
しんぞめんなれといひしのち
ていしゆひそこの友彌左助と
いふ人出てさけのみけるにこ
れには今一しゆよめことさら
友彌にはさまごか殿とかよの
人にはかわり侍るぞとたはぶ
れいふ人ありければつねのう
たにはめづらしからずとて折
句をなんよみける

年よりし者は身をちやさがたの

ごもゝあひせすのまぬおなさけ

一ある人のもどへ行けるに五次

郎といふらう人にあひ侍りけ

るにこの人十歳なり能筆にて

侍る末半人にて身上かせぎ侍

るありつきやうにうたよみて

やり侍れとあるじのいひけれ

ばよみける追付知行にてあり
つきけると悦び侍りける

もしほ草かく宅みればすみよかれ

身のありつきのまだしらう人

一ある人のもどへ行けるにみな

人將基をさしてそのゝちさけ

のみなごしうたよめといふ

金銀もさけにはしかじごにかくに

ひしやごつぶると一つうけゐは

一ある人のもどへ行けるにおど

この子をまふけて七夜のいわ

ひにとて人なごよびいわるけ

るにいかゞし侍りけるぬしの

かいけるちんいぬうぶぎにそ

ばへ引やぶりければぬしけれ

きあしく見へ侍りければ目出

度事よといひてうたよみける

ぬしよろこび侍りける

犬の子の目なかけそ又氣にかけそ

やれくうぶぎちんてうく

といひければ目出度とてみな
さけのみしける中に大上戸ききの
みせんとてさかづきより直
にのみこそ外きげんにてよ
だれながしねふりければうた
よめといふ古歌 引て

瀧のみはたへて久しぐゑひぬるに
よだれながれてなをねふりける
一ある人どふなあそびに行ける
にさけのみしてのちかちをま
くらにしていびきかきていけ
ればこれをだいにしてよめと
云

いびきをばかくの舟にや通ふらん
なれししほちのかぢ枕して
また三つまたのうたよめとい
ふ

山もあり又ふねもあり川もあり
かすはひとふた三つまたの景
一ある人きよゆうそふふの繪を

とり出し前書してうたよめと
所望ありければ賢なるかな
きよゆうそふふ貧にいさなるかなき
よゆうそふふ大堯天下をゆづ
りたまはんとのたまひけるに
いなかしかましとてみゝをあ
らふその水けがらはしとてう
しをあらはぬころのうちさ
ぞきよくやあらんしかあれど
我おもふ
さてものこりおほきしんだい
くづしかなどかくむまれつき
の貧乏神かきうちわのへたげ
な事をいふかほのへうたんさ
へすてゝ世をひつこむきりに
はあらぬかなづちのかたきこ
ころはひだのたくみがつくり
なをしてもなをらじとおもふ
なりけり

世中をうしとひつこみじあんこそ

そふふのわろき生れつきなり
又一しゆきよゆうごのへもつ
てまいるとて

天下をば堯ぎょうに嫌とやゐんきよゆう
あらひしみゝのびくのうすさよ
一ある人身上おどろへ世を捨す坊ぼく
主ナとなりて南無あみがさを引
かぶり世にすみぞめのころも
を着ほつしんしもくとかねた
たき我所へたづねきたりしゆ
せうなるものがたりなごし侍
りけるまゝあまりしゆせうに
もおもひ侍らずといへばその
身のすきたるみちなれば一し
ゆよみ侍らんとて此うたよみ
たればもつともくゝとて後に
そのみも大わらひし侍りける
なり

鉦叩きかねがなければかねたゝく
かねさへあればかねはたゝかじ

一ある人ちぎやう所よりせつし
やうの鳥とてうぐひすとすい
めどもすとすとつゝみと
水札をたまはりこれにうたよ
みておこせさあらば重ても
驚のうたすゝめてもすゝぬ身は
しとゝ口をつぐみ居てけり

一ある人のもとへ出入する馬喰
其人の事をかぎにてあしくい
ひたるとて出入をさめけるに
めいわくして我に申わけして
くれよとたのみ侍るまゝさし
たる事もなしゆるし給へとい
へばうたよみたらばゆるし侍
らんとたはぶれければ
かけ事をあしげにいひて鼻つきげ
ばくらう口ぞとかくゆるさめ
一あるひとのもとへゆきけるに
かぶろを出ししやくなごら
せけるにおりふし我も風を引

ければづきんをかぶりて居侍
るちかづきなごさしけるがづ
きんゆるさせといへばみな人
大事のかぶろごのちやうの
りよくわいゆるし侍らずその
かはりにうたよめさなくばさ
けのめとせめければ

老が身のさむきしらがの霜はらひ
ゆるさせづきんひつかぶろごの
一ある人あふぎにあふひのうへ
をゑにかきてうたよめといふ
さしつたる葵の上の御ものゝけ
もつてのほかはに御座候とは

一らんさいといふおどけものあ
りまへにごうらんを緒ながに
さげてだてをするといふてう
れしがりければみな人うつけ
ものに歌よみてやり侍りけれ
ば

前下りふらんさいよとさげられた

うつけのかはやごんごうらん
一ある人きやくをよびけるにさ
けなごのみ過ぎげんよすぎ
ぬしの庭の松木の枝おろし侍
らんといふぬしもていしゆぶ
りにて二つ三つはえだおろさ
せ侍けるがまたきり侍らんと
いふぬしくたびれたるきやく
かなごうちへひきこもりどり
あはず侍ければぬしのかたへ
よみてたはぶれける

松の木のやにをばいひし倦みもの
しんきやゝ木きりきのごく
一笹井右京といふ少人ある人に
さかづきさしけるにたべゑひ
たりとてのます侍りければひ
らさらのみ給へといへばうた
よみたらばのみ侍らんといふ
なにとやらん興もさめけれ
ば

「意なら 盃さゝいうきやう／＼

たへ我身はむげになるども

一ある人ひろき下屋敷あり我や
しきいまだせばきとて色々も
らい侍らんといふそれをきく
人よくにはいたゞきがなしあ
れほごのひろき屋敷もちなが
ら少の屋敷をほしがりせばき
といふ事よとしかり侍りけれ
ば我いひけるはさのみしかり
給ひそむかしもひろき所せば
きといふためしありといへば
みな人これはあたらしき事を
いふなにかあると尋けれ
ば

うたひにもかの高砂のうらをさへ

一間せばやとおもひ候

一ある人のもとへしばざかなを
十種やり侍るとて十色の名を
たて入てよめるいか。にし。み

る。あぢ。こち。いな。めばる。
かに。きす。もうを

いかにしてみるにあちこち稻妻の

よめはるかにきすぐ雲井を

とよみてやりけるまたのとし

その人にあひ侍りければかの

かれいのさかなはくれ侍らず

や十種のうたなきものにて侍

らんどいへばよめる

かれいにしこちおこせいなさはいか
本ノマ、落字アラン

もうをあちはいこれ十種なり

彼いにしこちへおこせと御意なま

いかにもうをのあちは一ばい

一ある人すりばちにせきれいの

とまりてねぶり居る所をゑに

かきてうたよめとありけれ

ば

摺鉢になせにねぶりにきせきれい

みそさゝいかと人のいはまし

一せきれいの岩にとまりたる所

をゑにかきてうたよめとあり

そのころ世によしはらたゝき

といふ女郎の名を立入て小う

たにうたひければ其心をよめ

る

常世の吉原たゞきちよろたゝき

このとりむぼも岩たゝきかな

一ある人しろきあふぎにうた書

付よとあれば

久かたのあまの岩戸にあらねども

ひらけばしろく／＼と見ゆ

一うゐらううこんといふものき

よくまりをける人なりある人

の所にて興行ありしに色々き

よくをつくし侍りければうた

まりといへばうたにもきよく

よみと所望せられて

楊貴妃のときにはじまりける物は

そよやげいしやううゐらうの曲

一ある人のもとへ行けるにぬし

いひけるはみな人のちそうに
めいよのけだものを見せんと
いふ何そとおもひ侍ければう
わひげつりひげ天神ひげかい
らぎの大小さしたる人むくつ
けたるなりにて罷出すいさん
しけるいづくの人ぞとこへば
奴にするがのしばかきをうつ
のやのものとこゑにくさげか
にいふさてや上手ならんどみ
な人所望しければ天下一のぶ
ひやうしものりあまりおかし
さにひそかにうたよみぬしの
もどへ遣す

しば垣をうつの山邊のうつけもの
ゆめにも一つあわぬ手びやうし
一或人のもとへ大みねかけ出の
山ぶしとておびたゝ敷なりに
てきたうし侍る大あせかきて
いのるそばへよりて聞侍るに

ひるをたべるにやにほひはな
はだしく侍ればぬしの方へよ
みてやる

にんにくのけさをかけての山伏は
なまぐさあせくさ又はひるくさ
一ある人さるのものさねをか
みわりたがるていをゑにかき
てうたよめこいふなればよみ
ける

手にもちてくいのやち度もゝの核
つらをあかめてかめごわれざる
一ある人こんくわいのきやうげ
んをゑにかきてうたよめこい
ふ

こんくわいの涙の雨のふるぎつね
かゝりてわなにおち坊主かな

一ある人どらによるこひといふ
事をよめごありければ

思あらば虎ふす野邊にねもしなん
ひつしき者にはかわをしつゝし

一ある人少人のちやの小袖にこ
いかきの上下きたる所をゑに
かきてうたよめこいふ

茶と見つる小袖の色にこいかきの
かみしもなれてよきすがたかな
一ある人くらかもん留井といふ
少人花ともみちのえだをかざ
しおごる所をゑにかきてうた
よめこいふ

花はよしの紅葉は龍田おぐらかも
むるひに見しは君のおもかげ
一ある人なんばうのけぬきをた
まはり氣に入たらばうたよみ
ておこせごありければ

よきと云て類ひもいざや白ひげを
これで南方ぬくせかいの圖

一ある人くじらのみごかわをた
まはりてうたを兩度よみて返
歌せよと有ければ

たび／＼に言葉の花を見くちらや

返歌はへたのかわくぢらかな

一ある人ぢうばこにもちごこわ
飯を入れてさけをもすゝめけれ
ば

下戸なれば餅こそよけれ酒のめど

おしやればまこと強いこはるゝ
一ある人下屋敷へ行けるにひろ
にはにてあそびいぬまもちど
いふものを出しけるにしろき
くろき色々のもちなりこれを
題にしてにわのけいをよめど
言ければ

べうくゝと廣き庭にてくいつくは

白黒まだらいぬまもちかな

とよみて後あら木ざけといふ
さけを取出てみな人のみける
にその中に侍りける武士にさ
けすゝめけれごのみ侍すぬ
ししやくどりしわかきものに
のませてちかづきさゝせ侍り

ければたれもすゝめ侍らざる
にたぶたぶさうけてのみけれ
ばこれにもうたよめごみな人
もよほしければ

ものゝふの荒きも酒に柔らぐは

うたのほかなるわかしゆのみち
一ある人女をむかへて中よくす
ごろくをうつごといふ事を聞て
よみてつかはしける

人よせず我がのさまにすごろくを

よひくゝごにうちもねぬらし
一岡山八兵衛といふ人わづらひ
て大かた本ぶくし侍りければ
もはや樂をやすめ侍らんやと
いふ心をうたによみておこせ
ければ返しによみ侍る

八びやうを二病なをせはむ病なり

なにをかやまなくすりなくども
とよみける後湯治してかへり
けるがみやげとて木地の三つ

ぐみのぢうばこをたまはりか
たぢに申付たりぬりてつかへ
とてこれもうたよみおこせけ
れば當世はやり言葉にてよめ
る

たまはりし木地三つぐみの塗物は

うるしいくゝかたぢうけな

一ある人しやく八をすきてこと
さら小うたにのせて吹事すき
侍りけるがしやく八にうたよ
みて書付よど所望しければよ
める

くれ竹のよの一ふしをうたくちに

うたひていざやあてばんもまた
一いつさいといふなる人はこほ
りごのゝちやしやくけづりな
りとしも寄侍りければもはや
さいくも成がたしかたみとて
ちやしやくをけづりてくれ竹
の殊さら見事に侍りければ末

の世にもまたてうほうならん
 ごおもひ我もかたみに一首か
 きつけてつゝうへにかくな
 ん

くれ竹の末の世までものこし置
 一さい衆生のためちやしやく哉
 一いま一本ありわれうたよみて
 おりぎぬと名をつけてけるた
 けのうらおもてごもによくは
 べればたけのよきしやくうら
 おもてよしといふことをよみ
 いて

おりきぬはいとゞ美したけのよき
 しやくがよければ裏おもてよし
 一あるひとつりざほをわれに見
 せたまひけるがながさ九しや
 くばかりのうちにたけのふし
 三十六ありふしあひだながみ
 じかなくめづらしきたけかな
 といへばこれなんうらしまた

郎がもちたるさほどて人のく
 れける名竹なればうたよみて
 書付よとあれば

うら嶋がつりのさほどてくれ竹の
 のびずちゝますふしはろくく
 一かいのくにより所のめいぶつ
 ごてしるあめをたまはりてう
 たよみておこせとありけれ
 ば

名物のそのかいありてあらむまや
 なめぬるあちはしたぞしるあめ
 ごよみてやりけるまたのごし
 例のあめをやるごてふみは
 來てあめはまいらず侍りけれ
 ば

甲州とまでごまはらぬ御みんしん
 あめねぶらせてだまし給ふか
 一たかさきのだてたばこをのみ
 けるにあるたはこのまぬ人い
 かとおもひけんめづらしく侍

ればのみて見むとてすいける
 にきつくむせて目をなんまは
 す心地しければはらを立てご
 がもなきたばこをしかりけれ
 ばこれにうたよめといふ

けふにむせてせきぬる聲は高崎や
 我ごはらをばたてたばこ哉

一ある人能書の人三十六番のか
 せんを書て給はりけるが返し
 にきやうかよみておこせさも
 侍らずば我かきし水ぐきのお
 かのくずのはのうらみ侍らん
 なとゝいひければよみける

三十字餘りむくいを書て給はりし
 おれいに一しゆいぎきやう歌仙
 一ある人大海のちや入ほり出し
 侍るそのひらきに一ぶくちや
 をたてんとてまねき侍りけ
 るにいかゞし侍りけるにやか
 のちや入の中にちりありけれ

ば主はらをたて茶道さだを曲事まがことに
おこなひ侍らんとしかりけれ
ばゆるし給へとてよみ侍りけ
る

名人は人をしからず大海は
ちりをえらばずおゆるしあれの
一いつみのさかいにありしとき
極樂寺といふてらの門前に町
人どもちりをすてければ寺の
しゆつけ出てさんくしかり
惡口し侍りければよみてつか
はしける

極樂の門にやちりをすてばこそ

そとはなにかはくるしかるべき

一ある人のもとへ行けるに少人
まじり下手まりをける我にも
けよといふいなといへば少人
なごむりにわきざしをとり是
非けよといふをいなとてわき
ざしをすてゝかへりければあ

とよりもたせおこしけるつか
いによみてつかはしける

わきざしを捨ておきても心やすや
下手のまりばにすりのなければ

さかいにありしとき大神宮の
とび給ふとて矢をたてゝ置色
々まれなる事をいひければよ
める

この神はいともとひけり輕わざの

みつは四つはのそや立にけり

一そのころ世に大坂やきのむさ

うもちといふくわしはやりけ

ればある人それをふるまひて

これにうたよめと有ければ

名にしおもふ大坂焼のむさうち

人にしいられて喰よしもがな

一ある人ちやぐわしにみつかん

と杏仁どころまめと出してう

たよめとありければ

題はみつかにたへたる御所望の

うたをあんするみはくらふまめ
一あるともだちのもとへとしへ

て行けるに今は世をのがれて

いつかたへも出す埋火を友と

して消やらで侍るといひけれ

ば

さえや筆今にいきどしいけだすみ

かしらもしろくせうとなるまで

一ある人うごんを手づからうち

てふるまひけるがあるじのち

そうの返しに歌よめとみな人

いひ侍りければ

御馳走に偶々あふはうごんげの

はらまちへたるこゝちこそすれ

一ある人のもとへ行けるに若き

かうぐやまいり色々のかうぐ

を出しけるにたき物に仙人せんじん黒

方若草はつわくさといふなりきやく衆に

とり給へといへばいなど云わ

かいものゝめいばく成にせひ

ぞり給へといへばうたよみた
らば取侍らんとありければせ
んにんわかくさこくはうをた
て入て

仙人のいく千世わかくさかへぬる
かみもまつくろはうくとして

とよみければあるじにかうぐ
めせといふいかにも心得侍る
うたよみしだいにぞり侍らん
とたはぶれけるのこりけるか
うぐはととへばきやらたが袖
花の露にはひぶくろなんあり
こいひければよみける少人の
かはよきをあひして四色のな
をたち入てよめる

梅の木はみめの木やらん花の露
たか袖風のにはひぶくろう

一ある人のもとへ例年のしうぎ
とてちやをひきざかなそへて
持参し侍る人あり我にもまい

り侍れといへばまかりけるに
今日はめでたく祝儀のうたよ
めといふあわびたいこいを持
参しければよめる

こひといひて袖を引茶の亭主ぶり
めでたいこにけふあわびかい
一てうちんをかりて返し給ふて
ければよみてやる
てうちんをかへすによつて申也

さてもちんてうさてもちんてう
一べんざいてんへまふする道
にててんかんやみあわをふき
けるをみてよみける

詣でする道にてあわをふくの神

是ぞまことのべんざいてんかん
一ある人のかたへ行給ひけるに
ていしゆ坊主にそくいひをお
させければおしやうあしきと
てごくつぶしなごしかり侍
ればよみける

この竹を削りてごくを押つぶす
これぞまごのそくいべらぼう
一卯月八日にある八のかたへ行
給ひけるにおりふしほごしぎ
す一こゑなきて過ければ一し
ゆ所望せられて

ほどゝきす卯月八日の一こゑは
ほぞんかけたかうぶゆかけたか
一ふごうゐんへある御かたの相
伴に行給ひけるがきやくのお
そきとてい主せかれけるお
りふしくりより火事出さんと
しければよめる

不動院くりからくわゑん出にけり
客のこんからていしゆせいたか
一御きり米はいりやうして祝儀
に

ことしよりきりまいねんに戴くは
はちばくやうがめうがなりけり
一なつのころふうふともなひて

ふなあそびに行給ふおりふし
ほどゝきすおとづれければ發
句

のんきゝよかかんかもきく時鳥

門に玉わき

枝はさんほもしけるなつ山

一ある人のかたへ行給ひてけれ
ばちそうにごまもちを出しけ
れば

黒ごまのかけて出たる餅なれば

くふ人ごとにあらむまといふ

一ある人のかたへ行給ひけるに
しばのかきをりやうりしてこ
せうをふりて出しければ

小唄ならば料理にはよき芝垣の

こせうふり袖ちらごみそめた

一するがだいへ行給ひければほ
り出しのちやわんを見せ給ひ
けるにひたすらのぞみ給へば
きよう歌よみてこしなばやり
候はんとあれば

くれんどの約束堅くするがだい

ふじはゝ山ぞほり出しちやわん

一ある人はいかい百ゐんにてん

をどのぞみ給へば奥にうたよ
みて

みて

よき句のみかぞへてみれば六十四

はつばとほめててんをかける

一あるかたに行給ひけるにかた

手屏風にきし松へ鶴のまひさ

かるゑありこれにうたよめと

所望なれば

千年とは限りつるこのそりやかたひ

いつがいつまでもいきの松ばら

一たけのはやしにきじのなく所

をゑにかきてよみ給ひける

世をのがれ竹の林にすむきじの

聲もけんゝ賢人どなく

一梅の古木にからすのさまり居

る繪にうたよみける

花ちりし跡にも梅のみのならば

寸から寸からんすからすどなく

一柳にからすのゑに

色黒く見なりはふこの鳥なれど

ほそきこゝろは青柳のいと

なにゆへにみを黒染の山がらす

柳にやらせあた라우き世に

一つばきに水仙と梅の立花に

つばきゝ盃なりにひらいたら

さけをすいせん梅のはなのみ

一しゆてんごうじといふつばき

をたち入て

ちご若衆てんごうしろの戀しきに

つらゝつばきつくゝと見る

一りうきうつゝじによるといふ

事をよめとあれば

花のかほ色もうつくしりうきうの

つゝじと人のおもひしろかな

一初春のゆきのあしたある人の

もとへ行給ひけるにつねのう

ためづらしからす廻文うたよ

めとありければ

白雪はふけもつやらんやはさむき

はやむらや野もけふはきゆらじ

一あふぎに夕かほの繪に

忍びてもそれとや白きさし扇

これみつらめとゆふがほのはな

一笹におみなへしかるかやおは

なはぎに小こり書たる繪に

此鳥もさゝの一夜をかるかやと

まねくおばなのはぎおみなへし

一竹にすゝめの繪に

ちやせんやこりや笹に留れる雀殿

百になんどもおごりわすれず

一なすなりのちや入によみ給ひ

しとなり

なれ茄子なれゝなすび茶入にも

ならずばこれのかけものとなれ

一びじん草しらん芍薬によめる

音にきく誰ともしらんびじんさう

花めづらしやさけのしやくやく

一むばらを系にかきてうたよめ

とありければ

若き時こひをむばらとおぼしめせ

うばふは今も花をやり候

一芝のみたといふ所にてよみけ

る

見たよゝあらみたよ見たさぎ鳥

おもしろひぞのおもくろいぞの

一八月十五夜の月をなるほど大

きによめとあれば

雲を帶風のふくろをきんちやくに

月の三五のたまをおどめに

一月夜をよめる

かつら男はなや引らん世の人の

名たてがましき月のかげごと

一さ月ころよりうちつきあめ

ふりて八月十四夜までふりけ

るが十五夜に至り雨はれけれ

ば

雨こよひふらぬ一夜のなさけゆへ

月を池生の圓座かど見る

一ふじをたてによめとあれば

雲の帯かの子のこそでゆきなかに

だてをするがのふじの山かは

尾もしろしかしらもしろし鶏の

ひよこがふじは時しらぬ山

一九月十三夜の月に琴引ける人

のもごとによめる

ねにたてゝひくここのをの十三夜

月もてれてんてごんてんてご

一女ごみればおごごなりけりな

らひらのおもかげはむかしお

ごごなれば今みることはさら

になし當世はやりし源左衛門

おもしろのかいだうくだりや

なにどかたるごつきせじとお

もへばうたによみてかきつけ

ける

又と世に有ものでない過去未來

源左衛門がまいのなりふり

一大くくそほていのくび引する
所の繪に

大くくそほていのくびのちから引
ふんはちかつて見せんみまひな
一かみなりの繪に

おのがうつ太鼓のばちや當りけん
づてんごうともおちてなるかみ
一いぬのたがそでをくわへける
所忍にかきうたよめとあれば
かほりぬるにほひも深したが袖と
ひげども君にいぬのつらにく
一うしを野にはなちねむれる所
を忍にかきて

くるはずと涎をたれてねにふせよ
うしみつすぐるよのふけぬまに
一狸しやう々のゑに

つの國の難波入江のみだれあしの
よの一ふしをうたふさかもり
一ある人にふようをやくそくし
けるにわすれてどりにつかは

し侍らざりければあなたより
もたせてまいらするそのかわ
りにうたよみておこせよとあ
りければせつなふおかしふて
かくなむ

第一の名も分明の使者のみる
芙蓉殿上ふようてんじやう中間そへて

一ある人ふようを繪に書て葉な
ごるり色にさいしきて歌かき
てくれよとありければ

おばら木や小歌に似たる花の名ぞ
あらよひふようるりやうふよう
一ある人さうしあらひを繪にか
きて歌よめといひければ

人の歌さすみ黒ぬしにかきなせど
水に小町やはちすゝぐらん

一ある人竹を繪にかきてすゝめ
のくいあふ所を繪にうつして
うたよめとあり
うへしたのくらしい争ふすゝめ子は

竹のふしくれいさかいぞする

一ある人照君の馬上にてびわを
引所をみな人わかれをおしみ
てなくていを繪にかきてうた
よめといふ

びわのおとはらりとおつる涙かな
馬じやといひてごうもごゝめよ

一ある人かさをとられた川風に
といふ小歌を忍にかきて前書
してうたよめとありければ石

川のこまうごに帶をとられた
と云催馬樂のうたなり數珠じゆずけ
さぶくろを女良にとられたと
云山ざきくだりのうたなりこ

れはそれにはあらでこよひ三
條の橋にねてかさをとられた
川風にといふこゝろを忍にか

きてうたよめとありければ
川風にかさをとられた一條か
二條かまこと三條のはし

一ある人竹林に上賢を繪にかきてその竹にすゝめのごまいたる所をうたよめとありければ

かしきがすみぬる竹の林をば

はかにすゝめがなか／＼となく

一ある人つぼの口をきりたるなり極詰にて侍るまゝのみてみ

よとて給はり歌によりておこ

せかしと侍りければ

給はりし口切つぼの極詰に

案のはゞきやうぢの重上

一ある人こゝろやすきものかる

たにすきてなぐさみにうちける

をとかくばくちわざはなぐ

さみにもいらぬことゝたわふ

れ事にもしかりければことゝ

もせずしてかへつてわれにつ

くし人にする人有みけるた

を所望してくれよといひおこ

じければさたのかぎりを申侍る
とてたわむれにもしかりて
よみてつかはしける

ばくち業うつけたりげに又ほうけ

みけるたごはこれを申さむ

一ある人宗阿彌かけるゆいまこ

じを見せ侍りければ高直成と

て返し給ふが歌よみておこせ

侍ける

寫し繪は見事にもあらずその代の

そうはすまじき物にぞありける

かへし

わたくしもそうは見事に思はねど

さきよりねをばたかくゆいます

一やくしだうのうらに新道いで

きにけるをみて

本道も外科も療治はなりやるまい

やくしのしりにてうのできたは

さる人のもごにてついふのか

うばこ 所望して侍りけるを

うたよめと引とめければ
かうばこのふた／＼歸る人を止て
つい一しゆのうたをよみける

一おばらき九郎右衛門と申もの

わづらひて死にければ

をばらきや九郎右か詫や果られた

てうりやうふりよに兵糧をとる

一そうでんといへるささう去方

にてきんちやくをおとしける

をていしゆひろいてト養にう

たよまするよますばかへすま

じごあればそうでんひたすら

たのみける

巾着をおどすなどいふはやりこと

そうではないか宗傳ではないか

一珍客をうけてさんぼうにさか

づきすへてもち出ければ客が

御はじめあれとていしゆより

もさま／＼じきのありけるを

わきよりうたよみたらば客に

御はじめあれといはれて
盃のさすてひくてに歌よめど

これぞまことにむたいさんぼう
一ある方にてたばこのはいをこ
ぼしければくわたいにうたよ
めといはれて

お座敷をこ灰になせしくわたいとて
たゝみつけたる歌の御所望

一久保ごのかたへおのゝより
合けるに新左衛門とめつまの
すけといへる小人もありける
に新左衛門しら地のあふぎに
うたよみ給へといひければい
なびしけるをむりにしよもう
しられて

いちやならて咎をあふぎの骨を折
そのよな事はおれはしらじな
とよみけるを新左衛門あふぎ
にかきけるをみて
この君の筆にらばじ久保ごのゝ

おいへりうさへもんでいとなる

とても事に三人の少人をた
ていれよめといわれて

雲をもとめ空をしかくる龍さへも

むすぶちぎりのつまはありなむ

一大雪のふりけるあした

ふりなりは花にもまさるお雪さま

とけな心はてんどつめたや

一だるまの忍に

口の端にむさくさゝとけが生^はて

そゝほだいとやこれをいふべき

一いせおごりのはやりければ

我君をこゝで松崎いせおごり

そこらでしめろまかせはら帯

發句

似てにぬは繪にかくふじの雪と墨

一正月の二つありける年に

玉くじけふた正月やあけの春

一かんざんじつとく^の繪に

かん塞ししつとくゝめるあした哉

一すいせんの花に

きんさんやきんだいの酒を水仙花

一梅とつばきをいけたるを

やり梅をこたちの椿^{本ノマ、露出}うけとめて

花の命をいけてこそみめ

狂歌鳩杖集序

先師由縁翁嘗撰其師玉雲翁所著之鳩杖集々々中題貴介公子之名者多矣故有所諱而難上本乃藏諸帳中久矣翁之晚年使予校焉予不才淺陋加以疎懶雖承師命不果者二十年于茲也今年甲戌夏丙申予喪男情之所鐘慟哭泣血殆將絕矣聊欲遣悲而校此集除其貴介公子之名而代以或字不數月校成矣是悲之所以致也成則予喜甚喜則向之所悲俛仰之間以爲陣迹矣附錄二卷亦師命也其一二所取捨者因予好尚已寶曆四年甲戌秋八月望於先師像前謹撰

秋園齋米都紀豐

序

韓子の古意の詩張氏が遊仙の文にもに狂なるものなめりこゝに秋園のあるじ難波の由縁齋を師とし狂歌を學び近國に名あり故をもてかの翁在世の時選集のかたらひ人となして草稿をあたへられぬ其稿を見るに由縁齋の師男山玉雲翁の狂歌一百五十首及由縁齋の詠當時の歌ともに梓にちりはめんとす其校合の趣を閱するに親に孝師に敬子に愛友に信くはしくそなはれりもとも風致はさらなり予忘年の交あるにより筆をそへよかしとせちにそゝのかされさそふ水にいなふねのいなみかたくてかひくしからぬ掉の雪を楮上にそゝぐさしかいふ

甲戌居詒

尾瀝吾友堂反愚序

四海波靜に風枝をならさぬ時なれ

や四十あまりの男山厄神参りとて

難波の里をあしとく立いて葛葉橋

本を越て石清水八幡宮を拜し奉り

蘇民將來の守をいたゝき小弓も袋

に治る御代とて貴賤群集の袖を連

ね祈る壽命は五百八十年七曲を下

りて暮に及へは麓の里に含りもど

めて宿のあるしにあたりの名所ま

てたつね問ふに女郎花の一時をく

ねるといふより歌はなしになりて

那智八十高野六十八幡にはけふ四

十三我らしろやくとよみたまふこ

の山の法印も今はむかしまつかう

と笑を催し旅のつかれをわすれ齡

のふる心地すれば猶も覺しほどの

狂歌を語れといふて物に書付一冊

となし老を慰む使あれば鳩の杖と

名付ることこそ

干時享保十四年つちのこのと

りむつき十日あまり九のかの
日

永田山城掾言因序

米都云此集あめる時は言因とも

良因ともいふて由縁齋の號有べ

からず然れども此集老後までも

板に行はれずして八十ばかりの

年予にあたへられたれば由縁齋

撰とし侍る事難なかるべきか

狂歌鳩杖集

由縁齋撰

門人 秋園米都校

豐藏坊信海法印述

放生會の供奉あまた有けるを

見て

お供には罷出たるものおほく

放生會こそ八幡大名

御朱印頂戴し奉りて

土器のさしもかはらぬ御朱印を

いたゝき祝ふよろ萬代々

御暇拜領のごき

むさし野の月に名残のをしかなか

山へかへろふ嬉しさも何

兩國橋の波に横をれるやうに

見えければ

空晴て雲あらざるになんの扱

兩國はしの波に寝すがた

すみた川にて

おもふ人なくとも戀し都鳥

われらもむかし男山僧

東叡山を拜して

人間の種ならぬ花の盛りには

雪のうへ野のこゝちこそすれ

なごて扱雲のうへ野の御目見えを

眞如平等の臺ならずば

鳩の目にれうそく尊と拜かな

しくわんの座主と聞につけては

醍醐僧正より南天たまはりし

御禮に

移し植て見るぞ嬉しき醍醐より

南天竺のみのり得てきて

雁の繪に

昔く蘇もしが文をこごづかり

かりの使の名にやたつらん

太公望の釣する繪に

いどながくみさを守る太公望

魚つるよして文様とつる

子をあまた愛する麝香のゑに

子をあまた持た麝香の母をこそ

匂ひぶくろといふにやあるらん

歌舞妓子の女がたする繪に

女郎花の花かど見ればさはなくて

是やうらゝの男お山じや

六十の春

手習の道にかなへど我こそし

筆こゝろむる六十のはる

齒のいたみぬる頃

いつ花の咲こともなき木坊主は

春のさむさにはをいたむかな

歸雁

雁かへる常世の園子いかならん

花はいづこもおなじはるの日

上己

我むねはけふはなやきぞ若草の

餅もこもれり酒もこもれり

三月盡

あすよりは襟薄くなるしあはせや

今宵つきたる金綾のはる

端午

美しきあやめのまへの小袖より

眞菰かぶつた粽目につく

東寺の瓜を貰ひて

くふかひの有し東寺の眞桑瓜

ひみつのやうな法の味ひ

初秋

慰に今朝ひろけたるふみ月は

見ぬ世のひとの來る盆の前

七夕

わかきよりどしに一度の星合は

養生ふかきあまの川かな

名月に雨ふりければ

空にたつ名のみはかりの月見にて

あどなきものは重箱のいも

俄に客を得てしめち一種にて

もてなすどて

さしも草きふのお出に世話やきて

しめちかはらのいたき振まひ

日待の夜平家にきゝあきて
我こゝろ壽永の比のむかしにて

かたる平家にあきかせぞ立

重陽

千代ませやちよませ垣の菊の酒を

いはひいはふてむいたくり言

洪水の後九月十三夜に

水損にあふそらまめの月なれば

かはかこはいと人はいふなり

埋火

人とはぬ道は落葉に埋火の

あたりほとりの冬そさびしき

歳暮

何としてかしこ過たる我身ぞや

とめるはまれな年々のくれ

玉井慶把盆山を秘藏して歌よ

めごありければ

盆山を秘藏したまひけるほごに

けいはくならほめ申なり

阿州ちいさかた傳内在山の時

海松とこぶのりをおくるごとて

無事なりと聞てよろこぶのり

なればみるこそそのまゝ奉りぬ

るとよみこしけるかへし

在所よりはるゝはこぶのりを扱

こゝろみるこそ珍らしやのふ

雲州松江へ例年霜月春傳とい

ふ使僧つかはすこて

旦那衆にしゆんで春傳しゆんでまた

梅漬に使僧出雲下りそ

東寺羅生門の茶屋の平左衛門

狂歌望しに

羅生門の門わきにすむ茶屋の名を

平左衛門といふはこごわり

北村季吟新玉津嶋の屋敷へう

つりしといひこされしに

みがきあてゝ光りましたる玉津嶋

あしかないやらこゝへこひ來す

季吟返し

たまつしゝ女神にてましませば

男やまへは耻てまゐらぬ

明石人丸の縁起に火災をの

るゝとありときゝて

よその煙かきのもごまで立添と

ひとまるなればそれはさもそふ

又風波の難をのかるゝとあれ

ば

船をしそおもふとよみし神なれば

そこなひまさし和歌の浦かせ

去御方にもろこし團子たま

はりて八幡山にもあるかご御

たづね有しに有候へども齒き

れかやうにはと申上て

男山にもろこしはさせと寺領にて

このめを見ねばはきれいたさぬ

櫻田ある御方より歌にまはり

ければ

やまごうた言葉の花のさくら田に

人のこゝろの種やしけらむ

また祈念にて歌の腰折直せと

ありければ

加持力で釘のこし折直せとも

大和こごばはつちて御座候

去方登山の時一首ごありければ

石清水いのち長柄のひしやくにて

汲てふしるき神のめくみは

土器町にて人々酒宴ありて歌

よめご有ければ

ごりたまふかはらけ町のお客様へ

采女ならねご申たはむれ

ある御方狐川に船かゝりして

文の奥にこゝへこんといひし

もたざる狐川秘密の宗に能化

あればそご云返し

御懇書にはかされ出てきつね川

さいはひわひや逢てかたらむ

またかさねて迎に船をのぼす

へし大阪へ下れとあるに

大阪へやがてこいとの地黄煎

あまいこごばにちよいどのる船

去方へ葡萄と梨子二籠進上申

とて

神佛ふたつのかごのましゝて

ふだうの冥加ありのみの貴美

ある御方の屋敷にて書院のあ

たりに見馴ざる手水鉢に瓢箪

を付られけるに花葉の間より

水をごり出ける有さま目ごま

しう見えければ

洗ふ度にねめり者とやなりひさご

花のつゆそふ井出の玉水

猿戸をあけて馬場ありければ

此馬場はあつばれお馬場候よ

掃除以下までさるごてはさて

其馬場を行て九折なる道あり

そこをのぼるに花も盛と見え

て鞍馬の心地して清少納言が

筆の跡おもひ出られて

馬にくらくらまの山やかくあらん

つゝら折なる坂の花見は

辻堂の一やごり有

ねがはくばこの辻堂に一やごり

二やごりせんはなの下ふし

峰にあかるに花盛と見えて白

砂匂ふありさま大和なる三よ

し野もかくやあらんごおぼえ

ていはむかたなし

むさし野にありごは聞ごけふ初に

目のまへにさてみよしのゝ花

以愁亭十景之内

直下庭景

廣庭の景を直下に見わたせば

そのまゝ花をいけい亭かな

隔海遠山

数々のかづさの山はいつの世に

いつれの神のうみへなるらん

往來方梁

往來のまきものなれや橋のうへ

あまたの人のふみつくしかな

市井民屋

見わたせば民のかまどは賑ひて

天下いちどや是をいふらむ

臨江浮月

此茶屋のかざりものかと望みれば

こやほり出しのかたつきの影

遠寺鐘聲

景にみどれ暮るも知らぬ耳の底に

ふつと入相の寺々のかね

團扇涼風

暑き日にあふぎはすんどさし置て

ひかぬ用心したる涼風

名岳班雪

ともし火にするがの國の富士の雪

書をみる事はまどほなれども

聚遠亭十二景狂歌

高田のほとりによしある山莊

ありけり立よりてみればいと

興あり抹香にふすほりかへり

し法師出合たり問へばある方

の公用のいとまある折から浩

然の懇氣をやしなひ真如どろ

りと觀座したまふ所と語るこ

のところに十二景有何事ぞ申

せといふによほといなみけれ

ど袖をひかへて麻の衣のあさ

からすすゝむればえも得しれ

ぬ狂歌をしるし置侍る

露伴曰懇氣ハ根氣ノ誤カ

高田神廟

されはかたしあふけば高田神廟は

そこつな口ではめられもせず

擔間士嶺

ふじの山爰をさること遠からず

そつとのき端のはなのさきかな

鶉野孤松

くはくはひと廣き鶉の類なき

ながめにふけるひとつ松かな

白根積雪

降積つて山姥となれると白根なる雪は

ほしかく綿ぼうしかも

板橋行客

板ばしに駒の音していたる客

ちりうく梅の香をさめてこそ

千里青田

千里續くこ小田の原のおだやかで

麒麟もごらもすみぬへらなり

萬戸炊烟

大賑ひめでたくしゆふ煙

なにはの景に立まさりけり

關口飛泉

此流水鶏の性や關口を

空ねながらにとひいづみかな

長谷晚鐘

聞人をすくはんとてや大和より

爰に入相のはせの觀く

前池白鷺

目の前に般若のむかし浮む哉

此白鷺池のなみのうへには

東山秋月

大千の世界の爰はひがし山

出た月影のいつかい者じやのふ

西岡紅樹

にし岡は秋の時得てわかかたど

いろもましたる木々の紅葉ば

江戸着の日去方より野郎をた

まはりしに

此ところ一見せばやとぞんじつゝ

下りつゝみの僧にてさふらふ

江戸を立に此はごの名残惜き

といふに

おとませていつそいはしや水鳥の

おもひ羽々名残をし

江戸を立にうちつゝきいそか

しく駕籠にてつよくねぶりて

寝ていひきかきくらしたる乗物の

ゆりわかこのもとの身やわれ

鈴の森八幡宮を拜して

鈴の森ふりさけみれば鷹を化し

たまひ 神のあどざありける

鎌倉の道も草ふかく見えけれ

ば

聊人もなきかまくらはさび果て

草のみふかき里ごあれぬる

小田原にて外郎くれける人歌

よめと有に

口中を匂はせた歌は世の中を

ういろう僧のなくさみやこれ

坂の上を乗物にて行とて

歌人とはのりものかきも思ひしれ

坂の上まで駕籠にこれのり

さいの河原といふところにて

堂もありさいの河原に石もあり

なき人やうつ浄土双六

さつた山の下親しらすといふ

所より海上を見て

うみの儘に妻を去たのやまめかも

親しらすなるなかのこゝろは

三保の松原に雨降を見て

天人の雲のうちよりあまくだり

まするとみほの松の羽ころも

富士

行へしらぬ時しらぬとて白雪を

ひつかふりふるふじのいたゝき

三國の山の中でも富士は伽羅じや

あの空焼の煙見るにも

ゆき折のふじの大たけ筒にして

残らずいけてみよしのゝ花

ふじはこれ雪の白ゆふかけまくも

ふとしきたつた天のみはしら

年を経て詠するかの富士の雪

きえずやきえぬ命なりけり

君が徳の篤きに歸して不盡の根の

ゆきも打どけてはるをしるかな

うつくしきふじのお山にはの字哉

ゆきの肌のしほしりの形

いつの世に染色の山となりやせん

もとのしら地かまし富士の雪

うごかねば實も君子のさくゝし

くりに黒まぬ雪のふじの根

なりて扱見たや空吹風の手に

なでゝよふじのふきのはだへを

先それじや富士の高根は帆を上て

雲の浪ゆく天のつりふね

不二の山それしら雪の鹽瀬にて

日本第一の土饅頭かな

目あたりの遅き故にやふじの根は

ときわにゆきの不老門前

霞ひくふじのたかねはあふみより

爰にはぬつとてするほうかな

谷の神あれにますかと白雪の

不ぞ不思議の不二の山かな

花の盛りくまなきは空ごとで

眞白妙なはふじとしら雪

地からいつうみたりけりと白雪の

おすにおされぬふじのねぶとは

春霞ひきやるはよいかふじかくす

くもと雲とのやれ手をとるな

宇津の山にて

つた楓いどやしけるはむかしにて

百騎二百騎うつものやまみち

・夫婦石を見て

斯ならばかう社あらめかた／＼と

契りも朽ぬ女夫石かな

佐やの中山にて烏帽子餅かふ

人を見て

見るからにこんで馬より左りをり

買ふてかぶつたゑぼしあめ哉

東海道の名物を神祇釋教戀無

常述懷祝言によせて狂歌よめ

と有に

ひだるさよの中山にかぶるゑぼし飴

其味ひはあまつこやねぎ

灌頂をうつ山の邊の十圍子

みな水晶の珠数こそ見れ

いろふかく思ひ染飯そめかねて

戀の淵瀬のさわぎたつなみ

もとすゑの草津の露と消た身は

三途川原の姥がもちうち

生れ性のあしきや世話をやき米の

身は糠俵いひがひもなし

この里はいつも正月にしさかな

雑煮と祝ふわらびもちかな

袋井　て春雨にあふて

桐油合羽ひつばる雨の駕籠の内は

はん袋井のこゝちこそすれ

篠原といふ所にて同宿の合羽

破れければ

風にさて篠原の合羽破れしかば

手づからとつてみつもりにせよ

かぶりの里にて

馬の杓あたらしきとてかつくなよ

こゝはかぶりの里のわたりぞ

舞坂を通るとて

あめのふることはあらゐの空晴て

ふねにのるにもよい仕舞さか

吉田といふところにて京の人

に逢て

のりものゝよしだ通れば窓よりも

顔つん出して逢てうれしや

岡崎へ越んどいふにみな疲れ

ければ

今宵さてこえぬことは岡崎や

まけてひち川に枕さだめん

桑名に着ければ

むづかしき山川海をこえて來て

もはや桑名ややがてみやこ路

鈴鹿にて

さつくとふる村雨の音きけば

是ぞ神樂のすゝか山なる

梅の木の家屋にて

寒苔を經はるにあふみの清香を

發する梅の木の葉うり

粟津が原にて義仲の舊跡を見

て

馬上より落こちの土となりたやら

ふか田の畦に生るよしなか

走井にて

わづらふものめばその儘達者にて

尻をからげてはしりゐの水

常盤美豆野にて

五月雨のときはひとつに浪よせて

なべて水野といふべかりけり

我住山を見て嬉しさに

道遠く羽ね弱き身はとぶに倦んで

やうく歸る鳩の峯哉

かへりみれば花はちりめん長羽織

かせの手をふる伊達男山

道中八日に歸山して

ひげまんをするとはなしに男山

七日いそいで八日にすらり

一とせに三度下向の折に

東路を機へるやうに往來して

いつか錦をきて歸らまし

御祈禱の御札納めて如律令

いはふて三度急々の急

ある御方山庄に通夜有ければ

萩の花餅上るとて

折を見て奉りぬるはぎの花

めし上られよこもち月夜に

松にとまる鳩の繪に

松たかき枝にとまれる鳩の繪も

かみにあゆみをはこふ筆かな

芹に蟹の繪の讃に

人は知らず御幸もしらず芹川の

せりぞむかしの蟹に逢けり

琴の音に峰のまつかせ通ふら

しといふうたのこゝろをかき

しゑに

ここの音に松風かよふうつし繪は

おとも香もなきいたり物かな

仙人の瓢簞より手を出す繪に

仙人の道せばからぬ大ふくべ

うしの車のわがものにして

小蝶牡丹猫のゑに

とぶ蝶をねらふこゝろのふかみ草

ねこかごみればそら寝いりかな

竹に雀の繪に

笛竹のさかりはにゐるむら雀

みれば踊つはねをならしつ

鹽竈をゑがきたる扇に

河原ならで扇の地にもうつす哉

ひらけば手にもちかの鹽がま

四十から紅葉にごまりたるゑに

四十からもみぢの露にぬれそめて

世にいろごりの名にや立らん

片岡の森の繪に

ほとゝぎすなくかた岡の森でさて

聲するほとにうつす寫し繪

寄碁磐戀

逢事はかたき碁いしの戀ゆゑに

目をしろ黒としてうちもねす

寄硯箱戀

あふことは終に梨子地の硯箱の

ふたりが中に水やさしけむ

寄門戀

ねやまてはおもひもよらず門口に

うき名とゝもに立くらすかな

玉章形の菰若入に戀の歌よめ

と有ければ

戀しさをかく玉章のたばこ入

むねのけぶりをつゝむなりけり

牡丹と丸柿とを贈りて歌をそ

へければ

花やかなその言のはのふかみ草

ひとまる柿のもとのみやぎみ

水入の米のつけばくだくると

聞て

水をいたみ米うつ杵の己れのみ

くだけて物をおもふころかな

名月曇

くらきより黒きくもにぞ入にける

つゆはごてらせ芋の葉のつき

氷川明神へまありけるに別當

煎茶をくれて狂歌せよといふ

に

所から咽びかはつく苦しきは

のますんばさて何とせんじ茶

かはらけ町金地院にて花は散

過ぬつゝし松が枝に狂歌奉れ

と有ければ

花の錦まいてもつゝし松がえの

みごりのいろは紺地印金

氣の毒なる折から頭を撫て

百八のぼんの窪まで元にけり

なごすり切しあはれ珠數のみ

へちまの皮のだん袋と人のい

ひしを聞て

心にはへちまの皮をたやすなよ

うき世の垢をおとさんがため

風呂よりあがりて心よしとい

ふ人に

身の垢をおとしたれとも心よしと

強くおもへばしうちやくろふら

三教一致堂建し人歌よめと有

に

三つの教ひとつのむねに落かねて

のどにつまつた釋李孔かな

戊辰九月俄にわづらひて心地

死べかりければ

やがて／＼香の花のどくうしられ

さてかのきしへいたりものかも

護摩堂より比叡をながめて

此春ははたちばかりも若くなる

ふじの高ねと日枝をながめて

長日の御祈禱勤るごと

われはたゞ八幡こはうの太煮にて

朝夕こまにあへられぞする

何事もまろくしてふ護摩なれば

四海にさはる浪かせもなし

史稱優梅之滑稽合於大道者秦皇之

暴不可以正諫惟滑稽戲謔却感其主

則史稱合於大道者其不然乎狂歌者

和歌者流之滑稽戲謔者也然世人不

知其屬辭有法則惟戲謔鄙俚以爲狂

歌亦妄哉米都刻信海集欲令人知其

法則者也苟無法則者豈有感人乎和

歌者流之滑稽戲謔豈無有風諫其君

得世妄者哉有焉若然則彼滑稽合於

大道者亦惟在此集乎米都刻此集不

亦善乎

丁丑秋七月

關弘題

附言

此集編る事予かことき才なき身に

應せぬ業ながら先師由縁齋の遺命

あればなりそのおもむき序文にこ

とわり侍れども猶先師直筆の來書

を寫し跋に置て證となし侍る

此集の歌の中にあるひは文字のち

かひ又はてにをはのかはりもいさ

さか有て作者の意にたがふ事もあ

らむか是人傳にもきゝまたは傳

寫のまゝに書のせ侍ればなりもし

その事あらはゆるしたまふへし愚

詠のつたなきも年ごろのすきもの

なれは見ゆるしたまはれそしかい

ふ

秋園米都於松竹齋謹識

追啓爰元は本屋に仲間候て諸事板
行申儀あなたこなた斷申つらし事
六ヶ敷候て此鳩杖板行數年延引に
罷成候何ぞぞ其元にて板行被遊ま
しく候哉左候て鳩杖一冊に被成今
一冊其元御連中御歌にわれらなご
被書加板行被成候は、可爲本望候

正月十七日

由縁齋

信乘

鈴木金左様

御机下

此鳩杖集は由縁齋貞柳翁世にいま
そかりし時門人多か中に國を隔し
予か父へ梓にしてよご文添ておく
らるされご自序にいへるごこく集
中に憚る事の多くて心ならず四十
年餘を経ぬさても師の命重ければ
十とせこのかた梓にせん事を起臥
に忘るゝ事なく今この歌を校合す
るに七そちの齡ごに中風をうれ
ひ氣力薄うしてはか行す辛して安
永九つのごし子の文月に十のもの
九つは事なりぬごよろこひしにま
たも病に染て一日くゝにたのみす
くなく成ぬ今はの際に此書寫の事
を一紙にしたゝめ取分親き門人へ
付しいさゝかかけたるは及すなか
ら予におきなふべきよし遺言して
終に黄泉の客ご成ぬかゝれば集中
にたかへる事ごもの有は予があや
まりご見ん人ゆるし給へまた今年

貞柳翁の五十回なれば其追福ごも
なるべければ昔の下の父もさぞよ
ろこびぬらんと予が嬉しさいはん
方なしよりてくたゝしきごこわ
りを拙き筆してかい付る事になん

天明三つのごし

かのごの卯葉つきのもちの日

青栗舎都眞

家つこ

男山のむかしを思ひ出て油煙齋眞
 柳一たび玉雲翁信海の門に入言葉
 をつゝりの袖の宇内をおほふはた
 はり折にふれてかつおかし好める
 所の姿かん代の夷歌といふにもあ
 らず亦俳諧にもことなり彼ならの
 葉の名におふ集に酒壺になり見て
 しかなどいひ拾遺におゐては我ぞ
 浄土のあるじとよめるたぐひにし
 て狂歌は大歌のこゝろ即南華老人
 狂言といふ此類ひなり狂は大也大
 は俳のこゝろにかよふ物掟を守ら
 ず我心を逍遙し錫を飛して風塵を
 出るいきおひならん油煙齋此道に
 ふかくして行風の口すすみのあと
 もしごろなると保友が根なし艸
 のかるくしきともに吟じ味ひし
 りてたゞ玉雲の風に任せて其さま

の似し事をいはゞ寒食の家に折得
 たる躑躅もつゐにそのわかちを見
 るべし誰梅の花散りまがふ里の淡
 雪のわくともわかぬさまくらふの
 山はなもみぢいづれに勝劣ありと
 も見えすさあれども自ら忘れて物
 にあらそふ事なし見るもの聞もの
 につきて浦の汐貝拾ひ集めし玉の
 數々を露ばかり水莖に書流し外へ
 は出さじと思ひいれし作者の心ば
 へなれば家づこ名付て斷を加は
 ふる事しかり

淵田不成序

家土産

油煙齋眞柳

歲旦

蜜柑かうじ摘にけらしも蓬萊の
 山のかいより見ゆるさかづき
 百人一首にごうありても元日の
 あかつきばかりよきものはなし
 三十一になりける歳
 みそし餘り一つの春になりて見
 まもらせたまへいつも八重垣
 春たつこいふばかりにや茶臼山
 今朝はかすみのひきまはしけり

甲子の歳

門に立る松の木の枝に吹風は
 あらおもしろの琴のねのとし

丙午の歳

年の名も神にねかひの繪馬なれば
 たれも皆令満足のはる

酉の歳

禮に來て御慶といへば御慶と答ふ

さては鸚鵡のどりのごしかな

大ふくや一富士釜に鷹のつめ

三に茄子なすびの茶入めでたや

ごさくさごころ節季の蓬生も

あくるあさごて民もすぐなる

蜜柑かうじだいゝ所の名主ぞと

ひげくひそらしちいせいゐるび

享保十二

享保も十二の手箱かけぬれば

蒔繪に見ゆるかごの松竹

明るよりめでたき物のかほり來て

手前よくなるやごの大ふく

齒し染の葉は波かあらぬか橘の

梢によする海老のそほふね

瑠璃壺の百首とやらんに梅の

湯のすきものならば花も見ん

菓の種をわりてすつるな此歌

により茶人は陰陽曆とて元朝

大ふくに祝ふと聞て

あつうして水をば梅の色よ香よ

陰陽湯とせるひとぞしる

甲午のごし

今年より馬にくらまの御利生にて

老木の枝に花もみもなる

八幡瀧本坊に賜はりし午房を

ひげをとりてにるごて

初はるは目出たき本のごう様

おひげのちりをとりもこそすれ

十日戎参りの人を見て

商人あきんどの欲にこゝろや亂るらん

戎まわりの筐かたけゆく

梅

はつせ山小池の寺中より貫之

の梅三枝給り歌をとありけれ

ば

梅はいかゞ思ふもしらず御懇意は

初瀬山々香にほひけり

八間梅さても其のち石薬師

淨瑠璃世界の花かごぞ見る

梅か枝におきぬる露の玉造

瑠璃光によつと枝ぞのびぬる

鶯

冬もよし春きくもよしうぐひすの

ほうほけきやうは勝劣ぞなき

佛の別れに

涅槃會の時をかんじて餅花も

なみだの玉のあられごぞなる

花

西方に淨土の春はありといへど

花見て千代もこちやひがし山

賢きまかしこからぬも花に來て

はしがるものは酒よ肴よ

住吉にて

音にきゝ車返しの花の下は

こゝろにのりて行ぞわづらふ

住吉や車返しの花見とて

そで引つれも人ぞとゝろく

天王寺にて

酒もつよくかほのあかさも公平は

四天王寺の花の下かけ

春雨

つくくく春の眺めにあくびしつ

となりもあられ煎る音ぞしる

上巳

節供ぞと川瀬にながす盃を

かたじけなしやさはる岩間は

節供とて祝ふ言葉もとりくくの

もくえづりや花にやなぎに

歸雁

そもじさまと書く玉章に見ゆる哉

朱雀の空を歸るかりかね

藤

松は千代まさいらくこや白藤は

ねちゑんかうん風にうなづく

牡丹

傾城と詩には作りし花なれど

さかくばたんははくにきはまる

郭公

昔々きくに北野のほとゝぎす

ほぞんかけたか繪馬かけたか

山崎宗鑑のむかしを思ひ出て

かしましや此里過よほとゝぎす

こおもふほごに一度きゝたや

端午

相かはらず軒にあやめをふき自在

天のめぐみと節供祝ふた

蘆の葉にのりの道こそ悟り得ねと

拂子に似たるちまきくくく

新麥を振舞の座にて

麥秋のいつくれそめてこがらしや

むせぶばかりのひや汁の味

六月七日大雨ふりければ

祇園會やはやしのかねの七日とて

しやぎりしきりに雨ぞふりける

又

通り町川となるほとふるあめの

こゑを帆にあげて歸る船鈴ふねすず

住吉御板

借錢も残らず夏の拂して

かねと剋せぬ世には住よし

はにふの小家に紙帳を釣ける

を見て

夕立の雨のふる夜もふらぬ夜も

かみなりさわぐ紙帳わびしき

七夕

秋立て幾日あらねど朝さむござる本ノマ、

小袖かさばや七夕の空

歌のさまふつくかなれば織女に

手向んこども梶のはもじや

男七夕おとせち天海原に牛はあれど

かちよりぞ行くなみのぬれもの

七夕のすまふとる夜と下帯を

むかしのすいが手向こそすれ

星さまへ着ならし衣慮外なれど

しきしのあれば手向もやせん

大坂の踊りに

三味線のコまをはやむる踊り子は

松坂越てやつさくるわへ

紅口きやうきて見よかしの踊子は
手拍子もよくあはせびんかな

萩

にしきぞと都の柳さくらには

露もはぢざるみやきのゝ萩

八月十五夜

千金にかへぬ今宵の一輪は

月のかつらの實はへならん

男山にて

さればこそ生るを放つよはなれば

蟻のはふまで見ゆる月かげ

放生川にて

うろくすも浮み出るやにごり江を

いとはですめる月の今宵は

風潭和尚由緒ありければ松尾

華巖寺に一宿し侍りて

月はみつゝいは揚技にさすが又

ゆびをまよひと捨られもせず

紅葉 西山にて

歌よまむ身に應せずと商人も

よきゝぬかさの山のよみぢに
紅葉々の名こそ高雄はこはりや

文覺さまももとはいろから

菊

薦はふてはいりの門で見る菊は

よばいぼしかとあやまたれぬる

重陽

きのふこそ祇園のはこの菊水を

節句は千代のためしにぞひく

九月十三夜

雨さへふりてかみなり騒く名月は

豆一口にくふばかりかな

禪寺の垣のしりへにて

いかなるかは隠元豆も花のいろは

抹香くさふもこそんせぬのふ

霜月初の頃かみなり雨さへ

降ければ

かみなりも太鼓を打てまはりけり

あめやあらしの顔見せの宵

雪のあした御堂へ参りて

うち出て御堂の家根の雪は富士
まことに田子の御うらさまかな

かみ子の袖ながら得ならぬに

ほひのしければ

千早振紙子の小袖もみうらの

伽羅くねなるに鼻くゝることは

風はげしき夜雨にぬれて夜番

の町中を廻るをねざめにきゝ

て

火用心の聲あはれなりさよしぐれ

ぬれて夜番のひとり行らん

除夜

獨ねをせぬ夜なりとて鬼は外へ

氣を遣してや出て行らん

歳暮

大晦日更行かねを腰につけて

うたふて歸るかけごりの聲

年はごちへ暮行空とながむれば

こよみばかりに月ぞのこれる

わがこゝろなぐさめかねつ大節季

酒の通ひにのる月を見て

借錢をあふのうらなし節季さて

なるもならずもこゝろいそがし

拂ひにもならぬ物からせはしなや

大晦日の入相のかね

瀧本坊より歳暮に午房を下さ

れければ

慮外ながら午房の髭をくひそらし

御禮申このをどこやま

神祇

柿本大明神千年におよぶ御時

正一位にならせたまふときゝ

て

歌の道とくどじゆくしの柿の本

正一位とはむまいせんさく

筑前綱輪の天神の御影津村藥

師堂にて開帳の時

菅原やふしみあふきみ心ひく

つなはの御影またいつかさて

神だにも心づくしの旅なれや

ひしきものには綱を輪にして

忌部伊記神書講釋の座にて

ちはやふる紙子の火打いしがねの

傳受をしたやいきのよければ

人丸の社千句連歌の座にて餅

出ければ

小豆餅それとも見えす久かたの

あまざるゆきと見ゆるさどうに

子祭をせし人の許にて大黒の

繪に讃の歌をさあゑに

一に倭似合ぬ狂歌讀にかく

大黒ごのゝのふおかしかろ

住吉にて

詠入てこゝに日ぐらし硯かな

筆すみよしの海づらの景

濱松の音はざんざ住よしの

岸より遠のあわち嶋臺

朝夕に見ればこそあれあれゝが

しやむのお歌のあわぢしま山

濱邊にて

住吉やむかふ景色はあく期なし

おもひきれとの阿波戸はるかに

沙干に参りて

にじるのは浦の見るめも苦しけれ

おあしを出してかいもごらばや

吉田にて外宮内宮を拜して

名に高き吉田の里は杖つきの

のゝさまもありお日さまもあり

人丸の繪を拜して

ほのゝごあかしや御衣の袖口は

むかしを今にうつし繪かさて

釋教

□□□周忌追善に夏九十日狂

歌をよみける

世の中は電光石火に吸付て

たばこのむまの煙とぞなる

法華經の一部はちまきするからは

地獄の鬼もなんだ辨慶

南無おみや豆腐の聲たてゝ

みな彼岸へ夜船なりけり

本來の面目か又めんなるか

小僧が棒をくふを見るにも

あんずれば此世は夢のかりまくら

草葉の露じや玉でないもの

いろくの善をもなさば盆前に

娼魔の帳をけしてたまはれ

東六條にて

のりの道長く傳えて今こゝに

御堂さまとて御はんじやうかな

法然上人説法の座に津戸三郎

を書たる繪を見て

とくのりにたけき心の鬼もはや

折たつのごのためしさふらふ

戀

初戀

こひの道十五六より手習の

小野のおくへは次第にぞ入る

宮川町あたりに一宿して

建仁寺祇園あたりを起わかれ

泪だらにのかねはうらめし

嵐三郎四郎其外白人など来て

亂酒になりければ其座をぬけ

て歸るこて

よしの山峯吹あらしさぶければ

花を見捨てゝ歸りこそすれ

寄碓戀

から碓にさとりし人もあるものを

ふみみて猶もおもひまひらせ候

寄湯女戀

楊貴妃はさもあらばあれ二月の

瓜ざねがほの湯女にぬればや

寄儒者戀

袖の涙ひたる君子となりもせで

あはぬつらさは日々に新に

豫州平重郎といへる美少年に

いやすだれ筐の一よのおなさけを

かけてぞたのむひらにひらさま

寄雙六戀

双六の賽をふり袖めかれずも

うち見てしのにものおもふ哉

藤田吉三郎宅にて

ぬれかけてしいておりつる藤の花

またも類ひはあらじとぞおもふ

嶋之助といふ美少年に

賤の男のかことならねごみな人の

戀の重荷をしまといひけり

寄紙子戀

手を揉ごあべとおしやはは目^め前で

死のか紙子のやぶれかぶれに

薄雲といふ太夫南のはりにて

白人となりて名をば房といひ

ければ

春がすみ薄雲の空引かへて

秋は南に雁のごぶさぞ

寄刀戀

腰本に手をかくるかどつかの間も

いもがこゝろにつるぎたへせぬ

寄相撲戀

お屋敷へかゝへられぬる京の色は
ふんごしかゝぬすまふごりかな

忍戀

戀せしといのりても又どうやらは
むかし男もいまのをごこも

無常

無常

世の中の仇なる事本ノマ、いハラナリをかなていほ

いろはにほへごちりぬるをみや

寄双六

双六の財ありとてもつかはすに

死ぬるはむしにあふこゝろかな

哀傷

先師信海法印の石塔を拜して
なきあごの印の石をきればかたし

あふげばいよゝぬるゝ袖かな
娘を先立て悲ひのあまりかし

らをおろして

花と見る梢を風にさそはれて

すばろぼうずになるや木男

法橋昌海追善

月花の定座をあげて待たまへ

ひとつ連歌にわれも生れん

住宅の南隣に朋友死去の時

となりまできたる無常の旅衣

よいつれなれごまづ用が御ざる

慈父二十五周忌に

雁どもに別れし春をしたふにも

二十五絃はこごさらにこそ

誓願寺のあたり池西言水の石

塔ありと

たづね來て手向に歌をかきつばた

あやめで言水かの此の塚は扱

傳光寺の住持頓死を聞て

さればこそ電光石火ついきえた

朝露に似たる長老はかなや

一家の女中ゆりはつさななを

みんな過しむかしをおもひ出て

百合花ちり行秋のはつ風に

さながら夢の世ごぞなをみんな

狂言師へ追善

極樂へいま參りぞごおもふかな

狂言綺語の上手なる身は

人間のしだいゝゝにおごろひて

年賦にかへす五ツのかりもの

先妻母の十三回忌

いろゝの膳部をなして弔はん

はるやむかしの路のしうごめ

いたち堀筒井氏追善

いたち堀に又も出來まい人なりと

おもへばゝゝおしいことゝ

娘の十三回忌

さゝれ石の千代に八千代と育しに

卒都婆にこけの娘はかなや

叔父貞富遠忌に

年ふれごいますか如くおちおそれ

腰をかゝむる我は老の身

桑名屋甚兵衛俳名を景寫竹馬

より水魚の交あさからざりしに此秋の末獨り西の空に雲と消にし事をしたひて

儒も少し禪をも常に聞た甚

しなぬ先より萬苦はなや

一子左助を幼少より學問をさ
するこの様子を聞て

幼少より學問をさすけふしひは

父の道しる人に見えたり

竹淵村何がしの患瘡にて五

才の夏身まかりしをいたみて

いもの葉のつゆの命は短夜の

是は夢かや五つかやさて

近松門左衛門一周忌

さつするに今は安樂國姓爺

さてもそのうち便宜なければ

賀

走帆といふ人有卦に入りの祝

儀

戀せしといふにてはなし福徳を

いのるを神もうけはめでたや

松屋といへるかみやへ

岩國のかみのめぐみのかたければ

枝葉榮るまつやひさしき

古林杏節老六十の賀

昔たれもゝの種をやうへまちに

年ふる林千世もさかへん

述懷

述懷

世の中よ何としやうぎの困りもの

はるもよしなやすてゝつまらず

稀年の齡になりて

祖父は山へしばしが程に身は老て

むかしゝの咄戀しき

金銀はあるも猶よしなしとても

人間萬々宗桂がこま

相將基の本にて

將基にて暮らすはあたら隙の駒

つまりはてたる老の命を

耳は遠く死るは近くなりにつけり

夢させとやあかつきのかね

商人の心のやみはあかつきの

かねがなければ夜があげぬかな

老ぬれば腰にあづきの弓ははれど

人ぞよりこぬばんにやしんきや

羈旅

奈良の町墨や數多棟榮ふるを

見て

春の日の恵か民のすりきらで

奈良はすみよきところどぞしる

清水にて

ちらゝと音羽の櫻ちりつんつ

てんと三すぢの瀧のしらいと

わかき時より毎年放生會に參

詣申ければ瀧本坊へいつも御

見舞申て

年々にたへずとふたりたへずとふ

瀧本坊の御ねんごろゆへ

鞍馬山開帳に詣けるに九折につらおり

て百足を拾ひて

鞍馬山をあちらむかでぞ給ひけり

これぞ毘沙門天のあたへか

箕面山あまのに詣し時

瀧の音は一二三のおどん／＼どん

手まりのやうな玉ぞちりける

箕面山久圓坊むかしより由緒

有ければ頼入て父が受領せし

事をおもひ出で

辨天のあたへはありかたいやかな

名にしおふたるみのを山しろ

神無月十日あまり箕面山の紅

葉見にまかりて辨天の御祠へ

まゐりてうしろの山の景色を

ながめて

箕面山さらに錦と見えぬるは

天女いんきんに織たまふかや

岩本法印に一宿し侍りて

起出てまぐらの山を今朝見れば

紅錦繡をひつかぶりねた

箕面山鳥井の前柿の木の下に

休て

みのをまゐり草臥ぬれば足引の

柿の本にてやすみこそすれ

勝尾寺へ參詣して

馬はあれごのらで勝尾の寺まゐり

佛をたのむ身じやとおもへば

寺中東坊は由緒ありて幼少の

時度々登山しけるに中絶しけ

れば

老ぬれば西のみねかふ心から

東の坊に遠ざかりぬる

尼崎濱田氏へ師走のすへに行

て

書出しをくばると人やみるめうき

節季に來たる大もつの浦

南部に行とてくらかり峠にて

駕籠かきの心くらがり峠にて

天目酒にまよひぬるかな

歸るさに

日盛はあつき峠のくるしさに

ひるにさがりて風を松坂

八幡山にて逗留し侍りけるに

山本加兵衛歌をと有ければ

なるゝほごあかぬは花の香兵とて

尋まいつたをどこやまもと

有馬にて

有馬山いなといへごもさゝひとつ

あがれ／＼と湯女が一ふし

上京の折に

夜船にて笛よりのぞく男山

月のおかほのちよつとほの字で

雑

女院御所へ玉露霜と云御菓子

さゝげ奉りし時山城の大掾は

八幡豊後坊門弟にて狂歌よみ

けるよし一首よめと土方隼人
正仰せありければ

万歳と君をいわるて奉る

菓子もちはこの玉の露霜

土方殿返し

奉るちはこの玉の露しもは

代々にきえせぬ菓子の名物

御堂輪番所へ柚の砂糖漬を進

しければ長安寺新つくり酒に

はあらで砂とうつけ工夫より

出る柚酢の醍醐味となんよみ

で給りければ

内五味^{だいご}の味ひしらぬ菓子やでは

砂糖のちからたのむ一筋

享保十巳十月なにはの御堂へ

東御門跡御下向の時里村昌築

取次にて奉りける狂歌一首并

前書のうつし

おほけなき御事を心にかへり

みもわかずかくなんよみて奉

りける

足引の山より高き御恩かな

お痛ながら衆生濟渡に

御前よろしきやうにと昌築へ

申入とて

鱗^{うろこ}もれぬちかひの網なれば

ちよつと御前へまかり出たいや

御盃を項戴して

物の名も所によりて土器^{かわらけ}の

御盃ともいひ油づきとも

里村昌築より刻昆布を賜けれ

ば

おたすけをよろこぶ身とて給るや

今度お下向なさるきざみに

黒田月洞軒より嶋絹下さると

て

つの國のなにはの春のはなやかに

伊達をしまぎぬ着てあそべかし

返し

商人によき嶋絹を給りて

歌よみたてをするもはづかし

又ある御文のおくに

たづねきてひろき武藏の野で

つぼうはなして見やれたまり

やせまいにとよみて下されし

返し

鐵炮のたま〜江戸に參ることも

いかではなさん町人の身は

知足といふ桑門梅月堂宣阿翁

招請して吉野に花見に行れし

に雨打つゝきふりければ

咲さかぬ花にちそくはよしやよし

芳野の花にあめはせんや

我身七十に及ぶまで何の功も

なくいたづらにあかしくらし

なにはの事もいざしら浪の船

あそびに行て

范蠡^{はんし}とさかさなれや鰲釣に

小船こぎ出て喰ふはれいはん

和州よりたばこをもらひて禮
狀の奥に

かほりさへよし野たばこの夕煙

はなのあたりを立のぼるかな

富士見西行の繪を見て

西行の首にかけたるひらゆだん

富士の煙をつゝみてぞゆく

津守兵部少輔へ御目見へ申時

住吉やおまへの沖にまかり出で

年ふるあまも皺をのしこぶ

ある草庵にて連歌なごし侍る

にとなり座敷碁會なりけれ

ば

隣りにて碁をうつせみの聲きゝて

ぬけてもごるは女子らしやな

雲の帯鹿の子の小袖ゆきなが

にとよみし古人の狂歌をおも

ひ出で

年ふればかしらに雪の積りけり

伊達をするがの富士のお由も

香間に可京より尋ね來りしに

しばしこて袖をひかへて留伽羅の

道をならはで別りやうかさて

清水春流といふ儒者大坂に數

年ありて故郷尾張へ歸るとあ

りて

名残をしや沅湘日夜咄したに

けふがおはりとしばらくもせず

春流を清水といふは名のみにて

又あふ坂はいつの事やら

服部周雪大坂に逗留中むつま

しく語りけるに江戸へ歸る置

土産とて箔の扇を給りしを捨

ても置れず取出て

觀世殿はあづま路なるを心亂れ

南をはるかにあふぎこそすれ

甲州の人胡鬼の子を持參あり

て歌をさあるに

音にのみ聞胡鬼の子をつくゝと

めの正月をけふこそはすれ

ある人の歌に世の中はかりの

世なればかるもよし夢の世な

れば又寝るもよしとよめりけ

りかゝる心ばへを一首よめと

ありければ

世の中は假の世なれどかりにくし

夢の世なれどそうもねられず

南都松井和泉といへる油煙所

の大形の墨上つかたにも御上

覽のよし風聞ありければ

月ならで雲のうへまですみのぼる

これはいかなるゆゑんなるらん

是はいかなるゆゑんなるらん

とよめるうたを京童の風聞さ

まざまあると聞て

わが歌の聞えあけぬるゆゑんこそ

墨よしさまのめぐみなるらん

油煙齋と世に謠はるゝころもきぬ

こゝろをすみにそめまほしさよ

七十にあまりて後の油煙齋

彌陀の淨土をすみどころとて

南都表具師久しく行さるをう

らみ越しをおもひ出て

表具師をかけて思へど得ゆかぬは

上下の道のりのこはさに

草庵のしつらひ客宿の躰なる

桑門を見て

軽く見て世を捨ばうす柴の戸の

内にはくきのおもしをぞおく

生玉にて曲手まりを見て

鞠はよし若衆ぶりは又わろし

枕は出せごねる事はいや

里村昌築宅へ見廻申ければ折

ふし煤拂なりければ

すゝはきと見請ぬるより口上を

たゝみかさねて申おきぬる

住吉の御社務へ御菓子奉る時

御病氣で年をつもりや住よしの

松のみごりはいく薬菓子

圓成といふ出家の平家を聞て

そうじやその箇々圓成とさく時は

平家も琵琶もたゞ法のこゑ

池西言水南都へ隠居して茶を

たのしむといひこされしに

紹鷗の風をこひ茶の青によし

奈良へ隠居はよい御物すき

いづもの掾淨留利芝居を見て

梓弓ひくではないが此しはる

めつたまごりにあたりこそすれ

儒者のもとへ水菜を籠に入れて

おくるとて

まじはりは醗あまざけよりも水菜ぞと

まゐらせかごのかごごがましや

田中友安我が狂歌をたれゝ

譽ると噂あれば

おもひあふた中なればこそ我歌を

御量負耳ひきみみによいとゆうあん

茶湯の相客に眞言宗の僧禪宗

の僧と板やの何がしとまゐり

あひて

茶や禪や詩や眞言も外ならず

はらはりいたやあい相客

醫者隠居せしに

身をすてゝよしやみかんのかわ衣

六君子りつくんしにも交まじらはぬかも

大坂はなにはいなかにて名所

なしとこゝろなき人のわらひ

ければ

四ッ橋に杜若かづなこそあらずとも

人にみせばやほりの菖蒲を

天王寺下向に岩おこしやに休

て

頼光が岩おこしやに腰をかけ

娘はあれど鬼は見へざる

□□やといへる材木やにて

杣山や筑波の友に庄三りやうざいどの

きゝおよびたる歌の良材

享保十年の四月牡丹花夢菴居

士二百年忌大仙寺に於て井上

昌覺連歌千句興行の時三愛の

むかしを思ひ出て先師信海法
印の言葉の花を折て手向ると
て我も色香なき言草を加へ侍
る

花

咲しより二十日草とやはつかにも
見ざるむかしの人に手向る

伽羅

聞度に珍しければ二百年の

後も初音の伽羅をこそたけ

酒

都とてしばし池田にすみ酒の

にござぬ人をたれもくみしる

岡村道有去御方より生鯛を下

されしとて友とする人一人ふ

たりを振舞の座にて

下さるゝ鯛ぞとしるを相伴も

あゝうまあんまはらをなでけり

なだやといふ人の能書にて其

きこへあれば

繪を以て鳴るや響のなだや殿

なだらかにしてよいふでの海

恵南といふ世捨人へふみの奥

に

尋來て御意を得なんと思へども

老のやなぎのいとまもそなき

踞尾北村氏にて歸るさに

詠捨て名残を惜しき庭の雪

つもる鬱氣を春さんしましよ

享保十巳六月十六日去御方に

て御菓子持參申けるに臺を失

念いたしけるにあなたより臺

を賜りて

幾千世といひのべにけり祝ひ歌

臺をたまはる折を得てさて

御輪番所より對類をかりに參

るに付

たいるいは肴のやうな名のみにて

御用だつ身の鰯のなきかな

山形主水といふ醫師の方より

三毛の猫をもらひけるが

ちらと見け戀の山形柏木の

衛もんだのよりもらひこそすれ

可喜一鉢納豆一器歌をへて被

下し折に返歌と申にはあら

で

納豆にかきそへたまふ歌を見て

お禮に口もたゞきこそすれ

鍼師壽かん宅へ口切の茶の湯

に行けるに花生に白玉と寒菊

を生ければ

白玉のたまのお出と花生て

ていしゆは直にさけの寒きく

奈良菊やより献上のすそとて

みぞれ酒たまはりしに

うへうへに上りし富士のみぞれ酒

すそのみてさへ風味よし原

山本氏みすから鮎を焼給りし

に

數々の御禮を申つくされず

ひとつゝに世話をやきふな

竹田千前矢脊にての歌を見て

釜風呂のふかく案してよむ歌は

病もあらず腰をれもなし

鷹が峯より寒菊を得し人の所

望に付

寒菊に淵が心をうつしかへ

古郷へもちて歸去來

寒菊の花も世になる鷹が峯

こかねの鈴どかけておもはん

寒中見舞に玉子を送られし人

の許へ

飲からに冬のさむさもわすられて

春のころをあら玉子酒

夫婦丸に

大坂町中を夫婦つれにてあ

りく賣藥ありよんでめうど

丸ごいふ

匂ふてふ丁子麝香はいらねども

したゝるさゝる夫婦丸かな

踞尾村北村氏へ文のおくに

音もつは毎度あちより北村や

つくなふ事もなくてはずかし

高麗橋さめや多介より貝の盃

に名をつけ歌を讀ごたのまれ

下戸ならぬこそ拾ふかひある

さかづきを見て

此貝にたぐひあらしくみてしる

酒も満干の玉の盃

上林殿北野の神前にて扇をひ

ろひたまふよしその繪に松梅

のありと聞て

あふぎ見れば松梅匂ふ朝日山

次第に光をぞ増

臥龍竹

音にきく雨とおもひてちと水に

ぬるども竹を見にいかふめい

見せ物にあまたの象も及ざる

手柄をしぬる臥龍竹かな

漫作

長恨歌日本の白が書ならば

その文月のもん日たのまん

繪にかける愛宕まゐりの女を見て

こゝろひかれた袖をひかれた

象真行草の吟

享保十四四月長崎より大象

大坂に來る

眞

おしあふは象無頼なる見物と

なれもしるにや鼻であしらふ

又や見ん交野をとほる大象の

はなの水ちるなつの明ほの

行

珍らしとはなのあたりに立よるは

夏にさくらのふけんどうかな

優曇華とおもふ斗に大象の

はな待えたることし嬉しや

草

齒ぬきならで他の國より象ぶ□□

めんよう／＼鼻でまんぢう

大象の來るは日出度こそしかな

三八二十四孝みるにも

とてもならまひとつ牝象引つれて

江口の花をのらせてしかな

酉の夏三條あたりに逗留して

音羽山音も涼しき河水や

波の鼓のほん／＼と町

つくの尾北村氏^か脇を京にて養

生して本服の賀に

かくばかり死病と見ゆる世の中に

本服したは果報つくの尾

祇園町にて節分をどりを見て

うら盆に節分をどり歡喜して

つとめの鬼も外へありや／＼

題しらす

身躰にかへて樂する人もあり

命にかへて金もつもあり

つるに行道とはかねてなりひらの

なりひらのとてけもふくらしつ

畫象讚

細い目でふりさけ見ればふる里の

象山とやらに出し月かも

此家土産者浪花油煙齊貞柳翁之所
詠也蓋翁之歌也鳩峰玉雲翁之流而
壯麗工緻最合于事情者也故適書其
吟詠則人舉無不賞翫之焉然其詠章
時出一二首而未見簡帙之全備者豈
不遺憾乎余素爲之熟友常交接知其
編之在因強求之更使金雨軒魚板撰
擇之附以古梅園之大墨圖終繡梓以
備好士之高覽云

萬笈堂桑魚誌

于時享保十四巳酉歲蘭月朔

大阪雛屋町

撰者 堺屋四良兵衛

狂歌醉竹集

言ばの海ふかくしてそこひきはま
りなきをばたくなはのちひろなは
うちはへてよくかづきする人のみ
ぞしるべきたとひこゝらのとし月
をつみてあびきしつりするひとも
こゝろざしふかゝらずばちひさき
いろくづをのみとりえて海のさち
ありとやいふべからんいかでちひ
ろのそのあこやたまみづから手
にとりて見ることをえむしかはあ
れどさるうなばらに舟うけて網に
まれ釣にまれてづからとりいとな
みつゝあさりせん人はいとありが
たしやいまやうはたゞとほきうら
わにたゝずみをり具やひろはん
のりそやつまんなどいふめりさる
はおきつかせみにしむとだにしら
ずいそうつなみそでにだにかけざ

ればうましをばまのめでたきさか
ひもいたづらに見てすぎぬるなる
べし此巻や小島橘洲大人のふです
さみなりけりかのうしなん龍のあ
ぎとの玉いさなの魚もたはやすく
どりうべきちからはおはしけるさ
ればあことゝのふるよび聲は大宮
のうちにきこえそのながれをくめ
る人々はいさごの數よりもさはな
りかゝればかきつむたまも光うづ
もれなんことをおもひ濱ちどり跡
をだにむなくせじとて人々たば
かりてこたび木にゑりてみをつく
し朽せぬ世々につたへんことをね
がへ沖つ波しらべのたかゝらんこ
とはそはすみの江の神こそしらせ
おはすらめといふ

六樹園のあるじ

石川雅望識

筑波山の下風吹傳へて戯歌よまし
ものゝかぎり常世物此橘のうまし
名を慕ひて醉竹先生の此道に富給
へるじちに江凌千樹の橘千戸候と
ひこしう才は世にぬけいでゝ照潭
無底橘洲浮ぶといへるたぐひなる
るをしらぬやあるべきうべ橘は菓
の長にして人のこのめる所翁は戯
歌の聖にして世のあふぐ處なれば
なりけりされば薫り高きみはしの
もとよりはじめてこの右に出る樹
もなく色あせぬ兒島の渡りを越て
この翁のさきにたつ人もまたなく
なんおはしけるかゝればかの若葉
を手づから裁初給ひしより苦むす
までに久しうつもれる言の葉かき
つめばてれる長屋の棟にもみちぬ
べきをもとよりみ心の梢高き人に
て霜おかぬ木の實は誰が口にか
うましとせんとして王丞相帳下にた

くはふることを笑ひ栗栖野のかき
とむるわざをうるさがりてたなだ
くみのおほたき祭る蜜柑めいて
なげやりにのみ過し給ふがまれま
れに落ちろぼへるを味ふ人の猶ゆ
かしがりて渴けるものゝ津をひ
くがごとくいかで枝をりに得てし
がなといふめりさるからこの木蔭
ふみて八街にうたへるをしへ子ご
もが此中の樂しみ何の山の何の戯
れにもをとらざるを餘りに帯を
かためて見せじとし給ふはなぞか
へりては愚かなるやうになごおの
かじゝの名聞にくらべて戯歌は物
どもし給はぬ翁のおもむきをば
えしらざりけり春の比よりみ心地
そこなひて筆とることもをさく
し給はねばいと花散里となら
んことををしがり香をだに袖にと
ごめまほしうて昔しの人もせし

こそぞとて家の御集つくるべきこ
とを猶こりずまにそゝのかしきこ
ゆれどおぼへぬものをと墨染より
げにすぎなければ誰もしわびたる
に軒端にちかき山文丸家とかや常
に唐衣の右ひだりの袖とまつはし
給へる人たちの玉にぬき宇受にさ
すべき料にもとて何がしが野人に
わかつにたへずといひけんやうに
珍重してかねてものしおけるをど
もに盒よりとり出つ猶伊勢尾張に
もしる人のたより音信て四五百首
に成ぬるを玉の林の片枝ながらど
てもて出て見せ参らすれば董氏が
まぼろしの傳にとりよせけむより
も今少しふ思儀なるわざかなとい
たづきの枕もたげて試に摘ていま
だ酸しなごうち誦しながらことし
の霜を待つけれぬべき身のたのもし
さにもあらねばとてしかすがにみ

心よはきかたもまじりて後のかた
みとやおぼしゆるしけむとし頃の
書替の和歌俳諧諺歌といへるも
のをさへくはへんどし給ふなりけ
りこはやごとなきおまへより古き
諺どもを題にて和歌参らすべきよ
しおほせごど有けるに参られ給け
ればめづらしうあかずおぼゆると
てまた五十の諺うためしけるにこ
のたびは霧のやごりのおぼつかな
きはごながらかしこきおほせごど
をひかりにとてその夕つかたより
夜なかゝほごによみはてゝ奉れ給
へりとかかゝることはいみじき歌
仙といふともいごかたかべいわざ
なるをげに此かたの達者にはおほ
しけりかれこれ四種をふたまきこ
してすなはち醉竹集と名づく此集
や洞庭の春色うまく醸しつれば實
さへ花さへその俳諧さへましてし

て常世邊にいきし使の期におくれ
て歸り來けむ悔しさぞまづ思ひや
らるゝさはれうけがひつることを
だいにやはとて筆とるにも八竿入
蔓のくりことのみ荷ひ出られてつ
つまやかにも書とられぬやみぼけ
は何のやくなしや

狂歌堂 四方眞顔しるす

醉竹集目錄

狂歌

四季 二百三十一首

戀 四十六首

雜 百三十二首

附錄

諺和歌 百首

誹諧躰擬歌 三十五首

書讀和歌 十五首

もざまにさしひろされる戯歌の小
枝をさへに常葉の調べよくとゝの
ひて世の苦桃うくるしれ人には中
中かたぶかれもしつべくなんかう
めでたき集の出来ることを返く
よろこび申けるついでさおもは
これが序かきてよごあるに塞き國
にうつしうるけん物をこなひに
こそとわびぬればいなもごめにつ
きては紀の國ならぬも味諫軒と名
づけしこちけいの叟は有けるぞか
しとざれごとし給ひしも時鳥のさ
つきまつ頃にてや侍りけん例のま
たせそと掟けれごおのれもあやめ
の枕露おもきほごにて心にはかけ
ながらいと長き根の引しらふう
ちに井にうつせるみ藥のしるしも
なく此初夜の星散て非時の香ぐは
しき名のみをとめ給ひぬとさく
にあさましとはおほかたのことに

狂歌醉竹集上

春の部

試筆

春きぬとけさはよめたり窓の梅
はじめてひらく雪の封

名所立春

春やまづたつ武藏野の八百里
千里の駒が原もかすみて

元日

やま姫の山つとめきて袂より
いだすは千代の初日なりけり

百人一首のふるきもてあらた

まのはるのこどくさとして

けふ春になりひらあそん千早振

神代のまねをしめかざりして

先ひらく伊勢の太夫が初暦

けふ九重も花の吾妻も

春従東來

朝日かげさすがに春のあづまぶり

うたふてきたり鶯の聲

三十九の春

年とれば三十九じやもの花の春

花はやらずとみは持ぬべし

萬載

萬載の柱立あり春といふ

花の宿りの手斧はじめに

子日

子日にもあどへはひかぬ男山

小松ながらも力業とて

幾千代か霞ひくらんそのむかし

子日にもれし高砂の松

若菜

野邊ごに若菜の上下うちむれて

摘こそ春の青表紙なれ

つみはやすわかなは雪の白拍子

名にふる島のせんざいのもの

霞

花もゑみ山もわらひて人のきを

そゝな霞ぞ空に浮たつ

湖上霞

いかばかりたちてゆたけき春霞

袖につゝめる近江八景

海邊霞

朝日さすうら／＼船の碇綱

えいや／＼とひく霞かな

鶯

鶯の一拳ある歌よりや

深谷のこほりうちくたくらん

春といへば岩間の氷かごとれて

いかにもまろき鶯の聲

谷ふかき雪もけぬべし

暮に數あるうぐひすの聲

青柳の長點かけし鶯の

歌は優美におもしろく候

竹裏鶯

おもしろや時の竹にねをいれて

けふ鶯のすごもりに鳴

春興

鶯の歌に力はいれねども

このごろうごく花のくちびる

春氷

水鳥の夜床もよほごひろまりぬ

たゝみかさねし氷どけては

梅

風にのりて天津空さぶ梅が香は

仙人臭き花にぞ有ける

朝比奈がくさすりならで梅が香を

やらじとごめた袖の春風

中あしき友も問こよ宿の梅

花の折えて指切をせん

儒官何某の許にて梅を見て

花もまた時なるかなやこの梅は

三たび嗅でもたちうちかりけり

難波の梅

難波づの一花ひらけて天が下

花の位もさだまりにけり

和泉式部のきばの梅

もらさんも耻かしからぬ薫りかな

和泉式部がたしなみの梅

梅屋敷にて

八陣はしらねど花の臥龍梅

みどれてかへる方角はなし

臥龍梅

松風の琴の音おろす樓に

臥たる龍の梅かほるなり

柳

あをやぎも小町が歌か春風に

つよからずして腰折はなし

春風に池の蛙の歌袋

さそひてほごく春柳の糸

かたよりに西へくさみだれ髪

くせのついたる風の青柳

青柳の糸がらくりに花鳥の

春の色音や引出すらん

垂柳誰家

なつさびて問ばや主はたれかれの

門にざれたるゑのころ柳

初午

初午の神酒にや花の色に出て

梅のき下戸も香に匂ふなり

簾色は源平桃の花軍

みよやいなりの杉を小だてに

桃

いかばかり花に酔てか牛飼の

ねぶり落たるはるの桃山

若草

生酔はねよげにみゆる若草に

夢を結ばんことをしぞ思ふ

早蕨

うみ遠き山にも渦を巻たるは

いまが出汐のわらびなりけり

涅槃會の時をかんじて鶯の山

いづる蕨も釋迦頭なり

春月

かすみてはときめく花の玉にさへ

笠をぬがざる春夜月

春雨

まどゐしてあけなば庭の春雨に

咲たつ花の品定せん

歸雁

清盛のむかしに似たり故郷の

常盤をしたふ春の雁かね

歸雁離々

返事やらかすむ夕に難波づの

はなち書なる雁の玉章

歸雁成字

都をばりゝに行雁の

かしくとみゆる夕暮の空

春駒

冬ごもる安達が原もゆきげして

あらはれ出し鬼鹿毛の駒

山邊雉子

雲にいるひばりの下にたゝんこと

かた山のべのきゝす鳴聲

垣下蛙

天までもきこえあげんと鳴蛙

ならぶや歌をかきのもとにて

春深花漸開

待はごに涅槃もすぎぬいまよりの

春や花みる果報ならまし

花

見たところ瓜をふたつにさくら花

よう庭の雪みねの白雲

遠乗もいでし飛間の花ざかり

つなぐひばり毛なぐるかはらげ

麓より雲のあしゝろかけてけり

たかねへ花の咲のぼる比

まかり出てみき進めよや烏帽子魚

いまぞ時得し花の大君

山姫の寐おき姿か花の香を

しめしあしたの雲の腰帶

さくら狩くれなば花の下臥と

たかをすへたる春の山ぶみ

花満山

雪折はないかと松をみねごえや

あまりのことに花を忘れて

遠山花開

一掴はごは霞のたえまより

にはへる花や鷺の尾の山

夕花

うちむかふ花なき花の夕榮に

弓引ものは月ばかりなり

西行庵にて櫻を

文覺がこぶしの花は色もなし

西行櫻ゑみをふくめば

花有遅速

さくら花の祇園ばやしに囃しても

拍子にのらぬ北山櫻

櫻狩

かりゆくやさく花の山人の山

花みる人を花のしをりに

花盗人

歌でせめ酒でしばるも面白や

花盗人をいげごりにして

山花

みかみ山今もむかでのあとひきて

春はまどへる花の白雲

里花

鯨さる浦見渡せばみくまのゝ

花ににぎはふ七里の春

鬼子母神へ奉納の櫻を

一花も外へちらさでをく露の

そだて上たる數の兒櫻

落花

山風のつらくあたればあたる程

花の落めもよそにみられず

寄花出替

散花のなごりおしうの暇とりて

風の宿やへねにかへるらし

遅日

暮かぬるもの花の枝春の日こ

わぶるひる寢の枕草紙に

苗代堇

苗代の水かけ論はすみれぐさ

はなに蛙も畔をゆづりて

躑躅

たつたひめ秋の錦やかしまうら

波のうねをる山のつゝじは

橋邊蛙

水の月のかけすみごころ求とて

なりひら橋に蛙鳴なり

歎冬

山吹はあふぎの芝をよそにみて

みのなる果のあはれげもなし

菊水のはたのながれも山吹の

きにかへしたる春の玉川

藤

かりそめにみぎはの松の店かりて

池のおもやへかゝる藤波

牡丹

楊貴妃のゆあがりならし白牡丹

うまくふどりて露を含は

若鮎

一寸の鮎にも五分の玉川や

ちりうく花の波にきそふは

海棠

行春をしばしごめてねむらせよ

はたごやもなき海棠の花

三月盡

花もみつ松魚もくひつ時鳥

なくばかりなる春の別路

夏部

首夏藤

うづたかく夏の頭にさがれるは

嬰珞ならじ花の藤がえ

更衣

布子から賤はひとへのころもせみ

夏きにけりと飛移りして

餘花

なごりなく春はいぬきか雀の子

はなれてさける北山櫻

ほどゝぎす枕の山にうながせご

ねに歸らぬおそさくら花

山新樹

鱗のすむてふ山のやま風に

うごく鱗は若葉なりけり

たつた山花の錦をはぎとりて

夏はみどりの林とぞなる

卯花

やみの夜になかぬ鳥や聲たてん

月の生れぬさきの卯の花

みそかにも月はいでけり卯の花の

垣にうき世のやみをへだてゝ

時鳥のうゝ御宿まいらせう

わびしけれども卯の花の雪

葵

梅檀もやはか二葉のあふひぐさ

加茂の祭に其名かくはし

人傳郭公

けさの初音まだきかずやの返答は

何といはくら山ほとゝぎす

郭公

郭公須磨の海士ではなけれども

なれを松風むらさめの空

ほとゝぎすなれも卯月のウの香か

きゝはづさじと人のきそふは

どちらとも目定めよほとゝぎす

雨と月との中空の聲

眞乳山時鳥

眞乳山まてば甘露のほとゝぎす

あまけづく日の夕こえて鳴

山時鳥

さが親の法花をさらふほとゝぎす

音も唯一の神山になく

古戦場郭公

敦盛のむかしのあとに聲かけて

鳴やうしろの山時鳥

名所時鳥

鶯のすだのわたりのほとゝぎす

鳴てゆくゑやさがちゝぶ山

初松魚

はつ松魚これ十目のみどころを

十手のさしみにるものはなし

初がつをこれもあづまの花なれや

江戸むらさきをつくり身にして

おとこ氣の東そだちの初松魚

一本づかいはだか百貫

山家初鰯

山ざとはいま五月雨のふるがつを

時なるかなと雉子焼にして

時鳥松魚の優劣を人の問侍り

しに

いづれまけいづれかつをと時鳥

ともににはつねのたわうきこゆる

早苗

まきてしは秋の種とてさをとめの

笠のうねゝ植る小町田

端午

白妙になびくのぼりの時つ風

世界をみれば源氏雲なり

廬橘

枝かはす花たちばなに匂ふめり

むかし嘶の桃太郎まで

筍

夜のはごに土をうがてる竹の子は

むぐらの宿のあるじまうけか

五月雨

さしもぐさしも幾日ぞ五月雨の

久しぶりにてみる山もなし

さみだれて月はみえねど饑のいる

袂に星のふたつ三つ四つ

水鶏

魚もまたをぎりいづへし夏川の

月のこほりをたゞく水鶏に

夏月

涼しさはあたらしだゝみ青すだれ

つま子のるすに獨みる月

百合

心にも笠きてくらすさみだれに

露も上みぬひめゆりの花

瞿麥

こゝろせよそだちしだいの撫子に

雨と風とのしつけかたをば

夏草

やせ牛も夏はうづみて大原の

くさにもつのゝありて行みゆ

草刈の鎌きりもありやゝ秋に

むかふ夏野の花の小車

あひらしの花の撫子はゝこぐさ

まゝしきはらに生交れども

鶉川

大井河魚のためにもあらし山

うぶねのかかり花とみだれて

照射

よる鹿は百年目をやあはすらん

いのちごもしのみねのほぐしに

螢

うきふねの波にこがれて飛螢

ひかりを花の山吹の瀬に

浦螢

すまのうらはみるめ涼しや夏虫の

尻のあかしも手に取ばかり

蚊遣火

木屑たいて荒たる宿のいふせきは

蚊と言鬼のすめばなりけり

蛇田てふ名にたつむらも相應の

雲おこすなり賤がかかり火

蓮

ほでけでもよし君子でも蓮の花

いざ舟よせていけ取にせん

夕立

鬼やらふ豆のごとくにすゞしさを

龍のまきたる夕立の雨

はれてのち蚊の聲もなき涼しさや

蛇の出し山の夕立の空

古方家にかゝりたまふか天のはら

きみよくくだる夕だちの雨

夏山

箱根山あしの下にて鳴かみの

上に落つく關のたび人

松上蟬

童の伯良もありゆだんすな

松にかけたるせみの羽衣

但有泉聲洗我心

あらふべき心のちりもなかりけり

あくまですめる眞清水の音

納涼

どん／＼とゆふだつ波の涼しさは
沖より秋やをし送り船

あてられて死ぬ斗りなる暑き日に
活をいれたる夏の夕風

はら／＼と四ツ手の網に露ちりて
月もたまらぬ風の涼しさ

川納涼

足駄には足す下駄にはたぶ／＼と

淺澤水のこえて涼しき

芥川のふべす／＼しくなりひらや

女ならねござなに追風

市中納涼

いちくらに入てあつさを忘れけり

なまぐさけれと夕河岸の風

竹夫人

肉屏は皆おしやりて竹夫人

風もへたてぬ中ぞ涼しき

川夏萩

そめわけてす／＼し御萩の衣川

なつと秋をかけた身がはりに

はらふより螢か／＼やくかみ迄も
あくがれ出し玉川の水

秋部

立秋

暑氣はらひまだ三伏のうちながら

風こゝろよき秋はきにけり

風鈴告秋

風りんの音はりんきの告口か

我のきの妻に秋の通ふを

關秋風

みどり子の裾吹まくるす／＼しさや

波もあら井の關の秋風

殘暑

秋風の吹きましても帷子の

べに花ぞめかのこる暑は

七夕

二道はかけぬちぎりのいかなれば

紅葉の橋にかさ／＼ぎの橋

おもかげのかはらでしかも天の川

あふせに年のよる波はなし
一滴も水はもらさぬ天の川

いかにちぎりのそこをかけたて

七夕後期

別れこしけさしも星のふたつ文字

牛の角文字書かはすらめ

七夕筆

織姫にかさばやついのかむる筆

こよひ御げんの文使にて

七夕鳥

蝙蝠と人はいふとも曉の

鳥なきさこやほし合の空

萩

小夜衣重ぬと鹿の角たてん

臥猪の床の萩が花妻

葛西萩

まいらせよ鯉は葛西の太郎冠者

萩大名の花のむしろに

古寺女郎花

罪ふかき名にはたてれど女郎花

女人堂をも踏こえて咲

薄

花すゝきはにこそいづれ秋風の

手孕村の昔がたりも

野草花

大江山いくのゝ秋は草かりの

童子に交る鬼のしこ草

槿

大氣なるもの朝貌の花衣

さいてはすつる其日くくに

露

かゝる露玉とあざむく君子あれば

又質に置連歌師もあり

虫

遍照が落馬のあごの轡虫

口もさが野に名立がましや

寢覺鳴

後の世をたのむの雁は音もせで

寢ざめにきけば鳴のかんきむ

秋夕

菜もなき膳にあはれはしられけり

鳴焼茄子の秋の夕暮

初雁

秋の日をたゝみながらの櫛の夜着

こよひはきたる初かりの聲

雁

山こえてよわたる雁は天の戸を

かぎになりてやあけぼのゝ空

初鮭

ふる松魚いゝ初鮭の一尺に

七尺さつてふまんねもなし

葡萄

うまさ色はちぎらまほしや西施乳

吳王ならねど我もひとふさ

月

雲の足にぬき手をきつて天津風

さゝげ出たる明月の珠

雲の波さつぱりたゝぬ夜もがなど

月にひるこの神やいのらん

涼の葉にみがきあげしか秋の月

こよひかつらの花あふらして

すみだ川月のひかりを花川戸

あれ都鳥あれ都鳥

遠浦月

二千里の外が濱まで照月を

つがる合浦の珠とこそみれ

十五夜月

けふばかり妹もどがむな新月の

色に千里の外ごゝろあり

天の川橋は引てもすみわたる

影や名におふ望月の駒

姨捨山月

世々かけてたれが見すてん姨捨や

おばにゆかりの明月のかけ

人家玩月

てる月を美濃とあふみの境にも

こよひは起てものがたるらし

武家看月

雲の足さはらば切てきりひらけ

我領分の月の下風

十六夜月

宵の間はすこしの闇の黒木賣

やせめのみゆる十六夜月

十三夜月

新造の紅葉に對の禿菊

つれて名どりの月の全盛

吉原十三夜

乗つけてみよやつみの日本晴

名にあふ月の十三夜かご

擣衣

子を抱ていもはきぬたのかた手打

ねん／＼ころりからりころ／＼

旅宿搗衣

いくたびか旅の寢覺をしでうつや

からり衣の里の夜寒に

近搗衣

から臼の音うちやめば小夜砧

耳についたる夕貌の宿

遠搗衣

覺束なたが里の子のうつならん

きぬたも風のかざわかしもの

鯨津の海晏寺にて擣衣を

小夜ふかく夢はさめづの右ひだり

名にし紅葉の衣をや打

菊

きくの花酒のゆかりにこれもまた

憂をはらふ帚木づくりか

貧家菊

わびたれど色にいでその時をえて

咲や常世が庭のやせ菊

谷菊

耳あらふながれを花の枕にて

寝ぐ／＼ろいかにたにの白菊

菊角力

菊角力勸進元のうしろだて

な／＼も／＼とせの年寄もあり

茸狩

いその名をかりて入ばや鹽の山

松茸もまたさし出物なり

薄紅葉

人をもていはでの山の薄もみち

天に口なし色もまたよし

紅葉

見わたせば皆もみちする山ひめに

あかの他人は松ばかりなり

松の葉の針に時雨の糸つけて

ぬふやもみちの衣手の杜

たちぬはぬもみち衣をむらしぐれ

たがはれぎどかさらす山姫

かた枝さすもみちも窓の光かや

勸學院の雀いろとき

峯紅葉

わけいれば山の奥よりいつきて

花とは逆のみねのもみちは

海晏寺の紅葉見にまかりしに

まだしきほごにて山の中夢に

も人にあはねばいとさうざう

しくて

ひとり見て相手はしさの紅葉狩

鬼ともくまん林間の酒

高雄紅葉

荒くれし法師の山に出来たるは

蔭がたかをの紅葉なりけり

九月盡

なぐり酒め覺しぐさにねふる目も

あけ六ツまではまだ秋の空

冬部

初冬時雨

冬もけさ車がゝりかはつ時雨

のきばの山を山のぐりして

谷初冬

秋くれていまや小春の櫻谷

しぐれの雲も行かへりばな

山時雨

天狗風さそふしぐれの雨降山

このまにすぎき月をのこして

時雨

びつしよりと時雨にぬれて返り花

花の名にふる山吹の里

夕日かけ赤ばね橋はさしながら

かけて時雨やしばくの浦

大井川こす河越のかたしぐれ

ぬるゝかたせは雨のあがり塙

小夜しぐれふるわんぼうこ成に梟

夢はやぶれてちぎれゝに

淺艸時雨

こなたにははるゝ小春の花川戸

いまこまかたのかた時雨して

落葉

榎まではうしとなりぬ僧正の

門にするごき風のかみそり

きれゝの錦ながるゝよしの川

木のは衣やごゝの水

橋落葉

風にちる木の葉にふしん立てみる

ながらの橋の鉋屑かご

野霜

見し秋ののべの錦をはぎとるは

名にふる霜の袴だれかも

庭霜

霜ばしら冬のしるしとみぎりには

つもる紅葉のいろはつけあり

寒艸

今もなほさむさにまけぬ撫子の

けさ愛らしや霜の袴着

冬月

かみそりのはわたる月の鋭さや

遠山松の霜にきたへて

おく霜のきはみがけご冬の月

この葉は落て翁さびたり

はれにけり氣色ばかりの小夜時雨

はらゝ思ふ月にかゝらで

鷹狩

狩人も野守のかゝみこほる日は

影みぬ鷹に時やうつさん

氷初結

けさはまたはるも障子のかみや川

そこも見えすく水の薄氷

池水干氷

われ／＼に池のこゝろの中われて
はる氷ありうつ波もあり

千鳥

打てくる波のうけ太刀みつしほの
さしごゝろにて飛千鳥かな
濱ちごりあさゆふ波のしつけから
はつと立居の見事なりけり

浦千鳥

隨縁のなみ風さえて室のうらに

冬は千鳥のたゝぬ日もなし

會式紅葉

一本に時を會式の庭もみぢ
雨と月とは不受不施にせよ

水鳥

もみち葉の錦の床に川なみの
うちかけもよき鴛鴦の毛衣
はかなしやさらでも旨きあぢ鴨の
せりをうきねの下草にして

髪置

つくばねのつまむばかりに置初て

やがてけづらん黒髪の山

帯解

下ひもはたれにかゆるす小娘の
先うち神に帯解をして

霰

はら／＼どうつ瓦やはさもなくて
きよき霰の玉ぞくだくる

關霰

荒はてし不破の關守もる人も

もるにあられのたまゝればこそ

雪

ふみこんであとのつかぬぞ面白き
こたつながらの雪のあけぼの

日蓮とふりかはりけり降まゝに

雪の達磨もわたばうしきて

馬場雪

鞭打てつながぬこまにちる花は
櫻の馬場の雪の夕暮

はや冬枯の宿のいさわびしき
に質に置べきものかしてよど

いひおこせし人になきよしい
ふとて

我だにも秋はてし宿の冬がれば
霜の置べきしち草もなし

雪の日友人の許よりふぐ汁た
べにこよごあれば

いのちこそ鵝毛に似たれ何のその
いざ鰯喰にゆきの振舞

歳暮

かけごりの間はぬもつらし武藏鎧
かゝらぬさまの年の暮をば

武家歳暮

煤取て弓は袋におさめたり

せめくる老を何でふせがん

百人一首によそへて歳暮のこ

ころを

この暮はいつの歳よりうかりける
古借錢の山おろしゝて

戀部

戀

わが戀は旅のゆくての長繩手
只はてもなくまつばかりなり

寄山初戀

くるしともいはで心におさめ太刀
これやわけの戀の初山

忍戀

ひきずりとよばるゝ程のきの重さ
しのぶの衣たけにあまりて

盗人にみどがめられてはづかしや
しのびてはこぶ戀の重荷を

見戀

思ふかひなし共いはじつらけれど
たまに鮑も目のくすりなり

待戀

寢もやらでいだく待夜の首の骨
かくやちぎりも引ちがへけん
きままつとつくり病に寢し床へ
脈のきれたることわりぞうき

不待戀

我せこかくべきのいつはりも

さうはたべまい蜘蛛のふるまひ

逢戀

今ぞしるそばには玉子身は味に

あふがいのちのつなぎなりとは

夢ならばさめなどかはす手枕に

猿よりうしの時つくる聲

いらひこし床の塵もてまじなはん

枕にかした腕のしびりを

うち拂ふ枕のちりの目にいりて

あきもあかれぬ中ぞわりなき

期變約戀

今さらに雲の下帶引しめて

月のさはりの空ごとぞうき

等思兩人戀

わりなしや思ふ二人はすま明石

並ぶ夜床をはひわたるみは

逢無實戀

思ひきやおもひくし戀のふち

あひそめ川のせをたかんとは

老人戀

うき人におもひつかれぬ鳩の杖

年よりこひどいつかよばれん

厭はれて悔しさにかむ齒きしりを

老をかむとや人のみるらん

佛師戀

人目にはほさけつくれぞ魂は

けさいれてこじきぬの袖

茶摘戀

あひがたみ茶にも浮身を摘て知れ

戀しがらきのからき思ひは

小倉百首の初五文字をさぐり

て戀のこゝろを、花のいろは

花の色はそれといはねど女郎花

おもひにはやるあはれどは見よ

おなじく、わが庵は

我庵はなご住うきと問てまし

うかれ出たる戀のやつこに

後朝戀

ぬけがらとなりし別れに我たまの

あらばひろはん道芝の露

恨戀

しかりとて伊賀刀目にも唧れず

眉毛よまれし中の恨は

出替戀

つれなしやなごりをかりの空泣に

あと白山と歸る腰元

後家戀

こご人を思ふにつくるつみ髪や

なきつま櫛もさすが忘れて

歌比丘尼

歌比丘尼くごけばさすか落髪の

なごりゆかしきびんざゝらかな

顯後悔戀

雷におさへし臍をかむばかり

うき名はたつの雲にのぼりて

今更にゆめになれともかこたれず

もと寢言よりもれし浮名は

法師戀

なげきつゝひとり思ひにやせ法師

非時にあはんの契たがふな

晝戀

かくばかりうき身は戀の手習子

せめてなみだの晝休せよ

寄狂歌戀

二世迄たのふだ人にこのごろは

あるかやいとも問れぬぞうき

寄花火戀

物思へば何の花火も我身より

ぼんど出たる玉やとぞ見る

寄山伏戀

せめかけてごう／＼祈り伏にけり

いざ下紐をときんすゝかけ

寄蘿蔔戀

うきたびに袖しぼり汁からうして

しのぶ心をねりま大根

寄赤本戀

四天王ならぬは戀の山いりに

しのぶ心の鬼はおそろし

寄螢戀

あくがるゝ玉章よとてやる螢

よめかしもじのかごごばかりも

寄餓鬼戀

身はやせて骨と變りし契りより

もゆる思ひに物も喰れず

寄修羅戀

疑ひをはらふつるぎそうけとめよ

我とざる指我と切髪

寄天人戀

羽衣のうらみかけてもなびくご

かなふまじとてたちのくぞうき

寄米餅戀

とにかくにむすぶ心のこほりもち

くづし出てやかきくごかまし

寄雷戀

さゝめ言はやきかぬ氣になる神か

耳をふさぎつ臍をかくしつ

寄書戀

書にかける遠き人にやいくとせか

目鼻もつかぬ戀もするかな

寄糸戀

むつごもごかくひねりて柄糸の

つい角菱のたつ中ぞうき

寄机戀

毛氈をかけてぞちぎる唐机

たがひの足も四にならべて

寄風戀

よし今はかせの神にやいのらまし

おなじ枕に二人ねぬべく

寄八景戀

問ひきてもあはで矢走の歸る帆や

人のこゝろのひるおろしより

狂歌醉竹集下

雜部

富士

降つゝの雪におかれておほかたの

不二みる歌は皆ひしげたり

淺間

淺間山ふき出す石の輕井澤

かせはけむりを追分にして

山家

はひかゝむ松はあれども世中の

人にはこしををらぬ山ざと

山家松

門にたつ松も根生の山ざとに

すめるこゝろやいつも正月

山家連歌

山寺の夕の花の定座には

ちらんなぐりの恨こそあれ

風

いなさから吹返したる富士おろし
すばしり口やあけぼのゝそら
松風

鳳凰の聲に似かよふ松風も

夕ざりにすむ物にぞありける

海眺望

追風にみなごいでゝは親船も

この葉なりけりやがてちりゝ

夕眺望

夕汐のさしそふなみにてらゝと

白魚船の簪いくちよば

海村煙幽

ほす網のめにはかゝれど夕けむり

立るも海士がほそきいとなみ

辛崎雨

辛崎の雨にぬれこしたもごよと

はれに見せばや故郷のまつ

名所瀧

名にひやく日光責にせめつけて

なほあまりあるそうめんの瀧

松

さびしさも一ふしありて面白や

松の太夫がゆふぐれの聲

竹

虎になれ賢人になれ吳竹の

よにおもしろき風の友すれ

鶴

不斷着のまゝの川邊にいく千代か

たちてはぢぎる鶴の毛衣

あしべまで皺のよる波かたよりに

たゝみよせたるつるの毛衣

龜

萬年の龜のこうなり名とげぬと

長き尾やひく蓬萊の山

蓬萊の鳥わたりせば龜の齡

ちとせくだされ御供申さん

鳥

ぬくゝと只落し餌に落ついて

信天翁の身こそやすけれ

鐘

湯どもなるものとてきけば煩惱の

よぐれをあらふ曉のかね

秤

かるくとも業のはかりめ恐るべし

浮世三分五りん五たいは

甘露

天に口なし人をもてなめしむる

めぐみの露は雨にまされり

酒

とかく世はよろこび鳥酒のんで

夜が明たかあ日がくれたかあ

さかづきに向へば變るからくりや

いとを引たりあごを引たり

禁酒しはべりしとき人のやぶ

れとせちに責しに

黒がねの門よりかたきわが禁酒

ならば手がらにやぶれ朝比奈

梅の花貝

海中に驚さをへむらすいめ

ねをそへてみん梅の花貝

黄金不多交不深

懷の秋ぞわびしき問れしも

桐の一葉のちりのこるうち

隠士出山

鳳凰も孔雀も時にあふむまで

いでゝすみこしあごは山がら

述懷

いたづらにざれ歌よみと成にけり

身にはおかしきふしもなくして

老後述懷

口おしや身は老といふ曲者に

頭をさげつ腰をかゝめつ

寄屏風述懷

世にたつはくるしかりけり腰屏風

まがりなりには折かゝめども

寄筆述懷

飢鷹の手前もはぢすたけの子の

ほをつむ年の老ぞくやしき

懷舊

思出もなきうき身にも戀しきは

昔やはゝの乳房なるらん

寄笠懷舊

みな月の照日のうさもたらちねを
笠にきたりし昔戀しき

寄杖懷舊

ありし世の諫めの杖をさながらに
今は親ともたのむ老が身

旅宿

居風呂にかゝりゆもなき宿とりて

むさやくさつの里の夕暮

旅行友

いせ人のひがごともまた面白し

うそさびしかるたびのつれには

旅泊夢

ごまりぶねゆられてねたる浦波に

ゆりおこさるゝ曉のゆめ

旅泊嵐

船出せん日和あらしにどんくご

なる尾の浦の波枕して

羈旅

濱底久しくあはぬ故郷の

いもや兒島もわれを待らむ

春羈旅

聞なれぬ鳥わけなれぬ深山路に

咲花ばかり見知ごしなり

夏羈旅

なつごろもきそのかけはし命がけ

わたりて汗を福島の間

秋羈旅

玉章もたえし都の妻こひし

秋にいり湯の雁風呂にして

冬羈旅

越佗ぬたびに日をつむ雪のたけ

よこをれふせる小夜中山

何某侯の難波の御守におもむ

きたまふを

芦の葉も君がかたはになびくめり

大名風のわたる難波江

南畝子が難波の役におもむく

をほぎて

世の人のいかにくご見つめ錐

袋出たる難波江のあし

狂歌堂が駿河におもむく馬の

はなむけすこて

きみいなば富士の煙をためしにて

ゆくゑご歌の風になびけよ

尾陽いぬ山松丸あづまにくだ

りて予が家を主とし江都の名

所をたづね又諸名流に應接し

故郷におもむくごてつごめて

たびの宿りよりいひこせしか

へし

老の涙せけばなごりのおしごなり

いごま乞さへいはでやみにき

富士の川澄より木綿に歌そへ

て越ければ

進物のものめにそへし歌までも

節たゝすまたたけありてよし

圖南女よりちゃみをもらひて

たま物のちゃみはここに薄くして

厚き心ぞみえすきにける

越後松山かゝみより縮をもら

ひて

逢みては地をも縮にしてほしや

越とは遠き君がかたびら

芝三田へまかりけるときつれ

にはぐれければ

網坂のつれにはぐれていばらきに

腕をさられし心地こそすれ

大黒のかたに

只善をたからとつまば福德は

あんのうち手の小槌成べし

布袋

布ふくろ中は本來空にして

子煩惱こそ即菩提なれ

布袋川わたりのかたに

山のみかはていの影をうつしては

水さへ笑ふ春の川つら

福祿壽のかたに

つくくゝと見るほど長きあたま哉

いく千代かけてかくはのびけん

壽老人笛を吹かたに

手弱女の足駄ならねど壽老人

ふくによりくる鹿笛の聲

達磨

西來意この東來の春いかん

柳はみどり花はくれなる

傾城を達磨にかけるかたに

芦のはのながれの身にも床の海の

第一義をばむざともらさず

寒山拾得

夢の世ささとりてみれば寒山子

へんてつもなくじとくもなし

蜆子

ゑびとつて食ふ風味はそもいかん

あしの花さく水の流洲

久米の僊人

仙人もこのむどころはひとつにて

落ればおなじ谷川のみづ

圓位上人

行水に移る一樹のかげぼうし

これも他生の圓位上人

狸々

蘆の葉のみだれにけりなくむ酒に

狸々もよくものいはぬ迄

六歌仙のかたに

誰かたになびくや小野の女郎花

ならぶかたへはみな男山

千なり瓢箪のかたに

そだてがらつい我儘になりひさご

性はせんなりとは申せども

美人のかたに

魂をうばひ取たる曲者の

すがたは柳貌はいごう

寒垢離のかたに

紅蓮大ぐれんのこりをさる身にも

また春といふ極樂は有

蓮に鷺のかたに

泥鰌ふむ底のこゝろは白さぎの

うはべは花の君子つきあひ

鴛鴦のかたに

行末をいはほのこけさちぎるらん

ついてはなれぬおしのつがひは

葡萄にりすのかた

文道はよし知らずどもぶごふには

りすも勝利を枝うつりして

月に狸のかた

腹鼓うてるや月のかつらむき

狸もふりし秋の野の宮

鯉の書に

龍となるいきほひみえて出世鯉

をぞれば空の波をおこせり

六藏のかたに

萬年のたからを甲におさめしは

うまれながらのかくれみのがめ

すはしりのかたに

うきせをも臍に收めてしつかりと

出世をはらむ腹ぶどの魚

師走餅搗かたに

やき玉子四角もあれば行としの

みそかにもちのつきやあたらし

花子のかた

ものいはぬ坐禪衾に角ありと

さくらぬうちが花子なりけり

鬼木に鐘馗のかた

一本木名にししやうきの劔菱に

やはむかはん鬼ころし酒

妓女對鏡

海棠の雨かかみになうかれ女の

はらゝがみのかゝるなみだは

嵯峨のゝ萩すきいれたるあふ

ぎに

これもまた女なりけり萩の花

ぼうすおとしの名にはたゝねど

善魂惡たまてふものゝまはり

燈籠に

善もまた惡のうらばんうらおもて

いづれむくひは廻り燈籠

三平二満のかた

雨ほうの山たかくしてたにのほな

さそふ嵐のきづかひはなし

鹽ふきのかたに

何事をきいても空を吹風の

音もなくまた花の香もなし

醜女のかたに

無鹽が厚顔齊王いつくしみ孟

光が素貌伯鸞悦ぶ眉目にはよ

らじ人は心をど古歌にもはべ

るをや

み目よりも心によるの契あれな

情は人にかつらぎの神

蘆に雁のかた

玉章はいづれ難波のあしでかき

よめ眞砂に落るかりかね

大原女のかたに

かへるさは月をいたゞく大原女の

重荷をおろす花の下かけ

嵐山の花をすきいれしあふぎ

に

嵐山さすがあらしのなさけにて

ごめし春の餘波おし花

狐つりのかたに

尾をみする人にや舌をはく藏主

色と酒との焼鼠には

東方朔桃盗むかたに

西王母桃のゆくゑをうらごは

これ東方にありとこそいはめ

三平二満の机によりて外面を

ながめ出せるかたに

頬二つはなごならびのおかめ女郎

待人ありや閨のつれ

業平醜女負ふかたに

貌みてはさぞあきた川かつらぎの

神代のことも思ひいづらめ

最明寺夜宴のかたに

紙燭さしてほりもごめしは上代の

風味たうごきみそかざかもり

子持て親の恩知るといふこと

を

しぶかりしおやの意見も枝柿の

こを持てこそうまみをばしれ

肖像賛

青雲の志は花鳥にうばれ

白雲の情は風月にいざなは

れてあけてはくみくれては

のみ只酔郷に身をはふらし

壺中の天地を睥睨に見てつ

い白髮の年とはなりぬ

いたづらに只の親子となりひさご

身の能とては酒のいれもの

頭巾氣の書生にしめす

天地の庭籠のうちに生たちて

外みぬ鳥ぞあはれなりける

小石川十景のうち、牛込行人

おのがじ、行かふ橋や船河原

馬は馬づれうしは牛込

八十賀

梓弓やその齡を引はりて

はなしのたねに千代もつかへよ

八十八賀

みちとせの春に味へ八十あまり

やがて王母が桃もちぎりと

奥野氏七十賀

春ごまにのりこえてゆけちとせ山

これよりおくの花も見るべく

伊豫の國の人の七十の年満に

きこしめせ松山うごんなが

なをもちとせをもちかへにして

菅江の落髮せしをはきて

うら山しきみはかしらの雪解して

心の花のときを得ぬらん

木あみか黒田川にて落髮しは

べりし時

中々に梅若やぎてみゆるなり

きみは柳のかみをおろして

人の子の出世をはきて

いなだ迄なり上りたるわかな子の

出世は見えた御奉公鯉

玉涌六十賀

ひもかけて耳に従ふ目がねより

めざす所の千代はへぬべし

こゝちをこなひて死出の山の
麓見てかへりければ

ぬらくらと世をへん死出の山の芋

むなぎとなりて活かへる身は

何某の許にて玉川のそばたふ
べて

ことにまた君が手作りさら／＼と
たべてきづなき玉川のそば

尾州しのゝ玉涌かおもざし予

に似たりと人ごとにいひもの
しはべれば玉涌の許へよみて
おくる

君とわれいかに似たるか瓜を二つ

われても末にあはんどぞおもふ
とよみしも得あはでなき人の
數に入ければ

われに似し人と思へばますかゝみ
我かげながら我となつかし

雁奴か一周忌追福嵩松亭にて

寄拍餅懷舊といふことを

こぞのけふ君は佛にならざかや

この手合てなつかしはもち

狂言師何某をいたみて

やるまいぞやるまい物を誰かある

とらへてくれよ死出の山人

松の下臥をいたみて

むらさきの雲のはやめは極樂に

うまれよとてやまへの下臥

やことなき夫人の七年の忌に

幻しのつてもなゝとせほとゝぎす

しるや五月の玉のありかを

平秩東作身まかりて七日の日

おきつきにぬかつきて

般若智の水をたむけん花ゆへに

年ごろ山をこのみたる仁

桑楊庵の名をつく人あるつふ

りの光か七回忌に

桑やなぎしげるにつけて夏虫の

尻のひかるをみても戀しき

菅江をいたみて

ざれ歌も今はばら／＼あふぎなり

かた親骨のもろくくだけで

黒人か七回忌に

なきあとのしるしをみれば黒人も

あはれみごりの苔衣きて

橘里館卜翁ことし八十八のこ

とほぎせむあらましもちかき

夜身まかりぬときゝて寄花無

常といふことを

はからずもさそひて憎き夜半の風

ことぶくよねの小米櫻を

應無所住而生其心

法の船こゝぞとまりとさだめなば

いつか彼岸の花を見るべき

維摩

さま／＼にとく不二門も山吹の

いはぬ色にはことのはもなし

古寺

わけ入てなつむ高野の初登山

かすもいろはの四十八谷

風流は和をもとゝす雅席の諸

君胡越をなすことなけれ

春風のやはらぐ中に難波がた

つのぐむものはあしとさだめん

芝浦の春日のやしろの椽側に

腰うちかけ海面を眺望しはべ

りしに社僧心ありてたばこ盆

出しければ

たばこばん出してかすがの宮柱

ふとまいりしもえんのはしるか

牛天神奉納の額大原女黒木に

梅花折そへたるかた

大原女のあづまくだりはさく梅の

花さす手をばかみやひきけん

上州瀧の不動奉納

明王の利劔するごき御利生は

よその國までひくたきつ瀬

寄花神祇人丸影供

花はさくら歌は人丸神と花

みをあはせたる春のたむけか

寄月神祇

神もさぞ見そなはすらん起請文

くだんのごとくてる月のかげ

若菜契還年

七そちはまだ若菜なりことしより

めつたにつめやちとせ萬代

越後上村ぬし阿佳田丸こたび

新田開發し上村てふむら名ま

でゆるしかうぶりしときゝ

て

千早振かみむらごこそ仰ぐらめ

早苗の末葉風になびきて

寄化物祝

瞎とひらく大のまなこに君が代の

ちよのさかへや見越入道

臺所祝

臺所どんごとなるはたきの水

出いる客もたえずとふたり

寄鶴龜祝

かぎりなき人の齡やうらやまん

つるは千年龜は萬年

寄雨祝

濱松の音はざんざんざさんざ降

めぐみを笠にきみが代の雨

醉竹集附録

太田持資ぬしの詠に短慮功をなさずといふことをいそがすはぬれざらましをたび人のあとよりはるゝ野路の村雨てふためしあれば諺和歌よみてよとさるやごとなき御かたより仰ごとありければ五十首よみてたてまつれるになをあかずとまた五十の諺題かいつけてたまへるその夜酉の終より子のはじめまでによみはて奉りはべるにいとみじう興せさせたまひけるとなんさはれこちたき達磨歌にし侍れば和歌の浦人のみるめもおもなきわざにこそ

橘 洲

諺百首和歌

一は萬物のはじまり

狂歌醉竹集下

天となり地とわかれて出る日の

ひと日や千代のはじめなるらん

好事不出門

人のうへをあしの葉風の吹けちて

なにはのことかよしとつたへむ

悪事千里

憂名をばまちとる風の吹そへて

ちさとの外になごもらすらん

蛙の面へ水

はれにけりそめてつれなき山松に

はてはしぐれの音をのこして

猪見て矢をはぐ

花の下月のむしろの折ごとや

なごことのはをならはざりけん

鰯のかしらも信心がら

恵みある露のまことのあらはれて

かれにし枝に花やさくらん

鰯はくひたし命は惜し

さく花に心なき身をかへりみて

折もやられずをらで過うし

酒買てしりきらるゝ

今しはと露のなさけの酔ごゝろ

みだれて花のあらしとぞなる

隣のちんだ味噌

わが宿にさけるものから手折こし

人の心の花ぞえならぬ

下司の智恵は跡から

ともすればくゆる煙よたきさして

うきを真柴のこりぬおもひに

術なき時の神たのみ

おもなくもねぎ事すらし兼てより

身のおこたりはみづがきのもど

かる時の地藏貌なす時の閻魔

貌

心なやうちゑむ花のときすぎて

こちのかへしの山のあらしは

七尺去てふまぬ師の影

たちさりてふまじや春の朝みどり

露のめぐみの青柳のかげ

遠の親類よりちかくの他人

みよしの、春も思はじあしがきの

まぢかくなれし花の一本

ちかしき中に垣をゆへ

朝貌の露のへだてもこゝろあれや

かれす思ふが中垣にして

椽下の力持

もらさじと何にそめけんむら時雨

人もすさめぬ谷の紅葉は

上手の手から水

九折やすくもこえてたまほこの

つちにつまづくためしこそあれ

千丈の堤も蟻の穴よりくづる

る

くづし出てたがものしけむ袖の露

さしもかためし人目づゝみを

恩を仇にて報す

手折ゆく心ぞつらきしぐれには

かげさたのめし山のもみちば

仇を恩にて報す

手折つゝかへる麓のゆふ月に

梅がかおくるみねのはるかせ

馬鹿待夫

ちぎりしも雲ゐの雁のいくかへり

かけてあだなるよその玉章

雨降て地かたまる

假初の露のかごとをえにしにて

今はへだてぬ中の衣手

出る杭うたるゝ

よそにみて過うき宿のたち枝より

折こそやつせ梅の一本

七度たづねて人をうたがへ

くみもみぬ己がこゝろのあさか山

人にうらみの山の井の水

燈臺下暗

月いづるかた山かげはたざる夜に

行衛たざらぬ遠のひとむら

一文おしみの百損

うき思ひ露もらさじとつゝまずば

かばかり袖の色に出めや

川向喧嘩

さしわたす小舟もがなや思へども

人はへだてし中川の水

最負の引たをし

引方のありてなかゝもつれつゝ

ことしげいどのいとゞくるしき

負ふた子より抱た子

目にちかき櫻に風のはふりして

よその梢をいかゞぞ思ふ

百貫のかたに笠

此頃はさそひつくして山ざくら

ちりにしあどにのこる松風

犬骨折て鷹に取るゝ

たのめこしたよりの風に靡きけり

おもふあたりの青柳のいと

杓子定規

いかにせしならひなりけん春秋の

花にはあらし月にむらくも

鬼に鐵棒

心ゆく春にもあるかなこのゆふべ

花に風なく月に雲なし

藪から棒

船人は帆づゝしめなわいかゝする

はやちふくなりむこの海ばら

船頭おほくて船が山

中くゝにたのむゆかりの多ければ

もるやこいもが心置らん

牛の角を蜂

よしやふけまた露ばかりさく梅の

花のあたりの笛たけの聲

年よりの冷水

花にうつる心ありとも志賀寺の

ふりにしあとの色にいづなよ

さむらひ不食高楊枝

詫しとて色にいでめやうへぬれど

穂つまぬ鷹のためしこそあれ

飴て餅

兼てより思ひけりとはよそながら

みきとてとくる閨の下紐

長者萬燈貧女一燈

わたつうみにみちくる沙は溢る共

しかめや人の露の情に

竿頭に鈴

おもふとて川瀬の浪にちる紅葉

うきたる色になびくべしやは

皿に桃

楫どりよこゝろしてさせたび人の

むれつゝわたる波の小ぶねに

こうばりつよくて家を倒す

さらぬだに重荷にたへぬやれ車

ひきなたすけそよその諸人

瓜をふたつに割すと其儘

いづれをかわきて眺めん花ざかり

みよしのゝ雲をはつせの雪

はしる馬に鞭

おこたらず楫ふりたてよ沖つ船

直帆の追風こゝろゆくとも

花より團子

さきにはふ花はいろなし手弱女が

木のもどすぐる袖の追風

みつ子に習て浅瀬

かしこきもたざる深山を白雪の

みちしるこまにまかせてぞゆく

重荷に小づけ

山人のたきいにそへし花にまた

折もすごぬ岡のさはらび

大事の前の小事

よしさはる雲はありとも月のふね

行衛にはらふ沖つしほ風

いそがばまはれ瀬田の橋

わたらじな木曾のかけ橋九折

くるまをかへす人もこそあれ

上をまなぶ下

争ひもきよくすみれの花さきぬ

くろをゆづりし小田の春日に

慈悲は上から

かへす田を空にまかせて民の戸も

うるふ時しる春雨のころ

咽もど通れば暑さわするゝ

花の木もちりすぎぬこや折くべて

賤よ烟といかでなすらん

角直すこて牛をころす

さく花のすがたつくると枝をりて

あたら櫻ぞやつれはてぬる

氏なくて玉の輿

道の邊に桑つむ賤もときをえて

玉の臺にのぼるかしこさ

蟻くふ虫もすきく

すみうしと人めかれにし谷の庵に

かくて出じとおもふわりなさ

かせぐに追つく貧乏なし

おこたらず磨もてゆけば鎌をさへ

針にもつくるためしこそあれ

正法に奇特なし

どくのりの道をしきけば何もなし

只ありの實の只ありにして

我寺の佛尊し

ときめける花のむしろも暮はじな

たゞ我宿の朧夜の月

一寸の虫に五分の魂

はつかなる斧ふりたてゝ山路ゆく

車にむかふ虫ぞはかなき

人くひ馬にも逢口

交のねちけ人にもうらなきは

つるにはいかに奈良の葉がしは

性は道によつてかしこし

雨風をまだきにふせぐかしこさや

穴にすむ虫枝にすむ鳥

馬子にも衣裳

名もしらぬ花咲にけりさもなくば

只みやま木とみてや過まし

百貫の鷹はなさねばしれず

身におはぬ鶴とる鷹もあるものを

何におこたる心なるらん

萬能一心

咲にはふ花の千種もはかなしや

あらき野分の風のこゝろに

人の一寸おのが一尺

くまとなるよその梢をめにかけて

しげるもしらぬ蓬生の月

たちよらば大木のかげ

藏のうちにすめる鼠もあるものを

人はこゝろのたちとなりけり

寺に勝た太鼓

身におはぬ人のみけしの移香を

しめてよそめやいかにはちけん

朝寝の宵まごひ

夏の夜にむすびしゆめの朝寝がみ

みだれてくるし宵すぐるまも

我身つめりて人のいたさ

と斗りも人になかけそうきぬなは

うきぬの池のこゝろくらべて

馬の耳に風

うき人の心の駒のつれなさ

いひよることよそにふくかせ

ぬれぬさきこそ露をもいとへ

とてもかくつゝむにあまる袖の露

もらんうき名よ今はいとはじ

盗人の晝寝

くれなばと人にちぎりて夏の夜の

ひるねの夢や日かげわぶらん

くばい所へ水たまる

五月雨にまさる水かさの和泉川

うきはながれの末のさど人

鬼の目にもなみだ

ながめこし露のことばに守人の

さすがにゆるす花の一枝

貧僧のかさね齋

おもふ人なくとも經しを新枕

いかにかはさんかなたこなたに

好物に祟なし

くるすのゝくるゝちむさも白雪に

鳥立たづねてあかぬ鷹人

膝とも談合

みどり子に習ふ淺瀬もあるものを

なに思川おもひしづめる

人の疝氣を頭痛

心から人のうきせを身にかへて

おもひ朽ぶねくちやはてなん

隣のたからをかぞふ

己が身にあるともしらでなれ衣

うらなるよその玉やうらやむ

石をいだきて淵

白波のたつたの山としりながら

なごてこゆらん夜半のたび人

もつけ重寶

ちりうきし花の流れにたざらずば

おくある山の花をみまじや

勸學院のすゝめ

高野山ふかき御法に鳥すらも

佛法僧と音にぞなきぬる

牛にひかれて善光寺

古寺やさそひし人のゆかりもて

のりにあふちの花をこそ見れ

勘定あふて錢たらず

なす業の世のことはりはそれ乍ら

うきをばひとり身におふべき

亭主のすきの赤烏帽子

おもはずも麓の道にまよふなり

水艸きよき心ひかれて

地藏の貌も三度

灘船のいかりはいかにしづむとも

つるにはあらし波風ぞふく

闇夜の礫

此頃はしのぶに餘るうきことの

とほすがたりをたれか聞べき

足に疵もてはさゝはら

忍ぶみはなべての人の世がたりも

いかで心にかけてくるしき

土佛の水あそび

老が身のあすしらぬ世と知ながら

わすれてかはす小夜の手枕

習ふよりなれろ

總角もさすがに人をみなれ棹

なれて漕よるおきの友船

おもふ中の小さいかひ

ともすれば思ふが中のおもひより

あらぬかごともかけてわぶらし

嫁が姑

いつの間に頭の雪とふりにけん

きのふかめでし花のかゝみに

瓜のつるに茄子

みよしのゆかりにほふ嵐山

さすがに花のたねぞこなる

立板に水

かびらへに富妻那がとける法の聲

せつりもすだもあはれぞ聞

鳥なきさとの蝙蝠

さのみなごひとり上みぬ鷺の山

かたへに鷹のみねもこそあれ

内股膏藥

吹かはる風のこゝろにひかれつゝ

かたもさだめぬ青柳のいと

人を呪は穴ふたつ

世の報ひ身にそふ影としらねばや

うけひて人をあだになすらん

慾にいたゞきなし

みる世もど待もはかなし老が身に

子の子の末のさかゆかん日を

堪忍五兩

をのづからこがね花さく山もあり

うきをしのぶのさとのあなたに

俳諧躰擬歌

朝鶯

鶯のひとくどつぐる聲なくば

花にあさいの名をやたてまし

若草

若草のつまばねたしや女郎花

まじりて春もなまめける野に

山中夕花

ましらなく山の櫻に狩くれぬ

なれがいはほに宿やからまし

郭公

ほとゝぎす鳴一聲に早乙女の

小がさかたよる小田の夕暮

夕立

菅簍も夕たつ雨にとりあへて

さむしろかつぎ行はたが子ぞ

擣衣

いぬる子の添乳ながらにうつ衣

うつゝかゆめかなかざらの聲

月

世々の人のめでこしあとの藻鹽草

かくては月のいかゝ見るらん

紅葉

よききぬと人などがめそ老人の

かざすつゝれのそでのみぢば

雪

風ありときくもさむけし小夜深み

さそこぼれたる雪の松が枝

歳暮

流れゆく年のはやぶねいかなれば

うきぬしづみぬ人のわぶらん

契戀

いかにせんちぎりてわたる後瀬川

のちのあふせにふねなかりせば

後朝戀

朝露のなごりの袖のうつり香を

とめてやきつる人のおもかけ

述懷

いかにせむ翁さびたる奈良がたな
にぶしと人にふるさるゝ身は

祝

きみが代は蝦夷が千島にひく魚の
数のこののはよみもつきせじ

神道者

人のうへは天の入重雲はらへども
いかにしなごのかせの薄衣

卜者

人の上はなにはの事もみつしほに
みをしらなみの恨こそあれ

山伏

みよしのやすいふく風に山伏の
ほらのねたかき曙の空

竈拂

小柴さすあすはの神もなびくめり
うたふ乙女が袖の追風

醫師

手のやつこあしの乗物かくてよに
ふるくすしこそあはれなりけれ

按摩

もみくだしうつ諸人のかたせ川
なみのつゝみのおともまじへて

針醫

たかせ舟海はらにさすはりまちや
やりてひいきの灘も越なん

穩婆

取あげてみがくかた手にもろ人の
袖の上なる玉や見すらん

鑄物師

山寺の麓のさごのあけくれに
おのがつくりしかねやきくらん

縫物師

色いごを手にまかせたる梅さくら
ぬふてふ鳥もねたしどや鳴

伊勢參

神風やいせしまごろもふりにけり
内外ぬかづく氏のもろ人

鉢法師

哀れ身は飯にうへつゝはちの子に

いのちかけたる墨ぞめの袖

輕業師

世を渡るならひもかくや垂髪子が
命のつなにあからめもせず

放下師

まぼろしのする業ならじ右ひだり
とるや手玉の行衛しられず

鉢敲

優婆塞がゆくゑも遠くなりひさご
かれずやたゝく月の門く

狙公

かしこきをおのが咎にてうき業に
あはれましら身の身をつくすらし

傀儡師

目に見えぬ鬼の姿にみどり子の
心なぐさむわざごことなる

厄拂

いかばかり鬼やらふ風に世の人の
うき雲はらふ西のうなばら

紙屑拾

木の葉かと落散る紙をひろひえて
かへるも人のくづの松原

節季

盡せじなゆく年のせきこゆるぎの
いそぎてうたふ門々の聲

萬歳

鶯もまだしきさどにいく代々か
せんすまざいの春を告らむ

畫讚和歌

河津脱野相撲のかた
百艸はのべふす風の小薄に

かけてしがらむ秋はぎの花

忠度只澄のかた

うつ波のみぎはのかた枝吹をれて

やがてちりしく花の夕風

佐々木梶原先陣のかた

秋風にいづれかさきと宇治川の

ゆふなみかけてわたる雁かね

義經八艘飛のかた

追かせのふけばなびきて飛千鳥

小ぶねこえゆく浪の遠かた

梶原逆櫓のかた

君が代は海邊をわたるかりがねも
なみにさかろのあらそひはなし

藤戸のかた

駒をもてうみわたしけん古への
あさせやふかきうらみなるらん

與市扇の的のかた

手弱女がまねくあふぎに梓弓

いり日やなみの上に落らむ

備後三郎のかた

きみがため櫻にさめしここののはの

心の花やいかにこめけむ

景清箕谷のかた

さす沙のひくかど見しも兜貝

くだけてのこるなみのみぎはに

維茂紅葉狩のかた

色にそむ露のなさけの夢たらで

嵐にきはふ山のもみぢば

忠盛祇園火燃のかた

みづがきのもとに怪しき火影よと

見しは手に取螢なりけり

辨慶安宅園のかた

うつもまためぐみの雨の兒ざくら

花のあたかの園のゆく手に

關羽千里獨行のかた

照る月にさはる一葉のくまもなく

千里をはらふ木枯のかせ

孔明

時えては深谷がくれにふす龍も

空にゆふたつ雲おこすなり

楠正成

末の世もくみてかぐはしさく花の

名にながれたる菊の下水

みたまふなどしかいふ

壬戌の仲夏 芦邊田鶴丸跋

やつがれはやくよりざれ歌をたし
みて古今の狂歌集けみせざるはな
しそがなかに難波の行風が古今後
撰より諸家の家集言葉のはやしし
げいこのしげきが中ぬけ出たる歌
あまたなきにあらざれどもこれを
沙しこれを汰すれば瓦石にまじる
こがねなるべしかの何某が楓落吳
江冷なりの外見るところきくと
ころにおよばざるの歎なきにあら
ずひと日吾妻の風の便りに我師醉
竹集をこし玉へるを見るに春の林
に入が如く見る所みな花をなし秋
の山をわくるがごとくゆくところ
みな錦をはるは古今いまだ見すさ
るを翁はなを雞肋のみおはければ
と秘し玉へるを九家山文真柴の三
人書肆何がしとはかりせちに師に
こひて梓にゑり翁の言葉の海のひ
ろきかつはざれ歌のみにあらず和

歌のうらにいく年波かこゝろよせ
たまへるらうをも人にしめさんと
常の和歌もことゝしくやとこの
頃やごとなき人のもどめによて口
ずさみたまひし諺和歌百首に書讚
和歌誹諧の擬歌をくはへて卷の末
にそふるになんこれまたいまのな
ま和歌者流の新題林を枕ごとし
雜木三玉を手まさぐりてやうやく
に一首をになひいだせる輩のくは
だて及ぶべきにはあらざるべし予
師の門に遊ぶことこゝにはたさせ
あまりいまは世のなりはひものが
れてつたなくも此國にてはざれ歌
の師とおさるゝもひとへに師の賜
なれば此卷の跋かの九家真柴のさ
そひなくともわれをおきてそれた
ぞやと増賀聖の先駟にならひぬべ
きとしごろのちなみなれば卷の殿
につたなき詞をそふるを世人にく

六樹園家集

春の部

歳旦

初鶏かあけの鶉かしのゝめに
聲をかけたは何やつだエ、

天明六午の春を迎へて

けさは皆さくおきて聞け午の春
あれ明六ツの太鼓うつのを

立春

懸乞の夜あけにおもき草財布
かつぎし肩もはるは來にけり

吉原初春

打はやす唐土のとりを聞ながら
ひよくと契るさとの七草

春の山

年のよる春をめでたいくど
祝ふおろかを山もわらふか

春のはじめに或人年玉の扇箱

いだしてこれに歌かけと云ひ
ければ

鳳凰のすむてふ桐のあふぎ箱
にほんは長くをさまれる國

純緒家松飾

松飾り立てたる歌のお家には
ちと不遠慮な海老の腰をれ

若水

山の井を手習ふ子等の書ぞめに

汲むや古今のわか水の音

武家の若餅

若餅をなまくら武士はよけて搗く

大將軍のふさがりのかた

萬歳

四の海しづけき御代は萬歳の

つゝみにのみぞ波の聲する

若夷諺

あき人のよき衣着たる姿みつ

けふぞ古今のわかえびす諺

子日

人の野に子日をすれば引てゆく

松の思はんことも耻かし

子日に杣人の松きりてをるを
見て

のこぎりの目出たき春の子日とて

大松をひく杣もありけり

若菜

我持てるかだまも人に春日野の

なをさらんよりさくやつまゝし

姑がうち見るたびにはめちぎる

雪間のわかなありがたき物

野若菜

から薺若菜かたみに打ませて

つみにきた野の菅家萬葉

去歳より雪たびく降りて春

になりて菜の價高かりければ

百で買ふ一把のあを菜何ならん

にはの若草二分三分出る

春たちける日茄子を夢みて

春たちて見しはつ夢の初なすび

嫁はともあれ獺に食はせじ

鶯

うぐひすが春の序品になきしより

一天四海みな歸妙法

鶯の誦經の布施かさはひめの

かつがせてやるやなぎ紅梅

歌よみのこわ音まねぶか古今集の

序にいでました春の鶯

谷鶯

くはやくは堀出し物よ谷かげの

霞にうづむうぐひすの聲

梅樹に鶯の啼くを聞きて

百人一首によみ残されし鶯の

楚辭に入らざる梅に來て啼く

春の歌とて

鶯と蛙がうたふ聲きけば

ひるの長うた夜のみじか歌

蕨を人に遣はすとて

おもたさにかつぎし肩も紫の

ちりが積りし山づとぞこれ

隅田川のほとりにて茅花つむ

人を見て

堤なる茅花をつとに隅田川

かへさは舟にめしてこえませ

春の野

兼好がすみしあべ野の春の色

賣物ならばむしろかひてん

春駒

ほんくくと玉江横野にへをこくは

あさるに腹やはるの若駒

梅

わざはひも三年ばかりふる壁の

ねすみ穴よりにはふ梅が香

鶯にあらぬものから持て囀す

たましひ飛んで梅に木づたふ

さは姫の乳ぶさに口を開きつゝ

南枝の梅の庭にはらばふ

名木の江南所無は世にたぐひ

なにはの浦に指をりの梅

筑紫なる神のみかきの梅の花

さかりに家の風な吹かしそ

按摩よりよほど捻りて取りてげり

長者がために枝をりの梅

狂言師善次郎と共に樂研堀に

て鉢植の梅を見はべりて

冠者が名の太郎月とてよびつきの

枝はねんなう早咲きの梅

市中の花

早咲きの花ははかりか市人の

二りん三りんあらそうて見る

橋邊の柳

橋づめの床の柳のみだれ髪

雨が來てもむ風が來てそる

春雨

櫻がり雫に袖のかをれるは

ふつてわいたるさいはひの雨

芝居見の留守する下女の泣く様に

おともせずして降れる春雨

二日灸

如月の二日酔にやかさねたる

灸上戸めがかはらけの數

灸するてあつやゝは如月の

ふつかが丁度めぐりきよ盛

初午祭

はつ午の大鼓も小鍛冶宗近が

ためしどうつや鉾杉のもと

傾城初午

傾城のわらふ笑くぼを野狐の

ひとつ穴からのぞく初午

歸雁

氏なくて玉のこし路へゆく雁を

人もあふぎて見る北の方

醫師曲水

さかきづの流れての世は曲水に

やぶ醫者も出る茂林脩竹

三月三日なにがしの寮にて

紙雛のもとにて酒のみて

渾沌のたま子もまじる重詰に

ひらき始めや女男のかみ雛

猫の戀

ふきおとす物干棹に梅のみか

猫のさかりも散らす春風

西行忌

釋尊の涅槃ののちの西行忌

これも猫をば捨てたりし人

櫻草の花壇の風鈴の歌に

草の名も櫻といふぞ風りんも

こゝろして鳴れ入相のころ

東作入道と山ぶみしけるに花

もまだ咲かざりければ

春風のふくめん頭巾めは出せど

はなをば見せぬきさらぎの山

花(櫻)

人は武士花はよし野の山までも

腰にはしやんとさいてこそ有れ

仙人も天狗も雲と見たがへて

こずゑを踏むな三吉野の山

ふみみても知れ唐土にたぐひなき

花のよし野のやまと魂

咲く花にこゝろとまゐるは鳥ならで

さへづりちらす詩人歌びと

とばり帳たてゝも風をふせぎてん

むこ山ざくら花のおほ君

山の花

山をぬく力もあらばさしながら

庭にうつしてみよし野の花

老僧のおほかる山のしら雲は

詩人もしらぬをばつ瀬の花

花満山河

山川のわけ隔てなく咲けばとて

智者も仁者も花をたのしむ

吉原の花

風といふけんごん箱や配りけん

大路に花の敷ぞめをして

志賀山越

わが物にしがの山路のさくら花

ひと枝たをる近江ごろ坊

隅田川の花を

隅田川さけばむさしと下總の

中にいと大きなるかはあり

武士觀花

山さくら刀におちん物ならば

散る花ごとにぬきて留めん

赤良ぬしの庭の櫻さかりに開

きけるを終日ゑひ暮して花の

歌よみける中に

三兩の質におきなば質屋めも

三たびやかゝん花の香の袖

庭の櫻のさかりなるを人々來

て賞しける折から風吹きてや

ゝ散りかゝりければ

塗つけてなりと留めはや散かゝる

はな見の客は膠漆の友

落花

兒櫻いたづら風の手をあげて

かごめくゝにさそはすもがな

散かゝる隣の花に春の夜の

あたひせんきを頭痛にぞやむ

雉子

春山をめでゆするなる人來ぬと

知りてや雉子の鳴く聲のする

さく頃は花の王位のいちじるく

霞の神にきやすさへ立つ

筍

竹の子を掘らんとするを秋までに

延ばして杖に切るも孝行

白魚

吸物になりてもすみし川の名の

淺草海苔をかつぐしら魚

石清水臨時祭

舞人のかざしの櫻なゝへ八重

ころものつまをかさね盃

春日祭

鹿島よりうつりし神の御祭り

あられふるてふ賽錢の數

蛙

もとの名のお玉杓子を忘れずや

蛙はいひをもる水にすむ

あまがへる雨になきつゝ歌よみと

なる田中の道綱の母

山吹

みなしとな云ひそ昔も簑かりて

はなしの種となりし山吹

藤

むらさきの色に染つゝ松が枝に

つるもはひさす花の藤浪

暮春

撞木とる法師も知るや汝が手に

春つきぬなり入あひの鐘

夏の部

當麻練供養

練くやう樂屋はもとの凡夫にて

まゝ黄金もくろがねの色

灌佛會

御誕生以來の懸意卵の花と

ほとゝぎすとは釋迦むにの中

賀茂祭

もろかつら棧敷にさへも懸るなり

はな毛氈のかものみまつり

夕顔

から臼の音よりましてお寢間には

茶臼もひやく夕がほの宿

夕立

雨乞の有心の歌に無心なる

雲が感涙ながすゆふだち

夏月

蚊をいとひ蚤をいとひて寝る床に

うれしくもさす夏の夜の月

扇

鼠めがくひし扇に時ならぬ

氷柱のさまを見る涼しさ

團扇

あふぐにもあまる團扇のすい風は

かみの力かのりのたすけか

氷室

蕎麥の粉か饅飩かなぞとがたくと

ふるふ氷室の番人に問ふ

泉

むすびたる色もなつかし涌かへる

水は岩もる中將がふみ

納涼

酒かはん左のきし人々は

みな肩ぬけとゆふすいみ臺

しつた同士涼しとすいみ縁先に

知音くと風鈴の鳴る

越後をもぬぎ越中もぬぎすてゝ

すいむ夜風にちいむ越前

河邊納涼

春秋を何あらそはん世の中は

柳の下のゆふすいみ舟

釣りながらすいむ川邊の捨筏

ふむ足もとにむなぎ何本

屋根舟納涼

橋のそりは弓をひくやと三股に

ひやうと射て來るやね舟の風

役者虫干

虫干にしみてふ虫もさる若の

銀杏もみゆるふみの中村

雛人形のむし干すこて雛段に

ならべたるを見て

今もなほ曆のはかせなつの日に

たつる相馬のふる内裏雛

夏狩

ふる狸宵のつゝみがなごりにて

腹をうたれて死ぬる夏山

夏萩

もち月のかげかどばかり御萩する

川邊や秋のこゝちすがぬき

夕夏萩

水無月のなごしの萩へすがぬきを

我よりさきへくゝる夕風

秋の部

七夕

天にあらばとばかり契れ棚機

もし地にあらば三保の羽衣

南鐐の銀河をわたる七夕の

あふ夜は年にたつた一べん

星にさへ誰がぬれ衣をかし小袖

すそのはりたる名を取らせけん

萩

短かきもながきも切れば涙ほど

露ちる鴨と鶴のはぎはら

水邊萩

秋萩は蝦夷にしきかも龍の手に

とる玉川のせもわたりもの

朝顔

朝顔は朝めし前に咲きいでゝ

盛りひもじき花にぞ有ける

此ごろの聖のまけし朝顔の

花にをしめる今朝の寸陰

女郎花

心なきこそうれしけれ女郎花

黄金いろの外面如菩薩

盆踊

秋風につれて踊りの手拍子も

いくたびかへす葛のうら盆

儒者靈祭

白圭のたま祭りさへ貧しくて

ここのかけたる儒者のうら盆

露

露とちる涙の玉のきざはしや

長信宮の身にもあき草

掛乞の盆の通ひはさもあらばあれ

拂ふなけすな庭のしら露

曉雁

火打箱蓋あげがたに鳴つれて

鴻雁なんぞほくちより來る

秋夕

蛤にはしをしつかと挟まれて

鳴たちかぬる秋のゆふ暮

秋里

深草はうづらに鴨に雁のこゑ

とり集めたる秋のあはれさ

月

月の中に霓裳雨衣やまふならん

望む窓にも影のひごさし

いかでわれ項羽か力もちの夜に

月のかくるゝ山を抜かまし

照る月にわれ物まをす晦日にも

出てかけ乞をねめて給はれ

天の原月の出臍をながむれば

今宵ぞ秋のおなかなりける

小便をたれて雨戸をくりてゐる

つらを見てやれ月の光りに

名所月

月を見る名どころ多きその中に

おやの親なるおばすての山

さらしなや月のてる夜は村雲に

すきまあらせよ風のはふりこ

ふる事の勝母の車おし出して

こゝにはひくな姨すての山

海邊月

濱邊には寢てゐる蟹もあら海の

あじかの目さへさゆる夜の月

都の月

夜を晝にとりかへたりと京人が

小便たごのそばに見る月

品川の月

うし町の牛いかならん月見つゝ
酒にあかしてあへぐ品川

古寺の月

あか桶の手もぬらさずて山寺に

月の桂のはなたてまつる

十三夜月

月夜よしよもし原の十三夜

かねはこゝのつ拍子木は四つ

田夫十三夜

手作りの團子もめだつ荷もちこぶ

かた月見をばせしとゆふ暮

霧

人麿かまた笠かほのくゝと

わかぬあかしの浦のあさ霧

擣衣

槌ひとつ七つの鐘にやすめぬは

よその砧にまけじだましひ

里擣衣

いとなみにひるは人形夜は砧

つちのはなれぬ深草の里

中川夜網

秋の水ひかれて鯉もよるの舟

ひらりと光る網のなか川

菊

つみどりて鯉のけんに仙人の

八人まへもながいきの菊

壽老人ほごにつむりの白菊は

星とよばれて杖をこそつけ

重陽の菊をちとせと玉だれの

すにつけ酒につけて祝ひつ

庭菊

折らせじと守をつけておく庭の

菊に鱈のけんなんもなし

杖たてゝ腰はをらせじ五斗米の

いろにかよへる庭のしら菊

紅葉

もみぢ葉は花にもますの魚なれや

さらに赤きが見どころにして

龍田姫のかつけ物かももみぢ葉の

錦を秋のやまのこしさし

鹿

尋ねきし山に啼かねば我聲を

鹿にきかせてかへろとぞいふ

神田祭

將門もおごろかん田に引出す

まつり家臺の七ばけの所作

盲人新酒

はつ物と盲法師もひきかけて

咽をならすや琵琶のことし酒

馬士新酒

ねだりたる不義の錢にてことし酒

くむやうかべる雲助がわざ

柿

堀川の御所柿ひとつうまゝと

してやるところ澁や土佐坊

落栗

五日めに風ふく代にも栗ばかり

落たるをなご拾はざるべき

暮秋

けふ秋のゆくへ知らずと成ぬるは

まよはし神やつれて立けん

冬の部

初冬

貧乏の神が出雲へ立つとはや

よねも黄金もふゆこそそなれ

落葉

おく山の紅葉ちりぬる梢には

杣が斧よりほかにほはなし

はき寄せし木の葉積りて山寺の

箒のさきも坊主とぞなる

霜

化粧せぬ不性をんなの朝戸出に

ちと見ならへというておく霜

乞食髪置

米もらふかたるか兒のもとゝりも

ひと掴みには足らぬかみ置

法師玄猪

ゐのごとく天窓のなりに圓めたる

餅もきな粉のころも着る寺

神樂

神葉の霜ををかしとみやつこの

猶おけくとうたふ夜神樂

野行幸

世にひやく行幸なりとは狩場野の

鷹のをふさに知る鈴の奏

氷

こふりぬし池は殺生禁斷の

場とて手出しもならぬ寒けさ

千鳥

鼠よりわるさをすまの浦千鳥

なく音にさよのかべを破りつ

雪

ふる雪を鵝毛のごとくながめしに

たゝすむ我もいつか鳥はだ

ふる雪に風鶴毳の毛をふいて

疵をもとめし庭のあし跡

あたゝまる人の五髀は河豚ながら

佛をつくるなか庭の雪

寒念佛なかゝ罪をつくりたり

大事のけさの雪をはたきて

名所雪

隅田川雪に棹さす船頭の

足のあがきをけさみやこ鳥

深川雪

鼠うしごらも兎もつくるなり

江戸のたつみの廓にふる雪

野雪

白雪に名をば埋まで旅人の

はぎのあとさへ宮城野の原

行路雪

嬉しさを何につゝまん宿かりし

坊主合羽の雪のゆふぐれ

市中雪

商人の見世はげん銀世界にて

誰もばらうて行く袖の雪

衾

夜を寒み氷ごともにはる物は

紙の衾のかぎざきの穴

顔見世の日五代目團十郎がも

とへ申遣はす

周の春こゝにみますの顔見世は

およそ役者の王の正月

白猿森田座をつとむる時鳥亭

焉馬がもとへ申遣はす

白猿のあたりを聞て江戸中の

ひいきの鼻もたかい顔見世

社家煤拂

十日餘りみかさの山に千木立てゝ

あまつこやねもはらふ煤取

節季候

わらの沓紙のかんむりよね賜へ

錢もほしごとでありく節季候

歳暮

人心さわぐ師走にさわがぬは

曲馬のうまにさる曳の猿

掛乞に拂うた錢どゆく年と

どちらが先にをしまれぬらん

寒餅の仕まひの臼の一枚と

共にことしの歳もつきにき

市歳暮

よしあしは市の中にも生にけり

拂ふもかるもあながまの世や

日本橋歳暮

日の本の橋のあたりも煤はきの

ちりにこさふく蝦夷のほし魚

老人歳暮

老らくを入れしとさせし掛がねの

そのせんもなし年のくるゝ戸

大つごもりの夜狐火を見ると

て王子へゆく人あるを見て

掛取にしり尾をだにも出さじとや

逃げて王子の狐火を見る

除夜

衣くばりさや縮緬とみそかけに

かけてみそかの闇にあやあり

富家除夜

千兩の箱にそなふる晦日蕎麥

のびてうれしさをがむ年の夜

戀の部

戀

松となりても生出んあだ人の

かり寢の夢の臍のあたりは

露ほごに思うてくれぬあた人に

など愛敬のこばれかゝれる

仲立のとりあげ婆々に思ふこと

いはでふくるゝ腹を見せばや

戀のこゝろを

山科のこはだの里の馬ほごに

太鼓をぞうつ君をおもへば

忍戀

忍ぶれば紅粉おしろいの外にまた

つれなし顔もつくるわりなさ

我命あふにかふべきしるしには

忍ぶ戸口に息をころせり

しのぶ夜は刀のはのねふるはれて

ぬき足もしつさし足もしつ

見戀

なよ竹のいもに見されし尻目さへ
藪にらみとて嫌はれにけり

手びき網とりもち竿もほしくこそ
妹がすがたは沈魚落雁

顯戀

逢ふ事ははや世にもれてから樽の
さしこむせんもなき瘡かな

戀すとは枕にだにも知らさぬを
ついふんごしに洩らしつるかな

逢戀

出雲なる神にいのりて逢ふ夜半は
日本國がひとつにぞ寄る

再逢戀

逢ふまでさかたみにゆひし下紐を
うさん臭いごとくはごうよく

會不逢戀

つめられし股の痣のみかたみにて
以來ふつゝり逢ふこともなし

無返書戀

返事だに渾沌王の音もなく

今にめはなのつかぬ色ごと

別戀

なごてかく別れの足のおもたきや
首は自由にふりかへれども

後朝戀

一夜寐し妹がかたみと思ふには
うつり虱もつぶされもせず

名立戀

見初めてし時より腰はぬけたれど
浮名ばかりは立ちてける哉

ひともじもくらはで神に祈る身を
戀すと名さへ立たせぬる哉

ましてしばしふみかく窓のあかり先
たつてくれるな戀すてふ名の

祈戀

うき戀を塔にいのれどしるしだに
なくてやさかの歎きをぞ見る

戀やせて影となりぬと初瀬寺の
みあかしふみにかきたてゝ見ん

隔一夜戀

あふこぞと人のかづきてよべ一夜

ごちらに君はかたたがへせし

契來世戀

佛をばたのむな妹が後の世に
ひよつと變生男子ではいや

戀病

戀病のおもるを何とせん藥の
あふはかたしと親さへもいふ

思ひきやくすしの膝に寄そひて
戀やせし手をにぎらせんとは

老人戀

おろかにも戀そめにけり百の口
三十ばかり足らぬ年とて

田舎の戀

水牛の櫛になまりの簪を
もらうてにせとちぎる麥畑

寄雷戀

いなすまど共に添寐のうちやう天
雲となりまた雨となるかみ

寄河童戀

かつばにも身はあらなくに涙川

沈みて人をめかけこそすれ

寄鳥戀

したに待つ信天翁の身としらば

落てくれかししてやらん物

寄芋戀

長芋のいもがたやすくをれたるは

戀の山路のほりいだしもの

寄蕎麥戀

現なく見そめつるべのそば近く

袖ひきぬきもはづかしのもり

寄菖蒲刀戀

こい口のかたき女ど菖蒲太刀

君ゆる胸もけづるばかりぞ

雑の部

住吉松

ふりにける松物いは化たかど

人やびつくりすみの江の松

竹

生しげる竹はみぎりの林にて

かぐや姫てふぬす人も出ぬ

鶴

鶴のはねしら柏子はど舞ふめるは

是やよもぎの島のせんざい

犬

参宮のみやにさくらの花よりも

しろこと呼びて團子をぞやる

猿芝居

猿丸のおそめが三たび啼く聲に

皆はらわたをたちて笑ひぬ

農家調度

黒木うる聲さへふどくその尻の

大きき牛をかくす大原女

工人調度

手斧頸のみどりまなこ鋸齒

こやきりものと見ゆる棟梁

商家調度

足なくてはしり趨もなくて飛ぶ

旅のさかての馬駕籠の錢

武具

貝鉦をならさてよする夜討にも

馬の太鼓は軍令の外

酒

世の中に酒といふもの無かりせば

何に左の手をつかふべき

げに酒は愁をはらふはきこて

たはここともはく青反吐もはく

淵明か頭巾うらなき交はりは

酒にこしたる物やあるべき

屁

すかし屁の主は誰とも知らねども

ふるうてくれなしたがひのつま

孔子

徳孤ならずこのたまひし隣にて

なごて東家の丘としものる

六歌仙

歌よみのかしらど頭うちつけし

音はこきんの序にきこえけり

遊女

うたひ舞ふ君をはじめて見る時は
涎もながく千代もへぬべし

傾城の夢

傾城のねるまもかはら周か夢

胡蝶とよびしむかしをぞ見る

夢拾金

春の宵のおのが價ひをさりにしや

夢にひろひし金の見えぬは

遊里

川竹の生しげるてふよし原は

うき世の人の子を捨つる藪

よし原を夜あけぬ内にいそぐのは

きのふむかへに來しみいら取

幽居

のがれても猶うき事はやま猿の

獨りこのみに飽くばかりなり

訪幽栖

たる事を知りたるごちの言の葉は

此狭いでもうら出しけれ

醜女の贅

ほれられた例無ければ名も立たず

これやその身にそなはれる福

吉野山の櫻の畫に

みよし野はさくらも櫻歌人の

ことばの花も山をなす山

旅人の花の枝折とるかた

わが物にしがの山路のさくら花

ひと枝たをる近江ごろぼう

仲の町の櫻のもとにうかれ女

の客をおくるかた

傾城と花とをあかで見る時は

入相もいや東雲もいや

屏風の畫に逢坂山の月見る處

鳥の啼くあふ坂山に月見んと

ゆふづけてこそ人も來ぬらし

陶淵明の菊を見る繪に

杖たてゝ腰はをらせじ五斗米を

しらげし色にはもせの菊

名所の花紅葉をあつめてすき

入れたる扇に物かけと人のい

ひければ

歌よみにゐながら見よと花紅葉

扇にはると秋の名どころ

鳥の畫に

孝行は二十四孝の一倍の

からすは四十八鷹のうち

蔵に兎のかた

蔵の手兎の耳にくらべても

まだく長し春の日のあし

赤人の富士の山を見るかた

たけ高きさまは劣らじ不二のねに

ならぶ山邊の赤人のうた

業平朝臣のうつし繪に

業平の歌をわれらが讀むるにも

意あまりて言葉たらはず

虎溪三笑の繪に

もろこしの人が三人寄あひて

からくくく笑ひてぞをる

周茂叔の繪に

蓮葉はかぶりを振りていひけらく

茂叔は人の君子なるもの

蛤の傾城を吹出したる書に

蛤のなかの町よりいでし君

いかなる粹がかゝるみを食べ

あそびの起請かく書に

傾城の牛王の起請かくたびに

鳥もかねになる熊野山

惣嫁の書に

くれ六つと四つの間に客とりて

そもなにごを四六二十四

柳原向がもとにて尾上松助が

玉藻の前に出たちたる姿を俊

満がゑがけるを見て

なか／＼に人は狐と化けにけり

こやこゝのつの尾上松助

諫鼓のかたかける繪に

戸をあけて寝る太平の樂しさは

目にだにかごをたつる人なし

ある年の大小なりとて十二ヶ

月の文をつゝりて蜀山人のも

とに送りたるにいかにしけん

七月分のことを書おとした

りしを蜀山人のもとより「五

のしるし六樹の園はありなが

らなど七兵衛といはぬ大小」

といひおこしける返し

耻らいて名のりもかゝぬ文月は

君にとられしことば七兵衛

ある年新宿のあたりに家居つ

くりて住けるに道遠ければと

て孟蘭盆になりても棚經よむ

べき僧の來らざりければよみ

て遣しける

山里の盆は法師もとはざるを

なき人いかで淨土より來る

久しくその中うとかりし四方

歌垣眞顔と堺町中村座の芝居

見物のとき和解の盃すこてよ

める

今年までだんまりの幕引返し

氣もあひ駕籠のもとの棒組

尾張宮の宿なる鯛屋が櫻の間

の座敷開きによみて遣しける

とふ人はうしほのわくが如くなり

名ある鯛屋が家ざくらとて

牛込の北牛天神のもとなる馬

蘭亭の狂歌會によみて遣しけ

る

茲ぞとて牛はうしづれ集ふなり

ふもとに歌人山に天神

有野に入りたる人に送るとて

ふ文字七ツよみいれたる歌

ふた股のふとき大根をふろふきに

煮るすみ釜のふたもふく／＼

平秩東作本郷のほとりに住所

もどめて俄にまめたちて論語

の講釋よと聞きてとぶらひけ

るに留主なりければ

聖堂のうしろに儒者の香のするは

孔子のひつたへづゝ東作

新宿といふ處にすまひけるに
吳竹の世暮氣衣服花やかに出
たちて立寄りぬたゞにはあら
じ此わたりのあそびがり行く
にやといへば宿をいづる時誰
にもしかいひきこ笑ひければ
沓冠うたがふはむべ此あたり

鳴子の瓜に桃園のもゝ

千首樓のあるじ久しく訪ひこ
ざれば文やる序にをさな子の
もこへ豆太鼓といふもの遣は
すこて

紙太鼓ならう事ならふりはへて
まめであるかの音づれもがな

朱樂菅江の家に狂歌の會あり
兼題はつくしなり平秩東作と
共にゆきけるにあるじはをこ
つひより外に出ていまだ歸り
來らずかゝることは常の事な
りと節松嫁々ぞいふなるすさ

ましかれば歸りなんこてさう
じのはしつかたに書つけゝ
る

今日もまたながし物にや菅江の
つくしとばかり題をのこして
市村家橋堺町中村座をつとめ
たる時

猿若にしばし遷座のありがたや
ゆゑ市村の所作の氏神

芝居役割のうち蓮生法師を
花道をゆく蓮生がいかなれば

西の棧敷にうしろ見せけん

吉原につとめけるあそびのい
かなる故にか又新宿にて勤せ
んとて來りけるをこゝの女ど
も寄集まりてそも吉原はいか
なる處ぞ客をばいかにあつか
ひたまひしなど問ふにうひう
ひくしくやいらへもせであ
りければかの女に代りて

折ふしは間夫とねんく二三月
初會は桃李一片の春

唐丸にいざなはれて陰間もど
めにゆきて床に入りけるに此
若衆俄に痔のいたみ堪へがた
しこてうめきければ

さしあたり何とせん湯のはひり口
釜破損に付今日休み

人にをしへられて松つくるこ
て

山住は水に疎食の手づくりの
松のひちさへ曲げて樂しむ

奥まりたる所にすまひける時
はひりの柱に書つけゝる

あな佗しちくくさして人を來る
我ありとだに見せぬ住家を

文政三年あらたに草庵を靈岸
島につくりいとなみて

たてそめし家居にうつる古翁
あるじ顔こそあたらしといへ

ある尼のあらたなる庵をむす
びければ

尼の身のむかし束ねし髪ならで

草のいほりをけふ結ぶかな

曹司ヶ谷のわたりに宿坂の關

といふあり古き名どころなり

なご人のいひければ

古跡ぞ聞いてしかけし小便を

とむるもつらし宿坂の關

日本橋

日本ばもし唐人が渡りこば

見せん繁華のこのとほり町

品川

品川へ旅送りしてけいせいの

こしの柳をよちて別れぬ

蜀山翁の府中の宿りにあるを

訪ひ侍りて

君もまめわれらもまめは豆ながら

ふちうに在りて泣く草鞋くひ

或る年の十月尙左堂のかしま

立を送るとて

ざれ歌の神にしませば旅立ちて

十月をしも留守にしたまふ

ある年の秋東夷庵古渡の旅立

すこ聞きて

わがする袖をはじめて出女の

いくたび引かん旅の夕ぐれ

名をなめる鳥さへ來をかりくんと

かみつゝいぬる旅のかれ飯

砧音成か故郷にゆくを送りて

あはぬ間は短かき旅もうらみつゝ

かゝもろ共に指をこそ折れ

述懷

歌よみは下手こそよけれ天地の

うごき出してたまる物かは

世わたりの道にふたつの追分や

たからの山に借錢のやま

ぬれ衣を見わくる人のあらざれば

水かけ論のひる時ぞなき

貧者述懷

金を手ににぎり拳でわが仇の

貧乏神のつらをはらばや

陰間述懷

つゝがなく守りてたまへ痔の神よ

あはれとしりの穴のあたりは

女形懷舊

光陰のやらう帽子もうるさくて

戀しきもこのおもかげま哉

老女懷舊

いつの間にみごりの髪も雪つみて

柳ごしさへかくかゝみぬる

神祇

みたらしにむきて心をおこし米

鯉のみてこそ手をも打つなれ

通ふ神といへる意を

吉原にこれもふさんの通ふ神

あしたには猪牙ゆふべには駕籠

南無阿彌陀の五文字を句のか

しらにおきて手向のこゝろを

なき人の昔をくればあはれ世に

みじかき珠數のたまのをやこれ

柔楊庵光翁をいたみて

なきからこ成にし人ぞ忍ばるゝ

濱のまさごを見るにつけても

千代徳若をいたみて

涙をばそゝぎ盡しぬ極樂へ

けふ誕生のにひ佛には

上書此主がむすめくにこいへ

るがみまかりぬと聞きて

きのふまで舞うたひしを思ひきや

佛御前のたむけせんとは

橘洲ぬしの七回忌に

野送りの秋もかゝりき高燈籠

天蓋けまんはださむき風

朱樂菅江を悼みて

世に鳴りし人を思へど音づれも

ふつに聞かせぬみゝらしの鳥

節松嫁々をいたみて

家の風高くふかせしふし松の

おひきなされし琴ぞ戀しき

文政八年むつき十日四世藤間

勘左衛門のみまかりしをいた

みて

三味線の糸によるものならなくに

心ばそしやわかれ三重

或人をいたみて

鶴龜にたぐへし君を思ひきや

蠟燭立てゝをがむべしとは

萬徳成か父のみまかりしを悼

みて

ふじの雪ときえにし人をみな月の

その夜よりふるわが涙かな

鐵眞法師の碑を橘樹園早苗が

いとなみたつる時其裏にゐる

べき文かきて與へたる末に

限りなく長き世照らすことわりの

ちかいは空にありあけの月

千秋庵三陀羅の賀宴によみて

送れる歌

三陀羅の君がわかなを祝ひつゝ

ちよつと一葉どけふもつむなり

ある人の年賀に申遣しける

蓬萊の山わけ衣すそたかく

かゝげてのぼれ千代の鶴脛

ある人の六十の賀に

食傷と腎虚をなせそよい年を

してご子供や孫が笑はん

賀

鼻の下一寸ありてべらばうに

長いきをする君ぞめてたき

朱樂館家集

春

立春

棹姫の笑ひかけつゝ山のはを

あらはす方に春や立つらん

さる程に睦月たつよりけさはまた

生れかはりし心地もぞする

あし原やけさは麒麟もまかり出て

おのが角くむ春にあへかし

佐保姫のきたる霞のうちかけは

けさしも春のたちおろしなり

あら玉のとしさへみがき上たれば

卞和の玉も春や立つらん

年内立春

年の内にも春はくれども掛取の

せがむかぎりはあらしとぞ思ふ

鶯の聲はやきゝて山里は

けさやまことの春と思はん

元日

土器の土性ならばこそその酒

ひとつは返せやまご魂

鏡餅

霞さへ春さへけさは立つものを

餅はすわりの尻の重たき

年禮

年禮の門の柳の糸車

廻り道して客やくるらん

初春

あふみのや鎧の山といふつらの

春にうつらん翁さびても

子日

けふはまた引手あまたの姫小松

たれとねの日の春ののべ紙

いまだ夜は深き小松の寐いりばな

はり起してもさらは引かなん

亥日小松

亥こゝにの日からこゝにはやねよこの刻限を

きけば小松もひけよつの頃

雪中若菜

いかさまにしても若菜や包みてん

己が頭の雪間たづねて

春の野の鶯菜とてもう人の

けふは雪間にはうちてぞつむ

鶯

なべて世に春つぐるとて九萬里の

つばさはまさかからぬ鶯

梅

詠へたやうに下臈の一寸戸

これより匂ふ庭の梅が香

杉田の梅

春風もよい程ヶ谷のこなたより

横へ杉田の里の梅が香

ある人の許に梅の花見にまか

りけるが鰻を手づから焼きて

酒すゝめければ

目の前で手づからさくやこの花に

匂ふ鰻の梅がかば焼

若草

あつさ弓春 ながめ 葉さへ

矢はずに ゆる垣の檻

如月のはじめ雪よりける日豆

腐に山の芋すりかけたるを喰

侍るとて

山かけにつもる豆腐の泡雪も

春のものとて腹にたまらず

春の日内匠はしらかもとにて

刀脇差のものによそへて春の

歌よみける中に柄絲を

雨ふりて地まで刀の片手卷

ほぐれぬ春の柳屋の絲

早蕨

もえしその蕨のあくはもえしその

蕨のあくをかけてこそぬけ

春駒

淀からはみづの御牧の程近く

手にさるやうに見ゆる春駒

春興

長閑なる春のひらめのかたみをも

若菜 交てつみ入にせん

野近

松をひき若菜をつみて丸に日を

二日つぶせし春ののらもの

春の野はやくごもやかて侍れかし

子を思ふひばり妻慕ふ雛子

初午近

初午はむつきのうちにやゝ近し

最早轍のちをつけてみん

初午

武隈のまつにはどなくきさらぎや

いなりの酒はみきといはまし

稻荷の御社に豆腐捧げたるを

みて

此神の聞召てやさゝげたる

豆腐も八の御耳はあり

遅日

夕暮にまた訪へば花の主曰く

きのふはいつもながら早々

曲水宴

盃も春も水に流るゝは

ほろ／＼ゑい和九年母のかは

彌生の半洲崎なる望法欄にま

かりける時人々庭より海つら

の汐の干潟に下り立て貝拾は

んとていざといひけれど腹い

たう減りければ

やれ／＼と汐のひる飯急ぐなり

青海はらのへるに任せて

朝花

山櫻一重羽織もしつとりと

身に添ふ花の朝濕りかな

吉原花

手の届くほどに禿を抱上げて

折らばや花と花の吉原

田夫息花蔭

咲花の一樹のかげに山がつの

休むも花のくされえなれや

花下酒宴

此節はなんば櫻のき下戸でも

肴あらしよ花にいとはん

花のもとに香煎をのみて

香餅によし花の香はまがふとも

さのみは風の素湯にちらすな

落花

散らふかと皆人案じ煩へば

花にも風は百病の長

隣なる寺の櫻を折らんとてゑ

せ法師木に上げるをみて

花の木に上る坊主の憎ければ

落て手ふさに怪我してよかし

餘花

君が代の春にあまんの花し見れば

みにつく粟も布も物かは

堇

紫の初元結のゆかり顔に

さしの額すみいれぞさく

ある人籠の内に飼置ける時鳥

の彌^こ始より鳴くをきゝて

鳥春をかけてか鶯の

卯のうちに飼はれてぞなく

燕

己が巢に土をぬる夜の明けぬ間は

つばくらやみに羽をやうつばり

對花惜春

いやましぬ花は一輪くゝに

へれども春を惜む心は

三月盡

春もけふねきりはきりの灸上戸

惜めどいつかひとひとぞなる

夏

更衣

花にねる蝶の夢の間蝶よりも

手になつきたる蟬の羽衣

卯花如月

卯花は中々月のある夜より

月なき夜半にみよ月の如し

郭公

時鳥みそかに鳴て過る夜は

あとに残れる月影もなし

鯉

時鳥けふ世にもらす聲よりも

別て鯉のねこそ高けれ

柏餅

すだちせぬ雛鳥なれや柏餅

これも並へてはにくゝむなり

筈

とにかくに曲りくねりて生るのも

又南山の竹の子ぞかし

江五月雨

どきたまへ磨き玉江の五月雨に

水にますみの鏡鑄させて

撫子

朝露の色のちくさにかがやきて

日の出る國や大和撫子

通辭だにあらばいかにも譽てまし

から撫子に大和撫子

琥珀とはちがひて露の白玉は

ちりだにするぬ床夏の花

小梅既熟

黄金の色となるまで熟したる

梅はもとより小粒なりけり

照射

しかくの用事と松をふり立て

急ぐ五月のやみのますら男

水雞

はつれたる門のかけがね掛合に

たたくは水雞松の夜嵐

夏月

夏の夜の月をあまりにさゝせんと

わざと格子はさゝぬ涼しさ

蚊遣火

まれにくる蚊は叩いても防ぐべし

いふせ安宅の算の杉の葉

氷室

夜のめをも寝ずに守らん氷室守

此丹誠を水になさじと

水無月の日にはしつけて松ヶ崎

かたき岩根に冬のかたまり

樹陰汲酒

茂り合ふ木影に月はさゝすとも

のめならの葉のひろい盃

山夕立

つくば山つゝくあのみねこの峰と

くづれてきはふ夕立の雲

水無月晦日掛乞の來て改め侍

りければ

貯もみなつき果てゝ一文も

けふはなこしのはらへだにせず

秋

文月つい日赤坂なる桐屋とい

へる家のあるじを始めて訪ひ

侍りて

秋もけふこぼんの桐屋一葉より

まづ落そめて藏にみつ次

七夕扇

七夕もさながらとしに一度の

扇はいまだすてぬ初秋

七夕後朝

よべかりし硯をしばしとめ置て

ほしやけさかく文月の空

文月十三日掛乞の來て切に攻

侍りければ

鹽鯖のからき浮世の攻太鼓

うつやてんく舞の一さし

葛飾の龍眼寺に萩を見侍りて

よせぎれとみゆるお寺の錦かな

ごこもかしこもはぎたらけにて

秋野

狼籍に花をもふみにふまざれば

秋の野守のどひやうそなき

靈棚露滋

蓮葉に手向る水は濁らねど

野面あざむくつゆの玉棚

吉原草市

靈祭る草葉にけさはうかれ女の

その朝顔も添てかはまし

鹿

秋草のはなの先より聲立て
おとろかすがの野邊の棹鹿

山鹿

棹鹿の角は紅葉の木の間より

枯たる枝さみえて淋しき

某の庭の八朔梅ひらきけるを
みにゆきけるに折から雨ふり
出ければ

一枝を折しも雨はふり出ぬ

けふをたのみや梅の花笠

榎

夜嵐に垣根はねても寐ながらに

めをさましたる朝顔の花

晝朝顔

はなのさき斗洗ひし手拭の

ひるま置たる朝かほの露

野分

柴の戸は野分の朝もかけかねの

ひちを枕にねて起ぬなり

里の子に追かけられていか栗の

地をかけ廻る風のはけしさ

秋夕

黄昏のそらめに白きふと股を

みて肌寒き秋の夕暮

題しらす

はせを葉の二百十日に一枚も

破れぬ御代の秋ぞしづけき

十三夜月

そめ出来ぬこんやの月を眺れば

秋の最中はたしかあさつて

きく月の月見はもちの月ならず

籬に花のさけや盃

十五夜月

天の原月すむ秋をまふたつに

ふりわけみればとうと仲まろ

十七夜月

ぬきはなす雲間の影は武士の

こしにさしたるたち待の月

待月

月をまつ月をまつとて待夜半の

その偽は影でうれしき

緇素望月

すみ渡る月に虎溪のはしたなく

笑へばともに口を秋の夜

旅人對月

この間都を立て鹿ぞすむ

きせん泊りの旅籠屋の月

山月聞鐘

月をみる口は一つぞはつ瀬山

かねきく耳は二つあれども

擣衣

邪魔いたす男や槌て追ぬらん

妹がきぬたの間のひ間つまり

紫苑

けさははや鬼のしこ草をのが目も

露もつばかり秋はかなしき

鳴

萩すゝきなへてふしみの秋ふかみ

鳴より外に立ものもなし

赤蜻蛉

忍ぶより聲こそ立ね赤蜻蛉

をのがおもひに瘦ひこけても

秋田

秋の田にかゝしに苔のむさすして

鳥おそろかす弓そめてたき

菊

人はみな秋をかなしといふ中に

かゝるかのある菊ぞめでたき

籬菊

不得手なる人も籬の露ほどは

なめて千代へよ菊の盃

九月九日

山里はけふ節日さきくさへも

淋しき茱萸のふくろくの聲

紅葉

梅櫻卯木と花にみつかれし

目にもさはらぬ秋の紅葉ば

楓葉は千しは百しほしほしみて

から錦とや人の見るらん

栗

いが栗の笑はふくめど秋風の

ふけばあたまの上にあぶなし

暮秋雨

長月もやゝふりぬれば枕にと

まげて短き肱かさの雨

浦時雨

不慮にふる時雨じやとても濡るは

馴し雄鳥の蛭の袖笠

殘菊

病葉に冬の笹も人や訪ふど

ちとしはたれてみゆる白菊

落葉

山里はちりし紅葉の錦をも

木綿ほどには思はざりけり

冬

初雪

集ても今は老の學文に

ちと不足なる庭の初雪

青樓雪

降雪もよしや夜見世のすがかきを

ひく絲道のあとほうづまじ

堺町雪

けさみれば木毎に花のさかい町

あら面白の雪のふり付

雪中驚

これにだに目鼻がありて固めたる

雪のうごくと思しは白鷺

水鳥

折立てさても短き足かなど

我みくらべて鴨やなくらん

網代

網代守る人も手足のこゝえては

只ひをほしいとのみいふらん

垣寒草

葉もつるも枯し垣根のはちふくべ

重みにつれてかしく寒けさ

池寒芦

麻袴ひださへ折て池水に

たゝめるばかりみゆる枯芦

河豚汁

我命あふにはよしやかへずとも

河豚にしかへはさもあらばあれ

衾

十分に足をつゝめば手にたらず

手に餘りたる麻手小衾

歳暮

借金も今は包むにつゝまれず

やぶれかぶれのふんどしの暮

立てみし柱曆も寝轉んで

よめるばかりに年はくれにき

十二月けふとはなりぬ九月盡

三月盡を二つかさねて

思ひきや三百五十日あまり

けふかあすかに年くれんとは

年波のよりそふはてや越ぬべき

柱曆も末の松山

物ないひそ暮る今年はたけなはに

なればなるとて引もごさなん

師走の末に雁の鳥をかへとて人

のもて來りけるをかはで返す

とて

かり金とさくさへぞつと師走しま

いやよなしても八百の鳥

離別

三井長年が都へかへる馬の錢

すこて

旅衣きさまの店はふるさに

かへる錦も仕入いくむら

旅

一里ぞと聞し山路を一里きて

猶一里ある旅ぞはてなき

難波へゆく人を送りて

ゆく先は勿論あしの名所とて

大坂たびのふみだしのよき

祝賀

八十賀

彌が上になはいやそちのその餘計

たんとならずは千年でも經よ

祝

君が代は天津乙女の撫へらす

巖もさゝれ石となる迄

寄枕書祝

床もはやをさまりてよい君が代は

もういく千代と祝ふ枕書

寄新宅祝

水繩もひづまぬ小石かはら葺

いはほとなりて動なき宿

寄酒祝

まつくんで南の山の壽に

酒の相手もかけすくづれず

寄袋祝

口にいまあまる千年を袋より

きりのもぬけて長い御壽命

寄角力

君が代に角力の關と關の戸は

いづれ左も右もさゝせず

寄鳥祝

治れる御代か諫のつゝみにも

こけかうとなく鳥ぞかしこき

君かへん齡いくらと數ふれば

十貫文にあまる錢龜

倉部行燈が改名せるを祝ひて

改めし其なの花はせんざいに

のこす詞のたねやとるらん

戀

逢戀

かへしたる夜の衣やたゝみざん

近江表にあらはさねども

これまででに絞りし袖やあさくみん

うれし涙を今宵こほせば

夢中逢戀

思ひにてかほと五臓のつかれずば

夢にも稀にいかであふべき

不逢戀

戀衣ぬへどゆきたけあはぬなり

上總木綿にけふの細布

そろばんの掛て逢ぬもわりなしや

たへず涙の玉ちがひして

通書不逢戀

かきそへて封じ直せど封じ目の

あはぬもつらし文はやれども

未言出戀

口の外へ未出さねば三寸の

我舌にのみ思ふ苦しさ

我戀

我戀は下手のはりたるふすまがた

かたの如くに逢ふよしぞなき

纔見戀

さ斗りのかひはあれ共ありそ海の

いそのみるくひみの少なさよ

待戀

こぬ人をまつ前昆布の鹽ならで

袖こそしめれみづからぞうき

後朝戀

衣々に絞りし袖をかた敷は

かたつらしめるけさのうたゝ寝

老戀

往かけの駄賃と人のにくまらずは

老が命もあふにかへなん

戀のこゝろをよめる

ものたねと人はいへどもあふ事に

かへぬ命のありかひぞなき

寄神戀

知るや人はなをかみろき神ろみの

みこと夜ごとなき明すとは

寄書戀

くるくゝとだまして横をふけるに

紅毛もしのよめぬ心根

寄稻妻戀

暫くも夜毎に尻をすへざるは

わが妻ならぬいな妻ぞかし

寄大根戀

戀死なばこのみももとの土大根

うしや中々いけてをかれて

古かね買の戀

袖の上に涙は雨とふるかねを

高くかふてはあはぬ夜ぞうき

寄狂歌戀

言やらんゑんさへ遠きたはれ歌

ごうぞ手にはの逢ふよしもがな

寄海月戀

知るや人所詮いひよる筋のなき

くらげも骨にあふ夜ありとは

竹枝爲輕の父の思ひにて侍り

ける時よみて遣しける

申べき言の葉もなしあしすだれ

あのよこのよのふしの別に

大東冬名身まかりければよみ

て遣す

蘭相如いまさはまたく此度も

よもつ國より玉かへせかし

同じく犬のをきつきにむかひ

て

來世にてならば佛果をえのころよ

なむあみだぶちく

無常

養生も相叶はずといふ文を

そのまゝ顔に押あてゝなく

雜

天

愚案にはすめぬものからすめる物

昇りて天津空となりけん

不二山

白扇を逆さにかけし山は今

つまこかしたる烟たつなり

川

高野山たが毒ありとをしへけん

はてのみこめぬ玉川の水

人々六玉川をわかちて歌よみ

けるにわれ高野の玉川をよむ

べき定なりけれぞいたく酒に

酔ひてよみ出ざりけるをいか

にいかにご人のせめければ

酒ゆるゑによし忘れても珊瑚珠の

われにはゆるせ玉川の水

隅田川

名に負はぬ東のはての都鳥

白きは雪とすみ田川かな

淺茅原

露をけさかれは淺茅がはらくと

ちるや鏡が池の水かね

山家

里の子は猿といふとも山かきの

もとに住つゝ身こそ安けれ

山里はいまだ朝茶も出來ぬ間に

烟りふくめる軒の松か枝

庵

灯火はいつも嵐にふきけして

さてくらしよき松の下庵

古寺鐘

なく鹿の園の別れはさらぬだに

悲しき秋を鐘ひやくなり

岩に海ほうつきつけたるかた

かれたるに

沖つ風うみほうづきを吹からに

自然どあはのなるこそきけ

童舟をこぐ

さうだそだそだちがらこそ賢けれ

浪も高瀬の船頭の子は

竹色不改

其色はかへるきでなし草でなし

竹のふしぎに世々をふれども

鶴

浦浪のよせてもすそはぬらさじと

まくりあげたる鶴の毛衣

扇に鶴を畫きたるに骨鶴の目

を貫きたるを世人めでたきた

めしに云ならはすめりある人

この目さしの扇にうたよめと

乞ければ

千代をふる御了簡なら常着には

これを召させよつるの毛衣

文月十二日の朝あけ方に雪級

主の田町の別荘にふと蓮見に

まかりけるにゆくりなきある

じもうけにれいの酔侍りて

もてなしは露をたまちの水うまや

濁にしまぬさらさ蓮葉

秦黒つらが家に人々つごひけ

るに彼此あるじゝ侍りければ

梓弓彌左衛門町のまごゐとて

はたを抜たるけふのもてなし

ある人のもとにて酒のみける

に美はしき女の童のうなぎの

かばやきもて出ぬれば

かばやきのうなぎは妹が髪なれや

さすくし迄も油じみぬる

焼物の盃に酒をもれば自ら盃

中に星のかげうかむとて重寶

にしける人のもとにて

一口は下戸でも千葉のすけよかし

家の秘藏の盃にはし

酒

足もともよろ萬代の末迄も

のめ狸々のすきな酒なら

東方朔

三千歳になるてふ桃の盗人を

みればよはひも手も長くして

鍾馗鬼を挫ぐ

其昔みしは夢野のしかばかり

霜にやいたむ鬼のしこ草

大原女

黒髪のおうつりてもえ安し

安うはめせよめせよ大原木

遊女

年のあく月日はいつとかがぞふべき

指さへ切し仇し身ぞうき

唐琴といへる遊女うらちとい

へる禿にをしへて杜若をゑが

かせければ

うつし畫のかきつばたなら唐琴の

うらちに膠ちごひけよかし

うかれ女の浴したるかたかき

たるに

打かけの裾よりわきてわきも子が

風呂には湯をや長くひくらん

けふなん武士八十氏の家にて

ふたゝび春の來れる心を人々

のよみければ序に

武士の八十氏川にいざよへる

春や田原の又太郎月

谷風櫓の助淺草藏前八幡の社

内にて角力興行の折小野川榮

藏にはじめて敗れたる時

手練せし手をどうろうがをの川や

かつと車のわつといふ聲

智恵内侍のよみ歌にかへし

四方山のこぼつもらは梓弓

引絞りても矢ははなすべき

平秩東作が商ふ烟草をほめて

きせるもてこちだに吹は春日野の

春のひざらに草はもえなん

世の中しはふきやみいたう流

行けるにその頃世に双ひなき

角力に谷風櫓の助といふあり

この頃の風つよければこて皆

人谷風と云ければ

水はなの誰かはせきをせかざらん

關はもとよりつよき谷風

詞書略

見し月は蘇子てすめるや曇れるや

ひとり死客ひよりは痔客

狂言太刀奪

東のまに太刀や奪はれ太郎冠者

さしつめ己が目釘ぬかれて

柳に蹴鞠書きたるかたに

夕雲雀それにはあらで沓音も

高くあがるや一羽庭まり

貝の書に

取ためて ふ汐干のかたはあれど

千種の貝につくる世はなし

菊を書きたる扇に

秋きてもどうぞすてずに此扇

お手にならさしませの白菊

物名りうたん

こころ草はかるたとみれど小六月

七八九十とりうたんかも

楠成石

搖せごうごかぬ石とけしほども

申ぶんなきくすの君かな

人壽百歳七十稀一分衰老一

分癡中心二十餘年事幾多歡

樂幾多悲

やゝくしとはへ揃ひたる齒も落て

うまく物くふ程ぞ少なき

懷舊

いつみてもさてお若いと口々に

ほめそやさるゝ年ぞくやしき

述懷

世の中をあかでうきとはうその川

ながれわたりの果のたのしさ

寄玉述懷

はけしより夜も光りて老らくの

あたまは玉の數にこそ入れ

如是本末究竟等

なく聲をぬえとは聞ご尾をみては

尻か頭かいかでわくべき

智恵内侍かしらをおろしける

後尋ね行て

髪のありし昔かたらんあまそゝぎ

まやのあまりの久しぶりにて

釋教

先住のあとをつがんと新發意は

日毎にのりをときてまします

眞乳山歡喜天に詣侍りて

わに口をならせばまつち山彦に

こたへてひやくはんゝき天

大津繪の鬼を見て

なむあ彌陀ぶつと悟りし發心に

鬼も早速滅無量罪

大津繪鬼の念佛

佛名もうろ覺之にて鬼の目に

涙ゝと唱へてやゆく

小さくひきぐ家に神棚のあり

けるにともすれば人の頭うつ

に心つけんと此うたをかきて
出し置ける

千早ふる神にも店をかすなれば

大やしろとぞ人のいふなる

この頃生れとしの七ツ目なる

十二支の繪かきて身の幸を祈

るに大黒天のみかたち繪馬に

かきて初午日稻荷の御社にさ

さげ奉るをみて

甲子のその七ツ目のはつ午に

荷ひし稻のたねも摩訶迦羅

故混馬鹿集の歌ともやがて廿

卷となれりければ人々祝の心

をよみけるついでに神祇の歌

とてよめる

ここの葉はする住吉の神がきに

かきあつめてよ松のはた巻

辭世

執着の心や娑婆にのこるらん

よしのゝ櫻更科の月

滄洲樓家集

はしがき

一滄洲樓馬場金埒の家集として上梓せしものあるを知らず只余の見たる所にては文政六年版の追善集『あさ佛』に同翁自筆の狂歌百首を掲げたるものあるのみ故に茲には各撰集より同翁の詠を拾ひあつめて四季戀雜の順序にかいつけやがて滄洲樓家集と名づけ置きつ

一馬場金埒は通稱大坂屋甚兵衛初號物事明輔又錢屋と號す後ち蜀山翁より滄洲樓の號を譲らるつぶり光宿屋飯盛鹿津部眞顔等と共に實に狂歌四天王の一人なり
き文化四年十二月十日歿す

滄洲樓家集

春の部

年内立春

春たてる年の内田の一徳利

古酒とやいはん新酒とやいはん

右の歌『あさ佛』には「年の内に春は菊屋が一徳利古酒とやいはんこし酒とや」とあり

春のはじめの歌

花咲かばこよと諸國の年始狀

一目づゝでもおおよそ千本

早春

春きぬと行かふ袖も花なれや

六位はみどり五位は紅

全

百鳥の中に一きはあら玉の

としのあしたの蘆田鶴の聲

試筆

かぞいろはめこも奴もまづ笑へ

筆試むる春のざれ歌

門松とりたる跡を見はべりて

七くさもはやすぎ立てる門ならで

しるしばかりの松の二もと

霞

神路山なほ分いればなにもなく

たい春霞たゝせ玉へり

鶯

山里はまだ白雪の不老門

おそき月日の鶯のこゑ

柳間鶯

青柳をいと梓にかけて鶯の

いこくり／＼こくりこぞ鳴く

梅

もろ人に香をば譲りてごめじとや

袖なし羽織きたる梅守

全

立いでゝ見れども梅のにははぬは

鼻に障子のあればなるらん

柳

野わたしのさをの片手のさし柳

させば其まゝ横さまにつく

行路柳

よりさはる袖に袂にうち靡く

柳は道のものにぞ有ける

梅柳交枝

春來ぬと花屋の柳うち靡き

梅のはつ荷もひもを解けり

若菜

門過る流れをすぐにながし元

水菜も芹もことのたるほど

雪中若菜

佛の座へて尋ねれど

蓮臺野にも見えぬしら雪

春雨

春雨はいとにふる根の萩薄

思ひ出顔にむすぶ白露

春夜

春の夜の曾我物語よむ中へ

またどこからか出るげぢく

遊糸

春日影高観音にかゝやきて

御手のいさからつゝく遊糸

呼子鳥

むかしより猿にしておく呼子鳥

ないても見まい見てもいふまい

花

入相の鐘にちりけはこたへても

嵐はよほど花にけんべき

化物百首歌の中に櫻を

花の雲天狗櫻ごあらはれて

空からごつと笑ふやま風

志賀山越

雪ならばいくら酒代をねだられん

花のふいきの志賀の山駕

湖邊花

塗笠の墨もまだひぬ大津繪に

花ちりかゝる志賀の山風

古寺花

花の雪瓦の松にふりつみて

いさ曲りし志賀の古寺

夢見花

思ひつゝぬればや夢にみよし野の

花は錦の夜著で有たか

橋下落花

ながれゆく櫻を渦に卷よせて

花をもねたむ宇治の橋姫

花に鳴く蛙といへることを

影ひたす花の錦も池のはた

をられぬまゝに蛙鳴くなり

遅日

櫻咲く遠山寺の一里鐘

つくくおそき日あしなりけれ

暮春

我庵はちりもほこりもみな櫻

此月ばかり三十日掃すな

夏の部

首夏

花はみなおろし大根となりぬらし

鯉に似たるけさの横雲

化物百首の中に更衣を

今朝ははや夏もきつねが藻の花を

かぶつて化のかは衣がへ

餘花

有あまる金の御嶽の櫻花

日ごとばつばと散らしたれども

郭公

月の輪の渡をこえて時鳥

しのぶその音も亂れそめにし

全

時鳥あたらし初音に聲そへて

耳にかしまの蛩のさへづり

全

郭公なくねもてうご八せん

はじめ終の空にふるほど

都時鳥

時鳥西八條に啼くといへど

までの小路のまてど甲斐なし

螢

玉水や井出のはたるは山吹に

みのひこつづゝ有るかごぞ見る

夏月

夢なれや浪花のあしの短夜に

かりし太夫とふし待の月

初鯉

烏帽子ども松ともいへば初鯉

かたみは須磨の鹽焼もよし

杜戸八景みにまかりけるに心

無村といふ濱邊にて初鯉をも

てなされて

石皿へ山にもりこの初鯉

煮るごはあまり心なし村

扇

折扇をりく鳥の聲に似て

たゝめば竹の雪をれの音

都白雨

うち日さす都大路は土くれも

よき匂ひなる夕立の雨

納涼

夕月の出汐を松の下すゝみ

舟にはあまり風はやの浦

秋の部

虫

きのふ頃鈴菜すゝしろつみし野に

ふりにけるかなすゝ虫の聲

朝顔

葉末からこぼるゝ露ををしむらん

花に包みてしばむ朝顔

江邊曉萩

みろく寺の曉つぐる鐘の音に

猿江の萩の聲叫ぶなり

鹿

譬喻品の聲さへ霜にうづもれて

よしあし門に鹿を啼なる

木曾路にて鹿をきゝて

つまごなる妻や戀ふらんさを鹿の

聲は細くて長くての原

紅葉

山寺に月まつほどの紅葉狩

はんにや湯でもちと出よかし

全

暮るゝかど雨ふり山をこえ行けば

日なた薬師の峯のもみぢ葉

化物百首の中に菊を

見るうちにふり袖垣をうちこえて

七八尺の大かぶろ菊

月

西の國百方石もとるならば

月の入るべき山はあらせじ

全

夕暮の浦の宮屋を見なほせし

月の桂の花もみぢかな

全

夜もすがら月に袂をしぼるとは

へちまのやうな我心かな

待月

小舟して月まつ宵の侍従川

ふけゆく鐘も鶏もものかは

夢後見月

夢に見し三保松島もよくみれば

今見る月の中にこそあれ

名所月

ひとつゝ田毎の影をかぞふれば

十人前のさらしなの月

暮秋

ながれ行く月日も秋の水鳴子

がつたり落のけさの寒けさ

冬の部

旅宿霰

霰ふるかしまの宿の板庇

よもやぬけしと寐てはゐれども

雪

弟雪の丈は俄に高くらや

姉が小路もかたづかぬまに

全

宿かれば簀子もいつか雪をれて

枕もすべる竹の下道

残雁

雪霜にふりこめられて残りけむ

白どまだらの雁ふたつみつ

爐火

埋火の炭も角文字ふたつ文字

すぐにいのこの文字とこそ見れ

早梅

一とせにひと日乙子の朔に

あになからんや梅のはつ花

歳暮

行く年の尾頭かけて鹽引の

一尺ほごになりにけるかな

戀の部

初尋縁戀

はつせ山祈らばなごか見し人の

又縁日に詣で來ざらむ

尋不逢戀

耻かしや百舌のくさぐさ尋わび

まつりさとしてかへるうしの手

隔二條戀

隔たうし夜頭もてうそ親指の

人さし指の折のむるさよ

名立戀

ふりおけし宮守の灰やあやかし

はつと立たる今の浮名に

忍戀

溪川しのぶの里は我にありと

つねなき戀の道案内せむ

祈戀

祈らばや天の戀の山路にも

手あり足ある泊瀬の観音

別戀

もろもろにひめふる袖の紋所

おぼしひなたへ別れ路の空

全

さぬちのこころ鳴しの長羽織

おへりのさきも折にこそとれ

寄鳥戀

我心あけて見ずたき折々は

胸に穴ある嶋もねがはじ

寄角力戀

膝をひざ手にてささめて筒井筒

あすさふ程に逢ふさしもがな

寄算盤戀

龜井算ひく手あまたに成ねれば

身をいくつにや割てあふべき

職人づくし戀の歌

うき人に何なさ中の壁訴語

落らすば壁の上ぬりやせん

雜の部

萬族

裏の國へ下りける時

陸奥の十符の膏肓のまけれど

七つと三つの孫ぞ戀しき

全

松島やをじまつあまたある中を

いつくもむつのつとくいにまし

五大堂の髻頭は美女の面にし

て左右の黒髪はわたかまりた

るをもて世の當のこころに釣

たりいかなる故にや

更るまで來さぬ人を松しきの

鐘に喰つく女あやかし

二十三坂

鳥だにもさはやとさりの鳥山

なご黒羽に小休もなき

木連川なるしげの薬師に達佛

會のありとて作山のあたり

る文ごも道もさうあへず

つゝし咲く山路と野路も青裏

きつれ川までつゞくもろ人

蘆野蟹や澤などいへる處を通

ぐ

草臥しあし野のあしの曲らぬに

又這ひのぼる蟹か澤か

富山大徳寺の書院より再び松

島を望みて

千松島みな我物ごみちのくの

長者も富に倦ず詠めん

白河關の明神

かけて祈る老が眼鏡の玉津島

ふたつ並びてくもりなかれど

熱海のゆあみにまかりける頃

米かみに石ばしかませ玉ふなよ

齒もこゆるぎのいそぢ越えては

藤澤にて

車田の繩手のかたのゐざり松

これも小栗の古跡なるべし

軍神の森にて駿河の友に別る

るごと

立かへり又も見かへる後面

狐がさきに杖をこゝめて

高砂浦

觀世水寶生雲とみるまでに

長閑なりけり高砂の浦

ここのまゝの社を尋ねて

富貴自在とくありといざ祈らばや

ここのまゝなる宮にまうでゝ

跡たれし髪長姫にすべらぎの

御代長かけどかけて祈らむ

俵山といへるが剃髪して旅に

いでたつを

一夜ふた夜かさね茶碗の旅簞笥

樂の一閑人と名のりて

江の島にて

江の島のむかふに見ゆる烏帽子岩

鎌倉殿のあたまあぶなし

隅田川にて

貴妃櫻小町ざくらの鐘が淵

うつくしからぬ女人禁制

隅田川の向島にて蜀山先生の

舟逍遙したまふにまゐりあひ

てふところ紙に書て參らせけ

る

二つ文字牛の角文字二つ文字

ゆがみ文字にてひとつ飲まばや

千立堂さみだれの頃ふる里に

かへるあしたうまのはなむけ

すこて

雨もはやにじり上りにあがるなり

お茶をたて場にしばし待合

菊川の榮飯茶屋に脇差を忘れ

侍りて掛川よりとつてかへす

とて

一日に二度こゆべしと思ひきや

命からく小夜の中山

旅宿をよめる

此宿のくゝつをさぞとしる椀の

手にとるからにゆらぐ玉味噌

神祇

神風やいしやも茶道も附鬢に

さわりあらじとはらふ大ぬさ

言の葉の玉津島根によるならば

へたのわかめもいつかあがらむ

いなり山祈るしるしの杉形に

つむや二月の玉おちの米

花また村の神事の鄙ぶりたるを

芋頭まだ生ゆでは味むらの
さわぎきはへる酉の市人
かしまをごりのうたに
寛くともよもや抜けじな古鳥帽子
かしらにかみのあらん限りは

哀傷

八十隣翁身まかりける時
鶴によせ龜によせたる節を
蠟燭立に見るぞかなしき
有政一周忌
をかしうて涙こぼせしざれ歌は
涙ながらに見てもをかしき

菅江三周忌

忘れじなあふむの丁馬つくくくと
鳩の杖して道を行くにも
泡成みまかりける時
へんがへて置けば能のに先の世の

約束事もここにこそよれ

幼きものゝ身まかりしにしと
き調じて手向るとて

手向ばや彼岸櫻の花よりも

一重二重いしゝのかす

冬のはじめより膈といふ病に
てこのめる酒ものまれす湯水
だに見いれすうち臥をるに京
傳子のもどより酒おくりこし
たりこゝろえず門たがへにや
と思ひしもしるくやがてかの
使のをのこ立かへり來て今の
樽は狂歌堂へ參らすべきをあ
やまりて侍りかへしたまはり
なんどわびければさればよと
枕べの硯引よせ書つけて樽
にゆひそへさせてつかはしけ
る
膈やみの兼てかくとは知りつゝも
酒をかへすは苦しかりけり

釋教

題しらす

あなたふと壁も障子も見やぶりて

有か無かにすめる燈し火

僧の松つくるを見て

墨染におもはぬ罪をつくり木の

松に五かいを保たせにけり

畫賛

鬼の念佛

大津繪の鬼も十八本願の

光明丹にいつそまりけん

狼の衣きたる

極樂はこゝをさること遠吼の

あみだが峯のこだまにもしれ

つくま祭の晝に

をかしくばお釜の前で笑うべし

よくかさねたるつくま江の鍋

遊女の文かくどころ

はかざらぬ筆のあゆみも八文字

誰が天神のふみとなるべき

婆々が河に物あらふかたゑが

きたるに

昔々あつた土佐繪を其まゝに

洗濯したる水繪の具哉

大傘を風の吹ごりたる書に

世の中は破からかさの骨ばなれ

本來空にかへす木がらし

假名のふもじいくつも書つら

ねて雁の飛たるに見せ霞のあ

たりにはみ文字あまたして遠

くゆくさまに思はせたり

ふしのねのふもとはふみのふの字にて

こほはこの字とこゆる雁がね

祝賀

冬祝

はやく寐て遅く起よといひ傳ふ

冬にぞしるき御代の豊かさ

題しらす

平らけき御代を見真似に竹のよも

月もたひらに満る十五夜

三世羅か父ぬしの七十の賀に

かしらおろしけるをことほぎ

て

祝ふべし親の光はなゝひかり

又ひと光りひかる剃立

寄袋祝

巢ごもりの鶴のよはひを吹いるゝ

竹の袋のいはひ歌口

○

瀧

酒の香はたえて久しくなりぬれど

山に酔たる養老の瀧

花間鐘

紅井の花の錦の木の問より

萌黄純子とおもへば此鐘

百物語の中に鬼を

あばら家に生てふ鬼のしこ草は

そのたけ五丈ばかりなりけり

おなじく山鳥を

山鳥のおろかな人を化してや

ひとり寐る夜の伽にかもする

何がしの別荘をたづねて

かりそめの住居も夏をむねとして

みぞおちほどの池もある哉

狂歌酒百首序

藤原定家卿にゆかりありける曉月
房商珍といへるは雲井を出て雲水
のゆくゑをさだめず常に酒と狂歌
を樂しみとし世をおかしうおもひ
くらしたまひし人になん有けらし
その頃ある人此僧にむかへて定家
卿のごとくに和歌を詠したまは、
そのほまれ聞えあらんなごいひ
けることはの下に曉月に毛かむく
むくとはへよかしさるものゝ子と
人にいはいれんかくこたへたまひし
かば一座うち笑て興じけるとなん
またある年の末に定家卿のもとへ
春もうくべき種なかりければ米一
石たへとて曉月かしはすのはての
虚印地としうちこさんいしひとつ
たへと讀てをくりしかば卿の返し
きた家が力のほどを見せんとて石

をふたつに割てこそやれとて米五
斗ををくりたまひしとなり誠に
おかしく興あることにこそ侍れ曉月
坊の狂歌とて物のほしに残りける
中にも酒の百首ありつれゝなる
ふしにこの百首を見侍ればそのす
がた艶にしていやしからずされば
由縁齋の翁も此風躰をよみ習ふべ
きよしひ置ぬ予近來の狂歌を見
るにすべてそのさまつたなく或は
むづかしく又はやすらかによまん
とてしれたることのみいひつらね
てなんの曲もなくよめるもありお
もふに和歌連歌狂歌俳諧各そのお
もむきあなればどにかく狂歌は狂
歌をよむべし時世にしたがひて風
躰やゝたがひ侍るといへども一首
に曲あることはを眼としてすなほ
におかしくたれかれもきこえやす
きやうによみ出るはいにしへ今な

んそけじめあらんや星霜をふるこ
と五百餘年のむかしを遠くしたひ
て此巻を久しくひめをき侍りしが
なには江の藻に埋れんことのほゐ
なくくちせぬことはのたまかしは
こたひ世にあらはし予か門にあそ
ぶひとゝまたは初心のをしへに
もなれかしとおもふのみ時に寶曆
八の年戊寅初春日

くり返し誰も見らん酒百首

管てはないがおもしろいゝ

浪花 一本亭芙蓉花

百酒狂歌序

亡師商珍詠百酒狂歌自號醉吟藁生
計嗜酒樂醉中吟花嘯月忘晝夜寔悠
然方得者哉陶寫心胸有古賢風發越
標致不耻先輩覽此歌者於狂句之外
宜着眼于時文和四年三月盡

江湖散人 季鞠

狂歌醉吟稿百首

曉月房作

春十五首

けふといへばまた珍しき味酒の
みは酔ながらはるは來にけり
いる香をも知る人かたきむめ酒は
すきものならでたれかのむべき
霞たつなにはわたりのおなかざけ
たが梅壺にいれてのむらむ
三日の日の酒にうかべる花の名の
もしたひけふはのむべかりけり
のむ酒のかすみのひかりあけ暮て
花にゑひぬる名をもたつらむ
春ふかきかめ山どののみやこざけ
はなたてまつる人やのむらん
木のもとにさけひつれたる酒酔は
猿のはなみる心地こそすれ
春はたゞ柳のいどのながくど

くりこしても酒をのむかな
うぐひすの巢立のさけの一銚子
ひとくくゝと急ぎてぞのむ
雲雀毛のむまからざりし酒なれど
のみあかりてや上戸なるらむ
おもひきや朧月夜のゑひごゝち
すまのうらみにならん物とは
春の日のながさかもりに成ぬれば
我には人のくれかたきかな
春雨にその民寺をうり酒は
まいらぬ人もあらじとぞおもふ
水口もなをせはければ春の田の
なはしろさを日影にぞのむ
酔てのち物もいはれぬくちなしの
やまぶきいろのさけやのむらむ

夏十首

春くれしきのふの酒のさめかしら
けふはうつきに成にけるかな
のますともこゝをせにせん郭公

きゝてさかやをすきのむら立
五月待たち花いろをのむときは

むかしの人の酒の香ぞしる

年ごとにけふやあやめのくすり酒

またはさつきのいつかのむべき

さみだれのなをふる酒のさかて川

しちもろともになかれてぞ行

なく蟬のこはたかにこそ酔にけれ

日ぐらしぎけの森の木がくれ

これ迄も酒をもちきてうりはたけ

ゑひぬる人ぞまろふとは見る

村雲をうへに置たる夏ぎけを

のむやいかづち上戸なるらむ

夏の身はまだゑひ乍らさめぬるは

はらのいづくに酒やごるらむ

さりさてはけふまた質にやれ蚊帳

酒にぞわれはくらはれにける

秋十五首 一首不足

まれにあふはじめの秋の七日ぎけ

けふ七夕に手向てぞのむ

秋風のふくら本ノマに入てのむ酒を

みにしむばかり酔にけるかな

盃はめぐりてゆくをきりくす

たれにさせどか鳴あかすらん

盃もかたぶきながらあきの夜の

ながくしくものむ上戸かな

酒にうかぶ月影ながらのみいる、

上戸のはらぞ山ばかりなる

十五夜の月のかつらのおそこ酒

さかなのいもやちぎりなるらん

秋の田のかり庵つくるおばなさけ

ともをまねきて誰かのむらん

をしねかる田つらに残る草の名の

秋ほこりして酒をのむかな

いどまをは秋ふたけてや酒にゑひ

しゝのすくるもしらす飲らむ

いかにしてしぼる程には酔ぬらん

つゆなしにこそ酒はのみぬれ

酒もりの下草かけてうつろふや

しはるの露のをむる成蘭

飲人のいのちもいとゝなが月の

こゝのかごとに匂ふ菊さけ

折枝のもみぢをたきてあたゝむる

さけこそかほもうつらひにけれ

酒のみてみなもみぢするその中に

ひとりさめぬる松もはづかし

冬十首

すみあらす上戸のやどの板びさし

さかもりがちにふるしぐれかな

霜の葉にたどふるかほも酒にゑひ

さめての後はまた草のいろ

さらく霞ふる夜は竹の葉の

名におふさゝにゑひはじめけり

玉すだれ上たるさけを飲てこそ

つれくもなく雪をふかむれ

浦なみのよるになるまでのむ酒に

ゑひてたいよふちぎりあしかな

池水のすみわたりたるこゝちする

さけのなごりををしめさかづき
水鳥のをしあげがたになるまでも
のみつるさけやふすまなるらん
けたものゝすみのおき火に温めて
そのかはぎぬのけ酒をぞのむ
冬の夜は身をあたゝめてわかし酒
さむる時なくゑひにける哉
庭火たく其ほうづきのあかゝと
ゑひて酒ふく神樂笛かな

雑五十首二首不足

殿もりの朝きよめせでのむ酒の
ゑひてのゝちははくそこそきけ
歌よみのゑひをすゝむる酒にこそ
そのかはつきも赤人になれ
酒手をばこはれずども梨壺の
五人十人せめぬ日ぞなき
神酒の春日の氏子いかなれば
わうどうないに成くだるらん
西の宮ひることもなくのむ酒は

あしたゝぬまでゑひにける哉
打ならすあづさの眞弓つるかけて
くちをよするは酒のみの神
千早振そのみこのみの酔くるひ
たゝさか神のつくかどぞみる
飲酒をへだてぬ中のおもひざし
かたなゝきまでゑひにける哉
さるがくの前に置たる大鼓つゝ
さけもとうゝたらりとぞのむ
ゑひぬれば飲ども酒のむかひ講
ほとけと共に目こそ舞けれ
おもくこそいましむべきに石佛
さけをばいかでうりたまふらん
寒き夜の酒にゑひたる道心は
わかしさましに成にける哉
濁酒すみがたき世にながらへて
いつまでとてか身をしぼるらん
いまはかく思ひきるともあま酒の
ならんはてこそゆかしかりけれ
數ならぬ身にさへいかで酔ぬらん

さけは人をもきはざりけり
何をして身のいたづらに酔ぬらん
さけのおもはむ事も耻かし
老そひて酒の重荷のくるしきに
ながもちしたるゑせ上戸かな
二日酔けふ三日の原あかすなを
さかてにやらん衣かせやま
たいたのめさしも心をつくし酒
冬瓜の名のあらんかざりは
見るからにやがて上戸のほし病
のみてはなをるくすり酒かな
下戸はなぞ鬼のごとくに酔ぬらむ
たい一口にさけはのみけり
あなみにく酒には思ひますかゝみ
底なるかげはさるにかも似る
酔てのち太刀ぬく人は酒のいる
たいへい樂を舞かどぞみる
村雲の劔をとりしむかしより
かゝる酒にぞ人もゑひぬる
おそろしや猪武者のいかばかり

さかつらにこそそのみゑひにけれ
おちかぬる上戸のたちへ押寄て
さかはらまきをきぬ人もなし
盃をはやむる酒のかすけむま
はなをかへして猶ものまはや
むさし鑑さすがにかけて飲酒は
よはぬもつらし酔もうるさし
笠かけをいさけのかけのはれ引目
やがて上戸になりにつける哉
むかはきのほしかり上戸酒のめば
大まだらにぞ貌も成ぬる
しちにおくひとつ小袖のあはせ酒
わたぬきするぞうけて覺ゆる
幾たびかさかてのしちの酒なけれ
つまりてのちやのまれざるらん
我身をもうしなふほごに酔ぬれば
さけにのまるゝ人どこそみれ
あかざりし酒の中にやいりぬらむ
ゑひての後はたましひもなし
いろをみて心にかけてあく酒の

さしたることはなけれどものめ
浦しまかはこひのみたる酒なれば
あけてくやしき二日ゑひかな
玉すだれこかめをいるゝ舟人や
おきにいでゝも酒をのむらん
酒手のみおふかうらふね漕いでゝ
いそへなよせををきのりにせよ
櫻麻のおふとはすれどなす事の
かた枝のなしのさかてなりけり
さかづきに酒は残りてこゆるぎの
いそぎてのむや上戸なるらむ
わきすぎで立およぎする酒なれば
ゑひぬる人の身こそうきぬれ
たぐひなき大さかづきの酒をこそ
上戸の淵といふべかりけれ
酒にゑひうそふくほごに成にけり
これやひえどり上戸なるらむ
山がらの口をあきたるくるみさけ
へうたんなりのつばに入ばや
よりあひてけふも礫をうちこしの

さかいんちするゑひくるひ哉
かけあひて上戸の中へいりすまふ
大さかてにぞおひまけにつける
飲たらで酒をはなをもつき瓶子
はらのほごこそおもひやらるれ
時のまも身をはなたぬは守りつゝ
さかづきまでもかけてのまばや

本書明應六年丁二月十八日寅

鞍馬寺杉本坊舜慶依所望書之

内藏頭祝部宿禰種長

官許 寶曆八年戊寅三月

發行 明和八年辛卯三月

めでた百首夷歌序

そもくこのめでたいと申は天竺
にてもはじまらず大唐にてもはじ
まらずわが

日の本の夷三郎めでたいつりの絲
より鯛このめでたいをつり上しよ
りめでたい事のかいみ鯛末の代ま
でも引出す延喜の御代のひたい箱
もふたあけて見ぬ京ものがたり今
や四つの海波しづかにして沖釣の
めでたいかゝらぬ日なく十日の雨
風さはりなくして一升のつちくれ
金一升の富にうるほへりされば弓
は袋棚の上にすゝけお太刀はさや
がたの小袖にまどはれよろひかぶ
どは笑道具となり鐵砲は藥ぐひの
たねがしまとなり酒は酒屋にもち
はもち屋にたけき親分も太平樂を
ならべあやしの百姓萬歳樂をとな

へてまことにめでたう候ひけると
は今この時をや申べきかゝるめで
たき御代なればかのもろこしの何
がしが何でもかでもよしくとい
ひし道をふむとはなくてよるもひ
るもめでたいくといふ事をくち
せにしてめでた男と名たゝるひと
ありわれも亦めでたい事をほり川
の流のまゝによみ出せしめでた百
首のたはれ歌をめでた男にしめさ
んとて覺えずひとり笑ふ門に今福
といふ書林の來りて春まつ花の櫻
鯛あまだいのあまねくつたへたい
いしのいはほともなるどほねのな
みなみならぬめでたい中のたいの
あらを三つ道具のすきものごとも
にせんといふにまづ手をうつてお
きつだいいく千代かけしかけだい
の尾めでたいとも見玉へかし

天明三のとし三ッ朝うらゝかな
る
四方赤良書

めでた百首夷歌

立春

改年の御慶めでたく天の戸を
明ましてよい春は來にけり

子日

門松に子日の小松この比は
引つゝいてのおめでたい事

霞

めでたき日霞の衣たちをめん
暦の下段山の中段

鶯

うぐひすのはつねのけふの小謠は
ひとくくゝにめでたかりけり

若菜

七種の若菜にめでたくやと
手をうちつれてつめをこそこれ

残雪

豊年のみつぎ物にておめでたき

この献上の残雪をみよ

梅

飛梅のさんだめでたい事づくし

こちらかせ富貴自在天神

柳

しばしとて立止るまにめでたいを

つり出したるいと柳かな

早蕨

早蕨のにぎりこぶしもあてられず

めでたく笑ふ山のかほには

櫻

花をめでしことばもよゝの櫻木に

いのちながきぞめでたかりける

歸雁

幸若のお禮めでたくしまひつゝ

ともにこしぢへかへる雁金

春雨

春雨に火の見のたいこ苦むして

人おごろかぬ御代ぞめでたき

春駒

あら玉の春のはじめの春駒は

ゆめに見てさへめでたかりけり

喚子鳥

三鳥の傳授のすみし目出たさは

おぼつかなくもなきよぶこ鳥

苗代

なはしろのたねは一粒萬倍と

めでたくさんになりはひの道

堇

いつまでもめでたき御代に堇草

色よき花の江戸の紫

杜若

かきつばたむかしはいせの物語

今はめでたくひらく三河記

藤花

萬代の池の龜の尾めでたけれ

長々しくもさがる藤波

款冬

山吹のはなかみ袋ぬしやたれ

ひらふこがねの敷のめでたさ

三月盡

荒神の松にめでたき花の香を

わけておかまもけふ拂ふなり

更衣

けふは又めでたしなみの衣かへ

あれのこれのとゑり祝ひせん

卯花

時ならぬ雪をめでたき折ふしに

何かはことをかきの卯の花

葵

いたゝいて肩にかけたるお小袖も

めでたき時に葵から草

郭公

ほどゝきす待設けたるみぎりより

ひだりの耳できくぞめでたき

菖蒲

目出たさはかぎりも長き町つゝき

ふくくしくもふくあやめ草

早苗

早苗よりひいでゝ稔るいきほひは

千町萬町やめで田植歌

照射

鹿をおひともしからざる世渡りに

山をみずともめでたかりうご

五月雨

五月雨のふる屋の軒のやね板も

あつきめぐみにもれぬめでたき

橘

橘はみさへ花さへめでたさは

やはりむかしのときは木のまゝ

螢

ほたる火も弓も袋におさまりて

文をみぎりの御代ぞめでたき

蚊遣火

にぎはへる民のかまどの蚊遣火は

めでたき事のためしかやの木

蓮

はちす葉はごふやら佛くさけれど

花の君子ときけはめでたき

氷室

水無月のひむろに金をたくはへて

へらすきえずにつかふ目出たさ

泉

金銀はいづみのごとくわき出て

めでたく人にくれてやり水

荒和祓

罪ごともあらにこ穢へにこくゝと

わらひきよむるけふのめでたさ

立秋

黄金の桐の一葉もおめでたく

つもれば千々の秋やたつらん

七夕

をたなばためで七夕と祝ふらん

あまのかはらぬお出合の空

萩

秋風のふき来るこそめでたけれ

萩のうは葉の数もいく千代

萩

長びつにいられてめでたく御歸宅の

このおみやげをみやぎのゝ萩

女郎花

をみなへし馬から落た僧正に

おけがのないぞめでたかりける

薄

花すゝきはゑみたてる秋の野に

めでたい事をまねくぞぞみる

菊萱

千日にかかるともつきぬかるかやは

めでたかるかやめでたかるかや

蘭

草かうや東の門のおやしきは

花をめでたいひとのなる蘭

雁

かうがひをとりて雁々みつ口の

跡のが先へすゝむめでたさ

鹿

神の威をひけら春日のめでたさは

おしかのつゝつかまへてなし

露

草の上に思ひもよらぬめでたさは

めぐみの露のこぼれ幸

霧

市をなす門のさびらを朝もよひ

きりくくくとも明るめでたさ

槿

よはにいね朝起しつゝ朝がほの

花を見るこそめでたかりけれ

駒迎

勘定もあふ坂山にうり主は

めでたく金をもち月の駒

月

かく斗りめでたく見ゆる世の中を

うらやましくやのぞく月影

壽衣

遠國のたよりもゆかしさよ砧

めでたくかへる衣うつなり

蟲

身上もめてたき家の壁の中に

財布をつゝりさせとなく蟲

菊

むかしから花にめでたい人の名は

これ御そくさいゑんめいときく

紅葉

林間にもみちの錦おり敷て

めでたく酒をあたゝむるかな

九月盡

けふまでにわれあきはてし貧乏の

神なし月を待ぞめでたき

初冬

びんぼうの神無月こそめでたけれ

あらし木からしふくくとして

時雨

世の中はしぐれのやごり宗祇でも

めでたい事のふり來れかし

霜

顔見世のしらゝ明ぞめでたけれ

かしらに霜の翁わたして

霰

冬籠りめでたく無事にまめいりを

いれとや數のあられふるらし

雪

目出たさの源左衛門はうづもれず

いでその時の鉢の木の雪

寒蘆

つの國のなにはの春のちかよれば

あしのかれはもやがてめでたき

千鳥

鹽の山ひかぬもめでたさよ千鳥

いつもさし出のいそ／＼として

水鳥

水鳥のおしあはせよく鴛鴦の

衾をかはずにはのめでたさ

氷

足もとの明らけき世のめでたさは

うすき氷をふまぬ世渡り

網代

門出はみなひをゑらみおめでたく

駕籠のあじろにかゝりぬる哉

神樂

神樂笛ひうやらやらめでたいこ

うつやてんしやう大神の前

鷹狩

わけてけふめでたかり場のお物數

ありとや祝ふやかた尾の鷹

炭竈

くもりなき世にすみかまの夕烟

めでたくのぼる位山ひと

埋火

うづみ火の灰の中からかきおこし

うせたる物の出るぞめでたき

除夜

大歳やこしはわけて去年より

めでたき年の暮のおしまひ

初戀

鶺鴒の鳥のめでたき目つかひに

尾を見つけたる色の道哉

忍戀

忍びてもきゝつけられん包みおく

めでたき物の袖にあまらば

不遇戀

あふことを命づなにてながらへば

うけひかぬこそめてたかりけれ

後朝戀

うかれめの宵の口舌もあけがたに

中なほりしてかへるめてたさ

初逢戀

ひろからずまたせばからず香箱の

ふたりしつくりあふそめでたき

遇不逢戀

あふて又あはさる物のめでたきは

女郎のはたと道の辻風

旅戀

世はなさけ旅は道づれ出女も

おじやれと云は來るぞめでたき

思

忍ぶれど色にいづるを見のがして

物や思ふととはぬめでたさ

片思

相ばれはかへりてあきのかた思ひ

みむまのあひそめでたかりける

恨

ゆく末をめてたく契る心より

かはひくのうらみもぞする

曉

よきことを思ひ出せばあかつきに

ねられぬ老もめでたかりけり

松

千歳ふる松はめでたくいつとても

十八公のわかざかりかな

竹

竹の子のまた竹の子の竹の子の

子の子の末もしげるめでたき

苦

公事訴訟絶たる御代のめでたさや

しらすの石の苔のむすまで

山

山の名のふじにめでたく突あてゝ

三國一の富をこそぞれ

河

千年にたつた一度の黄河より

めでたくふだんすみ田川哉

鶴

千年のつるの玉子をときはなる

松の十かへりかへすめでたさ

野

名にしおふお膝本ゆるむさしのゝ

草はみなならめでたしとみん

關

開た口とざゝぬ御代のめでたさを

おほめ申もはかりの關

橋

すご六のさいの目出たき振出しの

やりは一本にはんばしかな

海路

桑名から七里のわたしづゝがなく

宮へつきゝ祝ふめでたさ

旅

先ぶれのいたらぬ里はなかりけり

めでたき御代の問屋宿次

別

あふものは別るゝものときく時は

わかるゝものはあふぞめでたさ

山家

商山のよぼくれおやちよろゝと

道ある御代に出るめでたさ

田家

百姓の家の實にすぎと鎌

くはめでたいの三つ道具かも

懷舊

老らくのめでたき今にくらぶれば

むかしは物のたらぬがちなり

夢

粟めしを喰てはこしておめでたく

榮花の夢をみる五百年

無常

世の中の諸行無常をやめにして

是生滅法界のめでたさ

述懷

いかにせん心のこまのすゝみつゝ

めでたい事におはれぬる身を

祝

おめでたく又おめで度おめでたく
かへすくもめでたかりけり

めでた百首夷歌終

めでた百首の跋

春は御慶目出度申しれしより日々
めでたさやるせもなし二月になり
ても御内儀の年禮こよなうのどか
に又めでたしそれよりひらく花の
色もゑへるや上戸の上巳の節句夏
は門てふ門ごとののぼりかぶを
立ならべし竿の先にもめで鯛あり
下卑た嘉祥は二八のひや麥秋は七
夕生みたる八朔重陽二度の月冬は
亥のこに袴着帶ごき煤掃もちつき
歳暮の御祝儀戀は婚禮並身請雜は
朔日十五日廿八日役替新宅元服お
きやあくおきやがれこぶしは尺
教なるべしさしづめ無常は百年忌
神祇にとりては夷講杖も盡せぬ賀
のよろこび四五十をはじめとし
て八十八のよねのまもり九十百首
のめでた組題なにさま見まく堀川

のながれたえせすくみにし硯の水
をしき筆どめたりくめでたく

あけら菅江かいふ

仙臺百首序

それたはれうたのたはれたるが中に天然の興おはすなるはひとり吾孔方兄錢屋金埒にして趣向を湯水のごとくつかひてしかももの趣向を吐かすかつてきけることあり神錢はあしなくして遠きをわたり歌人は居ながら名所をしるごさらは見ぬ京ものがたりもなつかしく此叟の秋の寢さめおどろし侍る折から友かきあまたとひ來てたゝにやはと題を探りてよみいでたる歌百にみてりいつれもつら杖かひなだるくやそこにつみたる杉形の錢をもてよりかゝり所とす主人おかしきふしなりとして仙臺百首とかうぶらすこれ文錢の塔をつみ青砥左工門か一もんをしみにならふとにはあらねどもはした錢とゝも

に錢筥に納んはいと本意なくとみに擲錢して梓に行ふものなり

京街堂のあるし

戀川好町

同盟の首長狂歌堂のあるじ遠く中國に杖を曳る日頭菴および都講らとり／＼にるすの戸の興をつくすひとひすき町ぬしはかりて錢百首をよましむ幸に日頭菴主のたゝらにかけてその功なれりそも／＼鑄錢のひろく通寶なるや見ぬもろこしの鳥目に桐の葉わけのきはめもらすしらぬみこしの雁首もみなひとさしにつらなりて翅なくして鳶のものをやとひあしなくして鴛で飛するなんどすべてゑびす歌の自在には似たりけりされば日頭庵主の世わたるたつきあしたにゆふべに交易して我ものにえたる所なればさりとちまがひはおはせしをはからざりきよみ撰にして長百ならんとは是いはゆる我どもからの狂歌にめのなきはしめなりけらし

吾友軒のあるし

酒月米人しるす

仙臺百首

立春

白水真人

昨日まであしを空なるせにもはや

居り相場のはるはきにけり

子日

戀川好町

子日する錢中將の名にめでゝ

よくにひかるゝ松もあらなん

霞

紫鹿子

錢塔の錢もかすみにうづもれて

二三重はごみゆる夕ぐれ

鶯

小持末廣

うぐひすは三光錢に似たれども

下卑たる聲はなかぬなりけり

若菜

秋田萬作

君がため春の野に出てはしたもの

三文はごが若菜つむらん

殘雪

雙六齋珠山

よひ越の錢はもたねご我やごに

去年のゝこりの雪は澤山

梅

柏木葉守

さきいづるいろにめでゝは百貫の

かたにもほしきうめの花がさ

柳

渡場只則

門口のはいりの柳たづねみん

つばめのくれし錢もあるやご

早蕨

口裏茶丸

紫のちり打はらふ錢莖の

さしかごみゆる野邊のさわらび

櫻

對案堂雪面

さくらさく野山の乞食心あらば

よしねたるとも花からごいへ

歸雁

大湊舍升女

木ちん宿たつや彌生のかりがねは

せゝのわたりを二三十ゆく

春雨

大湊舍舟積

天目の茶に文錢をひたしてや

かすむこのめをあらふはるさめ

春駒

海原沖風

はるの野の二才駒にはおよばじな

銭のくるひのあしのはやきも

呼子鳥 大垣甘法師

猿といふうそ八百もむかしから

よに通用のよぶ子鳥かな

苗代 白銀いさご

さしかゝる苗代ごきのせわしさも

苦は永樂の種おろしなり

莖 白銀黒人

開元のせにのけた野にすみれつむ

玉妃本ノメかつめのあともあれかし

杜若 川井惣梁

紫の江戸はえぬきのかきつはた

銭ひらよりもきよきはなひら

藤 小倉百人

木すゑから二筋三筋山ふちの

はなはさながら銭かけの松

山吹 糸どち女

唐土の人に見せばやふきたての

眞鍮銭のやまぶきのはな

三月盡

一文銭をしめる人もゆく春は

百をさしたる心地なるらん

更衣 峰高丸

花染の袖も一重にかへぬべし

一足どびの銭の景氣に

卯花 那須不二鷹

沼津垣うの花かきに落かゝる

千貫樋の水のしろたえ

葵 岩戸明方

貫さしのそれにはあらで銭あふひ

ゆきかふ人の襟にかゝれり

郭公 學志亭公面

ほとゝぎす名のつて通る一聲は

千里日行のせにもおよばし

菖蒲 川瀬兼成

にぎはへる銭座の軒のあやめ草

猶ふくくどみゆる門なみ

早苗 戀川好町

さみだれに袖もたもとも子母銭の

めぐりあふてははこぶ玉苗

照射 山東京傳

爪に火をさもしの鹿の數よりも

ころしてつかふ銭のあはれさ

五月雨 湖五十三次

九十川銭の相場はあがれども

あがりかねたるさみだれの空

橘 東雲明行

たち花のはなちる里やこれならん

むかしを今にいせのまき銭

螢 根歩きさ子

夏虫の身をともしよりわびしきは

せにをあつむるやこの夕ぐれ

蚊遣火 吾友軒

はつくと拂ひ出せども廻り来る

蚊を子銭とはたのめざりしを

蓮 大目玉丸

池水のいろも青磁かおもかげや

ごろの中より出し銭蓮

氷室 常盤松門

穴藏にかこひしせにはくされども

つみたるまゝの室のしら雪

泉 古今亭音人

つゝゐづゝ泉より猶いさぎよく

遣ふあとからせにもわきもの

御板 年竹庵其童

みな月の名こしの稜するからに

心がゝりはきながでもなし

立秋 山手赤帯

秋來ぬと目にはみえねど風鈴の

せにの音にぞおごろかれぬる

七夕 桃栗山人

小袖までおかし申せど七夕に

せにをばなにぞかさゝきはし

荻 祝義家足

ざら錢の音やしてまし荻のはに

そよどの風もさはり三三

萩 酒盛改 糸若水

ちはやふるやそうぢ人も山ぶきの

せにかへてみよはぎのはら中

女郎花 桃本雛丸

をみなへしこがねの色も口をしや

三文花にたちまじりては

薄 保井賣方

夕露に薄のたもとうちかさね

せにの相場やたつる道のべ

菊萱 川淀双鯉

すがれゆくそが殿原はいまもつて

わづかの錢も人にかかるかや

蘭 算木有正

ふちばかま寢覺の床にかほれども

むすびし夢の阿堵物もなし

雁 紀彌壽丸

四文せに波間をさしてどこよから

にほんへわたるかりも八百

鹿 寶倉光

百の口よほごぬけても妻こふる

しかをば馬どきゝはたがへじ

露 芝庵光交

放下師の錢ならなくに風の手を

ひらけばきゆる露も品玉

霧 野邊春道

百貫のかたのごとくに月かげも

かさきてのぞく垣の夕ざり

檜 仲秋長清

錢塔の錢もまばらにすげ笠の

かゝしにからむ朝顔のはな

駒迎 芝庵光交

あふ坂のせきの清水に鹿毛月毛

連錢あしけいまやひくらん

月 戀川好町

秋の夜の月の兔の耳しろを

つなぎてほしきものにこそあれ

擣衣 堀川舟人

まじなひの鈴にはあらで袂せに

からりころりと衣うつなり

虫 竹溪

あき草の水引かけて二十疋

三十疋のむしのもろこゑ

菊 物毎秋輔

もろこしの彭祖かめてし菊なれど

七百余とはたかいはちうるゑ

紅葉 庵崎眞槌

大佛のうしろの山の紅葉はは

せにのたゝらもおもひ出らん

九月盡 軒子雀

ゆきがけの駄ちんなるらん轡虫

秋の名残の夜もすがらなく

初冬 我形丸喜

いつはりのなき世なりけり神無月

賽銭はこれのおもさかるさも

時雨 吾友軒

幾度かしぐるゝ雲の早序

くるひ相場のおしも定めず

霜 山陽堂

しろかねに見まがふ霜の四辻に

銭の相場もたちやわづらふ

霞 山手赤帯

棟上の銭かあらぬかあらしふく

ふはの板屋のあられふる音

雪 森羅亭

それ雪は鷺目に似たるものなれや

翅なくして飛んで散亂

寒芦 南陸亭繁樹

巾着のひだの細江も干あがりて

あしのほまちの銭もかれく

千鳥 古川亭青蛭

月かげの景氣あがりの銭相場

友よびかはす村ちごりなれ

氷 小倉百人

あなたうごあみだが池のうす氷

銭はごひかる月の下風

水鳥 櫻川舊家

五羽十羽むれる鴨は河岸揚に

ごりちらしたる銭かごぞ見る

網代 獨活大木

伊せ者は皆氷魚よりもめでぬらん

う治のあじろにかゝるまき銭

神樂 悠々館永喜

遍照もあまつをどめにおひねりを

うちつけていふまやなかりけん

鷹狩 大垣甘法師

ならの京かすがの里のしるよしへ

かりにいにけり百貫のたか

炭竈 都築藏持

をのゝえのをのゝ山本をのづから

一文なしの人もすみがま

埋火 古今亭

あかゝねの銭の丸さに光りしも

ひたとなりたる夜半の埋火

除夜 清涼亭

けふぞしる銭と師走のかくばかり

大と小とのちがひありとは

初戀 おなじく

いな舟のいなにはあらで角とれぬ

妹がこたつはみちのくの銭

忍戀 一帖大鷹

今はたい忍ぶにあまるばかりなり

戀の重荷とふところのせに

不逢戀 柏木葉守

逢ふ事もなきはらす眼の苦しきに

一もんせにのまちなひもがな

後朝

松遠亭數成

添寝せしその移りがをなつかしみ

せにくひに着て歸るあかつき

初逢戀

算木有正

待くて今宵ぞ折をえびす錢

あへばうつゝもこしもぬかしつ

逢不遇戀

常事也

算用のあひしちきりはむかしにて

せにたらずてふ戀もするかな

旅戀

是売酒成

ゆきくゝて二百の戀もするが路や

百の馬よりくるしかりける

思

大眼玉

岩本の神にちかひを目かけ錢

おもひのたけのつゝに一ぱい

片思

森羅亭

なま爪をはなす心のくるしさを

一文錢とたにもおもはし

恨

山笑亭この女

はした錢はした無れど夜かれせし

うらみの數をならべたて膝

曉

祝義家足

にはごりも孔方兄どうたふなり

今を日の出のさめる身代

松

陽鳴亭鶴成

錢にさへ君のくらゐのあるなれば

松に大夫はまだ不足なり

竹

白銀いさ子

千代までもかはらぬ竹は百づゝの

ふしをこめたる青ざしの錢

苔

勘定濟方

つみ上し五みからげはいはほにて

こけにまがへる青さびのせに

山

新玉年長

見おろせばふもとの里ぞ遠かりき

我借錢の山にのぼりて

川

戀川好町

流れ川ながれわたりの路用とも

棹とも見ゆるつなき錢かな

鶴

湖五十三次

ちとせへし錢の齡にくらぶれば

つるも長命富貴なるもの

野

常盤松門

勘定のちとあはつ野に風だちて

せゝには舟のくりまはしよき

里

尋幽亭

貯へもさのみなけれどあし火たく

あし屋のさとはぬくごかりけり

橋

雙六齋珠山

萬年ののちもかくこそあるべけれ

せに龜ばしのわたりやすさは

海路

軒子雀

海原やよくまんくごこきいづる

ふねのあしにはあしやつむらん

旅

大湊舍舟積

近江路やせたの宿屋に百の錢

をくもむかでのかたはたこなり

別

大殿若持

糸による青柳ならでわかれ路は
わかねて襟にかくる貫さし

山家 寸善舎

しづかさは峰のまつ風谷の水

さらにおあしの音なごはなし

田家 寶倉光

種ものゝかしかりよりも八束穂の

ほまちの錢ぞわびしかりける

懷舊 鳥口眞似

つかひてし錢のむかしを思ひねの

あかつきつぐる鳥の目もうし

夢 物每秋輔

うりものにせばやまづしき我夢に

みし富士ほごも錢をつみなば

無常 五常道守

定なき世はさまゝにかはり錢

あるは念佛あるはだいもく

述懷 山陽堂映沙

錢ごまごゝもにはだして逃れごも

びんぼう神に追つかれたり

祝

萬龜亭江戸住

末ひろき地紙の形につく錢の

つくともつきじ君がよはひは

夫有心棼の和歌はたかしらべにし
てたごはい小判にひとしくきよく
みやびかなれごもその意深遠にし
てみなもとうかひかたしわが輩
の口すさむわづかに百の無心棼は
一錢に宇治の假橋をわたり三文に
さつまいもを買ふその益とする所
黄口の嬰兒も智のつくはじめに先
これをするこれおのれが常に初心
にしめす錢の目のつけ所なりさる
をことし寛政七年なが月はつか餘
りひとひ狂歌堂の留主の戸たゝけ
る人々らつごひ來りて我業ならぬ
市をなす事のかしかましく堀川御
題をわかちあたえて暫時の口ふさ
げとせさせたるにかたはらに居よ
りて終に仙臺百首なれり是しかし
ながら例の一國通用にしてひろく
しらしめんとにはあらず見ん人つ

たなきをそしる事なかれ

日頭庵金埒

狂歌百鬼夜狂序

あやしきを見てあやしまざれば左傳の化物ばなしもうそ怪きを見て怪めば六部の地獄のさたもまことならん今の學者のおし事と坊主のふしぎすぎよりあやしきをあやしまずかへりてあやしからざるをあやしむそれ月日の眼風のいき雲のびんづら雨のあし海山かけてよくみればあめつちの間もまたひとつのばけ物やしきならずやうば玉のやみの夜に百のあやしき事をかたればかならずそのしるしありといへるふることに本づきて此頃たはれたるうたの友ごち鬼神をもとりひしぎつべき躰にくるへる水をうしろだてとし富が岡のきた深川のひがし青きとし火の油ぼりのほとり鬼一口にわんぐらとかいへる

何がしのみさうにして物語を狂歌にかへその數百にみてもごより箱根よりこなたに野父さばけ物なしないものはくひたくこはい物はみたしよりてならのさくら木にちりばめ子どもだましのがごせにかませぬむものこはきやはたおかしきや

天明五のとし冬の日

四方山人かきつ

百ものがたりの記

へつゝ東作しるす

これはむかし物語にはあらずむげにちかきことなり四方大人の門に遊びてたはれ歌よむ人になにがしといふ人おほ河のべによき高ごのもたりければうしもおはしよのひとも時々ゆきて遊びけり頃はかな月の日ばかりれいのごとゆきて酒たうべよしなし事いひしろひて樓のさうじあげさせ箱根山ちゝぶのたけ遠きみねつゝいきながめやるほど日くれぬ月はそなたの木末に落れると思ふに川を隔たる森のしげみよりまりのおほきさなる光物こすえをのぼりて空にあがるにこなたにもたる盃の繪も見ゆるばかりてりかゝやきていづちへか飛うせぬあやし火花といふものごぼ

すべき頃にもあらず人だまといふものにやといふにそは青くてちいさしかねだまこそかくはあれゆきてほらましなごいふに青鷺といふものこそ人をばかすなれといふ薦のから丸といふひとすゝみ出てけふなんまのあたりあやしき事みつ人のかたるをきけば百物語といふことをすればきはめてあやしみをみるといふめれどそれは事ながくてうるさしこゝに土師搔安といふ人の友別業ありて常は人けなく木立ものふりて面しろき所なりときけりこの家にて化ものを題にてざれ歌百首をよまばやかの見趣入道なごいふものゝいで來ば興あるわざならんなどいふ酒にはるひつそれよかるべし來る十まり四日さはりなしとてそのこと行ふべきになりぬその日は空うちしぐれて申の

時ばかりより雨つよくふりいで風さへ吹そひてかゝるわざせんにはこよなきそらのけしきなりなごいひていさみありくもおかしたそかれより家をいでゝ搔安がりゆくにあるじはとくよりこのはなれたる家にゆきぬとてやつこをあないにてせまき道をいざなひゆくその家のさまいかにもあれたる家のいとひろくつくりなせるにつぼせんざいには木高き松椎柴かしなと植て山ざとめきたるに砌は草いと高くしけり南おもての雨戸はさゝす外はみなたてこめて燈はこの一間なる所どくりやとにのみとぼしてけりさうじをあけてはるかに見わたすにそなたさまにむきて風の吹をくるたびに木のは白うひるかへりてふすまなごのきしゝゝとなりひびくもいともものすごからぬかは搔

安出てこの所はなにがし院といへる寺の墓所なりしをはたせほご前に土を引ならしてかく家居になれり今も土などほりおこしぬればされたるほねなごいづる事の侍りかくあやしくいまはしき所をかりうる事たやすからず侍るを唐丸ぬしのせちにもおし給ればからうじてもとめ出ぬとはなのほとおほめてきてよき事しつと思へるやうにほこりかにいふかくまではいかにもとめ出けるかなふるきはか原ならでもあるべきをうたてもあるかなと思へどかしこくぞはかりたまへりともみなおそろしながらもいふかたはらの壁に今宵の式をかきてかけたり

百物語戲歌の式

一歌員百首出座の人数にわかつた

とへうたおほくよみ得たる人ありとも一度一首をしるし序をまもりて順行すべき事

一北の屋のすみに燈臺をまうく青紙の口をかくべし大きなるさらし燈心百すぢをいれ一首をしるし一筋をへらすべき事

一文臺ひとつ燈の左におく硯料紙かたはらに鉦鼓ひとつをおく歌をしるし終てのちかねをうつべき事

一居間より北の屋へかよふ道に燈を置べからずあるひは物のかけにかくれて人をおごしあやしきかたちなどつくりおく事禁制たるべき事

一居間にて雑談高聲すべからず酒肴をまうくといへども重盃すべからざる事

一百首にあたりたる人は燈をけち

はてゝのちさうじふすまをつきゆるかしてばけ物殿にげんざう申さうよといふて踊るべき事

一妖怪は日出てのちかくるゝ理なりよりて卵のとき前に退散すべし夜あけば披講は後日たるべき事

右七箇條の趣かたく守るべし若違背の人は過怠として酒一升連中へ出すべきもの也

天明五年乙巳十月十四日

催主 薦唐丸

大人は定まろを伴ひて舟にておはすべきを雨風のつよければ陸をやおはすこずやなりたまふるなどいぶかりいふよあるじ飯盛ぬしはいかゞしておはせずやと問ふれいがん寺を過るまでは人にさきだちておはしき橋をわたる頃より見へすなりぬ此わたりの事はくはしく知

たる人なりよもまごひたまはじなごいふうち飯盛來てなさけなく物したまへりとてうらむ事かぎりなし有政金埒なども此あそびをゆかしがりつるがさてやまで門うちたたきて來れり今は大人と定まろとおはせぬのみなりといふ題は土佐が百鬼夜行の圖または近頃鳥山叟などがかきたるばけものゝ名をわかちてよむあるじかき安さかづきもていでゝすゝむさむければ各二三盃をかたふけ柱により壁にそむきて得たる題を案じ入けるはごしはしは靜なるやうなりつるがから丸有政なごえたえずして例の高聲になりぬるを飯盛あながまご手かきてはしりめぐりけるがいつしかこれもしのびあへずして笑ふかくて夜もふけぬ庭の方に梟の鳴こえするをあれ聞たまへ松桂にすむ鳥

こそ所得がほに聲す光源氏の夕顔
の上をいておはしけん河原の院の
さまもかくこそなといひ出る人あ
るにあはれものゝけといふものゝ
とくいでもかしなごをどらじとの
のしり出るに中々らうがはしさも
まさりつはてはごよみになりて梟
いたづらになりにけりあはれ興あ
る夜のさまかな大人定まろかけず
は思ふことあらじなご人ことにい
ふほご奥の方よりわご一聲おめき
てはしり出るものあり定磨なりい
かにうしはおはしつやかゝるわざ
にはかの庖大尉がちごだにはから
れざりきつたなきおごしよなとい
ひてわらふに定まろもおもなくて
いであから大人おはせよといへば
げにしれたるまらうどたちかなど
いふくうしもいできたまへりか
き安いでゝけふ申の終におはしけ

るを目ごろねがひつる詩歌なご心
のどかにかきてたかごのにかりい
ねしたまひぬあまりに人々の心剛
にてすぐよかにものし給へば出べ
き期もうせぬせんすべなくやおめ
おめいでたまひけりといふにまた
盃をあらためてくみかはすさらに
おそろしげもうせてれいのまごひ
のごとなりぬあるじはみさかなて
うじたるをわすれにけりごてをの
が家にゆくやごもりの翁も今宵は
人おほうつごゐたまへり油ほりの
わたりにちぎりおきつる事あり宵
のほごゆきてまゐらんとてみのか
さうちきていでゝ行ぬ唐丸光は燈
臺のまうけなにやかやご立さはく
北の屋ははるかにて渡殿をつたひ
てゆく居間より燈のあるかたまで
ふたまをおけり疊をば引あけてこ
こかしこにかさねおきつればあゆ

みくるしくてやゝもすればつまづ
きたふれぬ雨はをやみなく風つよ
くなりて吹過るに雨戸ごものひま
なく鳴はためく四鼓過る頃はまこ
ごに鬼なごもいづべきけしきにて
たゝひごつ所へこそりあつまりて
盃をのみごごくすれごもおそろし
さにゑひ心地さへいで來ず歌數な
かばも過ぬる頃にこの奥のかたに
からゝゝご鈴のなる音す人々耳を
そばだてゝ聞にまさしく二間なる
所なりなにもものぞやゆきて見よか
しといへごおそれてゆく者もなし
やゝ音ちかづきて物の飛めぐる様
なるにやをらへだてのふすまを開
て奥のかたをみればこがねの鈴の
様なるものふたつちうを飛めぐる
がからくゝごなるなりけりあなお
そろしご人々をよびあつめつゝ入
てみればこなたへむきてはしり來

るよく／＼みれにあるじのかひける猫のはじめはくりやに有けるがぬしをたづねてありきけるなり皆人むね落ゐて世中のばけものはみなかゝるたぐひばるべしあたらしきもをつぶしけるかなと笑ふ子ひとつばかりになりける頃から丸ゆきてみめぐり來りけるがおどろけるさまにて來りてあやしき事こそあなれ歌は六十にあまりぬ燈心三十あまりものこるべきを六十すぢほどありむかしよりへんぐゑはごもし火のかすをかくして人をまどはす事ありといへりうたがはしくはさて金埒眞顔參和など一つれになりてゆきてみる唐丸がいふにたがはずうら住はさるかたき事ありてかるへ金埒はふかくおそれて今は此會やめんどいふをめし盛部屋住などいかでさることのあるべき恐

しさにへらすべき燈火をへらさではしり歸る人ありけるなるべしと驚かず有政は家にわすれたる事あり舟をさゝめおきつればのりてかへりなん題の数ほどはうたよみてまがほぬしにあつらへ置つるにて金埒とつれてかへりぬかゝりければ燈心のけちたがへやあるひとりにてはさてそれをかこつけてふたりみたりつれてゆくにうしみつばかりになりぬへんく之の出る時こそとて猶更におそれあひてから丸へや住定丸三人してゆきけるがいきもつきあへずはしり歸ておそろし／＼とて齒のねもあはずまことに色も青みてまさしく事にあひぬるけしきいとしるければまづ酒などあたへていかにごどふに部屋住わな／＼机の上にかゝるものこそ有けりごてうるまいもの紙

につゝみたるを十ばかりいだしぬ飯盛はゆづけをくひて居たりけるがそのいもをくひたらん人はまごにひとこのかみなるべしこゝろみにたそくひたまへといへどくはんどいふものなし飯もりさらばわれくはんどて取てくふをあからうしかゝるものをくふ事はせぬものなりとて引はなちたまへれごなでうことかあらんとておほきなるをみつまでくひて此いもは宵に橋のもとなる家にありつるを懷にし來りぬ人々のさびしくおはせんさて机の上におきつるなり世に剛なる人はなかりけりごあざみ笑ふにぞ宵にしばし見えざりつるは此いもをもごめけるにこそとてのこりをば唐丸とりてくひ人にもくはせけりかくてまた歌數十あまりにもなりなんとする頃さんわまたあは

てたる様にてかへり来るを此たび
 は芋にてはあらじ饅頭などにやと
 問へばさればこそさだめのごと歌
 をかきつけてかねをならし立歸ら
 んとせしが燈心をわすれぬれば二
 間なる所より立もごらんとするに
 物ののはたさたふるゝ音したりあや
 しくて手をやりてさぐりみるに牛
 の尾などのごとく長き毛をさぐり
 あてたりおそろしくて走來ぬとい
 ふ東作がいふさきにやつかれがゆ
 きける時わた殿のまがりめに物の
 たちてふつにゆかれず力にまかせ
 ておしければたふれたりさて火を
 燈來て見れば竹のふるき簀戸なり
 我をおごさんごて諸君のはかりお
 きたまひけるなめりよびごよまん
 もおくしたるけなりとくち惜くて
 簀戸をさとりて床の間によせかけて
 おきつるなりその外にあやしき事

はなかりつるごいふとまれかくま
 れゆきてみんとてふたりみたり紙
 燭をともして行きてみるに倒れつ
 るはかの簀戸なるがその傍にかけ
 おきつる拂子のひゞきにつれてそ
 の上へ落けるなりおくしたる人な
 らば音に驚きてさぐるにおよばで
 逃歸るべきをどて参和がけなげな
 るふるまひを人みなほむ簀戸のこ
 とあやしけれごごく百首にみてん
 ごていそぎければとがむる人もな
 しかはるゝうたをしるしてかね
 うちならして燈心をけすにはか
 にくらくなりたる様なりけるが上
 のかたより雫のはらゝご落來て
 人々の顔にさどふりけるほごには
 ては燈きへにけりこはいかにとて
 はしり出るに積たる壘につまづき
 てこけたふれつゝからうじてかけ
 もごりぬその後はゆかんどいふも

のなくて光さから丸ゆきて燈臺を
 こなたの間へうつしそのかたはら
 にまごゐして酒などのみてよみた
 る歌ごもかきしるすほごにやがて
 ものゝ數にみちにけり此たびは鳥
 もはなやかにしばなきて座敷のひ
 まひましゝみゆくまゝあるじゆづ
 けを出すさもあれかの簀戸たれか
 いましめをやぶりけるごいふに人
 みなちかごとをたてゝしたるごい
 ふもの更になし此簀戸はこの家の
 隣なる別莊のさかいにたてたる簀
 戸なり雨風はつよし道の程ははる
 かなりたれかはゆきて取來らんお
 そろしき事なりかまへて沙汰ばし
 したまふなご搔安が口かためして
 さもおそろしとおもへるけしきに
 ていふにそ扱はあるじにもあらず
 ごて人みなあやしみおそれけりか
 ゝるゑせわざはあなかしこすまじ

夷歌百鬼夜狂

き事にこそとてうしもかたきいま
しめ人々もおそれ思へりけりかく
て夜も明なんどすればみなくお
のがやごりにかへり侍りけるとな
んかたりつたへたる

見越入道

へつゝ東作

さかさまに月も睨むとみゆる哉

野寺の松のみこし入道

雪女

紀定麿

白粉にまさりてしろき雪女

いづれけしやうの者どこそみれ

人魂

唐來參和

はれやらぬ忘執の雲のまよひより

うき世にあとをひける人たま

女の首

四方赤良

首ばかり出す女の髪の毛に

よればつめたき象のさしぐし

離魂病

宿屋めし盛

目の前に二ツの姿あらはすは

水にも月のかげのわづらひ

うしろ髪

山東京傳

うつくしき顔にみだせしうしろ髪

ながきためしにひかれてぞ行

山男

算木有正

こしぬけてたつきもしらぬ山男

さては我名をよぶことりかと

切禿

今田部屋住

ふりむけば廊下にたちし切禿

ひそく聲のしにんすといふ

長髪

つむり光

長髪の女の姿は川柳

ごろくろくに裾や引ずる

鬼

馬場金埒

あばらやに生てふ鬼のしこ草は

その丈五丈ばかりなりけり

山姥

大屋畏住

金平が母とはたれもしら雪の

山また山をめぐる足から

逆柱

鹿津部眞顔

むかしたれさかさ柱をたて置て

きもをひつくりかへさせにけん

毛女郎

土師搔安

夜ふけてはすごき縄手の長雨も

ふりむく顔の毛女郎かな

楠亡霊

間屋酒船

楠もけものゝ聲のもうねんは

七ツかしらのうしみつのころ

小袖の手

高利刈主

小袖からまたも手の出る虫干は

りをうらみたる質の文壳

魔風

東作

こがらしの吹とばしたる軒瓦

鬼もかなはぬ天狗風かな

せうけら

定麿

せうけらは冥途におちよ半兵衛と

宵庚申にゆり起すかも

殺生石

ひかる

ばけのかはの玉藻を狐いたいて

櫛笄となすの原かも

ささり

参和

その顔は三六さつて猿眼

これや四さうをささりなるらん

鬼女

赤良

内心の如夜叉の思ひあらはれて

あやしきものゝげめんによさつ

油なめ

めしもり

行燈のあぶらなめてふ化物の

はつときえたるもゝんかはらけ

三目入道

京傳

日月にたごふ眼のみつあれば

いごつは星のいりしなるべし

片輪車

東作

とをくなきまたちかくなく引汐の

かたわ車もこはさよちさり

古寺

うら住

燈明のきへかゝる夜は玉の緒の

たゆる間もなくあめのふるでら

天井の手

まがほ

三浦屋の格天井と名にたかく

こんだ手を出すこはいけいせい

船幽霊

有正

面色も青海原にうかみしは

ふなゆうれいをいひに出しか

壁坐頭

搔安

借錢は化物よりもおそろしき

強催促の壁坐頭かな

大魔が時

部屋住

物すごき大魔が時をうつしみる

障子にせいのたかい夕月

おいてけ堀

東作

すさまじき月に老女のけはひして

しはすの霜をおいていけ堀

だかれ小僧

定麿

たらちねに先立ゆきしおさな子の

罪の重さはいだきてぞしる

むじな

京傳

うしみつに吹くる風の音づれば

ねいりむじなの目やさますらん

姥が火

眞顔

姥が火におそれて年やよりにけん

はのねもあはず腰もたゝぬは

牛鬼

参和

もうくどくらき闇路を牛鬼の

よごごにかよひくるまおそろし

肉吸

光

傘のあばら骨のみ残けり

あらにくすひの夜の嵐や

龍燈

赤良

浅草のいはかあらぬか龍燈の

かげもすみだの川にぼんぼり

牡丹燈籠

有正

通ひくるぼたん燈籠にたはれ男は

よなくここに落るしゝあひ

川獺

部屋住

雨の夜の案山子ごみゆる姿には

身の毛もぞつとよたつ川獺

札へがし

うら住

子おろしの女房と見えて辻門の

この世の札をへがしぬるかな

木たま

めし盛

山々はみな落葉するその中に

こたまの聲はまたかれもせず

髪切

さかふね

ゑりもごにぞつと夜かせの雪隠は

こはいと手からおとしかみ切

帯取が池

かき安

利上げせし質物なるかいつまでも

ながれもやらぬ帯とりが池

おさかべ

東作

おさかべは幾歳へたるかうろ峰

簾をあぐる雪のふる城

山鳥

金埒

山鳥のおろかな人をばかしてや

ひとりぬるよの伽にかもする

ひゝ

定磨

足にまで物をつかめる獲の身は

わるい手くせやいまにやまざる

死ねく榎

参和

行人をしねどすゝむる古榎

これやめいごの一里塚かも

猪熊

光

草摺をくはへて空へいかのぼり

いご目もすぐくみゆる猪熊

戸がくし山

飯盛

これもちの色は鬼より紅葉より

あかきや酒のどがくしの山

もどり橋

東作

たほやかな柳の裏のいつゝぎぬ

ばかさるゝごも立もどり橋

古戰場

京傳

いせ武者のおもひか宇治の古戰場

血烟たちてみゆるひをぞし

土蜘蛛

眞顔

ある時は女郎ごもなりて土蜘蛛の

いとしご人をかけにける哉

安達原

搔安

妖怪ごこれもやいはん鬼ゆりの

あだちが原にたてる姿は

猫また

酒船

ねこまたの姿ごみしはまよひから

こちらのむねのおぐるなりけり

海坊主

赤良

湯錢ごはいへごも深い海坊主

成佛してやうかみいづらん

ものゝけ

参和

ものゝけは葵の上のわざならん

加茂の車のあらそひの後

骸骨

東作

しやれ顚^{うづ}鳥のほちくる跡みれば

何事をいても南無あみだぶつ

羅生門

定磨

井戸がへをなせる計にいばら木も

渡邊の綱を引いたり

一ツ目小僧

ひかる

雨ふりてふり出したる一ツ目の

小僧はろくろ首のうら目歎

化物やしき

裏住

これもちの身では猶更ころさるゝ

化しやうやしき歎大門の内

うぶめ

さんわ

子ごみせて石を抱するうぶ女こそ
たがめをかけしおもひものなる

實方雀

京傳

うらのしきむねのほむらに焼鳥は

實方すゝのものゝけを引

大あたま

めし盛

大あたまこれはかさごの魚なれや

いづればさつとなまぐさき風

火車

眞顔

逃足を追くる火車にどられじこ

をのれ飛てや股をさくらん

一寸法師

かき安

ばけものゝ一寸法師は狩人か

うちしはなしのたねが嶋かも

生靈

酒船

おぼえある胸には釘をうたれしこ

おもふきゆへかいたむふし

死靈

搔安

いつまでもかさねが恨みきぬ川の

水にうかべるながれ瀧頂

大入道

ひかる

すむ穴も大廣袖の入道か

名にはおはざるなまぐさき風

四隅小僧

めしもり

碁にふけし月のよすみのばけ小僧

ごうかぞへてもあはぬもくさん

元興寺

東作

童さへ今はかしこくなら坂や

この手でいかぬ顔のがごうじ

化地藏

定磨

あやしみをみする地藏は六道の

能化の文字をあらはせしかも

枕返し

参和

しんくゝと物凄き夜のぞもし火も

消てまくらをかへさるゝなり

迷ひの金

赤良

みな人の迷ひのたねとなりいでし

こがねのつるのあなうたてさよ

光物

京傳

なまぐさき風の吹くるやみのよに

光物すは魚のこけかも

轆轤首

眞顔

窓の戸のすきと信せぬろく首

ぬけ出るうそをたがつたへけん

犬神

酒ふね

祭られて位つきにし犬神は

いたくも人をなやませやす

のつべらぼう

めし盛

武藏野ののつべらぼうは捕まへて

はなしにさへもならぬにげ水

蜃氣樓

東作

はまぐりの柱やよせてたてぬらん

工手間をみるもあゝしんき樓

幽霊

定磨

年もまたなかばにはてし幽霊歟

腰より下のみえぬすがたは

青女房

搔安

物すき風ふく原の古御所に

生たつ草の青女房かな

青鷺

京傳

いろかへぬ松にたぐへん青鷺の

さもものすごく堀をみこすは

越中立山

ひかる

魂返す藥の出る國なれば

なき人にあふ越のたて山

狸

参和

冬がれて荒たる野べのはらつゝみ

これや狸の化のかは音

蛇兒

眞顔

長くなり短くなりてみこまれし

兒を蛇ともしらで待らん

逆幽霊

酒船

幽霊もしての山路のさかだち

娑婆へひつくりかへりたしかや

鵲

東作

さる程に尾はくちなはの長ばなし

ぬえも變化も出るさらの時

八幡しらす

参和

このあたり所さだかにしらま弓

八幡の森へいりてなければ

皿屋敷

光

ひと二つ三つよもふけて七ツ八つ

九つわつとよぶ皿の數

古椿

定磨

風ふけばをのれと首をふる椿

はさへまだらにみへておそろし

雨降小僧

めし盛

さげてゆくおかべの雨のふり返り

にらむ眼は丸盆のごと

なめ女

まがほ

大かたのおそろしなごは甘口に

きへかへらするなめ女かな

あやかし

光

ぬいてかすそこきみ悪き柄杓さへ

あぶなき玉か舟のあやかし

しら兒

東作

をさなしと思ふまに身は化にけり

かしらの雪もわれはしら兒

天狗

搔安

ごつと笑ふ嵐の聲にくらま山

木のは天狗のみなちりにける

文福茶釜

酒ふね

文福の茶釜にばけのはへたるは

上手の手から水のもりん寺

生贄

眞顔

これやこの臆病神のみたらしか
いけにゑよりもいろの青きは

芭蕉の精

定磨

物すごき形をみするばせをほも

霜にはきへてうせぬべらなり

大座頭

ひかる

身のたけも高き利足の座頭の坊

金のたゝりのおそろしき臺

斬ぼろ

眞顔

立よりてうてばひらりと斬ぼろ

あやしく肝をけづるもの哉

古井戸

赤良

筒井つゝゐづゝの中にあらがねの

土の羊やおひにけらしも

高砂松

酒ふね

狸にはあらぬふぐりの廣がりて

まつの夫婦は化さうなとし

金だま

へや住

ばけ物の置みやげかや金だまを

千兩つめし箱根やまほご

跋

雀海中に入て蛤と化鷹^ハして鳩と
ばけきむすめ藝子とばけ花嫁姑と
化るは常の化ものにして南瓜唐菰
子と化さつまいも笛吹と化るもご
つとむかしの化物なりこの頃講人
はいふもさらにて詩人文人歌人ま
でひとしく狂歌師と化て舌は電光
のごとく鼻は天狗のごとくこは此
化ものに合は孟賁か勇氣もくじ
け晏嬰が智もなまぬるく四角なる
貌かへつて丸く角めだつ頭の角ば
つきとをれよく臍をしてくつかへ
らしむるはげに太平の化に腹つゝ
みうちうたふ箱根よりこなたの目
出たき化物ならずやひと日夕顔の
きみどりかくせし何がしの院には
あらぬあれたる家居の木だちもの
ふり人くさきけもなき所にれいの

化ものよりつとひて終夜狂歌の百
物語し侍りしをかきつめて一冊と
なしこれが末に寄化物祝といふこ
とをよめとかの化ものゝ首領四方
に名たかきだいだぼちよりいひこ
しければ

くはつと開く大の眼にかゝる世の
千代のさかへやみこし入道

唐衣橋洲

飲食狂歌合序

ひとつなべなる物くふごち飲食に
よせたるざれ歌の一巻をもてきて
これが鹽梅こゝろみよと翁かまへ
にせんをするついでやつぢうりの
てんぶら禪でらのふちやにまじへ
がたしたてばのごぶろく新川のく
らに積べからずはんべいにこのし
ろをたゝきいしなげをもて鯛とあ
ざむくたぐひ二八のそばのうどん
くさきふはゝの豆腐がちなるい
ひもてゆけば四六やたいのすいり
ぶたとりごころなき判者なるべし
まして熊掌猩唇のもろこし料理美
物上下の四條流などは嗅で見たこ
とだになければたやすくはしはど
りがたしと辭すれどきかぬ日光せ
めにいなともいかでいひ櫃のくち
から出しだいおしつけへしつけか

はらいたき詞どもをもつてもつて
もりつけ勝もまくるも杓子果報と
はこのめしもりが判をいふべくや

六樹園

評判 飲食狂歌合

左勝 酒

臥龍園梅麿

桃の酒一杯はしておもひざし

手まづさへぎる妹こゝろなや

右 栗餅

三州 岡崎 六兎園長雄

わかれなばまたいつの夜か栗餅の

きになるほごにつく明の鐘

左桃李の道ある妹に見されて涎のながれ
に盃をうかべたる酔ごころも常ならぬ作
意さはしられて侍り右もつくといふ詞よ
くひりきたる鐘の音に侍りさればおほお
ほしき目には勝負もしかさわきかたく侍
れど無理酒のしひて申さば永和の九年酒
雫ばかりつよくや

左持 霰酒

甲府 西山堂常雪

返事だになくてあるにもあられ酒

なき上戸とはなりしこのごろ

右 柏餅

熊谷 涼風亭岩守

待わびて一つふごんのかしはもち

むねのみさするよはぞくるしき

左右泣上戸 癪もちひこつ枕なるべく

や

勝左 酒

攝州 原田曉深寢父

打とけて君と寢酒はこれまでの

戀のやまひに百薬の長

右 粟餅

羽州 山形 六階園門盛

粟もちのあはぬ恨みもいはずして

きできをくひてゐるぞくるしき

左あふひならではと申すは後拾遺集の素

人ぐすり百薬の長なりとは本草行國が娘

につけたる良劑にて一ふくにて験を見し

こと匙よりまはれる作者の口つきあ上手

なりと稱すべし右うちみだにいほぬとは

本性少がほのあたりにちかき隣畑の餅粟

のあはれなるありさまあぢはひふかし此

目黒村の百性よき爲なしながら玄關つき

左 玉子酒

甲府 井口常水

うはべにはかたく見えても玉子酒

つひにはきみのとけてうれしき

勝右 草餅 奥州 八丁メ 文笹林星影

つくといふことを厭へば草のもち

ひしとこたふるきぬのかね

左たまご酒の鍋うすきにあられど右の草

もち打聞にさへかざあれば十軒店の正札

附まくべきさまにあらず

持左 玉子酒 不盡亭貢俊

戀風のくすりにもどてのめば猶

なみだの水をます玉子酒

右 草餅 千代徳若

草もちの青くなりたる戀病を

ひしがくしする身こそつらけれ

左右わづらひに枕ならべたるさまはや

り風の臭服屋が二階もおもひやられて意

詞たかく聞え侍れば代脈の判者その症を

わきかて侍りよりて糠鉢の輕重を申さ

す持參の持の字をつけて侍り

勝左 濁酒 談洲樓馬馬

その時はさうと詞のにごり酒

ひとつうけたる君が手づくり

あはざるはうぐひす餅よ此もまた

首尾の月日をほしとなくのみ

左くみかはすにこり酒一杯まぬつたい

もが手作りうまからぬにはあらず右首尾

すべて驚のれにのみ心をしめて餅をわす

れられしは黄鳥一聲酒一杯の上戸口にや

かつぎやたいのにこりさけ賀日ありげな

り 左 酒 文の屋折形

媒へのませし酒のかひもなく

水になりたるあいさつぞうき

勝右 幾世餅 羽州 山形 長月庵坂都樹

いく代餅いくたびとなくやる文を

つきかへしたる人のつれなさ

左こながら棒にふりたるはかひなかるべ

し右つきかへしたるの詞よき案と申すべ

し水になりたるふるめいたれば橋から右

のいくふもちしてやつたやうなり

持左 酒 婦美多餘理

かりそめのことからうき名立酒の

五しやくの身だに置ごころなき

右 栗餅

春直寝

栗もちの手品になげし玉章に

ころりと落てきなことぞおもふ

左湯豆腐の四文と出かけて紅葉あるしの

からきめを見たる状さころせき居酒のた

ちのみよくおもひよせられたり右御めど

ほり心のつきうり柏子にかゝつてきなこ

さりおもひのたけの皮つゞみ評判くさ

もよばふべくや此兩みせうり高ひさし

るべし

左 酒

紫茸園かつら

すき腹のさけより妹があいさつに

ひつくりかへるほどのうれしさ

勝右 椿餅

濱政子

諸共にあかぬことばのはしそへて

八千代ちぎらん玉つばきもち

左うけひきぬる妹が前にて蜻蛉がへりし

たらんにはかくし所もあらはれておもは

ぬ汗やかへ獅子いろけなしとやきは

れなん右つばいもちひは若菜の上菓子高

足の鞠いさたかくあがりたり

勝左 諸白

甲半襟賀計女

呑口の口ばしりてやもらしけん

うき名にむねもいたみもろ白

右 鏡餅

仙錦纜堂浦人

戀やせの顔をうつせるかゝみもち

かさなりあうてねるよをぞまつ

左きいたことはいでこらへぬむくいにや

こは雄長老の狂歌にみへたりこれはわれ

こしやべりちらしてみつから罪をつくり

酒屋口は禍の又六が門さいふ事か右鏡餅

かさなりあうてねるさ申されしはかされ

たる餅を又れるさいふやうに聞えて前後

相違にみへたるはいそがしまぎれの極月

の作なればなるべし左の呑口よくはしり

て見ゆ

左にぐり酒

奥州六逸園竹盛

妹が返事にぐり酒にてとにかくに

われに頭痛をやますのもうし

勝右 さり餅

尾州一酒龜丸

今さらにおもひきれとかきり餅の

かごある君があいさつぞうき

左人の痴氣ではなくて人やりならぬ頭痛

のやまひ此はちまきは過しころさは助六

の淨瑠璃にて白酒に似たにぐり酒戀の道

には苦うさげく右五人ざりの小万が

やうに急にびんしやんさみせんのかはつ

た心の五大力此作者なみくの人ではな

へはヘカチくく

勝左 酒

尾州秤中雄

林間の酒ほご床もあたゝめて

顔にもみちをたけるそひふし

右 きなこ餅

桑名蛤丁櫻馬伎

神かけてもちのきなこに鹽砂糖

あはせてたべといのりてぞすれ

左自氏文集の堅みをすてゝむしぶすまに

あつくなれる風情一しほのいろ紅葉とや

申さん右かけてはきなこの縁なるべけれ

ご御馳走ぶりほごはゆきささかず見ゆ林

間の紅葉てりつよくや

左 霞酒

奥州シマ橘香和義

わが心くむ氣はさらにあられだけ

さてのみこまぬ妹が氣づよさ

勝右 餅

紀州若山紀 靜

蒸籠のふけゆくまゝに身ひとつを

もちについたる待よはの床

左四の句はにがい丸薬のこゝちす右ひやうしの手よくそろひたり勝さはつく男の名なる歟

左 玉子酒 同 胴膽太紀

好物の玉子酒たつ法もあれ

君が夜床にぬくめられてん

勝右 白玉餅 シマ山中鹿住

いでやまづ鬼一口にねぶりてん

しらたまもちに似しいもが顔

右在五つ物語の伊勢町にさなれる瀬戸物町のしら玉か何ぞさ人のいひよりて神鳴るさわきにだきつきしとますべて閑疑抄のかけめもみへす侍り左すもりをいさへるたまこ酒ふさんかけろさよびたるなごくだかけのくだけたる所もみへすされご右の方人の申て侍るは玉子にても此下句かなひぬべし酒といふ文字いたづらなりと雞鳥の毛をふきて申めれば瀬戸物町の方をさして堀江町のうちはなばあけて侍り

勝左 酒 カク瀬上三秋堂歌文

よそへゆくことをばしらで待酒の

かはつたごごくおもふくるしさ

右 からみ餅 千水垣

足つよくかよへど君はからみもち

ごかくねばりて契らせぬうさ

左疊さんのめを見せし人のためにながい夜すがられもやらぬさはさりさはあきながたらし媛のむかしを今の人まろ酒感氣侍り右笑るさはこん世にははねをならべんさいひ又はいつくの御げんのふしをしのふすまをささぬべしなごいひやくそくをする事なるをらんく鴨のこさなりとするはさりちがへたる鹿相にや侍らん左のまろ酒燭出来たるやうなり

持左 玉子酒 カハ南松亭音澄

こぬ人をかこつ涙のたまござけ

あてのちがうたよはぞかなしき

右 からみ餅 琴松舍冬住

いひやれど妹がことばのからみ餅

おろしつけたる返事うたてき

左さまりの船の帆つしめなはいたづらなるものなるべし右十把一からけの大根さいはれてイヨ役者さなぶられしはばら

だちたる跡なるべし左右甲乙なくや

勝左 酒 出雲洒落柿

いひよれば一口酒のよくきゝて

はらの中までをぐるうれしき

右 雑煮餅 笹林堂糸織

あふよはゝむつまし月の雑煮もち

露澤山ないもどうれしき

左初戀の下戸口あながらにやつてのけたるさまきゝ所なり右むつまし月のさふにもちいもささへつりけられしをかしさは左にまさりぬれど居風呂桶にて牛房あらひて雑煮の中にまぜられしなごちさ荒涼に聞ゆめれば下がりなる下屋の方に床をさらせて侍りせんかたなみぞ床なかになるさばかゝることをや申すべき

持左 焼酎 酒藏人

いひたさもいはでのみこむ焼酎の

しやくを押へてしのぶくるしき

右 栗餅 桑南陽堂岡住

戀いのる目黒の道にその名さへきにかゝりたるあはもちのいろ

左右こなたにしのべばかなたにいの癪
に酌をくらぶれば氣に黄なぞらふ心づ
かひさもにひさしくや

左 酒

尾歌窓弘器

五百世もちぎりて妹さかため酒

つぐに手のある銚子うれしき

右 汁粉餅

甲佐屋裏襟

絶すだれかくとも人はしるこ餅

われのみむねをこがすくるしき

左みつもの、笹網羅はさり置てこれは手

のある果報もれてまつ床のかため酒め

でなく開け右人はしらじさいふ意なれば

しるさばかりにてはうまくはかゝらずこ

達筋三枚橋わたりふらつける折助なこや

申べからん左の説法き、所ありげに侍り

左 酒

似顔悦氣

嬉しさはふたり寐酒のつけざしや

互の口を吸ものにして

右 ちまき餅

桂家風

今更に心もせくのちまきもち

つゝむにあまるむねのくるしさ

左三人れざけの吸物あんばい八百善も遠
くにげぬべし右しのお戀の意なるを何を
見かけてこゝろのせくにや左のつけざし
をありがたしとすべし

左 酒

鴛照庵流雪

まつよはの胸にこたふる時酒は

ほしてもそでのぬるゝかなしき

右 草餅

仙臺系唐磨

草もちのくさゝ胸につきつめて

いろ青ざめし戀病のかほ

左桐火桶のぬちいさまではないかほして

も袖のなごいへらんあたり優に聞え侍り

右よごのゝ母子もちよろし但戀の歌はみ

づから戀する人になりてよむがならひな

るを戀やみの顔なごいひては隣の窓から

のぞきてみるやうに聞ゆべくや左まさり

左 酒

松梅亭魚人

くりこさはつきぬわかれの泣上戸

酒のあとひくきぬの袖

右 鶯餅

高砂松成

かきおくる文の返事にきなことの

うぐひすもちのはつねうれしき
左孟東野が古別離の作を延壽太夫にかた
らせてきくこゝちす但泣上戸さいふ詞俄
なるやうなり右うぐひすもちひき菓子
の中にはまじへがたけれご三文ばかりの勝
なるべし

左 直し酒

祭和樽

今宵あふしらせにいろもなほし酒

ひのいるまでをまつぞひさしき

右 雑煮餅

質亭文斗

あみの目をいこうて忍ぶ雑煮もち

つらやこれにもまた耳がある

左しらせの文の本ぎに心さへみひしれ

て落かゝる日の足ざりなさへ心もさなく

見たるさまいひしらすこまかにめでたし

此直し酒池田伊丹にもくらぶべき物なき

名酒さや申さん右きり餅の耳するごけれ

ご勝は左の西日をこそさすべけれ

左 酒

尾龜丸

君まさばふたり寝酒と用意せし

ちのりにさへもはかまぬがせつ

右 看板餅

保原假堂似瓢

ちぎるゝとは唯見せ先にふるされて
看板もちのわれのみぞうき

左ふたりれぞけのちろり鼻息もふいこ
火鉢さやいふべからん袴さいふ文字赤良
のよみそめし以來今は七つ時分になり
て侍れば折角のまゝ酒かひなくもばへ侍
り右かたき契りもわれくさなりてうら
すかはすの看板もちてらされてゐるをな
げきたるさまよろし勝にたがはじ

左 にごり酒 上 青晴園南湖

うき人はさかく心のにごりざけ
くみ直してもすまぬあいさつ

勝右 いか餅 同古氣成

附まはしくぞけといかないか餅の
一向ねれぬあいさつぞうき

左くみなほすさは仲だちのあつかふ意歟
右いかもちなつかしかられぞめし粒ほご
はよろしくや

左 老松 狂蝶子文麿

老松のどしにもはぢず酒樽の
むしろやぶりに妹ぞこひしき

勝右 山椒餅 梅鷹

妹どねてかへる朝くら山椒もち
うまく人目のせきはこえてき

右關にあさくらのためにかまへられたる
おこそかにみゆうまくの詞にて餅たしか
に聞えたりようぜすは山椒によする戀に
やなりなましあはれ作者のなのりこそき
かまほしけれ左六百番にみへたる老戀を
よまれしはけたる判者耳いたく侍りむし
るやぶりなごみづはくみたる人の心には
ふさひで侍らす虎一が強勢丸のかなづゑ
の力をさへみせてしたゝかにたゝきすゑ
んささへ思ひたまふれば此歌をはまげこ
定めて侍り

左 酒 千枝成

宵の間にひかへられたる酒よりも
あとをひいたるけさのわかれぢ

勝右 鏡餅 金亭正直

かへり見ればかげにぞしるき鏡餅
ひくわれながらくたくこゝろを

左曉の明星が東へちろりのれぞけをさへ
おくびに出すきぬぐの空あはれふかし
右われながらやつれたりさは蓬萊の鳴物

語にまさりて鏡餅のかたくなにくだいた
る心いさくこまかなりしるこ雑煮のな
べてのもちひいかで此そなへのめでたき
におふぶべからん左も名酒の味ながらか
た餅の方かちくさ音して侍り

勝左 酒 内元 住

聞酒のきゝだにいれず中々に
はき出すやうな妹があいさつ

右 かき餅 尾歌泉堂眞澄

これ見よと恨みのたけをかき餅に
やきかゝりたる妹がたまづさ

左き酒あま口なる妹にはあらぬなるべ
し右かきもちあぶりこのめざましけれご
間屋のさしむかひにはさびしきこゝち
し侍り

勝左 酒 知宗盛砂

ひや酒のひしても爛をつけられて
出来たと人にゆびをさゝれつ

右 あづき餅 貢俊

いふ事をきかぬさたうの小豆もち
妹は耳をやつぶしあんなる

左指をさゝれつこいふ所か山口三浦の惣
銅壺つツこんでよくよまれたりさや申さ
ん右くひかげんよしと聞めれごつぶしあ
んちさばかりへされぬるにや

左 劔菱 尾桃源亭園丸

戀中をさげさきくさへむねいたや

うきさが口にふくむけんびし

右 餅 石川清澄

戀しぬるばかり苦しいひよれど

つれなや君は耳ふたぎもち

左酒と製の秀句よろしけれごこはさく

さいはまほし但さげさ下知しつるにやさ

ては此酒一杯にたらはぬこちして侍り

右しぬこそたにいふべかりけるさしつ

ふか養父が歌をさりてさうは虎屋が餅一

重茶にしたるさまおかしくや勝たるべし

左 酒 府可鶏多理雄

物くはでいのれば神もき酒や

ひと口うまき君があいさつ

右 ひし餅 尾三五屋影住

言の葉もどかくかどたつひし餅の

つらやひそりてわれの中

左右の餅酒はらにあぢはふるにさにもす

てがたしよし酒に泥の名をよはれのし餅

の棒にうたれて泥ぼうゝさのゝしるさ

も盗人上戸の怠狀かきて持さ定むるこ

如件 左 酒 桑順風舎積業

のみすぎし二日酔よりやる文を

つきもどさるゝむねのくるしさ

右 腹ふと餅 郡籬元住

あづきはご包めど人やささるらん

身ごもる妹が腹ぶどのもち

左おくれる玉つさのこまぐしきよりこ

ま物みせのむなぐるしきふせいはいきく

させし趣向なり右見つけさんしてこれお

そめさ門つけのそばの大ふくもちかうば

しき匂ひながら左の駒よせによりかゝり

たるゲロゲロの音いさゝかたかくや

左 直し酒 尾一見亭紫丸

そこねたる妹がきげんをなほし酒

あまきことばにつききてくごかん

勝右 のし餅 瀧濤舎堅住

のしもちのしかゝられて手枕に

つくむしろめを人にかくさん

左本の句はおもふが中の小さいさかひと聞

ゆるを末の句にくごくさいはれしは初對

面のやうなり但き酒のきくたがへかも

しらす右のしかゝられてさいふ詞荒涼な

がらたまくらものむしろめよく心づかれた

れば勝さす 左 忍冬酒 同六志園益盛

くごげごも妹は氣づよく忍冬酒

あまきことばもなきぞくるしき

勝右 かしは餅 一寸法師

かしは餅みそか男はつゝむ葉の

うら見よどてかまつにきまさぬ

左き文字あまたかさなりたるはいかに

きづよき酒さは聞しられつ右柏の葉のう

らおもてをさへいひてみそか男さつてけ

られし重宮のすみからすみまでおめでた

んこの心くばりゆきいたらざる所なしあ

すのひをりのかちたるべくや 持 酒

あふよはの聞にふたりがくむ酒は 尾州 犬山松俊古

ちぎるひよくのこりざかなにて

右 そなへ餅 花園亭麟馬

このやうに二つ重なるおそなへを

あげてむすぶの神せがむなり

左ひよくのこりざかな右おそなるそなへ

餅上戸さ下戸のさべちさだめかれて侍

り

持左 酒 同一ノ 野高成
ミヤ

なる口かならぬ口かとなかだちに

たのみし妹がへんじ聞酒

右 のし餅 狂語園江戸振

のし餅のたちわかれよとつき出す

鐘きくみもやまづ落してん

左き酒さしたるなんくせも侍らず右よ

くれりたる上春の餅さ見ゆたし耳をあ

さすさ申されしこ餅にはさもいふべし

人の耳をあさすさいはんこ聞なれすフ

ギヤくさうめく人ならば鼻があらたさ

もいふべけれど耳にはつきなく聞ゆ此結

句きりもすてゝんなごあらば勝べきつが

ひなるを落のへ字にて持さは定めて侍

左 體

山坂都樹

あまざけの口にうまみを含ませて

一夜にかはる人ぞつれなき

勝右 大福餅 濱邊庵朝風

うき人は皆いふことをつぶしあ

大ふく餅のこがれぬれども

左すゝりはてたるあまざけさみるに一夜

にかはるさは手のこしをして置たるにや

右大ふくもちのあたゝかにうまい返事は

せぬさにや左右かつぎあきなひながら大

ふくの方うりかちたるべし

持左 治聾酒 柿澁丸

返事だに今になければ治聾酒を

きこえぬ君にまゐらせやせん

右 草餅 桑松々亭千枝丸

見られじこ心もせくのくさもちの

ひしてぞおくる戀の玉章

左返事のない文さかけて治聾酒さくこ

ころは聞えぬ人にあげたい右いる文さか

けて草餅の重箱さくこころはひしなが

らゐくる

此二首淺草の謎坊主ふたゝび目をあくさ

も甲乙をはわけえがたからん

勝左 男山 尾紀有文

戀に身はあどへとひかぬ男山

なるとひとくちへんじきかせよ

右 餅 焉馬

蒸籠のしまひ仕事の引ずりは

自由自在にならふ女房

左なるさいふ詞に酒さ戀さなやらずのが

さす男山さかやきもかゝアたばれのいさ

みすがたさはしるる右里なまりのされぬ

年あきのきたすき女房情なしにて戀のこ

ころうすくや但女は夫に従ふならひなれ

ば男山にかたさりぬさも耻にはあらじ

持左 玉子酒 桑岡 住

玉子酒たまのあふ夜は打わりて

おもひを君にとくかたらなん

右 そなへ餅 犬影 住

妹と二人ねるやうにとてそなへ餅

きぬどうすめの神にいのりつ

左たまこにうちわりてなごふるしさてか

きたて箸にめをつけていふ人も侍り右寐
るはぬるそこそいはまほしけれごつきお
ころかす人も侍れば雙方まろく引わけて
玉子こそなへのあらそひをこゝめて侍り

左 體 糸 織

三國に一なる妹にあまざけの

一夜ねかしてくれごたのまん

勝右 餅 甲裏 襟

こゝろなく妹は返事を引ずりの

もちごゝにのばすくるしさ

左あまざけ屋が障子の文字ふこくたくま
しき体さもいはまじされご一さいふ文字
ふたつありさてあつい茶碗をふいて疵を
いふものもありぬべし右ひきすりもちの
かまはぬをなげきたるさま松まきのけふ
りたちのはれるほごには侍られごカチン
ご定め申すべくや

左 持 諸白髪 ハシ王の屋

諸白のもろしらがまで年ふとも

こもたる中の中はかはらじ

右 さたう餅 伊勢濱荻

忍ぶれご色に出しまの砂糖もち

ちぎりもやらでむねをこがしつ
左燕權よくならべられたり右砂糖もちか
たつおかしくまるまりぬ左右同等歎

勝左 酒 文 暦

時酒の時をすごしてこぬ人に

かさねてごいひし契りくやしや

右 小枕餅 風流雪

かくあれごいのる會式の祖師の前

こまくら餅をふたつならべて

左時酒鹽さごもにすみわたたりて聞ゆ右會
式の小まくらもちほかぎりもなくあまた
ならべて此ごろはやりの石疊たつやうに
はかざるめりしかるをたふたつご申さ
れしは二人ぬる枕にはささいいふべし左の
時酒のむに難なくや侍らん

勝左 酒 京水 月

酒粕のしめてあふ夜におもひきや

なみだにそでをしほるべしごは

言の葉にあまみをみせていくよ餅

いくよもちぎる中となりてき

左おもふまゝにはならづけのしほくご
したるさまお茶づけのさらくご聞えた
り右のいくよまつしごにはあられご出来
合の風味なりつけものゝ方おもしくき
き侍り

左 男山 榎通路亭曲成

ゑにめでゝ寢酒になしゝ男山

ひとりのみぬる床ぞわびしき

勝右 餅花 麥飯高盛

目黒山のるしるしに木に餅の

はなさきてなる返事きかせよ

左男さいふ名にめでたるをみれば女の歌
ご聞ゆしかるに寢酒をしもひツかけんご
するはいろけのうすき方なるべし右粟も
ちのあはご見そめて飴の袋のきりくご
返事白銀めぐる花ごは近き世の童謡にや
あはれ一の富のみさへ花さへよいけんご
くの夢ではないかごうれしがらせてくれ
たまへご目黒を祈る戀の歌駕をつらせて
かちごは見えつ

左 忍冬酒 六十軒一長

戀病のくすりにならで忍冬酒

どかくに妹のにかい顔する

右 勝 いく代餅 酒喜々丸

日ごとやく思ひのたけの皮づゝみ
いく夜もちこすふところの文

左 忍冬酒よろしけれ一首のつくり方さ
せる功能もなくや右妹にこがるゝいくよ
ふところにおしこめておけるあつき心さ
しらる勝なるべし

左 酒 甲府 藤田 峽の屋一飛

たへかねしわが聞酒にわきむいて

舌打をするいもはうらめし

右 勝 水餅 歌工成

おくるべき折もなければ水もちの

もちくさらせし文ぞくるしき

左き酒の舌打きゝなれず右手をいれた
がる水餅おはぐろくさくなりたれど物置
の隅にはあきかたし可爲勝

左 勝 醴 尾 益 盛

あま酒のなれてうれしと思ふ間に

あぢのかはりし妹があいさつ

右 栗餅 上州 桐生 一陽 亭長持

うき契りまつ夜はあはであは餅の

君があだなる口のまづさよ

左なれてうれしとは三國一の盃もすみぬ
るにや下旬にくさみのつひたるをなげか
れしさもあるべし右栗餅の黄なるをさへ
申されしよくもころのつき加減きれ音

たかしされど栗もちを一すぢにまつきも
のゝ部にかぞへられしは清少納言もきの
つかぬさころなるべしよりてつきだまり
の一つぶばかりいさゝかのひけさはさだ
めづ

左 持 酒 一寸法師

こぬよはゝ名酒の樽のせんもなや
くるゝまきの帯もどかすて

右 うゐらう餅 岐 早詩館 歌笑

あはぬ身はうゐらう餅の皮づゝみ

しめたる帯をどくよしもがな

左涙の瀧水右うきたる舟橋屋いづれも
さらぬ名家と聞ゆ

左 持 酒 氣若女

たまゝにあうてわかれの時酒に

またかさねてといふぞくるしき

右 牡丹餅

徳 若

わが戀は今出来たてのぼたもちの

やはらかな手をにぎるうれしさ

左盃手にさりたる時に鐘の聲するを時酒

さいふさる時はかされてのむならひなり

さ老たる新造こそ申て侍りしがさるをあ

さらばのきぬぐにさりあはせられしみ

な香をたゞきて感じ侍り右できたてのぼ

たもち越後屋が風味ありてかの黒砂糖に

しあげたるくふも御難のたぐひには侍ら

ず此つがひ又持さや申べからむ

左 山々 曉庵 御代住

今はたゞ戀ふるうらみの山々に

むねのいたみのたゆる間ぞなき

右 勝 水餅 清 澄

戀やみてのごへとほらぬ水もちの

あしさへよわくなりてくるしき

左むねのいたみあかしげなりしかれども
山々は池田の山城屋が酒にて伊丹にあ
らず人申て侍り右なよゝさしたるさま
は桐壺の更衣にや扇屋の夕霧にやいづれ
福清も年季をくれつべきさまなるべし左

の山々灘ならば直段あるべくや

左 山々 上州菊萬世成
高濱

なさけなや戀の山々くごげども

しるしの菰のかぶりのみふる

右 のし餅 此邊赤下手

すがごもに一夜ねしよりのし餅の

耳だつものはうき名なりけり

左戀の山々のしるしかひなく新川新堀の

水にながしたるをうらめるこゝろふかく

や右ののし餅一口ものに頬をやきては

やれほうさはやされたるおかし左右さし

になひて一荷さすべし

詩も歌もしらず五升だくんと

一斗の酒にくごく百返

勝右 牡丹餅 甲裏 襟

文は棚へあげて見もせずばた餅の

けがにも落ぬ妹はうらめし

左唐やまこ共に覽書にまきこめてやるは

詩歌なるなこれらもすつきりぞんじませ

ぬこは庄屋のべく兵衛がなごりの唱歌め

けごせつなる戀にはながむより外のわざ

なからんか五升をあはせて一斗の勘定よ

り下句は謫仙人の寢言なさへやらかされ

し長安の酒家もあきれつべし右運は天に

ありはたもちは棚にありさはいづれの代

の聯句ならんうち見にはやはくさみゆ

れごさすがに重箱のかごをみせて鼠穴の

ひき入たるをうらめるさまおかし左生さ

升のかなもむつかしければ棚のぼたもち

をあふぎて見つべく侍り

勝左 千日酒 みつあさ

しねしなんの誓ひにのみし千日酒

ほつてもさめぬ戀のかねごと

右 栗餅 河野暮齋高行

くひつかんうらみも今はあは餅の

いはぬいろなる戀やみのやせ

左僧老同穴のあなうましをさめにあひぬ

のさめごここいつは日本さいふ所をこ

ささへぐから國にさりなし千日酒のあと

をひかれしめつらしくうけたまはりね右

うらみをだにいひえず顔色の變りたるさ

まよし此戀やみもしやぶ醫にみせまし

かばようせすば菌陳湯をやもるべからん此

病人もすてがたけれど猶左の劉支石はり

出しものゝこゝろしてめでたく覺へ侍り

勝左 酒 赤貫改
上州 桐雅雄
在江戸

こゝろねの赤さも顔にあらはれぬ

ふたり寢酒につもるむつごと

右 栗餅 阿河の上白翁

たまさかにふかしてこよひ栗餅の

つきてうれしき君がうつり香

左緋緋子緋ざやのよるの物に朱盃に九年

酒をつぎたらんはいかであかゝらざらん

右のうつりがたかしさいへど酒の匂ひに

は少々けなされたらんかし

左 酒 武州 カネコ 便利庵商人

きゝわけぬ君が心のなだものや

頭痛にばかりやますくるし

勝右 栗餅 仙臺東雲舍明益

うすなさけ手を盡せどもあは餅に

つきまはすとは曲もなや君

左われはにせさへおもひたるを薄々の

酒のお茶湯にもならずさうらみたるよろ

し右あは餅のうすなさけやはくさわれ

につきれさのわびこそ大きに曲あり勝べくや

左 酒 みつあさ

いざさらばこひしき時は酒のんで

泣上戸ぞ人にいはれん

右 草餅 阿針業有大甚

おもふこと心にむして今ははや

胸ももえぎのいろの草もち

左こひしき時のおもぐくしには酔泣する

に猶しかすけりとは大伴卿も御存ない口

つきほむるに舌もまはらず侍り右心にむ

し草もち藍より青きこちすされど左

の竹葉をみどりふかしと申すべくや

勝 酒 會津 水莖園升成

みな酒がいはずとばかり疑うて

妹はどうかうのいらへだにせず

右 餅 三州 紅園右蝶

わが胸は上からみえぬあぶりもち

人目のあみの下はもゆれど

左わるい酒よさあはめられては何を以て

飲食狂歌合

も魏の武帝も氣のふてへこいふ地口のやうに聞なされてはては無言のうしろむき

しよまのかれのたばこ盆けぶたい妹をう

らめる一ふしとさかう詞にのべがたし右生

葉油に胸をやくせつなき戀のあぶりもち

あふぐべしとされど左杜康といふ大だ

てものをさへ出されてだんまりの幕はえ

あれば勝べし

勝 白 酒 上州 黄金釜成

君はたゞかまくら河岸のしろ酒か

もうきれたとはつれなかりける

右 柏餅 山千桑庵眞弓

なき名のみたつをつまん柏餅

猶も葉守の神をいのりて

左内裏ひなの夫婦ぐらしとあらましこ

さのかひもなく戀の山川中たえて中ウさ

しま屋にこそわられたるよしをつけた

るよろし右もちの名より神の名にさへあ

ふほされしかひぐしく聞ゆ木歌のしら

でぞなりしさいへるは後撰にはならのは

さあり今は大和物語にてよまれしなるべ

し但なき名とは戀せぬ人の詞なるべけれ

ばいかに聞ゆあだになつ名をやつしま

んなどありたく思ふもいらぬ佐平二なるべし此つがひ重兵衛殿を勝とす

左 酒 上州 舉白園樹芳

待よはのうさをはらしにのむ酒と

ともにうらみをかさねこそすれ

左 笹粽 瓠形天馬

笹ちまきむすびかはしてその中は

青きころよりおもひそめてき

左やけ酒の青ツきりにひさげの水のにえ

燭のわかかへるうらみなのべられしすこ

いほごによまれて侍り右六帖にあく山の

かきはにかゝるならのはのあをかりしよ

り思ひそめてきといふ歌あり和泉式部が

いなり山はこれから出たるはなしなるを

ふたたびむすぶさちまきさとしておいし

くも見へず左の獨酌こちよくあはゆ

持 玉子酒 伊カ 一樹園久澄

玉子酒つものるまくらのちりも今

夜着をふはさせてはらはん

右 焼餅 高サ 泉源樓壽女

よりそへば心がはりかやきもちか

ぶいどふくるゝ人のつれなさ

左歌右の方人の中て侍るは玉子酒といひてふはくこはいかに此ふたつ同物ならずまた下句もいぎたなき人の屁こきたらんやうなりと申すめり右も左方人の申せるはぶいこの詞不庶幾と申す判者申て云難をさりたてて申さんには楊貴妃が狐腋小町の穴なし吉祥天女を法けつきたりとは昔の人も申て侍りされば人の口には戸がたてられすすりこ木をもて定木の説はさるにたらずとや申すべからん此二首ともに狂言をまかしくさりなされたれば焼もち鶏卵をひごつかみにしてともにわれさやさだむべからん

左 鮎

梅 麿

枕繪によくにしを鮎おし鮎の

口すふと人のかけごごぞうき

勝 右 冬瓜

風流雪

百ひとつなれごぞいのる神の名の

かもうりをさへたち物にして

左口やなさへうはさされしは身にさりて

は貫之のみかはやすのりがむすめのあち

やツびいなごさへかな椿をひかんさち

へばあしあゆの顔のつふるさのなげき

御尤く感心いたしてござる右のきこは唐茄子かぼちやのたぐひならず島の中におしろいた冬瓜の花の顔すがたごうぞ一たび青首の鴨のおへにかもうりなたちうりすさほしるが葛煮がさいふ心なるべし此一番土佐の海ふかくみあれ山たかしされご持の多きをいさふまゝにしひて判断をくばへ見るに鮎の口より冬瓜のしりすこし大きなこちす

左 石かれひ

上州 吉井道遙園行康
いろく料理に見れご兎に角に

いもがこゝろの石がれひなる

勝 右 山葵

桂家風

いひよれご口を塞いでわさびより

鼻をあかして君ぞつれなき

左かれひの料理が秘事口傳あることを

きかず右わさび格別の風味なられごきか

ぬには侍らす

勝 左 蛸

尾有 文

たこのあし八つと七つの鐘きゝて

いもごぬる夜は身もどけにけり

右 菜

壽保亭堅人

うらめしや今さらたれた小便に

かへてうきなをふれありくとは

左むかしく此所にまだこの章魚さいふ

者あり章魚がはたけに芋をはるごき鍋の

中にかくれしを八足にてからみつけば蛸

はたちまち湯さ成て候なんどうなかしき

狂歌にて候右小便さばふるされたるをい

ふにや此京菜名物と見ゆされご小便たご

をまたいだる足は二本なり八本のかたを

まさるご申すべくや

勝 左 あかめ鯛 花源樓菊成

戀すやごはれて顔をあかめだひ

をひれをつくることのはぞうき

右 豆もやし 望月詠女

きます夜はごこか心もまめもやし

ならぶまくらの二葉うれしき

右心もまめもやしと申されし聞わきかた

持 左 鰻

江都振

饞程にあたゝまる夜はほりものゝ

命なけ出す君がしき腕

右 からし

山門 盛

きぬゝの鳥まで聲をからしの粉

きけばなみだの出るわかれぢ

左なみたいていのことかひなに命といふ
字はたがいた白むくぬいて二世三世と
契りかたらふ女夫の中おかし右四の句の
きけばと申す詞げに根性惡のかいたる芥
子ほごによくきゝて侍り一首はしたひも
をゆふつげ鳥さいへる古歌もおもひ出ら
れて興あり但わかれぢと申す路の字いさ
さかこゝろゆかぬやうにおぼゆ左も名歌
ながら饞ぢうはさのやうになりて侍れば
ひとつふさんひつくるめてさもに持さ
定めて侍り

左 持 鯛

會外 成

つゝめども鯛のあぶらこい中と

人がめざして名をふれにけん

右 紫蘇

多餘理

手をもんでをがむばかりか梅漬の
いろよきへんじねがふしその葉

飲食狂歌合

左節分のかべに耳ありそのなげきなるべ

し右つけ梅のおしなおもくくごかるゝさ

まいづれもあひるまんまのおめぐりにて

これもまた甲乙なきなるべし

左 こち

夢廻屋賤磨

魚の名のこちの人よとよびてたべ

あたまがちなとよしやいふごも

右 時

からし菜

甲斐 襟

むせかへる涙もくるしからし菜の

からきこゝろの人をこふとて

左魚賣の團七ふさくたくましき躰なるべ

し右からしなのからびたる躰ながら八百

屋の久兵衛人からはまさりぬべくや

左 かつを

武州 引又紀安丸

約束のたよりをこゝにまつ魚

千ごせかはらぬ妹があいさつ

右 時

大根

濱 萩

君をいつだいてねりまの土大根

千六本もふみつけて見ん

左松魚はかつをにあらず鱸なりある本

帥家は申て侍れごゝにいふべき論にあ

らればうち置ぬちとせかはらぬも松の縁

語にて魚のかたうすくや右ちよきくご

きざまれたる庵丁のはおさひやうしおか

しく聞え侍りされば此まないたのおさ

「左方人」かちくこいふことかふるいふ

るい「判者」イヤくかつたくと申すこ

さなり「左方人」つき米屋ではあんめへ

し

左 時

さより

隣 馬

抱きあふ其きぬゝはほねもなく

あはせざよりのわかれかねつゝ

右 つる菜

悦 氣

せんざいのつる菜の畑の二世三世

いもが夜床をはひわたりたや

右千歳の鰯菜むづかし左のあはせざより

少々てぎはみへて侍り

左 持

するめいか

仙唐 磨

わかれ路は涙に目をぞするめいか

からす飛出すあかつきのそら

右 わらび

盛 砂

戀やせしさわらび程の手をとりて

五百二十七

根をほりて問ふくすしうるさや

左大通焼のかうばしきここのはいかさま
上手の作なるべし膽を鳥は子ごものよび
名又海上にうかむさき鳥きたつてついで
むを足にてさる故に鳥賊さこそはなつて
たれヤツアイヨイホン／＼イヤア右かな
ひばしさいふ所をさわらびさしやれたる
は氣むづかしき病人には口輕き所見さこ
るありて文字二つかさなれるは病人の手
さ醫者の手さ診脉のていでもあらうかそ
こらば大目に御覽のさほり痔賊さ醫家さ
のにらめくらふき出すまでは預りにさだ
め侍り

左 魚

仙臺錦春亭永記

縁むすぶ神にちかひをかけ肴

ふたり一所にならぶうれしさ

右 菜

岡六玉園古則

妹がこよひあをなといひし約束を

又小便のへんがへぞうき

左かけ肴山家にはきゝなれ侍らす右青菜

むづかしけれご小便しこゝろよし可勝

左 鯖

グリ玉の屋日曾丸

なま中にいきぐされなる鯖のいを

さばぞと妹にわかれつるより

右 蓴菜

家 風

戀瘦て身はじゆんさいの箸にだに

かゝらぬていとなりしくるしさ

左二の句に此頃のふさぎをしらせて四の

句にわかれし情をのべられたる魚へんに

青き作者さほみえす此魚こにあたらし

ければ直段をなしますかひまりて惣菜の

料さなすべくもばえ侍り右ねぬなほのぬ

らくらやまひよろし但例の方人の詞に此

歌初の戀さいふ字をのぞきては森田屋の

頭巾にさむさをふせぐ人のごとしと申す

めりいでやさかなしやべりはさりおき

て戀する人の心には何も後生さおぼしめ

しさもいはざらめやはされど周防の名産

たふさげに覺えて侍れば左を勝の座には

すふ侍りつ

木櫻露堂玉成

やう／＼といひよる戀の初がつを

ねもせぬうちにたつ名くるしき

右 ぬなは

源氏樓春影

つれなさは今宵も獨りねぬなはの

ぬらくらとして君はきまさぬ

左初がつをねもせぬなごあたらしん場か

小田原町日本橋のまん中にちらさ一本見

えたばかり前後にみへぬ初がつなこゝが

賞翫さいふさこる歟右蓴菜のする／＼べ

つたりながくこぬ人をうらめるさま左右

ひさしかるべし

左 から 鮭

イカ 久 澄

すぎし頃君を見そめてからさけの

にくは次第に落し戀病

右 からし 菜

雲林堂虎雄

からし菜のからりとかはる挨拶に

むせるほご出るなみだくるしき

左また一夜だにあはだ口のからさけいか

なる女御更衣をか見そめたりけん右金か

す人の證文にのぞんでへんがへしたらん

もかくぞあるべき左の東大寺の聖寶あり

がたしありがたし

左 むなき

白芦原雄風

いささかん妹はむなきのあな憎や

筋のわからぬけさの玉章

右 茄子 イカ 深樹園安磨

種茄子のほごにみをいれやる文を

皮だにむかでかへすつれなさ

左せつかくいて北浦のやはらかい妹が

文をさきすてしまふさは旅よりこはい

人の心や右はたけの中に鐵漿つけてゐる

をみそめてから聖靈棚のうしや今かゝる

しぎ焼になつたかいやいさ胡麻汁のすゝ

り泣おかし勿論葛飾く
左 撞木鯨 文 磨

かへる氣はまた荒海のしゆもく鯨

さめよとおこす鐘ぞつれなき

右 花柚 歌橋庵千里唐

なかだちに鹽梅させて花柚ほご

そごかはらせておくる玉づさ

右あんばいの花柚一首のにはひふかし左

鐘の聲高くひゞきたりされど結句は撞木

にのみかゝりて鯨の縁うすきは遺恨なが

ら一首のなくみ大かたなられば勝負は料

理番にあづけてはべり

左 鱈 松 成

つれなさはあぢにことばをませ肴

たがひちがひにぬるぞうたてき

右 長芋 越後 松彌佐守

あうて後今はいのちも長芋や

ひなぎなごゝはかはるなよ君

左まぜものさかな臺あこさおほひに何よ

りの品さや申さん右あふにしかへばの命

もあひ見ての後ばれがほくは彭祖が八百

屋の縁のした長芋あればみじかいもさば

つるかで五位をもてなし、利仁の馳走ぶ

りよりめづらしく承りぬ小さかなよりか

ばやきの方ちと氣があり
左 鱈 寶 升 成

約束もせんごするかと夕鱈の

あぢにこゝろをつけつまはしつ

右 茄子 折 形

人の口にかゝれる戀の初なすび

はしりものなるうき名はづかし

左あぢなこゝろに信濃屋よりはその隣國

の駿河なすびはつ物のかた價大にたかし

夢にみてさへよいさや申さん

左 にしん 高 盛

かきくぐく數のことばも聞わかで

われをにしんどうたがふぞうき

右 芋から 下野 麿塚文車

それぞとはさして言れぬ芋からの

さかるゝほごにとはるゝもうし

左かすのこはさ申されしむつきの重詰

めでなし右いもがらで足をつくためしな

しまけなるべし
左 鮒 尾 釋 寸 法

あふ事はかたゝの鮒のすしならで

おしつけてやる文は何本

右 大根 甲 鶴飼川成

抱つて投出すあしはふたまたの

大根としろき妹がふごもゝ

左いにしへはいさもかしこしかたふな

つゝみやきなる中の玉づさは衣笠内大

臣の御詠なりさやうのやんごさなき故事

さもしらですし屋の娘がはれられりよか

さひたすらなよりかしこくもよまれたり

右ふたまた大根をあしの見たてはたれも
いふこゝにてめづらしからず左源五郎さ
まゐるささより右その文をさる所を見
事にさつてなげこむ湖水ひやうし暮のひ
やうしきいて見物のツハく大方ならす
大評判く

勝左 海老

書万陀伎

とりとめたことだになきを南海の

えびほごにいふ戀のあだし名

右 わらび

赤下手

わが胸のもゆる思ひにさわらびの

にぎりこぶしは頬にあてゝん

左南海の海老蔵しばらくこりさめたるこ

ころ大きくみゆ右山のかたつら春風のな

ごりながらあだしなりたやをば座がしら

におくべくや

左 鯨

紀上宿成

床の海寝てはくじらの沖中に

とかくせばかりみくまのゝうら

勝右 もみ大根

四季志歌工成

待ごこぬよはゝきをのみもみ大根

しやくにさはりしあかつきの鐘

左床の海未勘の名所なりとか此歌にては

くまのゝ海の名に聞ゆ一首の趣意うきめ

をみくまのゝうらみのさまは浪の音に

しらす右かれのうらみがかすくござる

さをざり出したるかん癪に京がのこのし

ごきもみ大根とは聞てあきれぬ人もな

しあたりく

勝左 鰯

和 樽

たよりなきわだちの鰯の戀やせに

ほしきは君が水ぐきのあご

右 生姜

甲水明樓喜代記

戀病の薬にいれししやうがより

からき涙にそでしほり汁

左いるこのむ人の鰯へくさいふなきけ

ば高師直が艶書さおもひの外西江の水莖

なれがひて活かへらんこをれもふ一首

の疑かの監河侯の三百金本蔵が進物より

も光りある詞と申すべし右本末にはじか

みをすてざるは孔夫子の臺所にはあらぬ
こちらのしらりの薬鍋煎じやう常のご

さし左の寓言をおもしろしと稱すべく
や

持左

あかえひ

龜占正

軟かきいらへのみしてあかえひの

いきはりのなき人はうらめし

右 蓮根

桑酒上平樹

うき人をこひちにふかき蓮の根の

穴のあくほど見はれてぞをる

左あかえひのはりあひなきを山椒漿油の

からしこわびたる右うきさいひこひちさ

いひたる蓮の根掘の骨をりは見へつとも

にひさつごんぶりなるべし

左 むなき

秋初風

夏やせの薬むなぎをくふたびに

おもひはふごる戀病の床

勝右 蓴菜

甲多理雄

頼ますよ仇し心はじゆんさいの

うはすべりする水くさき人

左かいたいゝるの石まろにわれ物申すこ

さだにならぬ戀の病のくひ物このみやか
もちくてならぬとさわるい地口なるべし

右尊業のうまからぬ中をなげかれし精進口には舌うちしてカチくミ齒をやならすべからむ

左 鰻

一寸法師

ふぐ汁のうまい中よと名をたつる人の口にぞ毒はありける

右 茄子

桑音 澄

なすほごにいつまで妹の契らぬはわれに病のたねにせよとか左はなしの中へ鐵炮をまてて木鐸を長屋にならす人口は四ッ切に路次もたてられぬなるべし右ちもひのたれなすび畑のなかのぶらくやまひ元伯老のお見廻もうるさかるべし此茄子よき家づこながら鰻汁の毒まはりやすし

左 持 鹽鯉

みつあさ

いひやらん何をこどばの鹽がつを人のこゝろのいはきならねば
右 竹の子 廻露窓塵六
くごきよる君に思ひのたけのこも日ましにかたくなるぞうたてき

東西の角力かたやば磐木のごさくかたやは晴天十日ますくかたしよつて勝負はあづかりと定めて侍り

左 鯰

攝州 池田朝時寝顔

ぬらくらとまことなまづの君故になみだのふちにしづむばかりぞ

右 十六さゝげ

十六さゝげ 澁丸

十六になるてふ君をかいまみのかこつけ草にさゝげつむなり

左ためにしづみし戀の淵鯰にはかざるべからず右垣ごしにしするおさの聞ゆるはことむかしの名歌なりこゝはぬなかの柴垣にらうたけなる人のごちられたるおもにえすふるさこにはしたなくてありければこゝちまごひぬるもさぞ侍らん鯰の髭よりは十六のかた毛の數大にまさりたり

左 勝

ひらめ 奈良葉々廣

若死ばひらめとならんそれぞとは親もにらみし戀のわづらひ
右 獨活 名燕子樓由刈
わが胸のもやしのうごの香より猶

きづよくあはぬ君はうらめし

左李笠翁の比目魚の正本もおもひ出られて興あり周の諺に親をにらめばひらめになるさ云々これは親ににらまれたるひつくりかへるほごをかしく侍り右のもやしうごめつらしけれ親の目かごをかしこむべくや

左 勝 鹽まくろ

徳 若

しのび寝を誰かすきみの鹽まぐろにくゝもうき名たち賣にして

右 ちさ

川 切瑳琢磨

玉章におもひのたけをちさの葉のかきとりかぬる身をいかにせん
左きはだ直段たかし
右ちさのはまけてあげますと申すべし

左 いわし

清 澄

思ひきやいわしのかしら祈れども
右 勝 もみ大根 醉樂亭 徳
夜ごごまちて心をもみ大根
うろぬいてこぬ人はにくらし

左神佛をさし置く鰯のかしらを祈らんこ
さむもはずなり右もみ大根土物店のいち
さいひて二なきこちす可爲勝

左 鰯

一寸法師

きぬくに我を泣するからし酢や
かつをの腹の横雲のそら

右 笋

止々堂犬馬

此君につくすころのたけのこは
身の皮をむくこともいとはず

左曉ばかりうきものは中の町のわかれ酒
ようざんすこや申すべからむ右此君さん
さいふ表徳の客人大方二階はさめられさ
うなこさなりひつばりくらならば横雲さ
んがかつをく

左 鰻

桑岡 住

かく文字の雪とはどけじあだ人の
よき口鹽のたらし詞に

右 わらび

千枝磨

早蕨の手づかのなきをかなしみて
身は伯夷はご戀やせにけり
左正月詞のおしきせ料理めつたにかくれ

はいたしやせんさ鰯さいふ字にみせつけ
たるこんな名歌がたらしもあるか時に右
の方人のいへらくたらの正字は口大魚な
り鰯さいふ字は字書にもあるか云々右
首陽の斷食はなのしたさびしければ大口
の魚に箸をさるべくおほゆ

左 魚

尾月花庵雪丸

うけひかぬ妹がころはあら海の
いかれる魚がはねかへすふみ

右 枝豆

桑養老含玉人

おもひきや人のことばの枝豆に
うき名は垣をこえんものとは

右藤豆ならば垣をもこゆべし枝豆にはい
かもしゆでたての枝豆を長屋の窓から
かふこさにやさ左の方人は申て侍り左馬
のかみが物語を夢樂がなかしみにさりな
しうまくおさしてわらはせたる聞上手の
人こそきしるらめ四つのうちだしカチ
カチさびきわたりぬ

左 鰻

阿州 紀拔足

雪の日の西施乳よりいのちにも
かへてすひたき君がくちびる

右 長芋

松風調

ぬらくらと鰻になるかならぬとも
ごかく返事の長芋ぞうき

左吳王夫差右八百屋兵衛いづれもせつ
なる戀の心と漢おなしかるべし

左 海老

有大甚

ゆでえびの色をば顔にあらはしぬ
ぴんとはねたる君がへんじに

右 大根

正直

大根のふとき心とおぼすらん
こひのよくゆにするていのるを

左鍋のしたもえけふりおはかれご浴油の
釜いさゝかたざりたるやうなり

左 鯉

犬庭柏淵

瀧津瀬にきそうて登る魚もあるを
こひをしこひはあはざらめやは

右 糸瓜

二階棟高

何年もへちまの蔭とひなたなく
かゝとするまでかはらじな君
左下の句は古今集の紋きりがた上の句は
三升がぬざはえありて見ゆ右脊門に乾た

るへちまのつるの長き契りなたのみたる
實なきにあらす此一番牛角なるべし

左 魚 正直

命綱かけてひかるゝ網の魚も

するはひとつによるごこそきけ

勝 右 へちま 桑晨秀丸

へちまども思はぬ妹をくごきては

心づくしも水になりけり

左かなはぬ戀をあみの魚にくらべてごこ

もさうまじりならんことをわがふ心あた

らし右もちの夜のへちまのきり口徳利と

よく聞へたり左にすこしまさりぬべし

持 左 白魚 上州 柳樹園道輔

しら魚のしらみし床のきぬゝに

落るなみだの二ちよば三ちよば

右 茄子 上五明樓清風

あふよはゝ初なすびより闇の戸を

ちひさくなりて忍ぶわびしさ

左右皆さ曉鐘の聲言語同断なるべし

勝 左 むなき 尾影 住

鰻ならぬ君をつり出するさにもと

みゝすがきしておくる玉章

右 大根 仙一 曲庵糸道

こひしさの涙に目をばすり大根

しのぶ人目にそでしぼり汁

左みゝすのふ半切神田川の淺ざばうしよ

う筋あかしくや右目をするも袖しぼるも

同心なるべしそのうへ上下の句にめ文字

をならべられしは眼病平愈をいのる奉納

の額のやうにてめゝしきやうなりされば

十目の見るさころにて八つ目むなぎのめ

うつしにはめにさまらぬこゝちして侍

左 鯖 上州 門松人

さばかりの情もかけすさばの魚

いきぐされとておひ出されけり

勝 右 大根 同萩 寶有舎槌丸

大根の今度はおろしをつよくして

手づから文をつけものにせん

左いきぐされ秀句あかし但右の方人の申

されしは此歌尻おもき下女を宿へ下るや

うなりと云々右つけものゝ鹽かげんよろ

しお暇にくらぶれば年季ながきなるべ

左 海老 上州 常持樓末廣

えびよりもはねたる君へ詫してご

こしをかいめてたのむなかだち

勝 右 茄子 高 吳竹茂葉

契りたや見そめし戀のはつなすび

ならうことならちよつと一口

左よまれたりやナカヨウゝナカヤなツ

かなかくなだちに腰をかゝめられし

はうち出しのはねをさられたる市川の海

老十郎でござい右茶漬のさいよ女房よこ

初夢漬の一口に見てし畑のはつなすび直

持 右 鯉 萩 八木亭升員

鯉よりもきりて手際を見せばやご

戀に小指の生料理しつ

右 ひる 高 岩間龜水

臭い中とかぎつけられし戀ぞうき

ひる玉はごのなみだこぼせば

左鯉の庖丁向島で者なくぐく人もかくや

あらん妙でござへすさも申すべし右こく

れちの草藥藤式部も鼻をつまみて感すべ

くや隅田の堤の右ひだりごちらもけしき
よしさほめて置侍らん

左 相良茶 桑酒上平樹

相良茶のさがなき人の水さして

契りもうすくなるぞわびしき

右 たはこ 山 ヲカ 手馴駒主

わが魂を妹がたばこの火となさば

けぶりにそよごのみこみやせん

左さが茶名産の名むなしからすきびし

やうの手も口もはたらきて聞ゆ右君をふ

もひなましくし身をやく時はげふりおほ

かる物にぞ有ける乃大和物語の歌にもか

なひてきせるのたまのうかれたる風情感

あり左右あの姉さんはよい姉さん茶た

ばこをひつくるめて秤にかけて十匁のよ

き持さは稱し侍りつ

左 薄茶 桑蛤丁樓馬伎

いひよれどなさけ薄茶の小服にて

たい一口にきいれぬ妹

右 たはこ 家風

すひつけて別れに出すたばこより

むせかへりぬるきぬくの床

左そんなことはしりやせんけか遠州かい
づれひれつたたばなるべし

右涙の玉たばこかもなく不可もなし左の

茶白をひくべきにこそ

左 薄茶 攝州 池田朝時寝顔

誓ひしも君はうす茶のあわにして

たつばかりなるうきなくなるしき

右 煙草 桑七里和多志

こふれ共こぬ夜は胸をくゆらせて

まつ葉たばこのひとり寝ぞうき

左こころうす茶の手まへ勝手に風呂さき

屏風のたりにたつあだしなつめをわびら

れしむ流義ゆかしこそ右梨もつぶても

うつまりさたばこのんでもきせるの雁首

こがれてあつくなれるさまさほらぬには

あらず左右茶杓さきせるながさひさし

くや

左 薄茶 影千澄

引かへて妹がこころのうす茶とは

水をさしたる人のあるにや

右 龍王 奥福 隈川網代木

龍王のけぶりやむねの雲おこす

なみだのあめをさそふわかれち

右曾我まつりのナンダ龍王あれにあれた

るひさまくり下の句の大雨にたばこ屋も

戸をたてたるにやあだに見えず左みなれ

たるてついきながら釜いさゝかたざりて

見ゆ

左 初昔 桑波羅密庵空諦

思ひにはいのち薄茶のはつむかし

いまに口きりせぬぞわびしき

右 たはこ 阿波心底鬼和丸

こぬ人をまつばたばこの煙より

むねをくゆらすうきおもひせり

右松葉たばこのわらはしきよりは茶の先

生物すきまされり勝たるべし

左 甘茶 山陽明門盛

あだ人へいひよる我は釋迦ならで

あたまから茶にさるうき戀

右 たはこ 盛砂

いひよれど妹が心のやすたばこ

とにかくわれにつきのわるさよ

左そもく當山に安置する所は佛ももこ

は凡夫心より卯月八日は吉日とたのみて
摩耶夫人のやうなうつくしい人の右の脇
になちよれるを忽に聲をはなうてあきや
アがれくこのたまひて七歩さつてあか
んべいをしたまひしよりこれをばれの釋
迦十とは申奉るなりチインく右やすた
ばこのやすからぬあもひにかゝアたばこ
のあらまし事もやにこしさいとされたる
のみ心よし左うき戀さこわられし所い
さゝか花御堂の細工過て侍れば橋本町を
まけさは定めつ

左 茶

洒落柿

氣の強き妹がしん茶にうかされて
夜の目もあはずまちしあけぼの

勝 右 館

甲 三澤喜代記

きぬくの袖引とむるたばこにも

たてといふ名のあるぞくるしき

左結句に銘をさへたらこれれししもが
新茶髓に受取申候右かみつげのかみなき
名葉けふりはたかくたてばやしの茶釜よ
りは匂ひまさるさ申べくや

持 左 煎茶

桑 由 刈

忍ぶれど胸のにえ湯にせんじ茶の

いろに出しといはるゝぞうき

右 茶

馬 伎

火のつかぬしめりたばこか我胸の

もゆることさへしらぬうき人

左右あこやが詞に雪のあしたのたばこの
火さむいにせめてお茶一ぶくさ云やいづ
れ愛相に前後のさへつはあらし

勝 左 煎茶

桑 四半法師

せんじ茶の出過し我ときらひてか

くどけと妹はのみこまぬなり

右 茶

甲 州 不 斷 亭 中 丸

きぬくの涙にしめるたばこさへ

ついむねの火にけぶりくゆらす

左いも杜若さみつ扇おのれがちやッ

びいをさへくやみたる大出来さいふべし

右あきけのあさま由たつこはいかりさし

あひもあるべし芝居の茶うりよしかく

持 左 煎茶

春路亭柳馬

茶釜はごふりつけられて今更に

あはでうき名のたつもはづかし

右 茶

出羽旭陽園千霞

貫はれし煙草の火からこがれけり

妹がけはひのうす色を見て

左うき名のたつはいとされどはち七の
道行なり右茶屋が床机に吸つけさせて
さは桂川の文句にて左右つれびきのさみ
せん調子ひさしくや時に一人のでんぼう
出ていへらく泡のかなは記紀さにも阿和
さかけり判者の咎めいはざるは念なしと
眼を大つぶになしてのゝしる時に判者答
へていへらく泡を淡にかよはしよめるこ
さ拾遺雜春に貫之の歌ありそれより後の
人々の詠あまた例あればゆるしつべし但
貫之をしもあやまれりとせんや返答して
サアくなんさだでんぼうそんならい
くわへ

左 甘茶

桑 音 澄

こはくにくぐく度には甘茶はど

あたまからして流す大汗

勝 右 煎茶

尾 園 丸

きえやらで身は生坂のこがれつゝ

おもひをむねにのむけぶりぐさ
左戀の病はさし置て此發汗にては市松風
も全快さしらる右相思若煙草さいふ句も
おもひ出されてこれがためにふたりはら
うをつたひて流れて侍り左の大汗にまさ
りぬべし

左 煎茶 邊田數寄成

山吹のいろのうす茶もくみて知れ
われのみあつくなりしおもひを

右 たばこ 仙臺麻中國直輔

ふきがらのもぬけの床に獨りのみ

まつ葉たばこのまつよはぞうき

「頭取」左本名木曾の山吹なれども茶屋女
のおくみさ名のりてぬれここのしうち茶
椀に茶なくみてなぞぐにかけられたる
所あつくなるといふせりふあたりました
右小山田太郎が女房松の葉にて吹壳をさ
し付てしひてうつせみのもぬけなりとい
ひつのりふさんをかぶりながらのみに心
をつけるる所こまかい／＼されど狂言
は左の山吹ごのがよいと申す評でござる

左 煎茶

甲賀計女

胸の火はもせども君はなまぬるき
口茶ばかりのあいさつにして

勝 右 たばこ 楞曲成

戀やみてひこり寢汗の玉たばこ

われのみぞしるむねのくるしさ

左胸の火性右は寢汗の水性たがひに相性
のあはざる戀なり左藥籠茶釜に縁あり右
たばこ五六斤ありされど女につきて苦勞
あり四の句大によし

歌に「すり火打うちあはせつこみぎひた
りたばこのかたがカツンカチ／＼

左 煎茶 清澄

なかだちの今出來ますと煎じ茶の

口をいれたるあいさつもよし

右 たばこ 仙臺唐曆

あやまちし煙草の火より膝の上に

なみだはおちて身をこがしぬる

左右の茶たばこ御休所に尻をかくる人に
て貴賤の論なし但身をこがしぬるさいひ
ては上にそやのかゝえなければいかゝな
りさ左の方人は申さるれどぬるつるする
の類古歌にかゝへなくてつけたる例あ

また侍ればあな詞の玉の緒のやははい
ひつこなしさだめつ

左 煎茶 南木亭千榮多

茶の目より人目多さにはなしだに

つまんでかたる首尾とてもなし

右 葉たばこ 甲州大八田錦裏芳

べにかねをふくみし妹が口さきの

霧はごかゝれここの葉たばこ

左茶つみ女のまへだれのあからさまに物
だにいへぬをあな宇治の里さながめたる
あはれなり左日さきの霧は万葉のおもか
げありてゆかしくや此たばこやの娘口つ
き愛らしけれど猶茶つみ女の目つきには
及ぶべうも侍らず

左 煎茶 奥二東川亭爲清

眠らずに語りあふ夜はせんじ茶に

君がはたへの雪もごかせん

右 玉たばこ 葉々廣

たばこふくけふりさきえん半斤の

たまぎるばかり戀やせし身は

左はだへの雪さけうれしなみだの川水も

ましぬべし右半斤のきもだまたが臍わけ
してしりたるならん此つがひ左は雪右は
玉どちらも其いるをわがちがたし

持左 煎茶 西山樓下住

長居せば人の口茶にかゝるやと
ちよつと摘んではなすかねごと

右 たばこ 千枝成

待わびて首もたばこもひねりつゝ

ふかせごぬはわすれ草にや

左右つゞきの二けん茶辨當にたばこ盆内
格子のたかき作意なり見功者の評判結構
を中すべし

左 煎茶 短冊三折

新まぐら見あはすかほのうす紅葉

うらみもこよひ水にせんじ茶

勝右 薄舞 朝風

待ごぬ君はなさけのうすまひこ

こよひもひとりのみふかせとや

左枕紙のほうぐをみれば時のかれにてみ
なくはひるト頭取出て淨瑠璃名題薄紅
葉水にせんじ茶シカ／＼口上すむトうし
ろの黒幕をきつて落す見付柱よりぶたい

をかけて一面にうすもみちのつくり物常
磐木の松の太夫連中ならびぬて一林間に
水あたゝめてせんじ茶のそのき枕にまぐ
らがみかけてむすべるにひ枕

トにきやかなるなり物にてせりあげる

右にある一枚は橋供養の琴の段あくるに
まなき夏の夜もはやふけよかしかれもな
れ これは六くだりのぬき本うすまひの
お箱の一段正本よりは文句まさりたり

持左 晩茶 皎月庵梅房

挨拶もしぶ／＼なりとしてやらん

あすの晩茶とせんじつめては

右 たばこ 多餘理

煙草もて吸つけよれごさせるまで

あちら向たる雁首ぞうき

右あふに命をさつかへべいの雁首此はな

がつぶれたさのなげきあつな趣向をみッ

けたらしよさいふべし左茶袋の咽をしめ

たる仲だちのこじつげをさんだ茶釜さわ

びたるさまよろしく隣長屋の方人殿

が申さるゝは此歌は戀でなしかけてすて無

盡の回状をよんでばやきたる跡なりさや

かましくやくわんかぶりて申されたり判

者かしらなうちふつて大きにおせアお茶
でもあがれさいらへして少々茶釜のしり
なもちてやッばり左を勝ごなしつ

持左 煎茶 尾中雄

つゝめども今は何ぞかせんじ茶の

うす／＼いろに出し戀中

右 たばこ 府常雪

わすれ草わすれたやとて數すへば

むねのけぶりのおきごころなき

左右よろしく聞ゆされご色に出しも胸の

けぶりも判者の耳にたこが入て侍れば相

場をたてず預りて侍り

持左 八重垣 万陀伎

はづかしや君が出す茶の八重垣に

むねのけぶりの八雲たつなり

右 葉たばこ 大三壺庵九雄

葉煙草のはかりなど言よれど

くづのごとくにすてられてうき

左此歌はすさのののみこの御ふること

なり女にすみなんさていつものごほり見

えつくりしてやへ垣のもごに尻かけたる

に茶碗のけぶり胸にみちてやみくもにたつをみてよみたまへるなるべし右おそれながらお手を握りますこここわりしは慇懃なるけさう人なるべし下の句は覺英僧都の松原の辭世の句にて南無三往生おきらめたるにや左の八重垣たけありて見ゆ

左 煎茶 調賀亭聞秋

せんじ茶の鷹の爪はごあいさつを

つまんではなす戀のなかだち

右 玉たばこ 上州市文章人

うつり氣をうらむ涙のたまたばこ

手前きりぞこなごすかしけん

左モシく此なかだちは淺草の濱藏ちや

アねへか右狼河原の奥州か火鉢から出

たうらみの數やうきてたゞふ玉たばこ

おそろかんしんさいふ所なり勝に論な

し

左 挽茶 貢 俊

思へども臼のめかごのおほくして

袖をひき茶のいこまだになし

右 きざみ煙草 梅 房

返事まできざみ煙草にきざまれて

火うつりはやくもゆるわが胸

「右」八幡大名でござる太郎冠者あるか

「左」ハア御まへに「右」これに茶さたばこ

があるそち茶をひく間に戀の歌一首よめ

身ごもつたばこのみながらよむであらう

もしそちがかつてもあらうならば此銀の

きせるをやらう「左」さらば茶を挽ながら

あんじませうヤズルくく「右」ヤイヤ

イ冠者歌はでけたか「左」なかくよみは

てました御らうじませい「右」おもへこも

臼のめかごのおほくして一段でかしな

つた身ごもが歌を見い「左」きざみたばこ

にきざまれて下の句は火の用心がわるい

ほごに秋葉の札でもはらばれい此きせ

るは受納いたすそれにゆるりまござりま

せい「右」おのれみごもをきざみたばこに

きざみをつたヤイく勝にげなしたるこ

てひざらさすひ口さりちがへてよくまは

る其口べたやくまいぞく

左 煎茶 湯野清泉亭眞元

うらみだにいはぬ色なる宵の茶の

けさはしぶくわかるゝぞうき

右 葉たばこ 江都振

葉たばこの離れ難きはなみだにて

しめりかへりしきぬくの袖

左あたたらふ夜を無言であかすこは天井

をかぞふるふり新かいづれ手のない人な

るべし右ふるき童謡にいはゆる煙草一葉

の似千兩間屋のしきりたかしく

左 挽茶 樹 芳

妹が袖ひき茶にせんとおもふより

身をこにくたくほどのくるしさ

右 玉たばこ 尾弘 器

吾妹子が笑顔を見んとまつ閨の

たばこのけぶりのろしほごたつ

左うよ袖のはしをひかんばかりに粉骨

碎身せんこおどろくしきぬれ事しの

心にもある哉右まだねなんせんかチャチ

ヤばかり周の世のはなしではありませぬ

かぬしのやにさがりて目があかれません

わつちを狸ださおもひなんすさうさとし

り目でにつくりなにかぬしが狸ぢやアレ

へあれが狼のくそだはげ日のまはるほご

たばこであかしたのろしくござすん

でくんさんなさはどうかしやれ本にあ
りそうなこなれば略しつ此つがひ本文
と引たがへて幽王の方が勝軍なり

左 濃茶 府 刈穂園守常

妹とわが中はこい茶となりにけり
その初むかしかたるたのしさ

右 きざみ煙草

攝州 四辻廣孝
岡山

一筋にきざみたばこのこふれども

けぶりのよこへそれるうき人

左 あひそめしその日からこんなえにしが
唐大和びとつによるのさめごこい
やアウらやましい右小野の炭焼あまのも
しほ火今月にやける瓦がまふじごあさま
のけぶりにやたしはしんばかうだいじ
なんでもこへそれたへさは仰山にもたち
たるたばこのけぶりがな左のこい茶敷奇
ませんか

左 煎茶 折 形

せんじ茶のつゝむ思ひもかく袋
かみにしるしのあれさいのりつ

右 たばこ 尾 龜 丸

すひつけてくれしたばこの煙まで
なびくこゝろをみするうれしさ

左 茶袋のかくこばかり橋姫の神をいのら
んさする戀の重荷の賣茶翁姿いやしから
す右ひやかしのたちのみ路次番にしから
れつべけれごかはゆい男の聲がすりや蝶
蝶のかんざし質屋へもさぶべし左右いづ
れさわきがたき中に左のおさしたまよい
物をさ吹聴すべくや

左 福茶 桑 臥龍岡住

節分のせつなる文に福茶はご

こゝろのまめを君にくません

右 丁子入 寶倉積

丁子いりこさばかりを匂はせて

あふ夜を君はわすれ草にや

左 ヤアラ旦那の御やく申さば水の出ばな
のあつい心さ口にはいかでいわしの頭さ
しておくれる玉づさもしのぶこゝろの鬼
うち豆腐は内外のおもはくををつゝんでひ
れる十二銅せつなる文さもろさにも此厄
はらひがいつかんでぬしの内へさらり

右のたばこ入匂ひ袋さあやまたるされ
ご節分をあめてたしと申すべし

左 煎茶 紀素直

くみかはすその戀中のもれなごて

口をむすんでいゝ茶ぶくろ

右 煎茶 濱 荻

折わるくかへすたばこの咳ばらひ

痰にあたりをしのぶくるしさ

左 くみかはすさ申されし此茶椀ち酒く
さいやうにおはゆ右こそ外あせきなさ
るおれりやくでもあがりませさいふは心
しらぬ人なるべしさるは目もはや人のさ
つまの名産箱入のあたらしき趣向珍重珍

重

左 持 煎茶 尾 眞 澄

古されて今さらなにさせんじ茶の

身は出しがらとすてらるゝうさ

右 葉たばこ

誓ひてし契りもやれて葉たばこの

骨ばかりとぞなりし戀病

同犬 清泉亭直澄

左右ともに絶戀なるべしいで女郎のふる
いはやりてさなり治郎のあげくは役者さ
もなりぬべしといかにさもはきばのな
きは長信宮の帯一本うきよのさぎの妓王
がかくれがきくもなみだの玉のここのは
兩行ひさしかるべくや

左 持 茶

糸 織

いのりしも昔となりてわすられつ
二十一日茶だちさへして

右 館

梅 麿

時も八つはん魂香のおもかげに
たてのたばこもまつよはの伽

左三七日のおこなひに昔さいふ文字の故
實をさへつげられし初後の句さにか
ほりふかし右其來ること遅きとは武帝の
御作さか丑の中刻ならばお化も出るころ
なるべし此歌淺間嶽のあさくはあらず左
右ともに上葉さほめてん

左 折鷹

松 成

戀やせてあはずばいかに煎じ茶の
よき折鷹をまつぞひさしき

右 勝 留葉

文 麿

包めども時にたばこことこぼれぬる

なみだの玉はどめはだになし

左あはすにいでんでは此胸がすまやあかし
のまんまる月のはれてあふ夜もあれかし
さや右つらぬきさめぬ玉たばこつゝめど
もさ申す詞にて戀さもたばこも髓に聞
へてたれも心をさめ葉の上の進物の印
籠宮上の段に置つべし

左 勝 煎茶

一 長

いひたきは口につまりし鐵瓶の

むねは茶がらのいつぱいとなる

右 本歌裏行

たばこ

朝なゆふなおもひに胸のけぶり草

ひいてのみ見る妹がこゝろを

左戀しらぬ人にみせましかばおはし(瘡
癰)のけんくわさやおもはましされど鐵
瓶あたらしくていさゝかのさびだに見へ
侍らす右むねの煙あきたくおぼゆれどひ
いてさ申詞四の句よし(これはしこくよ
しさいふ地口なりよほご考へたる秀句な
り人々なわらひ給ひそ)勝眞は鐵瓶の方
おもかるべし

左 濃茶

犬影 住

嬉しさよ今宵こい茶となかだちの

しらせにくれを待合にして

右 勝 館

百々庵虎千

人もしるほごに浮名をたてたばこ

きつてくれとはなさけなの君

左おもひをます本のわかい者に芝の水茶
屋であひたるこゝちす右さにもうき名を
たてたばこ人もしつたるふたりが中を今
さらきつてくれるさば情ないことをいつ
てくれたなアト本歌をなまのあうむ石勝
さいふ字を聲にしてしようだく

左 挽茶

攝 州深寢父

あけくれに心ひき茶の目につきて

白よりおもくなりし戀やみ

右 勝 葉たばこ

桑竹籬軒鶴蒔

あはぬ夜はうきを重ねて葉煙草の

骨をさかるゝほごのくるしさ

左の白かるきにあらす右骨をさくさいひ
かさぬさ申されしなごさみいさこまか
なり左の二の句心ひくさばあのれが心の
ひかるゝにや又あなたの心をひき見るに

や只ひくくとするばかりなるはおもゆ
も通らぬ戀病なるべし葉たばこの方達者
だけいさゝか勝べし

左 持 煎茶 泉州キシ
ノワタ 調音美

いひかけて今さら何とせんじ茶の
せんし書だに見せよあだ人

右 持 ばこ 日和見分

いひよれど人の心のあら切りに
袖はなみだのいづみしんでん

左代筆の候べく候はせんじ茶のせんもな
けれどそれをだに花香にせんさはあぢき
なき心やりなるべし右和泉新田のやはら
かなる本性には黄で氣をやむもこそわり
になん此茶たばこを兩手にされば高下な
まむぎのしがらきにいこふこちしつ

左 持 新茶 甲州
諏澤 紀花咲

新茶より見てもかはゆき妹が手を
つめるは戀の初むかしなり

右 持 菊たばこ 桑秀
丸

戀病のくすりとなるはうき人の
たよりをきくのたばこなりけり
右老せぬやく薬と名をもきくたばこ雁

首もつかひ出てさものにむぞうれしき左
新茶たちよりこちやく茶たちよとつ
める所が趣向ながら臍のしたなる實方の
歌にもちひはくはしわつらはしと千年さ
きの初むかし後拾遺集に掲焉たり此二首
ふるきを温てあたらしき趣意さにもめの
さむるばかりなればよき持さは申すべか
らむ

左 持 後昔 郡元
住

くるしさの今をあうての後むかし
茶のみ話となすよしもがな

右 持 館 上州行
康

色よしと思ふすぎりのたてたばこ
いつかませ葉のあるもうらめし
左今のつらさをむかしがたりよるこんで
たも梅がえさは女夫の中の盛衰記一段さ
き事なり右ませ葉さは外心あるをいへ
るにやさだかららず地火爐ついでの饗應
をよしといはんか

左 持 煎茶 藏人

のみ過しせんじ茶よりもこぬ人に
うかされてまつよはつらしな

右 持 ばこ ホイカ 野立庵浪風

わすれ草わすれぬ妹がふじびたひ
けふりはむねにたえぬくるしさ
左まつ夜はつらい長まくらにかたちも似
たる一斤袋あくるまで來ぬ人をうらめる
れたさはさぞさあしばかりぬ右御所存の
ほどはたれもきゝわけて侍りされどふじ
びたひと申す詞實にふるさしまのねんあ
きにて深川品川新宿さくらがへしてゆく
へもしらぬ風になびきたればこたびの判
人も安くふみてかひがれのうしろをむき
て侍り人をまつさてつまでして足高山な
勝さや申さん

左 持 内津 豊年出來秋

此やうにあふのは夢かうつゝ茶や
こちらのおもふつばに入りきて

右 持 ばこ 正直

思ひ餘りよりて煙草の火はかれど
けさうとはまだしらぬ道づれ
左れてかきめてかきばかりの使の伊勢物
語それにさなれる尾張茶のうつゝないぞ
やこれナリ男さげにも無上の佳味なる

べくや右驛路の馬の鈴が森ごこの馬の骨
かしられごゆき合せたが他生の縁かなら
ずたつてふりませかけせんすゑて松本
錦升座がしらごはこれなめり

左 煎茶 徳 若

あだ人の袖ににばなの香もうれし
およばぬ戀の山茶ながらも

右 玉たばこ 折 形

厭はじな妹にあふ夜のたまたばこ
したにあたれるかひなだるさは

左 戀のおも荷をおふなくおもひはすべ
しなごへなくたかい山から谷そのおも
んままへの茶の出花いるかうすきにあら
ず右結句は伊勢がつらつゑもおもひ出ら
れぬ四の句の舌のまはれるは齊の七十城
をもくだしつべし此右のかひな忠度ごの
の武勇あり勝べくや

勝 左 饅頭 仙唐 磨

孔明が智をかりてなごまんちうの
首たけおもふ妹にたよらん

右 梨 文 磨

あたらしきやもめの肌を水菓子の

こがなしときけばまゝして床しや
左 饅頭屋の元祖をとり出られて計畧をま
かせられん事上案くたれも食指をうご
かして侍り但此先生黄頭黒色を承知せし
仁なればなかだちにせんはあぶないもの
ならんか右あたらしきやもめごは臨川の
あたりで見申たやうなあかほつきなりこ
がなしの秀句美にして艶なり此一番持ご
申たけれど左右の方人のしひごにまか
せて餘儀なく判断をくはへて大象の鼻さ
き思案にまんちうをとりてかみざまへの
ほせつ

左 かみなりおこし

なかだちのくごき落さん企みかも
かみなりおこし妹にくはせて

勝 右 蜜柑 馬 馬

やる文の数もみかんのふくろにや
猿ごくゝつてへんじせぬ人

左 ともごにころつくかみなりおこしこれ
にて臍をさらんごはさもしき仲立がしわ
ごなりけり右文の数は千疋猿のごこくつ

づけやりたるならしさを大伴卿の下戸
なごらへたやうにやすくするごはさるご
はくごのほよほくごこんな名歌があ
るかいな

勝 左 十圍子 六十軒一長

人心あなうつのやの十圍子

戸をさしてなごはしたなくする

右 雨ほし柿 飲坂 山田高安

熟せざる戀のしぶさに身をけつり
あまばうしにもならんごぞ思ふ

左 むかし男ありけり夜ふけて女のもごへ
ゆきけるにまらうごの入りたるきりみせ
のやうに戸をさちていれざりければごぞ
うつの山をこえける時すゑなるめを見
しごさをおもひ出て歌をよみけり此下の
句あかしめてきく人十圍子のうへによだ
りたらしてほごびにけり右柿本氏系圖ご
いふふみに云ひたすらうまれかはりたる
ごちして見る人これをあまばうしさて
もてはやしける外には胎藏黒色の相をあ
らはしかきの衣のゆかりおもへば頭巾に
似たるへたあり内には金剛の正鉢をふく

んでかめどもわれぬされあり云々こしる
せりさればあま法師めづらしからす十圍
子を名物と稱すべくこそ

左 煎餅 東海園蓬山

いひよれど齒もたちかねて煎餅の
をれぬこゝろのかたまきぞうき

右 梨 濱 荻

くどげども情もなしのあわ雪の

あはできへなん身こそつらけれ

左 蒔繪のたかつき右 錦手のごんぶりた

つきのかたあしさいさゝかたかし

勝 餡 津外 成

飴賣のあふこもあらばいのちにも

とりかへべいとおもふばかりぞ

右 橘 尾有 文

ちぎりてし昔の袖のかごとにも

なごわがねぬるごこよたづねぬ

左 なにぞは露のあだものをとは命なりけ

り中山のあめよりのびし心の誓言やはら

かで齒につかぬ口つきなり右 たしま守が

旅宿をさへさり出られしこまかなり但左
方人のいへらく筆にかこさゝつづけしは

例あり袖のかごさめづらしと申さるされ
ごこれはかの銚具にはあらでたゞ香この

みいひかけられたれば此難はひがごさな

るべし但橘の名をもらされし念なきやう

なれば飴屋のぬちいが次にはならべつ

左 栗おこし 犬影 住

通へども風がかはりてあはおこし

あはで砂糖のかへる身ぞうき

右 胡桃 白橘其葉

木鼠のやうに枝道しのびつゝ

かよひくるみと妹はしらすや

左 あはでかへらんかなしきは十郎兵衛が

娘の順禮にもまさりぬべし右古今集の物

名を下に思ひてせつかくきたのにりすな

つかふをうらみたるにや砂糖がちなるあ

はちこし風味まさるべくや

勝 おこし米 蘭竹盛

雨の夜はいざ思ひをおこしじめ

くだけん君がこゝろをぞまつ

右 熟柿 府鏡常丸

こゝろかけしは八とせこのかた
右の熟柿まんざらちやアないが左のぬ

なかつこし先ほうばつて見たくこそ

左 煎餅 越 彌佐平

やはらくなるぞ嬉しき妹が氣の

さすがかたまき煎餅なりとも

右 梨 郡山 同庵真似保

見そめては落さんものと石梨の

うちつけてやる戀のたまづさ

左のせんべいをよし原ささだめて石梨の

弘法さまをはしりの方におくべくや

持 きんどん 花 函谷響山彦

まつよはの寅や過にし菓子の名の

きみとどこであくるわひしさ

右 柿 犬益 盛

くどくべき種だにあらぬ澁柿に

口をさぐぬる戀ぞくるしき

左 きみさんのみ文字よみくせ口傳ありと

築地禪閣の御説なり右 澁柿明恵上人もし

らせたまはぬ戀のこゝろ勝負わががた

左 勝 最中の月

ハクフ 隈川網代木
グシマ

むねの雲はれてあはれぬ戀病は

最中の月ものごへこほらず

右 栗 桑瀧壺玉人

いが栗の笑をもみせてはりつよく

けがにも落ぬあだ人ぞうき

左二階をさめられなんしてからこがれに

こがれし巻せんべいうすツべらな心から

茶屋までもきなんすかさ宵からあけら甘

露梅すがつて格子にまつておたわし

心のたけ村をよくさつしてあくんなんし

さいふこそ歟右道命さいふくりく坊主

の歌もおもひ出られつ最中の月くひたら

す侍れごゆで栗にはまさりて侍らん歟

左 勝 雛菓子 山直 澄

雛菓子の見すかされては名や立ん

硝子壺の口はつゝめど

右 栗 桑倉 積

くだものゝくりかへしやる玉章も

いがのはりにてごらぬあだびど

左 妹脊山のひな鳥がはいせん十にあまり

ぬる人はゆだんのならぬひゝなあそびふ

らすこの尻やわれんさの心づかひおもし

る酒さ申すべし右みなせの栗本論に及ば

す

左 岩おこし 尾葉 丸

くごけごも我には栗のいはおこし

かたくも人ごちぎりしや君

右 勝 西瓜 長州藤の英

西瓜ほご戀になれねばおよひして

おぼつかなくもたゝく閨の戸

左右なんだはらがいたいへおまへおこし

さ西瓜をいちごきにくひなつたから食傷

をしたものだなにひたひをあさへるサア

サア咽へゆびをいれておもいれ吐なせハ

チャくでへぶはきなすつたおまへ西瓜

はちつさくつたさいひなばつたが見なさ

へ西瓜の方がかつてあるによ

左 勝 すゝり團子 甲州駒一飛

涙をのみすゝり團子となりにけり

くしけづりつゝまちしかひなく

右 栗 雲多餘理

いが栗の口をほつくりあけ方は

にくやわかれのかねぞつきぬる

左串さ櫛の秀句くしくさ夜をあがして

女髪結に百の損をくやみたるあたらし右

おもへば此かれうらめしやさて手水に出

かけて寝まきの小ぶさんひきかついてぞ

いれにけるゴンくく勝負はすゝり團

子をか勝さ申すべし

左 勝 下り飴 徳 若

くだり飴くらぬことを思ひつゝ

命をけづる戀病のごこ

右 胡桃 保原一鳳亭八桐

通へごもあはでくるみの切なさも

われからなりとおもひくだきつ

左ぎやうせんの若よりかたくてつくかた

なきをかこちたるさまおじやうさんおな

きなさなささいさむべくや右藻にすむ

出ではなしに水にすむむしのくひからし

みもからになりし心さはしらる但せつな

ささ申す詞工面のわるい大晦日のやうに

聞ゆれば戀病の床のあたゝき方を勝さ

す

持 左 饅頭

栗日曾九

なりよくもどりもてたべと媒介に

折入てたのむ腰高饅頭

右 落栗

員 俊

身をいれてくごけばさすが落栗の

ひろひものなるわが命かな

左をりりてなごよくたぐまれたり但例

のわる口には豪家のけいしににぎくを

さすこちすこやいはまし右くりこそ

かすくをならべたばかりしられぬよろ

こびは袂にもあまりぬべし但ひろひ物さ

申調きなれたれば勝負の沙汰に及ば

持 左 最中の月

山深山堂闘鬼雄

人の目を深くつゝみし菓子の名の

最中の月もうらむ忍び寝

右 柿

松永歳

あだし名に顔もあからむ枝柿の

枝葉をつけていふ人のうさ

左俄の泥坊のしうちのやうに顔をかくし

てひけ過にあがるは大方せかれた客人な

るべし右いろつきそめし枝柿のはづかし

さに人ごさをきざはしと見たる此左右秋

の夜のもちを申すべくや

持 左

煎餅

桑折

天津房御空

せんべいのこがれしぬべき戀病に

まきつくほごの文ぞうれしき

右 桑

藏 人

戀病に今はものをもくはの實の

くはで月日をすぐすはかなさ

左右やまひにかゝれる戀の奴われがあれ

かおれがわれがぢぢらがはやくよかんべ

い右の名はめしおくへ内左の名は朝がほ

せん平たちならんでみたところかにさい

やらうの三さいやらうのしさいらしいや

らうが勝なり

持 左

麥こがし

白御代住

麥こがしがした胸はさもなく

又もなみだにむせかへるなり

右 桃

家 風

くごかばや桃のみとせが其うち

ならざる戀とおもひながら

左三の句ちと砂糖のたらぬこちす右推

茸たばの御年季のあくをちぎりたるにや

さらすは福徳の三年目をまつこちす飲左

右さも勝負をわかつたす

持 左

餡

數寄成

やはらかにみせて心のかたあめか

ひつついてねることのならぬは

右 栗

仙直 輔

いが栗のいかにくごかん戀人の

ゑまぬかぎりはおちぬと思へば

左あふこそのかた餡さうしがやにやいの

りなまし右狂言の栗焼これも道命が二の

舞にてめづらしければ左よりは落栗さ

さだめつ

持 左

餡

山門 盛

うたがひの心とけよとあめならで

ぶつきつてやるゆびの一本

右 梨

犬 馬

君よしれ虫がついたかつかぬかは

きつて見せたる梨のしんじつ

左今川橋の渦巻を小指のさきのすぢに見
せておしつゝんでやる一袋一本の文字よ
くむすべれたり右四の句のきるさ申す文
字指歟髪にかゝりたらば今すこし眞實も
見ゆべくや三間梁たけながくおぼゆ

左 岩おこし 八王千金丸主

あふここの猶かたけれど岩おこし
妹が手をだににぎりたくおもふ

勝右 水梨 イカ 枳 芳

水梨の水ももらさぬ中をだに

わらんとしたる人のつれなさ

左矢さきさほらぬ岩おこし齒牙にだにか
けて龜屋さおもふはこりこりすまの戀な
らし右しんばうひさつ此なかをわ雪の
けちなんさはなさけ梨さうらみたるさく
さくさわかりて侍り莫珍三季奈こいへ
ばまくるきつつかひはなしく

勝左 煎餅 清 澄

わが思ふ壺へいれんどせんべいの
かたまきにしておくる玉章

右 桃 阿拔 足

西王母の桃よりもわが戀病の

いのちをのふる君がふども、

左御文に御そへ遊ばしかた巻せんべい御
あくり下されめづらしき御品にて御うれ
しく存上候思召の御つばのみならずみな
みなあつばに入まゐらせ候右かざり置ま
したる西王母の人形かたへは三千させの
桃でござりまする此ふたつ當世風の男女
にざりなしまする男の人形ナ女ゆもじな
まくりまする女の人形兩足をかゝげまし
てそりかへりまするテンカラくくテ
ンカラテンくすなばち毛もくのかたち
でござりまする「見物」せんまいのギリギ
リもいゝがせんべいのかりくの方がい
いと申やす

勝左 團子 万陀伎

なき魂はごまれこよひはこひ人を
むかへ團子の丸寝してまつ

右 柿 上州 山中里遠

わがおもふたけのさかば枝柿の
しぶくしながらおちよわきもこ
左盆まへのかきだしさおもひの外こよひ
こんごのしらせの文地獄の釜のあいた口
へもちにはあらぬむかへだんごころく

してよろこべるさま一夜を千代と松阪お
んど胸さへよほごをざりつべし右おもひ
のたけのさきにかけてめつたにいちりま
はしたるあの客はよく柿をくふ客がまけ
なり

勝左 肉饅頭 尾弘 器

ふども、の肉まんぢうは毒なれや
しびれてたてぬきぬくの床

右 西瓜 ホイカ 久 隆

西瓜より出来た返事の君が文

おとして肝をひやす井戸水

左邊寫了一首詞把二裙帶底下東西一瞥
說二十字坡頭好大饅頭一調和滋味難得
難得會得的喝一聲采留後後接地便倒就
與下喫三蒙汁藥一的上一般了妙哉々々
右井の中の西瓜手がまゝかぬだけおまけ
おまけ

左 きぬたまき 柳 馬

巻送るきぬたのあんに相違して
すべてもごりし玉章ぞうき

右 桃 オクフ 鹿 住

三千年に一度なるてふ桃よりも

首尾のならざる妹ぬすみてん

左わが文ながらすてもあかれずこは紙く
づ籠の見るめさへめんぼくもなき心なる
べし右花さく春にあはんとてかの仙桃の
ふたつさない命をかけてぬすみせんこは
いもが屋尻をきらんこにやきぬた巻のう
す紅東方朔がもゝいるこそその光いづれな
らんわきがたし

左 勝 あるへい 秋初風

なげの情あるへい糖といつはりて
うまくも飴をくはすつれなさ

右 柑子 盛 砂

なりもせで涙の瀧の水玉の

小かうじかと落ちるかなしき

右の小柑子は伊勢物語よりさられたれど
猶なげのあはれの六帖をたふさむべくや

左 勝 かる焼 郡元 住

假枕ついかりくごかるやきの
くだけてこよひわれと寝よ妹

右 青梅 栗々法師

青梅のすいたすがたと見てしより

目もどのしほにつくる玉章

左ひそりし人にあながちにわれてあはん
の誓願寺まへ茅荷屋の一袋むれいつばい
の戀さはしちる右うめづけのすきものお
しはきつれどざるやきにはかへがたく
や

左 持 金米糖 尾龜 丸

君こよひこんべいたうと契りしを
外へもらすなふり出しの口

右 持 すもゝ 盛 砂

あだ人は李下に冠さよりつかで

われにあたまをかゝすつれなさ

左箱入のきむすめふり出しのふり袖姿う
まいとかりと申すべし右さしもこそしが
十九首の六臣注の理窟つめ四角なところ
がとりどころならし左右よき持さや申す
べからむ

左 持 麥こがし 桑馬 伎

鹽なくてさたうのきかぬ麥こがし
むねのにえ茶にかきくごげども

右 持 こす柿 麟 馬

ころ柿のかきくごくべき種もがな

しやくりなきする戀病の床

左右さもにかきくごくと申されし中に左
は麥こがしなにえ茶にいれたる右はころ
柿のたれをしやくりの薬に用ひたるさゆ
も茶もあつい心さはおもはる持にて侍り
なん

左 勝 飴 折 形

とても戀の盗みなりせば飴をもて
君が心の錠やあけてん

右 持 樽柿 朝 風

かくばかりおもひつめても樽柿の
くごきおとさんたねのすくなき

左もろこの盗路が秘術をつたへて堀の
内の額にふがきし帯におろした錠まへを
錠橋の水あめを以てこじはなさんするわ
がたくみ大願成就かたじけない「あや
かしゆびは」米がたかいさは此秋ぎりの
しやれなるべし右樽柿少々澁のめけぬこ
ちす盗人の手なが黠なり

左 持 煎餅 月下梅照

見られしといかてゆだんは煎餅の

かたまきにする戀の玉章

右 青梅

桑由 刈

たち物にしてはいのれど青うめを

このむ時節といつかならなん

左右こなたかたまき山こなた八百屋川

ヤチャ四つにくんだごちらも稽古のある

角力さみてつよさうだのひざりはせん

べいやの番頭こちら八百屋の亭主だぞ

か此氷川の祭禮角力では關さりだよせん

べいやは耳の出た男だの八百やもきくら

げのやうな耳だぜアレ八百屋が青梅

の漬こんでくるぜ所をせんべいやがゆだ

んはしれへ見なさへふんごしもかたまき

にしてめやすサア大みだれ八百やが

肩にかけやうとするせんべいやがめつた

にひつくりかへすアリヤくくく東

西双方くんでこるびましたれば勝負はお

つておめにかけます

羽衣のせんべいよりも得てしがな

天にあらばの起請一まい

右 梅

上州
タカセ 豊秋住

うめの實のこぼれ情もあれよかし
なみだの雨の長ぶりのころ

左かの羽衣の舞ならで此歌に打見はれて

米澤町のよれんなき頃例の方人中ノ字を

出していへらく天にあらばは明皇さ貴妃

のさめごに羽衣にはあづからずさ

申すされど神女のすみ所なればさり出ら

れし難とせんはいはれぬ事なり一枚の文

字もよくきゝて侍り右さみだれになるう

れひさは紫式部が筆のあさ梅にみのいる

さつきやみさば左交が文句涙も升にては

かりつべし此つがひ方人の詞もつぶしが

たければ持とす

左 煎餅 江都振

玉章のまきせんべいをうちつけて

粉にくたく身とおもひしらせん

勝 右 ゆつ 桑音 澄

くごく度胸はにゆれどゆづ味噌の

どつてもつかぬ君はうらめし

左マア先から見てあげませうカウト一体

色事につけて短氣は損氣の器爲風がち持

まへちやがしかし腹がたつみのぶらこわ

して見れば何のせんべいもない事ぢやか

らマア此節内場にしてめさつしやる

がようござらう右ハアあまへのもくど

いてもく承知せぬ道理七ツ屋の離の卦

にあたつてまがひ八丈の一向つかぬしろ

物御抱瘡が重くてゆづのやうぢやさやす

くふまれるかたちぢやが勿論むかふが中

女の中ごしまだに心を變交させて見ま

すれば朱唇のなめ物さいふ縁もあるから

わしが判斷ではゆづ味噌ごのゝ方が出来

たやうにふまはれまする

左 甘露糖 東風亭舍

打つけにあかさぬ中のかんろたう

心のたけをわつて見せたき

右 栗 糸 織

文つけしへんじもなくていが栗の

われにしくくなきあかせども

左右月の八日はかやば町大師まわりや不

動様縁日のうり物さのみなつかしかられ

ど甘露糖の方たけありてみゆ

左 松風 江南梅村

種しあれば岩おこしやにまつ風も

うるてふものをこそはぬつれなき

右 椎

塵 六

ふみ見なば落てよ筆もしひの實の
ひろひがきなる戀の山みち

左古今集を本まつりとして岩に松のだし
一本ばかりやしの人を茶にしたるさま目
にたつみ屋の親仁が撥音たかし／＼右お
師匠様のおつしやツた手習は坂に車ゆだ
んのならぬ娘の子はづかしひのみ三文の
筆にみせたる戀の手ならひ一段と見事に
候可爲勝

左 干菓子

檜原亭操丸

あだ人に胸の干菓子の折もあらば
うらみのかずをならべたてばや

右 西瓜

桑積業

人目をばそれと西瓜のあからさま
わつていはれぬわがむねのうち
左右こゝろのあつき土用見廻ちくばり
のほどはひさしけれごもしろいつけた干
菓子富いろけのあるだけかつべくや

左 あめ

桑南盃樓是好

くごきたる口はす飴となりぬらん

引のばしたる味ぞつれなき

右 眞桑瓜

梅房

人しれずうき名の種をまくばかり
今は附木の札つきとなる

左口のすあめ舌たるきこちす右の山瓜
人の口齒にかゝるこそ名産のしるしなれ
勝たるべし

左 胡麻胴亂

賤丸

魂はいつかぬけ出て菓子の名の
ごまごうらんとなりし身ぞうき

右 眞桑瓜

上州行 康

ならべたる枕のなりも眞くわ瓜
うまくなりたる中ぞうれしき

右にひ枕に帯さいてはぞちを出したま
は瓜うまからぬかは左うかれたるふた
ましひの西のうへをこんだ趣向ごまごう
らんさは番太郎菓子にや隣の瓜には齒が
たゝぬべし

左 煎餅

升成

幾度かまきせんべいよやる文も
十にひとつはかみわけてたべ

右 椎

花庭亭繁樹

椎の實のはねつ逸れしくやしさに
今はたむねもこがしぬる哉

左右せなアかつてくれさッせへ／＼「あ
んにすべいとツて市にさへ出るこにしヤ
アかひたがらアみされ椎のみはげへにむ
しがくつてゐらアせんべいは鹽ツからい
ばツかりから砂糖さツちやアねへそんげ
へにくひたかアごうすべいかつてやらう
コレ／＼おんちいごのこゝへしひのみの
せんべいを三文づ／＼くれさッせへ」「せ
なアこりやごツちらがうめへ」「べらぼう
めむらアしらねへてばアレ／＼かつてや
つたらむこくにはしりやアがる小僧ヤイ
まてヤイせんべいさしひのみをおさすな
しつかりさ兩手に持ッだぞ／＼

左 饅頭

仙ダ 明 益

音になきてまづ丑寅やまんぢうの
あんじすゞして夜をふかしつゝ

右 椎

花實亭常磐

うき涙はら／＼おちてつひに目
しひとなるみをひろひてよ妹

左かれは上野か淺草かそばやあんまの聲
ばかり右近の司のこのぬまうしうし／＼
この泣おとし夜のながきをしるさいへる
古詩の詞もおもひやられつ右じたいわれ
らは都のうまれ色にそやされこんななり
になられたさは安達原の袖萩よりもちつ
さあはれな俄めくら杖の方が勝なるべ
し

持左 みめより 花色絹糸

みめよりもうまき心のたけの皮

つれなき人にあけてみせたき

右 梨 上州 高サキ 周左堂本炭

梨たちて祈りし甲斐もありがたや

はづれてうれしねやの戸がくし

左うちみよりは馬道の新製よく思ひよせ

られたり右下の句は神代紀のいはやごも

おもひ出られぬこもにひこしくや

持左 達摩糖 高サ 松影法師

うき人はわれを達摩の菓子にして

いく夜もひとところがしておく

右 柿 山井壽女

この葉をかきやる文も山柿や

とかくへんじのしぶきうき人

左 葱摩買來達摩糖 乳母能止小兒啼

右おもひはいかで山づきの枝柿木をりに

ゆかぬこそ戀ならめ左右勝劣なし

左 豆 越後 白根 みさを

青豆のおをくなりつくぐげとも

白いくろいの返事せぬ妹

勝右 干海苔 影 住

干海苔の色なかはりそ二世かけて

豆腐のつまと契りにし人

左氣をいるばかりくごくさははらきり勝

負のまめ男はねられたるさまは聞えたり

右いるさいひかけてさいひつまささへつ

づけられたる品川の海そふかくもたく

まれつるかなたれも雷門の膳をよりに侍

れば龜屋が豆腐のあんにたがはず勝にて

は侍るべし 勝左 粥 麟 馬

妹しるや見そめつるがの五位が事

かゆだにくへぬ身とはなりぬと

右 椎茸 フク シマ 假堂似瓢

しひたけの強ても出来ぬ戀ぞうき

たいにきをのみくさらかしつゝ

左今はむかしいみしき色好みありけり女

をこひそめて月ころになりにければいた

くおさへて物だにくはずなりにたりおも

もひわびて妹しるやさかいておくりけり

それは利仁將軍の五位をいざなひていも

粥にあかせんさてつるがにおておはしけ

るふるこそをおもひていへるなりけり此

五文字あさまうおかしさてきく人ほこ

るびて奥に入りぬいみじきすきものは時

にのぞみてはかゝるおかしきことをいひ

出けりさなんかたりつたへたる右しひた

けつくりよろしく聞ゆされど勝は鼻たか

の五位をさころえたりとすべくや

勝左 米 ア猿 人

米よりもつく度ごとにへりのたつ

鐘の數うききぬ／＼の床 右 かし栗 尾葉 丸

やはらかにくごげごとかく勝栗の

かたきことばにはもたゝぬ君

左右にきく物からうすのおさ男さふした

るにまだ何ごさもかたはねに曉のかれ

のなりたるこゝろこはき女かちぐりくふ

口つき我歌をよしさいはぬ判者のつらうちむかひなげしやつらはりゆがめんさへぞおほゆるされど猶うちびるひやらかしつゝ左まされりなごいふありいさにくしきもにくし

左 米 濱 荻

見るよりも君に心をこめだはら

こめたるおもひますのかすく

右 きくらけ 尾 眞 澄

なかだちに色よき返しきくらげの

たい耳たぶをひねりてぞまつ

左右あの水茶屋にやすんでゐるはたしかに見あひだす「さやうくあれはさほり

町の米やのむすこよ見なさへ米だはらの

口はむんでゐるけれどはらにももひの升

のかすたらうまたこちらのよめにならう

さいふはあれは乾物やの娘だはナそげに

ゐるはなかうどの景庵さいふ醫者どのよ

かゝ様がいゝ所へやらうさおもつてめつ

たに耳たぶをひねつてゐやすあまへあの

鯉さ嫁さではごちらがよいさおもひなさ

る「さればのうなんだか鼠の嫁入の赤本

のやうだからなをさつて兩方ながらち

うくさ定めて置やせう

左 けし 仙 明 益

花ならば涙もろにもおちなんを

けし粒はどのなさけだになし

右 豆腐 攝 州 池 田 寢 顔

袖をのみしぼり豆腐よやる文の

封もきらずにかへすつれなさ

左須彌山ばかりのちもひをばけしつづは

ごもきかぬさは顔のはたけないさふのか

チャけしからねへこの述懐けしきあり右

戀をする身は横邊の千鳥あさつけてやる

水ぐきのかへりごさだになきをうらめる

豆腐やの三ぶどのやはらかによくこしら

へられたりされご左のけし坊主下總あた

りで子をうんだるためしもありてめづら

しければ勝べし

左 蕎 麥 仙 唐 磨

ここのはの花卷そばの嬉しさに

のりかゝりたる君が口さき

右 かふち 山 力 門 盛

一筋にくごけと妹は麴うり

きではなこくる返事つれなき

左そばきりなくはせて和尚さてさいひこ

川柳点にぬきし通り勤化帳を出して本堂

修覆の口びらきの折から左の檀方はのり

かゝつてつけられた右にゐる麴やの亭主

はいくら世話やきがくごいても味噌やに

たふされたの米がたかいの妹が麴うりの

やうだのせつないことばかりならべられ

るごうでも左の檀那が法の功德のよい施

主さ見えます

左 米 越 後 白 根 六 書 園 純 筆

もらさじと深く心にこめつづを

いかで俵のくちはしりけん

右 納 豆 攝 州 岡 山 彦

なかだちに糸をひかせて納豆の

しるのみそかにあふぞうれしき

左うき名はもれて北濱の惣場のくるふ人

の口いつばいがたのさがりをくひたるえ

らひぞくさやいはまし右なかだちの口

のたゝきかげんすゝりなきするよはのむ

つごこ匂ひわるからす左右あや椀に汁椀

ひさつ膳におくべし

左 米 文 麿

玉章は戀の重荷のこめだはら

たいたいいきにさゝげてぞ見る

右 干海苔 ギ歌 笑

横雲のこきむらさきのその色は

君どわかれしあさ草ののり

左石山の觀音も辨のおもそもひさからげ
にしつる髪黒のむかしもおもはる右あさ

さいふ文字感あり左右御藏まへから雷門
をかけて目をあごろかすそりぐの趣向

よき持さはこれをや申べからむ

左 温飽 副廣 孝

暖簾のひまより見てし二八ほどの

君が落なほうごんげの花

右 納豆 尾寸 法

室ほごに床あたゝめてねかせよど

妹がせなかをたゝき納豆

左うんごんをうんごんげの秀句轉輪王の出

世よりめづらし有くるぬかんさんび舞

まうてれぐらに入るさまあかし納豆賣も

うんごんのかつぎもともに天秤棒の持に

て侍りぬべし

左 米 員 俊

忘られて意地きたなくもなま米を

かみやほごけををがみづきしつ

右 麴 桑名四半法師

君どふたりむろの麴のあたゝかに

はなつけあうてぬるぞうれしき

左二の句八里半を雪隠でくらふ長松がさ

まもちもひやらの右本郷の穴ばひりこれ

うんごんげのはなさはなたかいもひくいも

いろの道さは此事歟勝にたがはす

左 麥飯 清 澄

むぎめしの麥ほご我をきらひては

ゑますことなき戀病の顔

右 荒布

ひじき藻にかへて送らん語りあふ

をりもあらめを文にそへつゝ

右錢の出ぬ物を戀人におくるまはひがこ

この伊勢物語煤はきの中へ御師の來たこ

ちす左麥飯はすく人もある中にひたす

らのきらひまは蟲のせいでもあらうか道

理でわらうて損したやうな顔つきなりさ

れご四の句のあんばい進上のあらめにま
さるこそさほし

左 米 尾中 雄

身にあまる戀の重荷は五斗米の

こしをりてまづくごくわりなき

右 かち栗 清 澄

くごかなん我齒にあはぬかち栗の

しわのよりたる婆々をたのみて

左およねさんこれだろこつごつぶしに腰

ををるは郷里小兒のためにあらで膳下

の小僧がためなるべし初五文字のみにあ

まるなご米の縁にてあちはひあり右かち

栗に似たる麴ならばつらのしわほもさよ

りにてこやつ黄直をやみてぬるなるべし

無絃の琴をひくべきにこそ

左 荏 シマ御 空

油荏もおもひの種となりにけり

しめて寝ぬべきよはぞまたるゝ

右 油揚 クリ玉清丸

油あげに口すべりなばいかにせん

いはぬ色にどかねてしのべど

左右の作意いづれも油にたて加才はなに
はのひがしほりきいてきもんのかごある
趣向一門なかの山の宿のまそつこさきの
聖天のにこりならんこさをおもへるこ
ころはさもにかはらばし油一升こぼした
を太郎ごのゝ犬さ次郎ごのゝ犬さみなな
めて同位なり

左米 家風

兎や角とする間によはもふけ米の
くだけでものものいはぬつれなさ

右 味噌 白泉和久成

つゝめごもいろに出ぬる赤味噌の

四方にうき名のたつぞくるしき

左此くだけは重之朝臣のくだけで物を
さよみたるにはあらで由良之助がいはい
るかたみをやめてくだけなれのくだけな
るべし右赤味噌のまめかほをつくれごは
やく秤のめにかゝりてせんかたなみだの
いづみ町左の伊勢町にくらぶれば古券の
高ひさしと申さん

左 そは 山カ 枝 折

うまみある妹がこさばは新そばの

きれぬといふも三寸の舌

勝右 豆腐 桑馬 伎

口の外つかはれぞするうき戀の
奴豆腐となりし身なれば

左壽夢は仁明の御時勅して諸國に植させ
たまふ「右」豆腐は淮南鴻烈解おざけの
んの代よりはじまる「左」はじめないへば
新そばのきつてきられぬ一ツ家のはし
「右」いさこにならば焼ごうふにてもや
てもくはれ手へぬな豆腐のかたいちに
虎さ見て石やきごうふ小弓に小矢「左」そ
こがやッぱり正直そばいっゝや三つの二
八そばたゞきでくつておやいのう「右」い
いやからみをみせてゆ豆腐のはら入はい
もつき出しごうふたッ一つかみにつかみ
ごうふ「左」コレふれいはやめにしなのな
るねさめにだにもわすれぬはおやの御あ
んの山かけそばたむげにたなる花まきも
みのりのためのねぶつそば「右」木魚のお
さのなんせんじなむあみ豆腐のしやうじ
んぐら「左」もうよいかげんに翁そば「右」
つい筆耕も小半丁むだにせりふののび過
た「左」そばさ「右」豆腐の「左」たいめんさ

「左右」ホ、うやまつて申ス「見物」五郎
は新車がこさだかへもんの紅葉あたりあ
たり

左 飯 ア米露庵咲穂

日に三たび戀こがれたる米のめし
あはで命のつくものかは

勝右 梅漬 蓬山

梅づけの色よきへんじきかせよこ

口のすくなるほごにくごきつ

左上の句は此世ながらの餓鬼の苦患かた
岡山の飯にうゑてふしたるおこもあはれ
宿なしとやいふべからん右口さきのまめ
男咽から血の出るほごしやべりしは梅づ
けのすき人ならし左の空腹にくらぶれば
ゆたかにきこゆ

勝左 米 ア拔 足

六祖にはあらねご心さこれとて

おもひをこめのふみもおくりつ

右 木耳 桑空 譚

くごけ共聞いれもせずきくらげの
返事もはぎれせざるわびしさ

左はゆがつたりくこ身はからうすの
やるせなく長座不臥の戀のやまひさこれ
さおくりおこせたる以心傳心の文一本た
ふさげなり右きくらげの返事とはつかけ
がらうまからぬこちす鑑春大師こしつ
よくや

勝左 米 員 俊

床しさの休む期なきは子路が負ふ
米より戀の重荷なりけり

右 納豆 シマ 香和義

納豆の糸の手づるのきれはてゝ

君が起請もいまはねせもの

左いもさ苗を累て坐しいも鼎を列て
食はんこさなれがへども豈可得乎のな
げきあはれなり右書文の起請にさへ納豆
のくさみがつきしこの述懐さることな
がら左の色事に孝行なる人には勝べから
ず

左 粟 桑藤原長房

穀物のあはでおもひのますをもて
すこしは君よおしはかれかし

勝右 梅漬 千枝成

梅づけのおしつゝめども色に出ん
しやくのたねなる妹があいさつ
左穀物こはかたくやらかされたり右糠の
たれならば此女の名はおぬひこやいふべ
からん梅漬のあから顔人にすかるゝ方な
るべし

左 けし 上州 庫 人

あふよはゝ閨のあかりもけし粒の
ちひさなこゑではなすうれしさ

勝右 納豆 木玉 成

世の人やしるごおもへば納豆の

たゝきもされぬ妹がねやの戸

左はひそく右はほそくいづれも耳に
聞へて侍れどしるさおもへばさ中されし
だけが納豆のかたこまかなれば勝にや

勝左 小麥 水 垣

くるくさ臼の目さへもあはて待
よはゝ小麥のふすまだになし

右 豆腐 盛 砂

戀に身をくづしごうふよ聞いれぬ
いもが耳にもつかみつかばや

左ひさり胸のみやきなべにこがれくゝて
ぬる顔はよもみめよりの看板のやうには
あらじかし右耳につかみつかんとするは
座頭ごし喧嘩のやうなりさるは戀に目の
ない故なるべし此つがひわづかに豆腐の
耳ばかり右の方のひけならんか

右 米 數寄成

白ほごにころりささせて又うそを
ついてこぬかごおもふくろごめ

勝右 菜漬 仙 千歌林山路

君が目のしほを頼みにつけそめん
菜漬のおしのつよき千話文

左右むかうの人々菜づけを十二文がくん
なんしチャク此つきやざんはわるくし
やれる人だよなんだへこぬかゝこそん
なふるい事はしりイせんこつちはおいち
んのいゝさおつせへしたなづけがだいじ
でありますヨウ

左 米 ア 拔 足

うき人におもひをふかく米の字の
八十八たびほごおくるたまづさ

勝右 山椒 朝 風

からうじてあふ夜につらし山椒の

朝くらきからなくさりのころ

左戀する人の胸よりも文づかひ足こそい
たむべけれ右からうしての五文字ヒリヒ
りさひりきて侍り米粒にくらぶれば山椒
少々粒大きく見ゆ

左 豆

賀計女

やる文はまめでもどれど戀やみの

いろさへ青くやせてくるしき

右 勝 きくらげ

ア拔 足

ついもれて人きくらげと忍ぶ身は

朽木にはえし耳もおそろし

左は青くてくるしく右はくろくておそろ
しその中木耳の文字をさへさり出られた
る耳にきさたちて侍れば忍ぶ戀を果報耳
ささだめて侍り

左 稻

桑 三重河近

こがるれど君には秋のいろみえて

つゝめど稻のほに出にけり

右 勝 味噌

平道義

手を換ていづどはくどき落し味噌

露ほごにぐるへんじだにせば

左は百姓右は料理茶屋もしは王子のえび
屋扇屋かさらすばむかう鳴のむさしやか
大黒やならん秋作のさりいれよりは庖丁
のかた錢になるやうすなり

左 勝 蕎麥

仙唐 磨

卅日そばみそかに出てあはッやと

たいうちかたのよき首尾をまつ

右 菜漬

桑音 澄

口さきはさつぱりしても菜漬はご

齒にはさまりしあいさつぞうき

左年季やらうが風鈴をよぶやうなりとは
例のわる口なればさらす内方と申されし
は宮づかへ人なごの戀にや右此作者わか
き人としらる判者がこそこ老さらほひて
は飯も粥も齒にはさまりて侍ればなづけ
にのみは限らぬやうに覺て侍り隣のく
りの買ぐらひ口つきまされるにや

左 そば

吞 吉

温かく此身に夜着をぶつかけの

そばをはなれぬねやぞうれしき

右 勝 焼鹽

上州 秋 住

妹が肌のしら粥もがな胸の火に

やきしほほごに糞のかたまり

左やくみきやうばく御見舞イヤだいぶ
ひツかぶつてござるのナニ風ひいた故二
八をくつて汗をさるさる上策でござるし
かし十六文で風を直されては愚老なごも
醫者をやめてそばのかつぎにでもなら
ねばならぬてさて右の御病人まづくお
脈をフリなるほご糞がやきしほほごござ
る粥をくひたがらしやるがこれには赤飯
の方がよくござるやき鹽ほごの糞では粥
もくへぬはずちやまだく此しやくが土
瓶ほごになるささゆも茶ものめぬちやて
しかしそばくひごのゝかるはづみよりは
あまいやうでも貴公のしやくは見所がご
ざるよし

左 米

雲 多餘理

外心出来しか鼻につき米の

こちへはきねのおとづれぞなき

右 勝 豆腐

尾影 住

うき人に豆腐のからとすてられて

もとのまめにはならぬ戀病

左鼻につき米さは鼠米のくさきないへる
にやこほくさひやくから白の夜床にち
かく聞へざるはひさり寝の枕にはもつけ
のさいはひならんか右まめにしづみし戀
の淵あなうの花のお屋敷詞をひきてしば
りて作られし淮南王のあんじたるさ戀
の山屋の名物にて南禪寺のなんすべき所
なし祇園に名あるあちく

持左 小米 柳馬

打付に身もふるはせてくごくなり
こゝめの數のおもひあまりて

右 豆腐 ア猿 人

しのぶ身に豆ひく白に目もありて
おかべに耳のあるもうたてし

左土藏の俵のむれにつみし糠をばいかに
せんごくごほしいまは思案につき米やが
足のふみぎも覺へぬさは箕さいふ文字の
秀句にてしらね扱右隣の豆腐やの娘岡
持の手のあるのみかひき臼の臺の足もあ
りてへつつひの口をたゞきて大釜の尻や
こんさあんじたるさまあかし此二軒ひさ
つ地主ならんか

勝左 蕎麥 千澄

甘みある妹が生そばをつながばや

みじかくきれんことをいさへば

右 玉味噌 桑四半法師

おもひきやかへりし文を玉みその
まろめてこゝにかちつけんとは

左右木曾の産たる中に玉みそはまろめた
ばかりにてさり所なしれざめ少々うちか
たに心を用ひたるやうなれば勝べし

持左 そば フ獨笑園沸々丸

別れての後のあしたのねざめにも
そばははなれぬ妹がおもかげ

右 酢 盛砂

きかぬふりするかわざく北風の
すもどりさせてあはぬつれなさ

左二八の新そば一口喰てわすられぬこゝ
る名産のかはり詞のつなぎにしられて侍
り右北風のふけば酢の水になることもあ
るか物類相感志にも見たことなければ不
審しつるに北風は酢桶のしるしなり隣
の微生高がいふにて初めてしりぬ持にて
侍るべし

持左 米 道義

よな〜にかこつを人はしらげ米

たはらころげのひとりねぞうき

右 ほしわかめ

和琢舎綾丸

色のよき返事をきかぬほしわかめ

灰にまぶすなおのが面目

左悠哉々々輾轉反側白米一升升コト二百
さはひさりものゝ小賢をいふなるべし右
下の句はげんごんちゝいの赤本にや此一
番上下なし

勝左 小豆 郭元 住

小豆より猶大つぶななみだにも
あかきこゝろのほごはしれかし

右 三しまのり

打たえてあはねど夢にみしまのり

さらにはなれぬ君がおもかげ

ホ イカ 六法園穴住

左下和以來の血のなみだ一つぶえりのよ
み歌遍昭も肝をつぶしつべし右さらには
なれぬの秀句庖丁のてぎは見へて侍りさ

れど勝負はほろりくこおなきやる方あ
はれなれば勝べし

持左 米 升 成

くるしくも人の口はにつき米は

いつからたちしうき名なるらん

右 冷麥 高サ 壽 女

ひやむぎの長かれごさへ契れるを

なごやつめたくうつてかはりし

左右つき米やは起る事はやくけんどんや
は寝る事おそしかつぎ家にある事なく米

ふみ外へ出るこさなしされど足をつかふ

こさはさにもひさしければ此つがひ五十
歩百歩さだめてよき持さや申すべから

む

左 豆 高サ 茂 葉

ちかひてし君と連理の枝豆は

味噌になりてもかはらじと思ふ

右 からし漬

尾州 ツシマ 多田常人

かきくごく涙にこるもからしづけ

きくのはうれしきかぬのはうし

左長生殿のふるきためしはゆしくては
れをかはさんとはひきかへて味噌桶の香
をぞかきたまふゆびさきの御ひさなめい
さみこそし右ころろは聞へ侍り但七ツ半
過の絹の羽をりを出してつくまいけれど
一分かして下さへ伊勢治の番頭をせび
るもかくやあらん左の枝豆實いりよけれ
ば勝べし

左 米 府多理雄

うき人の米つぶほどもなびきなば

いのちつなぎとなりぬべきかな

右 納豆 上州 ヨコテ 末 廣

わが中をうさん臭いのなめたのど

世の人口をたゝきなつどう

「右」ひきすりかゝアのべらぼうかゝアへ
るすになるごうさんくさい身ぶりばかり

しやアがらア腎虚やみのれりやくのやう
になめ過た女めだ出てうしやアがれく

「左」米つぶほども情のないやらうだこん
な内で命がつながれるものかへこつちか

ら出てゆくはへ「大屋」コレくごうした
物だな貴様たちが中がわるいから鍋やす
りばちまでわれくになつてゐるばナマ

アくしづまらッせへこれかみさま御て
いしゆもそんざいに口をたゞく人だがぬ
しやア女のこさだうさんだのなめたのさ
いふさもやッばりいはせておくがいゝぬ
しのいゝ事は大屋が承知だちッさばかり
まけてゐなさへよし承知かだまつてゐ
るから承知さ見へたヤレく咽がいたく
ならア大屋と判者にはなるめへものだ

左 心太 甲州 鹽郡 千代友鶴

懸られてからしと思ふかけがねを

心ふとくもはづしてぞまつ

右 蒟蒻 上州 沼田 猩梅亭霞也

こんにやくの鹽梅よしと云よれど

ぷりくされて味噌をつけたり

左上の句おかし四の句は職人盡歌合の心
太實にあもひよりぬる心ふささよとあれ

は今は二杯めなり右拾遺集の物名よりさ
り出られし歟但五ツ雁金の紺屋の幕より

おもひよられしか結句はおなじなまの
つらをよごす申歌はやくより聞なれて

侍れば味噌はあぐべからず隣のかげがれ
よくかゝりたれば勝べし

左 罌粟 美織綾廣

けし程も覺えなき名どうつむくに

なみだも花のもろきふりそで

右 豆腐 桑倉 積

あた戀の奴豆腐と身をなせど

齒ごたへのなき君のあいさつ

左右コレけしのかてめへはけしかられへ

ものだおれも三十餘年判人をするがまだ

みせへも出れへ内から大きくして判人を

よびつけさせるさいふこがあるものか

相手はだれだいへくナニ相手は奴だ名

があらう名をいへエ、はこたへのねへ女

だイヤやりて衆内證へさう申してくんな

せへけしのがは涙こはなを一時にたら

してうつむいてばかりぬやすどうでも右

の奴にしめられたそうだよ

持左 米 枳 芳

こぬ人をまてば目さきにつく米の

しらむもうしやしのゝめのそら

右 味噌 文毛舎高根

しのびたる文を袖よりおとし味噌

それからにゆるむねのくるしさ

左右米屋に味噌屋詠藻のかきだしをよむ

さまづ膳がつぶれましたごちらへもあこ

さわり申すいづれも勝負は松すぎく

持左 そば 裏 行

足どあしからみかけつゝ新そばの

つなぎのいもとぬるぞうれしき

右 三しまのり 下毛 氏家 文 車

中々にあだなるいろをみしま海苔

なご酢のものゝ相手にはせぬ

左ふさんふらわりぶつかけそばかたみに

汗をしぼりしる命さといふべくや右のぞ

きからくりの道具にのみつかはれて口の

はたへもよせられぬをうらみたるにや左

右れざめにみしま木曾さ東海道この差別

あれど名物に高下なからんか

左 黍 藏 人

團子にもまろめてなりと送らなん

日本一のきみにやる文

持右 納豆 甲多理雄

折よくは太鼓をたゝき納豆の

にははせてよどたのむなかだち

左返された文ならばまろめもすべしおく

る文をまろめて見ることは手まはしにす

きたり右太鼓をたゝくも申詞金陵六院の

市語にて庶幾せされど桃太郎よりは當世

だけが勝なり

持左 米 郡 壽真久

米ならで急ぎつくよのことのはは

人のこぬかもふるひごゑしつ

右 梅はし 伊カ 久 澄

君にのみ心をつけてその梅の

しわのよるくかよふうれしさ

いづれも説法聽聞さて御參詣御きごくで

ござる殊に佛餉米御施入回向いたすでこ

ざらうイヤ米と申せば因果の道理ほのが

れぬ物此頃ある米やの男がふと戀慕の心

をこり女のもこへ參つた所が人はみぬか

人はこぬかと申てふるひ出してむなしく

かへつたさ申す米やなれば常にふるひを

つかふそのふるひの因縁にてぶるくぶ

るくさふるへてござる寺の碓をもちゆ

き米をついたるもの米つき出さなるを釋

迦如來のお説なされたこわいのをつかへ

ば鸚鵡となり屁をひればへひり出さなる

されば布施が第一の功德でござる畜生一團提に施しても百千倍の報ありまして持戒の出家に施す時は万倍無量の報を得るさも説なされた今日の佛餉袋のくごく天厨おのつから至り五福徳を得て壽命長遠なる事釋迦如來が證人でござれば身の皮を剥でもきしんをなされ右にござる梅ぼしのしわくちや老人たち寺へかふふかうれしいなご申さるれご袋も持參めされぬは説法場のでんぼうご申すものぢやふるへ壁でも念佛してくわんけのひしやくにいそぎつくが殊勝ご申すものぢやなむあみだ佛く

左勝 黑豆

攝州深寢父

戀人の腹黑豆はわがむねを

やくごく消すといふよしもなし

右梅漬

花長女

梅づけのおしかくせごも戀病の

いろに出たることぞくるしき

右の梅づけも茶づけのさらくごはすれごあるべがよりでくひたらぬこちす左の黒豆湯やくごくの句讀むづかしけれごのみこむ人もあるべし少々まさるべくや

左 小米

白雄風

から臼のふみつけんごて小米はご

くだくこゝろを妹はしれかし

右勝 みつから

家風

やる文は昆布なみだはつぶ山叔

いまはみづからくごきてや見ん

左上自のいろむすめにつき米屋が足を

けんさて糠に釘さなげくなるべし右かの

こんくわいの狂言ならで昆布は山椒茶ば

かりさ茶にする人にげさんせんさかみつ

からの文字よくはたらきたり勝ご申さん

左 豆

上州 萩ハラ 槌丸

やる文のまめで戻りしくやしさに

いまはころつく戀病のごこ

右勝 焼鹽

ギ 兀多羅駄鹿

あふ事のたえて胸のみやしほの

つばをかぶりし中となりనికి

左氣をいり豆のほうろくのあつしきにわ

びたるさまよろし右やしほのからきめ

を見てゐらいつばさばなには女の戀にや

いさゝかまさりげなり

左勝 栗

初風

あはて唯うそをつきやのから臼の

文だにも見ぬ妹はうらめし

右 淺漬

万陀伎

おくびにも出さしごすれご後朝の

あさ漬匂ふそでのうつり香

左つきやのから臼に粟をつくごこは江戸

にては見なれ侍らず右下の句はきんざん

じ賣が湯へはひるやうなり持さすべくや

左 米

桑千伎丸

あけ告る鳥にむねをつき米の

うすめにしらむきぬくのそら

玉みそのたまにいらへも無はわが

文をまろめてたなにおきけん

左夕顔の巻の道具だてよろししらむなご

つき米の糸あり但うすめご申されしはあ

けぐれのくらやみまざれにはびき臼ごこ

りちがへもすべくや右木曾の山賊鐵炮の

玉みそくよりつけんのくまのぬのおしう

りにがくしき戀なるべし左うすめのめ

文字めざばりなれば此一俵玉みそした

に置つべし

左 洗米

尾弘 器

かはらけの變らじと祈る神の供御

せんまいばかりかよはする文

右 勝 みしまのり

梅 村

三しまのりませし鱈のな中に

けしきばかりのいろはたのまし

左 かけまくもつしこき一万度の御はらひ

の御まへに徳利に十二銅の酒をたへ土

器にあらひふれたてまつりてあらひふれ

のつくこいふこさなく徳利の酒のかはら

ざるこさく女夫のものゆく末をまもり

たまへさきはへたまへとおそれみおそれ

みて申す右うはきで文をおくり膳の汁も

おひらもつめたい心さおしはかりてたや

すく口をあかさぬなるべし此献立むづか

しげなければお坪のかちぐりこさだむべ

左 持 米

清 澄

はした女のおこせし文も憎からず

米をかしくの水ぐきのあと

右 味噌

桑 柝金鶴

仲立のいかにかすらん味氣なや

なみだばかりをふくさみそにて

一此文と申女生國に相摸國裾張村助兵衛

娘にてさそふ水あらば田舎者の所存體な

らず候へ共米をかしくの水仕奉公に出し

候所實正也當亥時より明ル卯時迄夜這の

數は何人にも請人主不相構統をはづ

してれんき奉公御家の御作法には少々そ

むき候宗旨は代々放蕩宗寺は隨德寺地中

しりくらく觀音院旦那に紛無之候 此あ

まはよむにちよばすサアサア判をさつし

やれ時にあぢきなやの御亭主貴様と文さ

は兄弟だのならんでぬる所がたれに見せ

てもひこつはたけだ

我にちとあきかきそばや切たがる

いもがこゝろをいかにつながらん

右 持 醤油

東西南北

生醤油の割なく祈るしるしあらば

露ばかりきけ戀の山十

道行露の生蕎麥

御いたはしやそば御前木曾のなんじよな

ふみわけて山路に秋の新そばと名にたて

られて麵棒を杖に手うちのだい所俵を出

て小袋にみなみそめつひきぬきの白

のひく手にまねかれて粉にはたかれつふ

るばれつこれらつしてつうくこのし

いたさして「カッ」ゆくさくさむらがる人

をおしわけていでやうたんさ玉だすきま

へだれりしく出たちしは此屋にいつも

ぬさふらふ藝なし猿も庚申の客をもてな

す料理人つなぎはいれすといふまゝに適

丁まつてチヨキ／＼見ごさうつて

なべの中さつふりいはすさうくわつちこ

くたさるゆ玉はぐわらく／＼かきまは

す箸すくふ飯おそろしなごも三馬あろか

なり合これもおもひは山十の樽にゆられ

てそこはかこみりんかつをの中／＼に露

さいふ字に名をかへてうき世のさがをし

るつぎの口から出て見あはすかほヤアそ

なたはそば御ぜん山十さまかこさりつい

てわつさばかりになくなみだ水をきるこ

てあげ飯をふりまはしたるごさくなりよ

そば上手のあざれ歌 三下り戀の山中つゆ

ばかりなさけかけよさいのれども秋がき

そばやかれたがるほんにへうたふこふこ

ゑいづれさにもやんやと客人のほめつゝ
あきし大口ののどの穴こそわれ／＼がつ
ひのすみかさうちつれてぞろ／＼として
入りにけり

勝左 米 梅 村

新米のうまいなかての出来しとて

よそに惣場のたつ名はづかし

右 青海苔 ミノ 右 蝶 カサフ

にひ暦見をめし日より戀病の

顔にもそへしいろの青のり

左口から年貢の出ればさてこめ倉のかべ
にさへおふれ八十八と書てある是もやッ
ぱりやき米のすぢか右御師のくる頃の戀
のわづらひ餅につくさは是なるべし豐作
の方めでたしと申さんか

左 持 粥 高サ 本 炭 キ

なかだちもなき戀病の力ども

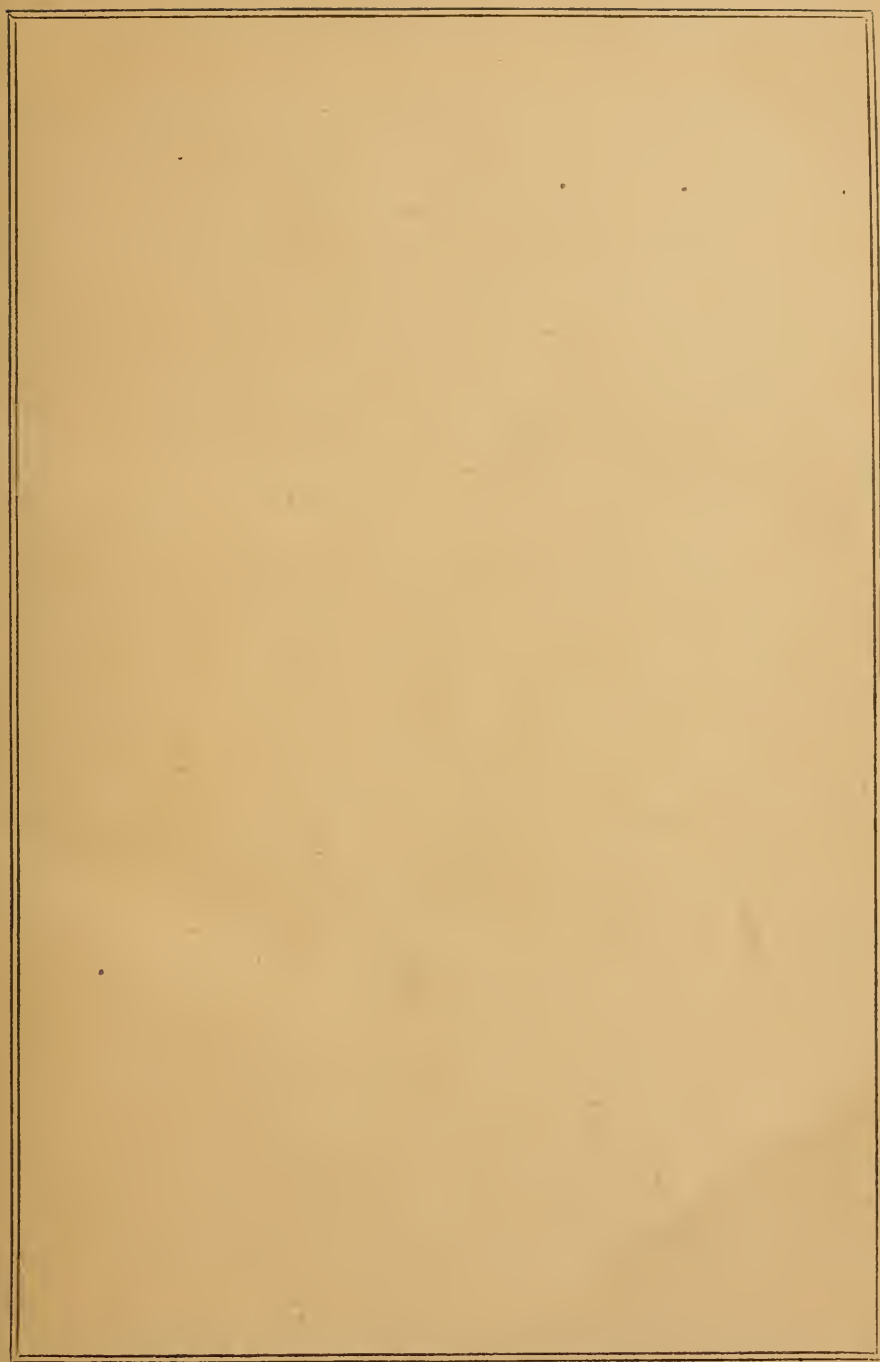
なれるは米のかゆばかりなり

右 澤庵漬 歌筵亭繁樹

うたがひはおけやおけなる澤庵の
年をこえてもなごかはるべき

左右十五日のもち粥のぜんだていけうて
勝負のあらそひなく柳の杖をもちさして
此草子のしりのあたりうちもせいシヤン
シヤンもひさつせいシヤン／＼めでたし
めでたし

新群書類從第十終



明治四十一年九月十日印刷

明治四十一年九月十五日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地

國書刊行會代表者

市島謙吉

編輯兼
發行

東京市神田區蠟燭町八番地

印刷者
武木信賢

東京市神田區三河町三丁目四番地

印刷所
武木印刷所



大十四二

音代帝旌

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02977 5186